

東方供杯録

落着

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

杯を重ね、友と語らう。

幻想で紡ぐ現実の絆。

笑いあえるという何気ないその日常は奇跡の様に素晴らしい。

だからこそ、心からぶつかり分かり合おうとする。

心は尊いものだから、想いは届けるものだから。

杯を交わす為、勇義を深める為、男は生きる。

時に笑い、時に泣き、時に怒り、感情をぶつけ合う。

「是非一杯、ご一緒にどうでしょうか？」

目次

不思議の国の幻想世界

始まりに供する一杯目 | 1

闇と氷に供する二杯目 | 12

門の守護者と本の主に供する三杯目

28

悪魔の当主とその従者に供する四杯目

42

温もりを求める少女に供する五杯目

56

見開く瞳とお節介な魔女に供する六杯目

目 | 75

煌めく星と陰る太陽に供する七杯目

90

集う者たちに供する八杯目 |

異変の結末に供する九杯目 |

紅魔な日々_に供する十杯目 | 152

彼女の舞台とお酒に供する一一杯目

172

幻想の茶会

風神少女と新聞取材に供する一二杯目

200

太陽の畑の特別なお客様に供する一三

杯目 | 217

満月の夜に供する一四杯目 | 232

秋の味覚と人形師に供する一五杯目

248

秋と冬の境界に供する一六杯目

261

茶葉の彼女と豆な貴方に供する一七杯

目

276

店主の背比べに供する一八杯目

290

春を訪ねて雪原世界

春探索に供する一九杯目

303

春の欠片に供する二十杯目

319

失せモノの行方に供する二一杯目

341

届かぬ想いに供する二二杯目 | 366

ぶつかる想いと追憶に供する二三杯目

393

刹那的な亡霊達に供する二四杯目

415

開花と変化に供する二五杯目 | 447

後始末とお花見に供する二六杯目

489

幻想の閑日

一割の代価と羽休めに供する二七杯目

525

稽古と友誼に供する二八杯目 | 547

月下の演奏家に供する二九杯目

570

| | |
|---------------|-----|
| お悩み相談に供する三十杯目 | 590 |
| 見つめた先は過去の世界 | |
| 恋の話に供する三一杯目 | 623 |
| 休肝日に供する三二杯目 | 648 |
| 誘いと攫いに供する三三杯目 | 669 |
| 酒飲み話に供する三四杯目 | 703 |
| 子供の喧嘩に供する三五杯目 | 728 |
| それぞれに供する三六杯目 | 760 |
| 鬼の話に供する三七杯目 | 784 |
| 幻想の昨日 | |
| 劇に供する三八杯目 | 808 |
| 隣の芝に供する三九杯目 | 828 |
| 平和な喧騒に供する四十杯目 | 850 |

| | |
|--------------------|-----|
| 揺蕩う友に供する四一杯目 | 869 |
| 誰でも一度は考える話に供する四二杯目 | |
| 目 | 887 |
| 軽い運動に供する四三杯目 | 911 |
| 月下に輝く永夜世界 | |
| それぞれの友人に供する四四杯目 | 930 |
| 屋台の雀と迷い兔に供する四五杯目 | 947 |
| 認識の差に供する四六杯目 | 969 |
| 案内と対面に供する四七杯目 | 981 |
| 保護者会に供する四八杯目 | 996 |

不思議の国の幻想世界 始まりに供する一杯目

「さて、そろそろ帰ろうか。また明日の授業の為の準備をしなくてはいけないからな」
「いつもお越しいただきありがとうございます、上白沢さん」
「なに、ここは落ち着くからね」

「それは嬉しい感想です。それと話し相手をしていただきありがとうございます」

蒼交じりの銀の長髪を持つ女性、上白沢慧音は店内へ差し込む陽の傾きから長居したことに気がつくと帰宅の準備に入った。

丁度よく目の前に置かれているカップも空になったところであったので、店主へ声をかけつつ席を立つ。

店内で唯一の店員である男性の店主が慧音の言葉に反応した。営業用でない朗らかな笑みを浮かべていることから、二人の関係が比較的に良好なものであることが察せられる。

話し相手をしてもらったとの店主の言葉に慧音は苦笑した。喫茶店の店主の言葉としてはいささかならずに不安を覚える。流行つてないのではないかと。けれども浮かんだ思考を訂正する。実際は立地の割にそんなことはないと思音も知っているからだ。バリスタ然とした制服に身を包む店主は、慧音を見送ろうとカウンター内からフロアへと出てきた。

店主が出てきた後に足元を付いてくる獣が目につく。それは白狼の妖獣だった。真つ白な毛並みに清潔感を覚える。

店主と慧音が出口付近で向かい合う。改めて見ると意外に上背があるのだなと頭一つ分高い店主に慧音はそんな感想を懐いた。

「どちらかといえば私が話し相手をしてもらった側だと思っただけだな」

「いえいえ、上白沢さんのような美人に相手をして貰っているだけで私が相手をして貰っているんですよ」

店主がにこやかに言えば、足元に控える白狼が尾で器用に店主の足を何度も叩く。

まるで店主の軽口に不満を示しているように鼻までふんと鳴らす始末に慧音は微笑ましいものを見たときと表情を崩した。逆に店主は不機嫌そうな白狼の様子に苦笑を浮かべていた。

慧音が視線を白狼から切り、店主へと戻す。いまだ白狼を眺めている店主の意識をこ

ちらに戻すため、軽いお小言を口にする。

「まったく、相変わらず口が上手いな君は。誰彼かまわず口説いているのではないのかな？」

「そんな事無いですよ。ただ思った事を口にしていただけですね」

「はあ、それが本心から出ていると分かるからこそ、君は性質が悪いな。誰かに刺されるのが一番いい薬になりそうだよ」

慧音の言葉にまた店主が苦笑する。指先で頬を搔きながら、以前も九尾のお狐様から似たような注意を受けたことを思い出す。

慧音は店主の苦笑を見るとため息を一つ吐き出した。心当たりないし、それに類することには思い当たるのだろうと気がついたのだ。

どこか呆れた雰囲気を纏い慧音が自身の考えを確かめるために言葉にする。

「そのいかにもな顔は、以前にも同じような事を言われているな？」

「はは、さすが寺子屋の先生をしていらっしやる。隠し事は出来ないみたいですね」

店主が降参だと両手をあげて肩を竦めた。分かりやすい態度にやれやれと頭を振ることで慧音が応える。処置無しだと分かりやすく示す仕草に店主は笑みを浮かべた。お互いに気を使わない気安いやり取り取りが心地よかった。慧音も同じなのか、浮かべられている表情は店主と同じ穏やかな微笑みだった。

「君の隠し事への器用さがまるで寺子屋へ来る子供と一緒にということだよ」

「なるほど。子供のような純真な心をしている事の証明ですね」

「ああいえばこういう。ふふ、君の口は減らないな」

「喫茶店の店主としては誇るべき長所かなと考えております、お客様」

「あはは、確かに違くない。私もそんな君とおしゃべりをしたくてこの店へと足を運んでいるのは否めないからね」

「それはそれは。そういつて頂けると店主冥利に尽きます」

「君も存外逞しいな。元気そうにやれているようで何よりだ。御代はここに置いておくよ」

「ではまたのご来店お待ちしております」

「ああ、またそのうち顔を見に来るよ」

慧音は代価を机の上へと置くと出口へと向かう。扉をあけると備え付けられた鈴がカランカランと音を鳴らした。少ししてまた鈴が音を鳴らせば慧音の姿が店内から消えた。

慧音が居なくなると店内から他の客の姿はなくなつた。一気にがらんとした誰もいない席がその寂しさを助長している。

店内を少しだけ店主は見渡すとほうつと一息漏らす。その場でしゃがみ、足元に居る

白狼の背を優しく撫でる。

「上白沢さんは優しい人だね。私がちやんと元気でやれているかどうか様子を見に来てくれてさ」

わしわしと少しだけ力強く白狼を撫でれば、気持ちよさそうに喉を鳴らす。

そして店主の撫でていない方の腕、左腕へと頭をこすり付けた。店主は白狼のその仕事草に小さく笑みをこぼす。

「大丈夫だよ、もう傷は塞がっているから。君も存外心配性だね」

店主が穏やかな声で白狼へと言い聞かせるように言葉を紡いだ。しかし白狼は店主の物言いが気にいらなかったのか、一度低くのどを鳴らすと踵を返してカウンターの中心へ戻っていった。

機嫌を損ねてしまったなど店主が頭を搔く。気持ちを入れ替えるために一度小さく深呼吸をして店主は立ち上がった。一度だけ軽く伸びをして空になった食器を下げる。

静かで穏やかな時間が流れる。変化のないのんびりとした何気ない日常。夏の強い日差しが窓枠の障子に遮られて、和らいだ光となって店内へと差し込む。僅かに開けた隙間から時折気持ちのいい風が吹き込んだ。

「ああ、平和だねえ」

白狼が小さく相槌の鳴き声をあげる。両者の声が静かな店内に溶けて消えた。

しばらくの間、誰も訪れない店内で店主が一人黙々と作業をする。食器や箸をかける音だけが響いている。

そんな折、扉についた鈴が来客を告げる。店主が音に反応して視線を扉へと向ける。開け放たれた扉には一人の少女がいた。

光で煌めく銀髪と蒼玉のような深みのある瞳。メイド服を纏う侍女風な女性が店内を伺っていた。侍女は店主の視線に気が付くと、にこりと社交的な笑みを浮かべる。

侍女の笑みに店主も同じく笑みを返す。来店したお客様へと向ける歓迎の言葉ととも。

「いらつしやいませ、お客様。確か二度目のご来店でございましたね」

「あら？ 覚えていらしたのですね」

「ええ、とても特徴的な服装でらつしやいますので」

「そうかしら？」

侍女は店主の言葉に不思議そうに首を傾げ、自身の服装を見下ろした。身体を捻りながら余念なく自らの服装を見分するも傾げた首は戻らない。侍女の様子に店主はついつい苦笑してしまう。

「珍しいですよ。幻想郷で洋風なお仕着せなど特に」

「なるほど。確かに言われてみるとそうかもかもしれませんね。いつもこれでしたので考え

たこともありませんでした」

侍女は店主の言葉に納得を示し、服の乱れをサツと正す。

もともとほとんど乱れてもいないが、その仕草は洗練されていて垢抜けた印象を見るものに与えた。あえていうなら瀟洒という言葉がしつくりと来る、そんな人物だった。

侍女は自らの身だしなみに納得したのか、服から視線を離して店主の目の前のカウンター席へと腰を下ろした。侍女の双眸が店主へと向けられる。

「ご注文がお決まりになりましたらお声かけください」

「そうですね……今日はとても暑かったから何か冷たいものが飲みたいわ。おススメはあるかしら店主さん？」

「そうですね。それでしたらダッチコーヒーなどは如何でしょうか？　水出ししたもので苦味も少なく、飲みやすいかと思えます」

「じゃあそれでお願ひするわ。生憎と珈琲は詳しくないのよ」

「そのようですね。普段はよく紅茶を飲まれるのでは？」

「あら、分かるのかしら？」

「ええ、紅茶の良い香りが貴女からしますので」

「ふふふ、鼻がいいのね」

「これでも以前は外で料理人をしておりましたのでそのためかと」

「なるほどね。嗅覚も味覚も鋭いほうなのね、貴方は」

「はい。数少ない取柄だと思つています」

店主は背後に設置してある冷蔵用の箱——氷の妖精、チルノの特性の氷入り——から昨晩の内に作つておいた水出し珈琲を取り出した。

フィルターを使い一杯分だけグラスへと注ぎ、砕いた氷を入れて侍女へと供する。

「お待たせいたしました、お客様。こちらがダッチコーヒーとなります」

コースターの上に置いたグラスと共に、お茶請けとなる焼き菓子を出す。

侍女はグラスに入った珈琲を少しだけ観察するような目つきで眺めた後に口へと運んだ。グラスを小さく傾け、味わうように少しづつ喉を潤す。

グラスを口から離れた侍女は何かに納得したのか一度頷いてから視線を店主へと戻した。

「貴方の淹れた珈琲を飲むとひどく心が落ち着くの。これは何か特別なものでも入っているのかしら？」

問いかけた侍女の口元が蠱惑的に歪む。けれども彼女の目元は口元とは対照的に酷く剣呑であった。

侍女の様子に店主が理解する。どうやら一服盛っているのだと疑われていることに。流石に何かを盛るような店と思われてしまつては飲食店としてはやっていけない。ゆ

えに店主は彼女の疑問を解消するための回答を示す。

「ああ、なるほど。それでしたら私の能力が原因ですね」

「貴方の能力？」

侍女の纏う剣呑な雰囲気立ち消える。そして次に純粹な疑問が彼女の顔に浮かんだ。無意識に首を傾げている姿はあどけなさを感じさせ愛らしさを覚える。彼女の身じろぎに連動して空のグラス内の氷がカランと音を立てて壁面にぶつかつた。

「はい、能力です。私の能力は落とし止める程度の能力です。落ち着ける程度の能力でも構いませんが、結局この辺りは自己申告の側面が強いですからね。私の近くに居たり、私の作った物を飲食したり、話していると心が落ち着くのですよ。高ぶっている気持ち、感情が落ちるようで結果として落ち着く、という事になります」

「ああ、なるほど。そういう能力なのね」

傾げられていた首が戻つたことで侍女が納得したことが見た目からも分かつた。店主も理解が得られたことにほっとして胸をなでおろす。

これでいわれのない噂が立つこともないだろうと店主は安心を得られた。もしそのようなことになったら慧音に言われるお小言が増えるかもしれないと、少し前に別れた友人の顔が思い出される。

思考を遊ばせる店主の意識を侍女の声が引き戻す。

「確かにこのお店の近くへ来るとホツとするような安心した心地を感じたわ。だから以前も一度お邪魔した様な所もあるわね」

「ご理解いただけただけで何よりです」

「ええ、理解したわ」

「安心いたしました。何かを盛るような店だと思われてしまえば飲食店としてはお終いですからね」

「ふふふ、別に私はそれでも良かったのよ」

「それはどういった意味でしょうか？」

「さあ、どういう意味かしら？ 強いて言うのであれば、心を落ち着けるタネを知れば良かったところは申しておきましようか」

「原因がそこまで重要でしたか？」

「ええ、その通り。そして要因は貴方自身だった……ねえ、店長さん？」

「なんででしょうか、お客様？」

「是非——」

侍女の声に誘うような艶がのる。自らを写し込む蒼玉の瞳からは熱を感じられない。侍女は請い、店主が問う。

「——当家へと出張営業をして下さらない？」

本日で一番綺麗な笑顔を作り侍女は囁く。彼女の口元が蠱惑的な線を描いた。

闇と氷に供する二杯目

店には不在を示す張り紙一つ。

『少し出かけてまいります』

「……暑い」

照りつける日差しが肌を焼く。店主は流れる汗を拭いながら恨めしげに太陽を見上げた。照りつける陽の強さに長袖など薄手とはいえこの時期に着るものではないと小さく独りごちた。吐き出したくなるため息を飲み込みながら、前を先導する侍女に置いていかれないよう足を少しだけ早めた。

軽く肩を揺すりリュックを背負い直す。背とリュックの間に感じる汗に不快さを感じる。先ほど飲み込んだため息を小さく吐き店主は能力を使う。自身の体温を落とし、夏の気象から逃れる。

(あまり使いたくはないのだけどね)

暑さから逃れ一息つくも、今度は別の不満が生まれる。軽く頭を振って浮かんだ考えを店主は掻き消す。

思考に意識を割いていた店主へ、先を歩く侍女から声がかかる。

「本当にお荷物はお持ちしなくともよろしいのですか?」

「自分の荷物くらいは自分で持ちますよ。それに私が飛べない為に歩かせてしまっているのにこれ以上ご迷惑はお掛けできませんよ」

「こちらが突然した要望に応えていただいているのに、そのように言われてしまいますとこちらの立つ瀬が無くなってしまうです。ですので、本当にご遠慮なさらなくて結構ですよ?」

「それでは男のなけなしの意地という事にしておいてください。これでも男の子ですからね」

「あら、そう言われてしまいますと無理強いは出来ませんね。これ以上のお節介は野暮というものでしょう」

背後を歩く店主からは見えないが、侍女は口元を手で隠しながらクスクスと楽しげに笑っていた。少しだけ柔らかくなった侍女の雰囲気は店主もほっと一息を吐く。

侍女は店に来た時からずつと張り付けた作り物の笑みを浮かべていた。けれども今の笑みは、少なくとも本心からのものだろうと店主には感じられる。

笑いを治めた侍女がまた迷いなく歩を進めた。しつかりとした足取りで侍女は木々の合間を抜けていく。店主も彼女に置いて行かれぬよう歩きながら声をかける。

「それにしてもこのままですとお時間が遅くなつていしまいそうですねですが大丈夫でしょうか？ 夜に珈琲を飲まれてしまいますと人によつては眠気が飛んでしまわれるかと」

「ああ、その事ですか。それでしたら心配の必要はございませんよ」

「そうなのですか？」

「ええ。理由の方は……そうですね、ついでからのお楽しみにしていただければ幸いです」

「お楽しみ……なるほど。了解しました」

侍女の返答に店主は考える、客が妖怪かもしれないと。妖怪であれば人間と違い決まった生活サイクルなどは必要ない。しかしもし本当にそうであるならばと店主は思考する。妖怪である白狼のハルを置いてきたのは失敗だったかもしれないと。

けれども店主は直後に自身の考えを小さく鼻で笑う。相手が妖怪である可能性を全く考慮していなかったわけではないのだから。いや、むしろどちらかといえばわざと聞かなかつた側面の方が強い。

結局の所で自分を大事にすることを徹底できていない。自覚した己の無意識を自らで嘲笑する。

(これではまた上白沢の先生に、お説教と共に頭突きを貰う事になるかもしれないなあ)

ふと思い浮かべた想像が店主の脳内をめぐる。不死人の友人と仲良く並んで怒られている姿。すんなりと思いつかべられる自分の日頃にまた苦笑が漏れる。情けない内容でありながらも、実際そうなりそうな予感がしていた。

侍女が店主の苦笑を耳にして反応を示した。

「どうかされましたか？」

「はは、いや別に大したことではないよ。ただ、出来ない生徒だなど思いました」

「はあ？」

店主の要領を得ない回答に侍女が困惑を示す。その首が困惑の度合いを示して傾けられている。

店主には詳しく説明する気が無い為に仕方ない事と言えるし、侍女の疑問が解消されることもないだろう。

危機感の欠如が甚だしい自身へまた呆れの苦笑を零しながら店主は侍女の後を追った。侍女も店主に説明する気がない事を悟り、追及は行わずに案内を続けることにした。

侍女の後を追いながら店主は周囲の木々へと意識を向けた。鬱蒼と木々が乱立した自然の森。

外来の山林でよく見られる、植林されて等間隔で木々が生えている人工林。それとは

まるで異なる手付かずの自然にいつい視線を奪われる。

所々で重なった葉が濃い影を落とす森の様子にふと懐かしい記憶がよみがえった。以前も一度森の中にいた時の事を思い出す。

(あの時は確かこちらの方面の森で一息ついていたら)

「そうそうあんな感じの闇が……」

周囲を見回していた視線に闇が映り込んだ。直径二メートル程の黒い球体。風に揺られるシャボン玉みたいにくわくわくと視界の先で漂っていたのだ。追憶と重なる光景にいつい言葉が漏れ出ていた。

侍女が店主の声で振り返り、店主の視線の先を追う。

「宵闇の妖怪?」

「そのようですね。少しお時間よろしいですか?」

「お時間ですか? ええ、かまいませんが」

「ありがとうございます。おーい、ルーミア!」

店主が闇に向かってルーミアと呼びかける。するとふよふよと浮いていた闇の塊がパツとその姿を消す。闇の消えた場所には十歳程度の背格好をした金髪に赤いリボンを付けた黒服の少女、ルーミアが浮いていた。

ルーミアは声がどこから来たのか分からないようで、周囲をきよろきよろと探り頭を

動かしていた。

「こつちだよ、ルーミア」

再び店主がルーミアへと声をかけた。その声に導かれルーミアの顔が店主たちの方へと向く。ルーミアの表情には笑みが浮かび、見つけられた事を店主たちも認識した。

ルーミアが宙を軽やかに滑り店主たちへと近づく。

「おー、泥水さんなのだー」

十字架へ張りつけにされたような姿でルーミアが宙に止まった。そんなルーミアの発言に侍女が小さく眉をひそめる。

けれども泥水と呼ばれた本人は、笑みを浮かべてルーミアへと返答をしている。

「おー、泥水さんなのだよ」

店主の返した言葉に侍女の顔が今度は困惑に染まる。店主も彼女の表情を確認すると、説明した方がよさそうだと思ったのか困り顔で頬を掻いていた。だが店主が説明をする前にまたルーミアが言葉を返す。

「今度は最初から甘いものを飲ませて欲しいのだー」

「はははっ、この前はごめんね。ああ、説明をした方がいいかな?」

「あ、はい。していただけなのであれば是非に」

「以前も森の中で彼女に会ったことがあるのです。その時の私は森林浴気分です。森を歩い

ていて、休憩がてら腰を下ろして珈琲を飲んでいたのです。そうしたらルーミアが、いい匂いなのだと言ってやって来てね。飲んでみるかいと聞いて飲ませてみたのだけれども、無糖は苦かったみたいで大不評だったんですよ」

「そうなのだー。美味しそうに飲んでいるから美味しいのかと思つたのに泥水だったのだ。あれには驚いたなー。人間はあんなものを美味しそうに飲むなんて謎なのだ。だから泥水をくれて、泥水を飲んでいるから泥水さんなのだー」

ルーミアが店主の話の続きを途中から奪つて話をそう締めくくる。店主はルーミアの話の聞いて苦笑しながら、やれやれと言いたげに首を左右へ振つてみせた。

けれども侍女にはその店主の仕草がどこか嬉しそうに見える。わざとらしくため息を吐いて見せる店主に、ルーミアが軽くじやれついで抗議を示す。

二人のその仲のよきそうな様子に侍女は両者の関係が良好なのであろうと察した。

「はあ、そのような事があつたのですね」

「ええ。その後甘めに入れたカフェラテで許してもらいました。似顔絵でラテアートを入れたのが良かったのかもしれないね」

「おお！ そーなのだー。すごく上手い絵だったねー」

「絵、ですか？」

「絵ですね。そういった物があるのでですよ。機会があればまたお見せいたしますよ」

「その際はぜひお願いいたします」

侍女の顔が店主の言葉に一瞬こわばった。しかし、その僅かな変化はすぐさま立ち消えてしまう。

店主は侍女の表情の変化には気づかないふりをして穏やかに微笑みかけた。店主の笑顔に対して、侍女は作られた笑みをまた張りつける事で応えた。

そんな二人のことをまるで気にかけることなくルーミアが口をはさむ。

「泥水さんはまた何か持っていないのかー?」

「うーん。今はちよつと用事があるから飲み物を入れている時間は無いなあ……うん、そうだね」

「うん? なにかあるのかー」

「今は時間が無いから前みたいには出来ないけれど、これならあげられるよ」

店主が返答と共に背負ったリュックから二枚の黒い板、チョコレートを取り出してルーミアの目の前へ差し出した。

目の前へ差し出された物体にルーミアが瞳を揺らして店主を見上げる。口元が小さく引き結んで不安げな表情を作り出していた。

店主は彼女の表情で察した。また理解できない黒い物を差し出してきたことで、以前の事を強く思い出したのだろうと当たりをつける。

「これも黒い……また苦いのかー？」

ルーミアの口から零れ落ちた言の葉に、店主は自らの考えが間違っていないと肯定を得た。さらに目じりを下げ、顔も伏せがちで視線をチラチラと上目づかい気味に送ってくる。

店主は胸元の前でふよふよと浮いているルーミアの頭をポンポンと、軽くなでつけて安心させようと口を開く。

「大丈夫だよ、これは甘いから。食べてごらん、ルーミア？」

店主がほらと言いたげに手に持った物を差し出した。ルーミアは差し出された物を受け取ると鼻をひくひくと動かし匂いを確かめる。

確認の後、もう一度ルーミアは店主を見る。店主が笑顔を返せばルーミアも信じたのか、小さく口をあげて端を少しだけ齧る。

ゆっくりとした動きで咀嚼を始める。しかし、次第にその速度が増していきさらに一口大きく齧った。

「美味しいー!!」

(ああ、こういう混じりけのない笑顔は癒されるなあ)

貰ったチョコを落さないよう大事に持ちながらルーミアがモグモグと食べ進めてゆく。店主はその様子に笑みを一つ漏らすと視線を侍女へと向けた。

侍女も店主と宵闇の妖怪のやり取りを微笑ましげに眺めていたのか、口の端が僅かに上がり目じりが下がっていた。

「さて、お待たせいたしました。そろそろ行きましょうか、紅茶のお嬢さん」

「いえ、お気になさらずに。では、参りましょうか珈琲の君」

侍女はスカートを軽く摘まんで瀟洒に一礼をしてみせた。洗練されており、けれど氣取った雰囲気のない仕草。店主がそう感じたのはきつと彼女の浮かべている表情が理由だろう。

柔らかなで自然な笑顔。陶器めいた作りものでない笑顔。店主へと本日初めて向けられる表情。少しは距離を縮められたようだ。店主は内心で安堵した。

少しだけ打ち解けた二人はチョコレートを幸せそうに頬張るルーミアを後に、さらに先へと歩を進める。

侍女の歩む速さは少しだけ緩んでいた。

森の中を侍女と会話をしながら店主は進む。長い長い森を抜けると二人の視界が開ける。

薄暗い森の中でも木々の合間から見えていた光を受け煌めく湖面。それが森を抜けた両者の視界に広がった。大きな湖は風に煽られ、海のように岸へと波が打ち寄せている。

湖の上には白い霧がかかっており、霧を通った光がボールのように幾筋も降り注ぐ。夕焼けにより色付けされた世界が広がりを見せる。幻想的なその光景に店主は思わず息を飲み、足を止めた。

空が、湖が、霧が視界の全てが茜色に染まった世界。無意識に感嘆の吐息が漏れ出た。(これが霧の湖か、まさに幻想的というのだろうか。そして霧の湖ならチルノと大ちゃんはこの辺りに居るのかな?)

「珈琲の君? もう間もなくで到着となります」

侍女が目の前景色に心奪われている店主へと声をかけた。店主もかけられた声にハツとして、意識を目の前の光景から侍女へと戻す。視線の先では侍女が少しだけ困ったように苦笑していた。

「ああ、すみません。あまりの美しさについて心を奪われてしまいました」

「構いませんよ。確かにこうやって改めて見てみますと綺麗ですね」

「ええ、とても幻想的で……もし声をかけていただけなかったらずっと眺めてしまっていたかもしれません」

「水を差してしまい申し訳ありません」

「いえ、そんなことはありませんよ。それに我々には行く所が有りますからね。また案内をお願いしても、紅茶の御嬢さん？」

「ふふふ。それでは参りましょうか。我が主の居城、紅魔館まであと少しでございます。見失わないよう着いて来てくださいね？」

「畏まりました」

侍女はそう言うのとまた歩を進めた。店主も置いて行かれないように後を付いてゆく。

湖を横目で見ながら歩いていると視界の中に小さな点を店主は見つけた。ジツと目を凝らしてみればその点が徐々に大きさを増していく。

「紅茶の御嬢さん」

「はい？ どうかさ——」

「あんた達つ、こんなところで何しているのよ!？」

「ああ、今日も元気だね、チルノ」

近づいてきた点、氷の妖精であるチルノの事を教えようと声を侍女へとかけた。けれども侍女の返答を遮って、チルノが近づき声をあげる。水色の髪に、同色のワンピース、

そして氷で形作られた翼が夕焼けを反射し煌めく。

チルノが店主の声に反応して目を大きく見開く。

「あつ、あんたはバリバリのおっさん!!」

「バリスタだよ、チルノ」

「ふふん、そんなことは知っているわ」

胸を張り堂々と言い切るチルノに店主から思わず苦笑が漏れる。

(全くこの子は覚ええないなあ)

けれどもこれこそが妖精らしさかもしれないと思ひ直して笑みの種類を変えた。

さて、とついでに思考も切り替えて店主はチルノに意識を戻す。

「それでどうしたんだい、チルノ?」

「ん、そうよそれよ。あんた達アタイの縄張りで何をしているのよ?」

「そうなのかい? それはごめんね、チルノ」

「謝って住むなら警戒はいらなのよ」

「それを言うなら警官かな?」

店主は視界の端に見える侍女の雰囲気が剣呑になり始めている事に気が付く。思いのほか気が短いのか、間もなくと言っていたことから近隣である為に直接の面識があるのかもしれない。

その気の短い姿に店主はどこかの巫女を思い出して少だけ可笑しさを感じた。けれどもまずは彼女を諫めなさいといけなさいと行動に移す。

店主が侍女へ向けて軽く微笑んで手を振ってみせた。店主の仕草に気が付いた侍女が、ハツとして一度びくりと身体を跳ねさせる。

瞳を瞬かせ不思議そうな様子を見せる侍女から剣呑な気配が霧散した。

店主は瞳をぱちくりとさせる侍女の姿に安堵した。何だかんだと便利な能力だと実感させられる。

一先ず緊急性の高い問題は解決した。次は目の前の問題——チルノの事——をどうにかしなければと考えを巡らせる。

「君の住いの近くに無断できてごめんね」

「そうよ。無断で入るなんてじょーしきがないわね、バリバリは」

「その通りだね。お詫びといつてはなんだけれど、今度また氷を作りに来てくれた時にはとっておきのお菓子を用意しておくよ。それで許してもらえるかな、チルノ？」

「ふ、ふうん？ ま、まあそれなら仕方ないって許してあげるわ。今回はバリバリに免じて許してあげるわね」

店主の選択は物での懐柔。素直なチルノの反応に感謝を懐きながらお礼を述べようと口を開く。

「ありがとう、チルノ」

「じゃあ、私は大ちゃんとの約束があるからもう行くね」

「ああ、今度は大ちゃんと一緒においで。歓迎するよ」

「ふっふーん、なら首を洗って待ってなさいよ、バリバリ!!」

「首を長くしてつて……ああ、行っちゃったか」

「扱うのが上手なんですネ」

「素直なだけですよ」

「あれは頭が悪いと言うのですよ」

「それがまた妖精の魅力でしょう?」

「妖精の魅力……面白い考え方ですネ」

「そうですか?」

「ええ、面白いですよ。貴方は妖怪とも妖精とも友達になれるのですネ」

クスリと小さく笑いながら侍女は笑みを浮かべた。店主は少しだけ照れくさそうに頬を掻く。

わかりやすい店主の反応に、侍女は笑みを深める。笑われてしまっている店主は、やれやれと肩を竦めて本筋に戻ろうとする。

「さあ、あと少しみたいですネ。案内をお願いいたします」

「畏まりました。それではどうぞ私にお任せくださいませ」

侍女は少しだけ気取った声で、先ほどの氷精のように胸を張って見せた。剽軽な彼女の態度に店主がクスリと笑い、侍女もつられてまたクスリと笑みを零した。

夕日が徐々に沈んでいき夜が、闇が、少しずつ広がりをみせる。薄暗い空の下、二人はふざけ合う友人同士のように朗らかな空間をつくっていた。

門の守護者と本の主に供する三杯目

侍女について、歩く、歩く、歩く。ただひたすらに歩いた。湖の外周に沿って二人は目的地へと向かっていた

途中で何かを通り抜ける感覚に店主が気が付く。瞬間、視線の先に紅色の館が唐突にその姿を表した。

あの館は結界で隠されていたのだろうか、ぼんやりと眺めながら考える店主。

「ここが目的地の紅魔館、ですか？」

「ええ、ここが我が主の住いでございます」

「なるほど……なぜ……いや、楽しみはとっておきましょう」

何故隠匿されているのか。それには何かしらの理由があるのだと察するのはあまりに容易だ。

しかし、聞いても教えてもらええるとは思えなかった。その上そこまで知りたいと思っていない店主は質問を途中でやめ口を噤む。

自身の身の安全への意識が相変わらず低いと自覚する。そして直す気がない時点で何が起きてても自己責任。自分の中で結論を出した店主は腹をくくり覚悟を決めた。

(だから、どうかそんなに悲しそうな顔をしないでください、紅茶の御嬢さん)

侍女の表情が本人の自覚なく、悲しみを湛えていた。悲しげな顔をさせたくないという思いから店主は話題を振る。

「ああ、そうだ。紅茶の御嬢さん？」

「どうされましたか？」

「今回の営業が終わったら、紅茶の入れ方を教えてくれませんか？」

「紅茶の入れ方ですか？」

「はい。お店でそっちの方も出してみようかと思いましたが」

「なるほど、でしたら私は珈琲の入れ方を教えていただこうかしら」

「技術交換ですね」

「楽しそうですね」

店主も侍女も微笑みながら言葉を交わした。しかし、侍女の声は少しだけ固い。

店主にはそれが何故かは解らないが、話題を変えた方がよさそうだと判断をくだす。

「空を飛ぶというのはどんな心地なんですか？」

「心地ですか？」

咄嗟に常々思っていた疑問が口から出た。思ってもみなかつた質問だったのだろう、

侍女が首をかしげる。

その反応で侍女の周りにいる者は皆飛べるのだろうと、店主にはなんとなく想像がついた。

「ええ、私は飛べない人類ですから。きつと飛べたら気持ちいいのだろうかと考えているんです」

「気にしたことがなかったですね。でも、そうですね。確かに、高いところから世界を見渡すと、すがすがしい解放感があるかもしれませんね」

「いいですね。悩みが吹き飛んでいきそうです」

「あら、珈琲の君には何か悩み事が？」

侍女は振り返り、後ろ歩きをしながら問い掛けた。その仕草は幼い子供のようにあどけなく、浮かぶ表情も年相応の可愛らしい笑顔。思わず店主の顔にも笑顔が浮かぶ。

日も沈み始めた薄暗い黄昏時、互いの顔が見える距離に自然と近づく。店を出た当初と比べ随分と近づいたと店主は感じていた。

「そうですね……ずっと悩んでいることがあるんですけど、解決しなさそうです」

店主は内心を隠そうと笑みを浮かべる。しかし、侍女には浮かべられた笑みが酷く儂く見えた。

「そうなのですか。それはどんなことなんですか？」

侍女は気が付いているのだろうか。質問する声色がとても心配しているものである

ことに。最初は作っていた表情が今では全てが自然な物になっていくことに。

言動の一つ一つに存在した壁を作ろうとする意図がなくなっていることに。はたして、侍女は気が付いているのだろうか。

里からここまで数刻は歩いている。その間ほとんど二人きりでずっと話していた。だからこそ、店主の能力の影響が色濃く出てしまっていた。

だからこそ、名前も知らない他人である店主へまるで親友であるかのように接してしまふのだろうか。この傾向はあまりよくないと店主は気が付く。苦く切ない過去が思い出された。

「いえ、これは秘密です」

店主は浮かんだ感情を能力で落とすことで隠し、いたずらっぽく微笑んだ。侍女は落胆と寂しげな表情を一瞬だけ浮かべ、また前を向いて歩き出した。

しばらく歩くと、門が見えてくる。

「立派な門が見えますね。それに出迎えの方もいらつしやいますね。私が断っていたら待ちぼうけをさせてしまっていたのでしようか」

「いえ、彼女は門番ですのでご心配なく」

「へえ、門番さんもいらつしやるなんて本当にすごいですね。庶民の私は緊張してしまいます」

「そんなに緊張なさらなくて大丈夫ですよ」

実際は能力の関係で、緊張するのが難しいという問題を店主は抱えている。本人はリラックスできているということと良しとして気にすることないが。

門が見えてからもしばらく歩き、やっと目の前までたどり着いた。湖の近くに西洋風な建物があるなんて里でも聞いたことがない。改めて記憶を探しても答えは変わらない。

隠れ住んでいたのだろうか。それならなぜこのタイミングで自らを呼んだのだろうか。店主の疑問は尽きない。

ゆえに、考えても理解できないことは気にしても仕方ない。店主は友人の古道具屋の言葉を思い出し疑問に蓋をした。

「おかえりなさいませ、咲夜さん」

「お疲れ様、美鈴。こちら、お嬢様がお呼びしたお客様です」

侍女が店主を門番に紹介する。侍女の声色が、表情が、雰囲気、今日店で会った当初のように作りものへと戻っていく。

「こちらの方が、お嬢様がおっしゃられていた方なのですね。ようこそ紅魔館へ、お客様。どうぞお通りください」

中華風の服を着た門番の女性は短く告げると門を開いて館への道を示した。名前を

名乗らなかつたのは名乗る価値がないと思われているのか。

はたまた名乗る意味がないのかどちらなのだろうか。疑問が浮かぶも応えてくれる相手はいない。とりあえずは相手が名乗らないので、こちらも名乗る必要はないと考え結論とした。

それに、名乗つてもこの状況なら覚える気が無い可能性すらある。

「ありがとうございます。また、帰る際はお願いたします」

「はい、お任せください」

先ほどから門番が浮かべている微笑みに変化はない。年期が違うということだろうかと感心した。門番に促されて侍女に案内されるままに門をくぐり、館へと足を踏み入れる。

案内された先は本の森であった。どれだけあるのか、想像さえできそうにないほどの本の山。

視界のどこを見ても背の高い本棚にきつちりと埋まるほどの本が入っていた。そして、その本棚さえいくつあるのか数えることは難しい。

まさに大図書館とでも言いそうな本が詰まった部屋。その部屋の扉から少し歩いた

先に、机と椅子が並べられた本棚のない空白のスペースが存在していた。

本に隠れるように、この部屋の主がそこへ座している。

「お嬢様はまだ、眠られておりますので少々こちらでお待ちくださいませ。こちらの方がこの大図書館の管理をされているお方です」

机の上で本を広げている少女が管理人だと紹介されるが、店主をちらりと見ない。

どうやら招かれているのに歓迎されてないという、奇妙な状況について苦笑いが店主の顔に出してしまう。

「ひとまず、こちらの小悪魔に何か御用があればお声かけください」

そう言われて管理者の背後に控える、頭と背中それぞれに対となる黒い翼を持つ小柄な少女を紹介された。さながら、管理人に対する司書と言ったところだろうかと店主は一人納得する。

「あ、あの小悪魔です。よろしくお願いいたします」

「ああ、短い間かもしれませんがよろしくお願いいたします」

店主は言葉の後に一拍置いて頭を下げた。下げる前の視線が管理者と一瞬重なり、小悪魔と紹介された少女は分かりやすく動揺を示し、侍女の瞳が僅かに揺れ口元が固く結ばれているのが確認できた。

(ああ、どうやら長い間お世話になることが想定されていないのは確からしい)

頭を下げた店主は各々の反応に口元を綻ばせた。誰にも視えない俯いた顔が浮かべた表情は暗い笑顔。

「紅茶の御嬢さん、案内していただきありがとうございます。そちらの準備が整うまでこちらで待たせていただきます」

店主が侍女に伝えると一瞬表情を歪めたが、一礼することでそれを隠してその場から姿をかき消した。

（瞬間、移動？ すごい能力を持っている人もいるものだ）

思わず店主は感心してしまう。

「ふう……小悪魔さん、ここにある本は読んでもいいのかな？」

「ええと、ここには読んだ者を発狂させたり、取り込んだりする魔本も存在しています。ですの、どのような本が読みたいのか教えてくだされば私が探してみます」

「なるほど。じゃあ、そうですね。何でもいいので珈琲関連の本があればお願いします。あと、ここは飲食しても大丈夫ですか？」

「あ、はい。本を汚さないようにお気を付けてください」

「畏まりました」

許可も得たことなので店主はさつそくりユックから香霖堂で購入した水筒を取り出した。

店に入れてきた珈琲を自前のステンレス製のマグカップへ注ぐ。

アイスとホットの二つあるが、ひとまずアイスで体の熱を冷ます。

「はあ」

人心地付けたと吐息が洩れる。飲みなれた物を飲むと落ち着く。カップを考え深げに見つめながら店主は身体から力を抜いた。

カップの向こう側に先ほど紹介された図書館の主が入り、ふと思ひ立ち図書館の主へ声をかける。

「貴女も一杯いかがですか？」

ペラリと紙のめくれる音が返ってきた。どうやらこれが質問の答えらしいと察して出そうになるため息を我慢する。

ペラリ、ペラリと本がめくられてゆく。会話のない沈黙が下りた。図書館の主がペラリをめくる音と、店主が珈琲を飲む音だけがあたりに広がる。

しばらくすると、小悪魔が戻ってくる。手に持っている本は、『珈琲の歴史』、『代用珈琲の作り方』、『豆の抽出の種類』といった本であった。

「こちらでよろしいでしょうか？」

「ああ、ありがとうございます。大丈夫です。もしよろしければ一杯お付き合いたいだけますか？」

「ええっと、パチュリー様、どうすればよろしいでしょうか？」

「今は何もなければ好きになさい」

「大丈夫なようです」

「それは良かったです」

良かったと笑いながら別のカップを取り出して珈琲をそそぐ。

「砂糖とミルクは好みで」

言葉と共に小さな瓶を二つ取り出して司書の前に差し出す。司書は一口飲んでみた後、砂糖を一匙入れて再び飲み始めた。

「珈琲って言うんですよね。私ほとんど飲んだことないんですよ」

「そうなのかいって言いたいところだけど、紅茶をよく飲むのだろうね」

「あれ、分かるんですか。もしかして咲夜さんに聞きましたか？」

「違うよ、でも彼女だね。彼女からは紅茶の茶葉のいい香りがしたからね」

「そうですか？ お鼻がいいんですね」

「はは、そうかもしれないね」

二人が交わすものはたわいのない話。お互い深い事情には触れず、表面だけの話をしている。店主は意図して内情に踏み込むような話は振らない。

司書が気づいているのか分からないが、素直に振られた話題に対して丁寧に応えてい

く。

「小悪魔、この本を戻してこれを持ってきてくれるかしら」

図書館の主は机の上に積んである本を指差して司書へメモを渡した。積んであるだけで8冊ほどはあるだろう。そしてメモの方にも同じだけの本が指定されていた。

これからこのまま本を返して新しく持つてくる。言ってみれば簡単に聞こえるが、この図書室はいかんせん大きすぎる。宝探しのようだ。中々、大変な仕事なのだ店主には感じられた。

「相手をしてくれてありがとう。がんばってね」

「はい、珈琲ありがとうございます」

司書は傍らに置いてあるサービスワゴンへ片付ける本を載せると本棚の奥へと消えていく。車輪が床を走る音が徐々に離れていく。また静寂が落ちるかと思えば、今度はそうならなかった。

「貴方、自分の置かれている立場を薄々気が付いているのに随分と呑気なのね」

「さあ、まだ確定している訳ではないからね。だから、実感がないんじゃないかな」

「あら、そうなの。じゃあ、あなたの推理を聞かせてくれないかしら、採点くらいはしてあげるわよ」

どうやら、暇つぶしの相手程度には興味を抱いてくれたらしいと店主は笑みを浮かべ

た。ならばと店主は会話を始める。

「そうだね……たぶん、すぐに死ぬと思われているのじゃないのだろうか」

「どうしてそう思うのかしら」

「わざわざ招かれたのに、誰も名前を名乗らないし、聞いてもこない。でも、そちら側から招待された。用はあるけどすぐに死ぬから名乗る意味もないし、名前を覚える気もないっていう意思表示かなと」

「単位は出そうね」

「それは重畳」

「焦らないのね」

「ここまで来てしまったら逃げ出せないだろう。だったら焦っても仕方ないさ」

「狂っているのかしら」

「そうかもしれないね」

「そうかもしれない。いや、事実そうなのだ。店主は相手の言葉を内心で肯定した。心のどこかで死を望んでいる自分がいつもいる。」

「否、生への執着を落している。そうすればまたあの娘に会えるのかもしれないとどこかできつと考えている。」

しかし、自殺をするのはあの娘との約束を破ってしまう。

だからわざと危険があるような場所へも、それに気づかないふりをして踏み込んでいく。

(ああ……度し難い)

「でも、狂っていることは悪ではないと思うよ」

「でも、害はあるのではないかしら」

「それは周りによるんじゃないかい？」

「面白い見解ね」

「狂人の戯言さ」

軽快な掛け合いが止まった。図書館の主は手元に残っている書物へ視線を落とす。

「次の機会があれば、ご一緒させてもらおうわ」

「これはがんばらないとなあ」

最後に彼女が付け足す。少ないが可能性はあるとのメッセージだと店主は受け取った。危険には飛び込むが無抵抗で死にたいわけではない。

抵抗して抵抗してそれこそ死ぬ気で足掻いて、それでもダメだったのならきつとあの娘との約束を破ったことにならない。

だから許してくれるだろうと心に言い訳を一つ。そして、キイイツと扉の軋む音が響く。

「珈琲の君、お嬢様がお待ちです」

さて、鬼が出るか蛇が出るか。どこか少しだけ楽しげな心持ちで立ち上がった。荷物を片付けてリュックを背負い、店主は侍女についていく。

悪魔の当主とその従者に供する四杯目

侍女に案内された部屋はまるで王と謁見するためのような部屋だった。正面の奥がたくなっており、玉座が一つ置かれていた。

部屋の広さもさることながら、図書館からこの部屋までの通路の長さも明らかに外で見た時の外観と一致しない。どう考えても館内の広さが比べるまでもなく外観と釣り合わない。

どうやって作り上げているのか気になる店主であったが、今聞ける話ではないと疑問を一先ず呑み込む。

呑み込んだ疑問を吐き出せる時が来るのかは全くの不明ではあるが。未練になったりするのだろうか和马鹿な事を考える思考を切り上げる。今はそのような時間ではないのだ。

「我が招待に快く応じてくれたようだなによりだ、お客人」

幼い少女の声が耳に届く。だが幼げな声とは裏腹に不釣り合いなほど威厳を感じる不思議な響きを含んでいた。

声の主は玉座に座す小さき少女。それこそルーミアやチルノと変わらない程の幼さを宿す少女だ。

しかし、明らかに先の二人とは違う。身に纏う風格や威厳は文字通り前者の二人とは持っている者が違う。

王者の覇気であった。支配することが、傳かれることが当たり前と少女から感じられる全てが雄弁に語っていた。そして店主は少女の威圧感に懐かしさを覚える。

（初めて紫さんに出会った時のような思わず膝を着きたくなる程の圧迫感。ああ、ああ……久しい。これが怪物。これが大妖怪。彼女の蝙蝠に似た翼と夜のほうが都合良い。なるほど）

「……吸血鬼」

絞り出された店主の声に反応して、吸血鬼の顔へ映し出された色は嗜虐。

「ゴ名答、人間」

愉快げに歪められた口元から紡がれた声は傲慢に染まっていた。店主という人間を嘲っているようであった。自然と恐怖で身体が震えて叫び出しそうになる。思考が警告を絶えず発し続けている。恐慌に陥ってはいけないと、取り乱してはいけないと。

吸血鬼は店主に僅かな興味を示している。心の任せるままに叫び散らせば、一握りの興味など露と消える。最悪そこで終わってもおかしくない。それ程までに目の前の吸

血鬼は人間に価値を見出し出していない。たった一度、少女の瞳を見ただけで店主には解ってしまった。

普段意識せずに垂れ流して使っている能力を意識する。心を、身体を穏やかに、平静にする。身体の震えが、思考を阻害する恐怖が、少しずつ落ち着く。一度大きく息を吐き出して区切りをつけた。

「恐怖に打ち勝つか。いやはや、期待が持てそうじゃないか。どれ少し試してみようか」
吸血鬼の瞳が紅い光を放つ。弱者を弄ぶ強者は手に入れた玩具（トイ）で何ができるかを試すためその身に宿る力を無造作に振るった。

店主の視線が紅い瞳から逸らせなくなる。身体の中を何かが這いずる異物感。ゾワリと背筋が震え、肌が粟立つ。感覚が狂い、感情の奥から熱が生まれた。

狂おしい劣情。熱に浮かされた恋慕。満たされない渴愛。命じらいたい隷属。尽きることなく湧きあがり高まっていく数多の感情。目の前にいる吸血鬼に己の全てを捧げたいと心が荒ぶる。

しかし、高まる感情に魂が支配され尽くす前に理性が抵抗の声を上げた。頭の隅の冷静な部分が生まれ出た熱を、感情の多寡を冷まし落としていく。高ぶった心と身体を冷まし、荒れ狂った精神を落ち着けていく。

熱が引く。目が覚める。結ばれた視線を一度切るために先ほどまで閉じることさえ

叶わなかった臉を落とす。再び開いた時にはもう吸血鬼の瞳に紅い輝きは無かった。

「素晴らしいな、人間。悪魔の誘惑を振り払うか」

吸血鬼のクツクツとした楽しい笑い声がかすかに聞こえた。このままされるがままに遊ばれてはどうしようもない。その事を理解した店主は流れを変えるために話を切り出す。

「本日はそちらのメイドさんより、出張営業をして欲しいとの要望により伺っております。業務の内容としましては、お客様をおもてなしする事でよろしいのでしょうか？」
いつの間にか吸血鬼のそばに控える侍女へ一度視線を向けて吸血鬼に店主が問いかけた。

「ああ、すまない。思いの外愉快で本題を忘れていたよ。お前には妹の相手を頼みたい」
「妹君ですか？」

目の前の吸血鬼の妹ということは少なくとも外見においても同じかしたくらいであろう。小さな女の子が相手。しかし小さくとも自分より何倍も生きているのは揺らがない。

「そうだ。可愛い可愛い我が妹さ」

「その妹君はどちらにいらっしやるのでしょうか？」

何故妹の相手をして欲しいというのにこの場にその妹がいないのだろうか。

ここで顔を合わせた方がスムーズであるし、時間もあつたから呼べなかつたということはない。

ならば意図的という事だ。理由がある、呼べない理由が。

店主の問いに吸血鬼は先ほどの尊大で楽しげな態度をやめた。あからさまに気分を害された顔をしかめる。

「……地下室だ」

店主の問いに対し吸血鬼は眉間にしわを寄せて苦々しく吐き棄てる。

「地下室ですか？」

地下室なのは問題ない。吸血鬼故に日の当たらない場所に部屋があるのは理解できる。しかし何故、苦々しげなのか。想像が店主の中で膨らむ。

(閉じ込めている?)

「少々妹は落ち着きがなくてね。暴れても問題のない部屋を地下に作つてあるのさ」

わざわざ他へ被害が出ないように地下へ部屋を作る。吸血鬼が、大妖怪が暴れる。肝が冷える話しだ。

(暴れる吸血鬼その妹の相手を私がする?)

勘弁してくれと、口をついて出そうになつた言葉を呑み込む。呑み込んだ言葉の代わ

りに別の言葉を吐きだす。

「左様でございますか」

「お前なら大丈夫だろう。妹が暴れても落ち着けられるのだから、その能力であればな」
ここでやっと店主は得心する。だからあの時落ち着ける要因に注目していたのか、と。そしてダメで元々とも思われている。そう考えると館の住民たちの対応も腑に落ちた。

詰まる所、落ち着けることができずに殺されると館の住人達は考えている。

狂気は害をもたらす。図書館の主の言葉には実感がこもっていた。

それらから導く答えは一つ。狂って暴れる吸血鬼。

出来るならば落ち着ける。無理ならばガス抜きの一途になれ。無茶苦茶過ぎる注文に店主は笑いがこみ上げそうだった。漏れ出そうな笑いを営業用の笑顔で覆い隠す。

「さあ、それは分かりかねます」

「死ぬ気で頑張るといい。咲夜、案内しろ」

侍女に命令を下す。そして急激に吸血鬼から店主に対する興味が失せてゆく。

店主を見る吸血鬼の瞳はゴミを見る瞳だ。壊れてしまう物に興味を持っても仕方がない。吸血鬼の中で暇つぶしの余興は終わりを迎えた。もはや彼女の中の店主は死んだ。

侍女に促されて店主は吸血鬼の前を後にした。諦観も恐怖も浮かばない表情の奥で店主は何を思っているのだろうか。

コツコツと二人分の足音が響く。地下へと続く階段を侍女と二人で降りてゆく。登る事のない階段を下りていく。

「質問してもいいかな？」

侍女の肩がピクリと揺れた。侍女は店主に罪悪感を抱いているようであった。店主は侍女の反応に悪い事をしてしまったと申し訳なさを感じた。彼女の罪悪感は錯覚だというのに。

しかし誤解は後で解くとして、店主は悪いと思いつつも利用することにした。

「何故妹さんが暴れるのか知っているかな？」

「狂気に侵されていると聞かされております」

硬質な声が返ってきた。館へ来るまでとは違い事務的な受け答えであった。妹君が狂っている事は店主には察しがついていた。だから知りたいのはもつと根元の部分なのだ。

何故狂ったのかの原因を知りたかった。それでなくともとっかかり程度は欲しかつ

たが侍女の反応からそれは無理だと理解させられた。

だが足掻かないのは違うと店主は問いを重ねる。

「何故狂気に侵されたかは知ってるかな？」

「いいえ。生まれて数年もしないうちに狂っていたため地下へと幽閉していたと聞いております」

「それからずっと外には出てない？」

「いえ、時折封を破り抜け出されます。その際はお嬢様やパチュリー様、美鈴達と地下へと連れ戻しております」

その答えに驚愕する。衝撃を受けた。まるで猛獣と変わらない扱い。

「そんな状態がどれくらい続いているのかな？」

「五百年近いと聞いております」

絶句した。五百年も一人ぼっちでいたら狂気は治るところか悪化しかしない。妖怪とてたった独りでは生きていけない。

退屈は妖怪を殺すのだ。退屈が我慢の限界まで高まった時に脱走するのではなからうか。妹君にとつての脱走は生存本能ではないのだろうか。

そんなにも長い間地下へと閉じ込めているのはなぜか。強大な吸血鬼とはいえ、姉ならば外で生活させても暴れ出した時に止められるのではないのか。

多くの疑問が店主の中から噴出しそうになる。だがそれに十全に答えられる吸血鬼はここにはいない。

「何故、そこまで嚴重に地下へと封じ込めるのかな?」

「所持する能力が危険すぎるからです」

「それは、どんな能力か聞いても?」

「構いません。能力は、ありとあらゆるものを破壊する程度の能力です。対象に見える目というものを自身の手元へと移動させ、それを壊す事でありとあらゆるものを破壊します。ですので、妹様が何かを握る仕草をしたらお気をつけくださいませ」

なんともトンデモな能力だと驚嘆する。気をつけてどうにかなるとは思えない。飛ぶ事もできないほど脆弱な自分だからそう思うのかと考えるが、そんな事はないと思えるほどには理不尽な能力だと思えた。

真つ向からどうにも出来ないから吸血鬼は藁にもすがる思いなのだと思ひに分かる。可能性のありそうな事をしらみつぶしに試して、その一つに自分がいた。きつとそうなのだ。店主は理解した。己の役目を。すべきことを。成したいことを。理解した。

(ならば、きつとそれは)

「あの吸血鬼のご当主様は妹さんの事を愛しておられるのですね」

「はい、お嬢様は妹様の現状を酷く憂いておられます。そして言葉では言い表せないほ

ど愛されておりませう。だからこそ、十年前も吸血鬼異変と呼ばれるものを起こされまして」

吸血鬼異変。以前店主は酒の肴に紫から聞いた事があつた。外の世界の吸血鬼が幻想郷を支配しようとして攻めてきた事があると。自らの妹一人のために一つの世界と戦争をするほどの溺愛ぶり。

それを聞いたら、知ってしまったら店主はどうにかしてあげたくなつてしまった。自分が餌にされようとしているのにもはやそんなことは関係なくなつていた。困つていゝる幻想がある。助けたいと思つてしまった。ならば結論はもう動かない。動かせない。「そうですか……なら、頑張らないと」

言葉を漏らすと侍女が足を止めて振り返る。揺れる瞳と固く結ばれた唇。彼女の罪悪感に最後の追い打ちをかけてしまったことに店主は気がついた。

「貴女が感じてゐるその罪悪感は勘違いですよ」

侍女は一瞬何を言われたのか分からなかつた。聞こえた言葉に思考が止まり、きよとんとしてしまふ。咄嗟に何かを返そうと口を開くがと、音になる前に店主がさらに言葉を重ねる。

「貴女は私の能力のせいで私の近くにゐると、私と話していると、落ち着いてしまひ安心感を覚えています。そして安心感を抱くからこそ、貴女の心は私が近い人物だと誤解

し、ありもしない罪悪感を覚えているのです」

開きかけた口は再び閉じられた。言われた事を理解しようと必死に言葉を呑み込む。混乱は収まらず瞳が小さく揺れ動く。

「無条件で安心してしまうからこそ、家族や親しい友人のようだと心が誤解するんです。安心感を得てしまうからついつい情が移りやすくなってしまうんです。悪いのは私で、貴女が悪いところなんて一つもない」

侍女の視線が下がり力なく頭がうなだれた。きつと説明をしても今は解ってもらえない。理性じゃなくて感情の問題なのだ。理論では理解できても感情が追いつかない。(だからこれは自分が死んだ未来で、彼女が心の整理をする際に必要な作業だ)

「私は何も言わなかった!」

「違う。私が何も聞かなかったんだ」

俯いたまま荒々しく言い放つ叫びを否定した。

「私は貴方が断っていれば無理矢理にでも連れてきていた!」

「私は断らなかつた。それが全てでその仮定には意味がない」

先ほどよりも幾分弱い吐露を否定した。

「私が……一度も店によらなければ……貴方の事を報告しなければ」

「入ったきつかけは不思議と安心感を覚えたからでしたね。ならばそれも私が悪い。報

告したのも仕事なのだから悪い点は一つもない」

絞り出された懺悔を否定した。

「貴方は……妖精にだって、親切で……人や妖怪にも……好かれている……良い人なのに」

「それは君が見た短い間での一側面でしかない。私は過去に自分の大切な人を殺している」

今にも泣きそうで途切れ途切れな言葉を否定した。侍女が店主の返答に顔を上げる。

瞳は涙で潤み、悲痛さに表情が歪んでいた。

「私は……私はまだ貴方の名前も知らないのに!!!」

混乱していると簡単に察することができた。なぜならそんな事は罪悪を感じる理由にならない。否定するまでもなく明白である。

初めは聞く必要がなかった。途中からはきつと聞いた事で長く記憶に残る事が怖かった。故に名前を聞かなかった。聞けなかった。店主には侍女の想いが解ってしまつた。

「そう。私達はお互いの名前も知らない赤の他人。だから貴女が私の事で心を乱す必要も理由もない」

他人だと、無関係なのだと断言する。

侍女は愛情深い性格なのだ。だからこんなにも心を乱してしまっている。また己の能力は誰かへ不幸を振りまくのだろうかと吐き気を覚えた。

自分が嫌になる。浮かんだ嫌悪は誰にも届かない。それに今は自分の事では無く眼の前の彼女だと、軽く頭を振り考えたことを追い出す。

「難しい事なんて何もありません。ただ貴女は仕事の依頼をし、自分の力を過信した馬鹿が何も聞かなかったが為に不幸な事故にあっただけ。たったそれだけの話です」

言葉を失った侍女を尻目に階段の先に見える地下室の扉へと近づく。扉を開ける前に店主は背後を振り返り確認した。何かをこらえながら背を震わして俯く侍女がそこにはいた。

最後に一言だけ言いたかった。「心配してくれてありがとう」と。けれどもそれを言ってしまったら、彼女の罪悪感をさらに煽ることは明白だった。

吐き出しかけた言葉を呑み込む。迷子の少女のような姿の侍女から視線を外す。何も言うことは無いと扉から部屋へと入る。侍女の人柄は短い間でしか知りえなかったが好ましい人物であった。

だからこそ希う。

(願わくば、私の死後は心安らかに過ごして欲しい。そして)

「願わくば」

(もし私が生きて戻れたら良き友人となって欲しい)
背後で扉の閉じる音がした。

温もりを求めらる少女に供する五杯目

扉が閉じる。もはや通路の音も様子も何もわからない。意識の中から侍女の事を外す。改めて見渡せば今店主がいる部屋は広い部屋であった。もはや外観と合わない部屋の作りはこの館の特徴かもしれないなどと思考が遊ぶ。

本当に暴れることを想定して作られたのであれば、これから降りかかる暴威が嫌でも想像できた。いや、想像の埒外であると解ってしまう。行き過ぎた脅威が原因か店主はこれからくるであろう危機に実感を持ってなかつた。

なるようにしかならないと諦観さえ浮かんでゐる。せめてどうにか話し合ひまで出来る状況に持っていくことはできないだろうか。言葉が届けばあるいはと思考に前を向かせる。助けたいと傲慢にも思つてしまつたのだから。

「あはあ」

思考を巡らせていた店主の耳にあどけない少女の声が届く。薄暗い部屋の中央、瞳を凝らせば金の御髪が僅かな光を弾いていた。

「こんなところでどうしたの？」

だだっ広い地下室の中央付近の床へ座り、店主に背を向けていた赤い服の少女。扉の

開閉音で入室に気が付いたらしく、コテンと背中を倒して仰向けの姿勢になり頭だけをこちらへ向けている。

少女の姿に店主はひっくり返したたればんだみたいだとほんやりと危機感無く思った。愛らしい仕草に思わず笑みがこぼれる。首が疲れたのか、寝返りを一度うち立ち上がった少女が正対する。

立ち上がった事で少女の背中に翼がついているのが分かった。姉の蝙蝠の染みた翼とは違い、骨組みに宝石が垂れ下がっているような奇妙な形をした翼。少女の動きに合わせて翼につく宝石がキラキラと光を反射している。

絶えず揺れ動く宝石に落ち着きのない子供を連想して笑みが深まる。しかし部屋へ入ってから絶えず香る鉄錆の臭い。鼻につく匂いが目の前の光景をひどく不気味な物へと変える。死体の地面に咲く花の絵画のような歪で不安を煽るアンバランスさ。

血の跡がどこにも見当たらないのに届く強い香り。瞳を閉じれば血の池に立っているのではないかと錯覚してしまいそうな程だ。それほどまでに血が染みついた、吸い続けた部屋。

嫌でも分かってしまった事実店主は想像を肯定された。興味に瞳を光らせた少女が見た目通りの可愛らしい子供ではないと。彼女もまた超級の怪物だと。

「ちよつとした頼まれごとをしてね。それを果たしに来たのさ」

「お姉さまに言われて来たのね、うふふ。遊んでいいのね、私」

引きちぎられたぬいぐるみを片手に歓喜を表す。言葉や仕草は微笑ましい。癒されそうなほどに愛らしいはずなのに店主の寒気は止まらない。

身に降りかかる威圧は姉の吸血鬼を超えているように思えた。店主にはどちらも高み過ぎて本当の所は分からない。けれども意図的に威圧を放っていた姉と無意識で振りまく妹の威圧に差が感じられない。ならば妹の方が上なのかもしれないとの考えに自分の中から否はでなかった。

「そうだね。君のお姉さんに君の相手をするように頼まれたんだよ」

「ふふーん、暇で暇で死にそうだったんだあ」

無邪気に微笑む少女の笑顔に死の恐怖を感じた。だが話は出来そうな雰囲気。店主は安堵して小さく吐息を漏らす。張りつめていた身体から力が僅かだが抜ける。

このまま話をひき伸ばして能力で少しずつ落ち着かせていければいい。色々と話を聞くことも可能だと光明が見えた。頭を過ぎ去った死への予感を押さえつける。

「じゃあ、一緒に遊んでね」

「何して遊ぶんだい」

「おもちゃ遊び」

「そうか。じゃあどのおもちゃを使おう——」

部屋に散らかっている元人形と称する物達へ視線を彷徨わせて問い掛けた店主の聲が詰まる。少女が抱いていたぬいぐるみが腕の中で押しつぶされてひしゃげて綿を吐き出す。残骸が床に落ち、少女は地を離れ宙へ浮かぶ。

世界が鮮やかに彩られる。明かりが灯った訳ではない。浮かぶ少女を彩るように無数の妖力弾が生成されたのだ。数えることも億劫になるほどの馬鹿げた色とりどりの弾。店主の表情が自然と引きつる。頬のこわばりを自覚した。もはや笑みを作る事さえ敵わない。

人形ごっこで遊びながら落ち着ける。なんと馬鹿げた、そして甘い考えだったのだと思わざるを得ない。数秒前の自分を殴り飛ばしたいと反射的に思ってしまう。咄嗟にリュックを壁際へ向けて投げつける。

(狂っているとは……本当の狂気とは、こんなにも悲しいモノなのか)

「おもちゃはあなたよ」

「はは、そう、かい。それで次はどうするんだい？」

喉がひきつりうまく言葉を吐き出せない。能力で抑えられるといっても権能の及ぶ範囲ならなんでも瞬時にできるわけではない。

「おもちゃのお人形が逃げるから、私のが当てるのよ。だから、がんばって私を楽しませてね」

人形劇の開演を知らせる弾幕が降り注いだ。彼女の背後に控える夥しい量の妖力弾が停滞の戒めから解き放たれる。

視界を埋め尽くさんと迫りくる壁のような弾幕。幸いと言ってしまってもいいのか疑問は残るが、迫りくる弾幕の速度は店主の目でも追える程度であった。明らかな手加減。しかし少女の善性に寄るところではなく、少しでも長く遊びたいという意図からだと容易に分かった。

状況を理解できても店主に選択肢などない。彼に出来ることは目の前の破壊から逃げ延びる為に全力を尽くす事だけ。視線を巡らせすり抜けられそうな場所を探す。

「あれれ、お人形さんは飛ばなくていいの？」

「私は飛ばないからこの足で頑張るさ」

（ああ、くそ!!）

話し合いの前にまず彼女に自身を人形ではなく、一つの人格を有する個人であると認識してもらう必要があった。茶の席について談笑するなど夢のまた夢。前途多難な事態に店主が内心で悪態をつく。迫りくる弾幕に僅かな隙間を見つけて走り出す。

「ふーん、あんまりあっさり終わるとつまらないから、ダメだったら罰ゲームだからね」
走り始める店主の背中へ少しだけ落胆を含む声が掛けられた。罰ゲームの前に当たった時点で死ぬのではないかとも思えるが、少女の中では考慮外なのだろう。だが店主に

抗議を上げる時間などない。目の前の状況を変えないかぎり彼に出来ることはなにもない。

走る、走る、走る。時に転がり、滑り込んで部屋の中を逃げ続けた。特注の部屋でよかつたと彼は部屋の製作者に感謝の念を送る傍ら、目前に迫った妖力弾の隙間を滑り込みながら避ける。

加減をしているのか部屋が頑丈に過ぎるのか正確な所の判断は付かないが、妖力弾が床にあたつても弾けた床の破片で怪我をすることがない。

もしこれが普通の地面であつたのならすでに死んでいてもおかしくはなかつた。破片に切り刻まれたポロポロの姿を幻視する。目の前から飛んでくる小型の妖力弾に対し上体を逸らしてやり過ぐす。

「あははハハはははは、すごいすごい。飛べないのに頑張るね、お人形さん!!!」

そろそろ勘弁してほしい。爆発しそうな心臓の鼓動に弱音を吐きだしたかつた。もはや十代のころの若さはない。自らの体力の衰えが恨めしく感じられる。

飛んだり跳ねたり走らされたりと身体の限界が近づいていた。それでも疲労の溜まる身体を懸命に動かして抗う。

幻想郷に来てから野良の妖怪にあつた時のためにと、ランニングをして鍛えていなければどうの昔に力尽きていたと馬鹿なことを考える。

「ほらホラ、アブナイヨお」

ここまで逃げ回れば馬鹿でもわかる。わざと逃げられる隙間が作られていることに。すり抜けた直後に一瞬だけ呼吸と周囲を見渡せる余裕が存在していることに。

作られた避けられる隙間に、僅かな時間。詰将棋の駒にされた気分であろう。むろん駒である彼に状況を変える方法などない。

ハイペースで繰り返されるシャトルラン。追い立てるように迫りくる妖力弾。終わりのない迷路。

気力が尽きるまで繰り返されるとしたら冗談じゃない。店主は内心で悲鳴をあげていた。声に出して酸素を無駄にする余裕はない。話す以前に語りかけさえできない。状況は悪化の一途を辿る。

「ッ、ハア！」

息苦しくて肺が新鮮な空気を求め息を吐きだした。結果、本人の意図しないタイミングで行われた呼吸。一瞬だけタイミングがずれ、足並みも乱れた。視線の先で塞がりゆく出口。

(まずい、塞がる)

危険だと思考が警告する。頭から転がりこみながら飛び込む。妖力弾が今までで最も身体のすぐそばを掠めていく。

ねじ込みながら飛び込んだ身体は、ろくに受け身を取れず床へと打ち付けられた。硬い床がぶつかつた勢いをそのまま衝撃として疲れ切つた身体に返す。息が詰まる。

「つう！ ……はあ、はあ」

（次の……出口を、探さないよ）

何度も繰り返されたことを反射的に実行する。しかし能力で疲労を落ち着けても結局は酸素が足りないのだ。

疲労を麻痺させても、感じないだけで体機能の低下は防げない。

店主の動きは明らかに精細を欠いていた。思考も最初の時ほど明瞭に働かない。だからこそ店主は気がつけなかった。

「アハア、つかまえたア」

出口を探す店主の耳へ、少女の楽しいげな声が聞こえた。届いた声と同時に拳大の妖力弾が視界へ飛び込む。当たると店主が身構える隙もなく妖力弾がその身を捉える。

「があ——ぐう!!」

一発目が腹部へめり込む。足が止まり「く」の字に身体が折れた。突き出した上体の顔へ次弾が当る。顎を殴りあげられたように顔が跳ねあがった。

晒した首元へ三発目がめり込む。そして倒れるまでの僅かな間に数えるのも馬鹿らしくなるくらいの妖力弾が次々に身体を打ち据えていく。

「あがア——があ、ぐううううう!!」

店主の視界は頭部への衝撃で明滅して意識が一瞬途切れた。

直後に背中から倒れたことにより、後頭部を打ち付けた。後頭部への衝撃で意識を再び取り戻す。

大の字で倒れて伸びきっている身体のあちこちが痛みを訴える。苦悶に表情が歪む。

だがどこも折れていない。骨の一本たりとも折れていなかった。その事実には店主は胸が締め付けられる思いがした。

彼女がいかにも人を壊し慣れているのかを雄弁に物語るからだ。彼女はどの程度で人が壊れるかを熟知している。

拳大の妖力弾の一発一発は成人男性に殴られる程度の威力だった。すぐに壊れないよう丁寧に、丁寧に、加減されていた。

なんて悲しい知識だろうか。彼女はきつとこれしか他者との対話の手段を知らない。誰かという時間を少しでも長くするために覚えた技術。

自身の想像に心が冷える。置かれた孤独を想像してしまう。彼女の境遇が酷く悲しかった。

(助けないと……この子を)

身体の痛みを能力で落ち着け麻痺させる。店主が立ち上がると少女が歓喜に満ちた

声をあげた。

「うふふ、じゃあ、ワタシもがんばっちゃうネエ!!」

喜色に富んだ言葉とは裏腹に無慈悲な宣言。勘弁してほしいと出しかけた言葉を呑み込む。自分はメロスではないのでこれ以上の困難は困るのだ。

冗談を考えて気持ちに余裕を持つとうとした。そして世界が切り替わる。妖力弾の密度が、速度が、軌道が変化してゆく。

自然と足が動きを止めていく。これは躲せない。隙間が、出口が、見つけられない。目の前の事実を前に身体が動かない。

「どオしたのお! もっと! もっと!! もっとオオ!!! ワタシと遊んでよオ!!!」

足を動かさない店主に少女が怒鳴りつけた。荒げられた声が、叫びが、怒っているようにはとても聞こえなかった。独りぼつちな女の子の寂しげで、悲痛で、助けを求める悲鳴に聞こえた。

「そう、だね。独りは、さみしいよね」

五百年近くもこんなことを繰り返していたのだろう。危険だからと他者と触れ合う機会は奪われ、時折与えられる玩具へ溜まったうつぶんを晴らすために破壊を振り下ろす。そんなことを繰り返せば、精神が摩耗して気も狂うだろうに。今にも壊れそうな少女を助けたいと心が嘔く。

だからこそ諦めるにはまだ足掻き足りない。出来ることはまだある。店主には過去、藍という妖怪に手伝って貰い習得した能力の応用があった。先ほどは咄嗟の出来事で使えなかった。

妖力弾は固めた妖力が空間に存在しているものだ。それならば妖力弾とは高まったエネルギー体といえる。それを能力で落ち着ける。

つまるところ、何も無い通常の状態へとなるように高エネルギー体を落ち着け鎮静する。能力の応用、高まっているエネルギーを落とし鎮めて平静へと導く。

結論は自らにあたる妖力弾だけを消していく。

「すごいすごいっ！ そんなこともできるんだね、お人形さん!! ねえ、もっともっと見せてよ!!!」

弾幕の圧力が増していく。ただ耐え、ひたすらに耐え、高ぶった力場を落して鎮める。弾が一つ消えるたびに少女との距離を狭めていく。

走り回り、妖力弾に殴り飛ばされて離れた彼女との距離を詰めていく。一步、また一步と彼女へ近づく。

消耗の激しさを店主は実感していた。紫が言っていた通りだと痛感する。能力とはそれを持つ者にその範囲の事柄に対し、支配する権能を与える。

ゆえに、本来なら人や妖怪が努力ではたどり着けない領域の事柄でさえ操れる。空間

を裂き、時さえも操る。

操る事象に関して基本的に妖力や霊力は消費されない。なぜならば、能力とは生まれ付き魂に刻まれたものであり自身の手足と同義なのだから。それ故、自然と誰に学ぶでもなく操れる。

見えないものであるがゆえに、すべてを把握しきれないという問題もあるが手足だつて同じだ。表面は見えるが内部の細かい機能などは把握しているものはあまりに少ない。

そしてその法則が故に、飛べるほどの霊力さえない店主でも能力を扱えるのだ。力の弱い妖怪でも能力があれば、権能が魂に焼き付いているがゆえに、確固たる存在としての人型を形作ることもできる。能力とは、世界へ直接干渉する力である。

「くっ、はあはあ……っう」

しかし消費がないのは基本的な使い方をするときだけだ。基本的ならば疲れないし、疲れても疲労と回復がつり合う。

十何キロも歩き続けられるのと一緒だ。だが応用するような使い方はそうはいかない。応用した使い方とは重い物を持つことや走り続けるようなものだ。

ゆえに、応用によっては長くはもたないし精神が、体力が摩耗していく。むろん、訓練や修行によって干渉できる範囲や規模も上がり負担も減らせる。

さらに靈力や妖力があれば代用も効かせられるだろう。だが生憎と店主にはそんな高尚な物はない。

その上、店主は能力の修行をするようなこともなかった。幻想郷へ来る前、藍に師事して修行をして以来一度もない。

「うふフフふふ、あ、はっはっははは、まだ、コワレナイ、はははははハハ」

彼女の浮かぶ足元近くまでたどり着く。だがそこが限界だった。もう立っていられないと膝が折れた。店主の呼吸音は先ほどからずっとおかしくなっていた。

ぜいぜい、ひゆうひゆうと喘鳴がして呼吸が安定していない。血が滲み汗がながれ、服が張り付く。

先ほどから走り通して数多の妖力弾に殴られ、その上この負荷だ。店主の心身はどうに限界を超えていた。

「すごーいすごーい、がんばったね、お人形さん♪ でも、もうコワレそうかな？」

店主の様子にこれ以上は本当に無理そうだと少女は察して弾幕を止める。彼女の喜悦を含む声には何処か寂しげな色が混じっていた。

「もうおしまいかな？　じゃあ」

少女が掌をゆつくりと持ち上げていく。開いた掌が店主へ向けられていた。ゾクゾクとした止まらない嫌な予感が店主のなかを這いずりまわる。警告されていた内容と

目の前の光景が一致している。

店主にはもう動くほどの体力がない。少女は手を握るだけで店主を壊せる。なるほど、反則すぎる上に強力な能力だと納得した。

「ご褒美に、ワタシが直接コワシテ、ア・ゲ・ル♪」

どう動いても逃げられそうにないと察してしまえた。だが見上げればすぐ傍に彼女がいる。自分の声が届くならきつとこの瞬間だけだと店主は思う。だからこそ、それに賭ける。己の命さえもベットする。

「最後に、一つ、いいかな？」

「なあに？」

まだ動きを見せる店主に興味があるのか。

はたまた、自らではどうしようもなく、持て余した衝動を止めて欲しいのかはわからない。けれども少女の動きが止まる。少女の瞳に、嗜虐と切望の色が見えた気がした。

さあ覚悟を決めようか、私よ

この子の姉に頼まれたではないか、相手をしてほしいと

紅茶の彼女に言われたではないか、出張営業をしてほしいと

ならば、ここで一席設けようではないか

彼女のための、特別な一杯を供する一席を今この場に設けよう

自らを奮い立たせるように店主は心で叫びをあげた。覚悟を決めれば後は実行に移すだけ。全てを賭した店主が笑みを浮かべる。

「私の血を、飲まないかい？」

言葉と共に店主は自らの首筋をさらけ出す。持ち上げる事さえ億劫な右腕は酷く緩慢ではあるが自身の意思に従ってくれた。襟首を掴み肌を晒す。

少女の表情が驚きに染め上げられた。まるで理解できない生き物を見るようだ。

「吸血鬼にしてほしいってこと？」

何処か落胆しているような声色だった。

「いいや、違うさ。ただ食事として提供しているだけだよ」

続けられた言葉はさらに理解できないものだった。少女の口がぽかんと開かれる。

「……………どおして？」

「こう見えて私は飲み物をお客さんに出すのが本職なんだよ。だからね、最後は自分の仕事をして締めくくりたいと思ってね」

「……………」

「それに、お姉さんには君の相手をするための出張営業を頼まれたんだ。ここに来てからまだ一人にしか飲み物を提供できていない。これじゃあ、私の仕事人としての誇りにかかわる。だからさ、最後にもう一度聞くよ。私の血を飲まないかい？」

疑問で埋め尽くされている少女の表情からは答えが読めない。これが最後の賭け。血を直接飲むのなら能力が少女に届くかもしれない。自身が入れた飲み物にも、人落ち着け安心させる力がある。ならば自身の血液には十分に可能性はある。

「……いいよ、私が飲んであげる」

空に浮く少女が近づいてきた。疲労困憊の店主は跪いているような体勢だ。目の前に降り立った彼女の身長からすれば実に噛み付きやすい高さに店主の首筋がある。彼女と至近距離で視線が合う。少女の瞳は何かを求めるように小刻みに揺れ動いて弱々しい光を宿している。

「ほら」

短く促して店主は首筋を再度差し出す。眼前の行動に背中を押されたのか少女が口を開き店主の首に噛み付く。吸血が始まった。

ここからが勝負だと気合を入れる。彼女を落ち着けるのが先か、自分が貧血で意識を失うのが先か。

(一)(一)が分水嶺)

「どうかな？　自分の血液がおいしいかどうかはわからないけど満足してもらえそうかな？」

問いかける店主に少女の頭が頷くように身じろいだ。依然、吸血は継続したままなのだ。血を飲んでいる彼女の身体が小さく震えていることに気が付く。彼女の身体に店主がそつと手を回し抱きしめる。自身の体温を分け与えるように優しく包み込む。

「大丈夫、さみしくないよ。私はここに居るから」

穏やかに言い聞かせながら店主は頭を優しくなでる。その様子はまるで親が子にするように愛情の籠った優しい手つきだ。

少女の手が店主の服をギュツとつかむ。吸血の速度が低下していった。彼女が首に噛み付いているため、店主と少女は遠目にはハグをしてるように見える。

「いなくならないから、そんなにさみしそうにしなくていいよ」

吸血が静止した。

「ずつとずつと独りでさみしかったよね。どうしていいか分からなくて、でもどうにもできなくてもどかしかったよね」

店主は耳元から鼻をすする音が聞こえた。

「自分の思いが誰にも届かないの悲しいよね。私が聞くから安心してよ」
首筋から牙が離れて少女の口から嗚咽が洩れる。

「大丈夫、私がいる。一緒にどうすればいいか考えよう。私は君の味方だよ」

「うっ……ひっく、うう……わ、わた、し……どうしたら、みんな、と」

「一緒に私と考えよう。でも今は思い切り声をあげて泣いていいんだ。我慢なんてしないで全部吐き出しなさい」

言葉を紡いでいく。抱きしめる腕に力を込める。頭を抱える右手はぼん、ぼんと一定の間隔を刻み赤子をあやすように優しく撫で続ける。

触れ合った場所から体温が移る。感じる温もりが心の中の凍えた部分を溶かしている。嗚咽が次第に大きくなり、哭泣となり部屋へと響き渡る。

彼女が泣き疲れて眠りに落ちるまで店主は少女をあやし続けた。

久しぶりに気持ちよく眠れた気がする。なんだろう、いい香りがする。眠りに落ちる前にも嗅いだ記憶のある、安心する香り。

思い出した。部屋に入ってきた人で遊んで、その人に、その人は私が本当に欲しかったものをくれた。

頭が覚醒する。瞳を開けると眠る前に温もりをくれた人の顔が見えた。膝枕をして

くれているみたいだ。触れている部分からまたじんわりと温もりを感じる。

視線の先のその人は何かを飲んでい。その光景に安堵した。目が覚めたらいなくなつてたらどうしようなんて考えていた自分がおかしかった。

クスクスと笑いが漏れる。それで私が起きたのに気が付いたみたい。

手に持っていたカップを床へ置く。穏やかな彼の瞳が私の瞳と重なり合う。

「おはよう、気分はどう？」

「すごく、幸せ」

「それは良かった。ああ、そうだ忘れる前に。私は白木涼介。好きに呼んでくれて構わないよ」

「しらき、りょうすけ……ふふ。私はフランドール・スカーレット。フランって呼んでね、お兄ちゃん!!!」

見開く瞳とお節介な魔女に供する六杯目

泣き疲れた少女は眠りへ落ちた。深く寝入っていることは店主から見ても一目瞭然だ。それでも彼は起こさないよう慎重に彼女を抱き上げる。

最初に投げ捨てたリュックを探すために周囲を見回す。部屋の隅に探し物の姿を見つけると店主はそちらへ向かって歩みを進める。

リュックの傍まで来ると店主はある事に気が付いた。あれほど弾幕が飛び交っていたというのにリュックは傷一つ付いていなかった。偶然などではないと確信を持てるが、原因はわからない。

腑に落ちない事ではあったが、一先ず荷物が無事なことは喜ばしい。店主は浮かんだ疑問を脇へと置いて考えることをやめた。

少女が眠りやすいように自らの膝を枕として提供する。がさごそとリュックを漁る。目的の物に手が触れた。引っ張り出せば目的たがわず水筒が出てくる。中身のホットコーヒーをカップ代わりの蓋へと注ぐ。

ゆつくりと一口、二口。身体を通り抜ける温かさに心が安らいでいく。この段階に来

て、ようやく生き残った実感が得られた。なんとかやり遂げることが出来たのかと他人事に思いながらも達成感を仄かに覚える。

自らの能力を嫌っている店主であったが、誰かを助けることもできるのかと感慨に浸っていた。微睡む少女を見れば心を救われる。ありがとうと感謝をこめて金糸のような髪を優しく撫でる。

最終的に本当の意味での彼女の助けと成れるのか分かりはしない。だが見捨てる事だけはしまいと自らに誓いを立てる。

撫でられてくすぐったいのか、少女がむずがる。起こしてしまうのも忍びないので、名残惜しい気持ちで仕舞い込んで手を止める。

しばらく目を覚ましそうにないので店主は時間をつぶす為にリュックから一冊の本を取り出す。鈴奈庵で借りた本だ。

広く静寂な部屋にめくらられる紙と少女の寝息の音が落ちる。それだけのことなのに心地よさがあった。誰かと一緒にいる。そんな些細なことがたまらなく嬉しかった。心強かった。

広い広い部屋を見渡す。鬼ごっこやサッカーだつて出来てしまいそうな程広い部屋。けれども驚くほどに物がなく殺風景な部屋。

独りでいることを想像して身が震える。ただっぴろい箱に自分だけが放り込まれて

閉じ込められるのと何の違いもない。

寂しくて苦しいだろう。寂しくて悲しいだろう。寂しくて気が狂うだろう。死にたくなるだろう。

少女の小さな身体は一体どれほどの寂負しさを背負ってきたのか。想像することさえ敵わない。

考え事をしながら本を読み進める。どれほど時間がたったのか分からないが三冊ある本の内の二冊目を読んでいる時、不意にくすくすとした笑い声が聞こえてきた。

少女は目を覚ましていた。眠っていた時の体勢のまま店主の男を見上げていた。

気付いた店主と目覚めた少女の視線が重なる。お互いの瞳がお互いの姿を映しこんだ。

「おはよう、気分はどう?」

「すごく、幸せ」

（それは重畳。でも、これからが始まりだよ。さあ、自己紹介をしようか、お嬢さん）
「それは良かった。ああ、そうだ忘れる前に。私は白木涼介。好きに呼んでくれて構わないよ」

「しらき、りようすけ……ふふ。私はフランドール・スカーレット。フランって呼んでね、お兄ちゃん!!!」

お兄ちゃん。なんだかむずがゆくなる響きであった。けれども否定しない。

無償の家族愛を無意識に求めている。涼介はそんな気がした。きつと大きくは外れていないのだろう。

ならばと気持ちを改める。兄のようにフランドールへ愛を注ごうと。今までずっと飢えていたその分まで、溢れんばかりの愛を注ごうと。

嬉しそうにはかむフランドールの姿に涼介は心に決めた。

「そうか。ならフランは私の妹になるのか。うれしいね、こんなに可愛い妹ができるなんて」

言いながらフランドールの頭を涼介が撫でる。撫でられたフランドールはもつととせがむように頭を手のひらに押し付けてくる。愛らしく微笑ましい反応。

だが妖怪としてはあまりに素直すぎる、それこそ見た目相応の反応。それがフランドールが人とのふれあいに、愛されることに飢えていると如実に思わされる。

「お父さんって呼ばれないのは私が若く見えるからかな」

「ううん。お父さんとかお母さんってよくわからない、生まれてすぐに私は閉じ込められたみたいだし。でも、お姉さまは私とたまに遊んでくれるし、玩具もくれたりするから好き。だから、貴方はお父さんじゃなくてお兄ちゃんなの」

「そうなんだね。お姉さんの事も大好きなんだね」

両親というものがわからない。フランドールの何でもない風なその言葉が涼介の心に苦い物を落す。

強すぎる彼女の力が恐れを助長させ、独りで閉じ込めることで解決を図らせてしまった。

力の使い方を、他者との接し方を、誰も教えなかった。誰しも周囲と繋がりに生きていくことで多くのことを学ぶが、幽閉という結果がその機会を全て奪っていた。

だからこそ壊す力を持つてしまった少女は壊すことでしか自己を表現できなかった。生まれ持った力。もつとも身近な自分だけの個性。自己の象徴。

何も分からぬ赤子が持つには過ぎた力。物事の判断が付かぬ赤子が振うには危険な力。だから生まれてすぐに幽閉された。それも両親が関与した上でだ。

フランドールの姉が接しようとした時にはすでに遅すぎた。もはや壊すことでしか自分を表現できない怪物が出来上がっていた。何もかもを壊す怪物を狂っていると誰もが称した。

だからこそフランドールは独りきりだった。狂ってなどいかなかったのに。それしか知らないだけの少女を独りぼっちにした。そして孤独が本当に彼女を狂気へ導いた。

それでも姉を慕っているのは本当に吸血鬼がフランドールを愛していたことの証明だ。何度も救おうとした。何度も会いにきた。接し方もわからぬ妹に愚直なまでに愛

を注いだ結果なのだ。

だがそれでもどうにもならなかったから今の歪な関係が生まれたのだ。

「うん、お姉様も大好き。でも、お姉様は私の事……」

フランドールは言葉にしてしまうのが怖い。言ってしまうえばきつと自分の言葉をそうだと信じてしまいそうな自分がいるから。

だが涼介は知っている。吸血鬼の心に宿るフランドールへの愛を。フランドールは狂気を落ち着けて仕舞えばこんなにも普通な子だ。だからこそ大丈夫。今からでも遅くはないと強く思う。

(なにせ、妖怪の寿命は長いのだから)

だからこそ涼介が否定してあげる。何も心配はいらないと、少女の不安を吹き消してあげる。

「フラン、心配は必要ないよ。お姉さんもフランの事が大好きなんだ。フランと同じだね。でも、どうやって接すれば良いのかわからないんだよ」

「フランも、フランもどうすれば良いのかわかんない」

不安げな弱々しい声。

「大丈夫、これから一緒にどうするか考えよう。ね?」

「うん!!」

とはいえこれからどうするか、それが問題であった。ひとまず一端は落ち着いたからと、いきなり姉に合わせてもダメだ。流石にそれが不味いことは涼介でも簡単に分かる。

このまま自分が近くにいて、破壊衝動を落ち着けつつ壊す以外の感情表現や人との関わりを学ばせたい。だがそれをするには足りない物が多かった。

不足を補うためには部屋の外へ行く必要があるがそれは避けたいというのが本音だ。侍女と会うのはまずい。会えばすぐさま姉たる吸血鬼へ伝わるだろう。それは避けねばならなかった。

であるならばおのずと選択肢は限られてくる。第一候補は図書館にいた小悪魔。館の中で一番融通が利きそうな人物。だがあくまで涼介が知る中ではと注釈がつくが。

誰にも会わずに図書館まで行けるか。自身に問い掛けるが答えはすぐに出た。リスクが高すぎる。原理は不明であるが瞬間移動の真似事の出来る侍女がいるのだ。どこで鉢合わせるか分かった物ではない。

さてさて手詰まりで困ったぞと涼介が頭を悩ませていると、扉の軋む音が聞こえてきた。

「確認に来たのか？」

反射的に浮かんだ思考が口から出た。あれだけ暴れていた音が無くなったのだ。確

認ないし、掃除にくる可能性があるのは当り前だ。そんな簡単なことに気が付かない己の愚鈍にため息が出そうだった。

「次の機会はどうかやら得られたようね」

淡々と告げながら彼女が部屋に入ってきた。姉の吸血鬼ではなく、侍女でもなく、ましてや小悪魔でもない。図書館の主が姿を現した。

「レミイの難題をこなした貴方はいったい何に悩んでいるのかしら？」

予想外の人物に涼介の思考が一瞬停止する。そんな涼介を笑うが如く、彼女の口元が弧を描く。

現状の確認という名目で図書館の主が一席設けるように涼介へ要請した。フランドールの妖力弾で負った身体の打ち身は彼女が魔法で瞬時に癒した。

涼介は自分と彼女とフランドールの分の珈琲を水筒から注ぎ全員の前へ置く。あいにくとこの部屋に、机や椅子などの家具はなかったため床に直置きだ。

フランドールの分は砂糖とミルクを入れてある。好みは分からないが甘くて悪い事はないだろうとの涼介の采配だ。同じ金の色合いでルーミアを思い出したことは味付けに無関係ではないだろう。

図書館の主にはお好みでどうぞと、それぞれの入った容器を目の前に置く。けれども彼女はそれらを無視してそのままストレートで飲んでいた。

フランドールは人見知りか初対面の人にあつたかのように大人しくなり、涼介に引つ付いて隣に座る。

「何故貴女がここに？」

「終わった後のひと段落も済ませたようだったからよ。ああ、あと貴方が困つていそうな雰囲気をしていたのもあるわね」

ひと段落というのは自己紹介の事だろうか。彼女の言葉に涼介は予想する。であるならば目の前の彼女は何かしらの方法で監視をしていたことになる。

自身の想像で背筋に寒い物が奔る。涼介は咄嗟に確認の声をあげる。声は自分で思っているよりもずっと低いものであつた。

「私たちの様子は他の人たちにも？」

「知らせてないわ。知っているのは私だけ。それに音や振動なんてものはもともと外に出ないから気にもしてないと思うわよ。だからそんなに警戒しないでちょうだい」

「それは良かった。けれど、さすがに全く気にしてないというのはおかしい話なのではないのでしょうか？」

「元々期待もしていないからね。それに今は色々と忙しいから」

「忙しいとは？」

「異変を起こす準備をしているの」

異変とは幻想郷中を巻き込む大掛かりな事件のことだ。それを起こすと目の前の彼女は言う。聞いた内容に疑問が浮かぶ。何故今になって、と。

「隠れていたのに何故今このタイミングで？」

「十年前の吸血鬼異変で結ばれた盟約を果たすために。そしてそれは幻想郷中に紅魔館の存在を認識させる。だからもはや隠れている事にもあまり意味はない。貴方は異変の裏でとりあえずやるだけやつておくかという感じで招かれたのよ。それに上が騒がしくなるからその前にガス抜きをしておこう、というところかしら」

「なるほど、それゆえの無関心か。それと込み入った話だけれど異変とはどのようなことをするのか聞いても？」

「レミイいわく、赤い霧を出して幻想郷を覆うらしいわよ。今はその準備中ね。多分明日にも始まるわよ」

盟約によって行われる異変とは一体なんだろうと疑問が浮かぶ。しかし、涼介には何となく心当たりがある。盟約の相手はきつと紫なのだろうと知り合いの顔が脳裏に浮かぶ。彼女の人となりから察するに幻想郷の安定を望むゆえの行動だろう。

であるならば、ある種の出来レースなのかもしれない。異変の心配をしなくとも問題

はなさそうだと涼介は問題を気にしないことにした。けれど心配などしなくとも幻想の守護者である霊夢なら問題ないのかもしれないが。そこまで考えて気付かれないように心の中で苦笑する。

（あの子も大概人間離れしているからな）

「ま、つまりは乱痴気騒ぎが始まるから些事にはかまっていられないということね」

「乱痴気騒ぎ、ね。なるほど言い得て妙とはこの事だ」

「それで時間のできた貴方はどうするのかしら？　ここを出て帰るつもりはないのでしょうか？」

フランドールは彼女の口にした帰るといふ言葉に反応を見せた。涼介の服を握りしめる。不安があるならば言葉にして解消してあげなければならぬとフランドールの不安げな様子に思う。

「いいや、帰らないさ。少なくとも異変が終わるまではここでこの子と遊んでいようかな」

フランドールの頭を軽くポンと撫で付け言葉にする。服を握りしめる手からは力が抜けた。

その様子にちゃんと言葉で伝えてあげる事は大切だと涼介は改めて思う。

図書館の主もそれを解っているからこそそわぎと涼介に問いかけるのだろう。

存外気が効く良い子じゃないか。涼介は自身の中での彼女の評価を修正する。

「やる事が決まっている貴方は結局何に悩んでいたのかしら？」

「それはもちろん玩具が欲しいんだ」

胸を張りながら情けないことを言う涼介。珍妙な生き物を見つけてしまったかのような顔で図書館の主は固まる。

「トランプやボードゲーム、人生ゲームにジエンガなんてのも良いね。二人で遊ぼうと思つてさ。用意できないかい？」

一人では遊ぶ事ができないものであるがゆえにこの部屋には置かれていない。もともと、なんとか小悪魔にコンタクトが取れたら頼もうと涼介が思っていたものだ。

「なるほど、そう言う事ね。なら、あとで小悪魔に持つてこさせるわ」

「それは助かる」

「構わないわよ。さて、私もそろそろ戻るわね」

図書館の主はそう言うのと珈琲を飲み干した。ご馳走様と短く告げるとカップを涼介に返却する。カップを受け取る涼介の中で不意に一つ疑問がわき出る。

「何故私の肩を持つんだい？」

「私も時間をおいて会わせたほうが良いと判断するからよ。でも、レミイにはそれが多分できないから貴方の肩を持つのよ」

彼女の分かりやすい弁に涼介は納得した。ただの善意だと言われるよりよほど信用できる。立ち上がると扉に向かって図書館の主は歩き出した。

「君も一緒に遊ばないか？ 人数が多いほうが楽しい」

「魅力的な提案だけどごめんなさい、と言わせてもらおうわ。流石に長い間私の姿が見えないと怪しまれる。それに私も異変を手伝わされる事になっているの、面倒くさいんだけどね。二人には私が誤魔化しておくから安心なさい。少なくとも異変が終わるまではなんとかするから」

「そうか、それは残念だが世話になるね」

「気にする事はないわよ。元々こちらが始めた事だもの。支援するのは当たり前だわ。レミイはこの問題に対して感情的になりやすいから今はあまり時期がよくないわね。それに咲夜の様子も少し変だったのよね、何か知っているかしら？」

「紅茶のお嬢さんは私の能力のせいで情が移ってしまったみたいだ」

「ふうん、なるほど。そういうことなのね。それもおいおい解決しそうだから良いわ。配達ついでに小悪魔も貸してあげるから三人で遊びなさい」

「ありがとう。それと先ほどから引き止めて悪いけど最後に一つだけ。私は白木涼介、君の名前は？」

「パチュリー・ノーレッジ。パチュリーで構わないわ」

そう言い終わるとパチユリーは扉の向こうへと消えていく。

「ありがとう、パチユリー」

この言葉はパチユリーに届いただろうか。涼介は扉を見つめフランドールの頭を撫でる。

その後やってきた小悪魔を含めた三人で沢山遊ぶ。勝ったり負けたり、冗談を言い合いなながらも遊ぶ。

負けたら悔しがるし勝ったら喜ぶ。接戦になるとハラハラするし、時にはブラフなんてかます。

小悪魔の巧妙なイカサマに思わず感心するし、ズルいと怒りもする。圧勝されるともはや感心する。

逆に圧勝すると申し訳なくなる。相手が追い詰められて悩んでいるのを見るのは楽しい。苦しい状況を打破する為にウンウンと悩むのもまた楽しい。

これら全てはフランドールにとって初めての体験となる。遊びの中からも多くのことを学んでいく。

遊んでいて涼介は分かったのだが、フランドールはとても頭が良い。

姉と和解できる日もそう遠くないのかもしれない。そんなことを思いながら勝ち目の薄い将棋盤を涼介は睨みつけた。

対戦相手のフレンドールは取った駒を片手で転がし、観戦者の小悪魔が茶々を入れてくる。そんな当たり前で平和な時間が続く。

煌めく星と陰る太陽に供する七杯目

遊び疲れては眠る。ある種においては享樂的とも退廢的ともいえない生活。

しかも少女二人と成人した男が地下室でとの注釈が付けばもはや何をいわんやという状況だ。

外の世界では事案発生と言われかねない。幻想郷でも知り合いに知られた日にはしばらくは話のネタにされること請け合いだ。

ぼんやりと馬鹿げたことを考えながら涼介は寝ぼけ眼を擦っていた。覚醒を始めた頭が周囲を認識し始める。

「フランは元気だね」

目覚めた視界に入ってきた光景は小悪魔の顔へ落書きをしているフランドール。疲れを知らない彼女の姿についていつい年寄り染みた感想が口について出た。

一端は目を覚ましたがいまだ眠気は残っている。あくびをかみ殺しながら涼介は起き抜けの一杯を自分に用意する。

手にしたステンレス製のマグカップをみてふと思いつく。湾曲して歪みはあるが周囲を映す鏡面に自身の顔を映しこむ。

鏡としては及第点もいいところだが、肌色に他の色が乗っていないかを確認するだけなら十分事足りる。

「お兄ちゃんには今回は描いてないわよ。ふふ、今度は小悪魔の番」

無邪気に笑いながら描く手を止めないフランドールは小悪魔よりも小悪魔染みている。自身の真横で繰り広げられる光景にそんなことを考えさせられる。

それにしても順調に学習も経験も進んでいる。嬉しくはあるが自身も悪戯の犠牲者候補であるためか、素直に喜べないのはわがままなのだろうかと少々悩んでしまう。

現状は被害もないし、些末な内容で悩めるというのは幸せであると考えを改める。

「そうか、しつかり描くんだけぞ」

あれこれと考えはするが、今すべきことは悩むまでもなかった。当り前にフランドールに加勢して、悪戯をさらにけしかける。

落書きを教えたのは小悪魔、その時のキャンバスは涼介だった。ならば涼介が止めないどころか促すのは自明の理であり因果応報である。

小悪魔も教え子の成長のために教材にされるのであれば本望だろう。適当に自身の中で小悪魔の意思を作り上げて涼介は落書きされている少女を見捨てる。

さて何が描かれているのやらと覚めきった身体を動かして覗き込む。

「ふっ、おれぞ」

瞬間、思わず笑っていた。額には大悪魔。頬には三本線の髭が左右対称に引かれており、鼻先が赤鼻のルドルフよろしく真っ赤に彩られている。極めつけは瞼に描かれた第三、第四とでも称すべき瞳であろう。口から垂れているよだれと相まって大変可愛らしい風貌となっていた。

幸せそうな顔にどのような夢を見ているのか少しだけ興味をそそられた。むにやむにやと口が動いていることから意外と俗っぽい身近な幸せなのかもしれない。

「こんなもんなあ」

終了を告げるフランドールの満足そうな声が作品の完成を知らせる。最初にあつた時には想像もつかないほどに穏やかな姿である。

小悪魔がときおり外から運んで来てくれる食事から考えるならば、地下室へ籠るようになってから六日程経過している計算になる。

初めの頃は涼介の分の食事を運んでいて怪しまれないかと不安もあつた。しかし小悪魔の「パチュリー様が異変が始まるということ珍しく食事を所望している。表向きはそうなっていますから大丈夫ですよ」との言に安心して引きこもり生活を送っていた。聞いた時はパチュリーは食べなくていいのかと思つたが魔法使いという種族は飲食を必要としないらしい。飲食は娯楽の類いであり、彼女は本があれば満足する性質らしく普段から食事を取らないので気兼ねなく食べていいということだった。

「フランも飲むかい?」

「うん、ちようだい」

描き終ったフランドールの視線に涼介が気が付く。一応確認をすれば案の定肯定の返事が返ってきた。

フランドールの分を注ぎ、近くにあるナイフで涼介は自らの指先を浅く切りつける。傷口から流れ出た血が指を伝いカップへと落ちていく。

ブラックコーヒーならぬブラッドコーヒーと落第レベルの洒落をそつと胸の内にしまい封印する。十分に血が落ちると痛みと出血を能力で抑える。

ちよつとした能力の応用。痛みを発する神経の働きを落として抑制し、周辺の血圧を落として血の流出を減らす。

欲を言えば傷を治せればいいのだが生憎と涼介もフランドールも治療の術を持ち合わせていない。今いる面子でそれが出来るのは今だ眠る小悪魔だけだ。何だかんだと魔女の助手として恥ずかしくない程度の手ほどきはされているようであった。

「小悪魔が起きたら治してもらえばいいか。はいフラン、できたよ」

「ふふふ、ありがとうお兄ちゃん。いただきまーす」

「どういたしまして。火傷に気を付けて飲むんだよ」

フランドールはコクリと頷きながら、ちびちびとなめるように飲み始める。些細なこ

とであるがお礼も感謝も自然と出てくる程に少女は社会性を手にしていた。

乾いた大地が水を吸うようにフランドールは様々なことを吸収して成長している。ずつと一緒に過ごしていた涼介は、本当に賢い子だとフランドールを認識していた。

「さて、もう異変が始まってしばらく経つけど今外はどうなっているんだろうね」

「んー？ んー、どうなんだろうねー」

あまり気のないそぶりよ装っているがパタパタと忙しない翼が内心をこれでもかと表していた。本心を隠そうとしているさまはいじらしく見えた。

本人が乗り気でないのならと話題を変える。何かをするのではなく、ただゆったりとくつろぎながらポツポツと二人で話しを続ける。眠っている小悪魔に配慮して少しだけ声を落としながらの会話。他者への気遣いももう指摘さえいらぬ。誰に言われること無く自分の判断でフランドールは出来るのだ。

涼介は特別なことはしていない。強いて言うのであれば時折発作的に見せる破壊衝動を落ち着けていることだけだ。そしてその頻度さえ目に見えて減ってきている。

「ふあ!? ぱ、ぱちゅりーしゃま! ……ふあい、だひじょうぶです!! ……しゅぐに、すぐに向かいます!!」

突然跳ね起きた小悪魔が独り会話を始める。内容を聞くに魔法を用いてパチュリーと話していると分かった。

要件は短かったのか会話自体はすぐに終わった。小悪魔はまだ残る眠気を追い払うように頭を振り立ち上がる。

「何かあったのかい？」

「あ、はい。どうやら異変の解決人が屋敷の前まで来たようです。なので図書館に戻るようにと仰せつかりました。申し訳ありませんがここで席を外させてもらいます。それでは」

説明が長いか、扉につくのが早いか。内容を伝えきつた小悪魔はすでに地下室の扉に手をかけていた。

「小悪魔、か——」

「——申し訳ありません。ご用件はまた後程お聞きし——」

相当急いでいたのだろう。最後まで言葉を聞くことも、言い切ることもなく扉が閉じた。涼介は落書きの件を伝えられなかったと形容しがたい後ろめたさを感じていた。

「フラン、私は言おうとしたね」

「うん、聞かなかつたのは小悪魔だよ」

「なら、私たちは悪くない。いいね？」

「うん。悪いのは小悪魔」

「詭弁であることは百も承知だが二人して言い訳を完了させる。無論誰が悪いかとい

えば、落書きをしたフランドールであろうし、止めなかった涼介も同罪だ。けれどもそもそも最初に教えたのは小悪魔なので、結局のところ全員の連帯責任というのが一番確信に近い答えなのではなからうか。だが幸か不幸かそのことを指摘するものは一人もいなかった。

小悪魔が出て行つてからも何かを変えることなく二人でできる遊びをしていた。だがフランドールは外が気になつているのが丸わかりであった。気もそぞろに集中しきれない。

チラチラと結構な頻度で扉を盗み見ているつもりでいることから誰でも察することは容易であった。であるにも関わらずフランドールは外へ行きたいとは言わない。自分からは言い出しにくいのだ。

様々なことを知つた今の彼女は過去の自分の振る舞いを客観的に見ることが出来る。出来てしまつている。

だからこそ言い出しにくい。だからこそ外が怖い。また暴れるかもしれないから。誰かに怯えられるかもしれないから。無論フランドールは妖怪で吸血鬼だ。暴れるのも怖がられるのも本来的にみれば正しいことだ。だがそれは不特定多数の人間に限つ

た話だ。最愛の姉に破壊を向けたくない。世話をしてくれる侍女や、奇跡的に落ち着いている時に話し相手になってくれた門番に怖がられたいわけでない。

自分を完全に信じきれないから不安がある。不安があるから言い出せない。不安があるから自分が怖い。

「フラン、外に出てみようか」

自らをがんじがらめにして押さえつけているフランドール。涼介も正確にフランドールの内心を理解していたがそれでも提案する。

何かが切っ掛けで暴れないか。姉にあつて何かを言われまいだろうか。そんな悩みは些細なことだと涼介がフランドールの心に踏み入る。

「でも……」

「でも、どうしたんだい？不安があるなら言つてごらん」

フランドールは口を開けては閉じる。何度も繰り返して、視線を不安に揺らした。自身のなさに不安が勝り、ついには視線も涼介の顔から下がっていった。

涼介は膝についてフランドールの目線までかがむ。

「わたし、また暴れちゃうかも」

「大丈夫、フランはもう何も知らない子供じゃない」

大丈夫だと、血の気が引いて冷たくなっているフランドールの頬に手を添えて言い聞

かせる。

「わたし……お姉さまとまだなんて話そうか考えてない」

「それならもし見つけてもこっそり隠れて遠くから見ているよ」

何とかなると冗談めかしておどけてみせる。

「わたしまた何か壊しちゃうかも」

「何も壊さない。私も近くにいますよ」

強く断言する。大丈夫なのだ。何とかなると。絶対の自信なんてものは涼介にもない。けれども欠片も表に出す事無く涼介は言い切る。

俯いていた少女の顔が上がる。至近距離で二人の視線が向き合う。初めて遊び始めてからフランドールが外へと興味を持ったのだ。健気な少女の孤独と努力を知っている涼介は、叶えてあげたいと思ってしまったのだ。不安があるのなら、カバーをするのが大人の、自分の務めだと涼介は決意していた。

だからフランドール、私が君の支えになるよ

「フランドール、外へ行くよ」

立ち上がり、フランドールの手を取る。吸血鬼であるフランドールに抵抗されたと

てもではないがただの人間の涼介ではどうにもできない。しかし、つないだ手から伝わる抵抗は酷く弱々しい。握り返される手は涼介の手を握りつぶさないように繊細に加減されていた。

「さあ、フラン。行くよ」

再び少女に決意を促す。覚悟を決めたのか緊張で冷え切っていた手に熱が戻っていた。

「すう……はあ……すう……うん!!」

少女は決意し、自らの足で一步目を刻んだ。

響く足音は一つ分。フランドールは涼介におんぶされていた。涼介に背負われているからこそ彼を気にして激しく動けない。言ってしまうえば足かせに近いのかもしれない。

それにもしも気持が高ぶった際にはすぐに涼介の血が飲めるようにと首筋に近いこの体勢が適している。

地下室を出てとりあえずはと二人は大図書館を目指すことにした。明確な目的地になりそうな場所に心当たりがなかったのもあるが、出て行った小悪魔が心配だったのも

理由の一つだ。

後はフランドールの姉の吸血鬼に会う確率も低く、何かあればパチュリーという心強い味方もいて現在の状況の説明も聞けるかも知れない。二人のそんな思惑が大図書館へと足を向けさせた。

「赤いな」

「うん。それにお姉さまの魔力を感じる」

窓の外に見える景色は赤に染まっていた。うつすらと赤みがかっているとかのレベルではない。数メートルも離れば視界が赤にそまるだろう。正直な話かなり目に痛い景色だ。

目の前に広がる紅い霧が幻想郷中に広がっている。パチュリーの以前の説明を信じればそう言うことになる。

分かりやすい異変。パチュリーが評した通りの乱痴気騒ぎだ。屋敷で雇っているらしい妖精メイド——小悪魔呼称——も高揚しているようで暴れていた。

遠方からは爆音が聞こえていた。ひときわ大きい音源は二つ。一つは見当もつかない程に遠くで。もう一つは今まさに向かっている進行方向から聞こえていた。発生源は大図書館だと予想できる。予想を裏付けるように段々と聞こえる音も大きくなっていった。

「パチュリーか小悪魔が戦っているのかな？」

「たぶんそうだと思う」

今だ状況が分からないため、話す内容がいささかならずふんわりとしているがたどり着けば分かることだと歩くペースを僅かにあげる。

フランドールも身体を僅かに浮かせてペースアップに貢献する。他にも古傷で左腕の筋力が低下している涼介へ対する配慮も含まれていた。

ちよつとしたフランドールの気遣いにまた心が温まる。少しの時間を置いて二人は大図書館へとたどり着いた。普段は閉じ切られている大扉が開け放たれていた。無論二人は普段のことなどは知らないが、意外とまめな小悪魔が扉を開けっぱなしにするなどなどないとは知っている。

ついさつきだつて急いでいたのに地下室の扉をきちんと閉じていたくらいだ。それが原因で落書きを伝える声が届かなかつたという悲劇ないし、喜劇が巻き起こつていたが。

ふと気が付けば先ほどまで鳴り響いていた音が一切しなくなつていた。

「終わったのかな？」

「どうだろう。でも、話し声が聞こえる」

「どの辺りかな？」

「あつちのほう」

吸血鬼の五感は人間とは比にならないほど優れている。その吸血鬼たるフランドールが聞こえているというのだから事実だろうと指示に従う。

フランドールの誘導に従い同じような景色に見える本棚の森を進んでいく。やがて本を片手にもつパチュリーと、金髪にウィッチハットを被る魔女然とした格好の黒白の少女が放棄にまたがり浮いていた。

黒白の少女に涼介は既視感を覚えた。店に来てツケていく少女にとても似ている。というよりも完全に本人だ。知り合いの少女の姿に頭痛を感じたが今はひとまず頭の中から浮かんだ懸念を追い出す。

「なんて話しているか聞こえる?」

「ん、とね。使い魔を使って笑わしてくるなんて卑怯だぜ。知らないわよ、私だって笑い殺されるかと思っただわ。お前の使い魔じゃないのかよ。少し前まで貸し出していたのよ。どういうことなんだぜ? 言葉のままよ。まったく、お詫びはここにある本でいいぜ。それは、ダメよ。あなたには勿体ないわ。」

フランドールの聴力を利用して空中に浮く二人の会話を中継してもらおう。視線の先で少女がカードを取り出してパチュリーも構えることで応えた。

「私に勿体ないかどうか、試してみるんだな。はあ、調子が悪いから早く終わらせたい

わ

直後に弾幕が世界を彩った。

「綺麗」

フランドールの口から思わず感嘆が漏れ出ていた。確かに弾幕ごっこは綺麗だ。創設の理念を反映した結果なのだろう。美しさと思念を競う信念の争い。

パチュリーが大量の弾幕を展開している。彼女を中心に赤色の弾幕が全方位へ放たれる。追加だとさらに青色のレーザーが4本展開された。無数に展開される弾幕の奥より四本のレーザーが空間を薙ぎ払いながら少女へ迫る。

「ああ、綺麗だね」

少女もそれに負けじと星形とミサイル型の弾幕を放っていた。弾幕同士がぶつかり合い、はじけて光の粒子となった。煌めく光はまるで夜空に浮かぶ星々のように明滅していた。

生み出される弾幕で天井はもはや見えなかった。濃密な弾幕を維持しながらパチュリーは時折自らの弾幕をすり抜けてくる少女の魔力弾をゆったりと躲す。

対照的に少女は跨る箒を自在に操り縦横無尽に空中を駆け巡る。奔り抜けた少女の軌跡からパチュリー目がけて弾幕が打ち返される。

太陽と流星群のようであった。無数の煌めきが、輝きが、生まれては消え、そしてま

た生まれる。

「……凄い……」「……ふあ……」

感嘆が漏れる。言葉が出ない。

「あぁッ！ くそッ！」

押され気味の戦況に少女が苛立ち交じりの声を上げた。苛立ちの相手は自分自身。向上心の強い少女は押されつばなしの自身の実力が齒がゆいのだ。

眼前の相手に対抗しようと少女も白色のレーザーを放つもパチュリーの出すレーザーとぶつかり踏みつぶされた。

少女が懐からカードを一枚取り出す。爛々と輝く瞳が少女の不屈の精神を表していた。

「魔符・スターダストレヴァリエ!!」

決意を胸に、思念をカードに少女は叫ぶ。掲げたカードが輝き弾ける。四散した光が少女に集まりその身へ宿る。輝きを宿した少女が空に光の軌跡を描き、一条の流星が生まれた。

空を疾走する少女の箒の先端がパチュリーへと向けられた。力が高まっていくのがわかる。自ら光る星のように輝きが強くなる。

「余裕ッ、こいてんじゃ、ねエ!!」

咆哮のような叫びと共に少女が突撃した。自身に向かつてくる弾幕はその身に宿る魔力の奔流にぶつかると拮抗する事無く消えていく。

少女が駆け抜けた場所には箒の房の部分から生成された大きな星形弾幕が浮いていた。いくつもの星形弾幕が宙を埋めるように広がっていき、パチュリーの生み出した弾幕を圧壊させていく。

パチュリーは己の弾幕を引き潰しながら迫ってくる少女に気が付いた。だが完全に回避するには少し遅かった。咄嗟に身体を直線状から外す。

少女本人による突撃は回避した。けれども少女の弾幕が彼女の軌跡にもその跡を残すのだ。一拍遅れて発生した星形弾幕がパチュリーに牙をむく。

迫りくる弾幕の奔流にパチュリーの飛翔速度が加速する。右へ左へ、上へ下へとめまぐるしくそれでいて激しく揺れ動いていた。

回避に専念したことでパチュリーの放っていた弾幕の圧が目に見えて弱まる。千載一遇の隙を逃すほど少女は甘くない。速度故に小回りが利かない。それでも大きく旋回しながら飛び、再び突撃体勢へ入った。

大仰な機動にパチュリーは二度も見落とす愚を犯さなかった。格下だと侮っていた慢心が薄れゆく。視線が僅かに熱を帯びた。一枚のカードを掲げ告げる。

「金符・メタルファティーン」

激しい動の少女と異なり、静かで重々しい宣言。弾幕同士の衝突音で掻き消えてもおかしくない程に小さな声は不思議と図書館内全体へと浸透した。

掲げたカードが光を放つ。散った光をその身に宿し、輝くパチュリーが再び弾幕を放ち制空権を掌握する。パチュリーを起点に八つの光が生まれる。

弾幕が宿す光はどこか金属的な光沢のある光であった。放たれた弾幕が八方に散り、一定の距離でまた同じ大きさの八つのたまに別れて散る。何度も何度も弾幕は分裂を繰り返し、やがて視界全てを埋め尽くすほどにその数を増やす。

空間を埋め尽くす弾幕を少女はその身に宿す光で消し去りながら飛翔していた。だがパチュリーの弾幕に触れるたびに、少女の身にまとう光が、魔力が引きはがされていく。星形の弾幕がパチュリーの生み出した弾幕に消されていく。

やがて身にまとう光が完全に消え去ると少女は突撃を諦め、距離を開けながら回避行動へ移行していく。

「涼介さんに妹様、こちらにいらしてたんですね」

弾幕に魅入っていた涼介とフランドールの二人へ背後から声がかけられた。二人して振りかえれば本棚の影から小悪魔が顔を出していた。残念ながらも、当然ながらなのか不明であるが顔の落書きは綺麗になくなっていった。

「ああ、小悪魔無事だったんだね」

「やつほー、こあ」

「いえいえ、無事ではありませんでした。乙女の心はズタズタですよ!」

小悪魔の主張に何事も無かったようであん心したと涼介は安堵していた。落書きの件はご愛嬌だ。フランドールが拾った会話の中でも笑われたことは示唆されていたので改めて驚くほどのことでも無かったといえる。そしてそれは涼介だけでなく、フランドールにもたような考えだったらしい。

「好評だったと聞いているよ」「先生の教えが素晴らしかったって言っていたわ」

「もう、反省していませんね!!」

「ごめんごめん」

「反省してまーす」

「まったく……って、パチュリー様?」

小悪魔の声に反応して二人の視線も弾幕合戦の場へ戻った。先ほどパチュリーが放っていたスペルは終了していた。

今は互いが距離を話して空中で対峙している。パチュリーが僅かだけ少女より高い位置へ陣取っていた。

あれほど濃密に展開されていた弾幕が存在しなかった。勝敗が付いたのかと一瞬考えたが、戦意を失っていない二人の姿がその考えを否定している。

パチュリーは疲労しているのか息が荒く肩が大きく揺れ動いている。それを隙と見たのか少女がカードを構えた。すかさずパチュリーもカードを掲げる。

同時にカードが輝き弾け飛んだ。お互いに光が宿り魔力の奔流が身体の内から吹き出す。

パチュリーの足元に巨大な五芒星の魔法陣が姿を現してゆつくりと自転を開始した。対する少女の目の前には等身大の六芒星が現れた。

六芒星に手をかざす少女と頭上へ両手を掲げるパチュリー。それぞれの手先に魔力が淡い光の筋となり集約されていく。それは徐々に輝きを増していく。それは徐々に大きさを増していく。

輝く光は絶えず揺らめき色を変え続けていた。肥大化する明かりは赤熱した恒星のように爛々と燃え盛る。

虹を掴む少女と太陽を戴くパチュリー。お互いが自らの敵対者を見据える。敵を落とせと自身の魔法へ主人は命ずる。

「日符・ロイヤルフレア!」「恋符・マスタースパアアアーク!!!」

太陽が落ち、虹が登る。まさに幻想そのもの。現実では決して起こり得ない、起こし得ない奇跡の光景。たった三人の観客は息をすることも忘れ目の前の光景に魅入られていた。

速度は虹の閃光が優っていた。二つの力の激闘は互いの中心よりわずかにパチュリーに近い位置であった。

「ぜえ……くう……ひゆう……くつ」「つ、あああああ!!」

だが力はパチュリーが優っていた。太陽が徐々に虹の閃光を押し込めていく。じりじりと、しかし確実に少女の輝きが飲み込まれていく。

パチュリーの不規則な呼吸音と少女の裂帛の咆哮が二人の本気を物語っていた。

中間を超えてなおも太陽が突き進む。七色の光が一回りその大きさを縮小した。このままパチュリーが押し込む。見るもの全てが同じ結末を予測した。

けれども予測は裏切られる。あとわずか。だがわずかな距離を押し切るよりも早く太陽は一瞬でかき消え霧散した。

障害となるものが消え去ったことにより光が疾る。最初と比べれば随分と細くなり頼りないが未だに消えず、宿した魔力も力も健在だ。

目の前の相対者を落とさんと虹の光が宙を貫く。

「パチュリーさまあ!!」「危ない、パチュリー!!」

小悪魔とフランドールの悲鳴のような叫びが大図書館に響いた。突然の声に驚いたのか閃光を打ち出す少女の意識が僅かに逸れた。

首元を手で押さえ苦しげに顔を歪めるパチュリーはわずかに身体をずらして直撃を

避けた。少女が意識をわずかに逸らしたことが幸いして虹の光が躲したパチュリーを追従することはなかった。けれども閃光の周囲を漂う収束しきれなかった魔力の余波がふらつく。パチュリーの身体を揺さぶった。

ふいにパチュリーの身体から力が抜けて落下を始めた。少女は突然のことに固まっていた。涼介は気がついたらすでに走り出していた。

大図書館を駆ける涼介の頭上を黒い影が追い抜いていく。初めて見た小悪魔の鬼気迫る表情に主従の絆が垣間見えた。

「小悪魔！ 抱き留めたらこっちに連れてきてくれ!! 私は何とかする!!!」

「はい!!」

自らの主人の危機にいち早く駆けつけた小悪魔が未だ自由落下を続けるパチュリーを抱きとめる。

少女が事態の進展に困惑していると分かるが、いまは気を割く余裕が彼らにはなかった。小悪魔がパチュリーを抱えて地面に降り立つ。

「涼介さん、パチュリー様を!!」

間近で見ればパチュリーが変調をきたしていることが一目でわかった。顔に血の気がなく呼吸がスムーズに行えていない。

「彼女は何か持病でもあるのか!?!」

「喘息を患っておられます」

原因不明の突発的なことではないことを祈り問いを投げかければすぐさま小悪魔が答えた。受けた返答に何とかできるかもしれないと希望を見出す。

「薬があれば持つてきてくれ。無ければないで構わない」

「すぐに持つてきます」

すぐさま涼介は小悪魔に託されたパチュリーを座らせる。頭を自身の肩に寄せ、体重を自らに預けさせてわずかでも身体から力を抜けやすくさせる。

フランドールも涼介の背中から離れてすぐ後ろで心配そうにパチュリーを見つめていた。

涼介は己の内の能力に意識を向ける。抱きとめているパチュリーの背中をさすりながら、呼吸が出来ずに強張りきっている身体の力を抜く。喘息は副交感神経が緊張状態で起きやすい。緊張とは張り詰めて高ぶっている状態だ。

高ぶりを落として心身ともに落ち着けていく。気管支に発生している強張りから起こる筋肉の収縮も、緊張が解かれ筋肉の力を落とされて気道が通る。塞がっていた気管支が元に戻りパチュリーの呼吸が平時のそれに戻った。

息がほとんど吸えなかった大きな発作から小さな発作へと症状が緩和されていく。時間をかければ完全に落ち着くところまで持つていけるが今はその必要はない。

忠実なる魔女の従者が戻ってきたからだ。

「パチュリー様、お薬です！」

文字通り飛んで戻ってきた小悪魔がパチュリーへ吸入器を渡す。吸入器と行使され続けている能力が合わさりみると喘息が収まっていった。青ざめていた顔色へ生氣が徐々に戻っていく。フランドールも安心したのか再び涼介の背中へ張り付いた。

「調子が悪いなら無理はしない方がいいよ」

「小悪魔が笑わせるからよ。始める前にすでに軽く発作が起きて調子が悪いとかの話ではなかったわ」

苦言を呈する涼介へパチュリーが非難めいた視線で言葉を返す。どうやら元を正せば涼介とフランドールが原因らしい。フランドールも涼介と同じ結論へ至ったらしく、二人が顔を見合わせた。

考えていることもこれからやろうとすることも同じらしいとお互いに察した。悪いことをしたらどうするかなど考えるまでもなく決まっている。

二人の言葉が一言一句一致する。

「ごめんなさい」

「まったく、気を付けてくださいね」

おい、小悪魔。お前も原因の側だからな

注意なさいとでも言いたげに、パチュリィではなく小悪魔が言葉を返してきた。腰に手を当て次はないですよなどと面の皮厚く嘯く小悪魔に。パチュリィも苦笑いをこぼすだけだ。

しかし何はともあれ大事に至らなくて良かったと涼介は目の前の暖かな光景に安堵した。

集う者たちに供する八杯目

「おいおい、これは結局どういふことなんだ、涼介」

「魔理沙、こんなところで何をしてるんだい」

容体の安定したパチュリーにホツとしたのも束の間、背後から声がかかる。涼介にとつては見知った相手だ。

霊夢の友人で時折店にもやってくる、普通の魔法使いこと霧雨魔理沙だ。

しかし、なぜ彼女がこんなところにいるのだろうかと疑問が浮かぶ。

彼女の本職は一応霧雨魔法店という何でも屋のはずだと思いつく。

異変の解決の依頼でも来たのだろうかと思ふ。

「あなタが……」

涼介の背中から不穏な気配がゆらりと立ち上るのがわかる。

左肩から飛び出ているフランドールの頭を右手でグツと抑え首元に近づける。

涼介の意図を察して、フランドールはちゅうちゅうと吸血を始める。

「……おいおい、まさかそいつ、吸血鬼か？」

「そうだよ」

「いやなお前さん、そうだよ、じゃなくてな……なんで血を吸われて平然としてるんだよ」

「まあ、色々あつて」

「色々つて、はあ、訳がわからないぜ」

そう言つて涼介に答える気がないと解つたのかため息をつき、やれやれとでもいう様にかぶりを振る。

「確か、吸血鬼つてのは身体を霧に変えられるんだよな。て、事はそいつが異変の元凶か？」

「違う違う。異変を起こしたのはこの子のお姉さんだよ」

「なるほど、異変の元凶の身内か。いいぜ」

何がいいのかわからないがカードを構えて臨戦態勢をとるのをやめてほしいと涼介は切実に思う。

加えて言うならこの子はスペルカードルールを知らないから弾幕戦になったら魔理沙が危ないとも思う。

だからこそ、涼介は諫める言葉を魔理沙にかける。

「魔理沙、この子はやらないよ」

「なんでだよ、異変の犯人の身内なんだから？」

「私とこの子は見学組さ」

「異変にそんなのあるのかよ」

「ここにあるじゃないか」

「釈然としないぜ」

そう言いながらもカードをしまう魔理沙に対し涼介はこの子はなんだかんだと話のわかる子だと笑顔を浮かべる。

「ああ、そうだ。魔理沙」

言い忘れる前に注意をしておかないと、と涼介は言葉が続ける。

「なんだ？」

「さっきのスペルカード戦は凄く綺麗だったよ」

「そういえば、そいつ大丈夫なのか？」

涼介の背後にいる、随分と楽そうになったパチュリーの事を聞いてくる。

「もう大丈夫だよ。魔理沙がなんでも熱心で真剣に取り組むのは良いことだと思うよ。でも、もう少し周りを見る余裕を持たないと。途中から彼女の様子がおかしかった事に気がつけてなかったね」

「それは、そうだけど。弾幕の中でそこまで余裕は持つのは難しいよ」

「ん、それもそうだね。だから、それは仕方ない事でもある。だけど、最後に彼女が墜ち

始めてから君は動けていなかった。魔理沙なら追いついて受け止められたよね」

「……ああ、そうだな」

「でも、君はできなかつた」

責める様な口ぶりになってしまつて悪いとは思うけど最後までどうか聞いてほしい、と内心の苦々しい思いに蓋をしながらも続ける。

「たぶん、驚いてしまつたから動けなかつたと思うんだ。スペルカード戦は、弾幕ごっこは美しさを競う遊びでもあるからね。遊びでもあるからこそ、危険であることを、魔理沙、君は忘れてしまつている」

魔理沙の視線が床に落ちる。フランドールの吸血は止まっているが首にはまだ噛み付いたままだ。

傷口からにじむ血を舐めるのは擦りたいから控えてほしいがそれは後においておこうと涼介はフランドールの行いを注意しない。

それはフランドールも涼介の言葉に耳を傾けているからだ。

フランドールがスペルカード戦のルールを覚えた後にまた、言つても良いがせっかくパチュリーが身を挺して手本を示してくれたのだ。

今伝えるべきだと考える。だから話の腰を折らずに続ける。

「遊びであるからこそ、危険がないと思つてしまつた。だから、咄嗟の時に動けないん

だ。弾幕だつてスペルカード戦用に威力を落としてあるのかもしれない。でも、当たり前によつては気絶するかもしれないし。頭が揺れて飛行が維持できないかもしれない」

「魔理沙の視線が持ち上がる。魔理沙は努力家で頭も良い。涼介の言いたいことを察したのでろう。」

「だからこそ、危険があることを忘れずにいて欲しい。また今回みたいなことが起こるかもしれない。次はまた別な危険があるかもしれない。そんな時に咄嗟に動けるようにしっかりと覚えておいて欲しいんだ。説教くさくなつてしまつてごめんね。だけど、魔理沙の弾幕は凄く綺麗なんだ。まるで、夜空にきらめく星々のように、見ている者達が魅せられる。そんな君の弾幕を血で汚してしまふような事は避けたかったんだ」

「いいや、言つてもらえて良かったぜ。最近霊夢としかやつてなかつたから忘れてたぜ。おかげで、スペルカード戦を始めた頃には持つていた危機感を思い出せた。感謝するぜ」

「そう言いながら、魔理沙ははにかむ。素直な良い子だ。霖之助の育て方というか、接し方が良かったのだらうと涼介は思う。」

「今度、霖之助には何かしらの形で感謝を表しておこうと心のメモ帳に記しておく。」

「妹様も、今の涼介の言葉を覚えておきなさい。貴女がいずれスペルカード戦を行う上

で知っておかなければならないことよ」

パチュリーが立ち上がり涼介の隣に並ぶとフランドールへ話す。フランドールもコクリと頷く事で理解を示す。

「えつと、あんた、さつきはすまなかつた。その使い魔や涼介のおかげで大事にはならなかつたけど、それで良いとは言えない。だから、ごめん！ それとさつきの勝負は私の負けだ。あんたが万全ならあのまま押し切られていた」

魔理沙が素晴らしい、頭をさげる。パチュリーが魔理沙に近づき言葉をかける。

「いいえ、あの勝負は私の負けよ。体調管理ができていないのは私の責任。それに、墜ちたのだから、体調が悪化してきた時点で降参しなかつた私の自業自得だわ。観客がいたから良い所を見せようとした私のミスよ。慣れない事はするものではないわね」

パチュリーが涼介たちを見て苦笑いをする。どのタイミングかは解らないが観戦していた事はパチュリーにバレていたらしい。誠にもって、よく気の付く魔女だと感心する。

「いいや、私の負けだ！ あんなの運で拾ったようなものだ。しかもそれが相手の不調だ」

「運も実力のうちよ。あの勝負は貴女がどう言おうと、私の負けよ。納得できないのなら努力なさい。それに、貴女は魔法を使つていてもただの人間なの。人外と戦うのなら

したたかになりなさい。相手の弱い所を、苦手な所を責めるのは戦略よ。だから、胸を張りなさい」

「……次は絶対、万全なあんたに勝つ」

魔理沙はそう言う顔を見られたくないのか、かぶっている帽子のつばを下げ、表情を隠す。

「いつでも来なさい。それとこの本、あげられはしないけど貸し出しはしてあげる。精進するといいわ」

魔理沙から返事は出ない。少しだけふてくされてくされている雰囲気を感じる。頭では納得できても感情では納得できていないのだろう。

「パチュリーはやっぱり親切だな」

「ただのお節介よ。まだ、殻も取れないような雛を見て手を出したくなっただけよ」

「いつかその余裕、無くさせてやるからな」

「あら、それは楽しみね」

魔理沙の憎まれ口にパチュリーは、笑みを浮かべて応える。

「さて、魔理沙は一人でここに来たのか？」

話が一区切りついたのを察し涼介は話題を切り替える。

「んにゃ、霊夢も来てるはずだぜ」

「という事はもう一つの音は霊夢だったのか、フランまだ音が聞こえるかい？」

図書館に入ってから、もう一つの音は、涼介には拾えていない。

「ううん、少し前に聞こえなくなった」

「なるほど。でもまだ赤い霧がなくなっていないから、異変の解決はしていないみたいだ。ここみたいに他の誰かと戦って勝ったんだろう」

「あら、その霊夢って子が勝っているのは疑わないのね」

「あー、まあね。流石は博麗の巫女って感じだよ」

「霊夢が負ける姿は想像できないぜ」

「そこまで言わせるほどのね」

「勝ってる姿が思い浮かぶというより、負けている姿が想像できないって感じかな」

「分かるような分からないような話ね」

「見るのが一番早いかな」

「そうだな、口で説明するのは難しいものがあるぜ」

涼介と魔理沙の言葉に、パチュリーは頭をひねるが、二人は考えるだけ無駄であると思っている。

霊夢のなんというか、万物からも浮いたような超然したさまは口で伝えるのは難しいと思ひ涼介は口を濁す。

「というか、魔理沙はいかなくて良いのか？ 霊夢に先を越されるかもしれないぞ」

「ああ、良いんだ、私は。そのパチュリーって奴にどんな形でも勝ちを勝ちつて言われたけど、やっぱり私の中では消化不良だ。だから、私の中では今回はここまで」

「そっか。それじゃあどうするんだい？」

「どうやら異変には、犯人側と解決人側以外にもう一つ派閥があるらしい」

「なるほど」

「というわけで、ここから先は私も見学組さ。早速、霊夢の見学に行こうぜ」

そう言って頭の後ろで手を組んで、へへっと笑う魔理沙は相も変わらず、たくましい限りである。

そんなやり取りの後、善は急げというように霊夢がいるであろう所を探すために移動を開始する。

涼介を仲介人として、それぞれの自己紹介を移動しながら簡単にすませる。

フランドール、パチュリー、小悪魔、魔理沙にそして涼介と中々の大所帯だ。見学組五名、四名分の足音が廊下に響く。

「んで、結局なんで涼介がここにいるのかは教えてくれないのか？」

「別に構わないよ。出張営業をして欲しいって言われてね。ほら、吸血鬼だと太陽が出ている時間に店に来られないだろう」

「あー、なるほど。て事は頼めば出張営業してくれるのか。今度はウチにも頼むぜ」

「ツケを払ってくれたら喜んで行くよ」

「それもツケといてくれよ」

「まったく……ああそうだ。霧雨魔法店に依頼でもしようかな」

「この流れでの依頼の話なんてぞつとしないな」

ふと思いついたことがあるのでお願いしようと涼介は魔理沙に話を振る。

ツケを盾にとるのは心苦しいが、魔理沙としてもツケが消えるのは嬉しいだろう。

言葉では嫌そうにするが、その声は明るい。

「なに、たいしたことじゃないよ。フランがスペルカード戦のルールを覚えたら一度遊んでやってくれないか？飛べもしなけりや、弾も撃てない私ではどうあがいても遊べないからな」

「んー、なるほど構わないぜ。というか、遊ぶだけじゃなくて、私がティーチングしてもいいぜ」

「それには及ばないよ。ティーチングはフランのお姉さんに頼む予定だから」

「お、お兄ちゃん!？」

「いい考えね」

涼介の言葉にフレンドールが驚き、声を上げる。襟をひくな襟を首が絞まる、と涼介は心の中で叫ぶ。

パチュリーは賛同の意を示してくれる。そして、フレンドールのそんな様子に魔理沙が反応する。

「なんだ、姉妹仲が悪いのか？」

「ちよつとすれ違いがあるだけさ。すぐに仲直りするから問題ないよ」

「まあ、なんでもいいさ。その時が来たら声をかけてくれよ」

「了解」

先ほどからフレンドールが異議を示すように涼介の服をつかみながら体をユツサユツサと揺らしている。

しかし、言葉で拒否を示さない時点で強い拒否ではない。沈黙は肯定と同義とはまさに至言である。

ひとまず、最初にこの館の当主であるフレンドールの姉と出会った部屋へと向かっている。

「しかし、この屋敷ちと広すぎないか？」

「家には空間をいじるのが好きな人がいるのよ」

「なんだそりゃ」

パチュリーと魔理沙の話に耳を傾ける。空間をいじるといふ単語に涼介の耳が反応する。瞬間移動していたから侍女の事かもしれないと思いがめぐる。

先ほどから、不安ゆえに落ち着きのないフランドールを落ち着けるように涼介は少し能力を強めに意識しながら歩く。

「というか、なんだこの大量のナイフ」

「この屋敷を大きくしている人の持ち物よ。廊下で戦っていたみたいね」

「霊夢がここで戦っていたのか」

涼介の視線の先で蹲る様に俯いている、銀髪に所々焦げたり、破れたメイド服を着ている侍女を見つけた。

何があったのかわからないが肩が震えている様子からして、もしかしたら泣いているのかもしれないと感じる。

無言で全員が視線を合わせる。パチュリーと小悪魔が彼女に近づく。涼介とフランドールそれと魔理沙は、パチュリーの魔法で姿を隠される。

「咲夜。何を蹲っているのかしら」

パチュリーの声に反応し、体がビクンと跳ねる。

「貴女、最近少し変よ。何をそんなに思いつめているの？」

静かな廊下に侍女のハツと息をのむ音が響く。床につけられている手からは音が出るくらい強く握られる。強く握り絞めているため爪が肌に食い込みうつすらと赤い雫がにじみ出る。

「わ、わたしは……」

血を吐くような、絞り出された声がある。声が震えているのが聞く者全てにわかる。

「完全で……なければ、ならないの、です」

「そう？　だから博霊の巫女に負けたのが悔しいのね」

伏せたままの顔を振り、腕の間に挟まる頭が振れる。

「……負けたのは確かに悔しかったです。でも違う、そうではないのです」

「何が違うのかしら？」

話していて少しは落ち着いたのか、言葉は詰まることなく紡がれる。しかし、そこに込められる感情は悲しげだ。

「私はあの人を見殺し、に……違う……違う!!」

吐き出されるそれは、怒声である。

「私が殺したんだ！　私が自分で!!　殺したんだ!!」

「咲夜……」

先ほどの静かな受け答えは、感情の爆発する前の静けさだったようだ。彼女が顔を、

丸めていた背中を勢いよく伸ばし、上体が持ち上がる。その瞳からハラハラと涙が流れる。

「名前も知らないあの人を私は殺したのだ！ お嬢様のメイドであるために！ お嬢様の完全で瀟洒なメイドであるために私はあの人を殺したのだ!!」

彼女の叫びが廊下に響く。それは懺悔の様であり、助けを求める悲鳴の様でもある。涙は、止まらない。

「だからこそ私は完全でなければならぬ!」

完全でなければならぬのだと叫ぶ。まるで自分に言い聞かせている様に感じる。

「それがッ、今は亡き名前も知らないあの人に対して私のできるたった一つの贖罪だから!!」

喉が裂けんばかりに吠える。しかし、また頭が否定を示すがごとく横に振られる。

「いや、贖罪なの？ 自分を、この罪悪感を誤魔化す為に……自分を偽るために、そうだろうとしているだけなのかもしれない」

彼女の瞳はひどく虚ろだ。パチュリーは応えない。

「でも、だってそうでないなら……そうで在らないと……私は……私が完全であるために、見捨てたのに……私が完全でないのだとしたら、私はいったい何のために……なん、のために……あの人を殺したの」

言葉がなくなる。再び蹲ると、あとはただ押し殺した泣き声が聞こえる。
「う、うつ……ひつぐ……うう……」

ここまで侍女へ涼介に対して安心感を、親近感を持たせていたとは想像もしていなかった。涼介の能力と彼女の相性が異常なほどによかったのだろう。

だから、こんなにも彼女は心が壊れそうなほど苦しんでいるのだ。

涼介はその彼女の姿に、失ったあの娘の姿が思い出される。涼介の胸が軋む様に締め付けられる。

自らの能力は、心ガイアックに作用する力なんてモノは、碌なことがないと再度強く認識する。

「咲夜」

パチユリーが話しかける。

「私は貴女に謝らなければならぬことがあるみたいね」

侍女は応えない。

「私は貴女に伝えたわね。あの客はダメだったわ。でも、妹様のフラストレーションは発散されただろうから、異変の間は安心ね、と。」

侍女がさらに小さく縮こまろうと、体を丸める。聞きたくないと示すように伏せたままの首が振られる。

「でも、本当は違うのよ」

え、と聞き間違えたかと思うほど小さな声にする。

「彼は生きているわ」

顔がゆつくりと持ち上げられる。

「うそ、です。やめて、ください。そんな、うそ」

声が、震えている。

「いいえ、嘘ではないわ」

「うそです。うそそうそうそ!! だって彼は飛ぶことさえ叶わ」

「今証拠を見せてあげる」

パチュリーが彼女の声を遮る。

「よく見なさい。これが真実よ」

涼介たちの姿を消している魔法が解かれる。侍女の瞳が零れそうなほど大きく見開かれる。驚きで呼吸が止まっている。口がパクパクと言葉にならない驚きを表している。

まだ、目の前の光景が信じられないのか、瞳がゆれ、手を伸ばそうとしては引つ込める。そんな彼女に微笑みかけて、涼介は声をかける。

「紅茶の御嬢さん、あなたの名前を教えてください？」

息をのむ音が聞こえる。侍女の思考が驚愕によりほとんど働いていない。問いかけ

に対し、簡潔な答えが返される。

「さくや。十六夜、咲夜」

「いい名前だね、咲夜。私の名前は白木涼介。」

「しら、き。りよう、すけ。涼介、さん」

「なんだい、咲夜？」

「わたし、涼介さんのことを」

「違うよ、咲夜。前にも言ったが君は何も悪くない。悪いのは私だよ」

違うと否定するために咲夜の首が振られる。

「私も大概だが、君も頑固そうだ。じゃあ、こうしようか」

きつとどちらも自分が悪いと言い続けて結論は出ないそう確信する。だから涼介は提案する。

「ここから、私たちの関係を新しく始めよう」

言葉の真意が理解できないのか、咲夜の顔に疑問が浮かぶ。そんな彼女に涼介は近づく。フランドールが気を使って、背中から降りる。

座り込む彼女のそばへ行くと、片膝をついて彼女の片手を涼介が両手で包む様にとる。

「『お初にお目にかかります』、私は白木涼介と言う者です。里の近くで喫茶店を営んで

おります。可憐な御嬢さん、私の友達になってくれませんか？」

涼介の顔を咲夜がじっと見つめる。握った掌が強く握り返される。意識を切り替えるためか、彼女が深呼吸する。

『初めまして』、私は十六夜咲夜と申します。ここ、紅魔館でメイド長をしております。ぜひ、私の初めての友達になってください」

そして、満面の笑顔が浮かべられる。もう悲痛な叫びも、瞳から流れ落ちる、心の欠片も存在しない。二人の関係は、今ここから始まるのだ。

異変の結末を見届けるための移動が再開する。見学組はここで新しい仲間を加える。見学組六名、五名分の足音が廊下に響く。

異変の結末に供する九杯目

咲夜が加わり、移動を再開してすぐに体が震えるほどの力の圧力を感じる。

「お姉様の魔力だ!!」

フランドールが力に反応して声をあげて外を見る。それに従うように涼介は窓に近づき外を見る。

他の面々もそれに倣うように窓際に近づき窓を開ける。赤い霧により深紅に染まっ
て見える満月が浮かぶ夜空に、赤い影が二つ浮かんでいる。

フランドールの姉である悪魔の当主と紅白の脇の空いた変形巫女服を着た博麗霊夢
だ。すでに弾幕ごっこが開始している。

霧で赤い中天が、夥しい数の大型の紅色弾幕でさらに赤く染まる。赤、朱、紅、緋、赫、
アカいということがゲシユタルト崩壊しそうだ。

「目がチカチカするぜ」

「あの紅白が博麗の巫女…」

「もう何が何だかわからないですね、パチュリー様」

「お嬢様……」

「わあ……わたしもやりたいなあ」

各々の感想が漏れ出る。涼介は赤に染まる空を見ながら霊夢も紅白色だから、ただでさえ弾幕で見づらいのにまるでウォーリーを探せみたいだと思う。

かろうじて目が慣れてくると、霊夢の姿を遠目に何とか見つけることが出来るようになってきた。霊夢の周りにぷかぷか浮かぶ陰陽玉のおかげでそれが霊夢とわかる。

周りが当然のように追えている事実には涼介は少しだけ悔しい。紅色弾幕に中型の青色弾幕までまかれ始める。

「なるほど、負ける姿が想像できない、の意味理解できたわ」

パチュリーが言葉が漏らす。視線の先では霊夢が、弾幕の奥にいる異変の吸血鬼に弾幕を打ち返している。

霊夢の動きはまるで風で揺れる木の葉の様に、風で飛ばされるタンポポの種のようにラリユラリとゆれる。

それは時にふわりと浮くように、それは時に風で煽られたように激しく動く。

前後左右に、上下を含めた三次元的な動きで迫りくる弾幕をすべて紙一重で避けていく。

霊夢に見えるのは弾幕と吸血鬼だけだろう。空も地面も弾幕の厚みで彼女には見えない。

弾幕に囲まれた世界ではきつと、どちらが天か、地面かさえ曖昧だ。

しかし、霊夢の動きに迷いはない。

「すごい、出口が解つてるみたい……」

フランドールの口から思わずといったようにこぼれる言葉。しかし、それがきつと一番真理に近い。

その言葉が一番的確にその様を表している。涼介は依然霊夢に聞いたことがある。君に迷いは見えないけど、出口でもわかるのかい、と。

そして、彼女は、それは勘だと、なんとなくだと言っていた。恐るべき勘ともいえるし、勘にすべて任せて動ける彼女の胆力にも脱帽する。

やはり、彼女は天才と言える存在なのだ。涼介は隣にいる魔理沙をちらりと見る。その顔が映し出す表情は、羨望と嫉妬だ。

吸血鬼の弾幕はパチュリーのそれよりも一層濃く、圧倒的だ。だからこそ、それと同等以上に戦える霊夢をうらやむと同時に、自分がそこに立つことが出来ないからこそ嫉妬を抱くのだ。

「もつと、もつと……強くなる……追いついてやる」

目の前の光景を目に焼き付けながら、普通の魔法使いは自身に誓いを立てる。きつと魔理沙はこれから先もつと強く、大きく成長していくと涼介は思う。

涼介は視線を空に戻す。霊夢が弾幕を潜り抜け、吸血鬼に手に持つ御幣で一撃を加える。

吸血鬼は体をひねり躲そうとするが、避けきれず御幣を左手で受け止める。霊力と魔力がぶつかり両者が反発する様に飛ばされる。

吸血鬼は手から流れる血をなめとる。一度なめるわずかな間で傷が塞がる。

「吸血鬼の不死性……」

すさまじい不死性ではないかと涼介は驚愕する。思い出せと自分の記憶に問い掛ける。

紫から吸血鬼についての話を聞いたはずだと。天狗の速度に、鬼の膂力そして首から下が無くなる怪我でも一晩で再生する不死性。

まさに怪物中の怪物、夜の王吸血鬼そう聞いたことを思い出す。吸血鬼がカードを取り出す。光輝きカードが弾け、吸血鬼が光を纏う。

「幼き、デーモンロード」

咲夜がスペル名を呟く。吸血鬼から全方位に向けて細い青色の線が走る。

さらに吸血鬼を中心に一定の間隔が離れた位置に中型の紫弾幕が球体を作る様に現れ、それから一本ずつ、細い青色の線が走る。

そして、吸血鬼自身から黄色の大玉と青色の中玉の弾幕が放たれる。弾幕が霊夢に迫

ると変化が起こる。

空に走っていた青い線が急激に太くなる。それはまさにレーザーで作られた檻の様だ。

レーザーで出来た格子に動きを制限された霊夢に、黄と青の弾幕が迫る。

霊夢が迎撃ではなっていた弾幕を止め、回避に専念していく。

その動きはひらりひらりとまるで舞でも踊っているようだ。

「頭の後ろにも上にも足の下にも目がついているみたいですよ」

小悪魔、その生き物はかなり不気味だと涼介は心の中で突っ込みを入れる。吸血鬼は移動しながらそのスペルを継続していく。

レーザーの檻が消えては、新しい檻が生まれそこに弾幕が殺到する。霊夢の回避が安定してくる。

反撃の弾幕が吸血鬼に向けて放たれる。弾幕ごっこは美しさを競う側面が存在するが故に、放たれるスペルには一定の法則が存在することが多い。

そして、霊夢はそれを把握し、適応するのがずば抜けて巧い。あたる姿が想像できない回避性能に、把握能力、だからこそ負ける姿が想像できないのだ。

吸血鬼の体から光が消える。スペルブレイクだ。霊夢がカードを掲げる。カードが光輝き弾け飛び、霊夢が纏う。

霊夢を中心に全方位に無数のお札が放たれる。あれはたしか

「夢符・封魔陣」

飛び交うお札が結界を描く様に空を覆い尽くしていく。そしてその札の結界は霊夢を中心にゆっくりと回り始める。

吸血鬼の放つ弾幕がお札の物量に押されていく。攻守が先ほどと逆転して、今度は吸血鬼が追い立てられる。

「お姉様、がんばれ……がんばれ」

「楽しそうねレミィ」

吸血鬼の身内から小さな応援が飛ぶ。涼介の視界からは表情までは見えないが楽しそうなのか、それは素敵なことだと思う。

そして、霊夢のスペルがブレイクされる。二人が距離を開け対峙する。同時にカードを掲げる。カードが弾け光を纏う。

吸血鬼からは無数のナイフ形の弾幕と、小さな楕円型の弾幕が放たれる。霊夢からは大量のお札が放たれる。

先ほどとは違い今度は赤と黄色のお札の2重奏だ。さらに小型の弾幕も放たれる。

「獄符・千本の針の山」「神技・八方鬼縛陣」

魔理沙と咲夜の声が重なる。小型の弾幕と小さな楕円の弾幕が、お札とナイフ形の弾

幕が、空の支配率を争うようにぶつかり合う。

両者がスペルを発動したまま高速で空を駆け巡るため、発射地点が移動する。そのため空の至る所で両者の弾幕がぶつかり合う。

霊夢も吸血鬼も、針の隙間を縫うように細かくそして、鋭く、飛翔する。

さすがに、濃密すぎる弾幕であるためか、霊夢の袖が、スカートが弾幕に掠り破れている。

吸血鬼も同じような状況だが、こちらは体にもあたっているようだ。しかし、それはすぐに再生する。

制空権の奪い合いの様な濃密な弾幕合戦が続く。次第にそれが弱まっていき、両者のスペルがブレイクする。

空に浮かぶ両者はいまだに余力がありそうだ。吸血鬼が腕を振ると、赤い槍の様な物が生まれる。

「グングニル……」

誰が呟いた声だろうか、目の前の光景に意識を奪われるあまり涼介にはわからない。

霊夢がそれに応えるように御幣に霊力を込めるのがわかる。霊力で覆われ光を放つ。

両者が同時に接近する。槍と、御幣を用いた接近戦だ。槍と御幣がぶつかり、霊夢が押し負け槍の勢いに流される。

元々の地力が違う、種族の差だ。

「霊夢、敗けるな」

霊夢はそれにひるむ様子を見せずに、再度突っ込む。先ほどの焼き直しの様に吸血鬼の振る槍を霊夢の御幣が受ける。

しかし、霊夢は飛ばされない。御幣を滑る様に槍がいなされる。弱い種であるがゆえに生まれた技術だ。

それは武術とも呼ばれるもの。吸血鬼は恵まれた能力が故に必要としない。その恵まれた能力を人間の積み重ねてきた英知が上回る。

超至近距離の格闘戦。ドッグファイト 霊夢が、槍を受け流しながら、距離を詰める。長物の槍の扱いにくい懐に潜り込もうとする。

そこまで行けば短い御幣を持つ霊夢が有利だ。それを察知しているからこそ吸血鬼はその筋力にものを言わせ、高速で槍をふるう。

振りおろし、横なぎ、袈裟懸け、そして突き。それを霊夢は受け流し、避け時に受け止め距離を離される。

しかし、少しずつ見極めているのか、何度も突き放されるが、突き放されるまでの時間がだんだんと伸びていく。

そして、吸血鬼が徐々に追い詰められていくのがわかる。あと数手で霊夢が追い詰め

る、見ている者たちが不思議と確信する。涼介の肩で大きく息を吸う気配がする。

「お姉様!! 頑張つて!!」

フランドールが姉へ思いのこもった声援を投げかける。しかし、それは悪手であった。ここに居るはずがない、最愛の妹の声であるがゆえに、一瞬気を取られる。

何物にもとらわれることがないゆえに、意識を逸らさない霊夢。その一瞬が明暗を分けた。霊夢の御幣が吸血鬼の腹に叩き込まれる。

体がくの字に折れ曲がる。引き抜いた御幣で、くの字に折れたからこそ前に突き出した顔を下から上へとかちあげる。

体が伸び、脳が揺れるからこそさらに隙が生まれる。霊夢が体を横に倒し、吸血鬼と合わせると十字の様になる。

そして、体を回転させ遠心力を乗せた御幣で、吸血鬼の顔面に殴りつける。吸血鬼の体が、下へと向かって飛ばされる。

「お姉様! お姉様!!」

フランドールの叫びが聞こえたのか吸血鬼の落下が徐々に止まる。完全に静止し、上空に位置する、霊夢に視線を向けると、彼女はすでにとどめの準備を終えていた。

「宝具・陰陽鬼神玉、か。容赦がないな」

「霊夢らしいぜ」

霊夢の周囲を浮かんでいた陰陽玉が、何十倍もの大きさに膨らんでいる。それが吸血鬼に向かって墮ちていく。

とつさに吸血鬼もカードを掲げ、はじけた光を身に纏うが間に合わない。直撃する。そしてそのまま、地上まで押され、吸血鬼の姿が地面と陰陽鬼神玉で挟まれ見えなくなる。

背中からフランドールが飛び出して、その場に向かう。そして遅れて咲夜が、魔理沙が飛び出していく。

残ったパチュリーと小悪魔に涼介が視線を向ける。

「パチュリー、私を運んでもらえるとうれしいのだが、お願いできるかい？」

「元からそのつもりで、飛んでいないわ」

「本当に君は親切な魔女だな」

涼介とパチュリーがたどり着くと、クレーターの中心に吸血鬼とフランドール、咲夜がいる。

クレーターの淵に魔理沙と霊夢が浮かんで中を見ながら話している。吸血鬼は挟まれた衝撃からか、気絶している。

外傷はないみたいだから問題ないと涼介は思う。涼介とパチュリー、小悪魔の三人はクレーターの淵に降り立つ。

「やあ、霊夢。異変解決おめでとう」

「あ、涼介さんじゃないこんなところにいたのね。お店に行ってもいないんだからちゃんといてくれないと困るじゃない」

「すまないね、色々と事情があつてね。埋め合わせはするよ」

「そ、ならないわ」

相変わらずタンパクな反応だ。しかし、その反応が心地いいと涼介は感じる。彼女は浮くことで涼介の能力から逃れているため、何も考えないで付き合える。

涼介にとって得難い人物だ。クレーターの中でフランドールが吸血鬼をゆすつて、呼びかけている。涼介も、斜面をおり彼女たちに近づいていく。吸血鬼が目を覚ましたようだ。

「フラン、どうしてここに？」

驚くほどに穏やかで優しい声だ。依然、一度見た人物と同じ生き物だと思えないと涼介は感じる。

「お姉様が心配でずっと見ていたのよ」

「ずっつとっ」

「はい、お嬢様。お嬢様があその紅白と、スペルカード戦を始めからずっと見ておられました」

「そう、なの？ フランあなた正気に」

「貴女様の妹君は、もうだいたいぶ落ち着かれておりますよ」

正気に戻ったなどと聞かれることが涼介にとっては腹立たしく、言葉を斬る様に話しかける。あれは正気に戻るではない、正気を知ったのだ。

誰も教えないから彼女はあれしか知らなかったのだ。だからその聞き方が涼介には許容できなかつた。

「お前は……」

驚愕が吸血鬼の顔に現れる。それはそうだ、招いた客は死んだとパチュリーに聞かされていたのだ。

「妹君を一度落ち着かせてから、ずっといろいろ教えておりました。落ち着いていてもすぐに、貴女様に合わせるのは互いに感情的になりすぎるかと思ひ、魔女殿に協力をしてもらい真実を隠しておりました」

「わたしを騙したのか」

向けられる殺気に涼介は寒気がする。身がすくむがここは引けない。

「必要なことでしたので」

吸血鬼から魔力が噴き出る。霊力の弱い涼介ではこれだけで殺されそうだ。濃密な魔力に吞まれ息ができなくなる。

ふらりと涼介の体がゆれ、膝を地面につく。消えそうな意識の中で、視界の端でフランドールと咲夜が狼狽えるのが見えるが首を横に振る。

大丈夫、ここには霊夢がいると涼介は友人を信頼する。体を押しつぶす魔力の圧力が消える。

「何しているのよ。私が見えるところでそんなこと許すと思っているの？」

うつすらと周囲に結界が張られているのが涼介に見える。自分の前に霊夢がたっている。

「ああ、助かるよ霊夢。埋め合わせはまた後日」

「まったくいい加減に危機感を持ちなさい。何度注意しても学ばないのは涼介さんだけよ」

「まったく面目次第もないな」

「はあ。治す気がないの、バレバレよ」

「これは習性だからなあ。それはそうと霊夢まだ彼女と話すことがあるからもうちよつと頼むよ」

それを聞くと霊夢は呆れた顔をした後何も言わずに涼介の前から退き、視線が吸血鬼

と再び合う。

「他者の力を借り、私と対等に話すというか。反吐が出るぞ、人間」

「力を借りることの何が悪いのかわかりません。人は一人では生きてはいけません。だからこそ、誰かとつながり助け合う。そして、それは貴女達妖怪だつてかわらない」

「私を、貴様らと同列で語るな。殺すぞ?」

「いいえ、語ります。それは何も力だけの話ではない。妖怪だつて生きて、ここに居て、話し合える。心がある。だからこそ一人では生きていけない。たった一人でいたら、孤独に押しつぶされる」

言葉の最後でフランドールを見る。

「だから、妖怪だつて他者とのつながりが必要なんだ。それは、妹とのつながりを求め続けたあなたならわかるはずだ。それにあなただつて自分ではどうにもできないから、別の方法を、他の誰かを探していたじゃないか」

「それは……」

凶星をつかれたからか言葉に詰まる吸血鬼。

「まあ、今はそんなことは良いのです。主題は貴女の妹さんです」

「そうだ、なぜ嘘などついた、パチエ!!」

涼介の横にいつの間にか来ていたパチユリーに吸血鬼が問いかける。

「それが一番解決に早かったからよ。あなた、妹の事となると冷静に判断できないでしょ」

「それは……だが、だからといって」

「レミイ、貴女の願いはなんだったの？妹との絆を取り戻すことでしょ？貴女が自分の力でどうにかしたいというのは不純物よ」

「ふじゅ——」

「いいじゃない。誰が妹を救つても。それが貴女を騙した人間でも。それで願いが叶うならあとは全部あなたのわがままよ。それにその嘘は必要な嘘だった。ならば、大妖怪としての、紅魔館の当主としての度量を見せなさい」

吸血鬼が言葉を発する暇を与えず、パチユリーが畳み掛ける。

「あと、あなたの妹を見なさい。不安そうな顔しているでしょう。大好きな姉と、孤独の戒めから助けてくれた人が仲たがいでいてどうすればいいのか解らなくて困惑しているのよ」

吸血鬼がフランドールを見る。フランドールは涼介と姉を交互に見て、何かを言おうとするも言葉が出てこない。

当たり前だと涼介は思う。こんな修羅場みたいな状況で、コミュニケーション歴二日のビギナーがうまくとりなすことはできない。

「貴女様の妹君は狂気に吞まれていたのではありません。それしか知らなかったのです。貴女様が狂気と呼ぶもの以外の感情表現を、他者との接し方を知らなかったのです。それが普通で、それが正気だったのです。ですが、私の力で破壊の衝動を抑え、多くの事を学びました。当たり前前に誰かに感謝する。当たり前前に誰かと遊び、喜び悔しがり気持ちを共有すること。不満があってもそれを我慢すること。誰かを気遣い、労わるということ。そして、知ったのです。私たちが正気と呼ぶ、他者との接し方を」

吸血鬼が絶句する。問題の根本を取り違えていたことに。そして、妹がどんな状況に置かれていたのかを。

「今はほとんど、前の様に何かを壊したいと思わなくなってきました。あと数日誰かとかかわる日常を過ごせばきつともう大丈夫でしょう。だから、お姉様である貴女様も、妹君のために協力していただけませんか、お願いします。そして、必要なこととはいえず、騙すような真似をして申し訳ありませんでした。だから、どうか貴女の力を貸してください!!」

涼介は土下座をする。必要なこととはいえ、こちらは一度騙しているのだ。だからこそ謝る。

そして、フランドールを助けるためにはこの吸血鬼と協力する必要がある。

ならば、こんな頭の一つや二つ涼介にとって惜しくない。

「レミイ、あなたは どうするの？ 一度騙したからと追いつきなり殺すなりするの？ それとも妹のために過去を水に流して協力できるの？」

吸血鬼がフランドールに抱きかかえられている体勢から立ち上がる。

「私は妹のためなら何でもできると思っていた。例えばそれが泥水だろうとすすって見せると。しかし、思いのほかそれは難しかったらしい。私のプライドが、人間を下等と見下すその意思がその決意を邪魔していたようだ。目が覚めたよ。私を打ち倒す者がいる人間がどうして下等であろうか。私の妹のために、利用し殺そうとした相手にすら頭を下げられる人間のどこが下等であろうか。」

フランドールに話しかけていた時の様に穏やかな声が聞こえる。その言葉は並んでいる涼介と霊夢に向けられたものだ。霊夢の結界はいつの間にか消えていた。

「人間……いや、名前を覚えてくれないか、恩人よ。そして、頭をあげてくれないか」

涼介は頭をあげて、視線を合わせる。吸血鬼の表情は穏やかだ。

「白木涼介と申します。ご当主様」

「レミリア・スカーレットだ。レミリアでいい」

「わかりました、レミリアさん」

「さて、涼介。私は妹のためにどうすればいい？」

穏やかながら、吸血鬼、レミリアの表情は緊張の色を見せる。妹を救うためなら何で

もしてみせるという気概が現れているのだ。

せつかくだからと、涼介は至極真剣な顔で、いかにも真面目くさった顔で、初めのお願いをする。

「では、まずは妹さんを目一杯可愛がってその愛情を示してください」

「ん？」

「人との基本的な接し方はだいたい覚えましたので、今度は家族に愛し愛されるそんなことを手に入れてもらおうかと考えております。それにわたしや小悪魔が相手でしたので力加減は完ぺきでしたが、やはり力いっぱい抱きしめたりもしたいでしょう。それを考えるとお姉様であるレミリアさんと触れ合うのが一番だということですよ」

レミリアの思考が停止したのか動く気配が見られない。フランドールはそんな姉を期待のこもった目で見上げている。

「馬鹿面さらしてないでしゃんとしなさい」

——いや、パチュリーさんちよいと厳しすぎやしないかね

その後、屋敷に戻り、レミリアとフランドールはレミリアの部屋でゆっくりと過ごす

ことになった。

感情が万が一高まった時は咲夜を呼び、涼介の入れたブラッドコーヒーを供することになった。

咲夜には時を操れる能力がある。なんだその最強の一角みたいな能力は、と涼介は思わないこともないが便利でいいな程度でとどめておくことにした。

異変の事後処理は、涼介とパチュリーが霊夢と魔理沙の二人と対談し、赤い霧はこれ以上出さない。

そして、今ある霧も魔力の供給を止めるから直に消えるということと今回の件は解決と相成った。

その後、魔理沙とパチュリーは大図書館に消えて、霊夢と涼介だけが残った。

「なんで、異変の首謀者側で折衝しているのよ」

「いや、本当になんでだろうね」

「はあ、これはお賽銭じゃあ足りないわね」

「お賽銭は入れに行くのも大変だからなあ」

「頑張りなさいよ、涼介さんまだ若いでしょ」

「いや、遠いからなあ。じゃあ、こうしようか」

「聞きましよう」

「お賽銭の代わりに、霊夢には一日一食提供しよう。もちろん料金は取らないよ。そうだね、内容は日替わりメニューと食後の珈琲とお茶請けのお菓子でどうだろう」

「期間は？」

「そうだね」

いったいどれくらいがいいのだろうかと涼介は考える。

しかし、よくよく考えてみると幻想郷があるのは霊夢が結界の管理をしてくれているからだ、ならばその感謝もここで示しておこうと決める。

それに、先ほども結界で命を助けてもらっている。というか涼介は霊夢に助けもらっている回数は片手では足りない。

それらを加味してと、考え答えを口にする。

「私が死ぬまででどうだろうか」

それに対して霊夢は珈琲を一口飲むと涼介に応える。

「意外と短そうね」

——いや、どうあがいてもこの条件以上の期間は存在しないぞ

紅魔な日々以供する十杯目

魔理沙が図書館から本を何冊か借り受けて戻つてくると、魔理沙と霊夢は帰つていく。

咲夜を通じ、レミリアから一泊する様に勧められていたが、二人とも拒否し帰路に付いた。

涼介はもうしばらくフランドールの様子を見たいために、館に残ることにした。

帰り際に外まで見送りに出たついでにそう伝えたら霊夢に、お賽銭は？ と聞かれる。

お賽銭は、店が開いている時だけで頼むよ、とお願ひすると仕方ないわねと許してもらえた。

「あ、お元氣みたいですわね」

涼介が館の玄関から空へと飛んでいく二人を見上げていると、前方から声がかかる。視線をやると、この館に来たときに出会った門番の少女だ。

中華服の様な全体的に淡い緑色の服に星の模様の入った帽子をかぶり、長身で赤い長髪をした気の良いお姉さんの様な風体をしている。

その彼女が格子状の門の向こうから手を振って自分の存在をアピールしている。最初に出会った時の様な作られた朗らかさは感じない。自然とその空気感に惹かれ足が進む。

「ええ、おかげさまで。帰りもお願いできそうです」

「あはは、だから言っただじやないですか。お任せくださいって」

調子がいいなど涼介は思わないでもないが、仕方ないなあと思わせ許してしまうのは目の前の少女が持つ柔和な雰囲気なのを涼介にも分かるが、ここまで危機感を感じない妖怪も珍しいと思った。

「最近咲夜さんの様子が少し変だったのですが、先ほど異変の終結を知らせてくれた時にはもう以前の様に。違いますね、異変を起こす前よりもずっと生き生きとしていました。あなたのおかげですかね？」

「さあ、どうでしょう。いろいろと肩の荷が下りたのかもしれないですね」

面と向かって改めて言われた涼介は少しだけ気恥ずかしくとぼけてしまう。しかし、彼女の表情はニヤニヤと微笑ましい物でも見るかのようにだ。居心地が悪いと感じ、つい言葉が口をつく。

「いじめっ子みたいな顔していますよ」

「あはは、ごめんなさい。実は咲夜さんから聞いていますのですよ。初めてお友達が出来たって」

「人が悪いですね」

「妖怪ですから」

「なるほど、納得ですね」

「です。私こう見えてとつても悪い妖怪ですよ？」

自然と笑いが零れる。そういえばと、彼女の名前を知らないことを涼介は思い出す。

「そういえば自己紹介もせずにすみません。白木涼介と申します、しばらくこちらで厄介になりますのでお見知りおきを」

「畏まりました。私は紅美鈴、美鈴で大丈夫ですよ、珈琲屋さん」

咲夜はいつたい何をどれだけ報告しているのだろうか、涼介は不安が頭をよぎる。

「美鈴さん、異変の最終報告と友達が出来た以外にも何か聞きましたか？」

美鈴は何も答えない。ただ楽しげに浮かべられた笑みがさらに深まっていく。

人の悪い柔和な妖怪、美鈴に翻弄されて涼介は逃げ帰る様に館に戻る。ひとまず、休もうと考えたがそこで休む部屋がないことに気が付く。

仕方ないと、大図書館に足を向ける。パチュリーは飲食も睡眠も不要な魔法使いという妖怪だ。

ならば、このまま夜明けまでそこにお邪魔しようと考えをまとめる。最悪大図書館の隅でも貸してもらえば眠ることも可能だろう。

それと彼女には今回世話になりっぱなしだ、お礼の一つでも改めて言わないといけない。廊下ではあちこちで妖精メイドが遊んでいる。

これは、中々に咲夜が大変そうだなと思う。そして、しばらく歩くと大図書館にたどり着く。

「パチュリーお邪魔するよ」

大図書館の少し奥に存在する机と椅子が並べられている空間に本の主は座していた。

「あら、いらつしやい。どうかしたかしら」

「いや、なに寝る場所がなくてね」

「ああ、それなら今咲夜を呼んで用意をさせるわ」

パチュリーはそういうとそばに控える小悪魔に指示を出そうとする。

その申し出は大変ありがたいが、まだ本題のお礼が言えていないから少しだけ待つてもらいたいと涼介は思い行動に移す。

時間がほしいことを示すために、指示を出すパチュリーに軽く手を振り拒否を示す。

それに対し、特に何を言うでなく、小悪魔に待機を支持する。本当に、よく気の利く魔女だと感心する。

「すまないね、せっかくの好意を」

「構わないわ、何か話があるのでしよう」

「話というほど大仰なことではないさ。ただ、パチュリーに改まってお礼を言っていないと思つてね」

「そんなことを気にしていたの？どちらかと言えばこちらが迷惑をかけたのだし、必要ないわよ。それに、私はただ必要と考えたことを行つたまでよ。あの時貴方を助けることで紅魔館が抱えている問題を一番スムーズに解決できた。貴方に協力することで恩が売れた。異変を起こし、幻想郷の一員として加わる。それであるなら外部に友好的な人物がいるのは、この先何かで役に立つ事もあるでしょうしね。だから、必要だと判断して助けたのよ。お礼なんていらさないから、恩義を感じてちょうだい」

パチュリーはそつけなくそういうが、隣で小悪魔がその姿をにまにまして見ているのに気が付いているのだろうかと涼介は疑問が浮かぶ。

「それでも助けられたことには変わらないさ。だから、本当にありがとうパチュリー。恩義もたつぷり感じているよ」

そう言い、涼介は笑みを浮かべる。それを見たパチュリーは一瞬きよんとした後苦

笑いを漏らす。隣に侍る小悪魔が笑顔を返してくれる。

「貴方、利用されやすそうね」

「それが誰かの助けになるなら構わないさ」

「難儀な性格ね」

「君に言われたくないな。お節介で親切な魔女さん」

涼介の言葉に対してやれやれとパチュリーはかぶりを振る。

「お節介で親切だなんて心外ね。せつかくだから魔女らしく対価でも要求しようかしら」

「何なりと」

パチュリーには涼介のその余裕が少しだけ気に入らない。パチュリーはむつとし、むきゆという可愛らしい唸り声をあげる。そして、意趣返しを思いつき綺麗な笑顔がその顔に刻まれる。

「それじゃあ遠慮なく。私これから徹夜で本を読むのよ。だから珈琲をお願いできるかしら。悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粋で、そして恋のように甘いそんな素敵な珈琲を」

ああ、どうやら少し調子に乗りすぎたらしいと涼介は自覚する。パチュリーが述べた言葉は、昔の偉人が残した理想の珈琲を形容するものだ。

「昨今でも素晴らしい珈琲を褒める際に使われることがある言葉。涼介は持てる限りで淹れる最高の一杯で満足いただけれるだろうかと不安がよぎる。」

「不安を胸に小悪魔にお湯を頼み、涼介は今できる最高のエスプレッソを入れる準備を始める。」

「涼介の淹れた一杯に対してのパチュリーの評価は、単位は出そうねという懐かしい物であった。落第は免れたようであるが、まだまだ精進の余地がある。」

「小悪魔の呼んできた咲夜に案内され、涼介にあてがわれる客室へと案内される。どことなく前を歩く彼女の足取りは弾んでいるのは涼介の思い込みではないのだろう。」

「咲夜さん、生き生きしていますね」

「へっ?」

「咲夜の足取りが少しだけ乱れる。すぐに持ち直すが、動揺したことは隠しきれない。」

「そ、そうですね?」

「そうですね。それに、門番の美鈴さんも同じことを言っていましたよ」

「え、え?美鈴ですか?」

「はい。先ほど霊夢たちを見送った時に会いまして色々言われました」

「は、え、い、色々ですか？ 具体的には？」

歩みが止まり、咲夜が振り返って顔を見合わせる。何を吹き込まれているか分からずに、焦っているのであろう咲夜はとても可愛らしい。

このまま困らせて反応を見るのもいいがあまりやりすぎるのもよくないだろうと思いい、これ以上の意地悪はやめておこうと決める。

他の館の住民に苛められたからと言って彼女に仕返しするのはいささか自分の器が小さいと言う物だと涼介は思う。

「冗談ですよ。美鈴さんは意地悪くニヤニヤ笑って匂わせるだけで、咲夜さんから何を聞いたか教えてくれませんでしたよ。散々からかわれて逃げてきました」

そう言い涼介が肩を竦め、ニヤリと笑ってみせるところからかわれたと咲夜は察した。口をパクパクとして啞然とする。

よく見れば顔色は普通だが、耳が少し赤くなっていることに涼介は気が付く。

「咲夜さん、耳真つ赤ですよ？」

「もう、知りません!!」

そういうと咲夜はスタスタと速足で歩き始めてしまう。耳を赤くして驚いている咲夜がいじらしく、やめるつもりでいたのについ言葉が口を出てしまった事を涼介は反省する。

彼女の足取りには先ほどまではあった涼介への気遣いがなく、怒りを表すようにタンツ、タンツと足音を立て強い足取りでどんどんと先に行ってしまう。

そんな彼女において行かれないように、駆け足で動きだし彼女にすがる様に謝罪をする。そんな追いかけっこが涼介の泊まる客室につくまで続くのであった。

客室の内装を軽く咲夜に説明され部屋の紹介が終わる。

「先ほどはすみませんでした、あまりに咲夜さんが素直で可愛らしかったのでついつい」
そういつて涼介は苦笑いをしてみせる。咲夜はこれ見よがしに大きいため息をついて見せる。

「またそうやって……はあ。反省していますか？」

「しています、しています。今後は控えます」

「やめないと言わない当たり反省はしているみたいですけど、その程は薄そうですね」
「まあ、友達ならではのやり取りと言うものだね」

「友達ならでは、ですか。ふふ、いいですね。それでは私も涼介さんのダメな所を見つけたらからかつちやいますね」

そう碎けた言葉で笑う咲夜はとても美しかった。

足掻いてよかったと涼介は本当にそう思う。

あの時廊下で見た彼女が思い出される。

泣きさげび、悔悟につぶされ、壊れそうだった彼女の姿が脳裏をよぎる。

「ん？どうされました、涼介さん」

思い出された記憶に一瞬顔をしかめた涼介のその表情を咲夜はとらえ、彼女は心配そうな様子で涼介の顔を覗き込んでくる。

息がかかるほど近くに二人の顔がある。突然現れた彼女の顔が涼介の眼前の光景をうめる。とつさの出来事に涼介は脳の処理が止まる。

——咲夜さん、睫毛も銀髪なんですわね

そんな馬鹿な事を反射的に涼介は考えながらも咲夜の顔を見つめ続ける。瞳は蒼色で、海のようにどこまでも吸い込まれそうなほど深く澄んでいる。

僅かに開かれた血色の良い薄く小ぶりの唇がかもし出す得も言われぬ色気。それら全てに魅了されクラリと来る。

「さ、咲夜さん！顔、顔が近いです!!」

涼介は慌てて咲夜から後退り離れる。彼は自らのうちに生まれた欲情の種火を能力

で鎮火する。きつと、自分の顔は赤いだらうと容易に察する。

そのことが気恥ずかしくて片手で口元を隠すように覆う。彼女は涼介が初めての友達と言っていた。そしてこの館には男性の姿が見えなかった。

だから異性との距離感が近く、警戒心が薄いのだ。涼介は咲夜の無防備さに対し心臓に悪すぎると言わざるを得ない。

「急に慌ててどうしたのですか？それに真っ赤ですよ？」

無防備が過ぎるだらうと咄嗟に涼介は叫びたくなる。でもそれを説明するには男の欲望のアレやコレを説明しないとイケないのだ。

これは無理だと狼狽する。パチユリーに相談しておこう。彼女ならきつと良しなに取り計らってくれるだろう。そのことを説明する涼介の羞恥心と引き換えに。

「いえ、全然大丈夫です。なんでも、なんでもないんです。あの、ほんと、お気になさらず」

逃げるようにじりじりと後退り、涼介は言葉を捲し立てる。咲夜はその様子の根本的な理由にまでは思い至らないが、先ほどの行動が原因だと察した。

今までのお礼をするように、悪魔的なほど綺麗な笑顔を浮かべ涼介ににじり寄ってくる。

「涼介さん、お顔が真っ赤ですよ。大丈夫ですか？お熱、測りましょうか？」

彼女は楽しげに涼介を追い詰めるように距離を詰めていく。フランドール以外にも情操教育が足りない奴がいるぞと絶叫しそうになる言葉を呑み込む。

それとも、これが天然の怖さでもいうだろうかと涼介は戦慄する。そして明日、真つ先にパチュリーに問題の提起と改善の要求をしなければと決意を固める。

だがそれは明日の話。今は迫りくる脅威てんげんから逃げ切ることが先決だと涼介は思考を明日の事から目の前の事態へ向ける。

「咲夜さん、ほんと大丈夫ですから！にじり寄つてこなくて大丈夫です!!」

「いえいえ、お熱があつたら大変です。さあさあ、その真つ赤なお顔を良く見せてください。こわくない、こわくないですよー♪」

そして狭い部屋を舞台に、ドタバタと鬼ごつこの様に、友達と無邪気に遊ぶ様に、二つの影が駆け回る。

追いかけてこの結末については、時を止める能力を咲夜が使えるということを提示して結論の明言は避けておく。涼介の名誉のためにも。

明け方前からお昼ごろまで惰眠をむさぼり、涼介は目を覚ます。眠る前に運動をした成果か、不本意ながらもよく眠れた、不本意ながらも釈然としない胸中に整理をつ

ける。

その後、昼食を咲夜と二人で食べる。涼介が起きたらすでにメイド服で働いている彼女はいつ休んでいるのだろうか、心配して聞いてみるが、しつかりと休んでいると言っていたので大丈夫だろうと結論付ける。

食後、まだレミリア達は眠っているとのことで、フランドールも特に暴れるようなこともなかった。また彼女たちが目を覚ました時に話を出来るように咲夜に伝言を頼む。

仕事に戻る咲夜と別れ、大図書館へと向かうおり、廊下の窓から美鈴が花壇の世話をしている姿が見え足をとめた。ついではばかりに、美鈴と軽く談笑をする。

どこで見ていたのか、昨日の追いかけてこの事を把握されていた。内容までは分からないが楽しそうに追いかけていましたね、と言われ涼介の頬がひきつる。

どうしてと問えば、彼女は気を使う程度の能力で、人に宿る気を追うことで何となくの場所と人がわかるそうだ。それで、見覚えのある気が追いかけてこをしていたということらしい。

旗色が悪くなったので、話を切り上げ大図書館へと向かう足を再開する。にやつく美鈴に見送られ。

今日も今日とて本を読んでいたパチュリーに挨拶をして、眠る前にした決意を実行に

移す。

涼介の話を聞いたパチュリーが笑いすぎて喘息の発作を引き起こす事態があつたが、彼女は快く引き受けてくれた。

冗談交じりにいまだ取まらない笑いを含んだ声で、落書きといい、私を窒息死させようとするのはやめてくれると小言を言われる。

落書きの件は確かにタイミングが悪かつたが、今回の件については自分に落ち度はないと涼介は主張したい。

だが、釈然としないものを感じるが、これで反論してパチュリーの気を損ねまだしばらく苦しみなさいとでも言われたら目も当てられないので不満を呑み込む。

小悪魔、いい加減に笑いおさめると、涼介はおなかを抱えて声をあげる小悪魔に恨めしげな視線を送る。

館の者たちとゆつたりと平和な時間を共有する。この、朗らかで、明るい空気が、この館の者たちに棘の様に刺さっていたフランドールの問題が解消されたことで流れているのなら、それは涼介にとって望外の喜びだ。

そして時間が流れ、吸血鬼の姉妹が目をさまし、晚餐が始まる。

「やあ、涼介。いい夜だな」

「そうですね、レミリアさん」

寝起きから、血液入りのワインを飲むレミリアが機嫌よさげにグラスを揺らす。隣ではフランドールが血液入りのトマトジュースを飲んでいる。アルコールはまだ様子見だ。

「昨晚はどうでしたか？」

「幸せだったさ。言葉で言い表せないほど、な。多くの事を、様々な話をした。時間が足りず、つい朝日が昇り切ってしまうまで話し込んだよ」

「焦らなくても大丈夫ですよ。それこそ、今まで以上の、今までの短い間に思えるほどの先がありますよ」

「そう、だな。私たちの時間はここから新たに始まるんだ」

「そう言いレミリアはグラスを乾かす。その言葉に何か思うことがあるのか、お代わりを注ぐ咲夜が一瞬涼介をみてくすりとほほ笑む。」

その光景を視界に入れたレミリアは、おやと小さくこぼし、その後笑みを浮かべる。
「ふむ、お前なら構わんぞ」

その言葉に涼介はやめてくれ、何が構わないのかは聞かないが、ここにはパチュリー、美鈴、小悪魔もいるのだと顔をしかめる。

後で何を言われるのか想像するのも恐ろしい。首をかしげる天然の咲夜と、みんなでのる食事に夢中なフランドールだけが涼介の心の癒しだ。

「ああ、まったたく。ここは悪魔ばかりだな」

「当り前さ。ここは悪魔の巣窟、紅魔館なのだから」

機嫌よさげなその様子が涼介にとつて憎らしい。涼介のジトツとした視線さえ良い酒の肴とでもいうように、くつくつと笑いながらレミリアは杯を重ねる。

食後、大図書館に移動し卓を囲む。せっかくということとで涼介が珈琲とお茶請けとしてのクツキーを作り提供することになった。

なんだかんだ言つて、やっと出張営業らしいことをした気がするが涼介は気にしないことにする。

「さて、フランも随分と落ち着いたようだ、改めて感謝をする涼介」

レミリアが、大図書館内で咲夜、美鈴、小悪魔と鬼ごっこをして走り回っているフランドールを遠くに見つめながら改めて感謝を口にする。

地下室ではできなかつた体を動かす遊びだ。涼介では相手にならないから、飛べる小悪魔と二人でやらすのもあれなので出来なかつたのだ。

「彼女の今までの忍耐とがんばりのおかげですよ。私はきつかけを与えただけです」

「そのきつかけが大きいのさ。私たちではそれさえ叶わなかつたからな」

そのレミリアの声は少しだけ悔しそうだが、悲壮感はない。彼女は過去を悔いている

が、前を、未来を見据えている。

「……では、その感謝、しかと受け取らせていただきます」

「はは、口調が固いな。もつとくだけた言葉で構わない。友人の様に接してくれ」

「わかりました。では、他の方と同じように」

「それでは、本題に入ろうか」

「そうですね」

そう応え涼介は一口珈琲をあおる。それに対しレミリアが真剣な表情で告げてくる。

「涼介、お前咲夜とどこまで進んだのだ？」

「ごほつごほつ」

予想外の出来事にむせ返る。予想外の所から水月を殴りこまれる様な威力だと涼介は咳き込む。

「れ、レミリアさん!!」

「ああ、すまない。少し浮かれているみたいだ」

「まったく、冗談もほどほどにしてくださいよ」

「あながち全部冗談でもないさ。お前が咲夜と添い遂げたいというのなら紅魔館で雇ってやろう。考えておくといい。そうだな、フラン付きの執事長の立場でも用意しておく

「さ」

「……私は喫茶店をやめるつもりはありませんよ」

「今はそれでもいいさ。先の事は分からないものだ。運命を操れるこの私にさえね」

そういうレミリアは楽しげに珈琲を口に運ぶ。パチュリーはその様子をやれやれとでも言いたげに眺めている。

「さて、そろそろ真面目にしなさいレミィ」

「ああわかつたよ、パチエ。さて、涼介よ。これからどうする？」

やつと本題に入れそうなことに涼介は安堵する。

「そうですね。最終目標はスペルカード戦が出来るようになることですね」

「と、いうと？」

レミリアが机の上で組まれた手の上に顔を置きながら涼介へと問う。

「これからの幻想郷はスペルカード戦が主流となります。それを使い異変を起こした貴方達もそれは承知していますね」

「ああ、もともとそれを広めるためにこの異変を起こした所もあるさ」

「なるほど」

紫はこれを見越して10年前に盟約を結んだのか、あの人の頭脳には恐れ入ると涼介は内心舌を巻く。

「それならなおの事スペルカード戦が出来るようにならないといけませんね。スペル

カード戦とは美しさと思念をぶつける闘いです。そして、相手を殺してはいけません。だからこそスペルカード戦がマスターできれば外にも自由にだしてもいいのではないかと考えています」

「だからこそその最終目標か、なるほど」

「どのような目標設定ね」

レミリアとパチュリーが納得を示してくれる。

「スペルカード戦はレミリアさんが教えてあげてください。そして、最終試験の相手として魔理沙と霊夢の二人と対戦してもらいます」

「それで暴走しなければ合格か」

「はい。それで練習相手をレミリアさんをお願いするのは、怪我をしても大丈夫だからという理由です。すみません、こんなことを頼んでしまって」

「問題ない。せつかくだから姉妹仲良く目一杯運動するさ。それにいつか来る姉妹喧嘩の予行にはびつたりだ」

「そういつて頂けて安心です。フランはもう能力を使うことはほとんどないと思います。どうやら、彼女は自分の能力を忌避しているところがあるみたいですね。だから、大きな危険はないかと」

「それを聞いて安心さ。さっそく今日から初めようか」

「練習場所は地下室で大丈夫かしら？あまり外で何度もどんちゃん騒ぐのもね」

「それがいいだろうな、パチエ」

「さて、話はこれでまともになりましたかね」

乗り気な二人に涼介は安堵する。さて、これで話はまとまったと三人は行動を開始する。

「それでは、レミリアさん。お願いします」

「ああ、私に任せてくれ。あの子のためにこんな大役をもらったのだ。演じきって見せよう」

レミリアが立ち上がり堂々たる姿でそう応える。ああ、きつと、フランはもう大丈夫だろう、その姿に涼介は確信する。

そして最後の仕上げの大準備の幕が上がる。たった一人の女の子のために開かれる晴れ舞台はもう間もなく始まる。

茶と、涼介が入れる珈琲が住人達に供されている。

割合的にはやはり紅魔館のメイド長である咲夜の紅茶の割合が多い。

しかし、出張営業という形だけの名目とはいええそれで呼ばれた涼介が住人達に杯を供することもある。

「レミアアさんも最近すこぶる機嫌がいいみたいですね」

「まったく、元気すぎて困りものよ」

「そうですね。日中に外出するくらいですからね」

「ええ、最近は生活のリズムも変化してきておられます」

「まあ、その元気が神社に向いているから、無茶振りされなくて私は楽でいいわ」

パチュリーがけだるさを滲ませそう呟く。咲夜はそれを聞くと主人の行いを否定するのは憚られるのか苦笑いを零すだけだ。

「この前霊夢がきて文句を言われたよ」

「涼介さん、押し付けるような真似をして申し訳ありません」

「構わないよ。自分から申し出たんだ。それに霊夢とは知らない仲ではないからね」

「それより黒白の方よ」

それを聞くと今度は涼介が苦笑いをする。

「あの子は元気だからね」

「元氣すぎるわよ」

「もしよろしければ私が追い返しますが？」

「構わないわよ、咲夜。自分で蒔いた種だもの」

パチュリーはあの異変の日から、時折訪ねてくる魔理沙の相手をしている。あの日パチュリーはいつでもかかってこいと取れるような発言をしていた。

そして、魔理沙は本を借りに来る時にパチュリーに挑むのが定番と化してきている。弾幕ごっこでは魔理沙が勝ち越していると言える。

しかし、時折弾幕ごっこの代わりに行われる魔法戦とでもいうべき力の試し合いではパチュリーは負けなした。

まだ、パチュリーと魔理沙の間に存在する力の差は圧倒的だ。魔理沙の技量も確実に向上している。全くの門外漢である涼介の目から見てもそれは分かるほどに。

「かわいい弟子という所かな、パチュリー」

「別に、何も教えてないわ。あの子が勝手に学んでいるだけよ」
「ただ見るだけでも勉強になるということですよ」

パチュリーの声はそっけない。確かに、パチュリーが何かを魔理沙に教授することはない。

しかし、魔理沙は今までたった一人で親元を離れ魔法の森で学んでいたのだ。そこに

偉大な先達が現れた。

そして、今まで手に入りにくかった魔法関連の書物。それらを得て魔理沙は目に見える成長をする。

魔理沙はもともと努力家だ。それらを助ける環境があるのだ、魔理沙が頑張らない理由は存在しないだろう。

「ですが涼介さんの腕前は中々上達しませんね」

「いやあ、入れる茶葉の量。それに蒸らす時間の見極めが難しいですよ」

「要練習ですね」

「はい、先生」

「はいは、伸ばさない」

「はい」

「よろしい」

「出来の悪そうな生徒ね、咲夜」

「不出来な子ほどかわいいですよ」

「よかったわね、涼介」

「出来のいい先生で感無量ですね」

ポンポンと軽快な会話が紡がれる。涼介はまだ咲夜から習い始めたばかりの紅茶の

淹れ方を会話のだしにされる。

しかし、そこに負の感情はない。じゃれ合うような会話が生み出される。

「珈琲屋さん、これでいいですかあ？」

「すみません、美鈴さん。お世話になってしまつて」

そこに別の声が混ざる。美鈴が何かの入った袋を持って大図書館に入ってくる。それは涼介が美鈴に頼んだ珈琲豆だ。

紅魔館に来る際にリュックに入っていた豆もすでに使い果たし、フランも落ち着いたから一度店に取りに戻ると提案したところ美鈴が請け負ったのだ。

涼介が取りに行くには飛べないがゆえに時間がかかりすぎるからと。

「気にしないでください。自分で言いだしたことですし。それに、貴方が紅魔館くまかどにいた方が喜ぶ人もいますしね」

「なんでそこで私を見るのかしら美鈴？」

「別に咲夜さんを見たわけではないですよ。水晶の先の妹様を見たんですよ。あれあれあれ、どうして自分だと思つたんですか？」

「美鈴……怒るわよ」

「わあ、咲夜さん。ごめんなさい、お茶目な冗談じゃないですか」

「まったく、貴女はいつもそうやって」

そして美鈴に対して咲夜のお説教が始まる。紅魔館では見慣れた光景である。

「飽きもせずよくやるわね」

「喧嘩するほど仲がいいんだらうね」

「そうね、喧嘩が出来るというのは本当に仲の良さのバロメーターなのかもしれないわね」

そう呟くパチュリーの視線の先は水晶に向いている。そこには吸血鬼姉妹の喧嘩が映し出されている。

「この勝負は私の勝ちよ」

「あら、フラン駄目よ。ちゃんと勝敗はつきり認識しないと。この勝負は私の勝ちよ」

「いいえ、お姉様の負けよ!!」

「私の勝ちよ!!」

「私!!」「私よ!!」

しまいには互いの頬を引っ張り合い、それがエスカレートして取っ組み合いが始まる。

しかし、それも吸血鬼同士の本気の殴り合いではなく、互いに楽しんでいるような色が見え隠れする。

確かに、喧嘩できることは仲の良さのバロメーターとなりうるかもしれない。それを見ながら涼介はそう思う。

今まではこのような喧嘩をすることさえ出来なかったのだから。

「確かに、これはバロメーターと言えますね。仲良きことは美しきかな」

「まったく、美しいのはいいけれどももう少し程度の高い喧嘩をしてくれないかしら」

「いいじゃないか。でも、レミリアさんは妹さんという時はなんといいか見た目相応です」

「普段のレミィは夜の王らしい振る舞いを心がけているからね。でも実は意外と子供なのよ。」

「そうなのですか？」

「そうよ、そのうちあなたの前でもメツキが剥がれるわよ」

「それは心を開いたということでもいいのかな」

「きつとそうよ」

「楽しみだな、それは」

水晶の向こう側でレミリアとフランドール、すぐ傍で咲夜と美鈴が奏でるそれぞれの喧騒が聞こえてくる。

涼介にとってその喧騒はひどく心地いい。その喧騒をBGMに涼介は紅茶の杯を重

ねる。騒がしくも平和な時間が流れる。

ある日の日中、レミリアが咲夜を伴い霊夢の住いたる博麗神社へと出かけている。美鈴は門番として日差しの下でいつも通り職務に励んでいる。

パチュリーは魔法薬の実験で大図書館の奥に籠ってしまっている。必然的にその手伝いをする小悪魔もそこについて行っている。

そうなるフランドールと涼介が余る。余った二人は初めて会った時の様に地下室で過ごしている。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

「どうした、フラン?」

フランドールが地下室の床を転がるだらしない恰好をしている涼介を揺さぶる。

「何かしようよ」

「いいよ、何がしたい?」

そう言いながら涼介は体を起こす。目の前に将棋盤を持ち出したフランドールが見える。涼介の頬がひきつる。

当たり前だろう、ここ最近では負け越しているのだから。それも、一度は王以外を全て

とられるという大惨事が起きた。

投了無しというルールをフランドールが提案し受けた結果王手をしてくれなかったのだ。

「将棋!!」

「いいけど今度は投了ありにしてくれよ」

「うん、もうそれは一回やったから満足した」

「まったく、フランは……はあ」

涼介はため息をつく。そして思う。すでにフランドールもちゃんと紅魔館の一員だ。悪戯好きで他者をからかうのが大好きな悪魔の一員だ。

「フランはレミリアさんの妹だなあ」

「ん？　そうよ、私はお姉様の妹よ」

そういうフランドールの顔は満面の笑みだ。

ぱちり、ぱちりと駒を打つ音が響く。涼介の眉間にしわが寄る。徐々に押されている、と涼介は思う。

「ううん、フランは強いな」

ぱちり

「でも、パチュリーはもつと強かったわ」

ぱちり

「ああ、彼女は頭を使うゲームは無類の強さを発揮するね」

「うん。お姉様はこういうの苦手みたい」

「そうなんだ。でも人生ゲームとかモノポリーは強かったよね」

ぱちり

「あれはするよ」

ぱちり

「ずる?」

「そう。お姉様は運命を操る程度の能力を持っているの。だから運の要素の絡んだゲームでは勝つのは難しいの」

「それは、凄そうだけど今いちピンとこないね」

「お姉様自身でも全容を完璧に把握し切れてないって言っていたから具体的には説明しにくいなあ」

ぱちり

「そうなんだ。でもそれで運ゲームが強いなら運勢とかも操れるのは確かなんだろうね」

ぱちり

悩む涼介にたいし、フランドールはすぐさま返しの手を打つ。

「だからずるいのよ」

「なるほど。そういえばもうスペルは出来たのかい？」

「うん！ まだまだ作りたいけど一先ずスペルカード戦が出来ただけのスペルは作ったよ」

「どんな名前のスペルを作ったの？」

「えっとね、禁弾・過去を刻む時計に禁忌・カゴメカゴメ、禁忌・恋の迷路に他にも禁忌・克蘭ベリートラップでしょ。まだもう少しあるけどもうちよつと弾幕を練りたいの」

ぱちり

「いくつかはレミリアさんとの練習で見たことあるのもあるね。でも知らないのもあるな」

ぱちり

「見てみる、お兄ちゃん？」

「んー、そうだねえ。すごく魅力的な提案だけどせっかくだから実際に使っているところを見学させてもらおうよ。誰かとの闘いで使われてこそそのスペルだからね。きつと、声を失うほど綺麗なんだろうね……」

「……魂が震えるほど、綺麗な弾幕を見せてあげる」

「フラン？」

涼介は不利な盤面を睨みつける様に見つめている。だから、涼介はフランドールの表情が見えていない。

ただ、聞こえてくる声に今までの無邪気さが感じられなかった。それを訝しみ、涼介が顔を盤面から上げフランドールに視線を向ける。

フランドールの瞳は涼介をとらえていた。それはどうしようもないくらい真剣さを帯びている。

「お兄ちゃんが、解き放ったモノが何かを魅せてあげる。それは破壊を撒き散らす化け物じゃない。美しさと思念を持ったわフランドール・スカレット。たしを魅せてあげる。それはきつと私が出る最大の感謝であり、お礼であり、義務だと思うから。だから、お兄ちゃん。その時はしっかりと私をみて」

「わかったよ。私が助けた君を、幻想の世界を舞う君を私に見せておくれ、フラン」

「うん!!」

「さて、フラン。その時解きまで時間はある。だから待った」

「それはダメだよお兄ちゃん。待ったは無し」

ふむ、ならばこれは投了した方がいいのかもしれない。涼介は盤面を見てそう思う。

そして時は熟す。フランドールの旅立ちの時だ。のちに紅霧異変と呼ばれるその関係者しか知らない、隠された最後の舞台の幕が上がる。

舞台の出演者は、フランドール・スカレットの妹、博幻想の守護者、霧普通の魔法使い、雨魔法使い。

この舞台をもって本当の意味で異変の終結となるだろう。

「さあ、役者はそろった」

「後は見守るだけね」

図書館でパチュリーと涼介が水晶を前に地下室の様子を眺めている。ここに居るのは二人だけだ。

霊夢を呼び出すためにレミリアと咲夜、小悪魔が神社へと出かけている。そして、館の周りに雨を降らせる。

吸血鬼のレミリアが紅魔館へと帰れなくなる、それを解決するために仕方なく霊夢がやってくる。

そして魔理沙には今日のこの時間を以前した約束の日として伝えてある。美鈴は案内係として、二人をフランドールの待つ地下室へと案内する役目だ。

「ああ、そうだ。レミイ達の所にも小悪魔を通して中継しないと」

「そうですね。じゃないと力づくで突破してきそうですからね。自力で戻れるとなったら霊夢が帰ってしましますし」

「こんな手の込んだこと、面倒ね」

「霊夢の勘はちよつと超常じみたところがあるからね。多少手間をかけないと。パチクリーお願いするよ」

「任されたわ。それに、この位の手間で物事がスムーズに進むのなら惜しむ方が面倒よ」
「確かにそうだね」

机の上に用意された別の水晶が淡く光る。対となる小悪魔の持っている水晶に映像を飛ばし始めた。

「準備完了ね」

「びったりだね。今役者たちが舞台上上がったよ」

遠見の水晶に浮かぶ地下室の景色に、霊夢と魔理沙が現れた。二対一の変則マッチになるけれどブランドールが申し出たことだ。

二対一でも、スペルカード戦をしっかりと演じきって見せるといつていた。頼もしい限りじゃないか、涼介はその時のフランの顔を思い浮かべ、笑いを漏らす。

「はじまるわよ」

「見守ろうか」

「ええ」

「頑張れ、フラン」

涼介の応援は水晶越しで届くことはないだろう。だけど、想いはきつと届いているはずだ。地下室でふわりと宙にランドールが浮き上がる。

それに対し、魔理沙は勢いよく、霊夢はどこかけだるげに空へと舞う。三者三様に四枚のスペルを掲げる。最後の試験が、彼女の晴れ舞台がはじまる。

「さっさと雨を止めてくれないかしら。このまま吸血鬼に居座られたんじゃ、妖怪神社って呼ばれるじゃない」

「まあ、いいじゃないか霊夢。遅かれ早かれさ」

「魔理沙、どういう意味よ」

「そのままの意味だぜ」

「ねえ、貴女達随分余裕そうね」

ランドールから魔力が漏れる。それは威圧する様に声高な魔力だ。

眼前の者に平伏す様に、周りの者たちに誰が上位者かを示す様にその魔力は雄弁だ。

だが、霊夢も魔理沙も屈することなく立ち向かう。

「痺れそうだぜ」

「疲れそうね」

「一緒に遊んでくれるかしら？」

「お賽銭を入れてくれるなら考えないこともないわ」「へへっ、それじゃあいくら出す？」「コインいっこ」

「それじゃあ、割に合わないわね」「一個じゃ、人命も買えないぜ」

「貴女達が、コンティニュー出来ないのさ!!」

フランドールのその声と共に弾幕がばら撒かれる。全方位に小型の楕円型の弾幕が放たれ、魔理沙と霊夢を襲う。

魔理沙と霊夢はそれぞれが互いの邪魔にならない様に空を駆ける。弾幕ごっこが始まる。

「ち、やつぱり妹だぜ。姉に似てえげつない」

魔理沙が悪態をつき弾幕の隙間を飛翔する。霊夢はふわりといつもの様に余裕が見える回避をする。このままでは拉致があかない、フランドールはそう思ったのかカードをかざす。

「禁弾・スターボウブレイク!」

宣言と共にカードが弾け光を纏う。フランドールが地下の天井付近まで高度を上げる。止まった弾幕に霊夢と魔理沙は警戒を示しフランドールを見上げる。

色とりどりの弾幕が天井を覆うように現れる。数多生まれたその小型弾幕は一度ふ

わりと上昇すると、重力にとらわれたかのように落下を始める。

それは雨の様に、いやまるで流星群の様だ。落下する弾幕はそれぞれが違う速度で落下する。

最初に現れた弾幕が途中まで落下すると、さらに追加と言うように新たな流星が補充される。

霊夢は危なげなく回避を続けるが、魔理沙はすでに精一杯だ。カードを掲げ思念を込めた叫びを上げる。

「恋符・ノンディレクショナルレーザー！」

光を纏う魔理沙から五つのレーザーと小型、中型のサイズの星形弾幕が無数に放たれる。それらがフランドールの弾幕と激突する。

いくつかの星形弾幕がフランドールの弾幕にぶつかる。一つ一つは魔理沙の弾幕の方が弱いのだろうが、いくつかぶつかるとフランドールの弾幕が消されていく。

さらにレーザーがフランドールの弾幕の軌道をずらす。そうして生まれた隙間に霊夢が切り込む。

「パチュリーあれって」

「知らないわよ」

「……そうかい」

見覚えのあるレーザー弾幕。涼介はパチュリーに問い掛けるがパチュリーの反応は素っ気ない。

しかし、涼介は彼女の口角が僅かに上がっているのを察知する。それ故に、深くは問わない。そして視線を水晶に戻す。

「星は私の十八番だぜ！魔符・ミルキーウェイ！」「魔符・封魔陣」

霊夢と魔理沙がスペルを叫ぶ。二人の弾幕が、地下室を埋め尽くす。今度はフランドールが逃げ回る。二人がそれを追いたてるように宙を舞いフランドールを追い詰める。

「せっかくのデビュー戦だが、このまま押し切らせてもらおうぜ！」

「勝たせてもらおうよ!!」

「まだだ！まだ、全部魅せてない!!もっともっと私を魅せるんだ!!!」

フランが叫びカードを掲げる。カードが弾け光を纏う。

「禁忌・フォーオブアカインド」

次の瞬間、フランドールの姿がぶれたと思うと二つに分かれる。

分身をしたと思うのもつかの間に、その二つがさらに二つに分身する。

そこで変化が終わる。四人に分身したフランドールが散開する。

「うっそ、在りかよそんなの!？」

「少なくとも無しではないんじゃないかしら！」

「今度は二対一じゃなくて、二対四よ!!」

二人のスペルに四人のフランドールが真つ向から立ち向かう。スペルとは美しさと思念をぶつけ合うものだ。

そして思念とは心に思うこと、つまりは心であるともいえる。そして、それはスペルの形にも反映される。

スターボウブレイクとは地下室にずっと封じ込められていた故に、夜空にあこがれていたからではないのか。

フォーオブアカインドとは、一人きりでいることに耐えきれず、自分の中に別の自分を作ったことがあるのではないか。

もしくは、自分でもいいから他の誰かにいて欲しかった彼女の心が形になったのではないかと。そう思うと視線をそらしてしまう。

「最後まで見なさい、涼介。貴方は頼まれたのでしょ」

「……そうだね。ちゃんと見てないよ」

涼介が視線を戻すと互いのスペルがブレイクしたのかフランドールが一人に戻っていた。そしてフランドールが次のカードを掲げている。

「次のはちよつと難しいわよ。しっかり耐えてね」

「ああ、もう勘弁してほしいわね」

「何言ってるんだ、楽しくなってきたところじゃないか」

カードが輝く。

「秘弾・そして誰もいなくなるか？」

カードが弾け光を纏う。そして、今度はフランドールの体がうつすらと透け始める。そして、霧の様に体が広がり、姿が消える。

「おいおい、これじゃあ狙えないぜ」

「あの子……さつき、すっかり耐えてねって言ったわよね」

「ああ、そうだな。だが、何に耐えればいいんだ？」

消えたフランドールを警戒し、魔理沙と霊夢が背中合わせで周囲を警戒する。フランドールが消え、弾幕さえも存在しない地下室の空間。

そしてそれが生まれる。青白い霧の塊の様な物。それがゆっくりと二人に向けて動き出す。通った軌跡には無数の青色弾幕が生まれ、二人を追い詰めるようにゆっくりと動く。

それは低速であるために二人は余裕をもって回避できる。しかし、青白い霧がいくつも生まれ次第に二人を追い詰め始める。

真綿で首を絞めるようにゆっくりとゆっくりと空間を狭めていく。魔理沙と霊夢の

体が触れるほど追いつめられる。

追い詰められた二人がスペルを発動するためにカードを取り出す。しかし、青白い霧が消え弾幕のパターンが変化する。

「今度はなんなんだぜ」

「おなか一杯になりそうね」

部屋の壁をうめるように、赤い弾幕が現れる。それは膨らんだ風船がしぼむ様に部屋の中心に向かって収束する。

次は青が、その次は緑が、黄色が、白が、そしてまた赤が次々と壁際に現れ、それが中心へ向けて収束する。それらが何度も何度も繰り返される。

「夢符・二重結界」「彗星・ブレイジングスター」

二人のカードが弾けて集う。光を纏う二人はそれぞれのスペルでフランドールの弾幕をしのいでいく。

霊夢は結界を、魔理沙は力を身に纏い流れ星の様に弾幕を踏み潰し、空を駆け廻る。そしてスペルブレイクされたフランドールは、霧が集まる様にして、体が現れる。

フランドールのその顔はスペルが乗り切られたのにうれしげだ。

「このまま押し切るぜ」

「そうね」

霊夢と魔理沙のスペルはまだまだ続いている。二人がフランドールに襲い掛かる。涼介は今のフランドールのスペルが忘れられない。

そして誰もいなくなるのか？ というスペルだった。そしてそれはいうなれば一方的に攻撃するような、耐久スペルとでも言うものだろう。

一方的な破壊を突き付けて誰もいなくなるのではという彼女の今までを暗示しているように感じられる。しかし、それを破られた彼女はうれしげだ。

いや、きつとフランドールはうれしいのだろう。いなくならない者がいる。それが彼女にとってうれしいのだろう。

「次で最後のスペルだよ。今回は四枚だからラストスペル。しつかり最後まで魅せてあげる」

迫りくる霊夢と魔理沙に対し、フランドールはカードを掲げる。光輝きはじけ飛ばす。最後の光をフランドールが纏う。涼介は一瞬フランと瞳があつた気がした。

「QED・495年の波紋!!」

弾幕が、生まれる。それは水面に石を投げ込んだように波紋が生まれるように、フランドールから、周囲の空間から、球体状に放射された弾幕が広がる。

波紋がゆつたりと生まれ広がる。初めはゆつくりと、少しだけ生まれる波紋だ。それ少しずつ増えて激しくなっていく。

「初めは空虚」

波紋はまばらだ。

「パチュリー？」

「レミイがフランに会いに行く。美鈴が紅魔館に現れる」

少しだけ波紋の数が増えてくる。しかし、まだ少ない。

「それは……」

「私に加わり、小悪魔が召喚された」

「過去の出来事か」

「そう。そして咲夜が拾われる」

まだ、波紋は多いとは言えず霊夢と魔理沙は余裕が見える。

「……」

「そして、貴方がやってきた」

波紋が増える。至る所で波紋が生まれ世界を彩る。

「外に出て、レミイと和解し、咲夜に、美鈴に、小悪魔とも正しく絆を紡いだ」

もう、霊夢と魔理沙の姿は波紋の弾幕に吞まれもう見えない。

「QEDとはラテン語の Quod Erat Demonstrandum の頭文字を取ったモノよ。意味は示されるべき事であったという意味よ。推理小説では、証明終了

を表す用語としても使用されることがあるわ」

「じゃあこれが」

「貴方に見せたかったものでしようね。貴方に見て欲しかったものよ」

「これが、私に見せたかった弾幕フランドール・スカレットか」

きつと、その波紋はこれからもどんどんとふえ激しく、そして美しくなるだろう。今でさえとても美しい。しかし、その美しさはまだまだ成長途中だ。そのことがうれしくなる。そのことがさらに目に見える弾幕を美しく見せる。

「ああ、本当に魂が震える様だよ、フラン。本当に美しい弾幕だ」

涼介の瞳から一筋涙がこぼれ出る。パチュリィは何ももう言わない。その表情は穏やかに涼介と水晶の向こうのフランを見ている。

そして、フランのスペルが、弾幕が終わる。波紋の向こう側からたくさん弾幕が掠ったのか、服の破れが目立つ霊夢と魔理沙が現れる。

けれど、それでも二人は自力で飛んでいる。しっかりと耐えきっている。二人の勝ちだ。フランが魔力を収める。

「終わりね」

「いいや、始まりさ」

「…そうね」

「きつと美しいのだろうな」「きつと楽しいでしょうね」

笑い声が大図書館に響く。水晶はもう何も映していない。勝った二人と、負けたフランクは何を今話しているのだろうか。知っているのは彼女たちだけだろう。フランドールが絆を紡ぎ始める。

「それでどうして家でやるのかしら」

お酒の入った杯を片手に霊夢が悪態をつく。夜の博麗神社で行われる宴会。紅魔館の住民たちが、霊夢が、魔理沙がいる。

チルノに大妖精、宵闇の妖怪に、どこで話を聞きつけたのか烏天狗に、太陽の畑の花妖怪。

時折里で人形劇をしている人形師、悪戯好きな光の三妖精、そのほか見知らぬ妖精たちが沢山神社の境内で大騒ぎをしている。

「どこでやるのが一番いいからじゃないからかな？」

「いい迷惑よ」

「まあ、そういわずに」

そういつて霊夢の乾いた杯に涼介が酒を注ぐ。霊夢はそしてまた杯を傾ける。

「あーあ、お酒飲んだことないなら飲みに来なさい何て言うんじやなかったわ」

弾幕ごっこの後に、フランドールがお酒を飲んだことを無いという話をしていたらしい。

そこで、霊夢と魔理沙が飲んだことがないなんてもつたない。今度うちに来なさいよ、お酒位出してあげるわよ。と、言ったらしい。

それを聞いたレミリアが、それならみんなで行きましょうといい、紅魔館の面々で乗り込んだ。その騒ぎに惹かれ続々と他の妖怪が集まり、大宴会へと移行した。

「まあまあ。片付けは私や咲夜も手伝うよ」

「当り前よ。というか、場所を貸しているのだから手伝いなさいよ」

「任せてくれ。でも、追い返さなくてくれてありがとうね」

「追い返すのも面倒なのよ。それが理由で弾幕ごっこを挑まれたらたまったものじゃない。それならこうやってただ酒に預からせてもらうわ」

視線の先でお酒を飲みはしやぐフランドールと心配そうなレミリアを見守りながら、霊夢と涼介は杯を重ねる。

「次もこうしないか？」

「どういこうと？」

涼介の具体的な内容の明示が無い提案に霊夢が首を傾げる。涼介は目の前の光景を

見渡し、杯を煽った後、言葉を紡ぐ。

「もし、また異変が起きたらさ、異変の首謀者たちや知り合いを呼んでこうやって宴会をしないか？争いの禍根を酒で流し、みんなで騒がないか？」

「えええ」

嫌そうな霊夢の声が聞こえる。

「また、ただ酒飲み放題だよ。異変を起こした首謀者にお酒を用意させてさ。みんなでどんちゃん騒いで。宴会をもつて異変の終結といこうじゃないか」

「どうせダメって言ってもまたお酒もつて押しつけてきそうね」

「みんな自由な幻想郷らしいじゃないか」

「バカばかり」

「その方が楽しいさ」

「筆頭バカに言われてもね」

「手厳しいな」

「嫌なら反省して学習しなさい」

そんななんでもない会話が続く。飲む相手の組み合わせが変わり、話し相手が変わり、誰かが酔った勢いで弾幕ごっこを始める。

それを肴に杯を重ねる。誰もかれもが笑いあい、平和な宴会が続く。人と妖怪が並ん

で酒を飲む。そんな奇跡の様な時間は続く。

幻想の茶会

風神少女と新聞取材に供する一二杯目

カランカランと鈴が鳴る音になる。霊夢が店からでて、帰る所だ。宴会の後、涼介は自身の店である桃源亭へと戻ってきた。それから営業を再開し何事もなく3日が過ぎていく。それまでに霊夢が約束を履行させるために昼食を食べに訪れたり、紅魔館の面々が訪れてきている。それ以外にもここ数日休みつばなしであったために、久しぶりの開店ということでも里の面々や慧音が訪れている。

慧音には異変が起きているのにどこをほつつき歩いていたのかと問われ口を濁すが、そこにいた霊夢が犯人の所で異変に一枚噛んでいたわ、と言いつつ頭突きと盛大な説教を賜った。

「やつぱりここがなんだかんだいって一番落ち着くね」

涼介が洗い物をしながら零すと、ずつと留守番させられていたハルがしばらく店を開けていて何を言っているのかとでも言うように尻尾で足をピシピシと叩いてくる。

「ごめんごめん、色々あつたんだよ」

それでも不満は収まらないのか勢いは弱まるが、叩き付けるのをやめないようだ。涼

介自身も自分が悪い自覚があるので甘んじて受けそれ以上の制止はしない。

「それにしても夜間の開店も真剣に考えないとなあ」

涼介はそう口に出し悩む。吸血鬼の知り合いが出来たのだ。これを機に以前から悩んでいた夜間営業を開始するのもいいかもしれないと。営業内容としては静かに飲めるようなバーを想定している。幸いにぎやかな幻想郷ではそういった飲酒店は中々見当たらない。良くも悪くも昔ながらの飲み屋、居酒屋といった営業形式の店が多い。

だからこそ、そういう店が一店舗くらいあってもいいのではないのか常々考えていた。それに、落ち着いて飲むにはこれ以上の店は難しいだろう。そのように自分の能力を加味して涼介は考える。

「まずは試験的に週一回開けてみようかな。そうなると灯り用のランプと燃料を増やさないと。霖之助の所があればいいんだけど」

涼介はちやくちやくと夜間営業の構想を練っていく。

「置いていかなかったり、売ってくれないければ自活しないとなあ。ハルそうになったら無縁塚まで行くけどお供を頼めるかな？」

ハルは任せろとでも言いたげに一度わう、と吠える。その様子に涼介は笑みをこぼすと、ありがたうと言いついハルの頭を撫でる。

「ナズーリンに頼めばすぐに見つけてくれたりしないかなあ。うーん、なんとなく望み

薄な気がするが、挨拶ついでに頼んでみるかな」

無縁塚で小屋を建てて住んでいる友人に思いをはせるが、事態は好転するビジョンは浮かばない。そんなことを考えながら昼時も過ぎ、客のいない時間の店内の掃除をしていると強い風でも吹いたのか窓の障子と扉ががたがたと音を立てる。涼介が今日は穏やかな天気でほとんど無風だったのにと、疑問に首をかしげているとカランカランと鈴が鳴り、客が入ってくる。

「いらつしやいませ、お客様」

黒髪で白の半袖のシャツに黒いフリルのスカートをした服装。黒髪で赤い瞳をしている女の子だ。しかし、涼介は彼女が人間でないのが一目でわかる。頭には頭襟をかぶり、高下駄を履き黒い羽毛の翼をしている。ここまできればだれでも烏天狗を想像する。

「初めてご来店いただきありがとうございます。お品の説明は必要でしょうか？」

珈琲というこの幻想郷で類似の商品を扱う店は存在しないため、一見様にはいつも行っている案内だ。

「あ、貴方が白木涼介さんですか!？」

唐突に天狗の少女に名前を呼ばれ動揺が出る。涼介はどこかであったことがあるかと記憶をめぐるさせる。そういえばこの前の宴会でカメラと、メモを片手に紅魔館の面々

に色々と話しかけていた人物と目の前の人物が一致する。しかし、宴会では見ただけ
自己紹介はおろか話したことすらないはずだ。

「ええと、どちらで私の事を？」

妖怪が自分個人に興味を持ち、店を訪ねてくる。戦う力の無いただの人間源介としては
ちよつとした恐怖を感じる案件ではある。能力でそのあたりの感情は意図的に無視で
きるが、感情は無視できても思考が危険を示唆するのは止められない。ゆえに警戒は解
かない。

「ああ、これは失礼いたしました。私、射命丸文と言う者です。是非、文とお呼びくださ
い。それです、私、私は新聞記者をしております、此度の異変の取材をしていると関
係者の方々から涼介さんの名前を何度かお聞きしました。そのことから取材をさせて
いただきたいと思ひ訪ねてきた次第です」

涼介が警戒している雰囲気を感じ、文は事情を説明する。涼介もその説明で納得した
のか肩の力を抜く。天狗が新聞を作り配っていること自体は聞いたことがあるために、
特に疑うことなく信じる。文もその雰囲気を感じたのか真面目な表情を崩し、親しみや
すい笑顔を浮かべる。

しかし、次の瞬間店内の空気が変わる。カウンターの途中で伏せているハルが、ぐ
るうう、喉を鳴らし、カウンターから出てくる。それに気づいた文の笑顔の種類が変わ

る。先ほどの親しみやすさは消え、嘲るような笑みを浮かべる。

「おやおやおや、こんなところに白狼がいるなんて。道理で獣臭いわけだ」

その文の言葉を聞いて、涼介と文の間に入ったハルが牙を剥く。

「人型もとれぬ白狼風情がこの私に牙を剥くか」

涼介は店の中なのに頬を撫でる風が渦巻いていることに気が付く。そして、文の手にカメラでなく葉団扇が握られている事にも気づく。店の中で暴れられるのも困るが、このままいけばハルが怪我をするだけでは済まなくなる。涼介は相手の靈気や妖気を読む力にたけている訳ではないが、そういった手合いとの対峙経験は豊富な方だ。その経験が目の前の少女がただの一介の天狗ではないと警鐘を鳴らしている。

ハルが妖怪の山の妖怪に何か思う所があるのは知っていたがいきなり、敵意むき出しで向かっていくとは思わなかった。

しかし、今はそんなことを気にするのではなく同居人であり、心配性な家族を守る方が先決だ。だから、涼介は声を出す。

「ハル、少し落ち着いて。それと、文さん。暴れられるならここからすぐに出て行つてく
ださい」

文から漏れ出ている妖力はひどく押し殺されたような印象を受ける。しかし、それでも力の弱い涼介すれば体が勝手に死の恐怖におびえるレベルとしては十分すぎるほど

であると言える。だから、その恐怖を体の怯えをレミリアと対峙した時の様に能力で押さえつける。そして、強い口調で言い放つ。

「ほう…私に指図するか」

文から威圧する様に立ち上る妖気が強まる。霊力の弱い涼介とすれば、それはまだ意識を保てるレベルではあるが、かろうじて保てるレベルというだけの話だ。だから、それも能力で押さえつける。膝を床につき、立膝の姿勢になるが視線は文から逸らさない。ハルは涼介の言葉を聞き彼を支えるように寄り添う。

「ええ、ここは喫茶店で飲食をしますところです。それに貴女は取材に来たはずだ。ならば、筋を通すなり、取材をしないなら帰っていただきたい」

文から漏れ出る威圧がなくなる。その表情が虚を突かれたように崩れる。しかし、また表情が親しみを覚える笑顔に変わる。その時小さく、面白い、という呟きが涼介には聞こえた気がしたが確かめる前に文が口を開く。

「あやや、これは大変失礼いたしました。私としたことが柄にもなくつい熱くなつてしまいました。謝罪を申し上げます。このようなことをしてかしておいて大変恐縮なのですが取材をさせていただけないでしょうか」

「いえ、もともとはこちらが先に手を出したような所もありますので、そのように恐縮されてしまいますと肩身が狭い思いです。ですので、頭をあげてください。取材でしたら

お受けいたします。それと、うちのハルが先ほどは申し訳ありませんでした。少々、妖怪の山の妖怪に何か思う所があったようで、文さん個人に思う所があるわけではないと思うので許してはもらえないでしょうか、ほらハル？」

頭を下げ謝罪する文に涼介が頭を下げ返し、ハルにも促し、頭を下げさせる。ハルも先ほどは山の妖怪ということに反射的に反応したようであらう。ただ涼介に寄り添っているだけで随分と落ち着いている。特別に能力を意識せずとも勝手に普段垂れ流しているそれだけで大丈夫なようだ。店内にいる三者全員が頭を下げ合い誰も先にあげようというのではない。このままでも拉致が明かないと思ひ涼介は話を切り出す。

「では、今回はどちらにも非があつたということで手打ちといたしましょう。ハル、私はこちらの文さんと話があるから二階の部屋で待つていてくれないかな？」

ハルは一瞬拒否を示す様に首を振りかけるが、それを止めおとなしく二階に上がっていく。今は落ち着いていてもまたどうなるか分からないと判断したのである。それでまた涼介を危険にするよりも頭を冷やしてこようと判断し、ハルはその場を後にする。

「さて、文さん。異変に関する取材以外にも当店についてもいかがでしょうか？」

涼介はそう言いながら、カウンターの椅子を一脚ひいて見せる。

「はい。それでは是非、謎に包まれた貴方のすべてを御見せ下さい」

文はそう言い、お茶目な笑顔を浮かべ涼介のひいた椅子に腰かける。

そして扉には張り紙一つ

『取材を受けているため取り込み中です』

コリコリと豆を挽く音がする。カウンターの中和外で涼介と文は向かい合う。

「それでは異変自体には関係ない?」

「ええ、そのとおりです。実際に大図書館から一緒にいた魔理沙から聞いていただければ裏もとれるかと思いますよ。異変の時は見学組でしたからね」

「見学組という?」

「異変の首謀者側と解決に來た解決人との弾幕ごっこを見学するグループです」

「なるほど。それでは途中から一緒に魔理沙さんといると言われていましたが、なぜ飛んで移動することもできない貴方が異変の現場であり里からも離れた紅魔館の内部、大図書館にいらしたのですか?」

「異変が起こる前に出張営業をしてほしいと依頼がありました」

「異変が起こる前といいますといつごろですか?」

「確か八月六日くらいだったかと」

「霧の出始める前日じゃないですか……」

訳がわからないと言いたげな表情し、困惑を漏らす。涼介は挽きおわった豆をフィルターに入れてお湯で抽出する。

「そうですね。パチュリーからすぐに異変を始めると話を聞かされましたね」

「それからずっと紅魔館にいたのですか？」

「はい、四日ほど前までお世話になっていました。ここに戻ったのは三日前ですね」

「それまでずっとあの吸血鬼の館にいて大丈夫だったのですか？」

「ええ、全く問題ありませんでした。みなさんとても親切でした。また仕事以外にも遊びに来いとレミリアさんに言っていたきましたしね」

「あの吸血鬼がですか!?どんな魔法を使っただんですか？」

「んー、まあ色々とありまして」

涼介はフランの事をあまり言いふらすのもよくないだろうと思いい口を噤む。抽出された珈琲の入ったカップをソーサーに置く。柵から角砂糖とブランデーを取り出す。

「その色々を知りたいのですが涼介さん。出来れば詳しく!!」

詳しくのあたりで目を爛々と輝かせた文が椅子から立ち上がり、涼介にカウンター越しで詰め寄るが、涼介はそれに取り合わず角砂糖にブランデーを染み込ませ火をつける。青白い炎がアルコールを纏った砂糖から立ち上る。文の視線がそれに奪われ勢いがそがれる。そして火の消えた砂糖をカップに落とし溶かす。完成した杯を文に供す

る。

「そのあたりは少々込み入っております、私の口からは説明いたしかねます。少なくともレミリアさんの許可がなければ私が説明することはないでしょう。それと、お待たせいたしました、こちらカフェ・ロワイヤルとなります。お熱いのでお気を付け下さい」

「あ、これはご丁寧にありがとうございます」

受け取った文は珈琲を口に運ぶ。好みにあつたのか口角が僅かに上がる。目ざとくそれを確認した涼介はその反応に笑みをこぼすと淹れるのに使用した器具の片付けに入る。

「……ふう。洋酒の香りが混ざっていい匂い。それに、なんだか心がすごく落ち着く」

かちやかちかと片づけを涼介はしている。つい漏れ出るように小さな声で文が感想を零す。その感想には先ほどまでの質疑の時のような、取材用に作られた丁寧で話しやすく感じさせるような明るさに、どこか感じる余所余所しさなかった。感想を漏らす声色に明るさはなく、されどそこには、純粋な賞賛と、崩れた口調から思わずこぼれ出た本心という印象を受ける。

事実、そうなのだろう。ため口が出た文は驚きに目を見開くと片手が口元を隠す様に覆う。しばらくその姿勢で固まる文だが、ゆつくりと口元から手を離すとこちらに背を向けて作業をしている涼介に視線を向ける。

「あのー、涼介さん。今のお聞きになりました？」

「え？すみません、お呼びでしたか？ご用件はなんでしよう？」

「あー、どうしてこの珈琲を選ばれたのか気になりました、何か理由などおありなのですか？」

文は内心で聞かれていないことに安堵する。初対面の人間に偽りのない本音の自分を見られそうになった。自らの内面を隠す天狗という種族の自分からすればありえない失態だ。何故、ああも簡単に外用の仮面が外れたのか分からず文の頭は混乱する。

そして今も涼介と話していると、心が落ち着き安心する自分に初めて気がつき頭の中はさらに混乱する。気持ち悪いと文は考える。思考は混乱しているのに、心は落ち着いている。その乖離が文に、危険を感じさせる。いや、頭は警鐘を鳴らすのに感情がついてこない。

「理由はちゃんとありますよ。天狗という種族は酒豪が多いと聞いております。珈琲の中にはお酒をそのまま入れて楽しむものや、珈琲のカクテルなどもあります、取材に来られた方にお酒を出すのも憚られます。カフェ・ロワイヤルならば酒精も殆ど飛びますし雰囲気は楽しめるので良いのではないかと提供させていただきました」

目の前で話をする彼の言葉を聞けば聞くほど、心が落ち着く。一先ずここは撤退しようと思いが働く。まず先に涼介を知る周りから情報を集めようと決める。しかし、早く

出ようと結論が出たのに、ここに残りたい、もつとのんびりしたいという思いが椅子から腰を浮かせてくれない。

「文さん、文さん？どうされましたか？ぼーつとされてどうされましたか？表情も少しこわばっているみたいですが、調子が悪いようでしたら取材の続きはまた後日でも構いませんよ」

その言葉に文は助かったと思った。

「いいえ、調子は問題ありません。ちよつと急用を思い出しまして、自分からお願いたことなのにどうしようかと考え込んでおりました」

そう言って申し訳なさそうな表情をとり、席を立つ。扉の外まで見送りに来た涼介に最後の質問をする。

「涼介さんと特に親しい方や詳しい方ってどなたかいらつしやいますか？喫茶店のご店主さんの人柄を第三者目線でも記事にしたくて」

「親しい方に詳しい方ですか？そうですね、特に親しくさせていただいているのは、藍さんに霖之助、幽香、上白沢さん、霊夢、魔理沙、パチュリー、咲夜さんにフランあたりでしょうか。詳しい方となるとそうですね、紫さんに藍さんあたりが特に詳しいのではないのでしょうか？」

文は出てきた名前に絶句する。紅魔館の面々はなんとなく想像がつく。霊夢や魔理

沙、それに人里の守護者である寺子屋の教師に雑貨店の店主は理解できる。しかし、花妖怪と八雲の二人は想定外もいところだ。まさに藪をつついたら蛇が出てきたという言葉がうってつけだ。

だからこそ知りたいと思う。霊力も弱く普通の人間に見える目の前の人物が何故大妖怪とも言える人物と親しく交友があるのか。そして、自分の感じた気持ち悪さの正体、絶対に突き止めてやると文は決意する。

「なるほど、なるほど。それでは、ぜひ参考にさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。もうございました。それでは、またいずれ」

そういうと文は返事も聞かずに飛び立っていく。その姿はあつという間に涼介から見えなくなる。残された涼介がポツリと呟く。

「途中から様子がおかしかったけどどうしたんだろう。いきなり、威圧するような人だったから気が短いかかと思っただけで能力を意識的に強く使っていたせいかとも思っただけ、それが原因だとしたらあの反応はおかしい。本当に何か用事があったのかな？」

そのつぶやきは誰にも届かない。文が威圧的だったのには理由がある。初めて来た場所なのに異様に緩む警戒心と心に抱く安心感。そのこと自体を文は自覚できてはいなかったが、無意識にその状態の自分に苛立っていた。だから、格下のそれも小間使いにしている白狼天狗よりもなお下の白狼の妖怪の威嚇がきっかけに不満が漏れ出た形

なのだ。

「わたしは、いったい何をしているんだ……失態だ」

文は幻想の空を駆けながら愚痴をこぼす。元来天狗とは、格上には媚びへつらい、明らかな格下には強気に出る。そして格上には媚びへつらいながらも弱みや弱点、本質を調べ、有事に備えるしたたかな妖怪だ。他者の情報を調べるといふ文化が変化したものが新聞だ。新聞とはいえももとはそう言った背景があり、今も記事にしないことでも調べ保管する。そんな天狗の新聞記者の自分が相手を調べに行つて素の自分をさらけ出しかけた。そのことが文のプライドを酷く傷つけた。

「絶対に暴いてやる。隅から隅まで、自分でさえ知らないことも暴いてやる」

涼介から離れ時間が経つたことで彼の能力の影響から脱した文は驚愕する。自分が警戒したくとも警戒できなかったことで涼介に恐怖を抱いていたことを、そして彼に對しいまだに安心感を抱いている自分に気がつく。だからこそあえて声に出す。

「おお、こわいこわい」

その言葉は嘲るように、貶めるように、見下すようなに、そんな響きを持った声色だ。自分が恐怖をしているなどと認めるのが悔しい。だから、その感情を馬鹿にするように声に出し、自らに言い聞かせる。

「見ていろよ、人間」

空を飛ぶ文の目つきは鋭く剣呑だ。素の自分を晒しかけ、逃げ出し、恐怖した。飛ぶこともできないほどに霊力の弱い人間相手にだ。だからこそ、文の意思は思いは強固となる。たとえどんな障害があろうと、調べ尽くしてやる、と。

結論から言うと、至極あっさり答えにたどり着いた。親しくもあり、知識も豊富なことが理由で最初に紅魔館の魔女を訪ねると簡単に答えを教えられた。そういう能力だからと彼女の知る詳細とともに教えられた。何故あっせりと教えたのか聞くと、貴女が警戒しているみたいだから誤解と教えてあげただけよ。教えた方が彼の身も安全でしょ？と見透かしたように笑う魔女に文は表情が引きつる思いだった。

何のことはない独り相撲だったのだ。警戒しなかったのは彼の能力と彼自身が吹けば飛ぶほど脆弱だからなのだ。だから、すべては自分の勘違いであり、心配はない。そう結論付けるまで時間はそうかからなかった。

だからこそ、文はまた取材に行く。

だからこそ、文はまた客として店を訪れる。

この安心と安らぎは能力のせいだと、自分の本心に建前を設けて。誰かに対して心から安心できて一緒に過ごすそんな時間があってもいいのではないかと。天狗の組織は縦社会でそういった交友ができてにくいのだ。だから、私がここで羽を伸ばしてもいいのではないかと、文はそう考える。この人間の能力を利用して心をリラックスしていると、ストレスを発散しているのだと言いかせる。

今はまだ、そんなのかもしれない。今はまだそれでいいのかもしれない。でも、これから先は分からない。

二人の関係がどう変化をするのか、それは誰にもわからない。

「涼介さん、取材前の一杯をいただきにきましたよー!!」

文の前に一杯のカフェ・ロワイヤルが供される。

数日後発刊された射命丸文の『文々。新聞』に桃源亭の記事が載った。
怪異!人たらしの店主!?

人里の外と中の境界上に建つ一軒の喫茶店がある。そこに人妖問わず誑し込む生粋のたらしがいて聞き、本誌記者である私、射命丸文が突撃取材を慣行した。その結論

をまず述べようと思う。その存在は実在した。数々の取材をこなし、対人、対妖関係のスペシャリストを自負する私でさえ及びもつかないたらしが存在したのだ。一度店に行き半刻も話をし、飲み物でも頼めば誰でもきつと誑し込まれることだと記者は確信する!!そして、客層を見ると女性の数が多い。それは里の人間だけにとどまらない。例えば、博麗の巫女、例えば紅魔館のメイド、そして紅魔館の当主に妹、はては人里の守護者まで誑し込まれているではないか。では、その店が危険なのか?と聞かれれば記者は首をひねるだろう。店主である白木涼介自身は力も弱く霊弾の一発さえ撃てないほどだ。白木涼介の力も弱い、本人も温厚であるため危険は皆無と言える。しかし、しかしここで記者である私はあえて警鐘を鳴らしたい!確かに危害的な意味合いでは危険はないだろう。だが、白木涼介は男である。成人の男である!!ゆえに!ゆえに!店に通う婦女子の皆様は決して絆されないように用心をするべきだ。出来るなら異性の同業者を伴うのを記者は進める。今後も記者は彼を追い記事にしていこうと思う。彼は、以前起きた赤い霧の異変にも大きく関係があったようだ。その事件への関与も調査し、事実が判明次第記事を発刊する所存である。追伸、店に行つた際何を頼もうか迷つた時はカフエ・ロワイヤルを頼むといいだろう。記者の一押しだ。

幻想郷のどこかで誰かの怒声が空へと向かつて鳴り響いた。

太陽の畑の特別なお客様に供する一三杯目

「またのご来店お待ちしております」

カランカランと鈴が鳴り、来店していたお客様が帰っていく。いつものように食器を下げて片付けを行う。磨いた食器を棚に戻した後に、カウンターの内側にストックとしておいてある豆が随分と少なくなっていることに気がつく。

ああ、補充をしないとと思いながら店の奥にある倉庫に向かうがどうやら最後の一袋らしい。

「また、仕入れに行かないとなあ」

涼介のもらした呟きは誰に聞かれることもなく空気へと溶けていった。

いつものように張り紙一つ

『豆の補充をしてきます』

ひまわりが咲き誇る通称、太陽の畑。黄金の絨毯のように広がるひまわりの中に彼女はいた。日傘をさし、赤と白のチェックの柄をした衣装を身に纏う彼女の姿は涼しげに見える。残暑厳しいこの時期に、何故あんなにも涼しげにしているのだろうか、と涼介は思う。これが妖怪と人との違いなのかなどと益体のない事を考えながら彼女を見つめていると、不意に彼女が涼介に気がついたのかゆつくりと振り返る。

「女性を背後からじつと見つめるのはあまりいい趣味とは言えないわよ」

「どうやら涼介がここで見ていることに気がついていたらしい。まったく恐れ入ると、涼介は舌をまく。

「いやなに、君があまりにも絵になるから声をかけるのをためらってしまっただけ」

「相変わらずの軽口ね。痛い目に合わないと言わないのかしら」

「三つ子の魂百までだから、どうあっても治らないだろうね」

「あら、それは残念」

なにが残念なのか分からないと涼介は首をかしげる。幽香はその様を見てクスクスと綺麗な笑みで笑い声を漏らす。

「それでどうしたのかしら？ 商いの種でも品切れになったの、商人さん？」

「ズバリその通りだよ、幽香。豆が切れてしまっただけ、また君にお願いしようと思っただけ、おっちらと尋ねてきたのさ」

「ふうん、この間のわんちゃんはどうしたのかしら？」

「別に君と会うのに危険はないからね。お留守番をお願いしたのさ。それにあの子は変に君を威嚇するみたいだからね」

「あら、私の縁起を読んだことないの？」

「二通り乗っている知り合いは読んださ。まあ、それも先代の阿礼乙女が書いたもので古い情報らしいからね。それに書かれた内容より私は自分の経験を優先できる程度には賢いつもりだよ」

涼介がそう答えると幽香はクスクスとまた笑い声を漏らす。機嫌よさげに日傘がクルクルゆったりと回る。

「あなたが賢いのならこの世にバカは存在しないわね」

「これはまた手厳しいな」

そう言いながら涼介は肩をすくめる。しかし、幽香の言は確かに正しいのだろうとも思う。でなければ、左腕の肉を抉られたり、吸血鬼の館にホイホイついていたりはないだろう。涼介は自分がどうにも危機感やら、危険に対する嗅覚が鈍いらしい事を自覚している。以前も博麗の巫女でもある彼女に死に急いでいるなどと言われた記憶がある。

「まあ、いいわ。そうね。三日後に収穫できるようにしておいてあげるわ」

幽香が予定日を教えてくれる。まったくすごい能力だと涼介はいつも感心させられてしまう。花を操る程度の能力、作物を咲かせたり実らせたりと、農業関係者には喉から手が出るほどの能力だろう。私のそれよりよほど素晴らしい能力であると、涼介は少しだけ視線に羨望の色を滲ませる。

「ああ、これはすまないね。また手間をかけさせてしまう」

「構わないわよ。その代わり以前と同じようにお願ひね」

「うん、了解したよ。えつと水やりの手伝いに、食事の用意、後は今回収穫した豆での一番初めの一杯を」

涼介がそう言うのと幽香はよくできました、とても言うように笑みを浮かべて頷いてみせる。彼女には世話になりっぱなしだ。だから、精一杯満足してもらえようように努めよう。涼介は心新たに決意をする。

ひまわり達に水を与えながら幽香と涼介は談笑をする。幽香は別段なにをするでもなく涼介の事を見ながらの会話ではあるが。

「そういえば、以前起きた赤い霧の時はこの子達は大丈夫だったのかい？」

紅霧異変と呼ばれる、以前涼介が咲夜に招待され、滞在中に起きた異変。館に拘束されてしまったからその当時の外の様子は伝聞でしか知らないが里の者達には体調不良

者なども出ていたらしい。であるならば、この子達にも影響が出ていてもおかしくないと考える。

「ああ、あのうつとうしい霧の事ね。別段どうということはなかったわ。でももしも害が出ていたら、タダではおかなかったかもしれないわね」

涼介は背筋に冷たいものを感じる。霊夢が太陽の畑に影響が出る前に解決してくれて本当に良かったと涼介は心底思う。でなければ、怒った幽香が紅魔館に殴り込みをかけたかもしれない。涼介はぞつとしない想像だ、と出そうになつた言葉を口の中で転がす。今度霊夢が来た時は食後の一杯につけるお茶請けは奮発していつもよりいいものを出そうと涼介は決意する。

「それは重畳だな。影響が出てないようになによりだ」

「あなたは随分と異変の時楽しんでいたみたいね？」

「えーと、それは何のことかな？」

「あの鳥の新聞に載っていたわよ？」

おのれ、あのブン屋と、小さく憎々しげに涼介はつぶやく。余計なことをまた書いたのではないだろうな、というか私も新聞を取っているのにその記事を読んだ記憶がないぞと内心で涼介は狼狽する。意図的に涼介に配らなかつたのであろう文に対し涼介の怨嗟は止まらない。

「あー、その、幽香?……その新聞には何て書いてあつたんだ?」
「聞きたいかしら?」

幽香が可愛らしく小首を傾げる姿に涼介は寒気を覚える。しかし、涼介は頷きを持つて返答をすると幽香はよくできましたというように笑顔で頷くと、表情を冷笑に変え記事の内容を語り出した。

——いわく、館のメイドに一服盛つて屋敷に招待させた

こちらとら飲食店だぞ、何で迷惑な風評を!

——いわく、門番に賄賂を渡し懐柔した

それは仕事中美鈴に差し入れをしただけだ!!

——いわく、当主に取り入り当主の妹に近づいた

違う!あれは利用されたのであつて自分で望んだことではない!!!

——いわく、図書館に座す魔女の体を撫で回した

あの天狗……赦されんぞ……いや、絶対に赦さん……

——いわく、当主の妹を誑かし昼夜にわたつて地下室にて二人きりで籠っていた

……早く、早く博麗の巫女に退治依頼を出さないと

涼介が苦虫を潰したような顔を上にあげ目元を手で覆う仕草を見ると、案の定幽香は笑い声を溢す。

「まったく、笑えないよ」

「まったく、悪い男ね」

「勘弁してくれ」

「そうやってあつちこつちで女の子を引つ掛けて。ああ、かわいそうな私」

「そう畳み掛けるようにして虐めないでくれよ。泣いてしまいそうだ」

「あら、それならもう一押しかしら」

「今度から目薬を常備しておかないとな」

「悪い男ね」

涼介は、これはとても勝てそうにないと敗色濃厚な会話の行き先を察すると、戦略的撤退とでもいうように黙々と作業を行う。返事を返さずに急にてきぱきと作業を始めた涼介を見た幽香はその真意を悟ると、クスクスと楽しげに笑う。その笑い声は涼介が作業を終えるまでついぞ途絶えることはなかった。

風見幽香は思い出す。目の前にいる危機感が薄く何処か壊れている稀有で面白い人

間との出会いのときを。

それは去年の初夏頃だった。幽香は咲き始めたひまわりの世話をしながら、太陽の畑を散歩していた。いつものように静かな日になるはずだった。しかし、太陽の畑に侵入者がやってきた事を草花たちが幽香に教える。花を操る程度の能力を持つ幽香には、花の感情を察することもできる。

「こない日にごこの誰かしら?」

せつかくの心地を邪魔されて、少しだけ苛々とした幽香がその感情を逃がすように口に出す。せつかく咲き始めたばかりなのだ血の匂いが混ざるのはいただけない。だから、穏便に済まそうと侵入者と出会う前にある程度気持ちを落ち着けようとしたためだ。

「ごっつちかしら?」

草花の誘導に従い、ゆつくりと静かに進む。侵入者に近づくにつれ草花たちの感情に安心の感情が浮かんでいるのが分かる。どうやら、太陽の畑を荒らすつもりで来た輩ではなさそうだと幽香は思う。そして、侵入者を視界に捉える。こちらに背を向けた、成人の男性。長めのズボンに半袖のワイシャツという里ではあまり見ない変わった服装ではあるが、霊力も乏しいただの人間のような。その男はどこかを目指しているのか手元の紙を見ては、道を探すようにひまわりたちを見渡す。

「すぐに会えると言っていたのに全然会えないじゃないか」

男はそう不満を漏らす。その言葉に幽香は自分を探しているのだろうとあたりをつける。太陽の畑で人探しなど自分以外には存在しないだろう、あの男がとてつもない方向音痴でない限り、と。

それはいいとして、さてどうしたものかと幽香は考える。私に用事がある様子であり、その内容も気になる。しかし、せつかくのいい気分の水を差されてこちらは苛々ととまで考えたところで幽香ははてと、首をかしげる。

先ほどまでであった苛々とした感情がなくなっている。それどころか、気持ち安らいていることに幽香は気がついた。幽香はそれを不思議に思う。長い年月を生きているため、どの程度の事をやれば先ほどの苛々が解消されるかも正確に把握している。

だからこそ解せないのだ。何もしていないのに気持ち安らいていることに、そして気がつく。男の周りの草花も安心しきっていることに。それはもしかすると幽香が近くにいるときと遜色がない程である。ゆえに幽香は、面白いと思う。退屈を紛らわすことができそうなおもちやを見つけた、とその口元に笑みが浮かぶ。

「面白〜」

そして、口に出しクスクスと笑いをこぼす。その声に男が気がつき振り返る。聞こえるように声を出したのだからそうではなくてはと幽香は満足気だ。

「あ、こんにちは。もしかして風見幽香さんでしょうか？私は白木涼介と申します。本日は風見さんにご相談したいことがあります」

男が涼介と名乗り、幽香に挨拶をする。それはとても丁寧なもので、どこにも幽香に對する恐れがない。そのことがますます幽香を楽しませる。

「あら、私をわざわざ訪ねてくるなんて酔狂な人間ね。私の噂を聞いたことがないのかしら？」

「いわく、人間友好度最悪。いわく、太陽の畑への侵入者には容赦しない。いわく、他社の苦痛を喜ぶ残酷な妖怪。いわく、いわく、いわく、悪い噂に事欠かない悪名高い妖怪として里では知れているはずだ。」

「いえ、噂はお聞きしております。ですが、私はここより他に頼るあてがないのです。それならばと、噂は噂と割り切ここに来たしだいです」

「死ぬのは怖くないの？」

あえて威圧して幽香は問いかける。

「いいえ、死ぬということはとても恐ろしいです」

そう答える涼介の表情に陰りが見える。誰かの死を痛んでいるような、悲しみの表情だ。涼介は目の前に妖怪があるのにそんなことを気にもとめずに誰かの死を痛んでいる。こいつは誰かが死ぬことで自分の周りから失われることの方が苦痛なのだろうと

幽香は察する。目の前にいるのに恐れられない、それは幽香の妖怪としての誇りを憐る。恐れさせてみたいと、幽香に思わせる。

「私は妖怪よ？どんな要件か知らないけど妖怪は人を襲うのよ、怖くないの？」

威圧を、周囲に振りまく妖力を増やす。その圧力に耐えかねてか、涼介が後ずさる。しかし、次の瞬間には元の場所に戻るように足を踏み出し応える。

「別にそれは怖くありません。外の世界では人間が人間を襲います。ここではそれが少しだけ変則的だけです。それに妖怪の中には、特に人型を取るほど優れた知性と力を持つものとは分かり合えると思っています」

「どうしてかしら？」

「言葉が通じ、心があるからです。ならば、分かり合える。それは少しだけ形態が違うだけの同じヒトです。私はそう信じている」

「貴方、何処がおかしいのかしら？」

「そうですね。妖怪に懸想をしたくらいですからね」

「あら、素敵ね。それは叶ったのかしら」

「フラれてしまいました」

「甲斐性なしだったのね」

「その通りです。甲斐性なしのロクデナシでした」

「きつと、その相手は見る目があつたのね」

「私に見せる面がなかったただけかも知れませんか?」

「見る所なしと判断するのもまた見る目の一つよ」

「なるほど、確かにその通りですね。これは私の負けですね」

軽快な会話が続く。いつの間にか幽香は本心から笑っている。涼介にも緊張はない。和やかな雰囲気か二人を取り巻き、威圧で撒かれた妖力はいつの間にか消えている。

「じゃあ、敗者にはなぜここに来たのか洗いざらい話してもらわないとね」

幽香は楽し気に涼介を促す。涼介も笑いながらポケットの中から一粒の種を出しそれに応えようと口を開く。

「これは私の未練です」

「幽香? おーい、幽香? 笑いながらぼーつとしてどうしたんですか? 気味がわるいですよ? 不気味ですよー幽香さーん」

過去に思いを馳せていた幽香の意識が目の前で手を振る男に今へと呼び戻される。心配気な表情の中に何処か面白がる表情をした涼介が幽香に呼びかけながら手のひらを視線の先で振るっている。

「女性に対して気味が悪いだなんて悪いことを言う口ね」

幽香はそう言いながら涼介の両の頬を軽くつねる。幽香にとっては軽くとも涼介にとってはなかなかの苦痛となる。

「いひやいいひやいいひやい！ふうははん、ふひとへひやいはふ！」

「意外とその口が取れた方が見れる顔になるかも知れないわね」

「いあいあいあ、ほんはほふひひやはいへふは」

「不気味かどうかは取れてからのお楽しみよ。決め付けはよくないわ」

「ふうははん！ふうははん!!」

抓られている痛みに耐え切れずか、それとも痛みに反応する生理的な涙かは判別がつかないが、瞳を潤ませ涼介は許して欲しいと思いを込めて幽香の名を叫ぶ。そんな情けない顔を見ながら幽香は目薬はいらなかったわねと関係のないことを考える。そして、退屈を潰してくれるこの変わった友人を今度はどう困らせてやろうかと口元をほころばせながら悩み始める。

「ふうははーん!!」

子猫が甘えるさいにカリカリと引つ掻くように（ そんな可愛いものでは断じてな

いが）三日間にわたり、幽香に虐められつつ涼介は代価を払う。商品たる豆を手に入れたときの涼介の感動はひとしおであったことだろう。ああ、労働によつて得られる対価とはかくも尊いものか、と涙するほどの感動を示す涼介に幽香の視線はどこか呆れ気味であった。涼介は早速、その豆を浅く煎り、自前のミルで砕いていく。シンプルなアメリカンコーヒーを涼介自身と幽香の分を入れて、彼女の分をそつと差し出す。差し出されたカップを幽香がそつと持ち上げ口へと運ぶ。一口、二口と幽香がコーヒーを飲んでゆき、そしてカップのふちがその唇から離れ、口元が小さく綻ぶ。

「うん、良い出来ね。持つて行つて構わないわよ」

「……ふう。この一瞬が一番緊張するね」

そう言葉を漏らすと涼介もコーヒーを口へ運ぶ。

「うん、良い出来だ」

「あら、そんなに緊張するなんて私は怖いかしら？」

「そういう事じゃないさ。君の育ててくれる豆はいつも素晴らしい出来だよ。これでダメなら問題は私の技量さ。それに、何だかんだこの商売が出来ているのも幽香のおかげだからね。最初の一杯をお出しする特別なお客様、とあつては何回やつても緊張するさ」

涼介がそう言い切ると、幽香は見開いた瞳をパチクリとさせる珍しい表情をしてい

る。涼介の視線に気がつくくと、表情はいつも通りに戻ってしまふ。

「まったく…怖い、怖い」

幽香はそう言うのとコーヒーをまた口元へと運び、こう漏らす。

「今度はお茶請けに饅頭でも用意してもらおうかしら」

涼介が首をかしげると、幽香の楽しげな笑い声がひまわり畑へと消えていく。

満月の夜に供する一四杯目

いつものように張り紙一つ

『今宵は満月につき、閉店!!』

朝のうちに珈琲を淹れた水筒を三つ用意する。一つは上白沢さんへ。一つは竹林の近くに住む不死の少女へ。一つは満月の下の君へ。用意ができたならそれらをいつものリュックに詰めて外へと出かける。まだ、日差しは高い。

「先生ー、上白沢先生ー。いつものお届け物です」

涼介が寺子屋の横に併設されている平屋の戸を叩きながら尋ね人の名前を呼ぶ。少しすると中からとたとたととと軽快で少し早足気味な足音が聞こえてくる。ガラガラと音を立てて戸が開く。

「ああ、涼介かよく来たな。少し上がっていくといい」

「はい、お世話になります」

慧音の案内に従い涼介は奥へと通される。

「毎月毎月すまないな」

「構いませんよ、いつもお世話になつて居るのは私の方です。それに他にも用事があるので一人や二人分くらい変わらないうですよ」

「そう言つてもらえると少しは気が楽になるな」

通された今は数多くの書物や巻物が奥から出されたのか並んでいる。

「散らかつていてすまないね」

「いつも一緒じゃないですか」

涼介がそう言うのと慧音の顔に苦笑いが浮かぶ。

「それではいつも私が散らかしているみたいじゃないか？」

「私が来るときはいつも散らかつて居るのでどう表現しようと変わりなかつたか」と

涼介は慧音の部屋が散らかつて居る理由を正確に把握して居る。慧音は半妖で半分が白沢という妖怪だ。月に一度満月の晩に力をまし、歴史の編纂をして居る。だから、夜中にスムーズに作業をするため日中から準備を行つて居る。その結果部屋の中が物で溢れかえつてしまうのだ。

「まったく、そんなことじゃ女性と付き合うとき苦労するぞ」

「いつも誰彼構わず口説くのをやめるようにと怒られてしまったので改めようかと思ひ

まして」

「君の口は減らないな」

「ええ、たつた一つの大事な口なので」

「はっはっはっ、妹紅に頼んで焼いてもらいたいな」

「調子に乗りすぎました」

涼介が頭を下げで謝罪をする。慧音がその頭にコツンと軽くゲンコツを落とす、顔を上げた涼介と笑いあう。

「相変わらず元気そうで安心したよ」

「どうしたんですかまたそんなことを改めて言うなんて。時折店に来て確認してくれているじゃないですか」

涼介が朗らかに笑みをこぼしながら慧音にそう言う。そこには生真面目な慧音に対しての感謝の念も込められている。

「君は三日も目を離せばそのあたりで死んでいそうだからな」

真面目くさった顔でそう零す慧音に涼介は苦笑いをするばかりだ。

「去年の夏ごろに仕事を探すと言って出ていけば、太陽の畑の花妖怪の所に出向く。秋になつたら、秋の味覚拾いに行くといい、妖怪の山の近くで腕の肉を噛み千切られて白狼の妖獣を拾ってくる。冬には冬で、幻想郷の冬を舐めていましたと言いながら、防寒

具が足りないとか家で凍えている。そして極めつけは先日の異変の最中はその爆心地でずっと過ごしていたと言うじゃないか。君は自分が己の身を守るのも危ういただの人間だということをきちんと正しく理解するべきなのだ」

慧音がつらつらと涼介の過去の悪行を語る。聞かされる涼介にとつては耳の痛い話だ。それに慧音が本心から心配してくれているのがわかるからこそ、反論が難しい。さらに、もつとも命の危険があつた異変の最中にしたフランとの人形ごっこについては話していない。その詳細を知るのは紅魔館の魔女と当事者だけだ。

「でも、毎回何とかかんとか生きて帰ってきていますし」

「そういうことを言っているのではない。もつと自分を大事にしてくれと言っているのだ。君といい、妹紅といいどうして自分の事も大事にしてくれないのだ」

「……難しい話ですよ」

慧音の心配を含んだ暗い声に涼介は申し訳なくなるが、素直に聞き届けられないため苦笑いをするより他はない。

「君も妹紅と似たようなことを言うのだな」

慧音の顔はなぜか泣いているように涼介は感じられる。その顔を見ていると涼介は胸が締め付けられる思いがする。

「たぶん含まれた意味はだいたい違うと思いますけれどね。そろそろ行きます。妹紅の所

にもよっていかないといけないので」

涼介はそういうと立ち上がり荷物を持つ。逃げるような涼介の行動に慧音は深いため息を一つこぼすと同じように立ち上がる。

「そうか、妹紅にもよろしく言っておいてくれ」

「はい、先生のあり難いお説教も一緒に」

「それは君にも言っているのだがな」

「ほら、他の子に教えると理解が深まるというじゃないですか」

「君は出来が悪すぎてそれでは足りないよ」

「これはご迷惑を」

そんなことを言い合いながら玄関へとたどり着く。靴を履き、扉を出た涼介は振り返り慧音に顔を向ける。

「でも、そうやって心配してもらえるのはうれしいものですよ。だから、上白沢さん。ありがとうございます」

そういつて涼介は腰を折り、頭を下げる。

「私がお節介でしている事だから礼なんていらさないよ。それに改めてくれればそれでいい」

「ははは」

「笑つてごまかさない。本当に君は子供みたいなところがあるな。今日はもうくどくど言わないよ」

「夜の仕事がありますもんね」

「そうだな。珈琲はすごく助かっているよ。眠気はなくなるし、興奮した心も落ち着くから仕事がはかどる」

「それは重畳。それでは」

涼介は最後のもう一度軽く頭を下げるとその場を後にした。その後ろ姿を見送る慧音の顔は少し寂しげであった。

迷いの竹林と言われる場所の近くにそれはある。見た目は廃屋ともとれる古い木造の家。涼介はそこを訪れる。

「おーい、妹紅！いるんだろう？」

涼介はたてつけの悪い戸を強めに叩く。家主は雨風しのげて住めればいいと大変にワイルドな性格をしているためか、叩いている戸はガタガタと揺れ外れそうさだ。

「いるいる、だからそんなに強くたたくな、涼介。戸が外れるだろ」

「これを機に作り直すといい。手先、器用じゃないか」

「古い物にもそれならではの味があるんだ。これはこれでいいもんだよ」

「なら、叩かれて戸が外れるのも、それで壊れるのもまた味じゃないか？」

そこでガタガタとつつかえながら戸が開く。

「味は味でも嫌いな味もあるんだよ。いらつしやい、涼介」

「なるほど、それは一理あるな。お邪魔するよ、妹紅」

戸の向こう側に妹紅と呼ばれた少女がいる。足につきそうなほど長い白髪と赤い瞳、白のワイシャツと赤いモンペをサスペンダーでつけた服装をしている少女がいる。

「今日はいつたいたいどうしたんだ」

「また忘れてる。今日は満月だよ」

「ああ、アイツの所に行くのか」

「そーいやそーうな声と顔をするなよ。別に妹紅が合うわけじゃないじゃないか」

「話題が出るだけ嫌なのさ」

「相変わらず理由は知らないけど根は深そうだね」

「ああ、1000年の怨恨さ」

妹紅は部屋の中にさっさと一人で行くと思間にあがって座り込む。その様子に肩を竦め涼介も中へとお邪魔する。そしてリュックから妹紅の分の水筒を取り出し渡す。

「はい、これ」

「お、へへへ。悪いね」

妹紅はそれを受け取ると嬉しそうに胡坐をして出来る足の間に水筒を挟む。

「構わないさ。これで今晩喧嘩しないでくれるならさ」

「一回喧嘩しただけでこんなハイカラなものもらえるなら一晩くらい我慢するさ」

「ハイカラって：まあ、たしかに幻想郷では手に入りにくいし、最近私が広めたからハイカラとも言えなくはない：のさか？」

「なんでもいいさ。少なくとも私が若いころには周りにはなかったものだしさ」

「若い頃ってねえ。そういう意味じゃないのは分かるけど体力の衰えが見えるおっさん手前の私としては中々聞き逃せないね」

「いいじゃないか、老いるつても味があるよ」

「せいぜい噛みしめるさ」

「ま、私の分までお願いするよ」

妹紅のその言葉に涼介が顔をしかめる。

「そうだね、老いることもできない君の分も堪能するよ」

「血液でも抜いて貧血にでもなれば雰囲気は味わえる物かな」

そう真面目な顔をして真剣に悩む妹紅に頭痛がしてくる。そして、涼介は慧音に言いたくなる。慧音は私と妹紅を似たものというがまだ自虐まではしていない、と。

「妹紅そんな聞いているだけで痛そうな話はよしてくれ。上白沢さんに言いつけるぞ」
「なっ!! 言いつけるのは汚いぞ。なんで、まだ実行もしてないのに怒られないといけ
ないんだ!!」

妹紅が珈琲の水筒を脇に置き片膝になって抗議してくる。

「さつき、上白沢さんの所に行つてきてね。妹紅に説教を預かつてきたんだ。だから、
さつきの発言を聞くと先生の説教は免れられないだろうね」

「おま、涼介。その説教だつてどうせお前とセットだろ、この死にぞこない」

「ご名答。さすが付き合いが長いだけあつて先生の思考をよくわかつていらつしやる」
「たまに酒を飲んで文句と一緒に愚痴を聞くからな」

「文句が一緒に盛り君も大概だなあ」

「私とセットで叱られるお前も大概だろ」

そしてどちらともなく苦笑いが漏れる。

「で、涼介相変わらず死に損なつてるいんだつて?」

「その言い方はやめてくれよ。頑張つて生きてるんだから」

「頑張っている奴はほいほい危険なことほしないもんだよ」

「耳が痛いな」

「耳が痛いのは自覚の証拠」

「年の功かね、手ごわいなあ」

「不利な話題で戦うからさ。私は弁の立つ方じゃないさね」

「だろうね。見たらわかる」

「どういう意味なんだ」

「お好きにどうぞ」

「失礼な奴だな、涼介は」

「気安くていいだろ？」

「ま、たまにはいいさ」

そして妹紅はふんふんと鼻歌を歌いながら水筒のコップを使い珈琲を飲む。

「んー、また酒と違うこのすつと目の覚めそうな感じがいいね」

「相変わらず、かなり濃い目のブラックが好きなんだな。私でも妹紅の飲むそれは苦す

ぎてたくさんはいらないよ」

「こういうとがったモノはさらにとがらせて飲むのも楽しいもんだな」

「そこまで刺激に飢えてないからなあ」

「刺激の多そうな人生だもんな、お前は」

妹紅はそういうと新聞を一つ涼介に投げてよこす。そこには幽香の言っていた内容の新聞がある。顔がひきつるのが涼介は自覚できた。

「おい、なんでこれ今出した」

「お好きにどうぞ」

涼介はお好きにと言われたのでそれを丸めてリュックにしまう。

「失礼な奴だな、妹紅は」

「気安くていいだろ？」

「今はおなか一杯」

その答えに妹紅は笑い声をあげる。

「ご機嫌がいいようで大変うれしゅうございます」

涼介の不満その声は妹紅の笑い声にかき消される。

その後夕暮れごろになると涼介は妹紅に別れをいい竹林へと入っていく。妹紅がいつもの様に竹林の妖精たちに目的地まで惑わせない様に言い含めてくれたおかげで目的地まで迷うことなく進むことが出来る。

「今日は私の方が」

「遅いわよ」

目的地の竹林の中にぼつかりと竹の無いスペース。大きな岩がありその周囲に竹が生えておらずここだけ空が望める。そこに着物姿の女性がいつの間にか現れている。空いた穴から空を眺めて涼介に視線は寄越さない。そこには先ほどまで何もなかったはずだと、涼介は覚えている。しかし、涼介は原因を考えない。幻想郷では常識は通じないのだから。

「ああ、また負けてしまったか。先月は来る事が出来なかったからせめて今回は早く来ようと思ったのだけれどダメだったみたいだ」

涼介は過去に迷いの竹林で迷子になった際ここにたどりつき、目の前の彼女と会った。着物の様な服を着た高貴な雰囲気醸し出す、黒の長髪をした少女。息をのむような美人とでも称されるのかその容姿は涼介が幻想郷であつた人々の中でも抜きん出ていると言える。迷子の出会いの時に色々と話をしていつしか満月の夜にはこの場所で、二人でお月見をしている。しかし、先月の満月は紅魔館でレミリアと霊夢の弾幕ごっこを見ていたので来る事が出来なかったのだ。

「別に約束をしている訳ではないからそんなこと気にしなくていいわ。私がここで満月を眺めていると貴方がここに来るだけよ」

そう話す少女の態度は素っ気なく、視線はいまだにこちらを一度も見ない。

「暗黙の了解というやつだと思つていたよ。それにまだ夕暮れで月は出ていないよ、満

月の君？」

涼介は目の前の少女が輝夜という名だと知っている。しかし、それは名乗られたのではなく、妹紅が過去にポロリと何度か零したことがあるからだ。互いに名乗ったことは一度もない。だからこそ涼介は、彼女を満月の君、もしくは月下の姫と呼んでいる。名乗らないのには訳があるのだろうと辺りをつけて。

「あら、私がいつからここに居ようと貴方に関係ある？」

「ここに涼介が来て初めて輝夜の瞳が涼介をとらえる。

「いいや、ないよ。満月の君の好きな時好きな場所に」

「よろしい」

涼介が、従者がするように腰を折りそうという輝夜は満足げに頷く。輝夜は涼介のこのういうふざけて行う恭しい態度を気に入っている。輝夜が昔の貴人が来ているような着物を着ているのもあるが、彼女の振る舞いが優雅で自然とそういった雰囲気を感じさせるという理由もあり、そういう態度を取ったところ反応が良かったのだ。それからはこうして時々、冗談交じりで行うことがある。

「少し早いですが茶の席のご用意をいたしましたでしょうか、月下の姫君」

「そうね、たまには黄昏時のお茶というのも素敵かしら」

輝夜が、ふんわりと笑う。その笑顔は魂が抜けそうなほど妖しく美しい。

互いに何か熱心に話すことはなく、静かに空を見上げながら時折思い出したように話をする。そんな静かで居心地のいい空間。あたりはすっかりと暗くなり月がちょうど穴の真上に位置したころ、それを見上げたまま輝夜がまたぽつりと言葉を漏らす。

「今日……貴方に約束している訳ではないといったわよね」

「そうだね。それで私は暗黙の了解だと思っていたよと答えたね」

「貴方は本当に暗黙の了解だと思っていたの」

「会話の上での方便かな」

「そう」

「そうだよ」

そしてまた輝夜は黙る。鈴虫の鳴く声が聞こえてくる。

「それがどうかしたのかい？」

「……それならあなたはどのようにしてここに来るの？満月の見えない雨の日も雪の日も？」

雨の日や雪の日と言われ、涼介は心当たりがあった。こんなことももう十か月以上も続けている。機会は十回あったがそのすべてが晴れであったわけではない。雨の日もあつた。雪の日もあつた。涼介は傘を差しこの場で一刻ほど待ち、輝夜が現れないのを

確認してから帰っている。雪の日の夜にそんなことをして、高熱をだし死にかけて、慧音について防寒具が足りなかつたようだと嘘までついたのだから。

「さあ、どうしてだろうね」

「貴方の事なのにわからないの？それとも私に懸想でもしちやつた？」

輝夜がこちらを見て笑う。その瞳は鋭い光を宿しているが。涼介はその視線から瞳を逸らすと月を見上げる。しかし、その瞳は月ではない、昔の記憶を見つめている。

「初めて君を見た時に寂しそうだと思つたからかな？知り合いが時折見せた表情に似ていたんだ。今思えばあの顔はどこかも戻れない遠い昔を見ていたんだと思う」

それは遠い昔のまだ妖怪が外の世界でも人の世界に混ざつていた時代だったのだろうと涼介は想像する。涼介の答えに、輝夜が小さく息をのむ声をする。

「だからかな、ほつとけなかつたんだ。そのまま一人にしてしまつたら消えてしまひそうだったから」

涼介は視線を輝夜に戻す。その顔に浮かぶ表情は泣き笑いのような情けないものだ。輝夜はその答えを、顔を見るとそつと瞳を閉じる、少しの合間鈴虫の鳴き声だけが響く。そしてゆつくりとまた瞳を開ける。

「そう。あともう雨と雪の日は来なくていいわよ。私もその日は来る気はないから」

「そうかい。でも、雨の日も雪の日の事も知っていたならその時に帰るように言つてく

ればいいのに」

「あら、嫌よ。だってその時の貴方は知らない人だもの」

「それじゃあ心配してくれる今は？」

「難題の挑戦者候補かしら？」

「何だい、それは？そこは友達と言って欲しかったね」

「ふふ、変な所で韻を踏まないでよ」

その日より少しだけ二人の距離が縮まった気がする。

その日の朝、涼介は桃源亭に戻り、リュックの整理をしていると妹紅からもらった新聞がなくなっている事に気がついた。しかし、どこかで落とした記憶もなく、誰かが出した記憶もない。釈然としない物を感じるが、いくら探しても無い物は無いと割り切り諦める。その新聞は今よりだいぶ後に思いもよらないところから出てくることになる。

秋の味覚と人形師に供する一五杯目

差し込む朝日のまぶしさに眠気を払われ、起床する。ここ最近では随分と寝やすくなった。残暑も過ぎ去り秋も深まってきた。外を見やると紅葉に染まる木々が視界に飛び込んでくる。

「うん、炊き込み御飯が食べたいなあ」

我ながら風情が無いものだと、苦笑する。

それはともかくとして今日は臨時休業とし、キノコ狩りにでも行こう。

思い立ったが吉日とばかりにリュックを背負い出かける。ハルはいつものごとくお留守番。

いつもの様に張り紙一つ

『キノコを探してまいります』

魔法の森でのキノコ狩りの前に、迷いの竹林で竹の子を一つ掘りかえす。すれ違った妹紅に朝の挨拶を一つして、意気揚々と森へと舵をとる。森に入る前に香霖堂で購入し

たガスマスクを被り準備は万端と、涼介は気合を入れる。

「いざゆかん、キノコ狩りへ」

珍しく気分が高揚しているところもあるが気にする事なく森へと入る。キノコを入れる袋と魔理沙著の食べられるキノコのメモを片手にキノコ狩りを始める。

「うーん、やっぱり見分けるのが中々難しいなあ。大人しく里で買ったほうが良かったかもしれない。でも、またこういうのも風情があるというか何というか」

食べられるキノコ自体は見つけられているがいかんせん、見つけた割合的に対し食べられないものが圧倒している。その結果により感じられる徒労感からか、ついつい不満が口をつく。

「次回は魔理沙に頼んで案内してもらいなから探す事にしようかな」

確か彼女は霧雨魔法店なる、何でも屋もやっていたはずだと思いつく。相場はわからないがそこまで高額にはならないだろうと涼介は皮算用を始める。次回のキノコ狩りへ向けて改善点を考えながら草むらを漁っていると涼介の背後より声がかかる。

「その不審者、私の家の近くで何をしているの？」

剣呑な声色で問いかけられる。涼介が振り返るとそこには見知った顔があった。時折店に訪れる人形師のお嬢さんであった。サラサラとした金髪から覗く碧眼が宿す光

は剣呑だ。

「ああ、すまない。せつかくの秋だったからキノコ狩りをしていたんだ」

「そんなマスクまでして?」

言われてみればと涼介は気が付く。ガスマスクをした人物が家の近くの茂みを漁っていたらさぞ怖い事だろう。外の世界なら事案発生だ。

「いや面目ない、この森の瘴気に耐えられるマスクを香霖堂でお願いしたらこれしかなかったんだよ」

そう言いながら息を止め少しの間だけマスクを外し、再びつける。

「やあ、アリス。こんなところで奇遇だね」

「あら、バリスタさんだったのね。それで何故こんなところで一人でキノコ狩りをしているの?」

「いやー、今朝方急に秋の味覚が食べたくなって。妖怪の山のほうが近いのだが、昨年秋季の味覚狩りに山を散策していましたら天狗の皆様方に追い出されてしまいましたね。それで今年はこちらにお邪魔しようかなと考えた次第です」

「なるほど、確かにあの山の住人は排他的なもの。災難だったわね」

「知らずに人の住処に入ってしまった私の過失だね。そしてそれはまた、今回も然り。すぐにここから離れるよ」

「構わないわよ。それにもう暗くなるから一人で出歩くには危ないわ。近くにあの白狼ちゃんもいないみたいだし、うちに寄って行きなさい」

「このような時間に女性の家に厄介になるのは心苦しいものが」

「ここで見捨てて、あなたの珈琲が飲めなくなるのは避けたいのよ。だから、ここは私のわがままを聞いてくれるかしら？」

誠にカッコいい女性じゃないか、自分に男性としての自信がなくなりそうなほどに、と涼介は思う。そして、幻想の魔女たちは親切な所は共通しているとも。

「それなら、白雪姫よろしく、白馬の王子様の御招きにあずかろうかな」

「珈琲を出すバリスタたる貴方が、覚めない眠りのお姫様だなんて面白い例えね」

そう切り返すとアリスは見惚れるような笑みを一つ。涼介は自分のジョークセンスはやはり皆無のようだ、これでは笑われてしまっていると内心で嘆く。だが、笑われるだけでこの微笑みが見られるのならそれはそれで良いのかもしれないと思ひ直す。そんな事を真面目に考えるのだから男という生き物はやはり愚かなのだろう。

トントントンと食材を切る小気味良く軽快な音が室内に響く。アリスは、不審者容疑のあった涼介を追い払うために止めていたのであろう作業を再開している。一宿の恩

という事で、夕飯の準備をさせて欲しいと涼介が頼みその用意をさせてもらいながら、視界の端のアリスへと視線をやる。その表情は真剣そのもので変化がなく、まさに人形のような整った容姿も相まって美しい自動人形の様だ。そこには、吸い込まれる様な魔性を感じる。

——ほら、流し目でこちらを見ているあの瞳も、睫毛も長く綺麗な碧い宝石の様な、ん？こちらを見ている？

「そんなにジツと見られると、作業がしにくいんだけど。というか、貴方の手も止まっているわよ」

「これは失敬、仕事のできるカッコいい女性にいつい見惚れてしまっていたよ」

言葉で謝罪をすると涼介は作業を再開する。隣で調理の手伝いをしてくれている、上海と蓬莱が腰に手を当ててまったりと、と言いたげなふるまいをする。本日のメニューは拾った筍とキノコを使った炊き込み御飯がメインだ。銀杏や栗も幾つか拾えたので茶碗蒸しや金団を作るのもいいかもしれないと考え、上海達にも涼介は仕事を割り振る。

「いつか本当に誰かに刺されそうね」

「これはまた、心外な評価だな」

「そうかしら？ 一般的な評価のつもりよ。みんなもさぞそう思っているわよ、きつと」

「里の若い子や寺子屋の半獣に、悪魔のメイド、それに太陽の畑の花妖怪、ああ九尾の狐もそう思っついそうね。他のお客さんも大なり小なりそう思っついと思うわ」

「うちの店の常連さんみんなか。それは怖いな」

「原因は貴方のその軽い口なのは明白なだけけどね」

「思ったままを言っついいるだけだよ」

「だからこそ、よ」

しばしの沈黙に、包丁の音と時折彼女が布を裁断する音が混じる。

「貴方の近くにいと安心する上に、そんな風に言葉を重ねられちゃうとね。里の普通の子なんてコロツといつてしまうのじゃないかしら。それに貴方垢ぬけているし」

「安心するのは能力に起因するものだろうし、垢ぬけて見えるのは外から来たからそう見えるのだろうね」

「難儀なことね」

「自業自得、というものだろうね」

涼介は内省する。確かに自業自得だ。そういう作用があることは薄々わかっていた

のに直さなかつたのだから。いや、染み付いた性格故に直せなかつた、が正しいのかも
しれないがと考える。

「今の表情は素敵だつたわよ」

涼介の百面相がお気に召したらしい。やはり、幻想郷の少女たちはちよつといじめつ
子が多いみたいだと涼介は再認識する。

「勘弁してくれ」

「考えておくわ」

それは本当に考えておくだけなのだろうなど涼介は思う。あながち外れていないの
だろう、その予想は。

「ご馳走様でした。すごく美味しかったわ」

「お粗末様でした。そう言ってもらえると嬉しいものだね」

食後の緑茶を飲みながらアリスが涼介に視線を向けて賞賛を送る。

「美味しい料理が作れるのに何故お店で出さないのかしら？」

料理は出しているはずだと、涼介は首をかしげるがアリスの疑問に気が付いた。涼介
が店で出している料理は軽食で今回の様にしっかりと時間をかけて作る様な物はない。

「もともとは外の世界では今みたいなお店じゃなくて、普通に料理人だったからね」

疑問に対する直接的な答えでないためか、アリスがより深まった疑問に首をかしげる。むしろ、直接的な答えではないからというより、料理人だったのなら何故、幻想郷でも料理人にならなかったのかという所だろうか。

「でも、ここで作るには勝手がいろいろ違うからね。薪での火力調節とか。ずっと里で料理人をしてきた人と張り合うには大変かなって思ってたよ」

「だから軽食とお菓子、それに飲み物を出す喫茶店にしたのかしら？」

「そうだね。それにほら珈琲って幻想郷で出している店を見なかったから競争相手がないなら、既存の権益を侵さない方がいいかなって思ったのもあるね」

その答えにもどこか釈然とした様子のないアリスが言葉をさらに重ねる。

「本当にそれだけなの？それなら洋菓子店でも良いのではないかしら？貴方のお店で出るお菓子すごく美味しいもの。わざわざ珈琲の為に花妖怪に豆を作ってもらわなくても同じ様に繁盛していたと思うわよ」

アリスの言うことは的を射ている。洋菓子店も里には多くはなかったし、材料はわざわざ珈琲みたいに特注でオーダーするまで行かなくても形にはできた。でも、と涼介は答えを返す。

「珈琲はさ、あの娘が好きだった物なんだ。私はあの娘の珈琲を嬉しそうに両手で持つ

て飲んでゐる姿が好きだった。だから……こつちに来て何かしようと思つた時に自然と喫茶店をやりたくなつて思えたのだらうね。珈琲についてはもともと趣味程度だったからこつちに来てから今でもずっと勉強中だけどね」

涼介はなんとなく誰かにあの娘のことを話したい気分だった。あの店のルーツを知っている人を増やしたかった。そんな思いが形となつて口から漏れ出た。しかし、同時に自分勝手ながら多くの事を語りたくもなくて、言葉を飲み込む様なつもりで湯飲みのお茶を煽る。そして視線を空になつた手元の湯飲みに下げ、手持ち無沙汰な指で湯飲みのお茶を撫で付ける。アリスはその様子に少しだけ瞳を細める。

「そう」

小さく呟いたアリスはそれ以上この話題を追求する気はないのかお茶を口へと運ぶ。ありがたい、と涼介としてもそんな面持ちだ。この話題を自分から出しておいてなんだがこのあたりで止めておきたい。そういう機微を察するアリスはやはりカッコいい女性だと改めて涼介は思い知らされる。そして、こんな話をしたせいかな無性に誰かと自分の入れた珈琲を飲みたいと湧き上がる衝動に涼介は気が付く。そろそろ夜も更け眠る時間が来る頃なのに珈琲は不味かろうと涼介はその思いをぐつと我慢する。勝手に愚痴を話して、それを途中で止めた。それなのに、さらに付き合つて欲しいと言えるほど涼介は自分の面の皮は厚くはないと自制する。

アリスは作業を再開するのか席を立つと空になった湯飲みをふよふよと室内に浮かんでいる人形の一体に渡す。渡された人形は湯呑をシンクへと運ぶと洗い物を開始する。料理の手伝いをしてもらっている時にも思ったがすこぶる便利な人形達だ涼介は感心する。我が家にも一体欲しいくらいだ。そんなことを考えながら洗い物をしている人形を見ている涼介にアリスから声がかかる。

「これから徹夜で作業をすることになりそうなの。だから、一杯だけないかしら？」
ティーカップを傾ける仕草をし、アリスは言う。理知的で美しい彼女がパントマイムをしながら微笑む。どこか、クールな雰囲気な彼女に似つかわしくないそんな剽軽な仕草であるのにそれさえも似合ってしまう。そんな様子についつい笑みがこぼれてしまう。

——ああ、やはり彼女はカツコいい

アリス自身が本当に珈琲を飲みたいだけか、涼介の内心を察してお願ひしているだけか、本当の所は涼介には分からない。だけど、そんなことはどうでもいいのだろう。大切なことは目の前で珈琲を求める友人がいる、ただそれだけなのだ。だからこそ涼介は笑顔浮かべよう応える。

「かしこまりました。最高の一杯を貴女の為に」

その後、浮かれてしまい、少し多めに豆を挽いてしまった涼介のせいで一人一杯では

終わらず、アリスと涼介は杯を重ねることとなった。申し訳なきようにする涼介と、やれやれと呆れ気味だがそれに付き合い杯を乾かすアリス。二人だけの夜の茶会はまだまだ続きそうだ。

次の日の朝、魔法使いゆえに睡眠の必要がない、元気なアリスに連れられて店まで戻る。途中で慧音に出会い、また一人で秋の味覚拾いなることをしていたことがアリスの口から語られお説教をいただく。アリスという同行者のおかげで、長時間の説教は免れたが去り際慧音に、残りはまた後日と言われ涼介は顔ひきつらせる。アリスはその様子をクスクスと笑っているだけで助けることはついぞしなかった。少々のトラブルも有りはしたが無事里のはずれの店までたどり着く。

「アリス、店まで送ってもらって本当に世話になるよ」

「いいのよ。一晚中話し相手に付き合っただけで貰ったのだから」

少しだけアリスのその言葉が素っ気なく聞こえる。涼介に気を使わせないためにあえてそう言っているのだろう。涼介はこの気の利く友人がそういう人柄をしているのを知っている。

「それはどうだろうな。私としては私が付き合ってもらっていた気分だよ。作業の邪魔

をしていたのだしね」

「あら、馬鹿にしないでよ。誰かと話すくらいで私の作業効率は落ちないわ。それにたまには誰かと話しながらの作業というのも新しい刺激になるから大歓迎だわ」

「そういつてもらえると助かるよ」

「だから、また尋ねることがあればしつかり材料は持つてくることね」

アリスは彼女には珍しい悪戯っぽく笑顔でそういう。その子供の様に幼く見える表情が普段大人びて見える彼女とギャップがありドキリと胸が跳ねる。涼介は胸の高鳴りを隠すように咄嗟に言葉を紡ぐ。

「また夜通し相手をして貰えるようにたつぷりと準備をしていくよ」

「ふふ、その発言をあのブン屋に聞かれてもしたらまた大変そうね」

アリスのその言葉に涼介は自身の発言を思い返し、顔を引きつらせると周囲を見渡し文の姿がない事に安堵する。

「いつか本当に誰かに刺されそうね」

昨日の会話が思い出されるアリスの一言。今の会話の流れではとても心外な評価だと返せそうもないと涼介は思う。しかし、一矢報いたく口を開く。

「……その時は君にお願いしようかな」

「なら、がんばって男を磨きなさい」

返ってくるのは厳しい評価。だが、彼女のその明け透けのない態度がひどく心地いい。幻想郷に来てよかつたと改めて涼介は思う。

「精進するさ」

「あら、こわい」

気兼ねなく笑顔の絶えないやり取りを終えアリスは帰っていく。その姿を見送りながら涼介は独りごちる。

「幻想の魔女たちはみんなかつこいいなあ」

その声は秋の空へと溶けてゆく。

秋と冬の境界に供する一六杯目

秋も終わりに近づきそろそろ冬になろうというそんな境目の時期にあるいつかの夜。涼介は桃源亭の扉口で本日最後のお客を見送る。

「レミリアさん、お気をつけてお帰り下さい。咲夜さんも気を付けてくださいね」
「涼介さんも戸締りはしっかりするのですよ」

「はい、今日はもうこれで看板ですからね。この後は施錠をして寝るだけですよ」
最近試験的に始めている夜間営業。そのきっかけとなるお客様。吸血鬼であり涼介の友人となるレミリアである。従者である咲夜を伴い訪れていた。妹であるフランは、本日図書館を訪れたらしい魔理沙と弾幕ごっこをしているらしい。元気そうで何よりだと思ふ。

「ふむ、涼介」

「なんででしょうか、レミリアさん」

「まだ決心はつかんか？」

「前も断ったじゃないですか、その話は」

「何の話でしょうか、お嬢様？」

「何、ちよつとした勧誘さ」

「はあ、そうですね？」

涼介は以前からレミアに紅魔館で働かないかと勧誘されている。むろん、そこまで本格的な勧誘ではなく、時折思い出したかのように話をされる程度であり、レミア本人の気まぐれな部分もあるのだろうと涼介は思っている。咲夜は何の話か分からないと首をかしげているが、質問に対し明確な答えがない時点で従者として深く追求することはない。

「まあ、構わないさ」

「恐れ入ります」

「そう畏まるな。そうだな、代わりに今度また遊びに来い、フランも喜ぶ」

「それでしたら是非」

「お前が中々来ないと文句を言っていたよ。もう少し頻度を増やせ」

「いやあ、歩きだと中々遠くて頻繁にとはいきませんよ」

異変以後も涼介は紅魔館に遊びに足を運ぶことがある。動かない大図書館と魔理沙に評されるパチュリーなどは会いにいかないと顔を合わせる機会が中々訪れない。咲夜との技術交換という茶会もまた訪れるときの楽しみだ。しかし、如何せん歩きでは日帰りは不可能であるためそう多くは行けないというのが現状だ。

「なるほど、それなら咲夜を遣わそう。抱えてもらえばいい」

「お、お嬢様……」

レミリアがそう意地悪く笑う。隣の咲夜が耳の先を少し赤らめ狼狽える。

「それは情けなさすぎますつて。それに天狗に見られたらと考えると想像するのも怖いので、せつかくですが遠慮させていただきます」

「そうか、残念だな。咲夜」

「い、いえ、そのようなことは。それに彼も歩いたほうが健康にいいかと！」

話を向けられた咲夜が混乱からか、解るような、解らないような理屈を呈する。レミリアは楽しそうに自身の従者の様子を見て笑いを漏らす。

「あまり苛めてはだめですよ、レミリアさん」

「なに、可愛がりさ。さて、そろそろ帰るとするよ」

「またのおこしをお待ちしております」

そういつて涼介は頭を下げる。レミリアと咲夜はそれに応えようと夜の空へと消えていく。今日は看板だと、涼介は外に出している桃源亭と書かれている衝立を店の中にしまおうと持ち上げ運ぶ。カランカランと鈴が鳴り、扉の中へと衝立をしまおう。今日もつかれたと衝立を置いた後、伸びをしていると不意に店内から声がかかる。

「あら、今日はもう看板なのかしら？」

唐突にかけられた声にドキリとするが、聞き覚えの声に安堵する。

「紫さん、いらしていたのですね」

「驚いてくれないなんて悲しいわ」

紫と呼ばれた少女はむらさき色のドレスの様な服を来て、金髪のロングを先でいくつかりボンで束に結んでいる。カウンターの一席に腰かけこちらに体を向けている。悲しいわと言ひ、自前の扇子で顔を隠すとしくしくと口で言ひながら泣きまねをする。

「いつも驚いていますよ。どうやって音もなく現れるんですか？」

「内緒よ」

泣き真似をやめクスリと笑みをこぼす。

「秘密が相変わらず多いですね」

「秘密は女を美しくするのよ」

「それ以上美しくなつてどうする気なんですかね、怖いなあ」

「あら、口がうまいわね。新聞に書いてあつた通りだわ。同伴者もつれてくるべきだったかしら」

その発言に涼介は顔しかめ、紫の笑みが深まる。当分この話題は知りあいにからかわれそうだと先行きに不安を感じる。そして、同伴者と聞きふと思いつく。

「藍さんは、今日はいらしてないのですね」

涼介の呟きに残念そうな響きが含まれる。

「私という者がいながら他の女の話？ ゆかりん悲しいわ」

「もう、解っているくせに紫さん。藍さんは能力の使い方や他にも色々とお世話になっていますからね。師匠の様に思って感謝しているんですよ。まあ、藍さんからしたらこんな不出来な弟子では認めてもらえなさそうですけどね」

「もう、冗談が通じないわね。藍は今仕事中よ。それにあの子もなんだかんだ言っただけの事を気に入っているわよ。厳しいのは愛情の裏返しね」

「少しだけ不満そうに頬を膨らませながらも紫は涼介に伝える。その言葉に涼介は温かい気持ちになる。」

「そういつてもらえるところらしいですね。それにまだ藍さんにも紫さんにも恩返しできていないですからね。こういう時にでも少しずつでも返していきたいので機会があれば次は是非ご一緒に」

「あら、恩返しだなんて気にしなくていいわ。こちらにも目的があつてあなたを呼んだのですもの。その時にしっかりと働いてくださればそれでいいわ」

笑みを浮かべ紫は応える。その表情にゾクリとするものが背筋を走る。しかし、涼介はそれに笑顔で応える。これだけの物を、たくさんの物を、居場所幻想郷を、そして失つてしまった物を取り戻してもらったのだ、いくらでも利用されても構わないと考えている。

「はい、その時は是非働させていただきますよ」

だから、偽りのない笑顔で応じる。

「いい子ね。貴方のそういう所好きよ」

「はは、ありがとうございます。そうですね、それまでは死なない様に頑張らないといけないですね」

「そうですね、がんばってね」

クスクスと笑い声を漏らし機嫌のよさそうな紫を見ながら、涼介はカウンターの中心に入る。

「さあ、お客様ご注文はなににいたしましたでしょうか？」

「そうですね、店主さんのおススメで」

「かしこまりました」

さて、何を出したものと涼介は頭をひねる。そんな涼介を微笑ましげに見つめながら紫は供される一杯をおとなしく待つ。

二人きりの時間が流れる。ハルももう二階で眠っている。静かに、それでいてぼつぼつと会話は途切れることなく続く。杯が乾けば新しい一杯を差し出し、空いた杯を片付

ける。

「そういえば涼介、悪魔の妹を落ち着けたみたいね」

「……どこでそれを？」

提供されたアイリッシュココーヒーや、ラム・カフェ・オ・レ、珈琲モヒートなど、酒精を含む品々を重ねている紫が不意にそれを話題に出す。詳細は、当事者と魔女だけ、暴れていていたのが落ち着いたのを知っているのは他の紅魔館の面々だけのはずだ。自分の行動が逐一監視されているのかと涼介はわずかに警戒する。恩人に利用されることは厭われないが生活を監視されるのは勘弁願いたいのだ。

「怖いのか？」

それを察しているのか紫は答えずに笑う。

「プライベートは欲しいですね」

「ふふ、相変わらず怖がらないのね」

「……そうですね」

涼介の顔に苦々しい表情が刻まれる。紫はそれに満足したのか口を開く。

「別に監視なんてしてないわよ。でも、そうねえ、十年前にあの悪魔の妹を見たことがあるのよ」

十年前というと以前話していた吸血鬼異変の事だろう。涼介は詳細を聞いたことは

ないがその時にフランにあったと紫は言う。

「それで、貴方が紅魔館で何かをしていた後すっかり落ち着いた様子だったからね。貴方だと思つたのよ」

紫はそう言い笑うといつの間にか持つていた新聞をカウンターの上に置く。たびたび目にする異変について書かれた文々。新聞である。しかもご丁寧に異変について書かれたものと涼介の行いについて脚色されて書かれた妹紅の所で見たものと同じ物の二部ある。顔をしかめる涼介を紫は楽しげに見つめる。

「どうして、みんなそれをわざわざ私に見せるのだろうね」

「きつと貴方のそのかわい顔を見たいのよ」

「勘弁してくださいよ。これは没収しますね」

「あら、横暴だわ。酷いお店」

口ではそういうのが阻止しようと手を伸ばしもしないので涼介はそれをカウンターの内側にある、引き出しの中へと一先ずしまう。

「まあ、そういうことでしたら納得ですね。すみません、変に勘ぐってしまつて」

「構わないわよ。でも、仮に私が貴方の事を監視していたとしても貴方にとやかく言われる事では無いわよね」

少し不穏な気配を感じ、視線を手元から紫に戻す。

「ねえ、そうでしょう。涼介?」

頰杖をつきながら涼介を見る紫の瞳は胡乱な光を宿している。その瞳に涼介は気圧される。過去に出会った、幽香やレミリア、文の様に妖力を振りまいている訳ではない。むしろ、そんなものは全く感じない。恐ろしいほどに静かだ。その瞳を覗き込んでいるとどこまでも自分が堕ちていくような錯覚に陥る。無意識に息が止まる。喉が渴き、喉が張り付く感じがする。潤いを求めるためか、喉が無意識に口内の唾を嚥下するためコクリと喉が鳴る。体はピクリとも指先一つ動かない。初めて紫と会った時のことを思い出す。突如部屋に現れた彼女相手に、今と同じように何も反応が出来なかった。時間が止まったかのように静止した二人に対し、時間の流れを教えるように、室内の灯りとしておいてある行燈の灯りが妖しく揺れて陰を作る。そして、唐突に紫が均衡を崩す。瞬きを一度して醸し出す空気を霧散させる。

「ふふふ、冗談よ。ごめんなさいね、からかってしまつて」

「あ……………」

先ほどの後遺症なのか、喉が異様に渴き、口がひきつる。言葉を出そうするがうまく形にならない。能力を意識し、体の強張りを抑える。意識を切り替えるために一度深呼吸をする。

「すう……………はあ……………別にかまいませんよ。でも、あんまりからかわないでくださいよ。」

心臓が止まっちゃいます」

気を紛らわせるためかわざと明るく冗談めかして言う。それにノる様に紫がクスクスと笑いを漏らす。

「それも面白いわね。一度止めてみようかしら？」

「一度止まったらそれでおしまいですよ」

「そうかしら？それは分からないわよ」

「私はただの人間です。一度止まって死んでしまえばそこで終わりなのですよ」

少しだけ呆れた声色で涼介が言ってみせる。

「じゃあ、賭けてみましょうか。私はきつと大丈夫に賭けるわね」

「それで賭けたら今ここで試してみましようとか言わないでくださいよ」

「いやね、私はそんな野蠻ことはしないわよ」

「まったく、怖いなあ」

「実感がこもってないわよ、もう」

どちらからともなく笑い声が漏れる。

「涼介、そろそろお暇をするわ。最後に一杯よく眠れそうな温かい物をお願いするわ」
「散々カフェインを取っているのですから難しいですね」

「努力は必要よ」

そういつて嘯いて見せる紫にため息が零れる。ホットココアでも入れようと無難な選択をして涼介は準備に取り掛かる。ミルクを温め、ココアパウダーを取り出す。温まったミルクのパウダーを溶かし、それを紫の前に出そうとした時、紫から声がかかる。「涼介その後ろにあるそれを取ってくれるかしら」

顔をココアの入ったカップから上げ紫を見れば涼介の後ろを指さしている。何を取ればと訝しみながらも涼介は振り返る。

「紫さん、どれを取ればいいんですか？」

紫からの返事はない。

「紫さん？」

疑問に思い振り返る。しかし、そこに紫はいない。空になった杯と、まだ出されていない湯気の立っているホットココアだけがある。まるで狐に化かされたかのようにそこには紫だけが抜け落ちていいる。あつげにとられて涼介が固まっているとカランカランと鈴が鳴り、誰かが入ってくる。

「灯りがついていたのでまだいるのは分かっていますが、こんな時間まで一人で何をされていたのですか？」

入ってきたのは咲夜であった。

「あれ、咲夜さんどうしたのですか？」

「お嬢様の日傘を忘れてしまいました、まだ起きられているようでしたら持ち帰ろうかと望み薄だとは思っていたのですが一応確認だけに来ました。それより、どうされたのかは涼介さんですよ？別れてからだいぶ時間がたっていますが、まだお片付けが終わっていないのですか？」

そう冗談めかして咲夜は楽しげに笑う。そして、店内を見渡してある一点で視線を止めおや、と首をかしげる。

「空のカップが出ていますが誰かいらしていたのですか？」

涼介の立つカウンターの前の席に置いてある空の杯に視線をやり問い掛ける。

「先ほどまで私がそこで座って飲んでいたんですよ」

涼介はとつきに嘘をつく。別に隠すことではないのに何故かそうしていた自分に驚きつつも涼介は表情を取り繕う。

「はあ、そうですか」

咲夜は席に近づき、訝しげながら納得を示す。席はまだ温かく、先ほどまで誰かが座っていたことを示している。そして、自分が店まで飛んでくる間に空では誰も見ていない。だからこそ、咲夜は涼介を疑わない。釈然としない物を感じながらではあるが。

「それでしたら、そのココアは最後の一杯ということですか？」

咲夜に言われココアの存在を思い出す。自分で飲みたい気分ではないなど涼介は思

う。

「そのつもりだったのですが、思いのほか飲みすぎたみたいでもう飲めないなど考えていた所で咲夜さんが来たのですよ。これも何かの思召し召しかもしれませんが、良ければどうですか？ 寒空の中飛んできたのでしょうか、温まりますよ」

涼介はそういうとカップを咲夜に差し出す。奇しくも先ほどまで紫が座っていた席に。

「そういうことならご厚意に甘えようかしら」

咲夜はそう応えると、その席に座る。その時珈琲の香りに混ざり他のいい香りがした気がするがそれはすぐに消えてしまい気のせいかと咲夜に思わせる。

「貴方の淹れる物で珈琲以外の飲み物と言うのは紅茶を除けば考えてみると初めてですね」

咲夜は、少し時間がたったとはいえまだまだ温かいココアをゆっくりと飲む。

「そうですね。そういうえば珈琲と紅茶以外は初めてですね。これからは色々な物をお淹れ致しますよ」

「ふふふ、それはそれは。楽しみが増えますね」

「手始めに今度遊びに行くときに何か持っていきますよ、紅茶の御嬢さん」

「心よりお待ちしております、珈琲の君」

そして二人して顔を見合わせ笑いあう。一杯のココアの杯が乾くまでの僅かな時間、二人の会話が途切れることはなかった。

その後、咲夜は忘れ物の日傘をもって帰っていった。どうやら、明日と言うかももう今日と言える時刻であるが、日中に活動するため早めに回収したかったようだ。きつと博麗神社に行くのだろうと涼介は思う。今度こそカップも洗い終わり、棚に戻し片付けが終了する。店内に客の姿は見えない。今日の営業は本当にここまでと、心の中で一つ呟く。

「ああ、そういうえば」

紫から没収した新聞の存在を思い出す。引き出しに入れておくのも邪魔になるから二階に持つていこうと思ひ引き出しを開ける。

「なんだこれ」

そこにはしまったはずの新聞は見当たらず、書置きが入っている。

——新聞は回収していくわね。まだ、藍に読ませていないから持つていくわ。

——あと、貴方に働いてもらう時は意外と早く訪れそうよ。待つていて頂戴ね。

——追伸：ココアは後からくるお客さんにあげてしまつて構わないわよ。

——貴方の紫より親愛を込めて

綺麗な文字で書かれた書置きが入っていた。涼介は頭痛を覚える。そして、書置きの

内容が正しければあの新聞が藍にも読まれる、その事実が涼介の心を重くする。
「ああ、碌なことがない」

涼介のその疲労に満ちた愚痴は誰に届くこともなく店内の静寂に飲まれる。秋と冬の境目のそんなある日の夜の一幕。

茶葉の彼女と豆な貴方に供する一七杯目

いつものように張り紙一つ

『友達のところに行つてきます』

涼介は昨晚の積雪で白銀の世界となつた道を進み紅魔館へとたどり着く。初めてこの館を訪れてから季節は巡り、冬がやってきた。寒い寒いと手を擦りながら涼介はハルと一緒に道を歩む。

「ああ、やっと到着だ」

門前ではいつものごとく美鈴が、体を動かし鍛錬をしていた。寒いのによくやるなあ、と涼介は思う。しかし、門番としてずっと外にいるなら動いて体を温めているのかもしれないとも思い直す。

「やあ、美鈴。精が出るね」

「こんにちは。珈琲屋さんも熱心ですな」

多分太極拳か何かだと思われる動きを止めた美鈴が涼介に向かって手を振ってくる。

「寒い中お疲れ様。元氣そうで安心するよ。他のみんなも変わりないかい？」

「ええ、お嬢様と妹様は時折お店にも行かれていますと思いますが元氣ですよ。小悪魔も

パチユリー様もお変わりない様です。時折現れる黒白も元気いっぱいです」

美鈴はそういうとクスクスと笑みをこぼす。本当にいい顔で笑うなあ、としみじみと思いつつも涼介は会話で出た気になるワードに触れる。

「魔理沙も元気にやっっているみたいで何よりだね」

「はい、私は弾幕ごっこの練習が出来ますし、妹様も遊べて喜んでいきます。でも一番はパチユリー様にとつても定期的な運動になつてよろしいかと」

そういう美鈴の顔はどこかいたずらを企む子供の様な雰囲気をする。

「さすがは悪魔の館。悪戯好きが多そうだ」

「ええ、ここは悪魔の支配する紅魔館ですからね。でも、読み終わった本は返却日を忘れずに返しに来て欲しいですね」

「はは、なるほど。じゃあ私の方でもそれについては言っておくよ」

「助かります、そうでないと私が返却の催促に行く羽目になりますからね」

なるほど、ちゃっかりしている、と内心でつぶやく。

「そういえば、先ほどの元気かどうかの話で咲夜さんの名前が出てこなかったのだけはどうかあるのかい？」

美鈴は先ほどの会話の時、わざと咲夜の名前を出していなかったけれど何かあるのだろうかと涼介は首をひねる。咲夜は涼介にとつて一番頻繁に出会う紅魔館の住人だ。

買い物帰りや吸血鬼姉妹の付き添いなどでよく出会うのだ。

「そうそう、聞いてくださいよ。昨日の私が門番を終えて寝ようとしていた時の話なのですがね。咲夜さん、もう寝る前だというのに」

「美鈴、お客様を寒空の下で長話に付き合わせるのは褒められたこととは言えないわよ」
美鈴の話を遮る様に、話題の当人の声がする。

「こんにちは紅茶のお嬢さん。お邪魔しているよ」

「当館へようこそ、珈琲の君」

「やあ、咲夜さん。遊びに来たよ」

「お待ちしておりました、涼介さん」

いつも通り恒例のやり取りの後、咲夜へと挨拶をする。メイド服姿の咲夜が雪の積もる白銀の世界に立っているととても寒そうに見える。特にスカートは丈が短いために、見えている足は特に寒そうだと涼介は視線を向ける。

「涼介さん？」

「いや、寒そうだなと思ひまして。長めのスカートかズボンなどにはされないのですか？」

「いえ、ご心配には及びません。パチュリー様のおかげで寒さ対策は施されております」
なるほど、魔法の品かと涼介は感心する様に呟く。いや、それ長くするのはダメ

だったのだろうか、とすぐさま頭で考えるがそれが言葉になることはない。ダメだったのだろうな、と良い性格をしている咲夜の主人を思い出す。

「そういえば美鈴、さっきの話のだけど結局オチはなんなんだい？」

先ほどから一言も話さない美鈴を訝しみつつ話を向ける。

「あーいやー、オチのない話なのでお気になさらずに。風邪をひいたら大変ですから、ささ、お早く中へ」

なるほど、咲夜には聞かれると怒られる様な話かと想像が涼介の脳内をめぐる。興味が無いとは言わないが進んで虎の尾を踏みたいとも思わないからここはおとなしく中へと入ろうと涼介はすぐさま判断を下す。

「そうかい。なら入れてもらおうかな。ハルはどうする？」

涼介がそう聞くとハルは門の脇でうつ伏せになる。ここで待っているという意思表示のようだ。

「了解。先に帰るなり、他の場所で遊んでいてもいいからね」

涼介がそう声をかけるとハルは尻尾を二回パタパタと振った後にわう、と一度鳴いて答える。

「涼介さん、扉の先に小悪魔がいるので彼女に案内してもらってください。私もひと段落つきましたら向かいます」

「お忙しいタイミングにすみません」

「いつでもあまり変わりがありませんよ。妖精メイドがもう少ししっかりしてくれれば」

そう頬に手を添えながら悩ましげに言う咲夜に対し、妖精メイドの勤務実態が如実に思い浮かべられ涼介の顔に苦笑いが出る。

「ゆつくり待たせていただきますので、無理をなさらないでくださいね」
働き者の咲夜にそう声をかけると扉に向かって足を踏み出す。

涼介が、扉の中へと消えていくのを見届け、咲夜は美鈴へと向きなおる。

「美鈴、何を言おうとしていたの？」

言葉の語気を少し強めて問い詰める。

「もー、怒らないでくださいよー、咲夜さん。珈琲屋さんに咲夜さんの可愛い話をしようとしていただけじゃないですかー」

まったく悪びれた様子のない美鈴の姿に頭痛を覚える。確かに昨日寝る前の美鈴を捕まえて、涼介から前回教わった珈琲の淹れ方の復習をする練習台にしたのは自分が悪

いと咲夜は昨日の自分の行動を反省する。けれど、とも思う。だからと言ってその仕返しとして涼介にそのことを告げ口するのはいくらなんでもズルいと思うのは自分の我が儘だろうか。と咲夜は頭を悩ませる。それにしても、目の前でニヤニヤと笑う美鈴に腹がたつと咲夜の眉間にしわが寄る。

「もう、何がそんなに楽しいのよ」

「あの小さかったさくやちゃんにも、春が来たんだなあと思うと考え深くて」

その言葉で合点がいった。つまり、そういう視点で見ているのかと咲夜の脳内で美鈴の行動に合点が行った。つまるところ美鈴は自分で楽しみながらも咲夜の事を涼介に売り込もうとしているのだらうとあたりをつける。咲夜は微かな頭痛を覚える。

「涼介さんとはそういうのではないわよ。ただの友人よ。変に邪推しないでちょうだい」

しかし、どこ吹く風とでもいうのか、咲夜の言葉をちゃんと聞いているのかさえ怪しい美鈴のニヤニヤは止まらない。

「別に今すぐどうこうって話じゃないですよ？強いて言うなら、年頃の咲夜ちゃんに年頃の異性の友達が出来たというだけで私としては大満足です」

何なのだろう、この妙な手強さというか、やりづらさはと咲夜は美鈴の雰囲気には怯む。

この流れでは勝てそうにない気がする、と直感的に感じる。

「そういう美鈴はどうなのよ。涼介さんとは話はずむみたいだし。涼介さんに限らずとも過去にそういう人とか居たりしなかったの？」

「いやー、昔は鍛錬一辺倒でそんな人いなかったですね。涼介さんが妖怪だったら良いなーとは思いますがね」

咲夜はその答えに少し驚く。

「あら、そうなの？」

「ほら、涼介さんっていつも穏やかで一緒にいると安心感あるじゃないですか。それにお仕事の後とかに、珈琲とかを用意してまわっていてくれそうじゃないですか」

確かにその場面は容易に想像できると同意する様に咲夜はうなづく。

「例えばほら、涼介さんなら執事長とかで雇ってもらえそうですし、そうなったらお互いの仕事終わりに、私が中国茶を、涼介さんが珈琲をお互いに入れるんです。それでその日あったこととか何気ない話をするのとか幸せそうじゃないですか？それで妖怪だったら長い時間を一緒に過ごせますし、惹かれたかもしれないなーとは思いますがね」

——確かにその光景はきつと幸せな時間になるのだろう。私がメイド長で彼が執事……何を、自分で置き換えているのかしら

想像したことを追い出すために咲夜は軽く頭を振る。

「あつ、想像しちゃいましたか？」

「美鈴、怒るわよ」

「ふふふ、じゃあたとえ話をしましょう」

「例え話？」

唐突に切り出す美鈴に咲夜は首をかしげる。

「身近なもので例えるならば紅茶みたいなものですよ」

「紅茶？」

要領をえない言葉を重ねられ咲夜の疑問は深まる。

「はい、紅茶です。葉や芽を萎凋させ時間をかけて発酵させた茶葉の種類や量、蒸らす時間と味や香りが変わりますよね。それと同じです」

「同じ？」

ますますわけがわからないと咲夜は首をひねる。

「色々な葉思い言葉や芽をじっくりと熟成経験して出来る茶葉咲夜さん。その茶葉咲夜さんを使ってどんな紅茶結果ができるのか。それはきつと茶葉抱いた感情の種類や茶葉思いの強さの量、蒸らす時間重ねた時間で色や香り二人の間、味係が変わるんです。どんな紅茶未来ができるか今から楽しみです。あ！私今すごい上手いこと言えてませんでした？すごくないですか？」

そう言つて美鈴は笑う。解るような解らないようなそんな面持ちの咲夜の顔に美鈴は苦笑いを浮かべ、言葉が続ける。

「ええつとですね、つまりは今まで通りで良いのですよ。あれやこれや言っちゃいましたけど先の事なんて誰にもわからないのです。咲夜さんが今考えたことが起こるかもしれないし、ずっと友達のままなのも良いのかもしれないし。もしかしたら何か起きて絶縁してしまうかもしれない。この先どんな事だつて起こりうる可能性があるのです。だから、今を積み重ねて、いつか咲夜さんの心に芽生えた答え感情に従えば良いのです」

美鈴に色々と言われ、整理がつかなくなっていた頭の中が、今の言葉でストンと落ちてくのを咲夜は感じた。今はまだ、私と彼は友人だ、と咲夜は自分の心に言う。今は、それで良いのだとさらに重ねる。先の事は分からないけど今この時間はそれで良いのだ。そう思うと、咲夜の気持ち次第に落ち着いてくる。かき乱したのも、落ち着けたのも同じ人物なのでお礼は決して言わないが、とせめてもの反抗にジツと咲夜は美鈴を睨みつける。

「咲夜さん。耳、赤いですよ?」

咄嗟にナイフを投げた自分を責める人はいないだろう、と咲夜は思う。

美鈴と別れ咲夜は一人、大図書館へと向かう道すがら改めて自分と涼介の関係について思いを巡らせる。

——初めはただお嬢様の命令で連れてくるだけの人柱だった

——道中で彼と話していて安心した

——友人と言うのはこういうものだろうかとも考えた

——彼と友人に成れたらと心のどこかで思っていた、と今ならばわかる

——宵闇の妖怪との仲の良い様子にこの人は妖怪と友達になれる変わった人だと微

笑ましかった

——妖精を上手にあしらうその姿に、慕われているだろうその姿にこの人は本当にい

い人なのだと心が痛んだ

——美鈴の所に着く頃には人柱の運命からどうにかしてこの人を助けられないだろ

うかと悩んだ

——パチュリー様の所ではどうしてこの人はこんなにも危機感を持たないのだろう

と憤慨もした

——お嬢様の目の前でその力に抗う姿が痛々しくて胸が締め付けられた

——地下へと向かう道すがら彼はすべてを悟ったうえで、妹様を救おうと頑張らない

と、と呟いた

——その一言がひどく私の心を強く揺さぶった

——なぜ自分を大事にしないで、見知らぬ誰かの為に死地へと向かおうとするのか理

解でできなかった

——耐え切れず爆発した私に彼は突き放す様に私の言葉を全て否定した

——彼は一度も私を責めなかった、それが逆に酷くつらかった

——彼が一度でも助けて欲しい、逃げたいと言えば私は逃がしたかもしれない

——代わりに妹様が暴れられることがあれば私が発散させるとそう思ったのに

——背後で扉のしまる音がしたとき絶望した、私が彼を今殺したのだと自分を責めた

——パチユリー様にダメだったと伝えられたとき、もう希望がない事が心を苛んだ

——お嬢様が異変を起こしてからはそれに集中することで胸の痛みを忘れようとし

た

——自らが完全であれば彼の死にも意味が生まれると自分に言い聞かせた

——霊夢に負けた時、自らにたてた誓いが破られそれを支えにしていた私は立ち上が

ることが出来なくなった

——通りがかったパチユリー様に堰き止められなくなった思いを溢れ出るままにぶ

つけた

——そして私は……再び彼に出会った

——妹様を背中に貼り付け、別れた時と変わらないその姿に心の棘が抜ける思いだつ

た

——蹲る私に近づき手を握ってくれた彼の温もりが、彼の声がどん底にいた私を引き上げてくれた

——そしてそれからも色々あった、妹様は自由になり紅魔館は幻想郷の一員となった

——彼はいつも桃源亭で穏やかに笑って私を迎えてくれた

——そして今だつて

大図書館へとたどり着く。フランドールを背中に貼り付けた涼介がパチュリーや小悪魔と談笑している。何て事のない日常であり、少し前では考えられなかった光景。確かに先の事は分からない、と咲夜は美鈴の言葉を思い出す。

——でも、いつかは……

先ほどの想像が再び頭をよぎる。

——私がメイド長で彼が執事長。私がお嬢様付きで、彼が妹様付きで。仕事終わり、二人でお互いに飲み物を入れ、ただ何気ない談笑をする。そんな光景がいつかあるのだろうか。

そんな事を咲夜が考えていると不意に声が聞こえる。

「咲夜さん？そんなところでどうしたのですか？」

涼介の声だ。考え事をしていた咲夜の頭に視覚の情報が入ってくる。フランドールが手を振って、その勢いで涼介の体が揺れている。パチュリーはそんな二人を苦笑いしながら見守って、小悪魔が咲夜に座るようにと椅子を引いて待っている。

——ああ、私は今とても幸せだ

「咲夜さん、耳が赤いですけれどやっぱり寒かったんじゃないのですか？」

その言葉に時間を止めて逃げ出した事を誰が責められようか、と咲夜は一人止まった時の中で自己弁論をする。

そのままその日の紅茶・珈琲講座はそのまま流れてしまう。フランドールはその時間も遊んでもらえたと大変お喜びであったという。

後日、涼介から咲夜へ宛てて、白い毛糸生地で作られたイヤーマフラーが送られてきた。

——
彼はこういうところがマメで困る

店主の背比べに供する一八杯目

いつものように張り紙一つ

『香霖堂に行つてきます』

雪の降り積もる三月の終わり頃、涼介は以前紅魔館を訪れた時のように寒い寒いと手に白い息を当てながら里の外れの外れの雪道を歩いていく。隣を歩くハルはそんな寒さなど露知らずと言いたげに軽い足取りをしている。

「ああ、やつと見えてきた。もう少し便の良いところに建ててくれよ」

里の中と外の境界に位置する自分の店のことを棚に上げて涼介は文句を漏らす。その漏らした言葉はあたり一面の新雪に吸収されて相手に届くことはないだろう。

「相変わらずのゴミ屋敷ぶりだな」

店の前まで着いた涼介がある種の感嘆の混じる声で呟やく。視線の先には店先にこれでもかとガラクタ（店主は商品と言い張る）を並べた一軒の店がある。

「おーい、霖之助久しぶりに顔を見に来たぞ」

涼介がそう声をかけ扉を開けようとすると、開かない。おかしいと感じる。涼介は知っているのだ。この店主がパチュリーよりも外出をしないという事実を知ってい

る。時折、無縁塚まで落とし物を拾いに行くがそれは天氣の良い日で、こんなに雪の積もった日に外出をするわけがない。だからこそ声をあげ、扉を叩く。

「霖之助、霖之助！いるのだろう！とうとう商品を売るところか店を開ける気さえなくしたのか！おーい、霖之助!!」

扉を揺らすとどうやら鍵がかかっているわけではなさそうだ。扉の向こうに何かでふさがっているのか、建て付けが悪いのかはわからないが涼介は開けられない。

「ああ、もうそうバンバンと叩くなよ、涼介。今建て付けが悪いんだよ」

扉が店の中からゆつくりと開く。ギィギィと軋む音から察するに相当建て付けが悪いのだろう。中から白髪メガネをかけた、涼介より頭半分ほど背の高い二十歳前後に見える男性が出てくる。

「ん、なんだ。そうならそうと早く言ってくれよ霖之助」

「君が言う前に戸を強く叩いたのじゃないか。全く君も幻想郷に毒されてきたね」
霖之助と呼ばれた男性は呆れ顔を浮かべ涼介を見る。

「毒されたのじゃないさ、馴染んだのさ」

「嫌な馴染み方をするね、どうせならもつと品行方正な感じで馴染んでくれよ」

「馴染むなら馴染むで、そういう下地がないと。ありそうな場所、知っているのか霖之助？」

「あー……うん……無理を言つてすまなかつたね、涼介」

涼介の質問に思い当たる場所を思案するもすぐに謝罪の言葉が出る。

「そこは頑張つて欲しかったのだがなあ」

「さすがに私もないものはあると言えないよ」

その言葉に涼介も苦笑いが漏れる。対する霖之助は店の中に戻つてカウンターの中にあるいつもの席に腰掛け、何でもないようにさらに言葉を重ねる。

「相変わらず、霖之助は落ち着き切っているなあ」

「君のおかげさ」

「私がいてもいなくても変わらないじゃないか」

「君が居ない時をどうやって知るっていうのだい？」

「魔理沙や霊夢からさ。最近は咲夜さんからも耳にするね」

その言葉に霖之助は酷く顔をしかめる。涼介はその反応におや、と首をかしげる。涼介の知る霖之助は、顔は顰めてもそこまでしかめることもそうはないだろう。

——ああ、何かあつたのだな

「涼介、そんな目で僕を見るのはやめてくれ。ため息が出そうになる」

「出せば良いじゃないか。話くらい聞くぞ」

「どうせ聞くだけだろう?」

「聞くだけでも中々貴重じゃないか?」

思い当たる節があるのか霖之助は、涼介のその言葉に思わずといった態で頷く。

「ほら見たことか。貴重だぞ、私みたいに静かに話を聞くようなもの」

「聞きはするけど、静かには聞かないだろうによく言うよ」

「霖之助に負けないように日々精進しているからね」

「まったく、面倒なのに目をつけられたものだよ」

「はっはっは。はじめの頃に散々言いくるめられたからね」

「ほどほどにしておくべきだったかな」

「きつと変わらなかつたさ」

「処置なしだな、君も」

「お互い様だよ」

涼介も店に入り近くにある箱型のテレビの上に腰掛ける。ハルは野外でその辺りの散歩に向かう。霖之助は先ほどまで読んでいたのであろう本に手を伸ばす。涼介はそれを見て客が来ているのに相変わらずの商売気のなさだ、と笑う。何を読んでいるのだろうか、涼介が霖之助の手元に視線をやると見覚えのある、見覚えのない本であった。

「霖之助、その本『非ノイマン型計算機の未来』の十四巻じゃないかとうとう拾ったのか、やったじゃないか」

涼介の祝福に霖之助の顔は晴れない。それどころかむしろ曇っている。

「ああ、これかい？ 霊夢が拾ってきたんだ」

その言葉で涼介は妙な納得を覚える。

「なんだ、ツケでも精算させられたのか？」

「一部はね。でもそこじゃないのさ、問題は」

霖之助はそういうと読んでいた本をたまたみ脇からもう二冊本を出しカウンターの上に重ねる。そして気だるげに座り直し体を背もたれに預ける。

「どうしたんだい、霖之助。随分と物憂げじゃないか？」

「霊夢のおかげでこの通り十三、十四、十五と足りなかつた最後の三巻を手に入れられたんだよ」

霖之助はそのようにこぼすと重ねられた本にその手を乗せる。涼介がその三冊を見ると確かに十三、十四、十五と題名の下に印字されている。

「なおさら良かったんじゃないのか？ 歯抜けがなくなつてすつきりしたろう」

「うん、その点は僕も満足だよ。代価に扉を壊されなければね」

「あー、どうして本を拾ってきただけなのに扉が壊れるのかは知らないけれど災難だつ

たな」

「本当にその通りさ」

霖之助が深いため息をつく。その姿に涼介はこれ以上思い出させるのは止めておこうと思う。詳細はまた後日霊夢にでも聞けばわかるだろうと。それにあの子の事だ、拾ったのではなくその辺の妖怪から掻っ払って、取り返しに来た妖怪と一悶着あつたのかも知れないとも同時に思う。だから、話題を変えるきっかけを作るべく口を開く。

「終わってしまったことは仕方ないさ。今は手元にある本の事を喜ぼうじゃないか」
「全くもってその通りだね」

霖之助も、もともと引きずるつもりはなく一種のポーズだったのだろう、すぐにいつも通りに戻り返答する。

「それで？それは読み終わったら売りに出すのかい？小鈴ちゃんあたりなら喜んで買ってくれそうだけど」

里にある貸本屋の店番の少女を思い出しながら涼介は霖之助に問いかける。

「いや、これは売り物じゃないよ。コレクションさ」

「相変わらず商売人とは思えないやる気のなさだな」

「何を言う。僕ほど勤労意欲に満ち溢れた店主もそうはいないさ」

「店を開けているだけでは働いているとは言えないぞ。物売ってこそその道具屋だろう

に

涼介のやれやれとでも言いたげな様子に霖之助が少しだけムツとした様子を見せる。

「君みたいにしよつちゆう不在で店を休む店主に言われるのは心外だな」

「まったく言いがかりはよしてくれよ。第一、店から出ない君がどうしてそんなことを言えるんだよ」

「霊夢が文句を言っていたさ。お昼を食べに行つたのにまた今日も休みだったとね」

霖之助の話は聞かないが、霖之助に話を聞かせているのであろう。霊夢が想像でき今度は涼介が顔をしかめる。その表情を見た霖之助は、ほら見たことか、と言いたげに笑みを浮かべる。涼介の対抗心がその表情に煽られる。

「確かに私はよく店を開けるが、常連もいて繁盛させてもらっているよ。君のところと違つてね」

「そうなのかい？ 霊夢はタダでご飯が食べられて作る手間も一食減つて楽だわとこぼしていたよ。商品はちゃんと売つてこそその商売人だろう？」

先ほどの涼介の理屈を持ち出してくる霖之助の顔が憎たらしく見える。だからこそ、涼介は反論する。

「霊夢には今まで散々助けてもらったツケを払っているだけさ。何もお金だけで売るわけじゃないさ。ツケをつけれられ慣れている霖之助は理解していると思つていたから、み

なまで言うまでもないと思つていたよ」

「まったく言うじやないか、涼介。僕だつてツケ以外でも買物をしてくれる顧客から
「うるや」

「へえ、そいつは意外だね。最近はどうなものが売れたのだい？」

「つい最近も売れたさ。ティーカップ、が……………」

その涼介の言葉に霖之助はとつさに口を開くも、すぐに閉じて口をもごもごとさせ
る。

「霖之助、そこで止めるなよ。普通に気になるじやないか」

「いや何、手品師に担がれたのを思い出してね」

「要領を得ない答えだな」

「いや何、紅魔館のメイドに二つで一組のカップを売ろうとしたのだけれど一組のうち
片方が魔理沙に割られていてね。気がつかずに薦めてしまったのさ。それで中に『すま
ん』と書かれた紙が入っていてね。頭を抱えたのさ」

「ほうほう、それでそれで」

中々に同情に値する話だとは涼介も思うが、好奇心に惹かれ話を促す。

「だけど、意外にその割れたカップでも良いのではないかと悩み出されてね。その辺り
の詳しい話は省くが彼女の主人が関係していてさ。まあ、結局その主人と霊夢が店に来

て割れたカップではなく普通のカップにしてくれという話でまとまったのだよ」

先日、レミリアに湯飲みを割られたと霊夢がこぼしていたのを涼介は思い出す。レミリアが湯飲みを割り、咲夜に補填用のカップを買いに行かせたのだろうと涼介は思うが、何故それで割れたカップで良いのかどうかを悩む咲夜には疑問が残る。その辺りもまた次に会った時の茶飲み話にしようと思つたと決め霖之助の話の続きを待つ。

「そしたら、そのメイド。ならこれはゴミねみたいなことを言つて、まだ割れてないカップも入っているその箱をひっくり返したのさ。とっさの出来事に啞然として落ちるカップを眺めていたらいつの間にかメイドの手の上にはひっくり返される前の箱と、割れてないカップがあつてね。結局何がなんだか解らないうちにそれを売つたのさ」

「なるほどね、時間を止められて担がれたのか。大方すり替えられたのだろうか？ 私も遊びだけどりバーシやチェスで時々やられるよ」

涼介はそこまで聞いて話が読めたのか納得を示す。

「ああ、わかるかい。その当時は自論に従つて、考えても理解できないことは気にしない事にしたのだけだね、その後魔理沙に教えてもらったのさ。ちゃんと代価はもらつてい
るから構わないのだけだね、鑑定書と一緒に」

「鑑定書？」

涼介は霖之助の言葉に首をかしげる。

「そう、鑑定書き。その箱を開けてみればわかるさ」

霖之助はそういうと室内に積んである数多あるガラクタの一角を指差す。その場所に積んである一つの箱を涼介は手に取り開ける。中には割れたカップが一つと簡潔な内容が書かれた二枚の紙が入っている。涼介にはどちらも見覚えのある文字だ。『すま』と魔理沙の文字で書かれた紙と、『ごめんね』と書かれた咲夜の文字だ。

「さしずめ種も仕掛けもありました、と証明する手品師の鑑定書と言ったところかな」

「その通り、一杯食わされたよ」

「カップを持って行かれただけに？」

「全然うまくないぞ、涼介」

「ごめんごめん、そう冷たい目で見ないでくれ。お茶目な冗談じゃないか」

そう言つてわるびれなく謝る涼介に霖之助は大きいため息をつく、ふと視界の端にある物を捉えニヤリと笑う。

「まったく、その軽い口を直さないと誰かに刺されるぞ」

「それを霖之助の口から聞くととは思わなかったぞ」

霖之助はこれ見よがしにカウンターの内側から『文々。新聞』を取りだしカウンターに置く。

「なんでも、女性用のイヤーマフラーを里で探していたそうじゃないか？」

「はっ、え？そんなことまで書いてあるのかそれ!」

「最終的には人形師に特注したことまで書いてあるぞ、涼介」

「ネタが無いからと人の私生活を……文めえ……覚えていろよ」

俯き、怨嗟の声を上げる涼介に流石の霖之助も悪いと思つたのかフォローするように声をかける。

「それだけ幻想郷の住人に興味と親しみを持たれているのさ。終わってしまったことは仕方ないさ、今はそう思つて前向きに考えようじゃ無いか？」

涼介の発言を引用して霖之助は励ましをする。

「君の所の戸と、この風評は規模が違うがね。ふふ、ふふふふ」

虚ろに笑う涼介に今度こそ霖之助の頬が引きつる。

「まあ、天狗の新聞だ。間に受けるような里の人間はほとんどいないさ、安心すると良し」

「はああああああ。そうだな、いつまでも文句を言つていても仕方ない。退治依頼を出しておくよ」

長いため息の後の涼介の清々しい笑顔と発言に霖之助は文の冥福を祈る。

「で、結局なんの話をしていたんだっけ、霖之助？」

「ああ、それかい。もともとはどっちが店主としてちゃん」

霖之助の言葉が最後まで紡がれる前に建て付けの悪い戸がバンツと音を立てて開く。ドタドタと音を立てて霊夢と魔理沙が入ってくる。その小さな体で大きな鳥を捕まえた姿を二人に見せる。その姿に涼介も霖之助も固まる。

「もう、涼介さん勝手に店を空けないでよ。でも、まあまだここでよかつたわ」

「そうだな、ちようど良いぜ。香霖、台所借りるぜ」

「おいおい、魔理沙に霊夢それはなんだい？」

先に我に帰った霖之助が問いかける。

「朱鷺だぜ。私が捕まえたんだ。鍋にして食べよう。たくさんの調理道具と料理人がここには揃えてあるからな」

調理器具で霖之助の店を、料理人で涼介を魔理沙は示す。その言葉に涼介は我に返る。そして、涼介と霖之助は同時にため息をつき顔を見合わせる。

「霖之助、思い出したよ。何を話していたか」

「ああそうかい。答え合わせをするか」

「「どんぐりの背比べ」」

同時に苦笑いが漏れる。

「少女二人に良いように振り回される。これでは商売人として私も霖之助も半人前だな」

「違くない」

「涼介さんも霖之助さんも何二人でこそこそして笑っているのよ」

「そうだけ、早く鍋にしてくれよ」

その二人の催促に、半人前の店主二人は朱鷺を受け取り台所に向かう。その後ろ姿は長身の二人にしてはやけに小さく見えた、とのちに霊夢と魔理沙は語ったという。

春を訪ねて雪原世界

春探索に供する一九杯目

いつもの様に張り紙一つ

『本日所用により臨時休業』

四月半ばに入ったのにまだ幻想郷は雪に覆われている。涼介は三月の終わりあたりから違和感を覚えていた。幻想郷の冬は二度目だが、三月も終わりに近づけば雪解けが始まっていてもおかしくはない。涼介はそのことを店に訪れる里の客にも確認していた。だからこそ霖之助の顔を見るついでに何か知らないかと聞きに行ったのだが、鍋を置いていてすっかり忘れていたのに気が付いたのは自宅に帰ってからだ。

「もうそろそろ来るかなあ」

店の裏口に出て待ち人の到着を待つ。また、聞きに行くのも億劫だし知っているとも限らないと涼介は思い直した。だから、身近で知っていそうな人物に相談したところ詳しくそんな人を連れてきてくれるとのことなので寒空の下その人物たちを待っている。

「おーい、バリバリのおっさん!!」

「チ、チルノちゃん、バリスタのお兄さんだよ」

「あの人がお話の人なのね」

体を震わせ待っている涼介に声がかかる。氷の羽をもつ氷精のチルノ、大ちゃんと呼ばれる大妖精。そして見知らぬ白いターバンの様な物を頭に巻き、同じく白いマフラーにゆったりとした青い服を着たおっとりとした雰囲気的女性がふわりと目の前に舞い降りる。その瞬間ただでさえ寒い気温がさらに下がり、涼介は背筋を震わせる。

「やあ、チルノに大ちゃんこんにちは。そちらの方は初めまして、本日はお招きに応じていただきありがとうございます。私は、この桃源亭の店主をしております白木涼介と申します、どうぞ涼介とお呼びください」

涼介はそういうとチルノ達の連れの女性に挨拶をする。

「これはこれは、ご丁寧にありがとうございます。私はレティ・ホワイトロック。レティで構いませんわ。冬の妖怪ですの」

そういつて、レティは片手を体の横に来るように肩の高さまで上げる。すると、それに合わせて何も無い空中に雪が生まれ舞う。その幻想的な光景に涼介が視線を奪われるも、すぐに終わる。見ればレティは手を下している。

「とりあえず中に入りませんか？凍えてしまいますよ。ね」

レティが笑顔で手を後ろで組み体を斜めに傾け提案してくる。そして、涼介は彼女たちが現れてから急激に冷え込んで、手足の感覚がなくなっていたことに今気が付く。

「ありがとうございます、そうですね、私の能力だと熱を落ち着けて冷ませても、温められないですからね。ご提案ありがとうございます」

「あら、あなたも物を冷やすような能力があるんですね」

「冷やすこともできる、というのが正しいのでしょうか。紫さんが言うには私の能力は落とし止めるものだと思いますし」

「ふうん…あの隙間と関わりがあるのね」

「はい、少しだけですけどね」

レティといつもの仲の良い掛け合いをしている妖精二人を店内に案内する。カウナーに三人が掛け、その前に涼介が立つ。チルノにはアイスココアを、レティにはアイスコヒーを供する。大妖精と自分にはホットココアを用意する。そして、昨日のうちに用意しておいた生チョコを一緒に出す。

「チルノそれを飲んだらまた、飲み物と冷蔵用の氷をお願いするよ。大ちゃんチルノの事お願いするよ。私はレティさんと話しているからね、何かあれば遠慮なく声をかけてね」

「アタイに任せれば最強よ。完璧な氷を出してあげるわ！でも、これ食べてからね」

「バリスタさんありがとうございます。また氷を入れる箱ごと凍らせない様に注意しておきます」

「はは、お願いするね大ちゃん。また表面を砕くのは大変だからね」
「はい」

妖精二人にそう言つて涼介は飲食物に舌鼓をうっているレティに向き直る。

「お待たせいたしました」

「構わないですよ、それに食べ物も美味しいですし」

「そう言つていただけると用意したかがありました。それで本日お呼びした理由なのですが」

「聞いていますよ、あの子から。中々要領を得られませんでしたけれど」

件の氷精に二人は視線を送り苦笑いをこぼす。

「お願いするときに大ちゃんがいれば違ったのでしょうかね」

「あの子は妖精にしては少し賢すぎますけれどね」

「そうですか？どのくらいが普通なのかに疎くて」

「別に知っていることで得があるわけではありませんから知らなくとも問題はないかと」

「そうですね」

「それで、本題ですけれど。冬について知りたいとのことでしたね」

「はい。今年の冬が長すぎると感じまして何かを知っているのでしたらお教えいただけ

ないかと思ひまして」

「それを知つてどうするの？ 貴方が何か出来る様にはとても見えないわ」

レティはそういうと、そのふわふわとした優しい霧囀りに何処かうすら寒くなるような冷たさを醸し出す。涼介は頬を撫でるわずかな冷気を感じる。

「もし、何か原因があるのであれば話し合おうかと思ひまして」

「話し合う？ この幻想郷で？」

レティは予想のしていなかつた答えに首をかしげる。

「はい。私の能力は心を落ち着けることが出来ます。ですから、争わずに対話で何とか出来る様でしたらどうかしたいと思います。それにそろそろ桜が恋しいですしね」

「なるほど、室内で温かくて居心地が外より悪いはずなのにホツとするのはそのせいなのですね」

「ああ、すみません。火を止めますね」

「比較論の話で、絶対値的には過ごしやすいのでこのままで構いませんわ」

「ああ、お気を遣わせてしまいすみません」

「お気になさらずに。それで冬の長い原因でしたわね。教えてあげますわ」

「いいんですか？」

「ええ、どうなるのか興味がわきまして」

「興味ですか？」

「そう、個人的な興味が」

レテイにジツと見つめられ少しだけ涼介は居心地の悪さを感じる。

「ふふ、ではまず勘違いを訂正いたしますね。これは冬が長いではありません」

「冬が長くはない？ですが現に」

「いいえ、結果として冬が長くなっているのであつて原因は違います」

涼介の言葉を遮り、レテイが続けさらに重ねる。

「誰かが春を集めています。だから春が来ないのです。その結果として冬が長引いていきます」

「春をあつめる？そんなことが可能なのですか？」

「現に起きているので可能なでしょう。能力によるものなのか、術によるもののかは解りかねますが」

レテイはそういうと肩を締め飲み物を口に運ぶ。

「春を集めて何をしようとしているのでしょうか？」

「さあ、それは分かりません。冬を長くしたいのか、お花見をしたいのか、はたまた暇つぶしなのか、黒幕の方にお聞きしなければ真意は分からないかと」

「そうですね。聞かないと解らないなら聞くしかありません」

「私からも一つ質問をしてもよろしいですか？」

「ええ、一つと言わずいくつでも構いませんよ。お願いしているのはこちらですからね」
「ありがとうございます。それでは、どうして貴方はこの異変とも言える事態にかかわろうとするのですか。飛ぶことも戦うこともできない脆弱な貴方（人）であるのに」

レティの声に嘲るような響きはなく只々不思議に思っているのが伝わる。

「この能力で誰かの、幻想の助けになるのであるならば私は首を突っ込みます」
「何故？」

その答えでは不十分だとレティが追及をする。

「贖罪だから。それしか私にはないから。だから私は紫さんに幻想郷へ連れてきてもらったから」

「貴方、いいわね。とつても……………」

「今なん」

レティの呟きが小さすぎて涼介には聞き取れなかった。聞き返そうとするもその時は訪れなかった。

「バリバリ!!終わったわよ、アタイに感謝するのね」

「あら、じゃあこれでお開きですね。飲み物とお菓子美味しかったですわ。頑張ってくださいね、応援していますわ」

そういうとレティはさっさと外へと出て行ってしまう。

「それじゃあまた足りなくなったら青い布ね!!」

「あ、ああ。そうだね。また足りなくなったら青い布を掲げておくね」

チルノにそう言つて妖精の二人も外へと見送る。そこにはすでにレティが浮いて待っていた。

「涼介さん、ありがとうございます。お菓子甘くておいしかったです」

さっさと飛び立つチルノとは違い、大妖精はお礼を言つて飛び立つ。三人が飛び去る直前レティが涼介を振り返り小さな結晶の様な物を投げてくる。

「とりあえず花びらを探してみるのを勧めますわね、涼介さん。それは餞別です」

そして返答を聞く間もなくレティは離れていく。涼介はレティから受け取った物を見る。直径二cmほどの雪の結晶のように見える。ひんやりと冷たいが溶けることはないようだ。

いつもの様に張り紙一つ

『春を探してまいります』

その後すぐに出かける用意をして、リュックを背負う。レティからもらった結晶は紐

を通して首からかける。ハルに嫌そうにされるが奪われることはなかったので涼介は自分に何か直接害のある様な物ではないと判断する。置いていこうとしてもついてくるハルに涼介が折れる形で、一人と一匹は出かける。

「さて、春を探しに行こうか」

ハルがわうと吠えて応える。

「まあでもどこに行けばいいのかわからないのだけだね。とりあえず春を探すのか。その辺の森でも歩いてみようか。花か何か見つかるかもしれないしね」

とりあえず当てどもなく歩こうということで、二人は天狗の縄張りに入らない様に妖怪の山近辺の森へ向かう。

「まったくハルは家で待っていればよかったのに」

涼介の言葉にハルが尻尾でピシとたたき不満を表す。

「危ないかもしれないよ」

今度は二度叩かれる。だいぶご不満らしいと涼介は感じる。

「私はいつもなんだかんだと何とかなっているから心配はいらないよ」

涼介のその言葉にぐるううう、と鳴く。それはまるで人の溜息の様に聞こえる。思わず器用なことだと涼介から笑いが漏れる。

「それにしても寒さを感じないね。これのおかげかな」

そういつて懐からレテイにもらった結晶を取り出す。触れる肌はひんやり冷たいが周囲の気温は過ごしやすくなっているように感じる。涼介にとつてはまだ寒さを感じる気温ではあるが、とても雪が降り積もっている気温には感じられない。

「貴方も物を冷やすような能力が、と言つていたから彼女もそういうことが出来るのかもしれないね。でも、寒さを緩和できるのはうらやましいなあ」

レテイの結晶を褒めたせいハルの尻尾が不満げに振れている。

「温度が低い状態は分子の運動も低下しているからね。温度を下げるなら同じように分子の運動を落してしまえばそれで済むのだけだね。不活性には出来るけど活性は出来ないってかゆいところに手が届かないよね、私の能力は」

ハルはそれに応えずに雪道をサクサク先に進んでいく。

「これは失敗したかなあ。能力の文句何て持つてない側からすれば嫌味だよなあ」

自分でフォローしても嫌味にしかならないだろうと涼介は思うと、ハルの機嫌が落ちてくまでついていくしかかないだろうと進める足を速める。そのまま二人はしばらくの間当てどもなくさ迷い歩く。雪も降り出し、視界が悪くなる。

「これは困るなあ。レテイのおかげで寒くないのが救いだなあ」

ゴーグルを出し、目を保護する様につけながらも歩く。

「でも、もうここがどこかは分からないんだけどね。凍死はしないけど遭難はしてし

まったね」

危機感を感じないぼやきをしながら涼介は進む。そして、吹雪く白い視界の中に小さな建物が見えた気がした。

「あつちに何かあるみたいだね、行ってみよう」

誰かしら居ればここがどの辺りか聞けるだろう、と呑気なことを考えながら涼介とハルは進む。少し近づいたおかげで、吹雪によつて白く染まる世界に建物の輪郭がはつきりと浮かぶ。小さな廃屋の様に見える。それに涼介は小さな落胆を感じる。

「うーん、誰か住んでいそうには見えないね。でも、吹雪がやむか弱まるまでも間はしりげそうだね」

その涼介の言葉にハルは答えようとするが、次の瞬間には毛を、尻尾を逆立てて涼介の前に飛び出し低く吠える。妖怪が近くにいと涼介は判断する。一緒に出掛けている時に店に来たことがない、つまり嗅ぎ覚えない妖怪が近づくとハルはこのような反応を示すからだ。

「ここに迷い込んだら最後！」

上から声がして、涼介たちの目の前に小さな影が降り立つ。そして涼介はその声に聞き覚えがある。懐かしいと笑みさえ零れるほどだ。その小柄な陰に近づくと、ハルの横を通るとき問題無いというように、毛で逆立つ背中を軽くなでる。

「やあ、橙。随分久しぶりだね」

「あれ、涼介じゃない。こんなところで何やつてるの？て、ここに居るってことは迷子になったのね」

「そうそう、迷子だよ。と言うことはここがマヨヒガなのか」

「うん、ここが私の住処のマヨヒガだよ。で涼介は迷うほどに何をしているの？」

「春を探しているのだよ」

「ふーん、異変に首突っ込んでるんだ」

「ああ、これはやはり異変なのだね。でも確かに幻想郷中の春を奪うのは異変だね」

八雲の式の式が異変と言ったのだからこれは確定だろうと涼介は思う。そして涼介の言葉に橙が驚きを示す。

「春を奪っている事、知ってるんだ！中々やるわね、涼介。姉弟子として鼻が高いわ」

藍に能力の指導を受けている際、橙にも手伝いや一緒に修行をさせられたことがあり、まだまだ精神的に幼さの残るこの妖獣に弟弟子認定を受けている。涼介にとつてもそれはこそばゆいが自身も藍を師匠の様に慕っているのでそれを認めてもらえたようであれしさが勝る。

「橙も何か知っているのかい？」

「うん、色々知ってるわ」

そういつて自慢げに胸を張る姿はどこか微笑ましさを感じる。

「それは教えてもらえるのかな？」

「え、あ、うんとね……あーだめ、かな？うん、ダメ」

思い出す様に頭をひねり考え、得た結論は拒否であつた。

「どうしてか聞いても？」

「藍様がダメつて言つていたから」

「そうかい。それはダメだね」

師匠が言うなら仕方ないと涼介は諦める。

「それは誰に対してもなのかな」

「うん、誰にも言つちやいけないんだ。あ、でも涼介が来たら渡す様に言われていた物があつたのを忘れていたわ」

橙はそういうと廃屋、改め自身の住処であるマヨヒガへ案内してくれる。中は意外と綺麗で隙間風などもない。橙が大事に管理していることがうかがえる。部屋に置かれている筆筒から缶ジュース程度の大きさの瓶を取り出す。中はピンク色で染まつている。

「はいこれ、春だよ」

「え、桜じゃないの？」

渡され、中身を見ると桜の花びらがぎっしりと詰まっている。橙に春と言われよく見ると、たしかに普通の花びらでない事がわかった。

「うっすらと光ってる?」

「そう。これは春を固めたもの。これだけじゃ桜の一本も咲はしないけど確かにこれは春だよ」

「じゃあ、奪われた春と言うのはこれなのか」

「うん。もつと大量の、とつくけれどね」

橙は良くできましたと言うようにうんうんと頷きを見せる。しかし、涼介には疑問が残る。

「これを藍さんが私に渡すように言ったんだよね、どうして分かるかな?」

そのことである。なぜ、話せないのに原因の一つともなっている春を渡すのか、それが涼介にはわからない。

「それは私には解らな……じゃなくて、内緒よ内緒!」

隠し事のできない姉弟子の姿に微笑ましくも思いながらも涼介は考える。藍は自分に何かを期待しているのだろうと、涼介は考える。それに以前、紫から働いてもらう時は早く訪れそう、とも伝えられていた。このことなのだろうとあたりをつける。それであるのなら、無理に聞くことはせずに、紫の掌の上で踊るのが正解なのだろうと思ひ追

及はしない。

「そっか、内緒なら仕方ないね」

「仕方ない仕方ない。本当は私も教えてあげたいんだけどね、内緒なのだから教えられないの」

「ふふ、でも春はしっかりと受け取ったよ。でもどうしようか」

「なにが？」

「どうやってここから帰ろうかと思つてね」

「それなら大丈夫。扉を抜ければ貴方の知つていどこかに出るはずよ」

「そうなのかい」

「そうよ、紫様の能力を借り、藍様が術を組んであるのだから完璧よ」

その言葉に涼介は安心する。紫の能力と言う物は分からないが、少なくとも見知った場所に出られるのだろうから。

「さあ、話は終わりよ。涼介行つた行つた。風も雪も止んだみたいだしね」

外の風も雪もすでに止んでいた。そのことに作爲的な物を感じる所ではあるが踊ると決めているのだ、躊躇することは何もないと涼介は腰をあげる。

「そうだね、やることをやらないとね」

「そうよ、しっかりとやりなさい。藍様の弟子で、私の弟弟子なのだから自信を持ちなさい

「い」

「そうだね、二人の顔に泥は濡れないね」

そして涼介とハルは扉をくぐる。気が付くとそこは橙の住処の外ではなく、見覚えのある一軒の家の前であった。

「ここは……アリスの家か」

魔法の森の魔女であり、人形師であり、そして友人であるアリス・マーガトロイド邸その目の前であった。

春の欠片に供する二十杯目

とりあえずせつかく来たのだと、涼介はアリスを尋ねようと扉に近づく。ここに来たのが偶然か、紫たちの思惑かは解らないがアリスに会うことで問題が起きるとも涼介には思えないのだ。

「それに、魔女は多くの知識を持っているから何か知っているのかもしれないしね」

涼介はそう零し、ハルと扉へさらに近づく。しかし、歩みが止まる。違う、止まったのだ。その周囲に浮かぶ無数の刃物をこちらに向ける人形達が現れたことで涼介とハルは足を止める。

「ハル、動くなよ」

少しでも動けば文字通り刺さりそうなほど、刃物は近い。ハルが反応できなかった時点で力量差は知れているのだ。何故、アリスがこのような真似をしたのかは涼介に解らないがすぐに刺さない時点で対話の意思があるのだろうと焦るような真似はしない。

「まったく、この寒空の中うちに何の用なのよ、妖か……あれ、涼介に白狼ちゃん？」
扉から出てきたアンニユイそんなアリスが、涼介たちの姿を確認すると首をかしげる。

「ああ、良かったアリス。この子達をどうにかしてくれないかい。これじゃあ氷像にされたみたいに動けないんだ」

「ああ、その馬鹿みたいに危機感のない物言い確かに涼介ね」

「いや、その判断のされ方はちよつと」

「いいんじゃない、それで本人確認できるなら。それともイヤーマフラーを特注しに来た時の理由言う？」

「勘弁してくれよ、その話題は新聞にもされていておなか一杯なんだよ」

アリスはそう言いながら指を少し動かす。そうすると涼介たちの周りにいた人形たちが離れていく。

「ああ、人心地付いたね」

「よく言うわ、まるで緊張もしていなかったのに」

「まあ、自分にも作用する能力だからね」

「呆れた能力ね、制御なさい。危機感や恐怖は身を守るのに必要な感情よ」

「うーん、訓練はしたのだけだね。未熟なのか無意識で抑えているのかわからないんだ」

「はあ、もういいわ。言っても無駄なことは言うだけ疲れるだけだし。それでどうして貴方から妖怪の気配がするのかしら？人間やめた？」

「いや、今のところその気も予定もないけど」

アリスの問いかけに涼介は分からないと首をかしげる。傾げた拍子に首からかけているレティにもらった結晶が肌に触れ、そのひやりとする感覚に思い至る。

「もしかしたらこれかも知れないな」

そういつて、紐を引き胸元から取り出しアリスに見せる。それを見たアリスが目を見つめ、得心が行ったとてでも言うように一度頷く。

「なるほど、どこで手に入れたか知らないけれど冬の妖怪の結晶を身に付けていたのね。だから、霊力の弱い貴方の気配がその結晶から漏れる妖力に消されて妖怪に感じられたのでしょうかね」

「なるほど、寒さを消す以外にそんな効果もあつたのか。レティから餞別としてもらったからそのままにしていたよ」

「貴方ねえ……。まあ、いいんじゃない。それとその白狼がいれば弱い妖怪は寄ってこないでしょうしね」

「それは重畳」

「……強い妖怪は避けてくれないわよ」

「それだけの妖怪なら話が出来るさ。なら大丈夫だよ」

「本当に相変わらずね」

「安心したかい？」

「頭が痛いわ。もうそれもいいわ。それで貴方達は私に何の用だったの？」

「いや、特に用事があつてここに來たわけではないんだよ」

「用事がないのにこんな所まで飛べない貴方が、雪道を歩いてまで來たの？ 貴方本当に頭大丈夫？」

アリスの割と深刻そうな声に思わず涼介の顔がひきつる。

「違う違う、気が付いたらここに居たのさ」

「貴方……」

アリスの目が可哀想な者を見る様な光を携える。

「ああ、誤解しないでくれアリス。詳しくは知らないのだけれど紫さんの能力で見知つた場所のどこかに飛ばされたんだ」

「そういうことね。説明はちゃんとしなさい。とうとうガタがきたのかと思つたわ」

「辛辣だなあ」

「日ごろの行いよ」

「ううん、言い返せないのがつらいところかな」

「なら善処なさい。それと事情は分かつたわ。誤解とはいえ刃物を向けてしまったのだからお詫びをさせてちょうだい」

そういつて返答を聞く間もなくアリスは家の中へと戻つていく。人形が扉を開けて

待っていることから入ってこいと言うことなのだろう。ハルは扉の前で伏せここで待っていると言いたげだ。仕方ないと、涼介は中へと一人入っていく。

「アリス、誤解をさせるような真似をした私が悪いんだ。詫びは必要ないよ」

「じゃあ、久しぶりの来客だからもてなさせて頂戴。最近寒くて外出する気も起きないのよ」

「はあ、そういうことなら一席ご一緒させてもらおうよ」

「じゃ、おとなしく待っていて下さるお客様」

「かしこまりました」

普段とは逆の立ち位置。アリスが紅茶をいれお菓子を用意する。アリスが店に来た時とは逆の配役、それに二人はわずかに笑いを漏らす。

温かい紅茶を飲み、いくら寒くないとはいえ多少は冷えている体が温かい物でじんわりと温まる感覚にほっとする。

「それで貴方は冬妖怪から原因を知り、春を探して、マヨヒガに迷い込み春の欠片を手に入れ、ここにたどり着いた、と」

「ん、その通りだよ」

「馬鹿じゃないの？」

「辛辣だなあ……別段危険はなかったよ。それに少しずつだけれど真相に近づけているのじゃないのかな」

「馬鹿なのね」

アリスの答えは変わらないどころかむしろ悪化する。その表情は、その瞳は本人と同じように馬鹿じゃないの、と雄弁に語っている。

「いや、あのねアリスさん」

「どう言いつくろうと馬鹿は馬鹿よ。自衛もできないのに異変へ首何て突っ込まない。貴方、何考えているのよ」

「何と言われると、異変の解決だけど」

「本物の馬鹿ね。そんなもの博麗の巫女に任せなさい」

「そうは思うんだけどね。自分で出来ることは頑張りたいじゃないか」

「そこが馬鹿だというのよ。貴方じゃどうにもできないわよ」

「それは解らないよ。対話が出来ればどうにかなるかもしれない。私の能力ならその可能性がある」

「問答無用でこられたらどうするのよ」

「ほら、こんなか弱い人間に問答無用ではこないでしょ」

「樂觀がすぎるのよ、貴方は！第一に今は……はあああ……どうせ言っても無駄ね。無

駄なことを言ってもつかれるだけだしもういいわ。一度痛い目を見て学びなさい」

アリスが深いため息を漏らし諦めを口にする。その彼女の姿に涼介は申し訳なきを感じるが、改める気はないので口には出さない。それは逆撫でする結果しか生まないだろうからだ。だから話を進める。

「アリス、これについて何か詳しいことは解らないかな？」

そういつて瓶をリュックから取り出しアリスに見せる。アリスはそれを受け取り、目を細める。

「これが春の欠片ね。なるほど、これ取り出してもいい？蓋にされている封はかけ直すから」

「封なんてされていたんだね、知らなかったよ。構わないよ、アリスの好きにしてください、教えてもらう側だしね」

「なんで貴方が知らないのよ。これ渡した奴から何か聞かなかつたの？」

「うーん、あの子はちよつとそそっかしい所があるからなあ」

「涼介とそそっかしい子の組み合わせ何て最悪ね」

「何か含みを感じるのだけど？」

「自覚があるならそういうことよ」

アリスは素っ気なく答えると瓶から春の欠片、桜の花びらのような形をしたそれを数

枚取り出し、蓋を閉めなおす。そして指から糸をだし、瓶を一周する様に巻、縛る。

「それで、これはどういった封なんだい？」

「中にある春の気配を外に出さないようにしているだけの簡易的な封よ。やり方は違うけど効果は一緒だから元通りよ、安心して」

「別にどういった形でも大丈夫だよ。なるほど、そういった封がされていたんだね」

涼介はそういうと興味深げにアリスから返された瓶を見る。

「最初にしてあったのと同じだから開けると封が解けるわよ」

「じゃあ開けない限りは漏れないのだね」

「そうなるわ、でも一度開けたら封が出来ない貴方ではどうにもならないわね。封が解けたからと言って何があるわけではないけど」

「ふうん？別に春が逃げるとかいうわけではないのだね」

「そういうことはないわね。でも、春の気配は漏れるからその春を奪っている犯人にはばれるかもしれないわね」

「なるほど、行き詰ったら開ければいいのか」

「……本当に痛い目を見た方が速そうね」

「怖いなあ」

「感情が籠ってないわよ、涼介^{バカ}」

「含みを感じるなあ」

それに応えずアリスは欠片を興味深げに眺めるばかりだ。

「何かわかりそうかい？」

「春と言う概念を固めたものでもいうのかしら。ほら、触つてみると解るけど仄かに温かさを感じるわ」

そういつてアリスから手渡された春の欠片を手に乗せると確かに温かい。

「本当だ。これは本当に春そのものなんだなあ」

「そのようね。詳しく知りたいのならもう少し時間がかかると思うわ」

「じゃあ、お願いしようかな。分かったら店まできて教えてくれないかい。今日の所は大人しく帰ることにするよ」

「そう、賢明ね。あながち言った事すべてが無駄ではなかったのかしら。いいわ、その依頼受けてあげる」

「ありがとう、アリス」

「いいのよ、私もこれに興味があるし。純粹な季節の結晶、面白そうね」

そして、涼介はアリスと別れ、ハルと一緒にアリスの家を発つ。あたりは薄らと暗くなり始め黄昏が訪れる。

ハルと二人で魔法の森を歩く。生憎とガスマスクがなく困っていたが、アリスが宝石に簡易の结界を施してくれ、それで瘴気を弾き涼介たちは帰路に着く。魔法の森をもう少しで出るという所でハルが何かに気が付き、走っていく。

「ハル、何かあったのかい？」

雪原の一点で止まり、軽く雪を掘る。中から白い服を着た三対の白っぽい透明な羽をもつ人物が出てきた。

「えっと、確か…春告精だったかな？」

「は、はる…どこ、ですかー？」

その様子はひどく弱っているように見える。意識はないのか目は開いておらず、うわ言の様に春の行方を捜しているようだ。春告精は確か、春に現れる妖精だったはずだと涼介は思い出す。この長冬、と言うか春が奪われた状態はこの妖精にとつて好ましくないのだろうか。と涼介は考え、リュックから瓶を取り出す。

「開けると、犯人がくるかもしれない…か」

開けようとした涼介の脳内にアリスの忠告が思い出される。それでも目の前の弱った少女は見捨てられないし、これも思召しと思うことにして、犯人に会おうと考え封を開ける。瓶の中身を半分ほど取り出し、春告精に近づける。

「は、春です!!」

ガバツという幻聴が聞こえそうなほど勢いよく体を起こすと涼介の手にある春の欠片を取り食べ始める。

「た、食べるのか…」

唾然とする涼介に目もくれず、一握りの春を瞬く間に食べ尽くす。食べ終わると涼介に気が付くのか慌てだす。

「あ、あのすみません。春が足りなくてですね、思わず春の気配に飛びついてしまいました」

どこか気恥ずかしそうにする彼女の姿に涼介は表情を崩す。

「気にしなくていいですよ。先ほどの欠片は貴女にもともと上げるつもりでしたので。私は白木涼介と言います、涼介とお呼びください」

「ほ、本当にありがとうございます。私はリリーホワイトといって春告精という妖精です」

涼介の言葉に安心したのか慌てた様子をなくし、ほんわかと温かくなるような笑みを浮かべる。

「本当はまだ春があるのですが、残りはお分けすることが出来ず申し訳ありません。春を集めている犯人と会うために必要なのでお許しください」

「えっと、犯人さんと会ってどうするつもりなのですか？」

「春を返してもらおうかと考えております。そろそろ雪も見飽きましたし桜が恋しいですからね」

雪も見飽きた、と言った時胸元がひんやりとする。冬の欠片を着けながら雪を見飽きたといったからかな、と呑気なことを考えながら涼介はリリーに理由を話す。

「そういうことでしたら……我慢します。でも、大丈夫なのですか？」

「何とかなるんじゃないでしょうか」

「樂觀的なのですな」

「頭の中が春ですね」

「ふふふ」

涼介のくだらない冗談にリリーが笑みをこぼす。

「それでは私は貴方が春を取り戻してくれるまでじっとしてようと思えます。今貰った春があるのでまだしばらくは大丈夫そうですね」

「もし、その春が足りなくなるまでに、春が戻ってこなかったのなら博麗神社にいる巫女に相談するといいですよ」

「はい、わかりました。でも期待して待っていますね」

リリーはそういうとふわりと浮きあがる。

「それでは頭が春のお兄さん、またですよー」

「はい、またですよー。春告精さん」

リリーは涼介に手を振つてどこかへと飛び立っていく。きつと、少しでも温かい場所でも目指すのだろうか。と涼介は思う。

「さて、封を開けてしまったから家に戻つてじつとしてるのはなあ。人気のないところを散歩しようか、ハル」

がう、と返事が一つ。今度こそ本当に目的地もない旅路が始まる。ただ待ち人が訪れるまでさ迷い歩く。どこかで春の気配を察知した犯人が来るのをさすらいながら待ち受ける。

当てどもなく歩くにしても、せつかくならどこかを見に行こうと、霧の湖へと向かう。湖が凍つてさぞ見ごたえがあるのだろう、もしかしたらその上に乗ることもできるかもしれないと軽いレジヤ―感覚で目的地を決める。

「紅魔館に行かないのにこっちに来るのは初めてだね」

相槌をうつようにハルが一吠えする。視界の先に凍つた湖が見える。夜の暗さも相まって少しだけ寂しさを感じる。涼介が感嘆の吐息を漏らすとその耳に音が聞こえて

きた。

「ん、音？違う、これは……何かの演奏？」

音に誘われるように涼介は進む。湖から少し離れた所までその音に誘われて行くともたしても廃屋がある。洋式の古い建物、廃洋館とでも言うのだろうか、そこから楽器の演奏が聞こえてくる。

「こんなところに誰かいるみたいだね、ハル」

聞こえるメロディーが心地いいのかハルの尻尾が音に合わせて揺れている。どうやら音はこの廃洋館の後ろの方から聞こえる様だ。二人で静かに近づいていく。そこには赤いシャツに、同じ色合いのキュロット、頂点に星の飾りのついた帽子を着けている少女が楽器に囲まれ立っている。

「すごいな」

その楽器はすべて浮かびふわふわと上下に揺れている。そして触れてもいないのにその楽器達から音が紡がれ演奏をなす。たった一人のオーケストラだ。

「でも、なぜかどこか」

言葉は続かない。涼介の瞳から涙が流れる。涼介はそれに気が付かない。そして、二人は演奏する少女の後ろ姿を静かに見つめ、演奏に耳を傾ける。そして、演奏が終わる。少女は疲れたのか一度手を組み、伸びをするように組んだ手を上へと伸ばす。その姿

に、涼介は一区切りがついたのを察し、拍手をして近づく。

「盗み聞きして申し訳ありません。でも、素晴らしい演奏でつい、すみません」

音に気が付き、少女が振り返る。驚きが表情に浮かぶが、涼介の顔を見て疑問が僅かに浮かぶ。

「貴方、どうして泣いているの?」

「え、あ、本当ですね。何故でしょうか、とてもきれいで感動したのに……」

考えている涼介の様子に少女は答えを待つ。

「ああ、そうか。きつとどこかさびびしく感じられたんだ。届かない誰かに、ここにはいない誰かに語っているように聞こえたから、だから寂しかったのだと思います。すみません、勝手に変なことを言ってしまった」

涼介のその答えに少女は小さく息をのむ。

「ああ……貴方も……そういう人がいるのね」

少女が笑う。悲しげに笑う。今度は涼介が息をのむ。

「なぜ、そうだと?」

「私は、幻想の音を演奏することが出来る。そして、私は今の演奏に、その力を使いあの子への、もう届けることはできない子への思いを込めた音色を奏でた。自然に涙が流れる貴方はきつと、そういう人がいるから共感したのだと思うわ」

「……貴女は？」

「妹。貴方は？」

「愛しい人」

しばらく互いに無言になる。ハルは静かにそれを見守り、身じろぎもしない。

「私はリリカ。リリカ・プリズムリバー」

「私は白木涼介。里と妖怪の山の間にある喫茶店で店主をしています」

「そう、今度遊びに行くね」

「是非遊びに。また色々な演奏を聞かせてください」

「いいよ、でも今度はお姉ちゃんたちも一緒にね」

「お姉さん達がいるのですね」

「今はちよつと花見の演奏の打ち合わせに行ってもらっているの。私は面倒くさいからさぼっちゃった」

「そういつてリリカは笑う。でも、きつと一人で演奏をしたかったのだろう、涼介はそう思う。」

「花見があるんですね。それに私が参加して聞くことはできますか？」

「花見という言葉に涼介は反応し、それとなく聞く。こんな冬真つ只中の世界で花見の相談をするということはきつと春を大量に持っている異変の黒幕だろうと、想像が頭を

よぎる。

「それは難しいかなあ」

リリカの表情は苦笑いだ。それは隠し立てしているとかではなく、本当にそう思っているために、誘えないことへの申し訳なさだ。

「どうしてでしようか？」

「冥界なんだ、その花見の場所」

「めいかい？」

「そ、冥界。死んだ人の魂が転生か成仏するまでとどまる世界。だから生者の貴方は入れないのよ」

「じゃあリリカは？」

「私はポルターガイストだから大丈夫」

「そっか……冥界、そんな場所があるのだね」

「あ、今死ねばさつきの人に会いに行けるかなとか考えたでしょ？ダメよ、自殺なんてしたら閻魔に地獄行きにされちゃうよ」

「…はは、さすがに自殺はしないよ。約束だからね」

「しつかりしていた人だったみたいね」

「私がダメダメだったからしつかりするしかなかったただけかもしれないね」

涼介がそう言い笑うと、リリカもつられて笑い声をあげる。

「冥界での花見が終わったら春は返してくれるらしいよ。だから、その時はどこかで演奏会をするから聞きに来てね、招待するわ」

「そういうことなら、首を長くして待っているよ」

「お友達として、特別席を用意しておくね」

「じゃあ、お友達として元氣の出る美味しい差し入れを持っていくよ」

「ふふ、楽しみが増えた」

「待ち遠しいね。それじゃあそういうことなら今日はもう帰ろうかな。せっかくの素敵な演奏を今この場で聞いてしまうのは勿体ない」

「そう、気を付けてね。その時はお姉ちゃん達にも紹介するよ」

「ありがとう、それじゃあまたね」

「うん、ばいばい」

互いに冬の寒空の下、どこか人恋しい心が満たされたような満足感を得る。静かに続いた会話は終わり、二人は別れる。遠く離れた涼介はどこか遠くから聞こえる楽しいな旋律を聞いた気がした。

また、あてどなく雪原の中を彷徨う。冥界に自力で向かう手段を涼介は持ち合わせていない。だからこそ、涼介は犯人を待つ。そろそろ日付が変わるころだろうか、手巻きの腕時計で確認する。もうあと十分ほどで今日が終わるそんな時間。まだ犯人は来ないものなのかと涼介は考え、仰ぐように空を見上げる。そして、視線の先に浮かぶ少女を見つける。こちらに突撃する様に飛んで来ている。その手に月明かりを反射する白刃を持って。

「えっ……」

その少女と視線を空へ向けた涼介の視線が交わる。少女は視線が合った瞬間進行方向を変え、涼介たちの眼前十mの地点に着地する。

「奇襲を見破られるとは、見事です」

少女が口を開くがその内容が理解できない。呆然とする涼介とは違い、ハルが眼前の少女に牙を剥き跳びかかる。制止する間さえない、一瞬の出来事。

「ハッ!!」

少女の裂帛の音が聞こえたと思つた直後、ハルから血が飛び涼介の脇をすり抜け背後の木にぶつかり落ちる。振り返りリュックをその場に捨てハルに駆け寄る。腹が斬られ、霊気弾で飛ばされたのか球体状に殴られた跡が見える。意識は混濁としている様ではあるが、生きてはいるようだ。それに安堵し、出血を落ち着ける。

「その程度の妖獣ならば、切らずともわかります」

視線を少女に戻せば血で濡れた刃をふり、血を振り落す。

「いきなり何のつもりだ」

「貴方が持つ春を頂戴しに来ました」

それを聞き涼介が待っていた犯人だということは解った。しかし、これでは話すどころではないと同時に思う。アリスの懸念が当たったようだ。

「何故冬の妖怪が春を集めているのか知らないが、それは渡してもらおう!!」

少女が刀を構える。

「まて、私は」

涼介が否定をしようと声をあげるがその声は続かない。胸元がひどく冷たい。涼介の周りに冷気が満ちる。つむじ風のようにその冷気は渦巻き、雪を巻き込み少女を威嚇するような動きを見せる。

「レテイっ……」

原因は十中八九胸元の氷の結晶だ。涼介が何故だレテイ、と思考をめぐらせようとす
るが、目の前の少女がそれを許してはくれそうにない。少女の体から靈気が沸き立つ。

「待ってくれ！誤解が」

「言葉は不要！我が師は斬れば解ると言っていた!!」

その言葉と同時に少女が駆け出す。涼介にはそれが消えたように見える。周囲の吹雪が勝手に動く。しかし、少女に弾かれたのか、その動きが不自然に変化する。

「覚悟!!」

視界に少女が現れる。涼介の視界での出来事がゆっくりと流れる。少女が右下から左上への切り上げをしようとしていると視界は、脳は理解する。だが、体は固まったように動かない。意識に体が追いつかない。

「まっ」

言葉はつながらない。刃が体内を通り、通り道にある肋骨などの骨を両断していくのが解る。胸元で揺れる氷の結晶もその刃で碎かれる。その直後、目の前の少女が目を大きく見開く。刃は止まらず、そのまま左肩を抜けていく。

「あ」

どちらが発した声かわからない。刃の勢いに流される形で涼介の体が後ろに向かつて倒れていく。血が噴水の様に噴き出て、目の前の少女を赤く染める。能力で、血を止めようとするも、意識が混濁してきた涼介にはそれが出来ない。死ぬ、と涼介は直感する。どこか、心のどこかで安堵している自分に気が付くもそれに納得する。

「だ」

真つ赤に染まる少女が我に返ったのか倒れゆく涼介に手を伸ばす。しかし、それは唐

突に止まる。涼介は落ちゆく意識のさなか、背中に柔らかい感触を覚える。

「まったく、情けないな涼介」

聞き覚えのある呆れを多分に含む懐かしい声。そして、視界の端に一瞬見えた金色。それを最後に涼介の意識は消える。

失せモノの行方に供する二一杯目

「嘘、まだ戻ってきていないの？」

桃源亭の入り口の前で咲夜は驚愕の声を漏らす。そこには外出を示す張り紙が一つ。『春を探してまいります』と涼介の文字で書かれている。前回見たのはもう半月ほど前ではないだろうか、と咲夜は思い出す。今は五月の初旬、まだ冬は終わっていない。行方不明という言葉が咲夜の頭に思い浮かべられる。咲夜の手が涼介から送られたイヤーマフラーに無意識に伸びる。

「涼介さん、涼介さん！」

宙に浮くと二階部分の窓へ近づき声をかける。返事はない。そのまま家を回るように一周するも何も手がかりは得られない。

「紅魔館のメイドか」

声がかかる。振り返ると里の寺子屋で見かける教師がいた。

「貴女は、確か寺子屋の半獣……」

「その言い方は出来ればやめてほしいな。慧音で構わないよ」

「私は紅魔館でメイド長をしております十六夜咲夜と申します」

咲夜はひとまず形式的に名乗り返し、頭を下げる。

「それで、貴女はなぜここに？」

「涼介が帰ってきてきていないかと思つてな。かれこれもう二十日近く戻ってきていないよ
うでな。それに」

慧音が言いにくそうに口を濁す。

「それに、どうされたんですか？」

「うむ……そうだな、君は涼介の友人だ。知るべきであるのかもしれないな。十日ほど
前に里の外に涼介の所にいた白狼が意識もなく倒れていた」

「白狼というと、ハルですか？」

「ああ、そうだ。酷い傷を負つていてな。幸い傷口に対して出血量が少ないようで命に
問題は無いようであったのだが。如何せん傷を負つてから手当をせずに時間がたつて
いたようであり体力を失つていたみたいで今も目を覚ましていない」

「ハルだけだったのですか、涼介さんは!？」

「いや、涼介の姿はなかった。ただ……涼介のものとと思われる血の付いたリュックをハ
ルが里の所まで引きずってきていたようだな、それだけだ。雪の降る夜と言うことも
あつてどこから来たのかもわからん」

咲夜の顔色が悪くなる。

「何を考えたのか分かる。確かに樂觀はできないが最悪でもないと思っている。ハルがわざわざリユックを里まで運び危機を知らせたのだ。ならば理由は知らないがまだどこかで生きているのではないかと私は考えている。それに彼の事だ、そう簡単には死にそうにないだろう」

慧音が少しだけ弱弱しいが笑ってみせる。きつと、慧音自身も不安があるのだろう。だからこそ大丈夫と自分に言い聞かせているところがある。咲夜はそう思うがその心遣いは純粹にうれしい。それに、と咲夜は考える。涼介が地下へと消え死んだと思っていた。それなのに、涼介は数日後、別れた時と同じ姿を見せてくれた。だから、自分に言い聞かせるように言葉にする。

「そうですね。涼介さんなら、きつと、いつもの元気な姿をすぐに見せてくれますよね」
「そうだな、だが二十日は長すぎる」

慧音の声にもわずかに覇気が戻る。呆れを含んだされど信頼も感じられる声で文句を零す。

「そうですね、さすがに涼介さんも、今年の春ものんびりしすぎです。こちらから探しに行つてあげないといけないですね」

そうだ、今度はただ待つなんて真似はしない探しに行くのだと咲夜は決める。幸い涼

介は春を探していなくなった。ならば、そこに関連はあるのだろう。異変の解決は人間の仕事、ならば怠惰な巫女に代わって私がしても問題ないと咲夜は結論付ける。

——きつと、お嬢様もお許し下さるだろう

「確かに探しに行くくらいしないとあの馬鹿者は迷子になっているかもしれないな」

「そうですね、いつもふらふらと幻想郷をあつちこつちしていますからね。今自分がどこにいるのかわからないのかもしれないですね」

だからこそ、悪い想像を振り払うように少女二人は冗談めかして涼介への不満を漏らす。

「確かにな。それに涼介はちゃんと春を見つけたらしい、欠片だがな」

慧音はそういうと、手元の袋から瓶に対し半分ほどの桜の花びらが入った物を取りだす。

「それは、桜の花びらですか？」

「いや、そう見えるがこれは春を結晶化した物らしい。涼介のリュックに入っていた」

「じゃあ、本当に異変と関わりが」

「案外以前みたいに、爆心地でのんびりしているのかもしれないな」

紅霧異変を思いだし慧音は今度こそ本心から呆れの声が出る。實際言っていて本当にありそうだとも思っている。

「私も探しに行きたいが、里を空けるわけにもいかん。君は探しに行くのだろうか？ ならこれを持って行ってくれ手がかりになるだろう。元々涼介が戻っていたら詳しく聞くつもりで持ち歩いていたが、帰ってくる気配がない。なら、探しに行く人に預けた方が都合も良いと思う」

慧音はそういうと瓶を咲夜に渡す。それに咲夜はうなずくと空へと舞う。

「見つけてお説教してきますね」

「私の分も残しておいてくれ」

「それはその時の私に言っていたただかないと」

「なるほどな」

「それと最後に、ハルはどのような怪我を？」

「刀傷だ。中々の腕前の様だな、用心しておくといい」

「そう、でも用心は必要ないかと。きっとその刃は私に届かないのだから」

咲夜は紅魔館に向けて飛び立つ。その顔には強い意志が宿っていた。

紅魔館にたどり着いた咲夜は防寒具を外した後、主人であるレミリアに事情を話し、少しの間紅魔館を空けることを許してほしいと願い出る。それを聞いたレミリアはクスクスと面白そうに笑みをこぼす。

「相変わらず、面白い友人だ。ふふふ、まったく楽しませてくれる」

「それでは、よろしいのでしょうかお嬢様？」

「ああ、構わん……が少し待て」

「はあ、かしこまりました」

そして、しばしの間待つと部屋にはパチュリーが入ってくる。青い球体に白い星の絵が描かれた物が二つ。それがパチュリーの回りを浮いている。

「パチュリー様それは以前言われていた」

「そうよ、あなたが外で弾幕ごっこをするときナイフを拾うのも持つていくのも大変でしょうと話をしたでしょ。それを解決するものよ。レミイがそれを今日この時間を持つてこいと言うから何事かと思っただけ、なるほどね」

「お嬢様？」

「なに、視えていただけさ。パチエ説明してくれないか、その働きを」

レミリアの口元が蠱惑的に歪む。パチュリーはそれに対したため息を漏らす。

「まったく、自由気ままね」

「当り前さ、私は運命にさえ縛られない」

「そう」

パチュリーは素っ気なく興味がなさそうに返すと咲夜に向き直る。そしてパチュリーの背後に浮かんでいた球が咲夜の周りでふわふわと浮き出す。

「この中は貴女が能力で屋敷を広げているように広がっているのは知っているわよね」

「はい、それは存じております。私がパチュリー様に頼まれましたので」

「ん、そうね。それで今中には大量のナイフが入っているわ。そしていつでも取り出せる」

「これで、もち運びは問題なさそうですね」

「ええ、それと中のナイフとこの球体にも術を施しているの」

「どのような術なのでしょう？」

「ある程度まで距離がナイフと離れると、この中に戻るそういう術よ」

「なるほど、随分とかゆいところに手が届く仕様ですね」

「当り前よ、誰の作品と想っているの」

「申し訳ありません、パチュリー様」

「咲夜そうではないさ、パチエは照れているだけさ」

「レミイ？」

「怖い怖い、そう睨むな。親切な魔女殿」

「涼介みたいなこと言わないでちょうだい」

「くつくつく、アイツも随分と紅魔館に馴染んだものだな。さて、咲夜よ。我が友人を助けてこい。迎えもないと帰れない馬鹿者をな」

「かしこまりました、お嬢様」

レミリアの命令に咲夜は腰を折り応える。その形式ばったやり取りをパチュリーは呆れた面持ちで眺めている。咲夜が折った腰をただすと外へと向かおうと扉へと向き直るがその背にレミリアが声をかける。

「そうだ、咲夜忘れ物がある。少しこちらに來い」

再びレミリアに咲夜が向き直ると手招きをしていた。咲夜が近づくと、しゃがむ様で示される。咲夜が命じられるままにその場で立膝の姿勢で固まると、レミリアが咲夜の目の前で片手の指で何かを引くように何度か動かす。レミリアの指が動くたびに咲夜の目に何か糸の様な物が映った気がした。

「お嬢様、今のは？」

「何、ちよつとした気遣いさ。自分で動けない者の背中を押す、ちよつとしたな。ふふ、ふはははは」

レミリアはそういつてまた楽しげに笑う。

「さあ、私の可愛い可愛い従者よ。愁いはもうない命令を遂行しろ」

咲夜はうなずくと部屋から出ていく。部屋にはレミリアとパチュリーが残る。

「レミィ最後のは運命を？」

「何、ちよつとしたことさ。それに運命は複雑だ。大きな出来事ほど望んだ結果にするには大変だ。なにせ複雑に絡まっているからな、サイコロの出目とは違うさ」

レミリアの目は何か違う物を見ているのか虚空を揺れ動いている。

「はああ……サイコロの出目を変える行為はやめなさい」

「断る。私は負けるのが嫌いな性分だな」

「妹様が文句を言っていたわよ。アイツ、そういう所が小さいって」

「な、なに!? フランがそんなことを……ああ、何てことだ」

パチュリーのその言葉にレミリアがテーブルに大仰な動作で顔を伏せる。

「アイツと呼ぶほど怒っているのかいやしかしそう言ってもらえるほど遠慮がないのか？ 私が小さい？ そんな馬鹿なだがそう見えているという事かならばサイコロやルーレットの出目をかえるのをやめて敗北を受け入れろというのかどうするどうするレミリア・スカーレット考えるのだから」

「ああ、これは長そうね」

レミリアの独白は続く。パチュリーは元に戻らない友人を放置して図書館へと戻つ

ていく。咲夜が向かい、レミリアが手を加えた。ならばあの間の抜けた友人は大丈夫だろう、とパチュリーは憂いなくそう思う。だから、戻ってきたときの茶飲み話と説教の言葉でも考えながら待って、いようと図書館で座して待つ。

咲夜は紅魔館を飛び立ち考える。異変の解決とはいえ手がかりは涼介が持っていたのであろう春の入っている瓶のみ。さてどうしたものかと咲夜は頭を悩ませる。とりあえず霊夢を炊き付けるのがいいのかもしれないと考える。

「なんだかんだと言つて異変解決の専門家で実績もある事だしね」

そうしようと咲夜は決めると霧の湖の上を飛び博麗神社へと針路をとる。しかし、襲ってくる冷気を咲夜は察知する。高度を急上昇させる。咲夜のいた場所を氷弾が過ぎ去っていく。

「あら、また氷精？今は急いでいるのよ。遊びなら後にしてくれる？」

「あんた、ちつたあ驚きなさいよ！目の前に強敵がいるのよ!？」

「えつと、どこにいるのかしら？貴女知っている？」

「アタイよ、アタイ!!」

「面白い冗談ね？」

「もう怒ったわ!! 四枚!!」

「はあ、時間をもつたいないわ」

イヤーマフラーをとなりに浮く青球内の空間にしまう。咲夜とチルノがカードをそれぞれ四枚構える。そして、氷とナイフが空を彩る。

「はあ、悪いけどすぐに終わらせてもらおうわよ」

氷を避け、牽制のナイフを投げ目くらましとして、咲夜は時間を止めて背後に回る。カードを構え時間を動かす。カードが輝き弾け飛ぶ。

「幻符・殺人ドール!!」

咲夜の体が光を纏う。左右の青球の星の絵が開き、穴が開く。青球は中から大量のナイフをこれでもかと吐き出す。そのナイフが一つの群体の様に咲夜の周りをうねるように一度渦巻く。

「あ、いつの間に」

チルノが咲夜のスペル宣言の声で気が付き背後を見るがすでに咲夜の周りにはうねる様にうごめくナイフが舞っている。とつさにチルノはカードを取り出し、構えたカードが輝く。

「遅い!!!」

その叫びと共にナイフがチルノに殺到する。カードが弾けるが光がチルノに届く前

にナイフがチルノを呑み込む。湖の表面を覆う氷にナイフが根本まで刺さり、ヒビが生まれる。そして、ナイフがすべて刺さりきる前に氷割れ、氷上に穴が開く。

「私相手に時間を稼ごうなんて何の意味もないのにな」

ナイフがすべて通りすぎるとぼろぼろになったチルノが現れる。服はもちろん、皮膚もその氷でできた羽にも切り傷や突き刺さったりしている。飛行はひどく不安定だ。とつさに氷で身を守ったのかもしれないがナイフにはもともと靈力が込めてある。とつさに張った氷ごときで防げるものではない。

「ぐううう」

痛みを我慢しているのか、負けたことが悔しいのかチルノは涙を我慢しながら咲夜を睨みつける。その瞳は薄らと濡れている。

「今日は運が悪かったわね。急いでいるのよ、お嬢様の命令で春を取り返しに行かないといけないの」

さすがにその姿に少しだけ心が痛み、言い訳する様に咲夜は言う。

「ふん、春ならバリバリが探しに行ったもん。ただだけど、あんたより早くバリバリが取り戻してくれるんだから!!」

チルノは負け惜しみで咄嗟にそう叫ぶ。その言葉に咲夜が笑みを浮かべる。その唇が言葉を刻む。みつけた、と音もなく。

「そうなの、貴女涼介さんがどこに行ったか知っている?」

咲夜は時を止めチルノの目の前に移動すると、その泣き出すのを我慢している顔の顎に手を当て持ち上げる。チルノは咲夜に顎をくいっとさされて驚いているのか目が瞬いている。

「あ、あのチルノちゃんを苛めないでください!!」

咲夜の手が弾かれる。咲夜とチルノの間に大妖精が一瞬で現れる。それはまるで転移したように前兆がなかった。咲夜はそれに動揺を見せない。大妖精が原理は知らないが空間を飛ぶように移動することを知っているからだ。

「苛めてないわよ。涼介さんがどこにいるか知らないって聞いていただけよ。貴女、邪魔する?」

時を止めナイフを手元に三本だし、ジャグリングをする。その姿に大妖精は顔を引きつらせ、チルノが庇うように大妖精をその背に回す。

「大ちゃんを苛めるな!!」

「だから、苛めてないわよ。質問しているだけよ。春を探しに行った涼介さんを知らないって?」

咲夜はあくまでも淡々と機械的に質問する。その方が、威圧感が出て話をしてくれるだろうと考えて。

「バ、バリストタのお兄さんはレティさんに話を聞いていたので、レティさんなら何か知っているかもしれません！」

大妖精が大声を上げる。

「そのレティって言うのは？」

「冬の妖怪さんです。たぶん雪女の一種だと思います。それに妖気で造った氷も渡していたから、もしかしたら今の場所も知っているかもしれないです!!これでいいですか!?!」

「ありがと、妖精さん」

大妖精に咲夜が視線を向けてお礼を言うと、チルノが牽制する様に間に入る。咲夜はそれにやれやれとため息をつきたくなるが、ぐつとこらえて最後に気になることを質問する。

「それで、そのレティと言う妖怪はどこにいるの?」

「それは」

チルノが応えようと口を開くが、唐突に吹いた突風に遮られる。

「私のお話をされているようですが何か御用ですか?」

「レティ!!」「レティさん!?!」

「貴女が……」

視線の先に雪交じりの旋風にくるまれたレティが浮いている。レティが三人に近づいていく様に旋風を消してゆったりと飛ぶ。

「あの、私レティさんの事を」

「いいのよ、それに自分で蒔いた種ですもの。この人とお話をしますのでチルノを休ませてあげたら？」

レティがそうとうと大妖精はチルノを抱えてこの場から離れていく。

「それで私に何か御用ですか？」

「貴女は今の涼介さんのいる場所を知っているそうね？」

「残念ながら存じません」

レティが愉快気に笑う。

「さっきの妖精に聞いたわよ。妖気で造った物を渡したのではないの？」

「確かにお渡ししました。ですが、おイタをして壊されてしまいました」

「どういう意味かしら？」

「どういう意味だと思えますか？」

レティは妖力を体から放ち咲夜を挑発する。しかし、咲夜はそれを鼻で笑うと切り返す。

「馬鹿にするのはやめなさい、取り繕ってはいるけど貴女ボロボロね」

「ああ、ふふふ。ばれてしまいましたか」

「どうして弱っているのかは知らないけど、そんな状態で相手が出来るとは思いあがないことね。容赦はしないわよ」

「あの人といい、貴女といいとつても素敵ね。氷像にして大切にしまっておきたいくらいですわ、うふふふふふ」

レティが悩ましげな吐息を漏らす。その表情は妙なまでに艶っぽく体を身悶えさせる。

「気色の悪い事を言わないでちょうだい。ただでさえ寒いというのに」

「あらあら、ごめんなさいね。つい楽しくなっちゃって」

レティがペロリと唇を舐める。直後レティの髪の毛が数本宙を舞い、頬が僅かに切れる。

「それでも私気が立っているの、確かめてみる？」

咲夜がナイフをもてあそび、小首をかしげる。レティはそれに対し、流れる頬の血を指で拭いそれを舐めるとまた笑いを漏らす。咲夜がナイフを振りかぶると、降参とでもいう用に両手をあげる。

「ごめんなさいね、気になる子にはつい意地悪しちゃうの、うふふ。話してあげるわよ」

「初めからそう言いなさい」

「それで何を聞きたいのですか？今の場所は知りませんよ」

「そうね……まず彼にしたおイタって言うのは何かしら？」

「あれは素敵でしたわあ……彼がどうしてだとも言うように、レティと私の名前を呟く声はゾクゾクしました。出来ることならその場でその顔を見ていたかった。きつとその姿で留めてしまいたくなるくらいにその表情でしたのでしょね、あはああ……」

その時の事を思い出しているのか顔が紅潮する。吐き出される吐息は先ほどの比でない程に艶を含んでいる。瞳が情欲に潤んでいる。しかし、その熱は咲夜の声で唐突に冷まされる。

「感想は良いから内容を言いなさい」

「ああ……せっかくなかなかいい気持ちでしたのに………はあ端的に言えば、彼が異変の黒幕か実行犯と対峙した時に渡したオモチヤを通して相手を攻撃して威嚇したの、きつと相手の子は彼を敵意のある妖怪だと思ったでしょうねえ。彼はスペルを持たないからカードを提示して弾幕戦へと切り替えることもできない」

咲夜の表情がゆがむ。

「だから、古き時代の様に真剣勝負になつたのではないかしら……ふふ、渡したオモチヤもその相手の子に壊されちゃったようですから、オモチヤごと攻撃されちゃつたので

しようね」

——殺す!!!

咲夜がナイフを構えレティにせまる。

「黒幕の居場所を知っていますよ?」

ナイフがレティの首で止まる。僅かに食い込み皮膚を斬り、血がにじみナイフの上をつうつと伝いナイフの先から垂れる。レティは身じろぎ一つしない。その顔を愉悦に歪め至近距離の咲夜の顔を見つめる。

「ああ、良い顔お……あの人はもしかして恋人でしたか?うふふ、つがいの氷像なんてステキね」

レティの吐息が咲夜に当たり周囲に溶ける。

「言え!!」

「怖いわあ、言ったら殺されてしまいそうね」

暗に教えるから引けと言われ咲夜の眉間に青筋が浮かぶ。体に力がこもり、ナイフがさらに少しだけ食い込む。

「言わなければ殺す」

「いいの?どこか分からなくなってしまうですよ?そこに彼もいるのに」

咲夜の表情に動揺が浮かぶ。咲夜は涼介が死んでいると確信している訳ではない。だが、可能性は限りなく低いと思っていた。少なくとも目の前の妖怪が渡した力の欠片を破壊するほどの持ち主に本気で攻撃されているのだ。霊力の乏しい涼介では勝ち目どころか以前に逃げることもさえ叶わないだろう。そして、血の付いたりユツクの話今朝、慧音に聞いている。その話が脳内で繋がりが、彼が欠片ごと斬られたのだろうと想像した。想像してしまった。だから、頭に血が上り、ナイフを突きつけているのだ。

「な、何を、適当を!!」

それなのに目の前の妖怪の言葉が咲夜の頭を混乱させる。咲夜は涼介に生きていてほしいと願っている。しかし、現実には目の前にある情報がその可能性は限りなく低いと訴えてくる。それでも、心は、感情は、そんなことは無い涼介さんは生きている、と叫ぶのだ。理性と感情が乖離した混乱の中、怒りに任せた行動さえ目の前の妖怪の言葉に踊らされる。

「彼はきつとそこにいるといいましたの。私、かなり可能性は高いと思っていますよ」

弄ばれていることに対する悔しさがこみ上げる。あと少しナイフを引けばレティを殺せるというのに咲夜の体は動かない。その事実が咲夜にはたまらなく悔しいのだ。目の前の妖怪の言葉に縋ってしまっている自分が心底から許せないのだ。咲夜の表情

が悔しさと怒り、そして混乱からぐしゃぐしゃに歪む。

「ふふふ、では聞いてくれるようですのでナイフは退けますね」

レティはそういうと腕をあげ首元のナイフへと近づける。

「う、動くな！首を刎ねるわよ!!」

「いいえ、刎ねないわ。貴女にはできない」

ナイフをつかまれ奪われる。レティがそれをつかみ妖力を込め凍らせる。氷に覆われたナイフをレティはその場で捨てる。レティが首筋の傷をなぞると指が通った後からそれが消える。

「ほら出来なかつたでしょう?」

「…私は時間を止められる、逃げようとしても無駄よ。逃げれば殺す」

咲夜はレティから距離を開け宣言する。そして自分を落ち着ける様に深呼吸をし、表面上は平静にもどる。

「ふふ、そうそれは怖いわね」

「さつさと話しなさい」

「そうね、まずはどうして私が弱っているかを話そうかしら?」

「それがどう黒幕と関係するのよ」

「黒幕とは関係ないわ。これは彼が黒幕の所にいると思う理由よ」

咲夜が息を小さく飲む。その表情には縋る様な色が浮かび、レティはそれを確認すると口元の笑みを深める。雲が出てきて辺りが薄暗くなる。ちらちらと雪が降り始める。

「私を襲ったのは八雲の式よ」

「八雲の式？なぜ？」

「あの子八雲と関係が深いみたいね。式に師事して式の式（カタ）に弟弟子認定されているみたいね」

「そこまでに関係が……」

涼介の知らなかった面に咲夜は驚きを隠せない。雪が少し強くなる。

「それで彼にあげたオモチャが壊れた後に襲撃されましたね、ふふふ散々狐火で焼かれてしまいましたわ。今が冬でなかったら確実に消し炭でした、冬の今でも二十日近く経つのにまだ完全に回復しない時点でだいぶ怒らせてしまったみたいですね」

「それでそれがどうしたの？黒幕は八雲とでも言うつもり？」

「いいえ、違いますよ。今の話は彼が八雲にとつて無視できない存在と言う話の裏付けですわ。彼は春を探すうえで式の式の住いであるマヨヒガへと迷い込みましたわ。それも不自然な吹雪に見舞われ迷うというおまけつきでしたね」

「八雲がわざとそこへいざなつたと？」

「私はそのように考えています。なぜなら、そこで彼は八雲の式からの預かりものを式の式から受け取りました。私は、それを受け取るために彼はそこへ呼ばれたのだと思っています」

「何を受け取ったの？」

「貴女の持つ春」

咲夜はメイド服のポケットに入っている慧音から受け取った瓶に服の上から触れる。雪の結晶が大きくなったのか視界にちらつく白の割合が増える。

「そしてそれを調べさせ、瓶にされた封について教えるために森の魔法の所へいざなつたのです」

「魔理沙のこと？」

「人形師の方よ。封は春の気配を瓶の外に出さないだけの簡素な物です。一度でも開ければ解けてしまうような弱い弱い封。そして、その帰り道で弱った春告精に彼を出会わせました。弱った春告精を助けるために彼は瓶の封を開けざるを得なかった。封を開けさせ春の気配が犯人に伝わる様にそこになりました」

「じゃあ、そこです？」

「それはもう少し後ですね。犯人はそれに気が付けば彼の所に勝手に行く、八雲は後それを待っただけだったのでしようね。彼は対話系統にも影響を与える強い能力を持って

いるようでしたからそこまで行けば、黒幕の所まで連れて行ってもらえるとそう読んでいたのでしょうね。彼はその後霧の湖に向かいました。気配を伴い幻想郷を歩き回れば相手が気づいてくれると思っていたのでしょうか、人気のないところを歩いていましたね」

「霧の湖……そんな近くまで来ていたのなら」

咲夜は思ってしまう。その時に彼が紅魔館に来てくれていれば、助けになったのにと。でも、同時に思ってしまう。彼は誰かを巻き込むようなことをしない人だとも思ってしまう。雪はかなり強くなっている。

「そこで彼は騒霊に出会い、冥界で花見があることを知りました」

「冥界で花見？」

「そう、冥界でお花見があるそうよ。春はそこに集まっているのではないかしら」

「黒幕は冥界にいるのね」

咲夜が体に靈力を込めいきわたらせる。かなり吹雪いてきた雪でレティを見失わない様に咲夜は睨みつける。

「私はそう思っています。そこで騒霊と別れ彼は犯人に襲撃されました。八雲の誤算は私が手を出したおイタ。そのせいで彼は犯人と対話をする機会を失い襲われました。その後、八雲の式が私を襲撃しても完全に殺さなかったことから彼は一命を取り留めた

のではないかと私は判断をしています。だからこそ彼は冥界にいると思つています。最後で表に引きずり出されたのですから、八雲にはこそそと彼を誘導する必要はなくなり当初の予定通りに彼を冥界に置いておけるこれが私の知る話全てとそこから判断される予測になります。ご満足いただけましたか？」

レティは手を後ろで組むと小首をかしげる。涼介にしたのと同じような笑顔を浮かべて。

「そう、最後になぜ貴女は手を出したの？」

「だって、対話をするなんて面白いことを言うんですもの。邪魔されたらどうするのか興味があったのです。結果はダメでしたから残念でしたね。それでも彼には失望はしていませんよ、だって彼はその場でもずっと相手と話そうとしていましたから」

レティの顔が愉悦に歪む。その言葉を引き金に咲夜が時を止め近づきナイフを振りかぶる。ナイフが当たる瞬間に時間を動かす。レティは咲夜の動きに反応しない。ナイフが、レティに突き刺さる。咲夜が抵抗を感じることなくナイフはレティの首を刎ね飛ばす。しかし、レティの首が、体が崩れて雪に混ざっていく。

『メイドさん、お話できて大変楽しい時間でした』

辺りの空間から声が響く。

「どっ！だっ！」

『お話ししたことに嘘は無いのでご安心ください、彼はきつと冥界にいますよ』

「答えろお!!」

『話している最中に、雪に紛れて本体は逃がしていました。ですので探しても無駄ですよ。貴女が見ていたのは雪と妖力で出来た偽物。それでは素敵でかわいいメイドさん、またいつかお会いしましょうね。ああ、あの凍らせたナイフ、記念にいただきますね』
辺りの雪が急速に止んでいく。レティの妖気はもう感じられない。咲夜は逃げられた事を痛感する。

「くそ……くそ、くそ」

苛立ちが、怒りが、友人に害を及ぼした妖怪を逃がした情けなさが、弄ばれた悔しさが咲夜の中に強く渦巻く。

「くそがああああああ!!」

咲夜の絶叫が寒気の強い空の下で木霊した。

届かぬ想いに供する二二杯目

絶叫し、わずかながらも怒りを発散した咲夜は、レティを探しても見つけることはできないだろうと判断し博麗神社へと向かう。幻想の守護者である霊夢であれば冥界の場所に心当たりがあるかもしれないと思いい向かっている。

「大丈夫、アイツの話が本当なら涼介さんは無事よ。だから落ち着きなさい、咲夜」
高ぶった気持ちを落ち着けるために言い聞かせる。

「こんな時に涼介さんがいれば落ち着くのに」

などとくだらないことを言いながら、気分を落ち着ける。自分は冷静だと、そう言い聞かせる。その効果が出たのかそれとも単に時間がたったことで落ち着いたのかわからないが咲夜の心にも余裕が生まれた。何の気もなく周囲を見渡すとまた雪がちらついている。レティを思い出して思わず舌打ちしそうになる衝動を抑えこむ。

「早いところ春が来ないかしら」

ちらつく雪が近くを舞う。思わず手を伸ばし掴む。手の平を開きそれを見ると違和感を感じる。冷たくない、とそしてよく見るとそれは本当にうっすらとだが桃色をしている。

「これは、春？ 違う、かなり薄い色だけど桜の花びらだわ」

咲夜が空を見上げる。目を凝らせば雪に交じって桜の花びらが舞っている。

「こんな上空でなぜ？ 上に何かあるの？」

咲夜は進路を変更し、雲を突き抜ける。雲の上に出ると、見覚えのある影を二つ見つける。霊夢と魔理沙だ。二人して並んで飛んでいる。咲夜はそれに追いつくために速度を上げてとなりに並ぶ。

「霊夢に魔理沙、こんなところで何しているのよ？」

「ん、咲夜じゃないかこんなところで何してるんだよ？」

「質問に質問で返さないでよ、迷子のお迎えと異変の解決よ」

「なんだ、咲夜も同じか」

「同じってことは貴女達二人もそうなの？」

「おう、私はアリスから話を聞いてな。ほらこれ預かってきたんだ」

魔理沙はそういうとポケットから数枚の桜の花びらを取り出す。咲夜の持っている瓶に入っている春と同じものだ。

「これが春らしいな。なんでも、アリスの話だとうまく偽装されていたらしいが、かなり濃い春らしい。普通の春と見分けがつかない様に術で隠されていたらしいな。だから春告精が二十日ももったんだと思うぜ、なあ霊夢」

「何よ、知らないわよ。そんな事私は」

「なんだよお、付き合い悪いなあ。何でも涼介に春を分けてもらつた春告精が春を探しに行つた涼介が戻つてこないから助けてほしいって霊夢の所に行つたらしいぜ」

「もういい迷惑よ、こんな寒いのに」

「もう五月だぜ、霊夢。いい加減雪は見飽きたんだぜ。異変なのに寒いからつてじつとしているのは良くないぞ霊夢」

「だから、今こうしていここにいます。はあもうどこの誰よこんな迷惑な異変を起こして絶対に赦さないから」

霊夢はそういうと怒りをあらわに、文句をぶつぶつと口から零す。魔理沙はそれを隣で聞いて意地悪く笑う。

「あいつ、ああ言うけど涼介の事心配しているんだぜ。春告精にどうしてもつと早く来なかつたのかつて怒鳴つたらしいからな。寒くて店に行かなかつたことももしかしたら気にしているのかもな」

「勝手なことと言わないでよ。誰があんな馬鹿のことを心配するか」

「霊夢、素直じゃないのは不健康だぜ」

「こんなところにいる方が不健康よ。ああ、もう早くこたつに入りたい」

「ふ、ふふふふ、あははははははははははは」

咲夜はその二人のやりとりについて耐え切れずに吹き出してしまふ。笑われたと思つたらしい霊夢が目じりを釣り上げて睨んでくる。

「何笑っているのよ、咲夜？」

「あはは、別に馬鹿にしている訳じゃないわよ。ただ、なんというかホツとしちやつてね。ここに来るまで色々あつたのよ」

「何よその色々って」

「異変が終わつたら宴会で話してあげるわよ」

「なんで宴会することが決定事項なのよ、許可してないわよ」

「でも涼介さんはやる気満々だったわよ、禍根はお酒で流そうって」

「見つけたら文句言つてやる」

霊夢はそういうと咲夜から視線を外し前方に見える大きな扉の形をした結界を睨みつける。その先にいるとでも言いたげなその仕草が咲夜には心地よくそして心強かつた。

「大きな結界ね」

「ああ、いかにもって感じだぜ」

「上空なのにだいぶ暖かくなってきたわね」

咲夜がそういつて防寒着を青球にしまふ。それに目ざとく魔理沙が反応する。

「あ、それアリスが作ったイヤーマフラーだな」

「え？ああ、そうよ。涼介さんにもらったの」

「涼介がアリスに頼むときどんなやり取りがあつたか知っているか？」

「ううん、知らないわよ」

「そうかそうか、なら特別に教えてやろう」

「そういうことするのよくないわよ、魔理沙」

「別にいいじゃないの、咲夜？それに涼介さんには進行形で迷惑かけられているのだし話題の一つや二ついいじゃない」

「お、分かっているな霊夢。何でも、アリスへ依頼に行った時にアリスがこう言ったんだよ。貴方、女性への贈り物を友人の女性に頼む何て中々のプレイボーイねってさ。そして涼介の奴こう返したらしいぜ。確かにそれも考えて人里のお店を全部回ったけどさ、咲夜さんに似合いそうなものがなかったんだよ、それでその点を我慢して自分がそんなに似合わないと思う物を送るのは違うと思うんだ、咲夜さんは喜んでくれると思うけど防寒具ならつけている時間も長くなるだろうからね、どうせなら可愛いくて似合う物がいいじゃないかってさ」

魔理沙の話とそれを楽しげに聞く霊夢に咲夜は肩身の狭い思いがする。そして、魔理沙の話はまだ続く。

「それでさらにこう続くんだ。そう考えた時に特注が思い浮かんだんだけどさ、知り合いで一番腕がよくて信頼できるのがアリスだから頼みに来たんだ、それにアリスなら伝えたもの以上のものができそうだしね、ダメかな？だとよ。これじゃあ、咲夜用のプレゼント頼みながらアリスを口説いているようなもんじゃないか。まったく、たいしたプレイボーイっぷりだぜ。香霖にも見習ってほしいもんだ」

「咲夜、耳赤いわよ」

「うるさい、霊夢」

「まあ、アリスも春の解明が終わって涼介の所に行ったのに、家にいなかった事でかなりご立腹だな。大人しく家に帰るとか言っていたのはなんだったのかしらって文句を言っていてさ。さっきの内容天狗に言ってくるって私に異変を任せて出かけちゃったよ」

魔理沙はそういうとやれやれだぜ、といい首を振る。それに対して咲夜が、内心でやれやれはこつちよと思ふも口には出さない。どうせ、今から魔理沙に言っても記事にはなるのだろうと諦めの心境だ。止めるには今からアリスの所まで行かないといけないが、ここまで来て帰るといふ選択肢はない。自分に関することが記事になるのはいただけないが全部涼介の所に厄介ごとに行くだろうと咲夜は自分に言い聞かせ未練を断つ。

「はあ、もういいわ。好きに言っとなさい。それよりお客さんよ」

「みたいだな、こんなところにいるなんて異変の関係者しかありえないぜ」

「関係なんてどうでもいいわよ、とりあえず視界に入るならばっ飛ばす」

「どうして私こんなのを頼ろうとしていたのかしら？」

咲夜が霊夢の単純思考にため息をつきながら前方を再度確認する。楽器を周囲に浮かべる少女が三人扉の結界の前に浮かんでいた。

「貴女達が異変の解決に来た人間ね。貴女達の持つ春を置いていきなさい」

三人の少女の一人、赤いベストにキュロットを着た少女リリカが他の二人より前に出て咲夜達に告げる。

「いきなりで威勢が良いぜ」

「春を欲しがることはビンゴね」

魔理沙と霊夢がそれに応えて相手を見据える。

「春を超越しなさい!!」

リリカが急速に魔力を高め臨戦態勢を取った。

「うげ、問答無用かよ」

「リリカ、少し落ち着きなさい……貴女、冥界から戻ってから様子が、はああ……メルラ
ンお願い……」

「ちよつとちよつと、ルナサ途中で面倒くさくなつて話すのやめないでよ。でもでも

リリカちゃん本当に様子おかしいよ?どうしたの何かあったの?」

「別に……なんでも無い」

リリカが飛び出そうとする直前にリリカの連れであろう二人から制止が入る。黒いベストに黒の巻きスカートをして帽子に赤い三日月の飾りをつけたルナサという少女と、ピンクのベストとフレアスカートに青い太陽の飾りをつけたメルランという少女がリリカを止める。

「なんでも無いなら、喧嘩を売らない……つかれるだけ、はあ」

「そうだよ、そうだよ!最後の桜が花開くまで確かにここで待機は暇だけど春を集めるのは別に私たちの仕事じゃ無いし!私たちは桜が咲いたら演奏会をすることだよ!!」

「う、ううう……でも!」

「リリカ、事情を話しなさい。じゃないと助けてあげられない」

ルナサの言葉にリリカが俯向く。

「言いつらいこと?」

「……うん、私の個人的な事情だもん」

その言葉の後にさらにリリカが顔を上げてルナサとメルランに言う。

「だから、私一人でやる」

リリカは再び咲夜達を見ると臨戦態勢に戻る。

「なんだなんだ、仲間割れか？」

「さあ、もめているみたいだけどあの赤い子はやる気みたいね」

「それじゃ、誰がやるの？」

霊夢の言葉に三人が顔を見合わせる。咲夜達が誰かを選ぶ前にまだ事態は変化する。リリカの隣に他の二人が並ぶのだ。

「え、なんで？」

「別に……あと最後の桜が花開けば花見が始まる。なら、私達が春を持って行って花見を始めれば良い。良い加減そろそろ演奏会をしたいだけよ。雪だと音を吸われて満足に演奏できないし」

「なんだかんだと妹の面倒を見るのが姉というものなのですよ。だから、これはルナサちゃんのテレ隠しなのです！ふっふっふ、ツンデレさんめ」

「うるさい、メルラン。……騒ぐわよ？」

「うひゃあー、おこおこですか？静かにしてまーす!!」

リリカはそんなルナサとメルランの様子に瞳がわずかに潤む。溢れる前にその雫を拭い、咲夜達を睨みつける。そして、自らの姉二人に聞こえるように言葉を出す。

「私の友達のために春がいるの。だからお願い助けてお姉ちゃん」

「ん、良いわよ」

「やっと素直さんになりましたね。お姉さんに任せなさい。それにリリカちゃんも不安定だと、私達の躁鬱の調律も崩れっぱなしですからね。」

「ああ、もう騒がしい」

「騒霊だけに？」

メルランの軽口にルナサが鋭い視線を返す。メルランはそんな視線もどこ吹く風と楽しげにその場をクルクルと回っていたが。その様子に霊夢がため息をつく。

「どうやら結局やるみたいね」

「私たちが勝ったら春をもらおう！」

「私たちが勝ったら通してもらおう！」

「三対三か、何枚でやるんだ？」

「……はああ……十二枚」

ルナサがそう言うのと姉妹はそれぞれ四枚ずつのカードを取り出す。

「なるほど」

咲夜たちも各々四枚のカードを掲げる。

「最大被弾回数は……はあ……各々別個で管理する……ゆえに、一人スペルと同じ、四回まで……」

ルナサがそう言い変則的な弾幕ごっこが始まる。

「つまりはいつも通りってことだな!!」

魔理沙が魔力を湧き上がらせて最大速度で飛翔し、霊夢が霊力を体にみなぎらせふわりと舞い、咲夜が霊力を湧き立たせ時を止め動きやすい位置に移動する。ルナサは周囲にヴァイオリンを浮かせながらゆったりと漂い、メルランは同じようにトランペットを浮かせ自らはまわり時に浮き上がったありと不規則に飛び、キーボードを従えたりリカがカードを構え咲夜たちに突っ込んでいく。

「リリカいきなり何してるの!?!」

ルナサが驚愕に大きな声をあげる。しかし、リリカの突撃は止まらない。まっすぐ咲夜目がけて突っ込んでくる。カードが輝き弾け、リリカが光を纏う。

「鍵霊・ベーゼンドルフアー神奏!!」

弾幕がリリカを中心に生まれる。黄色の楔形弾幕がリリカを包み込み、リリカの周囲で数回丸を描いて動き周囲に拡散していく。さらにその直後赤い弾幕が同じように生まれ円を描き黄色とは違う空間を埋めながら拡散する。

「っ!どうして私に突っ込んでくるのよ!!」

「お前から一番強い春の気配がする!!」

咲夜が叫びリリカが吠える。赤の楔が拡散すると、今度はまた黄色の楔形弾幕が舞い、今度は青の楔形弾幕が生まれる。青い楔形弾幕も円を描き、咲夜の逃げる空間をつ

ぶしながら迫りくる。黄、赤、黄、青、黄、赤……それらが繰り返し発生し、逃走する咲夜を追い詰める。逃げる咲夜をリリカが追い弾幕の発生地点が移ろいゆき、空には数多の弾幕が逃げ場を狭めながら飛び交う。リリカの猛烈な勢いに押されて多数の弾幕が咲夜に掠る。

「くう、いい、加減にしなさい!!」

弾幕の一つが咲夜の頬を掠め、咲夜は舌打ちを一つし、カードを掲げ咲夜が怒鳴る。光が弾け咲夜を包む。リリカは昨夜の変化にまるで怯まず、さらに距離を詰めようとしていた。リリカの手には次のカードが握られている。

「幻符・インディスクリミネイト」

迫りくるリリカの三色の弾幕に対抗するため咲夜の周りに多量のナイフが展開される。靈力を帯び青と赤、二種類の光を纏うナイフが咲夜の全周囲を薙ぎ払い飛び出していく。

「そんなに、突っ込んでくる、ならばっ！ハリネズミになりなさい!!」

リリカがカードを掲げる。一つ目のスペルが終わると同時にカードが輝き、光が弾ける。突っ込む勢いは衰えず、多数のナイフがリリカに掠り、光を纏うまでの僅かな時間でその内の一本が右の太腿に突き刺さる。

「ぐうつうう!!」

歯を食いしばりリリカは悲鳴を耐え、光を纏うと思念を叫ぶ。

「騒符・リリカ・ソローライブウ!!」

リリカの前方、咲夜に向かって大量の楔形の弾幕が生まれ、咲夜に迫る。咲夜とリリカの一枚目は全周囲に弾幕がでるばら撒き型。そして今リリカが使ったスペルは収束型。咲夜の出すナイフではリリカの出す楔型弾幕の物量に勝てず、じりじりとその勢いに押される。さらに、咲夜のスペルを食い破り、リリカのスペルが咲夜へ迫る。

「ああ、もう！ほんとになんなのよ!!」

咲夜は踵を返し回避に回る。時折青球からナイフをだし、いくつかの弾幕を打ち落とすが数が数だけに苦戦している。めまぐるしく視界が変わる中、不意に霊夢たちが視界に入る。

「あいつらああ」

リリカと咲夜のいきなり始まった激戦に、霊夢と魔理沙、そしてルナサとメルランもこちらを見学していた。

「ちよ、なんで私だけこん、いつつう!!」

視線を霊夢たちにとられた際にできた死角からリリカの弾幕が咲夜の腹部を打ち付ける。たまらず時間を止めその場を離れる。痛む腹に霊力を送り、痛みを和らげる。そして、咲夜はリリカを見る。

「どうして泣きそうな顔をしているのよ……」

今にも泣きだしそうな悲痛な顔で咲夜のいた場所を睨んでいる。咲夜はそれに流されまいと首を振る。

「私にはやらないといけないことがある。迎えに行かないといけない人がいる。だから、貴女が何を背負っているのか知らないけれど敗けてあげられないの、ごめんね」

止まった時の中で独り、自らに再度認識させるように言葉にする。リリカの背後に移動し時を動かす。

「え……ど、どこだ、どこに消えた!!」

リリカは視線を前方側の左右にめぐらす。咲夜は自らを探すリリカに背後からナイフを投げつけた。

「悪いけど、私も敗けられないのよ」

そう声をかけたのはわずかな良心の呵責なのか、それとも清々堂々戦おうとした結果なのかは咲夜にも解らなかつた。咲夜の声に反応してリリカが振り返る。しかし、ナイフはすでに目前で咄嗟に体をひねるも右の二の腕に二本突き刺さる。

「いったああ……瞬間移動なんて汚くない?」

リリカの痛みをこらえる声が食いしばった歯の隙間から漏れでた。すぐさま距離を取り、咲夜に不平をぶつける。

「自分の能力の使用は禁止されてないわ。それでスペルを作ろうと、その場で使用しようと、ね。直接的にゲームを成り立たせなくする以外は自由なはずよ」

咲夜はすでに三回被弾させ、疲弊し、冷静さを欠くりリリカに向かつて応える。侮っている訳ではない。手負いの、そして追い詰められた獣ほど恐ろしいと咲夜は知っているのだ。

「そう、なら私も」

リリカが手を振ると、彼女の周りを浮くキーボードがひとりでに演奏を始める。音が空へと広がっていく。咲夜はそれを訝しげに見ているが不意に視界がぶれる。

「あ、れ?！」

「ふふ、視界がぶれるでしょ?」

私、これでも音を操る騷ポルターガイスト 霊なのよ」

リリカは楽しげに笑い弾幕を放つ。リリカの声は音に惑わされる咲夜にはうまく聞きとる事は出来ないが、この音が原因だと判断する。すぐさま、耳を塞ぐ。しかし、視界のブレは治らない。

「ただ塞ぐだけじゃ意味はない、よッ!!」

リリカが再び距離を詰め、楔型弾幕を放つ。視界がぶれて弾幕が定まらない咲夜では、弾幕の間隙を縫い避けることはできない。だからこそ、リリカから離れながら後方へ飛翔する。追うリリカに、逃げる咲夜。逃げきれない弾幕が咲夜の服や肌を掠める。

「ただの音じゃないなら、これでどうかしら」

咲夜は耳を塞ぐ手に靈力を込める。徐々に視界が戻ってくる。防げると、咲夜は確認するが手が塞がり反撃の手立てがない。

「ああ、気が付いたみたいね。でも、手が塞がっているわよ?」

弾幕の間を通って避け始める咲夜に、リリカは気が付くが手の塞がる咲夜を笑う。耳を塞いでいる咲夜にその声を聴くことはできないが、その表情で内容を察する。

「さっきの泣き顔の方が可愛らしかったわよ」

「な、何を!!もういい、春を残してここで堕ちろ!!」

リリカがカードを掲げる。カードが輝き、光が弾ける。光を纏うリリカはこれでとどめという様にさげぶ。

「冥鍵・ファツイオーリ冥奏」

咲夜の飛ぶ空間を埋めようとするがごとく、楔形弾幕がリリカを中心に生まれるばら撒き型の弾幕だ。それはうねりのある軌道で空を駆け抜ける。

「そうね、手が塞がるなら別のもので塞げばいいわね」

咲夜は青球からイヤーマフラーを取り出し、ナイフに流す様に靈力を通す。さらに念を押すため、音の振動が通らないようにイヤーマフラーの時を止める。咲夜の世界から音が消えた。

「これで終わりよ」

咲夜がカードを掲げた。カードが輝き、光が弾ける。咲夜はリリカの弾幕に突っ込み突撃する。それは、この戦いが始まった時のリリカの姿を彷彿とさせる。咲夜が弾幕と触れる直前に光を纏い、思念を叫んだ。

「幻符・殺人ドール」

青球から多数のナイフが吐き出され、咲夜の周りを巡って一周する。それは、咲夜がチルノとの勝負でも使った収束型のスペル。ばら撒きによって薄くなっている弾幕の層を、ナイフを纏う咲夜がぶち抜く。

「私の、勝ちだ!!」

怒鳴るような勢いの咲夜の宣言に呼応して咲夜を取り巻き、リリカの弾幕の層をぶち破ったナイフ群がリリカに殺到する。思いもよらぬ咲夜の反撃にリリカは反応するこゝとが出来ず、咲夜のスペルに吞まれていった。

「あ、ぐうう……まだ、だ、まだ、戦える……春を、春を手に入れるんだ……私が、助ける……」

ナイフが過ぎ去るとボロボロになったキーボードを盾にしたリリカが現れる。とつさにキーボードを盾にしたのだろうが、その盾さえもぶち抜いたナイフに体は切り刻まれ、さらに刺さっているナイフが増えている。直撃回数四回オーバーでルールに則れば

リリカは負けだ。だが、リリカの瞳から闘志は消えない。ぎらぎらとした熱を帯びる視線が咲夜を睨みつける。弾幕が一時止まったその場に二人以外の声が割って入る。

「リリカ、ちょっと冷静になりなさい。今の貴女本当に危ういわ、何が貴女をそこまで駆り立てるの？」

ルナサが咲夜とリリカの間に入り互いの視線を遮る。咲夜はこちらに背を向けるルナサに戦闘の意思がない事を悟り、視線を周囲に向けると霊夢と魔理沙そしてなぜか並んでいるメルランがおいでおいでと手を動かしているのを確認する。僅かに覚える頭痛に目をそむけながらイヤーマフラーを念のため青球にしまい、そちらに近づく。そして、リリカはその咲夜に気が付くことなくルナサと話し出す。

「お姉ちゃん……だって、だって私があの時演奏なんてしてなければ、あの人は襲われなかった。私が引き留めなければあの後で半人半霊なんかには襲われなかった」

ボロボロのリリカがルナサの服をつかみ縋り付きながら訴える。

「それは可能性の話。襲われなかったじゃない、襲われなかったかもしれない、よ」
「そうだとしてもそう言うことじゃないの……」

リリカは聞き分けのない子供がイヤイヤとするように頭を振りルナサの服を手放す。

「あの人は……私の友達は、あの時誰にも届かないはずの私の音を聴想いてくれた！私の音に共感して涙をながしてくれたんだ！その事がすごく嬉しかった……すごく暖か

かった、一人じゃないとそう思えたんだ！短い時間しか話さなかったけど、それでもあの人は確かに私の大事な友達なんだ！」

「だから、そんなに必死になるの？」

幼子に聞くように優しい声でリリカに問い掛け、そのボロボロになつてしまつた肩にルナサは手を置く。

「そう、そうよ！春が、春があればあの亡霊と取引できる、そう思つたんだ……あいつは、あの亡霊はこんなになるまで春を集めている、なら春があればあの人を取り返せるかもしれない」

「だから、そんなにも春が欲しかったのね」

「そう、だから私が、私が春を手に入れてあの人を取り返すんだ！だからお姉ちゃんは邪魔しないで」

リリカは肩を掴むルナサの手を、体を振つて振りほどく。ルナサはリリカのその様子に大きくため息をつく。

「事情はなんとなく解つたわ、けどもうお終いよ。私たちの貴女の敗け、春は諦めなさい」

「お姉ちゃん!?!」

ルナサのその言葉にリリカが信じられないと自らの姉を見る。

「これ以上は貴女が無理よ、聞き分けなさい。私たちはその友達よりあなたの方が大事な。いきなりの剣幕に驚いて、私たちはただ見ていただけけど、これ以上あなたが傷つくようなことには手を貸せない」

「……じゃあ、お姉ちゃん達はやめたら良い、私は勝手にやる」

リリカのその言葉にルナサは頭痛を抑えるように頭を押さえ、ためいきをひとつこぼす。

「リリカ」

「これ以上なによ、おね」

リリカの言葉はそれ以上発せられない。ルナサが自らの周りを浮くヴァイオリンを握り、リリカの顔めがけて振り切ったからだ。ヴァイオリンで頭を殴られたリリカはそれで意識がなくなつたのか体が落下を始めるが、その後ろの襟をヴァイオリンを肩に担いだルナサが掴む。

「……おい、なにが起こつてるんだ霊夢？」

「私に聞かないでよ、ねえ咲夜？」

「いや、私も知らないけど。というか随分いいご身分だったみたいね」

ルナサがリリカを止め、鬨いを中断し話し出したのを、距離をあけて見ていた三人が目を丸くする。そして咲夜が他の二人にじろりと視線を向けるも、二人に気にした様子

はまるでない。咲夜がそれにため息を吐くと、同じく三人の近くにいたメルランが陽気に言い放つ。

「あちゃー、ダメだったかあ」

「なにがダメだったのよ」

あちゃーと言いながら頭をかくメルランに霊夢が聞く。

「ほら、リリカちゃん様子がおかしかつたし無茶していたから姉さんがどうしたか聞いて止めてくるって言うからさ、任せただけだね。姉さんって物静かに見えて短気だから黙らせた、みたいなの？」

「いや、私に聞くなよ、お前の姉だろ」

「うんうん、私のお姉さんだよん。ふっふっふ、よくぞ見抜いたぞ黒白!!」

「おい、そのバイオレンスシスター、こつちも回収してくれ!」

魔理沙がメルランを指さし、ルナサに叫ぶ。それに気が付いたルナサが咲夜達をしばらくじっと見た後、ため息をつき近づいてくる。

「妹たちがご迷惑を……私たちの負けでいいのでどうぞお先に」

「それは良いけど、その子大丈夫なの?」

「大丈夫ではないです。だから、貴女達にはこの先の亡霊を退治しておいてほしいです。

そうすれば私たちも、はああ……」

「あと一息だよルナサ！ どうしてそこであきらめるの？ 大丈夫息を吸ってしつかり話そう！ 大丈夫出来る出来る自分を信じてきつとできると言い聞かせてほらほら息を吸うのだ」

メルランがハイテンションで捲し立てる。それに対してルナサの目つきに剣呑さが宿る。

「メルラン少し静かにして」

「どうしてどうして？ 今私躁入って楽しい所なんだ無理無理下げらんないだってこんなに楽しいのだものどうしてそれが下げられようか？ いや下げられないうっはー反語だねこれは」

さらにメルランが捲し立てる。それを目の前で見ている咲夜たちはすでに、ついていけないと諦め顔だ。それに対してルナサが大きく息を長く吸う。

「すうううううううう」

「あああ、やばやばですこれはごめんごめんルナサちゃん許して可愛い妹のお茶目なジョークじゃないですかお姉様落ちつ」

捲し立てながら謝るメルランに息を吸うのをやめたルナサが大声を叫ぶ時のように大きく口を開けた。直後、パンツと空気が弾ける大きな音が一つしてメルランが意識を失いリリカと同じようにルナサにつかまれる。投げ出されたヴァイオリンはルナサの

周囲でぶかぶか浮き始める。

「あ、どうぞ……先にいっていいですよ」

今気づきましたたとしても言いたげに咲夜たちを視界に入れるとルナサがそういう。

「いやいやいや。今そいつに何したのよ、アンタ？」

「大声を聞かせ、能力と合わせ意識を落しました」

「空気が爆ぜた音しかしなかつたぜ」

「超高周波でしたし、指向性もあるので貴女達には聞こえない。爆ぜた音は私が一気に空気をと言うか声を出したからその吐き出す速度が音速を超えたせいで周りの空気が爆ぜたの。あと、私は音に鬱を込められる。適度なら気分を落して落ち着けるけど、過剰なら……はああ」

「ああ、意識が落ちるのね」

咲夜が意識無くうなだれるメルランを見てそう言う。

「気持ち落ち着けるなんてお前涼介と似たようなこと出来るんだな」

「はああ……ん？その様な方が他にも？」

「ああ、いるぜ。たぶんそいつもこの先にいるんじゃないかな、たぶんだけだな」

「ああ、ふむ、そういうこともあるのか、なるほど」

「何一人で納得しているのよ」

「こちらの事情だ。さあ早く行け、もう話すのも面倒」

となりて浮くヴァイオリンがさつさと言いたげに器用に振られる。咲夜たちは釈然としない物を感じるが話しかけても返答をしなくなったルナサを置いて先に進む。結界は見た目ほど強固ではなく、霊夢が破壊した。

咲夜たちが結界を超えるとそこはかなり温かく、桜の花が至る所で咲いていた。その事実には魔理沙が、うらやましいぜと文句を着けながら一行は目の前に広がる終わりの見えない階段の上を飛んでいく。そしてしばらく飛んでいくと、昔の武家屋敷のような出で立ちの建物が飛んできた。その門の所で男が一人風で舞い落ちた桜の花びらを箒で集めている。他の人影は見当たらない。

「おい、あれ涼介じゃないか?」

魔理沙が男を指さしそう聞いてくる。霊夢も咲夜も目を凝らしてみると、その男は服装こそ和装で涼介との普段着と異なっているが、見える顔は涼介本人だ。

「確かに、涼介さんだわ。呑気なものね」

霊夢が呆れたようにつぶやく。咲夜の思考が正常に働き始める。普段と変わらず穏やかな様子で桜を吐いてこちらに気が付きもしないその間の抜けた様子に笑みさえ零

れる。だから、散々苦勞して心配させられたのだから驚かせてやろうと思い、時間を止めて涼介の前に移動して、待ちきれずすぐに時間を動かす。

「え……え、あ」

涼介がいきなり前に現れた咲夜に驚いているのか目をぱちぱちさせて、言葉に詰まる。だから、咲夜から声をかける。

「ふふ、涼介さん全く探しましたよ？春を探しに何処まで出かけているのですか？」

咲夜が堪えきれないとばかりにその顔に笑みを浮かべ笑いを漏らし涼介に語りかける。その声に涼介もやつと目の前の光景を認識したのか言葉を返してくる。

「なるほど、私をさがして冥界まで遙々来てくださったんですね。ありがとうございます」

涼介はそういうと咲夜に近づき目の前まで移動すると、咲夜の頬を撫でようと右手を挙げる。咲夜は不意に近づき手を伸ばす涼介にドキリとする。紅霧異変の廊下での出来事以降に一度も涼介から咲夜に直接触れようとしたことは無かったのだ。だから、わずかな高鳴りと同時に違和感を覚える。そして気が付く。いつもと同じ穏やかで安心する笑みを浮かべる涼介の顔が、肌が僅かに透けている。

「りよ、りよう、すけさん？ゆう、れいななの？」

信じたくないと思われ、咲夜の声が絞り出される。その声に涼介の笑顔の種類が変わる。そ

れはどこか少しだけ寂しげな、少しだけ残念そうな、そんな笑みだ。

「ごめんね、御嬢さん」

涼介がそういうと同時に唾然とし固まる咲夜の頬に涼介の手が触れる。そして、咲夜の体から力が抜けカクンと崩れ落ちそうになり、涼介が近づき肩で咲夜の体を支える。

「どう、して」

「今はお休み」

涼介のその声を聴き咲夜の意識は眠るように落ちていく。

「おい、涼介。これはどういうつもりだ！」

上空で咲夜と涼介のやり取りを見ていた魔理沙が、降りてきて涼介の前に降り立つ。魔理沙と霊夢からは二人の会話は聞こえていなかった。二人が解るのは涼介が咲夜に触れた瞬間咲夜が気絶したように倒れた事だけだ。

「どうって……こういうことだよ」

その声に応じるように、門が開き、緑色の服に刀を二本差した白髪の少女と、水色の和服に桃色の髪をした女性が現れる。

「紹介するよ、異変の解決人さん。こちら、この白玉楼の庭師兼剣術指南役の半分人間、半分幽霊の半人半霊という種族の魂魄妖夢」

涼介が白髪の少女を示すと、妖夢はお辞儀をする。

「それでこちらは、この白玉楼の主で異変を起こした張本人の亡霊、西行寺幽々子さん」
桃色の髪の女性がそれに合わせお辞儀をする。

「それで、最後に私だね。私はこの白玉楼の客人で異変の協力者」

異変の協力者と言う言葉に霊夢と魔理沙の息をのむ音が聞こえる。その反応に涼介は楽しげな笑みを浮かべ、言葉を続けた。

「亡霊、白木涼介。歓迎するよ最後の春を運びし客人方よ」

ぶつかる想いと追憶に供する二三杯目

対峙する涼介たちと霊夢たちがにらみ合う。白玉楼の門の前で両者が並び合い視線をぶつめた。魔理沙は目に見えて動揺を示しているが、霊夢には大きな変化は見られない。そんな二人を涼介は感情の薄い瞳で眺めながら肩に持たれて倒れる咲夜の頭を撫でつけている。

「亡霊って、異変の協力者ってなんなんだよ。分かる様に言えよ、涼介!!」

魔理沙が怒鳴り声をあげる。妖夢と幽々子を警戒し、近づきはしないが、もし二人がいなければ涼介の胸倉を掴みかかっていた。それぐらい、魔理沙は気炎を吐いている。しかし、涼介はその勢いを受けてもまるで気にした様子を見せない。

「分かる様になって言うけど、何が分からないんだい？異変の協力者って言うのは春を奪う側の、この二人に協力しているっていう言葉以上の意味は無いよ」

涼介はそう言って笑顔さえ浮かべ魔理沙に応える。その手ごたえのなさで逆に魔理沙の勢いがそがれた。今度は霊夢がけだるげに頭を掻きながら涼介に問う。

「亡霊って言うけど、なんとなく違う気がするんだけどどうなの涼介さん？」

「ん？君は分かるのか、すごいな。そうだね、私は確かに亡霊と名乗ったけれど本当は生

「靈なんだよ」

「生靈ならまだ生きているのね。それで体はどうしたの？」

「私も体を探しているんだよ。私も知らないけど、どうやら事情があるらしくて生前の記憶が何も無いんだ」

「だから亡霊と？」

「そうだよ。根源的には生霊らしいけど性質的には亡霊なんだよ、今の私は。だから私は君たちの事もこの子の事も何も知らないのさ」

「……お前らか？」

帽子のつばで表情を隠した魔理沙が、ひどく押し殺した声で幽々子と妖夢の二人に問い掛ける。幽々子はふふふ、と笑いを漏らし、妖夢は反応を見せない。

「お前らが涼介から体を奪って記憶を消したのか!？」

「うーん、確かに体から魂を抜いたのは私だけけど、記憶は別の人よお。体もその人が持っているのよ」

幽々子は柳に風を体現するがごとく、軽い調子で返答をした。まるで相手にされていないその態度に、涼介に削がれた魔理沙の怒りに再び拍車をかける。思わず飛び出しそうに足が出るが、霊夢の腕が制止する。

「そう、それで私たちがアンタ等をぶっ飛ばせば返ってくるのかしらっ!」

「そうねえ、異変が終われば元に戻すって私も聞いているわあ。貴女達が勝っても、敗けても元通りよ。だから安心して敗けても大丈夫よ。春も返すし、涼介さんも返すわよ？」

「うーん、別に私はこのままでもいいんだけどなあ」

幽々子の返答に涼介が不満げな声をあげる。その内容に魔理沙は首をかしげる。

「なんで、涼介が戻るのを嫌がるんだよ」

「別に今の状態に不便は感じないし、このままの方が楽そうだなあって思うのだよね」

「な、なに言ってるんだよ。店はどうすんだよ。それにフランや咲夜、慧音に霖之助、他のみんなだってお前に帰ってきてほしいと思ってるぞ」

「でも、私はその人たちの事を知らないし。ほら、死ぬのが遅いか早いかの違いじゃないかな」

「魔理沙、あの亡霊に話しても無駄よ。亡霊は生前の記憶全てを忘れてるわ。だからあれは形だけ同じ別物よ。説得に意味は無いわ」

「霊夢……」

「私たちが知っているのは、あの亡霊が捨てた物を積み重ねていた涼介さんよ。あれはただの抜け殻。体を取り戻してきつさと元に戻すわよ」

「魂をくるむ霊体の私を抜け殻というか、面白いね。普通は体の方が抜け殻になるので

はないかな？」

「黙りなさい、亡霊。涼介さんの姿でそれ以上話さないでいいわ」

「ううむ、どうも怒らせてしまったようだ。そういえばリリカと言う子も以前怒らせてしまったなあ」

涼介が頭を掻いて苦笑する。その涼介に妖夢が話しかける。

「涼介さん、そろそろ」

「そうだね、長々話していても仕方ないね。じゃあ、私は屋敷から見学しているよ。頑張ってるね、妖夢。ゆゆさんも楽しんでください」

涼介はそういうと意識のない咲夜を姫抱きする。

「ああ、そうだ。妖夢、この子も春を持つているのかな？」

「はい、スカートのポケットに入っているようです」

「ん、了解」

涼介はそういうと霊夢達に背を向け屋敷へ向かって歩き出す。反射的に魔理沙は足が出るが、すぐさま自制する。自らの目の間に立ちふさがる二人を睨む。

「さあ、さつさとやろうぜ。どこかの馬鹿の所為で予定が詰まっているんだ」

「そうなの？ 貴女達もせっかくだからお花見に参加するといいわよ。もうすぐあの桜が咲くのよ」

幽々子が堀の上から頭を出す、巨大な桜の木を示す。他の桜は全て咲いているのにその巨大な一本だけ蕾だけで花をつけていない。霊夢はその桜を見たとき寒気を感じる。咲かしてはいけないと勘が警告してくる。

「残念ね、あれは咲かないわ。私が咲かせない」

霊夢の体から霊気が立ち上る。うつつすらと白い湯気のような物が霊夢の体から出ていくのを見て取れる。魔理沙も霊夢に合わせるように魔力を練る。魔理沙の体の表面を対流する様に魔力が動く。二人の臨戦態勢を見て、幽々子と妖夢も霊力を発する。

「じゃあ妖夢はあつちの黒白をお願いね。私はこつちの巫女の相手をするわ」

「かしこまりました、幽々子様」

幽々子の命令に妖夢が頭を下げ拝命する。下げた頭をあげると、視線を魔理沙に送り顔を右に振ってついて来いと示すと、その場を離れるように飛んでいく。

「けっ、かっこつけやがって。霊夢、敗けんよ」

「誰に言っているのよ、魔理沙こそ油断して敗けるんじゃないわよ。まあ、敗けてもその後、私がぶっ飛ばすからいいけど」

「はっ、敗けた霊夢を私が慰めてやるぜ」

「勝手に言つてなさい」

「につしっし。それじゃ霊夢、あとでな」

「はいはい、またあとでね」

魔理沙が妖夢の態度に毒づいてから、霊夢に告げる。互いが互いに遠慮のない軽口をたたき合う。いつものやり取りに、魔理沙の肩から力が抜ける。いつもの快活な笑顔を浮かべると魔理沙は妖夢を追ってその場を離れる。

「優しいのね。怒りで力んでいた彼女のガス抜きをしてあげるなんて」

「勝手に抜けたのよ、私は何もしてないわ」

「ふふ、そう。そういう関係っていいわね」

「まともな感性はありそうね」

「うれしいこと言ってくれるわね。一緒にお花見させてあげるわ。私の感性が綺麗な花をつけるというっているわよ」

「それはごめんね。春と一緒にあのお馬鹿さんも返してもらおうわ」

「残念ね。それと私、結構涼介さんのこと気に入っているのよ。ここに置いてもいいと思おうくらいに」

「死後の就職先が決まって喜ぶでしょうね、涼介さん。でも、まだ就職するには早いわね」

「しつかり予約しておかないと誰かに持ってかれてしまいそうね、ふふ」

和やかな声色で二人は話を続ける。しかし、その身を纏う霊力は張りつめている。漏

れ出た二人の靈力がぶつかりバチバチと空中で弾ける。靈夢がカードを六枚取り出す。それに応えるように幽々子も構える。バチバチとなる中で一際大きな音がバチリツ！と弾け、打ち合わせでもしていたかのように二人が同時に距離を取る。

「花の下に還るがいいわ、春の亡霊！」

「花の下で眠るがいいわ、紅白の蝶！」

奪われたモノの争奪戦
弾幕(ゴッゴッ)が桜の花びら舞う冥界の空で今始まる。

「貴女が持ってきたなけなしの春があれば西行妖が満開になる最後の一押しかしらね」

腰に差す刀を抜きながら妖夢が追い付いてきた魔理沙に告げる。箒に跨る魔理沙がかっこを着けて帽子のつばを指ではじく。

「折角集めた春を渡すつもりなどあるわけも無いぜってまあ、アリスに貰ったもんだけどな」

「そうだ、貴女は何のために戦うの？」

「ん、なんだよ藪から棒に」

妖夢の唐突な質問に魔理沙は首をかしげる。

「私なりに斬れば解るといふ言葉の意味を考えているのよ」

「よくわからんが戦う理由ね。そりゃあ異変を解決するためさ」

「それなら、貴女が春をくれれば明日にも……いえ、西行妖が咲けばすぐに春を返すわよ。それなら、貴女の戦う理由はなくならないかしら」

「えつと、なんだ？お前、闘いたくないのか？」

「違うわ。涼介さんが言っていたの、相手の闘う理由を知れば相手の人となりが分かるよ、だから知りたかったのよ」

「あんな抜け殻でもない事言うんだな」

魔理沙のその言葉に妖夢が僅かに眉をひそめる。

「私の友人を抜け殻なんて言わないでください、不快です」

妖夢の言葉に魔理沙が目をぱちくりとさせ驚きを表す。

「……はは、あははははは。なんだ、記憶が無くなっておイタが過ぎると思っていたけど根っこの部分は涼介のままなんだなあ」

魔理沙は嬉しくなる。どこでも誰とでも仲良くなるうとする涼介の根っこの部分が変わっていないなかった事実に対して魔理沙は思わず笑いが洩れる。

「そうだな。私の戦う理由教えてやるよ」

「……なんですか」

「迷子になって冥界まで来て、記憶もどつかで置き忘れてきちまう馬鹿な友人を叩き起

こす為さ。私がああ、のバカを起こして、今度は私が説教してやらにやあな」

魔理沙はそういうと笑顔を浮かべ、屋敷の庭からこちらを見る涼介に視線を向ける。呑気に手を振る涼介を見て危機感のなさに記憶が無くても変わらないこともあるのだなと魔理沙は思う。

「そうですか。貴女は友の為に戦うのですね」

「ああ、そうだけ。そういうお前は何のために戦うんだ？」

「私は、幽々子様の願いの為に」

「主体性のない奴だな」

「それと、友人との約束を果たすために」

「くく、二人とも涼介が理由か。相変わらずモテるなあ」

「そうなのですか？」

「ああ、いつか刺されるって有名だけ」

魔理沙のその発言に妖夢の顔が曇る。妖夢は涼介を一度斬った時の事を思い出す。魔理沙はその顔に疑問が浮かび首をかしげる。

「まあいいさ。私たちも始めようぜ」

魔理沙がすでに遠くの空で始めている霊夢達の方に一度視線を向ける。霊夢と幽々子の霊弾が空中で激しくぶつかり合っている。妖夢がそれに応えるように抜いた刀を

構え、叫ぶ。

「妖怪が鍛えた楼観剣に斬れぬものなど、殆ど無い!!」

「辛気臭い馬鹿を返して貰うぜ、半人半霊!!」

弾幕友が為の闘いごっこが桜の花びら舞う冥界の空で今始まる。

白玉楼の縁側に咲夜を寝かせ、ポケットから春の入った瓶を涼介は取り出す。瓶のふたを開け中の春の欠片を取り出し、風に流す。春の欠片は吸い寄せられて西行妖へと飛び、幹にあたると中に溶けこみ消えてゆく。一度西行妖が脈打つが、蕾は花開かない。「うん?すぐに消化できないのかな」

咲かない桜を一瞥し、残念そうな表情をした後視線を上空の弾幕ごっこに向ける。

「まあ、それならのんびりと見学させてもらおうかな」

涼介はそういうと咲夜の眠る白玉楼の縁側までむかい腰を下ろし、空を眺める。上空で霊夢と幽々子が、魔理沙と妖夢がそれぞれ思念をぶつけ合っている。

「綺麗だな……」

そう零す、涼介の瞳から涙が一筋流れ落ちる。空を彩る数多の弾幕を見つめている

涼介は、一瞬波紋を象る様な弾幕が脳裏をよぎる。

「……………今のは？……………考えても理解できないことは気にしない……………誰の言葉だったのかな」

涼介は虚ろさの中に時折、何か意思を宿す瞳で只々空を眺める。

「もうすぐ、どんな結果にせよ結末がでる、か。長かったのか短かったのか……………」

涼介は自分にある二十日足らずの記憶を思い出す。

「うう……………はあ……………」

軽い呻き声と吐息が漏れ涼介の意識が覚醒する。

「お目覚めでしようか、白木様？」

女性の声がかかる。その声に呼ばれるように完全に目が覚める。起き上がり、涼介が周囲を見ると和室に敷かれた布団の上で自分は寝ていたようだと言ったと自覚する。そして、部屋には周囲に白玉の様な物を浮かべ、白髪の短髪で緑色の服を着た妖夢が一人であり、涼介を見ている。

「お加減はどうでしょうか、とお聞きするのもおかしいですね」

「えっと、（ハハ）は」

「それよりご自分の事で何か覚えられておりますか？」

質問されて涼介は初めて気が付く。何もわからない。どうしてここに居るのかは当たり前で自分の名前さえもわからない。

「ああ、やはり聞いていたとおり、何も覚えておられないのですね」

「それはどういふ……」

突然の出来事に動揺し涼介の言葉が続かない。

「ご説明いたします。貴方様のお名前は白木涼介様と言います。白木様は今亡霊となられており、生前……と言っているのかは迷う所ですが、そのことに関する記憶を全て失っております」

「亡霊……と言ふことはつまり私は死んだのですね。覚えていないので実感もありませんが」

涼介はそういって自身の手を持ち上げ見てみる。よく目を凝らせばわずかに透けているのが解る。体に重さを感じない、不思議な心地だと涼介は感じた。生前の記憶が無いか清々しい気持ちさえする。

「いえ、白木様の体は生きておられます。ただ……酷い怪我をしておりますその治療のために白木様の魂を亡霊と言う形で抜き出しております。ですので、実際には生霊と言ふのが正しいのですが、処置の関係で性質的には亡霊に近く亡霊と言ふのが正し

いと思いいつのように説明させていただきました。亡霊とは亡き霊、つまり生前さえ亡くしてしまつた霊のことでございます」

「はあ、何故体を治すのに魂を抜き出す必要があるのですか？」

正座をして、こちらをまっすぐ見つめる妖夢に涼介は問い掛ける。

「白木様の能力が強くて関係されているそうです。白木様の能力が傷を治すために肉体を活性化させようとしても、拒否する様に不活性化させてしまうそうで、そのままではとても治療にならないと聞いております。ゆえに、能力の根源となつている魂を抜き出し、肉体とのつながりを限りなく希薄にするために記憶を一時奪い亡霊に近い状態となつております」

「私の能力……」

涼介にはそういうわれ、自分にその能力がある事に気が付く。自然と使い方が解る。軽く手を振ると、周囲の温度が急激に低下し、脇に置かれていた桶の水が、浸けてある額に置いたためのものであつたであろう布ごと凍りつく。妖夢が息をのむ音に我に返り、能力の使用を止める。

「今のは？」

「ああ、周囲の温度を落しました。確かにこれなら肉体を不活性にして治療を邪魔しそうですね。そうすると、生前の私は傷が出来るとさぞ苦労したのでしょね」

顔がこわばる妖夢に少し申し訳ない気持ちになり苦笑いしながらそう零す。

「そのようなことは無かったようです。人間の方は肉体がある状態と魂だけの状態では能力との距離が違い行使できる力にも差があるそうです。それに加え、生前の白木様は能力を嫌い拒絶しており、無意識に抑圧していたために今よりもずっと弱い能力であったようです」

「それならなぜ、なおの事治せたのではないのでしょうか？」

「白木様がきつと死にたいもしくは死のうとされていたからだと考えられます。白木様は怪我を負われた直後に安堵されたように笑われておりました。だからこそ、そのまま生から解放されようとし能力が抑制から外れ強く働いたのだと思われます。ですが、治療者はそれでは困る様で白木様の意思を無視した形となりますがこのような状況となっております」

「そうか……この解放されたような心地はその所為なのかもしれないな。その治療者の方と会えるかな？」

「死なれるおつもりなのですか？」

「生前の自分がそう思っているのならその方がいいのではないのでしょうか」

「それは……いいえそれはできません。その方はここにはいらっしやいません。そしてどこにいるのかさえ私どもは把握しておりません」

「連絡くらいはできないかな？」

「白木様の能力が心にも影響を及ぼすことを相手の方もご存知ですので呼出には応じられないかと思えます」

「ああ、なるほど。治療する気分を落そうかと思っただけダメそうですね」

なんて事の無い様に死のうとする目の前の人物に妖夢は理解できない恐怖と気持ち悪さ、そして不思議と何故か安心感を覚える。

「困ったなあ」

「肉体の治療が終わるまで、ここ冥界にある白玉楼に滞在していただきます。ここは霊たちの住まう土地ですので、一番最適かと。それに私が原因ですので」

「原因？」

「はい。私は魂魄妖夢、ここ白玉楼で庭師兼剣術指南役として働いております。そして私が白木様に瀕死の怪我を負わせた張本人です。誠に申し訳ありません。言い訳は致しません。誠に勝手ではありますが、今はやる事がございます。ですので、それが済み次第いか様にも罰はお受けいたします」

妖夢は名乗り正座の姿勢のまま手をつき頭を下げ土下座の姿勢になる。

「やはりそうでしたか」

「つーご存知でしたか!？」

土下座から頭は上げないが、その姿勢のまま驚愕の声を上げる。

「何となく。怪我をした直後の表情を知っていましたし、どことなく貴女は私に負い目があるようでしたからね。ほら、怪我をしたという時も言いづらそうでしたからね」

「……………」

穏やかに笑顔さえ浮かべて涼介は言うが、頭を下げている妖夢にはそれを察することはない。そして妖夢からの返答はない。

「はあ…頭をあげてください。何とも思っていないから。どういう経緯があつたにせよ生前の記憶が無い私からすれば貴女に思う事は無いです。それに生前の私だって死ぬのうと思えるくらいなら貴女に恨みは無いのでしよう。だから頭をあげてくださいませんか?」

「いえ、それでは」

頭を下げたままかぶりを振る妖夢に涼介は居心地の悪さを感じる。話した事に嘘偽りはなく、年頃の少女に土下座されている今の状況の方が涼介としてはきまりが悪い。だから妖夢に近づき、その場でしゃがむ。妖夢は近づく涼介の気配に身を固くした。

「うーん……それでは、罰を言い渡します。貴女は私の友人として私がここで滞在する間、この件について引きずらない、対等に接する、仕事を与える……あとはいつと、私に色々なことを教える。以上の罰を申し付けます。だから、土下座は禁止です」

涼介はそういうと妖夢の方に手を当て固くなっていてる体を落ちつけこす。悪いと思うが妖夢が安心できるように能力を少しづつ働かせる。持ち上がる妖夢と涼介の顔が近くで見合う。妖夢の顔が近くに現れた涼介の顔に気恥ずかしさを感じているのか僅かに紅潮し瞳が大きく見開かれる。

「じゃあ、今から開始ですね。友達だから妖夢でいいかな？ 私の事は涼介で、様付けも敬語も禁止だね。私も妖夢にはなるべく使わないようにするから」

「え、その、あの、白木様？」

「妖夢ダメじゃないか様付けは。悪いと思ってるなら罰は受けないと。あ、でも引きずらないなら罪悪感を覚えて罰を受ける必要もないのか。ふふ、これは矛盾だね。まあ、そこは考えることの出来る思考があるんだ柔軟に対応しないと。ね、妖夢」

「柔、軟ですか？」

「そう柔軟にさ。だって、言葉なんて複雑で曖昧にして膨大に有る物に全て完璧に筋を通すことは出来ないさ。直喩に暗喩、たとえに嘘、そういったものまであるのだよ、言葉には。なら誰かに向ける言葉も、自分に向けられた言葉も、自分でしつかりと考えて理解しないとね。表面だけでは真意は解らないさ」

「真意、ですか……」

「そうだね、妖夢は見た感じ真面目そうだからしつかりと伝えた方がいいのかな？ たと

えば私の話だとだね、私は何も思う所は無いから妖夢は気にしなくていい。でも妖夢はそれを気にするだろうから罰と言う名目で友人と言う立場にして、謝罪やそれに類する行動をさせないようにしたんだ。でもそれだけだと気になるかなと思って、色々教えるというのを付け足したんだよ。私の役に立つという行動をすれば罪悪感も減るだろうと思ってね」

「先ほどの罰の話にそのような本音が？」

「そう。でも言わないと解らないかもしれないけど、考えれば察することは出来たかもしれない。普段のその人や、その時の雰囲気なんかも考える材料になるんじゃないかな？だから、相手を理解することは大事なのだろうね。相手を知るほど、相手の気持ちに近づける。私はそう思うよ」

「相手を理解、ですか」

「うん、そうすれば今は形からの友達だけど妖夢ともちやんとした友達になれると私は思っているしね」

涼介はそう言って笑う。妖夢は涼介の捲し立てた内容を理解しようとしているのか言われた内容を、真意……友達……などとぼつぼつと呟きながら思案顔をする。

「では、それなら、白木様は、斬れば解るといふ剣術の師匠の言葉の意味が解りますか？ただ相手を斬る、それは違うということを私は知りました。私は貴方を斬り、そして、そ

れでは間違いだと気が付きました……でも、だったら、師匠の、祖父の真意が私にはわかりません……それを最後に消えてしまった祖父の心が私には解らないんです……」

妖夢は胸に手を当て心の内を叫ぶ。妖夢にとつて大事なことをまだ知り合つていくらも経たない相手に打ち明けるとは少し、能力が強すぎたかと涼介は思うが、それは顔に出さずに妖夢に伝える。

「妖夢、様付け。あと、それは私にも解らないよ。その状況や君の祖父の人となりを知らないからね」

「そう、ですか……そうですね……」

妖夢の気落ちした声が室内に溶ける。

「でも解釈は考えられる」

「解釈ですか？」

「斬れば解る。君の祖父は剣士だったのかな？」

「は、はい。私など、まだまだ足元にも及ばないような素晴らしい剣士でした」

「そっか、良い師匠だったのだね。そうだね、なら……たとえば斬る、つまり相手と斬り合うそれを相手と闘う事と考えてみる。相手と闘う事とはつまり互いに譲れない、退けない状況だね」

涼介はそう妖夢に問いかけ、妖夢は肯定を示す様にコクリと頷く。それを確認すると

涼介は話を続ける。

「それは何かを得る為かもしれない、それは誰かを守る為かかもしれない。その理由が解れば相手の人となりを探ることが出来る。この人は名誉を欲する人。この人は弱い人を守ろうとする人。この人は他者をしたげようとする人。理由が解れば相手が解る。斬れば解る、こういう解釈は出来ないかな？」

「なるほど」

妖夢の言葉に納得の色が浮かぶ。

「もしかしたら君の祖父は斬るということが戦う事だったのかもしいね。ほら、戦国時代の武士は刀を抜くのは戦う時だからね。君の祖父は剣士、ならそういう心構えがあってもおかしくはない。まあ、全部想像だから祖父を実際に知る妖夢が色々考える方がいいと思うよ」

「……はい、すっかりと考えてみます。祖父からもらったこの言葉を」

妖夢の顔に笑顔が浮かぶ。愁いのない綺麗な笑顔が。涼介はほっとした心地で妖夢を眺めている。そこに、外から別の声が聞こえてくる。

「うふふ、仲良くなれたみたいですね」

声と共に襖があき、水色の和装の少女が現れる。生気を感じないその様子に涼介は自分と同じ幽霊だと察する。

「幽々子様、聞かれていらしたのですか?」

「そうよく、お客様の人となりは屋敷の主としてちゃんと知っておかないとね。それに妖夢の事だから罰として何でもしますって言っちゃいそうなのですよ。まあ実際に言っていたのだけれど、年頃の男性に女の子がそういうこと言っちゃだめよ」

「え、ダメなのですか?でも、それくらい的事をしましたし」

首をかしげる妖夢を見て、涼介は妖夢と幽々子の間で意思の疎通に食い違いがある事を察する。そして、幽々子が楽しげに笑っていることから、察しているのに教えないのだなとも同時に知る。

「屋敷の主と言うことは貴女が私を滞在させてくださっていたのですね。感謝申し上げます。私、ご存知かと思いますが白木涼介と言う名前だそうです」

「あら、これはご丁寧ありがとうございます。私、西行寺幽々子と申します。気軽にゆちやんって呼んでください」

「わかりました、ゆちちゃん」

「ふふふ、これは手馴れていらつしやいますね」

「いえ、まだ何の記憶も経験もないままさらな霊でございます」

「ああ、そうだったわね。それなら三つ子の魂とは亡霊になっても変わらないのですね」
「それでは全てを忘れ生まれたと申してもいい今から三年以内なら更正できそうです」

ね」

そして幽々子と涼介は笑い声をあげる。

「なるほど、それは一理あるわね。なら、三年は滞在してもらおうかしら」

「体に戻されないのならいつまでも」

「ふふふ、生前はさぞ女性をお口説きになつていそうね。妖夢に手を出すなら私に話を通してくださいね」

「幽々子様！」

妖夢が顔を赤らめ幽々子に苦言を呈する。

「その時は是非」

「白木様!!」

「妖夢、様付け」

「う、うううううう……」

幽々子と涼介の声が重なる。顔を見合わせると幽々子が笑いふりふりと手を振る。どうやら本当に話を全部聞いていたようだと言葉が察する。室内には言葉が出てこない妖夢の唸り声が響くばかりだ。

刹那的な亡霊達に供する二四杯目

その後、涼介たちは場所を居間へと移す。妖夢が幽々子に頼まれ、お茶とお茶請けの菓子を用意するために部屋を出ていく。妖夢が戻るまでの間に涼介は幽々子から様々な話を聞く。

魂を抜かれてからまだ一日しか経過していないこと。幽々子の知り合いにお願ひされしばらくの間——異変が終わるまで——涼介をここに置いておいてほしいと頼まれていること。今は春を集め、白玉楼にある西行妖という一度も咲いたことのない桜を咲かせようとしていること。最後の春を異変解決人が持つているため、異変を止めに来た解決人等に勝てば桜が咲くだろうということ。それまでは特にやる事がないこと。つまるところやる事がないので後は待つだけと言う事らしい。

「なるほど、それでは本当に後は暇つぶしなのですね、ゆゆさん」

「そうなのよお。最後の春を生前の涼介さんが持つていたらいいのだけれど、紫の所の式に回収を邪魔されちゃってね。涼介さんの事と合わせて後はお待ちくださいってお狐さんに頼まれちゃったの」

「へえ、生前の私も春を集めていたのですね」

「どちらかと言うと犯人捜しをしていて、春を返してもらおうとしていたらしいわよ」
「全然覚えがないですね。まあ、生前の事は生前に任せて今はのんびり待たせてもらいましようか」

「それがいいわね。お花見は賑やかな方がいいもの、待ちどうしいわあ」

「そうですね。……それでどうして妖夢はむくれているのだい？」

「むくれてなどおりません」

居間で机を挟み幽々子と涼介は向かい合って座っている。幽々子の隣にお茶とお菓子を用意して戻ってきた妖夢が座っていた。涼介が妖夢に話しかけるとぷいと顔をそむける。その頬が僅かに膨らんでいるように見えるのは自分の気の所為ではないと涼介は思う。そして、真面目で素直な子だなあと涼介は笑いを漏らす。

「どうして私を見て笑うのですか？」

妖夢の視線が涼介に戻り、ジトツとした目を向けられる。

「ほらほら、妖夢お餅が膨らんでいるわよ」

幽々子が妖夢の頬袋を指で、えいっとつく。ぷすつと音がして空気が抜けた。涼介がまた笑いを漏らし、妖夢の目つきがますます厳しくなる。

「ごめんごめんそう睨まないでくれよ。私が悪かった」

涼介が降参と言うように手をあげると妖夢の視線が少しだけ和らぐ。

「ふふ、ごめんなさいね、妖夢。貴女に説明をお願いしていたのに私がしちゃって。でも、涼介さんお話が進むのですもの」

「べ、別にそういうことでは……ただ、涼介さんには色々知らないことを教えてほしいと頼まれていましたので私が説明したかったなと少し思ってしまっただけです」

幽々子に謝られて、意地を張る事をやめたのか妖夢が小さな声でそう白状する。

「ああ、そうだったわねえ。そうねえ……ならこうしましょう」

幽々子がいい事でも思いついたとでもいうように両手を打ち合わせる。

「妖夢。貴女、涼介さんに指導しなさいな」

「指導ですか？」

「剣術や簡単な護身術に能力を使った戦闘方法。つまるところ自衛手段ね。お狐さんも言っていたわ、涼介さんは自衛の手段に乏しいと」

「ですが、元に戻られるのでしたらあまり意味は……」

「本当の亡霊ではなく根本はあくまで生霊よ。ここで覚えた事は元に戻っても忘れないと思うわよ。それに能力も今は強い状態でしょ？その状態で訓練すれば生身に戻った時にも多かれ少なかれプラスになると思うの。貴女も色々教えられて、彼も学べてとつてもいい事だと思わない？」

「なるほど、それは確かにいい考えだと思いますが」

妖夢はそう零すと涼介をうかがい見る。それに對し、涼介は一つ頷くと応える。

「私からもお願いしようかな、妖夢。私を鍛えてくれないか？」

「はい！この魂魄妖夢にお任せください、白木様！！」

「涼介」

「え？」

「涼介」

「あの……白木様？」

「友達でしょ、妖夢。だから涼介」

「いえ、ですが、あの」

「教えを受ける側なのに様付けされるのはこそばゆいよ。それとも妖夢は私と友達になるのは嫌かい？」

「え、そ、そそんなことは」

「すみません!!お聞きしたいことがあります!!」

妖夢の言葉が最後まで紡がれることなく外から声が響く。少女の声で、どこか焦りの宿る声だ。

「この声は……たしか」

妖夢が立ち上がり障子をあけて庭が見えるようになる。そこには赤い服に同じ色の

キユロツトを着ているリリカがいる。障子が開き、居間が見えるようになりリリカの視線が座った姿勢から振り返り顔を見せる涼介を見つけると驚きを示した直後安堵に代わる。

「貴女は確か、演奏家さんだったわね」

幽々子がリリカを見とめるとそう呟く。桜が満開になった時の演奏をお願いしたのは幽々子本人なのだから知っているのは当然と言えるのだろう。

「確か、リリカさんでしたか？ 昨日お姉さんたちと打ち合わせをしたと思いますがどうされましたか？」

「あ、その、昨日姉さんたちが打ち合わせの後、妖夢さんに送られて帰る途中に、妖夢さんが急に飛び出していかれてそこで一悶着があったと聞きました。その妖夢さんの相手の方の背格好が私のお友達に似ていたそうで。それで心配になってお話を聞こうかと思ひまして来たのですが、涼介さんの元氣そうな姿を見ることが出来て勘違いだと思ひました」

リリカはそういうと居間に近づいてくる。

「確かに、昨日はルナサさん達を送っている途中で春の気配を感じて飛び出しましたが……まさか知り合いだったとは」

リリカの話に妖夢が小さな声でつぶやく。居間の下座である庭側の席に座っていた

涼介にはその小さなつぶやきが聞こえた。涼介は目の前の赤い服をきたリリカと言う少女が生前の自分の友人のだと認識する。

「斬られていたと聞いたけど、どこにもそんな跡が無いみたいで安心したよ。顔色も良いみ……うそ」

縁側までたどり着いたりリカの顔が蒼白となる。リリカは気が付く、涼介が霊であること。

「え、死んじやったの？」

「厳密には違うのですが、亡霊に近いそうです。今の私は」

涼介のその返答にリリカが啞然とした表情を作る。

「ぼうれい？……亡霊って何も覚えてないの？」

「はい、生きていた時の事は何も」

涼介はそのことを何でもないようにいい首をわずかに横に振る。

「本当に？」

僅かに震える声でリリカは問い掛ける。

「はい、そんなに不便も感じてないですしお気になさらないでください。それに、どちらかと言えば解放感を感じるくらいです」

リリカの顔が俯き表情が見えなくなる。

「思い出したいと思わないの?」

「思い出したいという強い感情は無いですね、多少気になるから知識として知りたい程度でしょうか?」

「どうして……そんな事言うのよ……」

「何故かと言われるとそうですね……特にないですね。ただそう思わないそれだけです」

「貴方は……貴方は!」

リリカが顔を持ち上げる。その表情には怒りがありありと浮かんでいた。

「捨てるって言うの!?生きていた時の繋がりを!!貴方が抱いていた沢山の想いを!!全部、全部捨てるの!?涙するほど大切な人がいたんでしょ!?!どうしてそんな風に捨てられるのよ!!!」

リリカの言葉に涼介は目を見開く。そして、なるほどと納得する。自分はこのうとうとすべて忘れてきているけど、残された者もいるということ。繋がりがあつたということ。しかし、今の涼介は正しくそれを認識していなかった。

「そうだね、拾うことが出来るのに捨てるのは良くない」

その言葉にリリカの表情が晴れる。分かってくれたと喜びが浮かぶ。しかし、その感情は次の言葉で裏切られる。

「えっと、リリカさん。私と貴女は以前友達だったというのは分かります。だから、もう一度友達になってくれませんか？」

リリカの頭に違う、そうじゃない、そんな答えが欲しいんじゃない、と様々な否定の言葉が生まれる。

「また、(´▽｀)から新しく始めませんか？」

その言葉で、頭の中が沸騰する感覚がする。しかし、その熱が急速に冷めていく。リリカは混乱する。誰かに、自分の感情をいじられていると感ずる。それはまるでルナサの音を聞かされた時の様だ。そして、リリカは目の前の涼介（七瀬）に安心感を覚えていることに気が付く。絆されそうになる感情に引きずられ、出そうになる言葉を咄嗟に飲み込む。だから、リリカは自分の理性に従う。

「……ならない……貴方とは友達にはならない!!私の友達は貴方じゃない!!」

「リリカさん？」

「返せ、涼介を!!私の音を（想い）聞くことが出来た涼介を!!私と同じ痛みを知り、あの時涙した涼介を返せ!!お前なんて私の友達じゃない!!」

理性に伴わない感情に負けない様に大声を上げる。しかし、周りが見るリリカの姿はひどく不自然だ。感情的に叫ぼうとしているのに、それに感情が載っていない。湧き出る怒りがすぐさま落ち着いていくのが解る。結果、ただ大声をあげて叫んでいるだけ

だ。その様は叫んでいる内容を加味しなければ発声練習のようでもある。だからこそ、周囲の反応は鈍い。奇妙な物を見るような目にリリカはひどい疎外感を覚える。これでは届かないとリリカは察する。

「もういい、私がどうにかする」

このままではだめだと判断したりリカは涼介の霊体を連れて行こうとする。当てがあるわけではない。けれど、自分で涼介の記憶を取り戻すのだという思考が働き涼介に近づき連れて行こうと動く。しかし、リリカの手は涼介には届かない。

「リリカさん、それは困ります。涼介さんは白玉楼のお客人で、私の友達です。無理に連れ出すような行為は看過できません」

妖夢が二人を遮る様に立ちはだかる。リリカが妖夢の姿に怯む。涼介さんと呼称する妖夢の様子に涼介は妖夢の背で隠された表情に笑みを浮かべる。

「退いてよ」

「退けません」

「退いて!!」

妖夢とリリカ、二人が霊気と魔力を高め始める。そして水を差す様にパンパンと手を鳴らす音が響く。全員の視線が幽々子に集まる。

「はいはい、ちよつと落ち着きなさい」

幽々子の言葉に妖夢が靈氣を取める。しかし、リリカは止まらない。だから、幽々子は言葉が続ける。

「今は事情があつてまだ貴女のお友達は返せないのよ。でも異変が終わる頃には生き返つた元の状態で返せるわ。だから落ち着きなさい」

「異変はいつ終わるの？」

「異変を解決に来る子たちが最後の春を持ってくるそうよ。それがあればあの桜は咲き、花見をして異変は終わりよ」

その言葉にリリカが魔力を高めるのをいったんとめる。高めた魔力はそのままではあるが、話は聞く様子を見せる。

「どうして、今ではだめなの？」

「それは部外者の貴女には話せません。だから、異変が終われば戻ってくる。それだけで我慢なさい」

「それが真実だという証拠は？」

「ないわ」

「それじゃあ信じられない。貴女達が、その半靈が涼介を亡霊にしたのにどうしてその言葉を信じられるというのよ？」

「それで聞き分けなさい。それに貴女ではどうしようもないわよ」

なおも言い募ろうとするリリカの言葉を遮り幽々子が言葉を挟む。そして、幽々子から圧倒的な量の霊気が漏れる。リリカはそれにひるむ様に後退する。そのリリカの様に涼介が口を出す。

「どうやら怒らせてしまったみたいだね。大丈夫、彼女の言っていることはきつと本当だよ。だから、異変が終わるころにはきつと生き返っているさ」

リリカの魔力の高まりが収まる。しかし、涼介の言葉を信じたからではない。涼介はあの時自殺はしないと行っていたがそれは約束だからと言っていた。であるならばもとと死に惹かれてはいたのだ。だからこそ信じきれない。しかし、自分ではどうにもできないのも確かだとリリカは判断できてしまう。だから、リリカは一度引くことを決意する。

「わかった。今は帰る………私、涼介のお店で演奏するのを楽しみにしてるから」

リリカは最後に、彼の心に届いてほしいとその言葉に、音に想いを、気持ちを込める。昨日の夜の演奏の様に。けれど、涼介は首をかしげるだけで要領を得ない反応だ。それを見てリリカは本当に目の前にいるのが涼介の抜け殻だと解らされてしまい悔しさがこみ上げてくる。力のない自分に情けなさを感じながら、リリカは逃げるように帰っていく。自分が春を手に入れて、この亡霊と交渉し、涼介を助けるのだと決意して。寂しげに去っていくリリカの後ろ姿を眺める涼介の視線に何かの感情が浮かぶことは無い。

その視線は只々虚ろに揺れるばかりだ。

その後、屋敷の間取りや部屋についての説明を聞き夕飯を食べ、自分の部屋としてあてがわれた部屋で涼介はぼーっとし、何をするでなく座っている。

「何故、あの娘はあんなにも激していたのだろうか」

こぼれ出る言葉は、日中言葉を交わした赤い服の少女の事だ。僅か、半日に足りない記憶の中でその出来事は印象に強く残った。独りになりやる事もないため暇に飽かせて考えているが答えは出ない。

「……考えても理解できないことは気にしない……」

分らないと頭をひねっている涼介の口から自然と言葉が出る。涼介の脳裏に一瞬白髪でメガネをかけた男性の姿が浮かぶもすぐに消える。

「……残滓でも残っているのだろうか？中途半端な消し方だ」

出るのは記憶を亡くした者への愚痴だ。どうせ消すなら綺麗に消してくれればいいのにと不満が浮かぶ。

「亡霊は眠るのも娯楽か……眠る気分じゃないな」

涼介は立ち上がり庭へと出る。縁側に置かれた草履をはき庭の桜を眺める。その内

の一本、西行妖と呼ばれていた桜に目が留まる。

「他の桜がこれだけ綺麗に咲いているのにあれだけ蕾のままなのだな」

眩きが洩れる。玉砂利の庭をじやりじやりと音を立てながら近づいていく。

「あら、涼介さんも夜桜を見に来たのかしら？」

大きな妖怪桜を見上げながら歩いていく涼介に桜の根元から声がかかる。視線を下げるとその巨木の足元に幽々子がいて、手を振っている。

「そうだね……眠れないし、部屋にいと悶々としてしまうからね」

「ふふふ、何を悩んでいるのかしら？」

「その笑い方どうせ察しているんですよ、ゆゆさん」

「あら、そんなことないわよ？」

「……そうですか」

服の裾で幽々子は口元を隠し笑う。涼介は幽々子の振る舞いにため息をつく。幽々子の隣に並び立ち桜を見上げる。

「私の記憶はどうやって忘却させられているのでしょうか？」

悶々と抱えていた物が涼介の口から漏れ出る。

「やっぱり気になるの？」

「どうなのでしょうか……ただ、お昼の紅い服の子の事が思い出されてね」

「知ってどうするのかしら？」

「……きつとどうも思いません。思い出すということは何かを背負う事だから」
「背負うのは嫌なの？」

「目覚めてから妙にすつきりした心地がするのです。そして同時に大きな喪失感も感じています。きつと、この喪失感は自分にとつて大事な物であり重荷であつたのだと思います」

「だから、思い出してまた背負うのが怖いのかしら？」

「はは、そうですね。怖いのだと思います。忘れていた課題を思い出すことで焦燥感に駆られるみたいなのかな？きつと、思い出してつらい思いをするのが嫌で逃げているのだと思います……弱いなあ」

涼介から自重する様な笑いが思わず漏れ出る。リリカに対する申し訳なさと、彼女の想いから逃げだした後ろめたさが自身を責めているようだと感じる。幽々子が涼介の様子に笑みを深め、ぼつりと不意を衝くように言葉をかける。

「お狐さんが貴方に式を憑けて記憶が思い出せない様になっているのよ」

「……私に教えてよかつたのですか？」

幽々子が唐突に答えを示したことで、涼介の中に戸惑いが生まれる。

「だって、知ってもどうにもしないのでしょ？なら、教えるくらい問題ないでしょ」

「靈力のない私ではどうにもできない、の間違いかもしれませんね」

幽々子の声、態度、表情から真意をくみ取ることが出来ない。幽々子は涼介のその様子を只々楽しげに笑っている。涼介は真意を読むことをあきらめ冗談めかして肩を竦める。

「ふふふ」

涼介のその返しに今度こそ幽々子は本当に愉快だと笑い声を漏らす。腕で口元を隠し、クスクスと笑う。彼女の笑い声に連動して肩が揺れ、ゆったりとした服の裾もふりふりと振れる。涼介は敵わないなあ、と内心でこぼすと視線を幽々子から西行妖に視線を変える。

「どうしてこの桜を咲かせようとしているのですか？」

「そうねえ……この桜は私が亡霊として在りはじめた頃からずっとこの庭にあるの。でも、何年いや、八百年近く葉さえつかなかったの。でも、二百年前くらいかしら、春に葉が一枚ついたの。それから何年も何年も時間が経って春になるたび茂る葉が増えていつてつい何年前に蕾が一つ膨らんだの」

「気の長い話ですね」

「ふふ、私もそう思うわ。それでね、その蕾を見たときに思ったのよ。咲いているところが見てみたいなってね。でも、結局咲くことはなかったの。春が終われば蕾のまま他の

葉と散ってしまうの。また春が来て蕾を一つとたくさんの葉をつけ春が終われば散ってしまう。きつと春が足りないのよ」

「だから春を集めたんですね」

「そう、今では蕾もこんなにたくさんついて後少しで花開きそう」

「お花見まで後少しですね」

「楽しみね〜」

「でも、三人だけで見るにはもったいないですね」

「あら、他にもいるわよ。演奏家さんはちよつと分からないけど異変の解決に来る子がいるわよ」

「それを入れて四人ですね」

「解決にくる子が一人とは決まってないわよ。それにまだ他にあてはあるの」

「それは？」

「桜の下に眠る人」

幽々子の視線が西行妖の蕾からその根元へと移る。

「死体つてことですか？」

桜の下には死体がある。そんな怪談話じみた言葉が涼介の知識の中から思い浮かべられる。

「富士見の娘、西行妖満開の時、幽明境を分かち、その魂、白玉楼中で安らむ様、西行妖の花を封印しこれを持って結界とする。願うなら、二度と苦しみを味わうことの無い様、永久に転生することを忘れ」

それに対し幽々子は何かの文章を読み上げるように言葉を紡ぐ。

「それは？」

「何年か前に見つけたのよ、書架から古い記述をね。西行妖の下には誰かが眠って封印をしているの。だから桜が咲けばその誰かが目覚めるのよ」

「へえ、そんな人が」

涼介は感心した風な声をだし西行妖の根元を見る。

「ふふふ、だからその人も加えてお花見としゃれ込みたいわね。……何を話そうかしら？」

何を話そうかとおぼす幽々子の声がひどく寂しげに聞こえ涼介は思わず根元から視線を隣の幽々子へと向ける。幽々子の視線は西行妖の根元へと向けられているが、その視線はどこか違う場所でも見ているかのように虚ろだ。涼介は幽々子のその様子に繊細なガラス細工の様なイメージを抱く。触れてしまえばその途端脆く壊れてしまうそんな想像が頭をよぎる。

「それは……」

咄嗟に出そうになった言葉を涼介は呑み込む。幽々子は涼介に声をかけられ視線を涼介に向ける。しかし、言葉がつかない涼介の様子に首をかしげる。幽々子の仕草に先ほどまでの儂さは感じられない。涼介はそのことに安堵する。

「もしかしたらゆゆさんが亡霊になる前に眠っていたから生前の話が聞けるかもしれないですね」
「きつと、ずっと寝ていたのでしょうからお腹を空かせているかもしれませんね」

呑み込んだ言葉とは別の言葉が涼介の口から紡がれる。何故それを呑み込んだのかは涼介にも分からない。千年もの間在りつづけた幽々子に覚えていない生前などもう関係ない、涼介は分からない感情にそう理由づけをし納得させる。

「それなら妖夢にはたくさん料理を作って貰わなくちゃね」

「妖夢の料理はおいしいですからね」

二人で並んで言葉無く蕾の夜桜を眺める。妖夢が早朝に起きだし、二人を見つけるまで涼介と幽々子はずっと二人で並んで桜を眺めていた。

リリカの訪問から幾日も過ぎた。その間、他に誰かが尋ねてくることは無く三人はのんびりと過ごしていた。涼介も最初はわからないことや困ることも多々あったが妖夢

がそれを甲斐甲斐しく世話し、今では自分の住み慣れた家かと思うほどに、この屋敷での生活に慣れたと言える。その日の朝も客間で起きると自ら布団を干し始める。

「ああ、もう涼介さんまた勝手に布団を干して……いつも、言っているじゃないですか。部屋に畳んで置いておいてくださいって」

布団を干している涼介に向かって、縁側に立ちエプロンをかけた服装の妖夢が文句をいう。

「どうせ後で干すのだから良いじゃないか、誰が干したって。それに妖夢は朝食の準備をしているのだから遠慮はいらないよ」

「そう言うことではなくてですね、涼介さんはお客さんなのですからそういったことは私がやりませんと言っているのです」

「ほら、あれだよ。罰の中で仕事を与えると言っただろう？これはそれだよ」

「そのことは引きずらないので無効になりました」

「むむ、随分と柔軟になったではないか」

「毎回毎回涼介さんの屁理屈に付き合っていれば誰でも柔軟になりますよ」

「やわらか妖夢」

「なんですかそれ？やめてください人を変な生き物にするの」

「ほら、その半霊とかマシユマ口みたいにやわらかそうじゃないか。それをやわらか妖

夢と名付けよう」

「ヤですよ。半霊も私なのですからこれも魂魄妖夢です」

「あだ名だよ、あだ名」

「ダメです、ダメダメ。許可しません」

「ええええ……」

「ほらご飯できましたから駄々こねてないで居間に来てくださいよ」

「ん、それは早く行かないとね。ゆゆさんに怒られてしまう」

妖夢の催促を聞くと涼介は干した布団を一度伸ばして引つ張るとそそくさと妖夢に近づき、草履を脱いで縁側に上がる。その涼介の態度に妖夢が疲れた表情をする。

「なんで幽々子様に関することは素直に聞くのに私の注意は聞いてくれないんですか、まったくもう」

「貫禄の違いかな？」

「どうせ私はお子様ですよー」

「メンタルやわらか妖夢」

「増やさないでください!!」

明け透けのないやり取りをしながら二人は今に向かう。すでに手馴れている会話。最初のころは涼介の冗談を妖夢が流せず、あわあわすることもあつたが今ではサラッと

受け流すこともできている。

「あらあら、今日も仲良しね、妬けちやうわ」

居間に入った瞬間、幽々子がコロコロと笑いながら感想を漏らす。妖夢がそれに大きなため息を漏らす。

「もう、幽々子様が二人に増えたみたいですよ」

「ふふふ、でもある意味では的を射ているのかしらね」

「ん？それはどういう意味だい、ゆゆさん」

「亡霊って何もかも忘れていいるからこそ種族的に刹那的と言うか悪ふざけが好きなのよ」

「ユユコサマノジヨウダンニソクシンジツツガカクサレテイタンデスネー」

幽々子の言い分に妖夢が棒読みで返事をする。まともに信じている様子が微塵もない。それほど過去にからかわれていたのだろうと涼介は二人の関係を察する。

「これは本当の話よ。亡霊は死んでいるから食事は娯楽だし、仕事もないし、記憶もないから何かしらがらみがあるわけでもなし。それに亡霊になるには、何か手を加える以外は忘れたいことが有る霊が忘れようとした結果全てを忘れてしまうの。だから基本的に生前の記憶に興味もないの。だから、何もないからこそ目先の楽しみを求めてしまいがちなのよ」

「ああ、心当たりあるなあ。とりあえず今が楽しければそれで良いかなとは普通に思うね」

「へえ、だから幽々子様も涼介さんも悪ふざけが好きなのですね……ん？それって……私が被害受けるだけじゃないですか!!」

妖夢が驚愕に叫ぶ。

「それは違うよ、妖夢」

「そうよ、妖夢」

「妖夢の反応が面白いからよ（だ）」

「うわああ!!なんでそこにかぶるんですか!？」

「ゆゆさんならこう言うかなって」「涼介さんならこう言いそうかなって」

「もういいです……—私、ご飯とってきます」

妖夢が肩を落として台所へ向かってとぼとぼ歩いていく。何となく隣を浮いている半霊も元氣なく見えるのは涼介達の気の所為ではないだろう。

「からかいすぎましたかね」

「どうかしらね。貴方が来る前の妖夢なら真に受けすぎてダメだったかもしれないけど、貴方とのやり取りをしているうちに色々と学んだみたいだから大丈夫じゃないかしら」

「ゆゆさんと二人だけの時はダメだったのですね」

「ほら、あの子は根が真面目だから、主人の私が言うことを流すって言う発想自体が生まれなかったからね。その点貴方だと対等なお友達だから色々違うのではないかしら。短い間で見違えるくらい妖夢は変わったわ」

幽々子は妖夢が消えた襖を見て嬉しそうに笑う。

「ゆゆさんはなんとというか、盆栽を育てているみたいだよなあ」

「盆栽？」

「そう、盆栽。のんびりと時間をかけて成長を見守る。基本的に手を出さない。たぶん致命的なこと以外は正さないのじゃないのかな、ゆゆさんは？」

幽々子は涼介の問いかけに応えずににこにここと笑っているだけだ。

「妖夢の成長をただ見ている。妖夢が勘違いや悩んでいても冗談めかしてガス抜きをするだけで、手助けはしない。ゆゆさんはさつき亡霊は刹那的と言ったけど、貴女は冗長的に感じるな」

「ふふ、そうね。私は亡霊だけど長く在り過ぎるからそういう楽しみ方も良い物と知っているのよ」

「なるほど、納得だね」

「納得はできても理解は貴方には無理ね」

「そうだね、私にはそれをするだけの積み重ねた物が無いね。ジャンナーの法則と言うやつかな。きつと君にとつては妖夢が頑張る数年も私の数日と体感時間が変わらないのだろうね」

「ああ、そう考えるとそうなるわね。なら私も刹那的な亡霊ね」

「どこまでいっても亡霊は刹那的と言うわけだね。それでは亡霊らしく今は目先の食事を楽しみますが、ゆゆさんや」

「そうね、涼介さん」

二人が机を挟み笑いあう。妖夢が少しして半霊を人型に変え、二人分になって料理を運んでくる。

「また、二人でクスクスしてどんな悪戯を考えていたんですか?」

妖夢が料理を並べながら苦笑いをして二人に聞く。その様子は、しょうがないなあとも言いたげだ。それに対して涼介が含み笑いをしながら応じる。

「なに、盆栽の話をしていただけさ」

「盆栽ですか? 育てられるのですしたら、お庭に飾る場所を作りましょうか、幽々子様?」

涼介の答えに妖夢が幽々子に庭の配置換えの是非を問う。幽々子は苦笑いすると答えを返す。

「いいのよ、作らなくて。まだまだ柔軟さが足りないわね、妖夢」

「はあ？」

幽々子の答えに妖夢が首を傾げ気の抜けた声を出す。

「やわらか妖夢」

「あ、また言いましたね。今日のお稽古は厳しくしますからね」

頬を今にも膨らませそうな妖夢が涼介に宣言する。それに対し涼介は盛大に顔をしかめる。そんな二人に幽々子が楽しげな笑いを零す。ここ最近ですっかり定着したいつもの光景だ。

「ちよつちよつちよ！よう、むさん！！」

「無駄口を開かないでしっかり防ぐ!!!」

庭で涼介と妖夢が木刀を互いに持つて試合をしている。と言っても妖夢の攻撃を涼介がひたすら凌いでいるだけなのだ。涼介はすでに一杯一杯なのか悲鳴を上げる。

「あ、今掠った！ちよつちよ、ちよつちよ！！」

「防ぐだけなんですから頑張ってくださいよ、もう」

そう言つて妖夢が木刀をふるう手を止め文句を漏らす。涼介はそれに対し掻いてもいない汗をぬぐう仕草をしてやれやれと首を振る。

「能力なしで何て妖夢が言うからだよ。無理無理、能力を使わなかったら私なんて雑魚中の雑魚さ」

胸を張る様に言い切る涼介に妖夢はため息を漏らす。

「もう、体を鍛えるのもって……涼介さん亡霊でしたね」

「それは生き返った後にするよ。さて、朝のペナルティはこの辺りで、そろそろちゃんと稽古をしようか」

「なんで、怒られた側が罰を終わらせるのですか……はあ、もういいですよ。それじゃあ行きますよ」

二人が木刀を構え距離をあける。それを縁側にお茶とお菓子を脇に置いて観戦している幽々子が合図をする。ぱんつと手を叩く音がして、二人が互いに向かい動き出す。妖夢の動きは先ほどと比べ明らかに遅い。

「相変わらず、嫌な能力ですね」

「まあ、自分でも陰険だと思っただけだね」

妖夢は両手で木刀を握り、涼介に向かって振る。涼介はそれに対し片手で受けるが、妖夢の木刀に押され涼介の木刀の峰が体にぶつかる。しかし、涼介はされるがままで、空いた片手を妖夢の頭部に向かって伸ばす。妖夢は近づくと手を嫌がり距離を取る。

「ふっ！」

涼介が短く息を吐き、妖夢を逃がすまいと後を追う。妖夢はそれを嫌がり木刀を振るうが、涼介は妖夢の肩の動きを見て大体の軌道の所に木刀を置き体に直接当たらない様にする。そのどれもが、涼介の木刀を押し込み涼介の体に涼介の木刀の峰が何度もぶつかる。妖夢の剣劇を自分の木刀で一度防いでいるが、それだつてたかが知れた程度でしか威力を軽減していない。それでも涼介が一度も痛み顔に顔をしかめることは無い。カン、カン、と木刀同士がぶつかる乾いた音が石庭に何度も木霊する。

「ほい」

涼介が妖夢の木刀を引く動作に合わせ、自身のもつ木刀を妖夢の顔目にかけて放り投げる。妖夢はその予想外の行動に対して反射的に投げられた木刀を打ち払う。涼介はその動作の間に妖夢との距離を詰め、両手を妖夢の頭部に目かけて突き出す。

「くっー」

妖夢が木刀を振るい両手のうち右手を打ち払うも、左手が妖夢の頬に触れる。そこで両者の動きが止まる。

「はーい、涼介さんの勝ちね」

「はあ、私の負けですね」

幽々子の声が響く。妖夢が構えを解くが涼介は妖夢の頬に触れたままの手をプニプニと動かし妖夢の頬をもてあそぶ。

「やわらかみ、よん!!」

妖夢の頬をいじりながらあだ名を言おうとする涼介のみぞおちに妖夢の木刀が刺さり、涼介の口から変わった悲鳴が洩れる。そして、そのまま後ろに倒れ込み地面に寝転がる。

「ああ、やつと勝てた……はああ、しんど」

涼介が大の字になる様に庭に倒れこむ。

「もう、服が汚れちゃいますよ。それと刀は剣士の命です」

「妖夢、私は剣士じゃないよ」

「それは……そうですけど、ほいほい投げないでくださいよ」

「ほいほい投げてないさ。熟考の末だよ、妖夢。それにほら初めて勝ったじゃないか」

「む、そういわれるとそうですけど……うん、そうですね、おめでとうございませう。後は私も能力を使うのでそれに対応して精度をあげていくだけです」

「ああ、相手の力を落せるなら、相手の能力も使えなく出来たらよかつたのになあ」

「相手の能力の内容によりますもんね」

「そうだね。技能系や身体向上系とは相性最悪だからなあ」

「でも、飛べない涼介さんからすればこれしか戦う方法無いですからね」

「自分を強化して強くなるんじゃないかと、相手を自分と戦える土俵まで落とすとか陰険

の極みだよなあ」

倒れたまま冥界の空を眺める涼介がため息をつく。能力を使った戦闘の訓練。使用方法は相手の霊力、魔力、妖力、筋力、速力など相手の力を落して殴り合う。泥臭く、そして相手の積み上げてきた物に泥を塗る唾棄されるべき戦い方だろう。それでさえ相手を自分より弱くは出来ない。力を落すのであって零にするわけではないのだ。しかし、飛べない様に地面へ落とし、地に足をつけて戦う。それだけで涼介にとっては大きい。闘いまで持ち込めるのだから。涼介が白玉楼で身に着けた自衛手段だ。

「でも、相手の能力に能力での干渉は不明瞭な所があるからなあ」

「そうですね。私だと剣術を扱う程度の能力があるので落された上でも、斬撃を飛ばしたりと普通に技量で押し切れちゃいますしね」

「そこなんだよなあ。一応相手に触れられれば意識を落せるからこっちは一度相手に触れれば勝ちなんだけど、そこまで持っていくのがまさに死にも狂いなんだよなあ」

「一回でも直接触れられたら敗けっつてかなり理不尽ですよ。それに涼介さん、痛みを感じる感覚を落すからこちらの攻撃で怯まないじゃないですか。相手をしているこちらとしてはやりにくいですよ」

「はっはー、やりにくいっつて時点でやりにくいだけで脅威ではないんだよなあ……強くなるっつて大変だよなあ」

「はいはい、それでは今日は初めての勝利にご褒美としてここまでにしてあげますから起きてください」

「はい、師匠」

その言葉に涼介はキビキビと起き上がり服を払う。分かりやすい涼介の行動に妖夢は苦笑する。

「明日から厳しくなりますからね」

妖夢はそういうと木刀を一度振り、斬撃を飛ばしてみせる。涼介はそれを見ると大きく肩を落とす。

「はい……師匠」

妖夢は涼介の様子にクスクスと笑いを漏らす。

「でも、よく思いつきましたね」

「何のこと？」

「相手の力を落す事ですよ」

「ああ、それね。ゆゆさんが物の勢いを殺して見せてくれたことが有ってね、それで思いついたんだよ」

「幽々子様がですか？」

「うん、そうだよ。普段の生活の中で何気なく使っているところを見てね。でも今思う

とあれは見せてくれたのかもしれないと感じるなあ……」

顔を動かし、涼介は幽々子を見るも聞こえていない為か嬉しそうに大福を食べている幽々子が視界に入るだけだ。妖夢も同様に幽々子を見るが苦笑いを浮かべる。

「たまたまかもしれませんね」

「そうかなあ？ま、それでヒントを得たことは確かなのだから桜を咲かす手伝いでもして恩返しをしないとね」

「前も言っていました、弾幕ごっこもできないのにどうするおつもりなのですか？」

「人数が多いなら不意を衝いて一人くらい眠りに落せたらなあよね」

「無理はなさらないでくださいね。怪我などされるのは嫌ですから」

「おや、心配してくれるのかい妖夢？」

「当り前ですよ、お友達なのですから」

妖夢は屈託なく笑顔を浮かべる。

「……眩しいなあ」

「ん？なんですか？小さくて聞こえませんでした」

「頑張らないとなあと言ったのさ。私もあの桜が咲いたところを見てみたいからね」

涼介は視線を幽々子から西行妖へと変え眺める。

「涼介さんも見てみたいのですか？」

「うん、そうだね。あんな大きな桜が咲くところを見られたら感動ものじゃないか」
「確かに迫力はあるそうですね」

「そうそう、それに咲くのに自分が頑張った達成感もあればその感動はきつと一入ひとしおだろ
うね。だから私も頑張ろうと思うのさ」

「じゃあ、涼介さんが頑張るなら私はもつと頑張らないとですね」

「どうして?」

「幽々子様の願いを叶えることは当たり前です。でも、そこに友人の願いもあるなら私も気合が入ります」

「……妖夢は本当にまつすぐだよね。そうだね、絶対三人で桜が咲くところを見ようか」
「ふふ、でも無茶だけは本当にダメですからね」

嬉しさを含んだ弾んだ返事が妖夢から発される。涼介もそれに笑顔で返す。

「ああ、約束する」

「はい、約束です」

涼介と妖夢の二人は、春の陽気な日差しの中で西行妖を見上げ約束を交わす。幽々子は二人のその仲の良い様子に笑みをこぼし静かに眺める。しかし、穏やかな時間は長く続かない。解決人の、最後の春の到来は近い。それは西行妖の開花にせよ、落葉にせよ、春の到来は異変の終結を意味するのだから。

開花と変化に供する二五杯目

「ああ、全くもって綺麗だな」

自己の記憶の追憶に耽って、ぼんやりと眺めていた弾幕ごっこに対する感想が洩れる。四人が四人ともスペルを使っているようで、空が一際明るく彩られる光景に意識が追憶かこから現在いまに引き戻される。

「私にも空を自由に飛んで、弾幕を形成できるほどの霊力があればなあ」

涼介の口から出てくる言葉はない物ねだり。視線には空を飛ぶことへ憧憬の色が宿る。

「ははは、あーうらやましいなあー!!」

子供の様に声をあげる。

「う、ううん」

涼介の背後から声がある。縁側で寝かせられている咲夜の声だ。

「ん、お目覚めかな？」

涼介が振り返り咲夜を見る。丁度よくうつすらと瞼が開き咲夜と涼介の視線が合う。

「りよう、すげさん？」

「おはよう、御嬢さん」

まだ頭が覚醒しきっていない咲夜は視界に入った涼介の名前を呼ぶ。涼介はそれに応えて咲夜に笑顔で返事を返す。咲夜がゆっくりと言葉を呑み込む為か何度か瞬きを行う。少しずつ眠りに落ちる前の事を思い出し表情に変化が生まれる。咲夜の瞳が驚愕に見開かれる。

「りよ、涼介さん!!」

咲夜の体が跳ね起き、涼介の来ている和服の襟をつかむ。

「はは。ずいぶん元気だね、御嬢さんは」

咲夜の様子に涼介は楽しげに笑い声を漏らし、言葉を続ける。

「どうして、どうして? 何があったのですか? 何故、死んでしまわれたのですか?」

襟をつかみ、縋り付くように咲夜は涼介に問いかける。至近距離で二人の顔が見合される。真剣な咲夜と、笑う涼介、両極端な表情が互いに浮かぶ。

「うーん、何て説明したものでしょうか? うん、そうだね。簡単に言えば今の私は亡霊だね。死んでいるのかと言われれば体はどこかで生きているらしいから死んではいけないのかな? でも、霊体である今は死んでいるとも言えるのかな? 難しい問題だね」

涼介はそう嘯いて見せる。

「亡霊? 体は生きている?」

「そう、亡霊だよ。だから私は君が誰か知らないし、生前と言うか生きている時の記憶はないね。体を治療するために私を霊として分離しているらしいからどこかで体は生きているのじゃないかな？」

「冗談、ですよね？」

「いいや、本当だよ」

咲夜が震える声で聞き返すが、涼介はあつさりと事実を告げる。その迷いのない声色と虚ろな瞳に咲夜はその言葉が真実だと思い知らされる。

「妹様、フランドール様は？」

「知らない」

震える声で咲夜が問いかける。

「パチュリー様は？」

「知らない」

表情が悲痛に染まる。

「小悪魔は？」

「知らない」

視線が涼介の目から外れ下へと下がる。

「美鈴は？」

「知らない」

涙声で咲夜が問いかける。

「お嬢様、レミリア様は？」

「知らない」

涼介の服の襟をつかむ手に力がいつそう込められる。

「私の事は？」

咲夜の顔が弱弱しく上がる。

「……知らない」

「う、ううう……」

瞳にこぼれない様に溜まっていた涙がハラハラと流れ始める。それまで軽快に応えていた涼介が咲夜の表情に返答が詰まる。咲夜の表情を眺めている涼介に、赤い廊下に無数のナイフが突き立てられその中で泣いている咲夜の姿が脳裏をよぎる。それと同時に、理由は分からないが目の前の少女の涙を止めないといけないと感情が湧き出てくる。

咲夜は涙を止められず、自分を覚えていないとはいえ涼介にジツと見つめられる事が嫌で顔を下げ、涼介の胸に頭を預けすすり泣き始める。

「……赤い廊下に無数のナイフ」

泣き出した咲夜の肩を抱き、頭を撫でようと上げた手をおろし、脳裏によぎった記憶の断片と思われる物を口に出す。手は下げられ体の横に戻る。自分には、逃げている自分には彼女を慰める資格はないと涼介は思い手を下げた。原因が分からない、胸を締め付けられる悲痛な感情を慰める自己満足の為に彼女を使うことが憚られたのだ。

咲夜は涼介の言葉を聞くと頭を勢いよくあげる。胸に預けた顔をあげたため二人の顔は驚くほど近くにある。互いの視界に相手の顔が全部入らない程だ。

「それは、あの時の？涼介さん、思い出してくれたのですか？」
「……ごめんね。思い出した訳ではないんだ」

涼介の申し訳なさそうな響きの言葉に咲夜は唇を強く噛む。

「記憶の残滓の様な物だと私は思っている。きつと記憶が無くても忘れられない程に私の心を揺さぶった出来事なのだろうね」

「え……」

「理由は分からないけれど、君の泣き顔を、悲しそうな顔は見ていたくない。そう心が叫ぶんだよ」

零れ落ちる涙を掬う為に涼介の指が咲夜の頬から目元をそつと撫でる。

「今の私に言う資格は無いのは分かっている。それでも君には泣いていてほしくない。だからお願いだから泣かないで、紅茶の御嬢さん」

咲夜の瞳が零れそうなほど見開かれる。咲夜は思わず言葉が漏れ出そうになり口を開くがそれが音になる前に咲夜は口を閉じる。そして、涼介との今までの会話を思い出そうと瞳を閉じ考え込む。

涼介はひとまず落ち着いた咲夜の様子に安堵する。ちりちりと心を焼くような謎の焦燥感は無くなっている。涼介もそのことで落ち着きを取り戻すと改めて今の状況を認識し直す。

綺麗な少女が自分の胸元に縋りつき、瞳を閉じている。先ほどまで泣いていた為に睫毛は濡れ、感情が高ぶっていた為か頬が少しだけ赤らんでいる。涼介はその光景に背徳的な色気を感じる。会話を脳内で反芻している為か咲夜の唇が音もなく僅かに動いている。それに惹かれるように涼介の顔が動き、唇が重なりそうになる。しかし、直前でその動きが止まり、顔が離れる。咲夜はいまだ思案の中でそのことには気づかない。

「……………ふっ」

思わず口づけをしてしまいそうになった自分に対し笑いが零れる。この行動こそ最もばかげている。忘れて逃げているのに、惹かれたらと正しい行為ではない。でも、と涼介は考える。

——少し、無防備すぎるよ

咲夜は思案が終わり瞳をあける。涼介に質問をしようと口を開くも目の前の光景に行動が止まる。咲夜の額に少しだけひんやりとした柔らかい感触がし、わずかな時間の後にその感触は離れていく。

「あまり男性に無警戒に近づくものではないよ」

涼介はそういつて咲夜に笑いかける。咲夜は起きた出来事を脳内で処理できたのか、涼介の言葉の後しばらく固まっていたが、弾かれた様に涼介の服から手を離し座ったまま後ずさり背後の壁にぶつかると自身の額に両手を当てる。

「あ、あ、ああああの、涼介さん!!」

「ははは、可愛いなあ」

涼介からクスクスと笑い声が洩れる。咲夜の少しだけ非難がましい視線も柳に風とでも言いたげに涼介は堪えた様子を見せない。

「な、何を急にするのですか!？」

「何っつておでこにキスをしたんだよ？」

「そういうことを言っているのではなく、何でそんなことをと聞いているのです!？」

「御嬢さんがあまりにも無防備過ぎるからね。これを戒めとして以後気を付けるといいよ」

「な……………はああ」

涼介は楽しげに声を弾ませながら咲夜に言う。咲夜が言い返そうと息を吸うも、それを吐き出す。それは大きなため息をついているようにも見える。

「もういいです。このまま記憶の無い涼介さんのペースで話していると話が進まないです。この件については全部解決した後にとっておきます」

「それは怖い」

咲夜は、案に涼介の記憶が戻ってから話をするという。それを察した涼介は肩を竦めて冗談めかす。咲夜が話を進めようと口を開く前に別の声が割って入る。

「まったく、何をやっているんだろうな？人が弾幕ごっこをしている最中に」

涼介の背後から声が聞こえる。涼介が振り返り確認すると、黒白の魔法使い魔理沙が箒に跨り縁側近くの石庭に降り立つ。

「人が真面目に異変を解決しようとしているというのに、随分と良いご身分じゃないか咲夜」

魔理沙はやれやれだぜとでも言いたげにわざとらしく首を振って見せ笑みを浮かべる。魔理沙の言葉に咲夜はリリカとの弾幕ごっこ後に二人にかけた言葉と同じ言葉を返されてしまい、顔をしかめる。魔理沙も伝わったのが分かったのかにひひと楽しげに笑う。

「そういう当てつけよくないと思うわよ」

「まあいいじゃないか。それに嬉しそうじゃないか？ からかわせるよ」

「もう最悪。まだ霊夢に見られた方がましだったわ」

「それにしても記憶の無い涼介はダイタンだな」

「その様子だと妖夢が負けちゃったのか」

「どことなく残念そうな声色で涼介が魔理沙に応える。

「残念だったな、あの半霊もいい線いっていたんだけどな」

「そっか。うーん、でも君から春は私では取れそうにないなあ」

「そいつは残念だったな。これで霊夢が勝って異変は解決だな」

「さあ、それはどうだろうね」

「記憶があれば涼介も私と同じことを言っているはずだぜ」

「へえ、私はあの紅白の子のことを信頼しているのか」

「あー、まあ信頼と言えるのか？」

魔理沙の齒に引つかかった物言いに涼介は首を傾げるも追及はしない。どうせ答えを聞いたところで納得するには記憶が足りないのだから。

「魔理沙、話しているところ悪いけど少し私に話をさせてもらえないかしら？」

「ん？ 良いぜ。口づけをされた咲夜が何を話すのか興味あるからな」

「今度来た時にたっぷり歓迎させてもらうわね、魔理沙」

「うげっ、やりすぎたかあ。あー、しばらく間を開けるか」

「返却期限」

「うっ！忘れてた……………はあ」

魔理沙が大げさにため息をつき、肩を落としてみせる。その仕草に少しだけ溜飲を下げた咲夜は視線を魔理沙から涼介に戻す。

「それで、お嬢さんは何を聞きたいのかな？」

「身体がどこかで生きていると言っていたけどそれはどういう意味なのですか？」

「そのままだよ。実際には私は生き霊らしいのだけれど身体を持っている人に記憶を封じられてしまっていてね、今の私はほとんど亡霊なのだよ」

「何故身体だけを別で保管しているのですか？」

「さあ？私の能力のせいで治療が進まないと聞いたけどそれだけではないのだろうね」

「身体に霊体を戻せば元どおりになるのですか？」

「そう聞いているよ。異変が終われば元の状態に戻れるらしいよ」

「推測や伝聞ばかりなのは何故ですか？」

「私が別段興味を持っていなくて調べてなかったのさ」

「興味がないとは？」

「私は今のままでいいと思ってるからね」

「生き返りたくない、と?」

咲夜の声が強張る。

「何も無い今は楽だからね。亡霊だからこそ過去もなければ霊だからこそ未来もない。只々今を好きに生きる。素敵じゃないか?」

咲夜は涼介のその言葉を聞き、胸がジクジクと痛む。友達となつてまだ半年、それは確かに短いのかもしれない。けれど、咲夜にとつてとても大切な
思い出出時間なのだ。それを否定された気がしたのだ。

「咲夜、そんな言葉気にするな」

「そんな言葉なんてひどいなあ」

「確かにそいつは涼介の霊だ。だけどな、記憶が何も無いから別人なんだよ。大元が同じだからこそ姿や形は似ているし、仕草だって、場合によつちや言葉選びや考え方も似ているところもあるかもしれない。だけどな、こいつは私らの友人の涼介じゃない」

「その通りだね、ふふ、あはははは」

涼介は何かがおかしいのが魔理沙の言葉を聞くと愉快げにクスクスと笑い声をあげる。魔理沙は涼介のその様子に不満そうに眉をひそめる。

「確かに……魔理沙の言う通りね。ちよつと焦つて空回りしていたわ、ありがと魔理沙」

「気にするな。私もこのバカに後で説教せにやならんからな」

「怖い怖い、余計に思い出したくなくなってしまうなあ」

周りで起こる喧騒さえ今の涼介にとつては楽しい刺激の一つでしかないとても肩を震わせ楽しそうな様子を隠すことさえしない。

「亡霊つてのは手におえないな」

「そう寂しい事を言わないでくれよ」

「で、涼介。その身体は誰が持っているんだ？」

「はは、無視かいまったく……狐の妖怪が持っているらしいよ。ゆゆさんならもつと詳しい事を知っているのではないかな？」

涼介はそういうと視線を今なお空中で弾幕ごっこを行う幽々子と霊夢へ向ける。それを追って魔理沙と咲夜も視線を向ける。激しさを増した弾幕が冥界の空を埋めている。涼介にはもう二人の姿を見つけることが出来ない。

「狐？」

「そう、狐。確か、ゆゆさんは何と言っていたかな……ああそうそう、友人の紫と言う人の式がその狐らしいよ。そんなことを確か言っていたね」

「咲夜、知っているか？」

「隙間妖怪……」

魔理沙の問いかけに咲夜の口から言葉が洩れる。

「誰だそいつ？」

「境界を操る妖怪の賢者とも呼ばれる大妖怪よ」

「ふうん、てことはそいつから身体を取り戻せば万事解決だな」

魔理沙が軽い調子でそういうも咲夜から返答はない。

「どうした、咲夜？ 難しい顔して」

「実際かなり難しいわ……一度だけ会ったことが有るけれどアレは正真正銘の化け物よ。それに居場所までは知らないわ」

冷や汗をかいたのか咲夜の頬に雫が伝う。

「……それでもやる事は変わらないぜ。ただ嘆いているだけじゃ何も変わらない。望みをかなえるのは何時だって行動した奴だけだ」

——だからこそ私は今、魔法を修めてここに立てている

魔理沙は霖之助からもらった魔女然とした帽子を視線の端でとらえながら咲夜に伝える。魔理沙の射抜く真剣な眼差しに咲夜は少しだけ怯むもまっすぐとその瞳を見つめ返し頷く。

「そうね……もう、泣いているだけは、嘆くだけなのは沢山だわ」

「話は纏まったみたいだね」

「随分大人しく聞いているんだな。正直今の涼介ならちやちや入れてくると思っていたぜ」

「私だとして空気くらい読めるさ。それに妖夢もこちらに戻ってきているみたいだしね」

涼介の視線の先に服の所々がほつれ、顔や袖から出ている腕や足が少し煤けている妖夢が降り立つ。

「おかえり妖夢。残念だったね」

「涼介さん……申し訳ありません、敗けてしまいました。約束を、春を手に入れることができまわぶ」

涼介は立ち上がり、妖夢に近づき汚れた頬や腕を用意してあった手ぬぐいで拭つてやる。妖夢がそれに構わず心底申し訳なさど悔しさを滲ませ謝罪を言葉にするが言い切る前に、涼介に鼻をつままれて言葉が途切れてしまう。

「はいはい、元氣出して妖夢。それより大きな怪我が無くて良かったよ」

「あ、はい。ご心配お掛けしてしまいすみません」

「そこは心配してくれてありがとうだろう。あと勝負は時の運でもあるさ。それに敗けることは悪い事ではないさ、だから謝る必要はないよ」

「しかし春が……」

「ふふ、まだゆゆさんが頑張っているからそれに期待しようじゃないか。それにあの黒白の子が持つ春が無くても案外大丈夫じゃないかな?」

「それはどういう意味ですか?」

「少し前から西行妖に花が付き始めているんだよ」

涼介がそう言い西行妖に視線を向ける。妖夢、咲夜、魔理沙の三人も同じように視線を向けると巨大な桜のつぼみが開き始めている。

「……本当だ。咲き始めている……でもなぜ?春はまだ残っているのに」

「もともと最後の1押しとなるきつかけが足りなかっただけなのかもしれないね。だからメイド服の御嬢さんが持っていた春がきちんと消化できて咲き始めたのかな?」

妖夢が不思議そうに疑問を漏らし、涼介がそれに応える。魔理沙はその涼介の言葉にアリスの言っていた内容を思い出す。自分と咲夜の持っていた春は偽装されていたが、濃縮された濃い春であったことを。

「濃い春が最後の後押しをしたのか。これまづいんじゃないか、咲夜」

「ええ、そうね魔理沙。あの桜の放つ濃密な死の気配……さつきまでは全然分からなかったのに今はどんどん膨らんでいっている」

「花の開花に合わせてどんどん強くなっていく……寒気がしてくるぜ」

魔理沙はいつもの調子で軽快な口調で言葉を紡ぐも、その声は微かに震えている。咲夜も、肌が粟立つのを感じる。

「あの桜の気配……幽々子様に似ている？」

妖夢は桜の放つ気配が死を操る程度の能力を使用している時の幽々子に酷似しているように感じる。

「へえ、そうなんだ。それにしても良い心地だね」

「はあ!? 涼介何言ってるんだよ。これのどこが心地いいんだよ!!」

涼介が平然とのたまう内容に魔理沙がギョツとする。

「え? 心地よくないの?」

「完全なる霊体である涼介さんにとっては生も死もありません。むしろ本来は死の向こう側にある物が霊なのです。だからこそ脅威を感じないのでしよう」

涼介が首を傾げ心底不思議ですとでも言いたげな表情を浮かべる。それに対する答えを涼介の隣に立つ妖夢が応える。

「なるほど、そういう事ね」

「納得できる理由だなんてそんなのんびりと話をしている場合じゃないぜ。あの桜をどうにかしないと」

咲夜と魔理沙が妖夢の返答に納得を示すも、魔理沙が慌てて行動を起こそうと箒に跨

り飛ぼうとする。

「それは許可できないかな」

しかし、魔理沙は飛翔しない。涼介の声に呼び止められたからではなく飛べないのだ。

「飛べない？どうなってんだこれ!？」

「今君たちは私の能力の効果圏内にいるからね。飛べない様に落とさせてもらっているよ」

「おまつ!!今どんな状況かわかってんのか?」

「桜が咲いているだけじゃないか?」

「ああ、もうこの亡霊話を通じねえ!!」

危機感を微塵も感じていない涼介とのやり取りに魔理沙がじれったさのあまり声をあげる。二人の間生者と死者にある認識の齟齬が大きすぎる為、話が合わないのだ。

「これならお花見が出来そうだね、妖夢?」

頭を抱え込む魔理沙から隣の妖夢を見て笑顔で涼介は問い掛ける。

「え、あ、はい。そうですね……ですが……」

「何か心配事でもあるの?」

「えつとですね、あの桜が大人しく鑑賞されるのでしょうか?」

「ああ、それは問題だね」

「涼介さん、お花見以前にあの桜はなんなのですか？」

「ん？御嬢さんはあの桜が気になるみたいだね。あれは千年の間封印され続けていた妖怪桜らしいね」

「何故封印されていたのですか？」

「……さあ？知っている妖夢？」

「いえ、私も聞いたことありません」

そういつて首をかしげる二人に咲夜は頭痛を覚える。こめかみに指を当てトントンと当てながらため息をつく。

「大変そうですね」

「ええ、涼介さんたちのおかげです」

「ああもう、呑気に漫才してんなよ……頭が痛いぜ」

刻一刻と花を増やし死の気配を増す西行妖の横での呑気なやり取りに今度は魔理沙が頭を振る。そこで唐突に涼介の気が抜けた声がある。

「あれ、あつちも終わったのかな？」

幽々子たちが弾幕ごっこを行っていた空間に弾幕は一つも飛んでいない。幽々子と霊夢が距離をあげ対峙する様に浮かんでいる。

「いや、それにしても様子がおかしいぜ。霊夢が警戒を解いていない」
「様子がおかしいのはあの亡霊？」

咲夜が幽々子を強く見つめる。涼介も目を凝らし、幽々子を見つめる。

「明滅している？」

幽々子の全身が明滅して濃淡が変化する。明滅の間隔は短くなり、どんどんと幽々子の全身が薄くなっていく。

「幽々子様!!」

妖夢が叫び、幽々子に向かおうと飛ぼうとするも、涼介の近くにいたために飛び立てない。妖夢はとっさに涼介を振り返る。涼介はそれを確認すると頷き返し能力を解く。妖夢の身体がふわりと飛び、幽々子に向かつて飛翔しようとする。幽々子に妖夢の声が届いたのかこちらを振り返る。その全身はほとんど透けて景色に溶け込もうとしている。幽々子の口が何か言葉を紡ごうと動きを見せるも音にはならない。

直後に幽々子の姿が消える。その空間にはもともと何も無かったかのように冥界の夜空が映る。

「幽々子様あ!!」

妖夢の絶叫が白玉楼に響き渡る。飛びあがったその場で妖夢の身体が進むことなく

制止し、再び地上に降りていく。

「おいおい、消えちまったぜ。何が起こってるんだ、いったい」

「少なくとも良い事では無いのは確かでしょうね」

魔理沙と咲夜が焦燥感の混じる声で話す。

「桜が……美しいな」

涼介が西行妖をみて呟く。花開く蕾が加速度的に増えていく。すでに六分咲きと言える。

「最悪ね」

涼介たち三人以外の声が聞こえてくる。近くにいるの間にか霊夢が来て浮遊している。

「いったい何があったんだ、霊夢」

「さあ、急に明滅して消えたのよ。それになんだかあの桜咲いちやつてるじゃない」

「どうするんだ、霊夢」

魔理沙が箒に跨りやる気を見せるように魔力をみなぎらせ霊夢に並び西行妖を見つめる。

「どうせやる事は決まっているのでしよう?」

咲夜も霊力を高め二人に並び青球からナイフを取り出し構える。

「妖夢」

涼介が妖夢に近づき俯いたまま固まっているその肩に手を乗せる。それに対し妖夢は反応を示さない。ただ、触れた涼介は妖夢の身体がひどく強張っていることが分かった。

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

西行妖の全容が脈打つように、その巨大な幹が身震いする様に一度震える。亡者の嘆きの様な、死者の絶叫の様な、どこか物悲しい声が冥界に響き渡る。

「来るわよ!!」

霊夢が叫ぶと同時に空を生めるような濃密な妖力弾が形成される。漆黒の大小様々な妖力弾が無差別に周囲へ放たれる。霊夢達が視線を涼介に向けるが、涼介は大丈夫だと示す様に笑って手を振り、妖力弾を消して見せる。それを確認した三人が散開し、涼介が自身の周囲に近づくと妖力弾を能力で霧散させ自分と妖夢を守る。

「妖夢、大丈夫? 妖夢?」

涼介は周囲を気に掛けることなく妖夢に呼びかける。

「妖夢、妖夢?」

語りかけても反応のない妖夢に対し涼介は一度呼びかけるのを諦めアプローチを変えらる。

「ゆゆさんが消えて桜が目覚めた……桜の下で眠る富士見の娘はゆゆさんだったのだね」

妖夢の肩がピクリと反応を示す。

「西行妖を封じていたのは生前のゆゆさんだったみたいだね」

妖夢の顔がゆっくりと持ち上がる。

「その話は……どこで……どうして？」

「さあ、何故話してくれたのだろうね。私にも分からない」

「私は……私はそんな話を知りませんでした。私は、そんなにも頼りないのでしょいか？」

妖夢の身体が涼介に向き直り、体重をかけ縋りつく体勢で涼介の服を掴む。

「そんなことは無いよ。ゆゆさんは妖夢の事を本当に大事にしていたよ」

「大事にされていることは知っています……でも、頼りにはされていません……きつと私では力が足りないのです……」

「妖夢……」

「今だって、どうしていいのかわからなくて何もできない。こんな自分ではいつまでたっても……いつまでたっても、祖父に追いつけません……半人前のままです……頼り

ない従者のままです」

「そんなことないよ。妖夢はいつも努力しているじゃないか」

「結果が出ない努力に一体何の意味が……そんなもの」

「確かに結果は大事だね。でも、努力をするという過程も大事だよ。積み重ねるといことは大切な……」

涼介の言葉が途切れる。妖夢は突然途切れた言葉に疑問を覚える。涼介は自分から出そうになつた言葉をかみしめる。

「積み重ねることです。その人が出来るんだ。多くの経験がその人を作るんだ。妖夢は問題から逃げずに真つ向から立ち向かうじゃないか。立ち止まってしまふ事はあつても超えようと努力するじゃないか。だから、ゆゆさんは、君の主人は君の努力をいつも見ている。手助けせずに見守つていた」

涼介の言葉に妖夢の記憶が刺激される。思い返される多くの記憶。いつも自分が剣の鍛錬をする時は、努力する時は、悩んでいる時はいつでも幽々子が自分を見守つていたことを。妖夢の瞳から自然と涙があふれる。

「ゆゆさんは、努力する妖夢が、成長する妖夢の事が何よりも大切で、誇りに思つていた。そんな時間を少しでも長く見ていたいから手助けをしなかつたのだろうね。だから多くを語らないんだ。だから、頼りにされていないと妖夢は思つてしまつたんだ」

涼介の視界の端で三人が防戦に追い込まれている光景が映り込み、一瞬意識がそちらに向きそうになるもそれを抑える。目の前の妖夢に再び意識を戻す。

「きつとゆゆさんはこれからもずっと妖夢に多くは語らないと思う。だからこそ、妖夢が頼りにされたいと、力になりたいと思うならただ命じられるままに動くのではダメなんだ。自分で考え動かないと、いつまでたつてもゆゆさんの真意は見えてこない。さつき、あの黒白の女の子がこう言っていたんだ。ただ嘆いているだけじゃ何も変わらない、望みをかなえるのは何時だって行動した奴だけだ、てね」

涼介は魔理沙を探すために視線をあげる。妖夢もつられ視線を空へと上げる。紅白、黒白、青白の三人が西行妖の勢いに押され苦戦している。桜は八分ほど咲き誇っている。しかし、彼女たちは誰一人諦めの表情をすることなく抗っている。

「諦めないで闘う事は強さにつながるんだ。自分を成長させるんだ。だから、妖夢。嘆くのは終わりにしよう。何が出来るか分からなくとも今できることをするしかないんだ。今はまだ弱いかもしれない。今はまだ力がたりないかもしれない。でも、挑戦しなきゃ、立ち向かわなければ何が足りないか永遠に分からないままだよ」

視線を妖夢に戻す。妖夢の視線には力強さが戻っている。

「西行妖を封印していたのは幽々子様なのです」

「そうだね、生前のゆゆさんの身体ともいえるね」

「封印が解けかけているから、肉体も目覚めかけて霊体が肉体に惹かれたのかもしれない……」

「その可能性もあるね」

「私が知り、敬愛する幽々子様は亡霊の幽々子様なんです。きっと、身体に戻ってしまえば亡霊の時の記憶はなくなってしまう。ましてや、あの死の気配を振りまく桜の元で生き返ってしまえば、たちまち殺されてしまうかもしれない」

「そうだね」

「私は、いつも悪戯をする幽々様が好きです。昔、眠れない私に怖い話をたくさんした幽々子様も好きです。そのせいでお化けが怖くなっちゃいましたけどそれも大切な思い出なんです。幽々様様の食いしん坊なところも、謎かけみたいに言葉をぼかすところだって私は好きなんです。」

涼介は妖夢の語る言葉を真剣に聞く。それは過去から逃げようとしている涼介にとって耳の痛い話でもある。きつと、咲夜やリリカが自分に対して似たような思いを抱いていたのだろうと容易に想像できてしまう。

「祖父を振り回す奔放な所も、幽霊なのにポヤポヤとしていて近くにいるだけで暖かくなるような雰囲気も、振り向けばいつだって笑顔で私を見守ってくれる所も全部、全部が大好きなんです。幽々様様は私の大事な家族なんです」

もう、妖夢は涼介に体を預けることなく自分の力でまっすぐと立っている。

「だから、私はあの桜を咲かせたくありません。幽々子様の願いを無視してでも咲かせたくありません。もう一度封印をかけ直せば私の知る幽々子様が帰ってくるかもしれない。それなら私は幽々子様の命でも背きます」

「じゃあ、妖夢はどうするの？」

「西行妖を封じます。幽々子様は生き返らせません。生前の幽々子様を封印することになっても、殺すことになっても私は西行妖を封じます。涼介さんはひどい従者だと思いませんか？」

疑問を投げかけてくる妖夢の顔には強い意志が宿っている。涼介がどうこたえようと妖夢の中にはもう答えが出ている。

「……いいや、ひどいなんて思わないさ。だって、私の友人も亡霊のゆゆさんだからね」
涼介はそう言つて微笑みかける。妖夢は強くうなずくと霊夢達の加勢に向かうために飛び立っていく。

「……やっぱり妖夢は強いね。私はどうしたいのか自分でも分からないよ」

涼介も西行妖に向き直る。だが、足が進まない。心の中で様々な想いがめぐり逡巡してしまふ。躊躇いが、葛藤が足をその場に縫いとめる。自分の友人を助けたい。生前の友人と思われる彼女らを危険から守りたい。妖夢の手助けをしたい。それらとは反対

に、生き返るであろう幽々子から話を聞いてみたい。このまま満開となった西行妖をみてみたい。このまま全員死んで霊になればみんな花見でも出来るのではないか。そんな馬鹿な考えも浮かび、足が止まってしまふ。

「私は、どうしたいのだ？」

葛藤が言葉となり口をつく。

「自分に胸を張れる選択をすればいい……はあ」

背後から声とため息がする。振り向けばメルランとリリカを抱えたルナサが僅かに浮遊したまま涼介を見つめている。

「貴女は？それにその子は確か……」

意識のないリリカを示す。

「私の妹で、貴方の生前の友達」

「自分に胸を張れる選択って？」

「そのままの意味よ。後ろめたく生きるのと、胸を張って生きるの、どちらがいいのって話」

「私は霊で生きてはいないのだがなあ」

「言葉のあやよ。誤魔化す為に適当に揚げ足取るのはやめて」

凶星を憑かれ涼介は顔をしかめる。

「何故君がそんな話を？君も生前の知り合いだったの？」

「いいえ初対面よ。でもリリカの姉として、その友達にはシャンとしていてもらいたいから言っているの」

「そんなに情けない顔をしていたのかな」

少しだけ道化を気取って大げさな動作で肩を竦めてみせる。

「情けない姿よ。心配で心配でたまらないって顔しているのに、それに気が付かないふりをしていて滑稽」

「酷い言いようだね」

「見て見ぬふりをする貴方の行いよりよほどまし」

「君は何もかも忘れて憂いなく生きるのと、色々な物を抱え込んで苦悩しながら生きる。どちらも選べるならどうしたい？」

「選ぶまでもなく後者」

「何故？」

「妹たちの事を忘れてのうのと存在する私なんてそれは私なんかじゃない。私は私を生きている」

ルナサの視線に迷いはない。覚悟を持った強い眼差しだ。

「私は私を生きる……いい言葉だね」

「末の妹の言葉よ」

「いい妹さんだね」

「最高の自慢よ」

心を整理する様に大きく深呼吸をする。涼介の中で決意が固まりつつある。しかし、最後の一押しが、きつかけが足りないと感じる。

目を閉じ、思考を深めようとした涼介の耳にドンツと言う鈍い音が届く。目をあけ音の元を確認すると、咲夜の持つ青球の一つが涼介たちの近くの地面を転がっている。

「これは、御嬢さんの？」

視線をあげると、苦戦している四人が映る。咲夜の近くには青球が一つだけ浮いている。

「出来ることが有るなら早く決断したら？生者である彼女たちとあの死の桜は相性が悪すぎる」

ルナサが述べるように、西行妖と生者である四人との相性は最悪だ。西行妖の放つ妖力弾は死の能力が付与された物で、霊夢達にはわずかに掠る事でさえ大きく生命力を削られるため近づけない。大量の春を得て力を増し、さらに目覚めかけている今は周囲の他の桜からも春を奪っている。周囲の桜は花がどんどんと散っていき、花びらが干からびていく。皮肉にも周囲の枯れた桜が広がるにつれ、西行妖は生き生きとしていく。

「生者でない貴方なら容易に近づけるのではないの？」

ルナサの声がする。涼介にはその声がどこか遠くから聞こえる感覚がする。涼介の意識は青球の亀裂から覗く白いイヤーマフラーに奪われている。

「これを……知っている」

手がゆつくりと伸びそれに触れる。手触りの良い、仕立てのしつかりとしたイヤーマフラー。泡が弾けるように記憶の残滓が頭をよぎる。本に囲まれた場所で耳を赤くした彼女が寒そうだったから送ろうと思った。その時周りには他にも誰かいた。背中に張り付く少女に、呆れた表情をした少女、椅子を引き誰かを促す少女。

また泡が弾ける。民家の立ち並ぶ場所で様々な店を探し、青い服を着た女性に相談している光景。

泡が弾ける。木々に囲まれえた森の中の童話に出てきそうな雰囲気の家でトリコロールカラーの服を着た少女に相談をする光景。

弾ける。どこかの喫茶店の様な場所でイヤーマフラーを付けた姿を見せてくれる少女の笑顔。

失いたくないと強く思う。守りたいと強く思う。

「ああ、もう答えは出たじゃないか」

自然と言葉が涼介の口をつく。口元に笑みが浮かぶ。馬鹿な考えが頭に浮かぶ。

——こんな綺麗に後押しされるなんて神様も様式美と言う物が分かるらしいな

偶然イヤーマフラーが入っている方の青球が壊れ、偶然迷っている涼介の近くに落ちて、偶然亀裂からイヤーマフラーがはみ出て、偶然それに記憶を刺激される。偶然の積み重ねに後押しされ涼介は決断する。紅の館で悪魔が笑い声をあげていた。

「リリカさんのお姉さん。これ、壊れない様に持つておいてもらえませんか？あそこのメイド服の御嬢さんのものなんです」

涼介は亀裂の走る青球を持ち上げルナサに問い掛ける。ルナサが軽くうなずくと青球は浮かびルナサの周囲を浮かぶヴァイオリンの隣に並ぶ。

「どうするの?」

「前に進もうかと」

涼介はそういうと体を払うような仕草をする。手で胸元をトントンと払う。変化が起きる。どこか希薄さのある存在感をしていた亡霊の雰囲気はなくなり、どこか生気を感じさせる生霊の雰囲気纏う。涼介の身体から一枚の紙が現れ剥がれて地面に落ちていく。

「ああ、まったく。これはお説教が怖いなあ」

言葉とは裏腹にその声は歓喜に満ちている。

「今のは？」

「記憶を封じる為に憑いていた式を落しました」

「そう」

「リリカに伝言お願いできますか？」

「なにかしら？」

「店で待っているよ、と」

「そう」

ルナサの口元が僅かにほころぶ。言外に、ちゃんと帰ってくるかと涼介が言っているのを察したからだ。涼介はルナサの同意が得られるとルナサに背を向け西行妖に向かい歩き出す。

「何をするのか？」

「葉を、蕾を、花を落してきます」

「……伝言の内容、守りなさいよ」

ルナサのその不器用な心配の仕方に涼介は思わず笑いが洩れる。片手をあげてひらひらと振って同意を示し、ルナサ達から離れていく。西行妖に近づいていっても涼介を狙う攻撃は、西行妖から放たれない。霊夢達を攻撃し、近づけさせないようにするその

余波が時折迫りくるだけだ。

「靈力のほとんどない私は警戒にさえ値しない、か」

特に妨害に会うことなく涼介は西行妖の根元の幹にたどり着く。そして目の間に見える西行妖の幹に涼介は手を触れる。

「君にとつて私は羽虫みたいなものなのかもしれないね」

記憶の戻った今、改めて能力を使う感覚を体になじませる。妖夢との訓練を思い出し、肉体がある時との差異を修正する。

「でも、蜂の一刻しと言う言葉もあるくらいだから、羽虫だって舐められたものではないよ？」

西行妖に語りかけ言葉紡ぐ。返事はなくとも構わない。これは宣誓なのだから。

「返してもらおうよ、西行妖。私の友達を、妖夢の大切な人を、みんなの春を」

触れた手を起点に能力を発動する。西行妖の活性を落していく。生命力を落とし、温度を落とし、葉を落とし、蕾を落とし、花を落とし、春を落とし、覚醒してきている意識を落とす。触れた部分から広がる様に能力が西行妖を侵食していく。温度が落ちた為に、幹の表面に霜が降り西行妖の表面を白く染めていく。春が満ちた幹を、白が浸食する様にその領域を広げていく。根本からどんどんと白が枝先を指して登っていく。

「きつついなあ」

涼介の口から苦々しげに言葉が洩れる。その声にはわずかに疲労の色が見て取れる。幹の四分の一ほどを白が一気に広がつていくも、その進行速度が急激に低下する。

「ああ、さすがにこれは、見逃して、もらえないかあ」

西行妖が身もだえして震える感触が、幹に触れる手から感じられる。当てる手を増やし両手にする。

「でも、おし、とおさせて、もらおうよ」

能力の出力を、行使する力をあげる。霊体のあちこちから鋭い痛みが走る。その痛みを能力で抑えたいがそんなところに使っている余裕はないと、気力でねじ伏せる。

「こんな、ものより、彼女た、ちに、与えた、痛みのほうが」

近い人々を亡くした痛みを知るがゆえに涼介は分かっってしまう。その痛みは耐えることさえ難しい心の痛みを。止まった白の浸食が、また始まる。幹の半分まで白が広が、ちらちらと西行妖の花が舞い始める。

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

西行妖が再び大きく音をあげる。地面からピキピキと音がし、土が僅かに盛り上がるが、それ以上の変化は起こらない。

「下は、もう、うごかせ、ないね」

根を動かそうとするも、すでに凍りつき、力を落されており、西行妖の思う様に動かすことが出来ない。しかし、頭上でがざりと大きな音がし、視線を向ける。

「枝、とは……器用だ、ねえ」

西行妖の枝が槍でも向けるようにその先端を涼介に向ける。その動きでまた葉や花びらが散っていく。

「さあ、どれほど、たえられる、かな」

苦笑いが洩れる。動けない為避けることが出来ないから、耐える覚悟を固める。涼介の覚悟を察したわけではないが、覚悟を完了すると同時にその枝先が涼介を貫こうと打ち出されるように迫りくる。しかし、枝先が当たる前に打ち落とされる。

「まったく、だいぶお寝坊さんね涼介さん？」

涼介を守る様に霊夢が、魔理沙が、咲夜が、妖夢がその間に割って入る。空を生めていた弾幕は消えている。涼介との綱引きに西行妖が力を回し途切れたのだ。

「はは、しゅんみん、はきもち、がいい、からね」

涼介のその言葉に魔理沙がこれ見よがしに盛大に肩を落としたため息を漏らす。

「馬鹿は死んでも治らないっての本当らしいな」

「相変わらずでなんかもう逆に安心するわね」

霊夢の呆れ声もそこに混ざって非難の視線を涼介に向ける。二人の横で、咲夜が何かを求めるような視線を向けているのに涼介は気が付く。

「さく、やさん、ただいま」

苦痛の中でも笑ってみせる。咲夜の顔に綺麗な笑みが浮かび頷きを返す。霊夢と魔理沙が、咲夜の背後で西行妖の妨害を防ぐ。

「おかえりなさい。でも、後でお説教ですからね」

「おて、やわらか、に」

「さあ、どうでしょうね？」

蠱惑的な笑みを浮かべ咲夜も霊夢達に混ざる。

「涼介さん……」

妖夢がどこか、後ろめたさを含む声で呼びかける。記憶が戻って斬られたことを思いだした涼介に対し、拒絶されないかと恐れが妖夢の中に生まれたのだ。

「やあ、ようむ」

涼介の返事に、何か言おうとするも言葉がまとまらず口を一度開けるも閉じてしまう。言葉の出ない妖夢に涼介は言葉が続ける。

「ゆゆさ、んと、さんに、んで、お花見、しよう、約束、おぼえ、てる？」

妖夢の瞳が真ん丸に見開かれる。

「さく、らは、ちがうけ、どね」

そう笑ってみせる涼介に妖夢は安堵を覚える。彼は思い出しても、記憶が戻っても私の友達なのだと、強く意識させられた。

「はい！美味しい料理、たくさん用意しますね」

「うん」

妖夢も他の三人に混ざり防衛を始める。涼介も自身の仕事に意識を戻す。西行妖からはだいたい死の気配が薄れてきている。根元にいるはずの幽々子の死体が、涼介の能力の支配圏にある為に弱まっているのだ。

「ああ、もうバサバサ、バサバサうっとうしいぜ」

「博麗の巫女よ、こちらの手は足りています。西行妖の封印の準備をお願いできないでしょうか？」

「まったく、咲かせようとしたり封印しようとしたり人騒がせなやつらね」

「申し開きありません」

「そう素直にされると私がいじめているみたいじゃない、まったく。もう少し他の奴らみたいになつてぶてしくしなさい」

「みんながみんな、貴女みたいに凶太くないのよ」

「なに、咲夜？」

「別になんでも」

「ご機嫌だな、咲夜。良い事あったやつは違うな」

「魔理沙!!」

涼介の背後で少女たちの姦しいやり取りが飛び交う。その緊張感のなさに頼もしさを覚える。頑張ろうと気力が湧き出てくる。

「う、おおおおお!!」

西行妖を押し込もうと気合をいれ叫びをあげる。じわじわと白が広がり幹の大部分に霜が降りる。花はもうほとんど散っている。しかし、最後の一押しが足りない。霊体のあちこちから感じる痛みがすさまじい。

——押し切れない……もつともつともつと、強く!強く!!

能力をさらに強く行使しようとする。しかし、浸食は進まない。さらにさらに強く能力を行使する。痛みを、警告を、能力で抑え込み限界を超えて行使する。ピキとひびの入る様な音が聞こえる。視線をわずかにずらすと手元にひびが入っている。能力の出力をあげるほど、ピキピキと音が増え、霊体の至る所にひびが入る。

「なる、ほど……からだ、がない、とこうなる、のか」

恐れを消すためにあえて呑気に嘯いて見せる。出力をあげる。腕のヒビが亀裂に代わる。亀裂は仄かに光を発しており、光の粉の様な物が漏れ出ていく。涼介はそれについて知識が無いがこれは能力の焼き付いている魂なのだ直感的に感じる。強引な能力の行使に霊体が悲鳴を上げ、魂が霊体から漏れ出ている。

「涼介さん!?!」

霊夢の焦燥を含んだ声が涼介の耳に届く。封印の準備のために激しく動いていない霊夢は霊体が割れ始めている涼介に気が付く。涼介は先ほどとは比にならない能力の強さを感じる。西行妖を押しこみ、魂が流れ出ない様に霊体の亀裂へ光を落とすとしていく。亀裂が増え、能力がさらに強まる。亀裂が増えるも能力で被害を抑えてしまうため涼介の霊体は不思議な拮抗状態に陥る。しかし、それは亀裂がなくなるわけではないので長期的に見れば問題はあるが、この瞬間だけで考えるなら、むしろ能力が強まる為涼介的には好都合と言える。結果として霊体の痛みを抑えるために能力を回せるほど、余裕が生まれる。

「霊夢、準備は良い?」

「準備は良いって、そんな事より自分の心配をしなさい!!」

「今のところは小康状態だからひとまず大丈夫。心配するにもまずはこの桜をどうにか

しないと」

霊夢は涼介に言いたいことが沢山浮かぶも、涼介の言っていることも正しいため今は呑み込む。涼介は霊夢のその反応を了解ととり最後の一押しをする。枝から葉が、蕾が、花びらがすべて落ち、表面の全てに霜が降りる。空中にうつすらと幽々子の姿が現れ、その濃さをまし消える前と同じ姿となり落下する。

「幽々子様、幽々子様あ……」

妖夢が意識のない幽々子を抱き留め、強く抱きしめる。名前を呼ぶ声には強い安堵が混じっている。咲夜と魔理沙も、西行妖が完全に静止したのを確認し、警戒はまだ解かないが空中で制止する。霊夢が大きく息を吸い込む音がする。

「神霊」

眩くような霊夢の声。けして大きな声でないのにその声は冥界に広く響く。声が通った後は不思議な静けさが下りる。霊夢の身体から白い霊気があふれ出る。巫女服の袖口からバサバサと音を立てて、大量のお札が飛び出してくる。お札は空を舞い意思のある群体の様に動き西行妖に張り付いていく。

「夢想封印」

霊夢が言霊を発する。張り付いたお札が強く発行する。

——オオオオオオオ……オオオ……オオ……オオ……

お札の発する光が強くなるほど、西行妖の発する音が、その存在感が弱まっていく。完全に音が消えししばらくすると、お札の発光がとまる。霊夢がそれを確認すると右肩に左手を当て、肩を回す。一仕事終えたお父さんみたいだなと涼介は馬鹿なことを考えながらも周りを見る。魔理沙と咲夜は、涼介の様子に気が付いたのか驚きを示し、妖夢は幽々子を起こそうと体をゆすつている。

「涼介さん、大丈夫なのですか!？」

咲夜が驚きの声をあげ、それに反応し、妖夢も一度手を止め涼介を振り返り驚きをあらわにする。

「霊体が……割れている……」

妖夢の口を驚愕がついて出る。涼介はとりあえず、すぐにどうこうなる訳ではないのを理解しているのので、安心させようと口を開く。

「すぐに問題は無いよ。だから今は、異変の解決を」

喜ぼう、と続け笑いかけようとするもそれは敵わない。涼介の背後の空間に亀裂が走り口をあける。現れた隙間の中より狐の尾が九本飛び出し、涼介を握りこむ様に覆い隙間へと引きずり込む。尾が隙間に吞まれると隙間は何もなかったかのようになくなる。

本当に一瞬の出来事であり、霊夢達四人の誰も反応できなかった。それは、西行妖の封印直後と言うこともありわずかに生まれた油断をつかれたのも反応できなかった原因の一つと言える。

「ああもう！また行方不明かよ！！童話のお姫様かアイツは!!!」

魔理沙が頭を抱え不満を叫ぶ。それに応える者はしばらくの間誰もいなかった。

後始末とお花見に供する二六杯目

「へつくしゅ!!」

眼下にはまだ雪が積もっている地面の見える空に魔理沙のくしやみが響く。魔理沙の少し後方には青球を一つ浮かべる咲夜と、陰陽玉を二つ浮かべた霊夢が並んで飛んでいる。

「あー、もう寒い。異変は解決したのに涼介のせいとんだお使いになっちまったぜ」

「はいはい、ボヤかないの。涼介さんのことがなくても何かしら異変の裏で糸を引いていたみたいなのだから、どちらにせよ懲らしめないよ」

「知ってるけどさー、ボヤくくらい許してくれよ」

「ボヤいたって暖かくはならないのよ」

「ほや小火でも起こせば……」

「こんな寒空で何を燃やすっていうのよ……」

魔理沙のくだらない冗談に咲夜がやれやれと言いたげにかぶりふる。

「それにしてもおとなしいじゃないか、霊夢?」

白玉楼を飛び立ってからずつとおとなしい様子の霊夢に魔理沙が話を振る。

「寒いから黙っているだけよ」

それに対応する霊夢の態度はどこか冷たい。魔理沙が隣を飛ぶ咲夜に目配せをする。「何か気になることでもあるの?」

咲夜が霊夢に近づくように距離を詰めて問いかける。後ろ向きで飛びながら咲夜は霊夢の顔を覗き込む。そのまま無言でじっと見つめてくる咲夜に対し無言を通そうとするも、一切視線をそらそうとしない咲夜に対して霊夢は一度ため息をつき話し始める。

「……博麗の巫女がむざむざと目の前で人間を攫われるなんてね」

—— 助けてもらったのになにもできなかつた

—— 涼介さんの異常にも最初に気づいていた

——なのに、それなのに、私は何もできなかつた

漏れ出るのは愚痴だ。本心では不甲斐ない自分を責めるも口をつくのは強がるように、本心を隠し自分の責務を言い訳にする。咲夜は霊夢の言葉に対し少し怪訝な表情を浮かべるも口を開く。

「それを言うなら私もよ。時間を止める間もなかつたわ。何がすべての時間は私の物な

のかしら、滑稽よね」

霊夢は咲夜の言葉に苦笑いを浮かべる。以前紅霧異変で咲夜とあった時、貴女の時間は私の物と言われたのを思い出したのだ。そして、深く聞かずに吐いた言葉を受け取ってくれる咲夜の氣遣いに霊夢は少しだけ感謝をする。

「なんだなんだ、まったく暗くなりやがって。反省会をするにはまだ早いぜ。私だつていろいろ思う所もあるし、悔しい思いもあるさ。けどな、これから妖怪の賢者なんていう肩書きのある大妖怪と戦うんだ。気持ちが悪く後ろを向いていちや勝てるものも勝てないぜ」

魔理沙も二人に並ぶように少しだけ速度を落とし、口を開く。そりや、私だつてと小さな声でぶつぶつと反省や後悔したい内容を呟く。そのぼやきを途中でやめ二人に顔を向ける。

「それに、どうせ反省会するなら涼介も混ぜないと二度手間だぜ。アイツが一番反省することが有るんだからな」

魔理沙が明るい声で言つて笑つてみせる。霊夢は魔理沙の言葉と笑顔に背中を押さるれ思考を切り替える。後悔の感情から自分の感情を浮かし、客観視させる。決意を言葉にして表す。

「助けてくれたお礼と、たくさんの反省をして貰わないとね」

気合を示すかのように陰陽玉がくるくると自転を始める。魔理沙はそれを確認すると咲夜にウインクを飛ばす。咲夜はそれに対し同じように片目を瞑り返答とする。二人の視線の間を横切る様に霊夢が進む。

「はいはい、心配お掛けいたしましたありがとうございます。ほら、さつさと行くわよ」
「おお!!霊夢が素直にお礼を言うなんて」

魔理沙が咲夜に視線を向ける。

「これは明日、きつと雨ね」

咲夜が言葉を引き継ぎ続ける。

「あんらたねえ……」

霊夢の口元がひくつき、声が怒りに震える。魔理沙たち二人は逃げるように霊夢をスーッと抜いて先に行く。

「おつ、咲夜。そろそろじゃないか?」

「あの半霊が言っていたマヨヒガって確かこの辺りよね、魔理沙」

白々しくこちらに一瞥もせず話を進める二人の後ろ姿に霊夢は言葉を続けようとするも、それは言葉になる前に大きな白いため息となつて空へと溶ける。なんだかんだと二人のおかげでガス抜きできたのも確かなのでここは我慢しようと思わせる。切り替えるために頭をフリフリと左右にふつて、二人に追いつく。

「えーと……ああ、あつたあつた。あのボロ屋じゃない?」

雪で白く染まって探し物のしにくい風景の中、勘を頼りに霊夢が周囲を見渡す。目的の場所らしいボロい見た目をした小屋を見つける。

「さつすが霊夢だぜ」

「ほんと、どういう勘をしているのかしら」

「ほら、いくわよ」

霊夢が先導する様に二人の前を飛ぶ。魔理沙と咲夜も遅れないように霊夢の後を追う。目的の建物の近づくと、進行方向の空に隙間が開く。それは涼介を呑み込んだ、桜の根元で見た隙間だ。一瞬しか見ることが出来なかつたが、それは三人の記憶に強く焼き付いている。爬虫類の瞳孔の様な縦長の裂け目で両端には赤いリボンがついている。裂け目の向こう側には無数の瞳がびっしりと背景の様に浮かんでいる。

「趣味が悪いぜ」

「あら、そんなつれない事言うなんてさびしいわ……ふああ」

三人の目の前ではなく斜め上から声がかかる。視線を向けると紫色の道士服を着て日傘を差した紫が隙間を椅子代わりにして座り三人を見下ろしている。どこか眠たげな雰囲気をしており、あくびを零す。

「眠そうなところ悪いけれど貴女に聞きたいことが有るの?」

「貴女、悪魔の所のメイドね。何かしら？」

「貴女の所の式が連れて行った人がどこにいるか知らないかしら？」

作った笑みを浮かべ、咲夜と紫が言葉を交わす。

「それなら私じゃなくて本人に聞いたらどうかしら？」

「その本人はどこにいるのかしら？」

「前にいるじゃない」

紫はそう言つて先ほどの前方を指さす。そこには青い道士服を着た九つの尾をもつ金髪の女性が浮かんでいる。

「藍、貴女に聞きたいことがあるんですけど」

紫が九尾の女性に藍と声をかける。藍は左右の手を反対側の服の袖に入れたまま紫に向かい軽く礼をして霊夢達に向き直る。

「紫様に代わり、話をお聞きしよう」

いかにも真面目で、堅物を思わせるような声で藍が応対する。霊夢達は目配せしあ
い、魔理沙が前に出る。

「涼介はどこにいる？」

「ふむ、涼介なら心配はいらない」

「そういう事じゃなくてな？」

「無事なら問題無かろう」

「いや、だからな!!」

「ふふ、もう藍が失敗するからこんなことになるのよ」

要領を得ない藍の回答に魔理沙が声を張り上げようとするも紫が遮り茶々を入れる。
「失敗?」

魔理沙が反射的に聞き返す。

「そう失敗よ。でもまあ無事に西行妖の封印もかけ直せたみたいだから及第点かしら」

「申し訳ありません、紫様。精進致します」

「説明してと言えば話をしてもらえるのかしら?」

霊夢が紫にそう問いかける。紫は霊夢の声に「反応し視線を向け、扇子で目元より下を隠す。扇子の奥で喜悦の表情を浮かべ霊夢を見つめる。

「そうねえ……叩き起こされて気分が悪かったのだけれど、少し気分がよくなったから話してあげるわ」

「へえ、寝起きが悪いのね」

「そうなの、冬は冬眠しているのよ」

「いいわね」

「一緒に寝てあげましょうか?」

「嫌」

「つれないわね」

「無駄口は良いから説明しなさい」

紫はその言葉を聞くと扇子をぱちりと閉じる。座った隙間の裂け目に落ちるように体を後ろに倒し、隙間に飲まれるように姿を消す。目の前から姿を消す紫に霊夢達が虚を突かれていると、藍のいた辺りから再び紫の声が聞こえる。

「上を向いたままだと首がつかれてしまうでしょう？」

藍の隣に先ほどと同じように隙間の上に座る紫の姿がある。隣に浮かぶ藍は少しだけあきれ顔をしている。

「さて、どこから話そうかしら？」

「冬の妖怪から貴女達が涼介さんを誘導していたと聞いたのだけれど？」

「そうよ。元々彼は西行妖にもう一度封印をかけ直す為に幻想郷に招いたのだもの」

想定もしていない回答に質問した咲夜の思考が一瞬止まる。

「まあ、保険の一つの様なつもりであって、あそこまで働いてくれるとは思ってもみなかったのだけれどね」

紫はそういつてクスクスと笑いを漏らす。

「何故そんなことを？」

「もともと西行妖の封印が弱まっていて、さらに幽々子も興味を持ち始めてしまったからね。いつか封印を解こうとしてしまうと解つていたのよ。それで、私が出てもいいのだけれど冬の間は冬眠しているから難しいのよね。幽々子の事だから私が眠る冬を狙つて行動を起こすでしょうから。だから、博麗の巫女にお願いすることにしたの。でも、絶対はこの世にはないから保険は多いほうがいいでしょう?」

紫は霊夢にどこかじつとりとした視線を向けてそう口にする。

「私が不甲斐ないと言いたいの?」

「そんなことは無いわ、霊夢」

名乗りを上げていないのに名前を知られていることに霊夢は気味の悪さを覚え、眉をしかめる。けれども、先ほどの神出鬼没さや、自身が幻想郷の要の博麗神社の巫女であるため知られていても不思議ではないので口にはしない。

「でもね、たまたま外で見つけた愉快な人間が使えるそうだったからね。恩を売つて招いたのよ」

「そんな事の為に——」

「そんな事なんて言わないで欲しいわね。友人の幽々子を守る為に万全を期したかっただけよ。それに、彼にも感謝されているわよ。招いてくれてありがとう、とね。まあそういうなる様に誘導したところもあつたけれどね」

にここにこと綺麗な笑顔に何処か見下したような声色、咲夜と魔理沙が眉をひそめる。「それで、その狐がした失敗ってのは？」

「そのメイドも知っているとと思うけれど冬の妖怪のちよつかい出しを見逃してしまったのよ。元々、計画は全部練ってあつて藍に任せて眠っていたから見逃してしまつたわ」

「面目次第もございませぬ」

となりにいる藍が紫に向けて腰を折り、深く頭を下げる。

「構わないわよ。怒つた貴女っていう珍しいものも見られたし、あとおかげで彼のさらなる価値も見いだせたしね」

「彼は貴女の玩具ではないのよ」

咲夜から怒りを示す様にわずかに靈気が漏れ出る。

「あらあら、お友達がたくさんできたみたいで彼も幸せね」

「あなた……」

「でも、何もしくとも彼は首を突つ込むわよ」

確信がある紫の物言いに咲夜の勢いがそがれる。

「どうしてそんなことが言い切れるんだ？ いや、まあ分からんでもないんだがな」

魔理沙が苦笑い交じりで問い掛ける。

「彼、外の世界で一人の妖怪の周りから恐れを奪つて衰弱死させているのよ」

「はえ?」

思いもよらない切り口からの話に魔理沙から呆けた声が出る。咲夜はその言葉に以前彼が言っていた、大切な人を殺している、といった内容を思い出す。霊夢が先を促す様に言葉を紡ぐ。

「それがどう関係するのよ?」

「意図したものではないとはいえひどくショックを受けたようだね。だからこそ彼は幻想の存在を、この郷の役に立てることなら悩むことなく首を突っ込むわよ。代償行為の様なものでしょう、可愛いわよね」

「面倒なのに目を付けられているわね、涼介さんも」

「私は彼のそういう所、好きよ。だって、経緯はどうあれ幻想郷を愛してくれているのだから」

紫の言葉に歓喜の色がにじむ。自分の宝物を褒められた子供の様な純粋な歓喜がそこには込められている。紫に胡乱な視線を向ける霊夢はため息を吐き、話を変える。

「それで、結局涼介さんは今どうしているの?」

「身体に戻して冥界の白玉楼に送ったわ」

「は、え? 無駄骨なのかよ」

魔理沙が脱力したように肩を落とす。

「霊体が割れていたけど？」

「それはちよつと大変だったわね。まあ、どうなったかは見ればわかるから説明は省くわね」

「元通りにすると言っていたみたいだけれど？」

「ほとんど元通りよ」

霊夢は質問を重ねるも、真面目に応える気がないと分かるとため息を吐く。

「なら、ここにはもう用はないわね」

霊夢がそう言つて背を向ける。魔理沙が問答無用で妖怪をぶつ飛ばさないなんて珍しいと視線を向ける。霊夢は涼介の無事の確認を優先しようと、ここでの争いを一先ず避けようと考えてる。自らの勘から、紫の言葉に嘘が無いと判断しているため、相手の言葉を疑うこともしない。背を向け戻ろうとする霊夢の姿に魔理沙も咲夜も困惑するが、無理に引き止め争う理由もないためそれに従おうと紫たちに背を向ける。

「あらあら、用が済んだらポイ何て寂しいわあ」

「勝手に言つてなさい」

霊夢が振り返ることなく言葉を返す。

「私、神隠しの主犯と呼ばれることもあるのよ？」

靈夢達の背後から妖力が威圧する様にほとぼしる。反射的に三人が振り返って身構える。視線の先では紫と藍、そしていつの間にも現れたのか橙も並び、妖力を練っている。紫の表情には堪えきれない歓喜が溢れ出ている。

「せっかくだから遊んでいきなさい。じゃないと、ね？」

「お前達に稽古をつけてやろう」

「今日は憑きたてほやほやだから万全よ」

三者三様に言葉を紡ぐ。靈夢達が互いに視線を見合わせ、力強く頷く。靈夢達からも靈力が、魔力が沸き立つ。

「いい機会だから、一度コテンパンに懲らしめてあげる」

「悪さをすれば退治される、これが道理だぜ」

「ここで釘を刺しておかないと、涼介さんにまたちよつかいを出しそうね」

靈夢が御幣に靈力を通し、魔理沙が八卦炉に魔力を通し、咲夜がナイフに靈力を通す。全員が全員、カードを四枚取り出し構える。弾幕^{最後の後始末}こっころが幻想の空で始まる。その戦いで発生した閃光や爆音は遠く離れた人里まで届くほどだったという。

大量に散った花びらが積もる白玉楼。幽々子の寝室にて眠る幽々子の隣で妖夢は静

かに座っている。西行妖から取り戻した後から一度も目覚めることなく幽々子は眠っている。内包されている霊気も安定しているため、強い焦燥感はないものの心配は尽きず妖夢は幽々子が目覚めるのをじっと待っている。自らの知りうる情報である、紫の式の式である橙の居場所を伝えた霊夢達もとつくの昔にたどり着いているころだろうと妖夢は思考めぐらす。

「涼介さんは大丈夫なのでしょいか？」

心配が声をなつて漏れ出る。涼介の事も心配ではあるが、幽々子のそばも離れられない。結果として霊夢達に涼介の事を任せてしまったが、それでよかつたのかと悩みは尽きない。そう悩む妖夢の耳に石がじゃりじゃりと踏みしめられる音が聞こえる。

「……誰でしょう？ 霊夢達には中途半端すぎるような？」

霊夢達であれば、たどり着いてから少しして引き返したにしては遅すぎるし、争うことになつたのであれば早いと妖夢は感じる。そして、さらに気が付く。足跡が一つ分であることに。

「誰だろう？」

立ち上がり、襖をあけ石庭を見る。妖夢の息が止まる。空いた襖に反応したのか涼介が視線をこちらに向けている。二人の視線がぶつかる。涼介は笑みを深め、妖夢は驚愕に目を見開く。そして妖夢はある事に気が付く。涼介の近くに見覚えのあるものがあ

る事に気が付く。

「涼介さん、それって?」

「ああ、これかい? お揃いだね、妖夢」

涼介はそれを、半霊、と言うにはいささか小さいこぶし大の人魂を体の前で上に向けて広げた掌の上へと移動させる。口を開け固まる妖夢に微笑みかけ言葉が続ける。

「半分ではないから半霊ではないけどね。言うなれば一割霊って言うのかな? うーん、語呂が悪いな。九割人間一割幽霊で大体人間、って感じだね」

「なんで……」

「漏れ出てしまった部分をまとめた物だよ」

涼介が妖夢の立つ縁側の下までたどり着く。

「……ごめん、なさい」

「謝る事は何もないよ……むしろ、少しうれしくらいだよ」

涼介の発言に妖夢は首をかしげる。涼介の声が本当にうれしそうだから、慰めじやないと分かるから余計に混乱する。

「だって、なんだか幻想の一員になったみたいじゃないか」

そういつてはにかむ様に涼介は笑う。

「それに、悪い事もないしね。能力も以前よりずっと強く使えるからさ」

そう言つて涼介は人魂を腕の周りでくるくると回して見せる。

「妖夢に教えてもらう事がまた増えてしまつたね。霊と人間のハーフの先輩としてご指導ご鞭撻お願いいたします、師匠。私はクォーターよりなお割合が少ないけどね」

妖夢は涼介の様子に、心が軽くなる。そして同時にしようがない人だなあと呆れと支えてあげたいという献身の感情が浮かぶ。

「私の稽古は厳しいですからね？」

「お手柔らかにお願いします」

涼介が苦笑いを浮かべて言う。その表情に妖夢はクスクスと笑いを漏らす。そして、二人で縁側に並んで座り、幽々子の目覚めを待ちながらのんびりと過ごす。二人の間の会話が途切れることは無い。涼介が人里近くで店を開いている話、妖夢の得意な料理の話、一緒に住んでいるハルの話、幽々子にされて一番怖かった怪談の話。次々と二人の間で話題が生まれる。

「ゆゆさんも酷いね」

「本当ですよ。いまだに夜のお墓とかには一人で行きたくありません」

「半分幽霊なのに大変だね」

「涼介さんも一割は幽霊なのですから、そんなこと言つたらもう怖がれませんよ？」

妖夢の返しになるほどと涼介は納得させられてしまう。自分ももう幽霊を怖がる

そうやって言われる存在なのだ。と改めて認識する。二人の視線の先の石庭の中空に線が現れ、隙間が開く。その先から霊夢、魔理沙、咲夜、紫、藍、橙の六人が出てくる。皆一様にボロボロであるけれど、表情から察するに霊夢達が勝ったようだ。

「おかえり、みんな」

涼介のあまりに普段通りの様子に一瞬固まる三人に声をかける。三人とも涼介の周りを浮く人魂に気が付く。視線の動きで涼介もそれを察する。

「これ、なかなかかわいいよね。九割人間一割幽霊で、大体人間になったようだよ、私は」
あまりにも気にした様子のないあつけらかなとした涼介に三人が同時に大きなため息を吐く。

「ね、見れば解ると言ったでしょ？」

紫がその様子をクスクスと笑う。

「うるさい、紫」

「もう、八つ当たりは良くないわよ霊夢」

「だいぶ仲良くなったみたいだね、紫さん」

「ふふ、わざわざ冬眠から起きたかいたが あったわ」

「で、紫。問題ないのよね、この状態は」

「ええ、ちゃんと安定しているから問題は無いわ。そこの半人半霊っていうお手本も

知っていたからね」

「そ、ならいいわ」

「では……涼介さん」

霊夢が涼介の状態についての最終確認をし、問題のない事を再確認する。それが終わると、咲夜が涼介に呼びかける。自然と涼介の背筋が伸びる。慧音が見れば、その様子は怒られる前の子供の様な雰囲気だと言うことだろう。

「涼介さん？」「なんだか随分と」「いい」身分だったみたいね」

咲夜、魔理沙、霊夢の順に言葉を発する。涼介の表情が少しだけひきつる。

「ああ、つと……まあ、結果良ければすべてよしと言うじゃないか」

言い訳が涼介の口をついて出る。今の状況ではそれは悪手であり、言ってしまった後に涼介もそれを自覚する。つつい、軽口が出る癖をこの時ほど治そうと強く思ったことは無い。魔理沙の身体がユラリと揺れたと思うと、タツクルを喰らう。

「い、い、い」

「確保ー!!」

涼介の鳩尾に魔理沙に肩が突き刺さる。そのまま涼介は縁側の上に押し倒され魔理沙に馬乗りされる。これでもう行方不明にはならないぜと、魔理沙が涼介の上で言葉を漏らす。

霊夢と咲夜も履き物を脱ぎ縁側に上がる。霊夢が涼介の頬をつねり、咲夜が説教を始める。涼介は隣に座っていた妖夢に視線を向けるも、一瞬目が合った後に首を横に振られる。その後妖夢は、紫の所に近づき話し始める。普段は生者のいない白玉楼の庭先が喧騒で包まれる。

「ふふふふふ」

笑い声が部屋の中から聞こえる。妖夢が話の途中であるが、首が勢いよくそちらを向く。部屋の中から幽々子が立ち上がり姿を見せる。

「死人も起き出す喧騒ね」

消える前と何一つ変わらないその姿に妖夢の涙腺が緩む。零れ落ちそうになる涙をぬぐい、幽々子に近づく。

「もう、お寝坊さんですね。幽々子様は」

「あら、もうそんな時間かしら」

「みなさんお待ちだったんですよ」

妖夢はそう言い、この場にいる他の七名を示す。

「悪い事をしちやったわね」

「でも、ちゃんと起きてくれたので仕方がないですけど許してあげます」

「ふふふ、ありがとう、妖夢。それと悪いけれどお腹が空いてしまったわ」

いつものように呑気に言う幽々子の姿に妖夢はしょうがないなあと嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「仕方ありませんね。すぐにお作りしますからお待ちください」

妖夢はそう言い、台所に向かおうとする。

「妖夢、ちよつとまって」

その背を涼介が呼び止める。

「なんでしようか、涼介さん？」

「料理は私が作るよ」

涼介はそう言つて、まだ不満げな表情を浮かべる少女たちを押しつけ立ち上がる。

「いえ、しかし」

提案に妖夢は惹かれる。幽々子のそばにもう少しいたい事と、幽々子をお願いを天秤

にかけて妖夢は悩む。

「たまには違う人の料理も良い物だよ。ね、ゆゆさん」

「そうねえ、涼介さんの料理も食べてみたいわね」

「それじゃあ決まりだね。はい、妖夢はここでゆゆさんと待つていてね」

「え、あ、ちよつと、涼介さん押さないでくださいよ」

反論は許さないでもいう様に、妖夢の背中を押しして部屋へと押し込む。抗議の声を

妖夢は上げるが抵抗はひどく弱弱しい。その力の弱さに本心が透けている。

「あ、妖夢。火打石とかどこにあるのかな？」

「えっと、火打石はありません。霊力を使つてつけていますので。やはり、私が作つてきます」

妖夢はがそう言つて再び台所に向かおうとする。そうはさせないと涼介は妖夢を抑え、魔理沙に声をかける。

「霧雨魔法店の店主さんに依頼があるんだけど今から依頼を受けてくれるかい？」

「まったく、私を火打石代わりに使おうだなんて仕方のない奴だな涼介は」

魔理沙は、にししと言葉とは裏腹に笑みを浮かべると靴を脱ぎ縁側の下に置く。

「依頼料は味見の権利でどうかな？」

「ここはおまけしておいてやるぜ」

「それなら、私もお手伝いしますね」

咲夜がそう言つて説教の為に涼介が倒れていた横で正座していた体勢から立ち上がる。

「お、ならちようどいいから霊夢もこいよ。このまま台所で反省会としゃれ込もうぜ」

「そうね、それなら今みたいに涼介さんも逃げられないものね」

霊夢もそう言つて立ち上がる。涼介は二人のやりとりに苦笑する。しかし、自分が悪

いのだから仕方ないと理解する。

「あんたらの分も用意してあげるから、その代り用意が出来るまでの間で返せる分だけの春を返してきなさい」

「人使いが荒くてゆかりん泣いちゃいそう」

「馬鹿なこと言っているのご飯の代わりに陰陽玉喰らわせるわよ」

「ふふ、それは怖いわね。仕方がないから春を返してこようかしら。藍、橙」

「はっ、畏まりました」「はい、紫様」

紫の命に二人は素早く応じると冥界の過剰な春を集め始める。

「それじゃあ、またあとでね」

紫はそういうと隙間を開き中へと潜り込み姿を消す。

「と言うわけで、妖夢。ゆゆさんの相手をお願いね」

「あら、まるで私が病人みたいな扱いね」

樂しげに冗談めかせて幽々子が口をはさむ。

「氣を失って目が覚めたばかりなんだから似たようなものだよ」

「うーん、それもそうね」

幽々子は何故自分が氣を失ったかを聞くことなく、部屋に戻り妖夢の隣に座りこむ。

「それじゃあ、できたら声をかけるね。時間がかかると思うからゆつくり待っていてお

くれ」

妖夢は感謝を示すために頭を下げる。幽々子は了解を示してフリフリと穏やかに手を振る。涼介たちも台所に向かい、この場には妖夢と幽々子の二人だけが残った。急にみんながいなくなり少しだけ落ちる沈黙。少しの間逡巡し妖夢は幽々子へ意を決して口を開く。

「幽々子様、お願いがございます」

「なにかしら？妖夢が改まってお願いするなんて珍しいわね」

「冥界と幻想郷の間の結界なのですがこのまま貼り直さずにおくことはできないでしょうか？」

妖夢のお願いに、幽々子はわずかに目を細める。

「それはなぜかしら？」

「えっと、それは……あの」

——外に興味を持てば、幽々子様様の西行妖への興味を失くせるかとおもつて

本音を伝えることは妖夢とって憚れる。それで理由を聞かれても、今の妖夢にはまだ幽々子に、桜の下にあるものについて話す勇氣はない。まだ、今の自分ではもしもの時、

幽々子を止めることが出来ない。だから、もし話すとしても、幽々子様が道を間違えたら止められるくらい心も体も強くなければと考えている。だからこそ、妖夢は初めて主人に本心を隠す。

「ほら、涼介さんとせっかくお友達になれましたし。幽々子様知っていますか？涼介さんお店でお菓子やお料理を出しているそうですよ？そのうち一緒にいきませんか？それに人里にも面白いところが沢山あるみたいですし、他にもえつと……」

妖夢がつつらと他の理由をあげていく。それらの理由だつて嘘ではないが、そこまです強い動機となりえないのを自覚しているだけに声が自信のないものとなる。

「妖夢も知っているとと思うけれど、冥界の管理は閻魔から依頼されている仕事なのよ？まあ、別段何かあるわけではないから仕事と言うのもアレかもしれないけれど」

妖夢の中で一番の障害となつている事柄が幽々子の口から語られる。冥界と西行妖の管理、それが閻魔から依頼されている仕事である。

「はい、それでもです。結界を治さないことで起きる問題は、霊の脱走です。それは私が責任を持つて脱走した際はつかまえてきます。ですからどうか、ご一考ください」

正座の姿勢から頭を下げて誠心誠意願ひ出る。幽々子は何も言わずわずかに沈黙が訪れる。そして、沈黙は唐突な幽々子の笑い声で途切れる。妖夢はどうしたのかと不思議に思い頭をあげる。

「ふふふふ、構わないわよ。というか私も紫にそうお願いしようかなって思っていたのよ」

幽々子の返答に妖夢がばあつと顔を明るくさせ、顔を上げる。

「それでは!？」

「これからにぎやかになるわね。出て行った霊の回収は任せるわよ。頼りにしているからね、妖夢?」

「はい!この魂魄妖夢にお任せください」

バツと勢いよく再び頭を下げる。そこまでしなくても良いが、にやけた顔を幽々子に見られたくなくて妖夢は頭を下げ、表情を隠す。頼りにしている、その一言がどれほどうれしいことだろうか、顔のゆるみを自制できない。幽々子は特にその行動を気にすることなく、言葉を重ねる。

「それじゃあ、早い所紫にお願いしないとね」

「それでしたら問題ありません。幽々子様が眠りに落ちている間に紫様にお話してあります」

その言葉に幽々子は目を丸くする。

「私がダメだと言っていたらどうするつもりだったのかしら?」

ちよつとした好奇心が少し意地悪な疑問をぶつけさせる。

「許可を得られるまで、言葉を重ねるつもりでした」

その言葉になぜか幽々子は妖夢の祖父を思い出す。そういえば、頑固おやじな所があつたなど、幽々子の口元がほころぶ。

「そう」

一体いつ、こんなに成長したのだろうか、見逃すなんてもつたいない事をしてしまったわと幽々子は内心で残念がる。それに、問題の提起とその対処、紫への根回しの手際と言い以前では考えられないことだと幽々子は考える。

「でも、これはこれで」

「幽々子様？」

ついついうれしくなり声に出してしまう。ずっと見守つて成長の様子を見るのもいいけれど、ふと目を離れた後に成長した姿を見せてくれるのもこれはこれで良い物ね、と内心で思う。

「でも、やっぱりちよつと悔しいわね」

「ふあ、ゆゆほはま!?!」

しかし、残念さも同時にある為、妖夢の頬をつまんで不満を表す。突然頬を幽々子につままれ妖夢は驚きの声をあげる。幽々子がそれに応えることなくむにむにと手を動かす。

「むむ、これがやわらか妖夢ね」

「しはいはふー!!」

違うと妖夢は言うも幽々子にはどこ吹く風だ。強引に幽々子の手を弾くことも妖夢には憚られ、手が空中をあわあわと彷徨う。料理が出来て声がかかるまで、二人は存分に絆を確かめ合う。その後、九人で食卓を囲みわいわいとにぎやかな時間が過ぎる。

「めでたしめでたし、で終わりのはずが……どうしてウチで宴会をやっているかしらね、

博麗神社

涼介さん?」

「ん?それはほら異変が終わったから区切りと禍根をお酒で流さない」と

「昨日の冥界での食事会で区切りもついたし、禍根も流せたんじゃないの?」

「はははは」

「笑つてごまかさない」

夜の博麗神社で人妖混じつての大宴会。魔理沙の持っていた濃い春で博麗神社の周りには春が訪れている。遠くを見ればまだ雪が積もっており、近くでは桜が満開に花をつけている。月も雲に隠れることなく顔を出しており、月夜の雪桜はとても風情がある。その景色の中に多くの妖怪や妖精、里の一部の人間などの姿が見える。みな一様に

笑顔で酒を酌み交わし、春の訪れを祝っている。目をさまし、元気になっていたハルもすでにお酒に飲まれ、神社の軒の下で体を丸め眠っている。

「まあまあ、良いじゃないか。みんなで春を楽しもう」

涼介はそう言つて、霊夢の杯に酒を注ぐ。霊夢も酒を注がれば口元に笑みを浮かべる。

「まったく、これじゃ妖怪神社じゃない……はあ」

ため息を一つ付き、杯を煽る。一気に杯を乾かす霊夢に涼介は苦笑いを浮かべ、空いた杯に新たに酒を注ぐ。まだ、中身の入った酒瓶を探すために近くをうろうろしていた魔理沙が霊夢のその言葉に反応する。

「いまさら何言っているんだ？もう、とつくに妖怪神社じゃないか？」

魔理沙のきよとんとした表情と声に霊夢の額に青筋が浮かぶ。顔もすでに赤らんでいることから、だいぶ酔いが回って沸点が低くなっているようだ。

「いい度胸ね、魔理沙。上がりなさい、落としてあげるわ」

「は、良いぜ相手をしてやるぜ」

応える魔理沙も赤らんでかなり酔っているようだ。酔っぱらい二人が空へと上がり弾幕ごっこを始める。桜舞う夜空の弾幕の光景に、人妖達は良い酒の肴だと、やんややんやと声援をとばす。

「これは靈夢の敗けかな？」

酒を片手に涼介がこぼす。酔いと怒りで前のめりの攻めをする靈夢。靈夢はどちらかと言えば超常的な勘を用いた回避主体の闘い方をする。今の靈夢にはその長所が見られない。勢いをぶつけ合う闘いなら魔理沙に分があるだろうとの判断だ。他のところまで移動するのが億劫だと涼介は元気な空飛ぶ少女達を眺めながら一人杯を重ねる。

「ふふ、靈夢も元気ねえ」

紫が御座の敷かれた境内の一角で空を眺めて呟く。周りには藍や橙はおらず、今は一人で花見を楽しんでいる。

「おやおや、そこにいるのは要介護の隙間じゃないか」

「あら、貴女は蝙蝠の赤ちゃんじゃない」

レミリアがグラス片手に姿を現す。言葉とは裏腹に、レミリアは自分からここに来たようだ。

「歳の所為か、人形遊びが随分と下手になったみたいじゃないか？」

此度の異変での暗躍の失敗についてレミリアが揶揄する。その言葉に、紫が一瞬眉をひそめる。扇子を開き口元を隠し、胡散臭げに小さく笑いを漏らす。

「ふふ、そんなことを言いにはわざわざ来るなんて話し相手がいないのかしら？」

「いやなに、感謝の言葉でももらおうかと思ってね」

レミリアの表情が優越感に染まる。紫も思い当たる節があり、隠した顔が僅かに歪む。しかし、ちょうど良いと思っていたことを口にする。

「そう……でも意外ね」

「ん？何がだ？」

「貴女が自ら手助けするなんてね。正直意外だわ」

「ふん、そんな事か。人間の中にも見られる者はいる、それだけの話だ」

「霊夢やあのメイド以外にも？」

「ああ、そうだ。霊夢の全てに対する平等さも、咲夜の有能さも素晴らしい。だが、あの魔理沙のひたむきさや、涼介の実直さ……いやあれは愚直かな？まあそれも美德だ」

「……悪魔がそんなことをほめるなんて」

紫は心の底から驚愕する。これが十年前幻想郷を支配しようと殴りこんできた、傲慢さが服を着ていたような悪魔と同一の存在と思えなかったのだ。

「くつくつく、驚くのも無理はない。私だつて自分で驚いているさ。しかし、私たち妖怪だつてきつかけがあれば変わるものさ。長く生きるがゆえに変化を起こしにくくともな」

レミリアの言葉には含蓄が含まれている。視線は霊夢と涼介を見つめる。自身を打

ち倒す人間。妹を救った人間。どちらも彼女にとっては無視しえぬ存在であり、友人とも呼べるだろう。霊夢に関してでは反論の言葉が本人から出そうなところではあるが。

「そう……そう、なのね」

紫も視線を涼介に向ける。元々保険として利用するためだけに呼んだ、たいして興味のない人材であった。しかし、彼は花の妖怪を始めとした様々な人外と友誼を結び、目の間の悪魔さえ認め、この幻想の地に根を下ろした。さらには、以前の紅霧異変では悪魔の妹を矯正し、此度の異変でも西行妖を押さえつけた。この功績は、この結果は、ただの偶然で済ませて良い物ではない。

——認めなければならぬわね

彼は、涼介は幻想の住人足る資格がある。紫はそう考える。彼はただの駒で無く、自身の愛する幻想郷の一員なのだと認識する。自然と口元に笑みが浮かぶ。

「ようこそ幻想郷へ」

無意識に離れた場所で見上げる涼介へ向けて言葉が出る。

「なんだ、そんな小さな声で。近くで言ってやればいいのに」
クスクスと愉快な笑いをレミリアがこぼす。

「これでいいのよ」

無意識の眩きを聞かれ、それも相手が相手ゆえに苦い思いが広がる。

「くく、恥ずかしがっているとは似合わないな。可愛い所もあるじゃないか?」

追い打ちをかけるように凶星を突かれる。紫は今度こそぐうの音も出ない。今回の失敗と、今のやり取りの流れの所為で旗色が悪いと紫は冷静に分析する。しかし、ここで逃げるのは業腹であるため、さてこの悪魔をどう遣り込めた物かと、酔いでわずかに回転の鈍い頭で思案を巡らせる。他に誰も寄り付かない、表面上は平和な一席が境内の片隅で始まる。

「えつと、文?この洞穴であっているのかな?」

「ええ、ここで間違いありません。椛が確認しているので間違いなく、ここがレティ・ホワイトロツクの住処ですよ」

「へえ、ここが……」

まだ雪の残る妖怪の山の山中にある洞穴の前で涼介と文は並んで立っている。

「で、いきなりどうしてレティさんの居場所を探して連れて行ってほしいなんて言い出したんですか？」

博麗神社での宴会の序盤に涼介は文にレティの居場所を見つけて連れて行ってほしいとお願ひしていた。

「それは、後で異変の話とまとめてするよ」

「ああ、もう焦らしますね……その身体の周りに漂っている人魂についても全然説明してくれないし……」

文がいじけたような声をだし、足元の雪を軽く蹴る。涼介は文のその幼い仕草に笑みをこぼす。

「それも後で全部話すよ。お店で美味しい一杯を出しながらね」

「ふふ、仕方ないですねえ。大人な私はそれで我慢してあげましょう」

羽をパタパタと動かして機嫌よさげ文が胸を張る。

「ありがとうね、文」

「はいはい、それでは待っていますから早く終わらせてきてくださいよ」

「そうだね、あんまり文を待たせるのも悪いからね」

涼介はそういうと洞穴へと一人入っていく。中はひんやりとしており、外とは比べものにならないくらい寒い。涼介はもつと厚着をしてくるのだったなど少しだけ後悔し

ながら奥へと進む。

「誰かしら？人のねぐらに入ってくるなんて、礼儀がなっていないませんか？」

聞き覚えのあるレティの声が奥からひびいてくる。

「レティさんかな？お久しぶりです、涼介です」

「あら、バリスタさん？」

暗い洞窟に、妖力弾が生まれその灯りで互いの姿が確認できるようになる。心底理解できないといった表情をレティは浮かべている。

「何をしにいらしたのかしら？」

「誤解が生まれてしまったみたいだからね……話し合いにきたのさ」

涼介の予想外の回答にレティは呆けた様子を見せる。復讐に來たと言われた方がよほど普通だし、納得できる。

「メイドの女の子からお話は聞かなかったのでしょうか？」

「すべて聞いています」

「貴方……馬鹿なのかしら？」

涼介の返答にレティは自分が侮られていると感じる。だからこそ妖力を発し、威圧しようとする。レティから妖力が僅かに漏れでるが、次の瞬間には妖力が急速にしぼんでいく。灯りにしていた妖力弾も消え、あたりに暗さが戻る。ジツと何かをする音がし

て、涼介がリュックから取り出したろうそくにマッチで火をともす。

「話し合うために、君の力を落させてもらつたよ」

「こんなことが出来たの？」

「使い方を覚えたのさ」

この力を使えば復讐も容易ではないのかとレティは考えるも、涼介の穏やかな雰囲気
に毒気を抜かれる。そして、本当に彼が話し合いに来たのだと察する。

「うふふ、貴方は馬鹿なのですね」

レティが楽しげに笑みをこぼす。

「そうだね。でも前よりは賢くなっているつもりさ」

「程度がしれてしまいそうね」

「はは、そうかもしれないね」

会話が途切れる。お互いに真剣な眼差しで相手を見据える。

「話し合いをしよう、レティ」

「……それが貴方の信念なのね」

「そうだよ。でも、今はどうしても駄目なら闘うことも仕方ないとも思っているよ」

「ちよつとだけ賢くなりましたわね」

「それで、答えは？」

レテイの口元に笑みが浮かぶ。

「、——」

後日、雪の結晶の形をした首飾りを付けてハルに謝っている涼介の姿が桃源亭で確認されたという。目撃した客によると、最終的にはハルが折れて和解をしていたとのことであった。

幻想の閑日

一割の代価と羽休めに供する二七杯目

カランカランと扉につけられている鈴が音を鳴らし、来客を告げる。

「涼介さん、お邪魔するわよ」

「やあ、いらつしやい霊夢」

扉から霊夢がいつも通りの紅白の装いで来店する。紅霧異変の約束以降それ以前より来店頻度が増えている常連様である。

「やつと暖かくなつてきて外出がしやすいわ」

「霊夢のおかげで春が戻ってきたからね」

以前つけていたマフラーなどの防寒具を付けていない霊夢の様子から、幻想郷はだいぶ暖かくなつてきているようだと察することが出来る。霊夢は涼介の言葉に気づかれない程度に眉をしかめる。すぐに、しかめた眉を戻すとカウンター席に陣取る様に座る。

「全然お客さんいないけれど大丈夫なの、涼介さん？」

霊夢が他に客のいない店内を見渡し涼介に問いかける。霊夢の言葉に涼介が苦笑い

を浮かべる。

「霊夢がきた時間が遅すぎるだけだよ」

今の時刻は晡時一三時から一五時の正刻六時を過ぎてている。里の者たちが基本的に涼介の店を訪れる時刻は日三時の時刻である。それ以外の時間だと自らの仕事がある為、中々時間もとれないし、家に帰って夕飯もある為、客足が遠のくのだ。

ただし、空飛ぶ少女達は気ままに訪れる為か、他の客と出会う確率はその時々である。涼介的には人のいない時に来ることが多いので空いている時間を狙っていると思つていたのだが、霊夢の様子から察するにそういう事では特にないらしい。

「ふーん」

自分で聞いておいてその無関心さに涼介はつい苦笑いが洩れるが、それも霊夢らしいなと思ひ笑みの種類が変わる。もしかしたら無意識のうちに勤を働かせて人気のない静かな時間を狙っているのかもしれないと涼介は思いつき何となくそれが当たっているのだろうか、と納得する。涼介は思考を一度やめ、意識を切り替え答えの分かっているいつもの質問を投げかける。

「それではお客様、本日のご注文は？」

「日替わりランチ」

即答する霊夢の答えに笑いを漏らす。霊夢が頼むのはいつも日替わりランチである。

霊夢曰く、いちいちお品書きを見て考えるのが面倒くさいとのことだ。

「いつも言っているけどランチタイムは過ぎているのだけれどね」

「でも、材料はあるのでしょうか？」

いつも頼むけれど霊夢がランチタイムにやってきたことは片手の指で足りるくらいだろう。涼介もいつもの事で文句を漏らすも、声は楽しいな雰囲気です。定型化したやり取りを感じさせる。霊夢もいつも通りの言葉を返す。それを確認すると涼介はやれやれと口にする。と本日の日替わりランチであるポロネーゼを作るためにパスタを茹でる。背を向け鍋でお湯を沸かし始める涼介の背中を霊夢が静かに見つめる。

——いつも私の分の材料を一食分残しているのを知っているのだから

気が付いたのはたまたまだ。里の依頼で夜遅くなり神社に帰って作るのも面倒だと思ひ、その日まだ涼介の店に行っていないのを思ひ出した。紅霧異変での約束もあるからと店を訪れたのだ。たまたま不定期で行われる夜間営業をしていてこれ幸いと店に入ると涼介が、ランチだねといって、一つだけ残してあるハンバーグのパテを焼いてくれた。一食分の材料だけ別の皿に取り分けてあるのを見たとき自分なのだ。と霊夢は初めて察した。そのちよつとした気遣いはうれしいけれど、それを確認するのが何故か

癪で涼介本人に聞いたことは無いし、これからも聞く気は霊夢にはない。

「……もう」

何となくもどかしい思いが口をついて出る。少しだけ霊夢の胸がもよもよする。

「ん、どうかしたかい霊夢？」

「なんでもないわよ。お腹が空いているだけ」

「そっか、じゃあ丹精込めて作らないとね」

「はいはい、期待しているわね」

「それは僥倖だね。今回は小麦粉が安く手に入ってたね、パスタも手作りだから自信作だ

よ」

「まず、パスタがその辺の店で売ってないから手作りするしかないじゃない？」

「実は里の製麺所で頼めば作ってくれるんだよ」

「へえ、そうなの」

「ほら、川の近くの煙突の付いている——」

背を向けたまま耳ざとく、霊夢の漏らした嘆息の声に反応して涼介が話しかけてくる。当たり障りない返答から会話がつながる。何という事のない日常会話に霊夢は胸の中のざわつきが落ち着くのを感じる。パスタに乗せるミートソースも温め始めたのか、いい香りが霊夢の鼻をくすぐる。しばらく涼介と会話をしていると料理が出来上が

る。

「はい、靈夢お待たせしたね」

出来た料理を皿に盛りつけ、涼介が靈夢の前にコトリと小さな音を立てて平皿に入つたパスタを提供する。続くように、いつも通りの温かい緑茶とサラダにスープも同じように目の前に置かれる。

「めしあがれ」

ひどく優しい声音を涼介が発する。少しだけ、子ども扱いされているようで不満を感じるが空腹を訴えるお腹にせつつかれ食事を始める。平たい見た目をした靈夢には珍しく見える麺に、ひき肉と裏ごししたトマトで味付けされたソースがかかっている。料理と一緒に出された普段あまり使わないフォークを使い少しだけたどたどしく麺とソースを巻き取り口に運ぶ。少し味付けの濃いソースと、平たい割にもちもちとしつかりした食感を感じさせる味の薄い麺が口の中で混ざり調度いい塩梅となる。スープも具は少な目ではあるけれど、入っている野菜はどれもくたくたになるまで煮込まれており、飲むと口の中の塩気を流し舌の上がすつきりとする。

「んー、美味しい」

「それは良かった」

涼介は靈夢が幸せそうに食事を始めたのを確認すると調理に使った鍋や、ソースが空

になつた容器などの片づけを始める。背後から時折、フオークが皿にかちやりと当たる音や、持ち上げた食器を机に置くコトリといった音が聞こえてくる。黙々と食べ進めるその様に食事が進んでいるようで何よりだと涼介は笑みを深める。そして、そういえばと、先日店に来た咲夜との会話を思い出す。春が一気に来たせいで美鈴の育てている苺が余りそうと嘆いていた。今度行くときにはスコーンとジャムでも作りに行こうか、先の予定に思いをはせる。居心地のいい無言の時間が流れる。

「ふう、ごちそうさま」

「はい、お粗末さまでした」

食後のデザートに出した甘さの強めのタルト生地チョコレートのスティックケーキを食べ終わり、霊夢が珈琲を片手に笑みを浮かべ言葉漏らす。涼介も洗い終わった食器を布巾で水気を取りながら応答する。霊夢が珈琲の入ったカップを見ながら少しだけ真剣さを帯びた表情をしている。涼介はそれに気づいてはいるけれどもどうしたのかは聞かない。霊夢であれば話すべき必要があれば自分から言うだろうし、自分に対して遠慮することもないと思っているからだ。

「それじゃあ、涼介さんまた来るわね。美味しかったわ」

靈夢はそう言つて空になつたカップを置き立ち上がると、自身の懐を探る。その靈夢の仕草に涼介は首をかしげる。いつのであれば、立ち上がればさっさと出ていき帰つていくからだ。

「はい、これ御代ね」

靈夢がそういうと食事の御代を机の上に置く。紅霧異変以後受け取つていなかった代価だ。涼介は一瞬その出来事に頭を傾げるも、納得する。あの時確かに涼介は死ぬまでと言つたのだ。だから、靈夢は一度靈になつたからと律儀に払つているのだと考える。

「はは、靈夢。御代はいらないよ」

だからこそ涼介は、御代はいらないと意外と律儀な所のある靈夢に笑みをこぼして伝える。しかし、靈夢は御代をひっこめない。怪訝に思い涼介が靈夢の顔を見ると、靈夢はひどく真剣な顔をしていた。

「靈夢？」

「これははじめよ。知らなかつたとはいえ涼介さんは靈になつた」

「一度はね。でも今は生きているよ」

「西行妖を封印する時に何もできなかつたわ。それで今まで助けたのは相殺よ」

「封印をかけたのは靈夢じゃないか、それにあれだけで相殺になるほどではないよ」

「そういう事じゃない!!」

霊夢が唐突に声を荒げる。突然の大声に涼介は驚くが、霊夢も怒鳴った自分に驚いているようだ。

「そういう事じゃない……」

そして再び同じ言葉を続ける。

「霊夢……何を思っているか話してくれないか？話してくれないと私は馬鹿だからね、察してあげることが出来ないんだ」

ただ霊夢が律儀なだけだと勘違いしていたからこそ涼介は霊夢に言葉をかける。

「表面だけで分かった気になっているのは怖い事だからね。今回の異変で身に染みたんだ。だから、霊夢……話をしてくれないかな」

涼介の頭に思い起こされるのは、レティであり、記憶の無いときに怒らせてしまったリリカである。樂觀視していたから、深く考えなかったから起きてしまった出来事だと涼介は考えている。だからこそ、涼介は霊夢に対して言葉を重ねる。

「話しにくいなら、お酒位サービスするよ?」

最近強く行使をしたおかげで感覚がつかめた能力の訓練を始め、無意識に周囲へ影響させるのをやめていた能力を使い霊夢を少しだけ落ち着ける。霊夢も急速に心が落ち着き始めたことでそれに気が付いたのか涼介をわずかに睨む。

「強く使つて無理やり話させようとはしないよ。でも、今のままだと話が進まなそうだからね」

涼介の言葉に靈夢も理性でそれが正しい事だと理解できてしまうから何も言わない。

「ごめんね」

悲しそうな声色で謝る涼介に靈夢はわずかな罪悪感を覚える。ふと紫の話していた衰弱死をさせた妖怪の事を思い出す。

「別にかまわないわよ」

靈夢はそう言つて再び席に着く。御代ははまだ机の上に出したままでしまいはしない。

「それでもいい」

涼介はそれを確認すると後ろの棚から酒瓶を取り出し、自分と靈夢の分を注ぐ。そこで靈夢に出す前に一つ思い出したかのように、棚の中から紙とペンを取り出し文字をさらさらと書いていく。靈夢はそれに何を言うでなく、座つて待つている。涼介は書き終るとその紙を持つて扉を開けて外から見えるようにそれを張る。

いつもの様に張り紙一つ

『本日貸切の為に来店はお断りしております』

この時間からくるのはたまに訪れる空飛ぶ少女達くらいではあるが念のためだ。それを確認して、よしと小さくつぶやくと涼介はカウンターの中に戻り、霊夢に酒の入ったグラスを渡し自分のグラスを持ち上げる。

「とりあえず乾杯しようか？」

「……はあ、何に乾杯するのよ？」

霊夢が涼介の呑気な態度に僅かばかり毒気を抜かれたため息を吐く。霊夢の返答に涼介は少しだけ考え込むと口を開く。

「初めての喧嘩に」

「ふ、ふふふ」

真面目に言い切る涼介について霊夢は笑ってしまう。

「笑うなんてひどいなあ」

「喧嘩って呼べる程度までいってないじゃない？」

「小さな諍いだって立派な喧嘩さ。それに霊夢が代価を払いたいように、私には受け取る意思がない。どちらも引く気がないならそれは立派な喧嘩さ」

涼介はそう言っただけグラスを差し出してくる。霊夢は涼介の仕草にやれやれと言いたげに自身のグラスを差し出す。

「それじゃあ」

「初めての喧嘩に」

「乾杯」

チンツとグラス同士がぶつかる小さくも高い音がする。互いにグラスを口元に運ぶのどを潤す。

「これ……美味しいわね」

霊夢が思わずといった感じでつぶやく。

「実は紫さんのキープしている秘蔵の一本なのさ」

「私は構わないけれど、そんな物を出して涼介さん大丈夫なの？」

「今回の喧嘩の原因は前回の異変だからね。紫さんにも少しだけ原因があったみたいだし、その喧嘩の仲裁にお酒を出すくらい許してくれるさ」

涼介はそういつて嘯いて見せる。大妖怪相手にも普通の友人と変わらない様に接する涼介を見て霊夢は苦笑いをする。ある意味大物だなあと。それと涼介は自分とは逆の意味で平等なのかもしれないとも霊夢は思う。自分は浮くことで皆等しく同じように相手を見る。涼介は落す事で、皆等しく身近な相手としてみる。真逆であるのに似ていることが霊夢にとっては少しだけおかしく感じる。

「そう……まあ文句を言っ来てたら私に言いなさい。おまけして退治してあげるわ」

「大丈夫さ、そんな情けない事で泣きつかないから」

「あら、よく鳥に苛められるって泣きついてくるから今更よ？」

「それは言わない約束だろうに……」

「ふふ、知らないわね」

機嫌よさげに霊夢がグラスを傾ける。あまり酔いが回ってもアレだろうと涼介は考え、少し早いけれどと思いつきながらも疑問を口にする。

「それで、霊夢はどうしてさっきはあんなに取り乱したんだい？」

「それは……博麗の巫女として不甲斐なかつたからその戒めと思つたのよ」

霊夢の口について出たのは咲夜との時にも出てきた表層の理由だ。涼介もあの時の咲夜と同じように霊夢の回答に怪訝な表情をする。咲夜と違うのは涼介には踏み込んでくる意思がある事だ。

「百歩譲つてそうだとしたら、霊夢はあんな風に声を荒げないよね」

凶星を突かれ、霊夢は口を噤む。

「霊夢、この店は落とす店主がやっているんだよ」

霊夢が唐突に話を変えた涼介に対し首をかしげる。

「知っているかもしれないけれど、私は里でもめ事とかが起きた時に呼ばれることがあるんだよ。双方を落ち着けて話し合いをさせるために、争いに落とすどころをつけた

めにね」

涼介は他者を落ち着けることが出来る為そう言った力が必要なたびに里から呼ばれることが有る。酔っ払いの喧嘩から痴情のもつれに、親子げんか大小関係なく、双方が熱くなっている時に声をかけられる。

「それに話のできる妖怪とも友人になれるし、人型を取れない妖怪だつて大人しくさせられる。だからこの店は里の外と中の境界にありながら壊されることもないし、妖怪が人を襲うこともない」

霊夢はその話に納得する。この店の中でも、行き返りの道中でさえ妖怪に襲われたという話は聞かないことに思い至る。

「……はさ妖怪と人間が一緒になつて居られる空間なんだよ。人間が妖怪に恐れを抱くことなく一緒に居られる唯一の空間なんだ。そりゃ、店を出て里に戻れば能力の影響から脱してしまうから恐れは元に戻るけれど、この店の中だけでは恐れと言う垣根が取り払われるんだよ」

「……だから、里の中に店を作らなかつたの？」

「……ああ、紫さんから話を聞いたのかな？」

涼介は霊夢の問いでそう考える。ずっと能力の影響下に置いて妖怪から恐れを奪わない様になっている事を察せられていると気が付く。

「ちよつとだけよ。恐れを奪つて妖怪を一体殺しているつて聞いただけ」

「そつか……その通りだよ。ここにはたくさんの人たちがいて、皆妖怪を恐れているから私が里の中で店を開いて居座つてもたいした影響にはならないけれど……当時の私はそれでも耐えられなかつたんだ」

「今は？」

「ここも案外良い所もあるよ。里の中とは言い切れないからね、妖怪が来店しやすい」

霊夢の問いかけにはぐらかすような言葉を返す。応えたくないのではなく、涼介の中でも答えが分からないのだ。

「ここでは誰だつて落ち着ける。妖怪と人間が一緒に居ようとね。妖怪と人間が共存できる私だけの小さな理想郷、だから桃源郷から名前を取つて」

「桃源亭ね」

「ふふ、そうだね」

霊夢が涼介の言葉尻をとつて続ける。

「話がそれたね。何を言いたいかというここでは誰だつて羽を休めて欲しいんだ。それがたとえ博麗の巫女であつてもね」

「ここまでいわれて涼介が言わんとすることを霊夢は察する。

「私は——」

「今はお酒が好きで、私に対して後ろめたさを感じているただの女の子だよ」

霊夢の言葉で涼介が言葉を紡ぐ。言葉を遮られたことでムツとして涼介を見てもにっこりと笑い返される。

——そこまでいうなら話してやるわよ!!

涼介のその余裕な態度に霊夢の短気な部分が出す。グラスの酒を一気に煽り空になったグラスをタンツと机に叩き付ける。涼介が苦笑いをして空になったグラスへいつもの宴会の時の様に酒を注いでくるその様子も何故だか無性に気に入らない。

「私は博麗の巫女なのにあの時何もできなかった!!」

霊夢がキツと涼介に鋭く視線を向け立ち上がり吠える。

「気づいたら涼介さんは行方不明で見つけたら幽霊になっているし!」

涼介は霊夢の視線をまっすぐ見つめ返し黙って話を聞く。

「西行妖の封印だって御膳立てされて最後だけ貰っただけなのに!!」

言葉にわずかだが涙声混ざる。

「涼介さんは霊体が割れるくらいポロポロになっても助けてくれたのにお礼を言う前に消えちゃうし!!」

怒った表情で瞳だけ潤ませて霊夢はさらに続ける。

「冥界に戻れば紫が元に戻した後で私は結局何もできなかった!!!」

霊夢が大きく息を吸う。

「私は、私は……無力な子供のままじやいけないの！私がすっかりしないといけないのよ!!」

博麗の巫女としての誇りと、霊夢本人の矜持が此度の異変で大きく傷つけられていたとようやく涼介は察する。

「そっか……霊夢は本当に大きな物を一人で背負っているんだね……ありがとう」

涼介は霊夢の頬に両手を当てる。こぼれそうになっている霊夢の目元の雫を両の親指で零れる前に拭ってやる。

「心配心配をしてくれてありがとう。いつも助けてくれてありがとう」

涼介の感謝が不思議と霊夢の心ですつと流れ落ちる。情けなさとしりなさが涼介の中で生まれるが、ここは感謝をするところだと言葉にする。

「幻想郷を守ってくれてありがとう。私はここにきて生きる意味を見つけられた」

本心から出た言葉が続く。霊夢の瞳がまた新たな雫で潤みだす。それを拭おうと指を動かそうと涼介がすると、その感触で霊夢はまた泣きそうになっている自分に気が付く。少しだけ乱暴に涼介の手を外すと巫女服の袖で涙が落ちる前に拭う。

「普段馬鹿で全然学ばないのに、こんな時だけかっこつけ過ぎよ、涼介さんは」
「そうかな？」

霊夢がもう濡れていない瞳を涼介に向け文句を言う。涼介は肩を竦めてそう返す。

「どれだけ女性をたぶらかしているのかしらね？」

「酷いなあ。ここだけの話、外にいた時は結構振られっぱなしだったんだよ」

「本当かしら？」

「安心して恋愛対象に見えないって言われてね。お兄ちゃんとか、お父さん、従弟みた
いってよく言われたけど一際傷ついたのがあるんだ」

本音をぶつけ合って、いつも通りに戻ろうと互いに普段通りの何でもない会話を意図
的にする。二人してわざとらしく言っているような声色で会話を続ける。

「あら、何て言われたのかしら？」

「……お爺ちゃんみたい、だつてさ」

「ふ、ふふ、あははははは」

「笑うなんてひどいなあ、当時は泣く程傷ついたので」

その時の事を思い出したのか絞り出すような声と苦々しい顔、そして言葉の内容に霊
夢は堪えきれなくなつて笑い声をあげる。言葉で攻めるも涼介は霊夢のどこか吹っ切
れた様子に笑みを浮かべる。

「だって、ふふふ、その、あはは、気持ち」

「しゃべるか笑うかどっちかにしてくれよ」

「あははははは、お腹、ははは、イタ、あははははは」

笑うことにしたらしい霊夢に諦め顔を涼介は向ける。どうやらツボに入ってしまった霊夢の笑いはまだ収まりそうにない。しばらく、涼介が諦めて霊夢の笑い声をBGMにして酒を飲んでいると、やっと笑い声が収まる。

「あー、久しぶりにこんなに笑ったわ：お腹痛い」

霊夢はお腹を押さえ清々しい表情をする。

「それでさっきは何を言おうとしていたんだい？」

「その気持ち分かるって思っちゃったのよ」

「お爺ちゃんがかい？勘弁してくれ…」

涼介がげっそりした声をあげ、お爺ちゃんと言う単語で霊夢がまた軽く嘖き出す。

「ああ、もうやめてよ。また笑えてきちゃうじゃない」

「それは私の所為なのかなあ」

「涼介さんの所為よ。それで分かると思ったのはお兄さんみたいって所よ」

「そいつは嬉しいね」

「ただし前にダメダメが付くけどね」

続けられる霊夢の言葉に涼介は大きさに肩を落として見せる。

「それは手厳しいな」

「でも実際そうでしょ？」

「否定できないところがもうすでにダメダメなのだろうね」

「ふふ、まったくしょうがない人ね。涼介さんは」

「こんな優秀な妹を持ってて私は幸せ者だね」

互いにじゃれ合うように冗談めかして言葉の応酬をする。けれど霊夢は、心の内でそつと思う。

——兄がいるってこんな感じなのかなあ

結局自分の負い目に対する明確な答えは出なかった。けれど、霊夢は思う。

——このお店の中で位は兄に甘えることを許してほしい

桃源亭の中だけでは、ここだけでは自分は博麗の巫女ではなく、ただの少女に戻ろうと霊夢は思う。この店の中だけでは浮かばずに羽を休めるように思う。なにせこ

の店は落とす店主が営業しているのだから。

「さて、兄としては妹から代価をもらうわけにはいかないのだけだな」

涼介がそういつて今回の話し合いの起点に話題を戻す。霊夢も視線を机の上の代価に向けて考える。心の整理はついたけれど、それは心持ちの話であつて物理的な形で甘えるのは憚られ返答に窮する。霊夢のその反応に涼介はどうしたものかと考え、落としてどこを思いつき、机の上の代価を受け取る。霊夢はその様子に安堵する。

「はい、霊夢」

「え、どうしたの?」

涼介が手に持った代価を差し出してくる。

「代価は受け取ったよ。これはおつり」

調度の代価を出したはずなのに、その発言に眉をひそめるも霊夢は手を出す。掌に涼介から支払った代価の大半を返される。

「これ、明らかに多いでしょ?」

「いいや、そんなことは無いさ」

霊夢が不満を漏らすも、涼介はしれつと言葉を返す。

「私は今一割幽霊だからね。つまるところ一割だけ死んでいるともとれるわけだ。だからこそ御代は一割だけ貰ったから後はおつりだよ」

霊夢は涼介の言葉に、なんだそのトンチみたいな回答は、と思う。

「死ぬまでは無料で今は一割死んでいるから、死んでいる分だけ貰うよ。それ以上置いていこうとするなら神社の賽銭箱に返すからね」

どうやって切り返そうか悩んでいる霊夢に涼介が隙を与えないという様に逃げ道を塞ぐ。霊夢もそれを言われてしまうとこれ以上は意地になるだけだと思つて、涼介の思いやりを受け取る。

「お賽銭を入れてくれるのか歓迎だけどちゃんと神様への信仰心を込めてくれないと意味ないわ」

言われっぱなしが少しだけ癪でそう言い返す。

「でも、霊夢もあの神社の神様を知らないじゃないか？」

涼介から返ってきたのは、特大のカウンターで思わず眉をしかめる。涼介は霊夢の表情にからからと笑いを漏らす。霊夢はムツとし年相応の少女の様に頬を膨らます。

「ごめんごめん、そう怒らないでくれよ霊夢」

ご機嫌をとる様に涼介が謝ってくるが声が笑っている時点で霊夢の溜飲は下がらない。涼介の手元のまだ中身のある酒瓶を取る。

「これは涼介さんが私の為に開けてくれたお酒だから持つて帰るわね」

「ふふ、構わないよ」

「涼介さんなんて、紫に怒られたらいいわ」

余裕を見せる涼介についつい憎まれ口がついてでる。子供を優しく見守る様な涼介の視線が少しだけむず痒く、けれど心地いいと感じる。でも、そうやって見られ続けるのは恥ずかしくて今日はもう帰ろうと霊夢は思う。

「じゃあ、私帰るから」

口に出して、霊夢は扉に向かう。霊夢の背に涼介から声がかかる。

「またおいで」

ありがとうございました、ではないいつもとは違う言葉。そんな小さなことがたまらなく嬉しい。今日は良く眠れそうだと霊夢は笑みを浮かべる。

「うん」

扉を開け、踏み出す前に一度振り返り笑みを浮かべて外へと出ていく。背後でカランカランと扉のしまる音がする。子供になるのはここまでと意識を切り替えただけ能力で浮かして普段通りに霊夢は戻る。そして、霊夢は神社へ向かって飛んでいく。

「でも、また店に行ったときは甘えさせてね兄さん」

背後で小さくなっていく桃源亭を振り返り霊夢は一人言葉を漏らす。

稽古と友誼に供する二八杯目

「はあ、はあ」

木々に囲まれる森の中で何かから逃げるように涼介は走る。もう一体どれほどの時間走り回っているのか涼介にはすでに解らない。根が出ていたり、丈の長い草が生えていたり足場が悪く、生い茂る木々の葉でどこか薄暗い森の中を駆け回る。涼介は視界の端に葉の緑と幹や土の茶色以外の白色が映ったことに気が付く。

「ああ、くっそ!!」

その白い物体、人型を象った紙に向かって距離を詰めて腕を伸ばす。人型が僅かに発光するも何かが起きる前に涼介の腕が間に合い握りつぶすと発光がおさまる。涼介が安堵するも、直後に背後から葉や枝を折りながら何かが迫りくる音がする。とつさに振り向けば金色の狐の尾が視界を埋めた。とつさに体の前で腕を交差させる。

——ゴツ!!

鈍い音がして交差させた腕と金色の尾がぶつかり、涼介の身体が投げ出されるように

後方に向かつて弾き飛ばされる。

「ぐうう！」

そのまま地面と平行に吹き飛び背後にある木の幹に背中からぶち当たる。

「かはっ！」

涼介の背中が幹に押され肺から空気が漏れ出る。ぶつかったことで飛ばされた慣性が途切れ地面に身体がずり落ちる。涼介は痛みを気にすることなくすぐさま尾に向かい走り出す。尾は木々の隙間を縫う様に森の奥へと素早く戻っていく涼介は見失わない様にその金色を意識しながら森を駆ける。

「ああもうー！」

顔にかかる葉や枝に文句の声上がる。視界が悪い中もチラチラとわずかに映る金を追う。追う先の明るさが僅かに増す。どうやら森の端が開けたところに出るらしいと涼介は察する。視界が一瞬明るさを増した周囲に目がくらむ。すぐさま視界が戻れば前方に立ちはだかる藍と自身の周囲を囲う様に空中に所狭しに浮く藍の式神が目に入る。

——誘い込まれた……狐らしい

誘い込まれたことに舌打ちが出るもすぐさま状況に対応する。光を放ち始める周囲の式神群に能力を広げる。涼介のそばに浮く人魂が僅かに光を発する。

「落ちろー！」

涼介の声と共に周囲を浮く式神から光が失われた。紙の戻ったように地面へと落ちていく。それを確認する間もなく涼介は藍に向かって走り出す。藍が飛ばうとするもすでに涼介の効果範囲内であるため飛ぶことが出来ない。

「油断大敵!!」

「果たしてそうかな？」

涼介が藍に向かって突き進む。藍はそれを邪魔する様に九つの尾を巧みに操り涼介に向ける。しかし、それは先ほど森の中で見た時と違い明らかに精彩を欠く。重石でもつけられたように、水の中で動いているように、尾の動きは鈍い。涼介が尾を躲し藍に近づく。しかし、九つ全てを躲すことが出来ず五つの尾が涼介に迫る。ぶつかる直前に五つの尾の前に氷の壁が現れる。

「レティィ!？」

涼介は胸元の雪の結晶から妖気が発せられているのに気が付く。それは以前の妖夢の時と比べればだいぶ弱弱しいが、藍の尾を一瞬止めるには十分だ。ひとまず涼介は当初の目的を優先するために今の出来事を頭から締め出し、藍に向かう。

「ほう」

藍はレティの氷にわずかに眉をひそめるも感嘆を漏らし、向かってくる涼介に意識を切り替える。けれども、藍が何かをする前に涼介の手が藍に触れる。

「取った!!」

涼介が歓喜のこもった声をあげる。しかし、直後触れた藍が白い煙をあげ一枚の紙に代わる。

——化かされた!!

突然の出来事に驚愕し涼介が目を見開く。すぐに背後から藍の声がかかり、首に冷たく鋭利な金属の感触がする。

「まだまだ詰めが甘いぞ、涼介」

「ああ……いい線いったと思っただんですけどね」

「確かに成長しているがまだまだだぞ」

「厳しいですね、藍さん」

「当り前だ。以前とは目指すところが違うのだろうか?」

「そうですね、咄嗟の時に身を守る程度の力は欲しいですからね」

藍が涼介の首に突き付けたドスを下げる。涼介はそれが解けると藍に向き直る。

「心の方も成長したようだな」

「……ええ、そうですね。私の死に悲しんでくれる人が、心を痛めてくれる人がいますから」

「気が付くのが遅いな」

「痛い目を見ないと学べない性質なのかも知れませんか」

「心身ともに鍛錬が足りないぞ」

「精進します、師匠」

涼介の言葉に藍が頷く。

「それと、ちゃんと冬の妖怪の手綱を握っておけ。とつさの出来事にすぐに対応できた点は褒められるが、あれはいつでもお前の味方というわけではないぞ」

「そうですね、まさかあそこでレティが藍さんとの稽古で手助けしてくれるとは思いませんでした」

「まあ、ちよつとした仕返しだろうな」

「何かあったんですか？」

「気にするな、それより話が聞かれるから早く抑えろ、涼介」

涼介は藍にそう言われ、雪の結晶の力を落とし抑える。普段から能力の鍛錬の一環で

レテイからもらった結晶の力を落している。先ほどは他に意識が向いて能力が緩んだためにレテイが干渉することが出来た。しかし、季節は冬ではない為力も以前と比べると弱く、レテイも寝ている時間が多いため、こういったことは稀だ。レテイ曰く、力の抑制が無いと声を聴くことができ、寒気を周囲に広げればその中であれば見ることもできるとのことだ。

「でも、以前の様な事は早々起きないと思います」

「それは樂觀が過ぎるのではないか？」

「どうやら彼女、私の身体を氷像で保存したいらしいのですが、死後でもいいそうです。だから、私とそのあたりの妖怪にやられるのに力を貸さないと思いますよ。それで私が死ねば食べられちゃいますからね」

「ふむ」

「それに、歴史が長いほうが保存した後も思い返せて長く楽しめるとも言われたので」「妖怪らしい、納得できる理由だな」

「妖怪の藍さんがそういうとんだか可笑しいですね」

涼介が藍の言葉に笑みを浮かべる。藍はどこか不満げな表情を浮かべ口を開く。

「まったく、その滅らない口をきくのも懐かしいな」

「二年ぶりくらいですからね、こうやって稽古をして長く話をするのも」

「そうだな。これもお前が紫様に認められたという事だろう。以前は最低限の稽古でもあつたからな」

「それでも、私は助かりましたよ。能力なんてものがある事を、使い方を教えてくれたのは藍さんでしたからね。おかげでフランの力になれば、霊夢達の手助けもできましたから」

「そこで自分で助けたと言わないあたりがお前らしいな」

藍が穏やかな笑みを浮かべる。涼介は少しだけ気恥ずかしくて肩を竦めて無言で答える。

「お疲れ様です、藍様。涼介もお疲れ」

「いやあ、本当に疲れたね」

橙が空から降りてきて二人の労をねぎらう。気恥ずかしい話題の流れを断ち切る登場に涼介は内心で姉弟子に感謝する。

「さて、それでは反省と行こうか」

「はい」

「橙、見ていて気が付いたことは無いか？」

「は、はい。えつとですな…」

突然藍に話題を振られ、橙が驚くもすぐに思考を開始する。僅かな時間の後に口を開

く。

「涼介の能力はまだ影響範囲が広いとは言いがたいので、序盤の森の中での藍様の式を用いたゲリラ戦の様な物に弱いと感じました。後は、最後の時に藍様が突き立てた物が符で造った刃物であれば無効化されましたが、金属でつくられた物質であるために対抗手段が無いように思えました」

「ん、そうだな。後は何かあるか？」

「……申し訳ありません。すぐには思いつきません」

「構わない、涼介はどうだ」

「そうですね……範囲が狭いからこそ近づこうとするあまり誘い込まれやすい。相手の攻撃が当たるとは威力を落とすのに能力を使用させられ被害を抑えます。しかし、抑えるのに回すせいで、相手に触れているのに意識を落とす方に力を回せません」

涼介の回答を聞き藍が頷きを見せる。その反応に落第は免れたらしいと涼介は内心で安堵する。落第して宿題を増やされるのは勘弁してほしいと、以前の稽古を思い出す。藍が再び口を開く。

「そうだな、見た目は派手に飛んでいるが損傷がほとんどなかったのは褒められるな。しかし、相手の意識を落とすまで油断するのはよろしくない。お前は相手と闘える様になっただけで相手の方が強いのは変わらない。まだ相手の能力に干渉するほどの技術

がないから能力を使われたらより、彼我の戦力差は開くと思え」

藍の言葉にうなずきを見せる。

「紅魔館の門番であれば氣と武術がある為にお前では絶対に勝てない。逆に偶然を支配するあの悪魔であれば勝てる確率は僅かながらに存在する。つまるところお前の戦闘では能力の相性が占める割合が多いと言えるだろう」

藍の説明は涼介にとつても納得できる内容だ。他にも幽香が相手なら闘いにはなるが、文が相手なら美鈴同様勝負にならないと涼介は判断している。むろん幽香とも戦いになるだけで勝てるなど涼介は微塵も思っていない。

「お前は弱いのだ、自覚をしているだろうが改めて認識するんだ」

「そうですね、ちよつとだけ浮かれていたかも知れません。肝に銘じておきます」

「先ほどの冬妖怪の結晶もそうだがそういった道具を活用するといいかもしれんな」

「なるほど……すこし考えてみます」

「ん、よろしい。それと能力を強く使う際、人魂が淡く光ることが有る。今から何かすると言っている様な物だ、自分の身体で隠すなり工夫しろ。冥界の半人半霊にそのあたりの扱いについて学ぶといい。ひとまずはここまでとしよう、精進をわすれるな」

涼介は藍のその言葉に力強く頷く。藍も頷き返し橙に視線を向き直る。

「さあ今度は橙、お前の番だ」

「ご指導よろしくお願ひいたします、藍様」

藍の言葉に橙が了承を示し、二人して空へと舞う。涼介はそれを確認すると、とりあえずマヨヒガをめざして足を進める。背後で橙と藍の弾幕がぶつかり合う音がする。

——ああ、靈力があればな

空から聞こえる音にわずかながらの羨望が顔を出す。浮かんだ考えを払う様に頭を振り目的地への足を速める。

マヨヒガにたどり着くと、涼介は外にある切株に座りながら橙が飼っている猫たちと戯れつつ二人の修行を眺める。

「相変わらず、動物に好かれるみたいね」

涼介の近くから声がする。顔を少しだけあげ、上を見れば隙間に腰かける紫が笑みを浮かべ涼介をみている。涼介と視線が合うと笑みを深め腰掛けている隙間にもぐり、涼介と並ぶ様に隣に現れる。

「安心させていますからね」

「以前制御できなかった安心感を与えてしまうのを今はもうやめていると思つていたわ」

「場合によりけりで使い分けていますね」

「彼女の事は吹っ切れたのかしら？」

「意地悪ですね、その質問をするの」

紫がクスクスと笑みをこぼす。涼介は猫を一匹膝に乗せ今なお稽古を続ける藍たちに視線を向ける。隣にいる紫も同じように視線は空を向いている。

「それでどうなのかしら？」

「吹っ切れてはいません。でも色々あつてこの能力も悪い物ではないと思えました。何が悪かと言えば私の無知だったのでしょね。それにこの力は友人を守ってくれました」

自らの手に視線を落とし涼介が応える。

「少しだけ前に進めたようね」

「幻想郷ここに來てから多くの事を学びました。きつとこれからもそうだと思います……本當

に來てよかつたです」

「あらあら、ふふふふ。うれしい事を言ってくれるわね」

「お世辞ではなく本心ですよ」

「分かつているわよ？」

「どのような思惑があったとしても招いてくださり、興味を持ってくださりありがとうございます、
（ぎ）ございます、紫さん」

視線を紫へと向けて涼介は本心からの感謝を伝える。紫は思わず浮かびそうになる口元の笑みを隠す為扇子を開く。

「その言い方だと誰かから聞いたようね？」

「咲夜さんから聞きました。隙間妖怪に気を付ける様にとという言葉と一緒に」

涼介は悪戯をする子供の様な笑みを浮かべてみせる。

「あらあら、それでは怒られてしまうのではないかしら？」

「心配はされるでしょうね。でも…話をしてしまうと嫌いになれないんですね」

「難儀な性格ね」

「そうでしょうか？友人がたくさん作れて良いですよ」

「私は貴方の友人なのかしら？」

「私はそう思っています。紫さんにも同じように思っていたら嬉しいですね」

互いの顔を見ながら言葉を交わす。紫の顔は涼介からは半分以上隠れてしまっているのだが、それでも見える部分から察することが出来る事を知ろうと視線は逸らさない。

「ふふ、うれしいわね」

「でも、お好きに利用してくれて構いませんよ」

涼介の続く言葉に紫は一瞬言葉を失う。あまりに気負いなく、それこそ天気の話でもするような気軽さで言つてのける涼介に驚く。

「……貴方、馬鹿な所は治つていないみたいね」

「そうでしょうか？」

「それで今回死にかけているのにな」

「確かに今回はそうですね。でも——」

「でも、なにかしら？」

涼介が一度言葉を区切り、視線を空へと向ける。僅かな時間ではあるが、先の言葉が止まるじれつたさから紫が先を促す様に言葉を発する。

「紫さんがそういつた事をするのは幻想郷の為なのでしょう？私もこの妖怪が、幻想が存在できる場所を守る為に力になれるなら手伝わせてください」

「そう……貴方は本当に^{幻想郷}ここを愛してくれているのね」

「はい。それにここがあれば外で弱つてしまった幻想も生きられる……幻想を引き込む結界もありますしね」

空を見上げる涼介の顔を見つめながら紫は改めて目の前の人間に興味を持つ。いや、

すでにある興味が強まった。だから、少しだけ意地悪な質問をする。

「貴方は私に聞かないのね？」

「何をでしようか？」

「私があの子を幻想郷に誘わなかったのかどうかをよ」

紫の質問に涼介が視線を紫に戻し、その内容に目が見開かれる。浮かぶ表情は驚愕だ。

「……考えたこともなかったです」

「あら、そうなの？」

「紫さんが私に声をかけてくださったのは、あの子が死んでから一年ほど後でしたから直接面識はないと思っていました」

「ああ、なるほど。そうだったのね」

紫はこの後涼介が何を聞くのか興味があるが、あえて素っ気ないふりをして視線を藍たちに向ける。

「紫さんは……誘ったことが有るのですか？」

どこか絞り出すような声が涼介から発される。

「ええ、一度誘ったことが有るわ。断られてしまったけれどね」

「理由は聞きましたか？」

「いいえ、聞いていないわ」

「そう、ですか」

涼介はそういつたきり黙って視線を空に戻す。しかし、視線は藍たちを見ているようで見えていない。

「怒らないのね」

「怒る事がありますか？」

「私が連れてきていけばあの娘は死んでいなかったと」

「一瞬だけ考えなかつたと言えば嘘になります。でも、彼女がそう判断したのなら考えがあつたのでしょうか」

「どんな考えかしら？」

「さあ、分かりません。でも、それが何であつたか考えたいと思います」

「分かるといいわね」

「その時はお酒でも飲みながら教えてあげますよ」

涼介が少しだけ笑つてそう言う。その様子に紫は漫然と死を待つような、以前にはあつた雰囲気がなくなつていていることに気が付いた。知らない間に前を向いて成長しているようだと思ふ。

「頼りがいが出てきたわね利用し甲斐がありそうね」

「私だつて成長していますから」

「ふふふ、確かにそうね。私のお酒を霊夢に勝手にあげてしまうくらいなものね」
今まであつたどこか落ち着いた雰囲気がその言葉でガラリと変化する。

「あ、えつとですね、紫さん？」

「何かしら？」

扇子で隠されていない笑みが涼介に向けられる。あまりに綺麗な笑みに涼介の出ようとしていた言い訳が引つ込む。

「あー……大変おいしかったです」

「ふつ、ふふふ、うふふふふふふ」

そう言いながら今日で一番取り乱しているのか、涼介の視線が右往左往する。紫はその素つ頓狂な取り乱し様に笑い声をあげる。

——どうしてこの話題で一番感情が顔に出るのかしら

きつとそれは今までとの落差や、ずつと抱えていた問題であるために受け止めるだけの下地が涼介の中で出来上がっていたからという理由があるのだろう。紫にもそういう考えた考えが浮かぶも、涼介のあまりにも取り乱す様子にこらえきれずに笑みがこぼれ

る。心の中で仕方がないと思つてしまふ。

「ふふ、ああ、可笑しいわ」

「紫さん？」

「ごめんなさい、ふふ、貴方の反応があまりにも面白くてツボに入つてしまつたの。ふふ」

紫は笑いすぎて涙の出ている目元を自らの指で拭い、笑いながらそう言葉を漏らす。涼介は紫の楽しげな様子に理解が追いつかず目を白黒させる。涼介のその様子さえも今の紫にとつては愉快な出来事にうつる。箸が転んでもおかしいとはこの事を言うのだらうと、頭の冷静な部分が考えるも愉快さは止まらない。

「許してあげるわ」

「え？」

「許してあげると言つたのよ、お酒を勝手に開けてしまつた事を」

「自分で言うのもあれなんです、そんなに簡単に許してしまつていいんですか？あれ結構なお値段がしますし」

「構わないわよ、それくらい友人なのだから許してあげるわ」

紫の返答に涼介は心に温かい物が広がる。紫と出会つてから初めて面と向かつて真つすぐと認められるような言葉を聞いたからだ。思わず口元が緩んでしまふ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

「でも、親しき仲間にも言いえますし何か補填をしたいですね」

「あら、うれしい。それならアレでいいわよ」

「アレですか？」

涼介には紫いうアレと言う物が思い浮かばない為聞き直す。

「里の酒造で貴方が作ろうとしているお酒よ」

「……なんでもお見通しなんですね」

「面白そうなことをしているから、ついつい覗いちやうのよ」

「それは…仕方ないですね」

「仕方ないでしょ？」

「出来たら一番に持っていきますね」

「楽しみにしているわ」

涼介も紫の事が僅かながらわかってきた。神出鬼没で、愉快なことが好きで、本心を隠したが、お酒好きで、幻想郷を愛している自分の友人。そう考えると覗かれるくらい仕方ないかなと思えてきてしまうから不思議だと涼介は笑みを浮かべる。

「楽しみですわね」

「ええ、そうね」

二人して空を見上げれば稽古が終わった藍たちがもうすぐここにたどり直前だ。涼介がフリフリと手を振れば橙は元気に振りかえし、藍は紫に向かって一礼する。

「お疲れ様、二人とも」

「精が出るわね、藍達も」

「ありがとうございます、紫様」

「いえ、まだ修練が足りない」と前回の異変で痛感したばかりです」

「藍は真面目ねえ」

「ありがとうございます」

「うふふふ」

背筋をピンと張り、一部の隙もない藍の態度に紫が笑みを深める。

「紫様よろしければ、今から私の鍛錬に付き合っていただけないでしょうか？」

「うーん、そうねえ——」

紫はそう言つて涼介を一瞥する。

「構わないわよ、今はかなり機嫌がいいのよ」

「それは重畳です」

「ああ、霊夢もこれくらい修行を積んでくれないかしら」

「妖怪である紫さんが巫女である霊夢の修行の心配をするのはなんだか可笑しいですね。幻想郷の要の巫女であるからと理解はしているので理由はちゃんとわかっているんですけどね」

紫の呆れとどこか気苦勞を感じさせる声につい涼介は言葉を返す。

「実はここだけの話ではあるが、紫様は幼いころの霊夢の為に色々と巫女としての力が付くよう手を回しておられたのだ」

「へえ、でも言われて見ればおかしな話でもないのかな」

「本当に大変だったのよ、霊夢ったら全然やる気がないのも。それでなまじ才能があるから頭を抱えた物よ。でも、ふふふ、ムスツとしながら修行する霊夢は可愛かったわよ」

「でも、そんな話を私にしてよかったですか？」

「別に今更霊夢に知られても問題ないのよ。幼い時に、私が直接教えて妖怪寄りになられても困るから隠していただけなの。今の霊夢に言っただけで妖怪寄りになるかと思うかしらっ」

「ないですね。霊夢は基本的に誰にでも平等ですからね」

涼介がそういうと紫は良くできましたと言う様に笑みを浮かべて頷く。

「そういう経緯もあって紫様は霊夢の怠惰ぶりに嘆かれておるのだ」

「ほんと、どうすれば霊夢はちゃんと修行してくれるのかしら？でも、だらんとしている霊夢もかわいいのよね」

閉じた扇子を口に当て霊夢の可愛さを時折漏らしながらも紫はウンウンと頭を悩ませる。涼介はその紫の素であらう姿を見てつい言葉が口をつく。

「なんだか今の紫さんは孫が心配なお婆ちゃんみたいだね」

涼介には時間を止める能力は無いけれど一瞬時間が止まった気がした。視界の中に藍と橙の尾が逆立っているのが見える。冥界での時といい、時折考えなしに軽口が出てしまう癖をどうにかしないといけないと涼介は改めて思う。きつと思うだけで治らないのだろうと心のどこかで声上がる。

「あら……あらあらあら」

一目で造られていると解る笑顔を浮かべた紫が涼介を見る。涼介はその時以前紫が店を訪れた時、見つめられて指一本動かせない時の事を思い出す。種類は違うが似たような威圧を感じる。取り繕うと思うも口が動かない。それは藍達も同様なのか、憐みのこもった視線を涼介に寄越すだけだ。

「これはお仕置きが必要ね？」

紫がそう言つて扇子で自身の手をパチンと音を立てて打つ。次の瞬間、涼介は浮遊感を感じる。涼介の下に隙間が空き、涼介を呑み込もうと口を開けて待っている。涼介は

この時ほど落とす能力ではなく、霊力がなくとも飛べる霊夢の浮かぶ能力か、もしくは空を飛べるだけの霊力が欲しいと心から祈ったことは無いだろう。

「その軽口、しつかりと反省しなさい」

落下が始まる瞬間に紫の楽しそうな声が聞こえそちらに視線を向ける。紫の表情は作られた笑顔から、友達同士がふざけ合う時の様などか茶目つ気のある物に変わっている。それに安堵したい所ではあるが、紫の後ろで藍が目を瞑って手を合わせ、橙が目を瞑り十字を切る仕草をしているのに不安をかき立てられる。

——何故、師弟で和洋違うんだ!!

隙間が閉じる間際、涼介は心の中で最後の現実逃避を行う。けれどもやはり現実は無情で涼介に奇跡が起こる事もなく隙間に飲まれて姿を消す。

後日隙間送りから解放された涼介は、数日の間に渡って女性に対して過剰なまでに丁寧に接したという。常連の天狗に記事にされ、評判を呼び客足が伸びたとか伸びなかったとか。その後、普段通りに戻った涼介は里の酒蔵と協力して作っている不純物や雑味

を能力で完全に落とし、純粋な上澄みだけで作られた酒をもって紫と杯を交わしたそう
だ。そこでどんな会話が交わされたのかは当人同士だけが知る所だろう。

月下の演奏家に供する二九杯目

黄昏時も過ぎさり、辺りには暗さが落ちる。涼介は店の中の行燈に火を灯し夜間営業の準備を始める。なんだかんだと最初は吸血鬼の友人のために始めた夜間の営業。しかし、いつの間にか他の妖怪たちにも噂が広まったのか訪れる客が増えていく。珍しく静かにお酒が飲める場所があつて重宝するわ、とは確か幽香の言葉だつたらうかと涼介が過去に想いを馳せる。背後からカランカランと扉についた鈴が鳴る。誰か来たようだ、笑みをこぼし振り返りながら出迎えようと口を開く。

「いらつしやいま——」

「やあやあやあはじめましておはようこんにちはこんばんわりりカちゃんのお姉さんのメルラ——」

——カランカラン

——ガッ！

「失礼」

振り返った先にはメルランが一人だけおり、涼介が出迎えの言葉をかけるも言い切る前に、畳み掛けるような言葉の嵐をメルランが見舞う。だが、メルランの言葉が言い切られる前に再び扉が開き、ヴァイオリンを振り上げていたルナサの一閃でメルランは意識を刈り取られる。ルナサは何事もなかったかの様な平静さで意識のないメルランの首根つこを掴み一言だけ言葉を発すると、再び扉の向こう側へと消えていった。

「……………え？え?!」

一連の出来事により止まった思考が動き出すも、出てくる言葉は疑問の声だ。扉の向こうで起こされたのか、メルランと思われる声が涼介の耳に届く。何を話しているのかまでは聞き取れないが何か揉めているような雰囲気は伝わる。そしてしばらくそれが続くと再びカランカランと音を鳴らしてメルランが入店してくる。

「いやいやいやいやごめんごめんリリカちゃんのお友達と会えると思って気分が躁に入っちゃってねとああ違う違うそんなことを言いたいんじゃないやなくて実はリリカちゃんが改めて顔をあわせるのが恥ずかしいって顔を赤らめてもじもじさせてああもうおとお可愛かったわあのリリカちゃ——」

——カランカラン

——ゴツ!!

——カランカラン

再び扉が開く。今度はキーボードを振りかぶったりリカがメルランの首めがけて一閃して意識を刈り取る。そのまま無言で素早くメルランを扉の向こうへと連れて行く。涼介が僅かばかり伺えたりリカの顔は確かに赤らんでいた。状況から察するに今の赤らみの原因はメルランの言動にあるのだろうと涼介は当たりをつける。いい加減、怪訝に思い涼介は扉に近づくと外の喧騒の声が聞き取れるようになる。

——はっ！ここは!?

——もうお姉ちゃんいい加減にしてよ!!

——はああ

——もう一回！もう一回！

——もおおお、やだああ

——はああ

——わんもあ!!わんもあ!!

——ぜつつつたい嫌!!!

この時点で涼介はわずかな頭痛を覚えるが、このまま放置するといつかリリカのお姉さんの頭が割れそうだと思う。このままもう一回来た時にメルランがなんと言うのかという楽しみも無い事もないがここは招き入れるのが正解だろうと自ら扉を開ける。カランカランと鈴を鳴らして扉を開ける。

「こんばんは、リリカ。来てくれるのを、首を長くして待っていたよ。お店、寄っていつでもくれるかい？」

顔を出してそう告げればリリカが驚きに目を見開かせる。しかし、それはすぐさま満面の笑顔に変わる。

「うん！」

三人を店に招き飲み物を提供する。メルランが口を開けようとすると同時に、ルナサの持つヴァイオリンの弓がメルランの首の下に触れ口を閉じさせる。その様子に涼介は苦笑いを漏らしながらリリカに話を振る。

「全然来てくれないから忘れられていると思っていたよ」

「忘れていたのは涼介じゃない？」

「はは、確かにそうだったね」

涼介は苦笑いをしながらリリカの言葉に返答をする。

「あの時は……本当にごめんね。嫌な思いをさせてしまったよね」

「……本当は色々と言句を言つてやろうと考えたの。だけど、なんだか今の貴方を見たらスッキリしちやつた。それに最後は自分で思い出してくれたつて姉さんが言つてたし」

「なんだか迷惑をかけてばかりで情けないね」

「ふふふ、私の方が年長者だからね」

「……ああ、確かにそうだね。ならここはお姉さんに甘えさせてもらおうかな」

見た目が明らかに自分より若くとも幻想の少女達は大体が自身より年齢が高い。普段意識していないがそう言われてしまえば話に乗るのが正解だろう。紫の時の様な失言を除けばと、注意が付くが。

「ふふ、よろしい。それにしても表情が前に見た時よりもずっと良くなったね」

「リリカ達のおかげだね。前よりずっと自分をちゃんと大事にして生きようと思えるようになったんだ。リリカの声もちゃんと聞こえていたよ」

「……そっか」

涼介の言葉を聞くと、リリカは嬉しそうにつぶやき珈琲の入ったカップでにやけてしまふ口元を隠す。そして涼介はそろそろ無視しえなくなりそうなメルランに視線を向

ける。先ほどから口を開こうとするたびに弓が突き付けられるためか、無言で手をあげている。音があれば、ハイ！ハイ！とでも言つて手を挙げる元気な小学生の様な雰囲気だ。その様子に苦笑いが洩れる。しかし、どうしたらいいか分からないのでルナサに視線を向ける。ルナサは我関せずといった態度で、時折メルランに弓を突き付けるだけでカップを傾けている。

「あー、と。リリカのお姉さん？」

「はいはいお姉さんですメルランつて呼んでいいですよではまずはリリカちゃんとの出会いから説明してもらつてもいいですかそれとそれと——」

「ああと、一先ず一口飲んでみてください。落ち着きますよ」

先ほどからこちらに興味がある様で一口も飲まれていない珈琲を勧める。扉でのやり取りからすでにメルランの感情が振り切つているのが分かつているため、メルランの珈琲だけには能力を強めにして淹れている。勧められてしまえば断る理由もないためメルランは素直に珈琲を飲む。涼介はメルランの様子に悪い子ではないのだなと思うと笑みを深める。コクコクとメルランが珈琲を飲み進める。メルランはふう、とカップを口から話して一息入れる。

「ああああ、すみません。リリカちゃんが不安定でちよつとだけバランスが崩れていたんですよ」

「そういうことが有るんですか？」

「ええええ、そうなのですよ。私が崩れれば鬱が強くなって、ルナサ姉さんが崩れれば躁が、リリカちゃんならそれぞれのバランスがわちやわちやになってしまふんですよー」

「それは…仲が良いからなのかな？」

「さてさてどうでしょうねー？」

メルランは先ほどからだいぶ落ち着いた様子で会話が成り立つようになった。まだ少しだけ躁気味ではあるけれど気にならない範囲だろう。

「それにしてもお友達さんはルナサちゃんみたいなことが出来るのですね」

「ルナサさんみたいと言うと？」

「他人の気持ちを落ち着けることなのです」

「そうなのですか？」

ルナサに話を振ればコクリと頷きが帰ってくる。

「あははは、まだまだリリカちゃんが普段通りに戻ったばかりなのでルナサちゃんはダウンー気味なのです。私はお友達さんの能力のおかげでだいぶ普段通りに引き戻されましたー」

「すぐにとはならないけど少ししたら姉さんも会話をするくらいにはなると思うよ」

「でもでも、リリカちゃんが初対面の人にすぐに懐いた理由が分かりましたね。ルナサ

姉さんと能力で重なる部分があったから雰囲気のような物が似ていたのですねー」

「なるほど、そういうこともあるんですね」

「時と場合によると思うよ。湖畔であった時は気が付かなかつたけれども自然と親近感を感じていたな。でも冥界であった時は腹立ったもん…いや、実際には当てられなかつただけだね」

「本当にごめんね。改めて言われると反省する事ばかりで耳が痛いな」

「これに懲りたら反省しなさい」

リリカが腰に手を当ててお姉さんぶつて言う様に微笑ましさを覚える。

「そこで笑うなんて反省が足りなんじゃないの、涼介？」

「違うよ、思い出してよかつたなって思っていたのさ。だつて忘れていたらこうやつて今みたいに話せていないからね」

「もう、そうやつて素直に言われると照れるなあ…」

「そうだ、せっかくだからお酒でも飲もうか」

「わーい飲みます飲みます!!」

「ちよちよ、お姉ちゃんがつつきすぎ」

カウンターから身を乗り出してくるメルランの勢いに押されながらも涼介は笑みをこぼす。メルランを止めようとリリカがメルランの身体を掴むもあまり意味はなして

いない。これは早く出さないとカップが割れそうだと思い、涼介は背後の棚から一つの酒瓶を取り出す。

「はい、これはおすすすめだよ」

「らくしゅ落酒？」

「うーん、初めてみるかもかも？」

「そうだね、これは最近できた新作だからね」

「ほうほうほうほういいですいいですすばらしいです!!」

メルランの瞳に期待が宿り、気分躁が入り始めたのか高揚がうかがえる。リリカもメルランを止めようと服を掴んでいるが視線はお酒に向いている。ルナサもどこかアソビニユイさを醸し出しているが口元が僅かに綻んでいる。その様子を確認して涼介も口元に笑みが浮かぶ。

——幻想の少女達は皆酒が好きだなあ

やはり長命な妖怪が多いためか気軽に楽しくなれる酒と言う文化が非常に発達している、涼介は幻想郷に来てから常々思っていた。

「これは私が里の酒造と協力して作ったお酒だよ。名前の由来は不純物を私の能力で落

としているからだね。米の甘みは落とさず、酒精も落としていない。だから甘口でかなり酒精の強いお酒だよ。不純物もないから口当たりもいいし、大妖怪のお墨付きだね」

涼介が解説してグラスに酒を注げば皆の期待が一樣に高まる。誰かにその一杯目を渡す事なく残り三つも用意する。四杯のグラスを準備するとそれぞれ前に供する。

「まだまだ、お代わりはあるからね」

「ふっふっふ飲みつくしてやりますよ」

「涼介が作ったお酒かあ、楽しみ」

「二人とも運ぶのは嫌よ」

皆がそれぞれ口に出す。

「さあ、何に乾杯する？」

「んー……」

「はい！はい！はい！」

「うるさいメルラン」

「なんでしようか、メルランさん？」

「お友達に乾杯したいです!!」

「ではそれで行きましょう。皆様お手にグラスを」

涼介が音頭を取りグラスを皆が手に取る。涼介は皆が手に持つのを確認すると一度

頷く。

「新しい友人に」

「『乾杯』」

チンと四人のグラスがぶつかり、ガラスが打ち合う高い音が鳴る。四人が四人ともグラスを口元で傾ける。涼介とルナサはグラスを軽く傾け、酒を口の中で転がし風味を楽しむ。メルランとリリカはグラスの中身を一気に煽る。酒の飲み方一つとっても性格が出ている。涼介はすかさず空いた二人のグラスに酒を注ぐ。

——これは瓶が空きそうだな

メルランとリリカの勢いに苦笑しながらも、二人の幸せそうな顔を見るとついつい酒を注いでしまう。そんな自分に気が付くとやはり記憶を取り戻してよかった、幸せだなあと涼介は思う。空いてしまう前に次を用意しておこうと、作った時に分けてもらった落酒を戸棚からさらに取り出す。四人の酒盛りはまだまだ続く。

「ああ、もうだらしない」

「お姉ちゃんしていませんね」

夜もだいぶ更けてきて、酒盛りを始めてからかなり時間が経過した。メルランとリリカはすでに酔いつぶれている。飲み方の違いが今起きている者と酔いつぶれている者を分けたのだろう。椅子をつなげた簡易の寢床でリリカとメルランが幸せそうに眠っている。今は涼介とルナサが時折舐めるように酒を口に運び落ち着いた雰囲気話している。

「はああ、もう全く」

口では不満を漏らしながらも二人に向ける視線は優しい。

「ルナサさんもだいぶ口数が増えましたね」

「お酒も入って、リリカも平静に戻ってだいぶたったから」

「その節は大変ご迷惑をおかけしました」

「気にしなくていい。あれは運が悪かっただけ」

ルナサの返答は素っ気ない。しかし、嫌われているとかではなくこれが彼女の気質な

のだと涼介は短い時間の中で察している。互いに静かなのが苦痛でない為に静かに酒を傾ける時間が続く。ルナサのグラスが空き涼介が新たな酒を注ぐ。トクトクと酒瓶から酒がグラスに注がれる音が静かな店内に響く。ルナサがそれを静かに眺め、そそぎ終わったグラスをしばらく見つめた後、唐突に口を開く。

「貴方、私たちの妹が亡くなっている事をリリカから聞いているね」

「……はい、聞いています」

「そう」

ルナサがグラスを手にとって三分の一ほどを流し込む。

「あの時の言葉はその妹さんのものなのですか？」

「そう。そして、その子は私たちの妹で創造主」

「創造主ですか？」

突然の内容に涼介が首をかしげる。

「レイラって言って、家族を失ってしまった女の子だった」

涼介は何も答えずルナサに視線を固定する。

「マジックアイテムの力と魔法を用いて私たち三人を作った。自らの三人の姉を模して」

「それは……」

「途方もない話。三体もの魔法生物ホルターガイストを作り出し、それらに能力まで持たせてみせた」
「……………」

能力を持った魔法生物を作る。それは本当に途方もない話だろう。世界に直接干渉する力を与える。それは神をも超える業わざと言える。想像を絶する話に涼介は言葉を失う。

「ふふ」

涼介の絶句した顔に機嫌よさげに笑いを漏らす。

「だから創造主。でも、私たちはレイラと姉妹の様に接した。レイラもそれを望んで私たちも応えた。けれど、レイラの本物の姉の様に接しようとした私たちにレイラは、貴女達の姿は確かに姉を模して作ったけれど貴女達は貴女達として生きてと言われた」

「どんな心境だったんでしょね」

「分からない。でも本心からの言葉だったのは分かる。それからは本当に楽しく四人で暮らした、レイラが亡くなるまでの間」

「……本当に良い妹さんでしたね」

「ええ、本当に自慢の妹。まあそんな経緯があるから私たちは三人でありながら一つの存在でもある」

「だから、他の姉妹の変調が影響を及ぼすのですね」

「そう」

「どうしてその話を私に？」

涼介はルナサの話が終わったことを察して、疑問に思っていたことを口にする。ルナサは涼介の言葉に苦笑いを浮かべ酒をまた煽り、口を開く。

「リリカの姉としてのお節介かな」

「それは？」

「長女の私は何をやっても優秀な優等生タイプで一番力が強い。次女のメルランはちよつと変ったタイプで魔法の力は強いけど使い道を誤る抜けたところがある。そしてリリカは三女として作られた。要領がよくて誰とでも触れ合えるそんな性格。でも、本心から他人とは距離が詰められなかった。他人に合わせて誰とでも付き合える、四姉妹以外の人には心を開かないそんな子」

ルナサの視線がリリカに向く。

「でも貴方は違った。リリカは貴方の事で私たちに不調が出るくらい悩み、本気で激して鬨みに挑むくらい本気だった」

「それは、私の能力の所為ですね」

「その通り」

「すみません、心を惑わ——」

「責めていない。むしろ感謝している」

涼介の謝罪の言葉をルナサが断ち切る。

「内に籠り気味なリリカが外を向いた、これは良い事。だから貴方には感謝しているし、これからもリリカの友達でいて欲しい。そして、この子が悩んでいる時は支えてあげて。私たちはつながっているからこそ一緒に倒れてしまう。だから貴方に話をした」

ルナサの熱いぐらい真剣な眼差しが涼介を射抜く。

「リリカは私の大事な友人です。だから……私は出来ることを精一杯します」

「ありがとう」

ルナサがニヤリと笑ってグラスを空ける。涼介が酒を空いたグラスに注ぎながら口を開く。

「ルナサさんとメルランさんも、いつでもここに休みに来てください」

ルナサが一瞬きよんとする。リリカの話をしているのに何故自分たちをと。

「私とメルランは大丈夫。私たちはリリカより強く作られているから、心も力も」

「そうじゃありません。友達の家族も大事にしたいだけですよ」

「ああ、貴方がリリカの友達になってくれて良かった」

「本当に良いお姉さんですね」

「うらやましい？」

「そうですね、私もダメなときに蹴り上げてくれるような姉が欲しいですね」

「貴方の姉は大変そう」

「ルナサさんが匙を投げるとなると、幻想郷では見つからなさそうですね」

「見つかるといいね」

「姉が見つかるというのも変な話ですけどね」

二人してメルラン達を起こさない様に小さな笑い声をあげる。

「ねえ、貴方なら私のソロ演奏を聴けると思うのだけれどもしよかつたら聞いてくれるかい？ソロで演奏するのも好きだけど聞いてくれる相手がいない」

「そうなのですか？リリカの演奏しか聞いたことが無いのでルナサさんの正確な力量は分かりませんが一緒に楽団を組んでいるなら近い物だと思うのですけれど？」

「私の能力の所為なの」

「能力ですか？」

「私は音に鬱を込められる。演奏すれば抑えてもそれは混じってしまふ。これは能力を持つているがゆえに拭えないもの」

「能力の精度を鍛えてもでしょうか？」

「そう。能力は恩恵を与えてくれるけどそれに伴う害もあることが有る。私たちは作られた存在に能力が付加されたある種歪ともいえるゆえにそれが顕著。性格や気分はバ

ランスが崩れれば強く能力に惹かれ、音にもそれが混ざる」

「では、私も?」

「何かあるかもしれない。それが何か私には解らないけど」

「そう、ですか。ありがとうございます、教えてください」

「別にかまわない。それで話を戻すけど、鬱の音だけで聞くのは良くないから私はソロで聞かせる相手がこの二人しかない。でも、似た所もある貴方なら」

「そうでしたか。それでは是非聞かせてください」

涼介はグラスを空けると扉に向かう。外はもう月がとつくに顔を出しており、時折吹く風が酒で火照った身体をさまざま気持ちがいい。カランカランと背後で音がしてルナサが出てくる。

「気分が落ち込み過ぎたら言って、やめるから」

「大丈夫だと思えますよ」

「軽視はだめ。私の音色は妖怪を殺す」

涼介の心臓がドキリと跳ねる。似た所のある能力で妖怪を殺せる。苦い記憶を刺激される。

「どうやってですか?」

「妖怪は精神に強く比重を置いている。私の音を長く深く聞きすぎてしまうと精神が活

動をやめてしまつて死に至る」

「そういつた事で妖怪が死ぬのですか？」

「可能性の話。でも、実際妖怪は精神の活動が鈍れば死ぬ。それは妖怪にとつて寿命の様な物。だから妖怪は退屈を嫌う、刺激がないと精神が鈍化してしまうから」

「退屈は妖怪を殺す、そういつた理由だったのですね」

「そう」

「でも、安心してください。私の能力は落す事ですが、応用すれば落とさないことが出来ます。まあ、あげることはできないのですけれどね」

涼介はそう言つて最後の所でおどけて見せる。ルナサは涼介の態度に笑みを見せると、店から少し離れた所でヴァイオリンを自らの手で構える。涼介は近くの地面に腰をおろし、ルナサを見つめる。演奏が始まる。どこか物悲しく、それでいて包んでくれるような安心感を覚えさせるルナサの演奏に酔いしれる。瞳を閉じて、耳に意識を集中して演奏に身を任せる。

——ああ、贅沢だ

——私の為だけのソロライブとは

涼介の口元に自然と笑みが浮かぶ。ルナサも涼介の様子に安心し、演奏を続ける。誰も止めることのない、たった一人の演奏者とたった一人の観客による月下の演奏会は酔いつぶれた二人が目をさまし、演奏に混ざるまで続く。涼介の為の演奏と、ルナサの為の観客。幻想の音色が夜の空へと溶けていく。

それから桃源亭での夜間営業では、時折プリズムリバーの姉妹の内の誰かのソロライブが開かれる。そこにはルナサもおり、店内での演奏時、涼介が観客たちの気分が落ち込みすぎない様に配慮する。ルナサとは逆で音に躁がこもるメルランの演奏も同様に、気分が盛り上がり過ぎない様に適度に落とす。涼介が姉二人に対してそのような手助けをすることで、リリカが一人頬を膨らました話もあるがそれはまた別の機会に語られることが有るのかもしれない。

お悩み相談に供する三十杯目

積もり積もった雪も、もうだいぶ前には見る事が出来なくなつた。暖かな陽氣の中、楽しげに妖精たちが空を舞う。視界の端でそれらを見ながら、今日も今日とて門番にいそしむ美鈴に挨拶をする。

「こんにちは、美鈴さん」

「はい、こんにちは珈琲屋さん」

「もうすっかりその名前が定着していますね」

「ふふ、涼介さんが来ると差し入れに珈琲とお菓子が来ますからね」

「確かにその通りですね。では、今日のおやつは楽しみにしててくださいね」

「おお？珍しいですね、涼介さんがそういう事を言うのは」

「あれ、そうですか？」

涼介はそう言つてとぼけてみせる。今日は以前に咲夜が漏らしていた苺の処分の手伝いに来ている。自分で作った苺がおやつで出てくるのならば美鈴も嬉しかろうと思いついつい言葉が涼介の口をついてしまう。けれども、せっかくだから出す時までには内緒にしようとそれ以上説明することなく笑みを浮かべる。

「あ、悪そうな笑顔をしていますね」

「紅魔館のお客としてはふさわしいかと思えますよ」

「むむ、言う様になりましたね」

「いつも美鈴さんにはしてやられていますからね」

「涼介さんは落ち着いて見せているのに隙だらけですからね」

「さすが武術の達人」

「それなら涼介さんは話術の達人さんですかね」

「そう在れたらいいのですが、幻想郷の皆さんは誰もかれ弁が立ちますから」

涼介の顔に苦笑いが浮かぶ。思い返されるのは幽香やアリス、紫やパチュリー、そして目の前の美鈴もその一人だ。今の所、涼介は眼前の門番に勝てた覚えがない。妹紅に言わせれば不利な話題で闘うからだ、と言われそうだと内心で苦笑する。

「どうやら私も弁が立つ一人に数えられていそうですね」

涼介の視線から美鈴が察し良く気が付く。こういう良く気の付くところが美鈴の手ごわさの要因の一つなのだろうと涼介は察する。これが気を使う程度の能力かなどと馬鹿なことを考えながら涼介は口を開く。

「ええ、いつも門前払いで勝負の土俵まで立てていないですからね」

「これが悪魔の門を守る私の実力ですよ、ふふん」

「胸を張つても可愛いだけですよ」

「まったく相変わらず軽いお口ですね」

美鈴がメツとでもするように上体を乗り出し、指で涼介の額を軽くつつく。傍目から見れば何気ない、ともすれば微笑ましい光景。しかし、涼介は内心で舌を巻く。

——完全に意識の間を取られている

ただのじゃれ合いと言えどもそれまでだが、最近真面目に藍や妖夢から自衛のための稽古を始めたからこそ気が付く。額を突かれるまでまるで気が付かなかつた。藍に言われた絶対に勝てないという言葉を改めて実感する。

「これは失敬」

突かれた額を反射的に抑え、咄嗟に短い言葉が出る。

「ふふふ。最近体を鍛え始めたみたいですが、まだまだですね」

「これは先が長そうだ」

「どちらが、ですか？」

美鈴の顔に浮かぶのは無邪気な笑顔。

「どちらもです」

「要努力ですね」

「がんばります」

「では、恒例の言葉による門前払いをしてからお客様を中へと案内いたしましたでしょう」

美鈴がいつもの様に口元に笑みを作る。紅魔館の住人特有のいじめっ子の様なその笑顔に涼介の顔がひきつる。心当たりが明確に浮かぶ。

「これから入るのに門前払いはやめましょうよ」

「門の高さを知る為ですよ。いつか突破してくれると信じていますね」

「ああ、もう好きにして下さい」

美鈴が涼介の白旗にクスクスと笑みをこぼし、その蠱惑的に歪められた口を開く。

「それでは、こほん……涼介さんは咲夜さんのおでこにチューしたそうですね」

先ほどのおでこへのタツチは、涼介の咲夜への行いを揶揄した美鈴の悪戯心であった。美鈴が楽しげに視線を先ほど突いたおでこに向けていることから涼介はそのように察する。そこに来ての美鈴の追い打ちに涼介はせめてもの抵抗と口を開く。しかし、その声は弱弱しく覇気がない。

「ああもうなんで少し幼い表現なんですか？」

「それはもちろん……」

「もちろん？」

「これからの成長に期待してです」

美鈴の回答に涼介はとうとう天を仰いでしまう。

う
——ああ、一体この館の主人といい、目の前の門番といい一体何を望んでいるのだろ

う
答えは誰からも帰ってこない。迎えに来た小悪魔に連れられ涼介は満足した美鈴に見送られる。

「お兄ちゃん、今日はなんかもうすでに疲れているみたいけどどうしたの?」

背中にフランドールを張り付け、涼介は台所を目指しながら紅魔館の廊下を歩く。

「美鈴さんにいつもの様に苛められてね」

「お兄ちゃんっていつも美鈴にやり込められているよね」

「何がいけないんだらうか?」

「たぶん日ごろの行いだと思うよ」

「……どうしてだい?」

フランドールの無邪気ながらも心を抉る言葉に涼介は落ち込みながらも聞き返す。

「美鈴はそういう切り口が好きなんだよね。気で気配とか人の動きも詳しく探れるみたいだから用心しないと。それにお兄ちゃん良く新聞に載っているし」

「あの天狗の筆をいつか折っておかないとなあ」

「ふふ、今回の異変でも大変だったみたいね。お兄ちゃんの事は前の時みたいにはかしてあつたけど咲夜から聞いたよー」

「もう、何を話しているのかを聞くのも怖いなあ」

「それは後ろ暗い所があるからだよ」

「もう記憶が無かった時の私は別人だと思ふ事にしよう。そうしよう」

「お兄ちゃんが忘れても、みんなが話題にするから意味ないと思うなあ」

「まさにその通り」

涼介のため息が廊下に消える。二人でダラダラと話しているとようやくやく目的地の台所へとたどり着く。二人して中に入ると咲夜が苺の入った籠を片手に待っている。

「遊びに来たよ、紅茶の御嬢さん」

「お待ちしておりました、珈琲の君」

今日も今日とてじゃれ合う様な挨拶をする。

「お招きに預かりお邪魔させてもらったよ、咲夜さん」

「今日は妹様もご一緒なのですね、涼介さん」

「うん、さつき小悪魔に案内されているお兄ちゃんに会って、案内を変わって貰ったの」

「小悪魔はパチュリーの所に戻ったね。おやつ楽しみにしています、だそうです」

「美味しい物を作らないとすね」

「味見は私にお任せ!!」

「んー……せつかくだから今日はフランも一緒に作らないかい?」

「涼介さん?」

「三人で作るのもきつと楽しいよ」

涼介はそう言つて笑いかける。実際、フランドールに色々体験してもらおうという考えもあるが、涼介自身が僅かながら気まずさを覚えている所もある。そのために出た提案だ。

「どうする? フランが決めていいよ」

「んー」

首を横に向け、間近にあるフランドールを見ながら問い掛ける。フランドールは涼介の目を探る様に覗き込みながら考える。涼介はその様子に心の中を見透かされている気がする。しばらく悩むフランドールと涼介が見つめ合う。不意にフランドールが視線を外し、咲夜へと向ける。

「うん、いいよ。私やりたい」

「よろしいのですか？食事の用意などは私どもの仕事ですが」

「だからだよ。咲夜が普段どうやってご飯を作っているとか知りたいの。それに色々やってみないと何が好きで嫌いかわからないままだもん。私は自分の世界をもっと広げたいの」

フランドールの背中がパタパタと揺れる。フランドールのまつすぐな言葉に涼介と咲夜は笑みがこぼれる。知らない間にフランドールもまた一段と成長しているようだ。涼介は嬉しくなる。そして、自分も負けない様に変わっていかないといけないと思わされる。

「それじゃあ、新しい体験を始めようか」

涼介が台所の中へと足をを進める。フランドールの人生初の料理体験が始まる。

「え？え？こんなに砂糖入れて大丈夫なの、お兄ちゃん!？」

「これで大丈夫なのですよ、妹様」

「血糖値がすごそう」

「どこでそんな言葉を覚えてきたんだい、フラン？」

「パチユリーが言ってたよ」

「沸騰してきましたね、涼介さん」

「はい、レモン汁です」

「ありがとうございます。これから三十分ですね。はい、経ちました」

「咲夜さん、やっぱりその使い方が便利ですね」

「咲夜は即席で年代物のワインも作れるのよ」

「はあ、うらやましいなあ」

「あ、もう冷めたので瓶に詰めちゃいましょう」

「なんで粉なのに網でふるうの？」

「小さな塊やだまをなくして、粉自体にも空気を含ませるためだよ」

「そうするとふんわりと焼き上がるのですよ、妹様」

「ふうん、手間がかかっているんだね」

「食べてくれる人に美味しく食べて貰うためのひと手間だよ」

「食べてくれる人……」

「そうだよ。相手がいるからこういうひと手間も楽しい時間になるんだよ。フランは誰に食べて貰いたい？」

「……お姉さま」

「では、一緒にお嬢様も驚く物を作りましょう」

「……うん」

「あ、咲夜さん」

「バターなら常温に戻してありますよ」

「さすがですね」

「そこはかとない疎外感……」

「ん？どうかしたフラン？」

「なんでもなーい」

「せっかくですからクロテッドクリームも作りましょうか、涼介さん」

「そうですね、どうせなら作ってしましましょうか」

「どんなものなの？」

「バターみたいなものかな？たいした工程は無いから、さつくりと終わらせましょう」

「それでは、まず約八十度で生クリームを八時間温めました」

「咲夜の説明が終わる前に作業が終わっている……」

「室温になったこちらを八時間低温で保存します。涼介さん」

「はいはいっと、温度を落したよ」

「八時間経過させました」

「ん、いい出来ですね。さすが咲夜さん」

「涼介さんの温度調整も完璧でしたよ」

「もう、私いなくても良かったんじゃないかなあ……」

わいわいと賑やかに三人で料理を作った。たくさんある苺をジャムにする時に、入れた砂糖の量にフランドールが驚きに声を上げた。小麦をふるう事の意味に素朴な疑問を抱いた。誰かの為に何かを作る楽しさを学んだ。咲夜と涼介の息の合った手際にフランドールが思わず哀愁を感じさせる声で感想をこぼす。

「完成ですね」

「ねえねえ、味見していい?」

「そうだね。まずはスコーンだけで食べてみようかな」

焼きたてのイングリツシユスコーンを涼介が一つ手に取る。小さな円筒形の形をしたイギリス発祥の洋菓子。フランドールと咲夜も涼介につられて一つを手取る。手で焼きたてのスコーンを割ると、焼いた麦の香りがふんわりと香る。焼きたてのパンの様な食欲をそそる香りが三人の鼻をくすぐる。

「わあ、良い匂い」

「しつかり中まで焼けていますね」

「外側はさつくり、中はしつとり……うん、問題なさそうだね。それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

咲夜とフランドールの声がそろそろ。割ったスコーンを一口齧れば口の中で仄かに麦とバターの味が広がる。味を付けるようなものは入れていない為シンプルで素朴な味わい。口の中でほろほろと崩れる食感に涼介は思わず笑みを浮かべる。

「ううん、うん？」

「いい出来ですね、咲夜さん」

「そうですね」

「味が全然しないよ？」

「ふふ、これはこれでいいんだよ」

味の薄いスコーンにフランドールが首をかしげる。フランドールの様子に涼介はついつい笑みを深めてしまう。咲夜も涼介と同じようにフランドールの様子に微笑ましい気持ちになる。

「これはね、ジャムやクロテッドクリームを付けて食べるからともと味をほとんどつけていないんだよ」

「そうですね。いつも作っているスコーンはチョコやはちみつなどを入れて味を付けていますからね。今回の様なプレーンな物は作りませんね」

フランドールの視線が二人の説明で、ジャムとクロテッドクリームの入った瓶へと向けられる。ジツと二種類のスプレッスプレッ物物を見た後、何かを期待する様に視線を涼介たちに向ける。期待に満ちた視線で、羽を忙しなく動かしながら見上げてくるフランドールの愛らしさに思わず、涼介の表情に笑み浮かぶ。

「味見をするなら、ジャムとクリームも試さないかね」

フランドールに向かって涼介は茶目つ気を出してウインクする。フランドールは涼介の言動にばあつと顔を輝かせる。スコーンにスプレッドを塗る為のスプレッダーをフランドールは片手に持つとまずはジャムだけをスコーンに塗り食べ始める。

「んんん、甘くて……美味しい」

涼介は咲夜に視線を送り、咲夜も涼介の視線に気が付き視線を返す。涼介がカツプを傾ける仕草をしてみせる。咲夜は涼介のパンツマイムを見ると、考えるように人差し指を顎に当ててしばしの間制止する。咲夜の中で考えがまとまり言葉になる。

「久しぶりに腕前を見てあげましょう」

「畏まりました、先生」

咲夜の態度も普段通りで自分の気にしすぎだったかもしれないと内心で笑みを浮か

べ、涼介はパクパクとスコーンを食べ進めるフランドール後目にお湯を沸かし始める。先生に腕前を見てもらう為の自分たち用の紅茶と館の住民用の珈琲を準備する。

——さてさて、こちらは合格点が貰えるだろうか

涼介が今日一番の真剣な眼差しで茶葉を見つめる。

紅茶の準備が完了する。丁度その時、小悪魔が現れてレミリアが涼介だけを呼んでいるとのこと、三人で作ったお菓子と淹れたての紅茶を手に涼介はレミリアの元へと向かう。大図書館に向かうフランドールが感想をあとで教えてほしいと言っていたので、のちほど大図書館に向かわないといけないなど思いながら足を進める。咲夜はおやつをもって美鈴や妖精メイドたちに配りに向かう。屋根が突き出て庇となっているバルコニーにレミリアは待っていた。

「吸血鬼のレミリアさんが日の出ている時間にバルコニーにいると心配になりますね」「くく、相変わらず普通の反応だな。紅魔館では珍しいぞ」

「普通の喫茶店店主ですから」

「それはそれは、ふふ。それでは店主殿、私に一席用意してくれないか？」

「畏まりました、きつと本日の一席は素晴らしいものとなりますよ」

「ほう」

レミリアの視線が楽しげに細められる。涼介には珍しい、断言した自信のある物言いに好奇心を刺激される。

「それでは、本日のメニューは？」

「紅茶とスコーンでございます」

「ふむ？」

特に目立った点のないメニューにレミリアが首をかしげる。涼介はレミリアの狙い通りの反応に満足げな笑みを浮かべる。レミリアの前に紅茶とスコーン、二つのスプレッドが並べられる。

「それでは種明かしは実食中にといたしましょう。謎解きはお好きですか、お嬢様？」

「退屈が紛れることは大歓迎さ。それではいただくのでしょうか、涼介も座るといい」

「それでは一緒に緒させていただきます」

涼介も席に着くと茶会が始まる。一部をつぶさずに作ったジャムは果実としての元の形を残している苺がある。とろりとしたジャムで苺がコーティングされ、日の光を受けた表面がキラキラと煌めく。それはまるで、フランドールの羽に着いた宝石を連想さ

せる。もとよりそれを意識して果肉をつぶさずに入れてあるので、涼介はそれを確認すると満足げに笑みを浮かべジャムをスコーンに乗せる。

「果肉の形が意外としっかり残っているな」

「フランの羽の飾りみたいで綺麗でしょう?」

「なるほど、それを意識してのことか」

「はい、そのせいで塗るといふより乗せるという感じになってしまいました。これはこれで良い物ですよ」

「ふむ、確かに。食べた時に果汁が口の中で広がって中々に味わい深いな」

甘酸っぱい苺と砂糖の甘みで作られたジャムと味の薄いスコーンを一緒に食べるとバランスが整い、適度な甘さが口の中で広がる。スコーンのさつくりとした外側の食感を楽しませる。紅茶を飲めば口内の甘さを流し、もう一つと次のスコーンへと手がついといと伸びてしまう。味を変えたいくなれば、バターのように濃厚なクロステッドクリームを加えることで新たな味わいを楽しめる。スコーンに舌鼓を打ちながら涼介が口を開く。

「それではお嬢様、謎は解けましたか?」

「ふむ、さてはて」

涼介に問いを投げかけられ、食べる手をレミリアは止め自らの指を一舐めする。ペロリと、指先を舐める様が見かけの容姿に似合わず妖艶さを感じさせるのは妖怪のなせる技なのかと涼介は、レミリアの様子を眺めながら考える。

「ふむ、ジャムの見かけの事でもあるまいし……普段とは少し様子が違うようだが、味は変わらず美味なままだ……わからんな」

「それでは答え合わせといきましょうか。食べ終わる前にするのがよろしいかと思いつくので」

「ほう、食べ終わる前とわざわざ前置きするとは答えを聞くことスコーンとスプレッドでこれらの見方が変わるのか……作り手？」

レミリアの呟きに涼介が笑みを浮かべる。レミリアはそれを見て察する。自分が喜ぶ、素晴らしいと断言できる作り手がいると思いついた。

「まさか、フランが？」

「はい、本日は一緒に作りました。どうですか？ 答えを聞くといつそう素晴らしい見えてきませんか？」

レミリアは瞳を閉じ、目の前の幸せをかみしめる。フランドールの、妹の手作り料理を食べる機会があるなど想像だにできなかったと幸せが浮かぶ。目の前の友人に出会ってから、運命を見通す自分が何度も驚かされていると愉快さが浮かぶ。自身の胸の中で

生まれた幸福感をかみしめる。瞳を開けて、涼介を見る。

「私は良い友人を持ったな」

「そう面と向かって言われると照れますね」

「ふふ、それは良い事だ。素直に喜ばれるよりずっといい」

「まったく、この住人は相変わらずですね」

「いいや、変わっているさ。くくくく」

レミリアの言葉に涼介が首をかしげる。変わっているのだ。紅魔館は紅霧異変以来、それ以前よりずっと素晴らしい場所へと変わっている、そして今なお変わりつづけている。異変前より、昨日より、ずっとずっと素晴らしい今へと変わりつづけている。レミリアはそのことを自覚すると愉快気に笑いを漏らす。さて、今は妹の手料理を楽しみながら本題に入ろうと話題を変える。

「さて、謎の答えも分かりより楽しい一席とする前に本題へ入ろうか」

「ああ、私だけを呼んだのはそれが関係しているのですね」

「ああ、少し悩みがあつて相談しようと思つて、な」

「私にですか？パチュリーの方が知見も多く私よりよほど適任かと思いますが」

「これは紅魔館の者にできない相談なのだ」

レミリアが真剣な表情で涼介に語りかける。レミリアの思いつめた表情に涼介が背

筋を伸ばす。しかし、紅魔館の者達に話せない内容とはなんだろうかと不安な感情が胸をよぎる。

「涼介……」

「はい」

「フランが……」

「フランが？」

「アイツ、そういう所が小さいと不満を言ったそうなんだ」

まるでこの世の終わりという様な顔と表情でレミリアが告げる。涼介はレミリアの表情と告げられた内容の落差に思考が一瞬停止する。すぐさま、思考が再開するが浮かぶ内容はああ、レミリアさんもとうとう聞いたかという事であった。二人で遊ぶ機会も多い涼介はずっと前にフランドールが漏らした不満を聞いているのだ。

「フランに、フランに嫌われたかもしれない」

「ああ、つと……レミリアさん？」

「私は、私はどうすればいいのだろうか？」

神に救いを求めるような縋るレミリアの視線に涼介は頭痛を覚える。

「いや、普通にゲームすればいいのでは？」

「それでは姉の矜持が保てんではないか」

「ああ、確かにレミリアさんの盤上遊戯の腕前だとフラン相手は厳しいですよね」

「言うではないか、涼介だって似たようなものだろう」

「私は負けても気にしませんから」

「まったく根性のない」

「張る見栄が無いだけですよ」

「男ならもつと気概をみせろ」

「幻想の少女達が逞しすぎるんですよ」

涼介が笑いを漏らして述べれば、レミリアも苦笑する。

「まったく、我が友人ながら嘆かわしいな」

「これから要精進しますよ」

「くく、どうだかわからんものだ」

「それよりフランの話では？」

「ああ、そうだそうだ。それでどうすればいいだろうか、わざと負けるのは無しだぞ」

「うーん……そうですね」

涼介はレミリアのトンチの様な相談事に頭をひねる。上手い事落としどころを見つけれないものかと思いを巡らせる。そして、一つの考えが浮かぶ。根本的な解決にはならないが、もともと根本的な解決をするにはレミリアが能力を使わないという選択肢

だけなのだが本人が拒否している時点でそこは諦めた。だから、とりあえずの先延ばし案を提示する。

「それではこう考えましょう」

「話を聞こう」

「フランの反抗期を楽しみましょう」

「……ん？」

「今までそういった反抗もなかったでしょう？これもフランの成長の過程だと思えば楽しみましょう。初めての反抗期、中々可愛い物ではありませんか」

「ふむ……たしかに、そう考えれば……可愛くみえるが……」

「まだ、何か不安が？」

「そのまま反抗期が過ぎても嫌われたままになったら……私は生きていけないぞ!!」

レミリアの様子に涼介は思わず笑みが浮かぶ。随分と気安い仲に成れたものだろうれしくなる。初めて会った時のことなどもう遠い昔の様だと涼介は思う。クスクスと小さく笑い声を漏らす涼介にレミリアが不満げに眉を寄せる。

「涼介、私は真剣に悩んでいるのだぞ」

「あはは、大丈夫ですよ」

「根拠がない慰めは——」

「フランが言っていましたよ」

レミリアの言葉を遮り、涼介が告げる。

「今日、これらを作っている時にフランに誰に食べて貰いたいと聞いたらお姉様と答えていたんです。だから嫌うなどありませんよ」

レミリアの目が見開かれ、口元がにやけだす。

「それだけ気安く、二人の距離が近づいたのですよ」

「ふふ、そうかそうかそうだったのか。まったく涼介も人が悪いな。そんな隠し味を取っておくなど」

「でも素晴らしい味わいでしたでしょう?」

「宣言通り素晴らしい一席だった」

「それは良かった」

レミリアが手元のスコーンとスプレッドに視線を落とし、優しく微笑む。レミリアの目は目の前の料理を通してフランドールの姿を見つめる。

「これで愁いは無くなりましたか?」

「そうだな、と言いたいがあともう一つだけあるぞ」

「今度なんでしょうか?」

「今度は涼介にも関係のある話さ」

レミリアの言葉に涼介が眉を寄せる。美鈴にも門でからかわれたのだから美鈴の主であるレミリアが知らないはずはないのだ。だから、またからかわれるのかとついつい渋い顔をしてしまう。

「そう顔をしかめるな。確かに涼介が想像している話だが、少し真面目な話でもある」

「そうですか、お咎めならば幾らでもお受けします。記憶が無いときとはいえそれで許されていていい話でもないでしょう」

「まったく、相変わらずの愚直さだな。そう責める話でもないが、そうだな。涼介、お前は咲夜の事をどう思っている？」

レミリアが先ほどのフランドールの時とはまた違う真剣な表情で聞いてくる。レミリアの表情には見定めるような色合いが見て取れる。だから、涼介は真面目にはぐらかす事無く応える。

「私は、咲夜さんの事を得難い友人だと思っています」

「異性としては見ていないか？」

「そうですね……まったく言えば嘘となりますが、恋愛の対象としてはとらえておりません。彼女は私と比べると若すぎる」

咲夜の正確な年齢を涼介は知らないが、見た目から十代半ばだと予想している。二十四になる自分とは離れすぎていると、外の世界の価値観を持つ涼介は考える。無論、里

の中でそのくらいの歳の差をした夫婦を見かけ幻想郷では普通に起こり得ることだとも知ってはいるが、これは個人の考え方の問題だ。だからこそ涼介はレミリアに恋愛の対象になりえないと伝える。

「ふむ」

レミリアは涼介の答えを聞くと指でテーブルをトントンと叩きながら少しだけ言葉をためて口を開く。

「ではまずお前の勘違いを正そう」

「勘違いですか？」

「そう、勘違いだ。咲夜とお前の歳はそう離れておらん」

「それは……さすがに」

「咲夜が時を止める力を持っているのを知っているな？」

「はい、そのことは存じていますが……まさか？」

「そうだ、咲夜はただの人間と比べると老化が遅い。人間より寿命が長いのだ」

涼介は言葉を失う。驚きで止まりそうになる思考を動かし、浮かんだ疑問をぶつける。

「それにしては、少し初心すぎませんか？」

「ああ……それは生い立ちと私たちの責任だな」

「とうとうと?」

「咲夜は、今よりずっと幼い時に私が拾い育てたのだ。そして、咲夜の世界はこの紅魔館の中だけだった。だからそう言ったことに疎いし、私もそれでいいと思っていたが……まあ、私も色々とおつて考え方が変わったのだ」

レミリアはそういうと苦笑いをしてみせる。以前は人間など咲夜を除けば皆ゴミだと思っていた為に咲夜を誰かと契らせるつもりなどなかった。だからこそ、そういった方面の知識も経験も学ばせなかった。だが、霊夢や涼介と会って考えが変わったのだ。自分が認める様な者になら咲夜と一緒にしても良いと思う様になった。

「なるほど、だから咲夜さんはああいったバランスなのですね」

「どういったバランスかは知らんがまあそうだ。能力を持つと色々の影響があるのだ」

「それは、最近友人から聞きました。能力は益だけでなく害をもたらすこともあると」

「まあ、咲夜のもものは一概に害とは言えんがな。能力にはそういった側面もあれば持ち主を勝手に守ろうとする側面もある」

「守る、ですか?」

「ああ、そうだ守るのだ。例えば咲夜の場合だと寿命を延ばす事であり、私であればフラグが私を破壊する未来を避けさせていた。まだ能力を使いこなせないうちであればそういうった働き方をするのだ。無論、お前もそうだったぞ」

「私もですか?」

涼介には心当たりがなく首をかしげる。

「今は制御できているが、以前のお前は周囲の人物から自分への敵対的または悪意的な感情の多寡を落していた。覚えがないか?」

言われて納得する。涼介は外にいるときからずっと周囲の人間に安心感を与えていたのだから。

「その顔は自覚できたな。そういう事が能力にはあるのだ。意思があるとは思わんが、入れ物を無意識に自己防衛させようとしてもしているのだろうよ。まあ、今はそんな話ではなくてだな、咲夜のことだ」

「いえ、事情は理解しましたがそれですぐにはいそうですかと、変わるわけではありませんよ」

「当然だな。とりあえず知っておけと言うはなしだ。咲夜も憎からずお前の事は思っているみたいだしな」

「だから、時々くつつけようとするようなからかいをしていたのですか?」

「ああ、あれは遊び半分だ。今は以前より強くお前に、と言うかお前を咲夜とくつつけたいと思っている」

「どうして強くなっているんですか?」

レミリアの言葉に涼介が少しだけ疲れた声を出す。

「それが原因だよ」

「これですか？」

レミリアがそれと言つて涼介の周りに浮く人魂を指す。しかし、涼介は原因を示唆されても理由が分からず聞き返す。

「半人半霊と言うのは種族ではなく、体質らしいな」

「はい、そのように聞いています。靈魂が一部体外に出る特異体質を指すようです」

「そう、種族的には人間でありながらも寿命がただの人間よりもよほど長いと聞く」
「妖夢の祖父の話聞くに千年近くは生きられるそうですね」

「しかしお前は今、人と変わらない寿命だな？」

「はい、私も人魂が洩れ出ることで半人半霊と同じ体質となりました。しかし、きっかけに問題がありその分でプラスマイナス零と言ったところですね。むろん、靈の割合が増えればその限りではないでしょうが」

「そこなのだよ、涼介」

「……私に靈の割合を増やせと？」

「そう結論を急ぐな。私としては咲夜と同じ長さの寿命を持てる人間で、私の認めただ前だから咲夜とお前を契らせたいと考えている。しかし、結局は当人同士の問題なのだ

から、私が言うのは所詮冗談の域を出ないだろう」

「それでは何故私に今の話を」

「咲夜を子供ではなく一人の女として見るようにしたかったのだ。結果、お前が振られようと咲夜が振られようとそれは当人同士の問題ではあるが……出発地点に立てんのは咲夜が不憫でな。咲夜の主であり、親であり、家族である私のお節介さ。それとも先で恋仲に成った時に、寿命の問題で悩まないように先に愁いを失くしておいたのさ」

レミリアの話に涼介は一つ疑問が浮かびどうしても我慢が出来ず言葉にする。

「それは寿命の近い他の妖怪とかではだめなのでしょうか？咲夜さんが嫌とかいう話ではなく、レミリアさんは寿命の同じ人間と、半人半霊の種族が人間であることを念押ししていました。人間であることが重要なのですか？」

「妖怪と人間などが愛し合うべきではない」

「……なぜですか？」

「悲恋しか生まれんからだ。いくら咲夜の寿命が長くとも妖怪からすればそれでさえ短すぎる。寿命の違いという物は致命的だと私は考える。だから同じ寿命を手に入れられて、私も認めるお前に咲夜を託したいと思ってお節介をしているのだ」

レミリアの様子に、言葉に、声に、表情に、レミリアの全てから咲夜への愛情を感じ

る。涼介は思わず視線を逸らし、遠くに流れる雲を見ながらぼつりとつぶやく。

「……悪魔って、なんだったんでしょね」

「十分悪魔ではないか」

「どこがですか」

「お前はこれから頭を悩ませ続けるのだから、くくくく」

言われて気が付く。すでに様々なことを悩み始めていることに。だから恨みがしげな声が涼介から漏れ出る。

「この悪魔め……」

「お前のぞんざいな口調というのも味があつて良い物だな」

涼介の怨嗟さえ楽しいと笑いを漏らし、食欲のなくなつてしまつた涼介の分までレミアはペロリと平らげてしまう。レミアのその様子に、案外フランドールの料理を独り占めたいが為にわざわざこのタイミングで話しをしたのではないのだろうかと涼介は現実逃避を始める始末だ。茶会が終わり、レミアが去り際に額へのキスについてパチュリーがうまく論してくれたから気にするなと言つた事が涼介にとつての唯一の救いだろう。思い出した様に付け加えられた、パチュリーが以前言われていたことを忘れていたから礼は不要だと言つていたとの伝言が無ければもつと心が晴れやかであつた事であろう。咲夜との鬼ごつこの後にパチュリーに笑われた意味はなかつたよ

うだと涼介はため息をつき、レミリアは笑い声を残して去っていった。

「ああ、もう私にどうしろと言うんだ」

空へと向ける愚痴に答える声は無い。

紅魔館の住人と様々な遊戯をしながら一晩を明かし、翌朝涼介は帰路に着こうと門に立つ。見送りが図られた様に咲夜だけである事に当主への文句は尽きないが、それを今言っても仕方ないために涼介はそれを胸の内にする。

「それでは紅茶の御嬢さん、また会いましょう」

「はい、珈琲の君。お気をつけてください」

いつものやり取りをすれば自然と肩の力が抜けたことに涼介は気が付く。

——色々言われたけれど結局はなる様にしかならないのだ、それなら気にしていても仕方ない

そう考えると自然と笑みが浮かび、心が軽くなる。

「涼介さん？」

考えを巡らせて動きを見せない涼介に咲夜が首をかしげる。

「ああ大丈夫ですよ、咲夜さん。ただなる様になるしかない、ただ今を精一杯生きればいいと思っただけです」

「はあ？」

「これからの事なんてわかりません。だから今はこれでいいんです」

「ふふ、なんの話かよくわかりませんがスッキリされた様子で安心しました」

「そうですか？」

「ええ、昨晚お嬢様たちと一緒に皆で遊んでいた時の涼介さんはどこかの空で悩んでいるようでしたので。ですが、今は憑きものが落ちたようですよ」

「案外、能力で本当に落とされたのかもかもしれませんよ。憑き物を」

「あら、それでしたら私の友人に憑いた悪い物を退治しませんと。涼介さんは弱いですからね」

「ははは、ひどいなあ。私だって前よりかは強くなっているんですよ？」

「まだまだですよ」

「これは行動で示すしかありませんね」

「期待しています」

「ええ、任せてください」

「軽いですよ、信用できません」

「これは手厳しいなあ」

「日ごろの行いがいかに大切か、という事です」

「フランにも同じ様なことを言われましたね」

「ほら、気を付けないとだめですよ？」

仲良く二人で言葉を交わす。とても心地よく笑顔が絶えない言葉のやり取り。涼介はこのままずっと話していたいとも思うが、咲夜にも自分にも仕事があると会話を終わらせ今度こそ本当に別れを告げる。

「それではまた、今度はお店でお待ちしていますね」

「はい、また遊びに寄りますね」

手を振って涼介は紅魔館から離れていく。咲夜は涼介の姿が見えなくなるまで門に立ちその背を見送りつづける。

「私は……涼介さんの事をどう思っているんでしょうね……」

聞こえるはずのない涼介の背中に咲夜が言葉を投げる。少しだけ熱を持った気がする額に手を当て考える。

「ただなる様になる……先の事は分からない……本当にそうですね」

深呼吸を一つして意識を切り替える。紅魔館のメイド長へと、いつもの自分へと戻り咲夜も館へと消えていく。もう辺りは暑さが増してきて、夏が近い事を教えてくれる。

幻想の空で白い霧が広がる。

見つめた先は過去の世界
恋の話に供する三一杯目

カウンター席から少しだけ身を乗り出しながら、少女が涼介に語りかける。

「涼介さん、また今日も神社で宴会するみたいですよ。お父さんが、お酒が売れると喜んでいました」

「またなのかい？これで三回目じゃなかったかな？」

「そうですね、最初の一回が六日前で、三日前に二回目、今日で三回目ですね」

「はああ、今年は春が短かったからそのせいなのかな？」

「さあ、どうなのでしょうね？」

里で懇意にしている酒屋の主人の娘である綾香と涼介が桃源亭で話をしている。出てくる話題は神社での宴会だ。一回目と二回目の時も魔理沙に誘われはしたが、気が乗らず、神社も遠いので涼介は断っていた。

「また何かの異変とかなのでしようか？」

「お酒をみんなで集まって飲む異変かい？それは素敵だな」

「涼介さんザルですもんね」

「酒精を自分の中から落として出しているだけだよ」

「能力でしたっけ？ いいなあ」

「ははは、そうだねえ」

綾香のうらやむ声に涼介は分からない程度に気のない返事をする。能力も一長一短だと知った。人とは違う寿命を持つてしまう咲夜、誰にもソロの演奏を聴いてもらえなかったルナサ、持つ者の贅沢と言われるだろうが良い事ばかりでもないのだ。

「あつ、そろそろ帰らないと」

「そうだね、親方に怒られてしまうよ」

「もつとお話ししていたかったなあ」

「可愛い売り子の綾香ちゃんがいないと親方も困ってしまうよ」

「ふふ、可愛いだなんて嬉しいなあ」

「はい、後で食べられるようにと、親方たちに土産のクッキーだよ」

「わあ、ありがとうございます……あれ、でも私——」

「これはサービス、日ごろの心づけさ。綾香ちゃんは良く店に来てくれるし、親方も私の我が儘なんかを聞いてくれたからね」

「お父さん、しかめ面していましたけど本当は喜んでいたんですよ。夜に落酒飲みながら嬉しそうに話していました」

「それは良かった。じゃあ、親方にもまた無くなったら作りに行きますと伝えておいておくれ」

「はい、任せてください。きつとすぐに呼ばれますよ」

「幻想郷のみんなはお酒が好きだよね」

涼介のその言葉で綾香は笑みをこぼすと小さく手を振り帰路へとつく。カランカランと鈴が鳴り、扉が閉じる。綾香の使っていた食器類を下げ洗い始める。他の客も綾香の様に仕事に戻ってしまい、店はピークを過ぎていく。このまま後は気が向いた空飛ぶ少女たちが来るのを待つだけと涼介は気長に待つ。

「ああ、そうだ。せつかくだから起きてるか声をかけてみようかな」

涼介はそう言葉を漏らすと首にかけているレティの結晶の力を落している能力を解く。僅かにひんやりとする妖力が結晶から感じられるようになる。

「レティ？レティ、起きてるかな？」

『どうかされましたか？』

涼介の視線の先の空中に氷文字が現れる。涼介はレティの氷文字を確認すると笑みを浮かべる。

「起きてる様なら話し相手になって貰おうかなと思ってね」

『相変わらず呑気な性質は変わらないようですね』

「嫌だったかい？」

『構いませんわ。それに私も暇を持て余してましたので』

「それは良かった。もうそろそろ夏も本格的に始まるから、レティも外に出られなくて刺激が少ないよね」

『最近暑くて暑くて大変です。チルノを保冷剤代わりで抱き枕にしてしまいたい位ですね』

「それは……大ちゃんが寂しきで爆発しそうだなあ」

チルノを取られた大妖精が一人寂しげに落ち込んでいる様子がありありと思ひ浮かべられ涼介に苦笑が浮かぶ。

『私は外にも出られず時間も有り余っているのに、貴方が声を聞かせてくれないので一人寂しく氷像を眺めているのですよ』

「それは私も知っている人かい？」

レティのいう氷像とは過去に凍らされた人達のことである。その人達にも色々歴史があるらしく、以前の話し合いの際、涼介もこうやって保存したいと説明と共に何体か見せてもらった。もう死んでしまっている人たちが魂も閻魔の所に行った後の抜け殻の肉体である為、手を合わせるだけにとどめた彼らの中の誰かなのだろうか、レティに疑問を投げかける。

『この子は貴方には見せていない子ね』

「どんな人だったの？」

『そうねえ……貴方みたいな人だったわ』

「私みたい？」

『そう、貴方に似ている所のある人間だったのよ』

「どんな人だったんだい？」

レティの儂さを感じさせる細く薄い文字に涼介は興味を引かれる。氷の厚さや透明度で感情を表現するレティの感性にはいつも舌をまく。

『この子はね、今からずつとむか——』

——カランカラン

扉の鈴が鳴り、視線が文字を形作っている最中のレティの氷文字から来客へ向く。扉には買い物袋を抱えた妖夢がおり、驚愕をあらわにしている。

「冬妖怪!!」

妖夢がレティの妖気を感じ取り、靈気を発する。

『あら、半人前の剣士さんですね』

レテイの氷文字が先ほどの作りかけの文字列から変化して妖夢を挑発し、周囲に漏れ出る妖気が増す。からかう様なレテイと真剣な様子の妖夢を見比べ、涼介はそういえば妖夢にレテイと和解したことも、氷の結晶の話もしていないことに気がつく。というか、異変後の宴会から結界を修復しない事への対応やら、幽霊の脱走ブームなどで妖夢が忙しく話せていないのだ。

「また、涼介さんにちよっかいを出しているのですか!？」

『あら、私がどうしようと私の勝手ではないかしら、貴女に関係あるの?』

「涼介さんは私の友人です!害するのならば許しません!!」

『あら、あらあらあら。貴女もメイドの御嬢さんとはまた違っていいわね、氷像に興味はないかしら?』

「このおっ!!」

妖夢が買物袋をおろし、腰に差す剣に手を伸ばす。さすがにまずいと涼介は思い、声を上げる。

「妖夢、落ち着いて!レテイもあまりからかうものではないよ。悪戯がすぎるね」

涼介が能力を広げ、妖夢の靈気を落とすし、レテイの氷文字を作る以外の妖気も落とす。涼介のレテイにかける呆れを含んだ気安い声の調子に妖夢が目を白黒させる。

「え、涼介さん?どういう……」

「ああ、ごめんね妖夢。説明していなかったよね。座りなよ、何か飲みながら話そう」
「あ、はい」

『それなら私はひと眠りいたしますね。また二人きりでお話をしましょうね』

レティは二人きりを殊の外強調するような文字を作ると眠りに落ちるのか、浮かんでいる氷の文字がサラサラと端から崩れていく。文字がすべて消えると、レティの妖気もあたりから感じられなくなる。

「涼介さん、一体どういう事なのですか？」

「まあまあ、ひとまず何か飲み物でもどうかな？妖夢にはまだ私の淹れる珈琲は飲んでもらった事がないからね」

「え、つと……それでは」

妖夢はそう言つて釈然としないものを感じながら涼介に勧められお品書きに目を通す。妖夢の様子に涼介は相変わらず妖夢は生真面目だと笑みを深める。妖夢は妖夢で、先ほどの混乱がまだ抜けきらず、さらには見知らぬ飲み物に目が滑り視線がお品書きを行ったり来たりする。

「その、あの、涼介さんのお勧めで」

「ふふ、畏まりましたお客様。ちよつと待っていてね、妖夢」

涼介は少しだけ何を出そうかと頭をひねるも、視界の端に入った物で妖夢に供する一

杯を決める。

——喜んでくれるだろうか？

——不満そうな顔をしながらも美味しく飲んでくれそうだな

などと考えながら深めの焙煎豆をミルで挽き、温かいブラックコーヒーを淹れる。そしてそれを妖夢の前に提供する。

「あ、ありがとうございます。シンプルな珈琲ですか？」

「妖夢少し待って、これで完成ではないんだよ」

涼介はそう言って、足元の棚方お茶請けで出すお菓子を取り出す。白くてふわふわしたお菓子、マシユマロを取り出すとそれを五つ妖夢の目の前のカップに落とす。

「はい、妖夢。マシユマロコーヒーだよ。妖夢にピッタリだね」

涼介は笑みを浮かべて妖夢に告げる。妖夢と自分の周りに浮かぶ人魂をマシユマロに見立てた一品。妖夢はそのことに気が付くと少しだけ不満そうに口をとがらせる。

「私の半霊はマシユマロじゃありません……」

「知っているさ、だから半霊珈琲とは言わなかったじゃないか」

妖夢は涼介の様子に諦めたように肩を竦めると視線を目の前のカップに落とす。温

かい珈琲に浮かんでいるマシユマロがしゅわしゅわと小さく音を立てながら溶けている。黒い水面に白が広がっていく。その光景が少しだけ楽しく見えるから不思議だと妖夢は思う。なんだかんだと言って、目の前の友人の気心知れた遠慮の無い対応が、適当なものではなく自分になぞらえた一品を出してくれることが、たまらなく妖夢にとつては嬉しい。

「まったく、仕方ないのでこれで許してあげましょう」

「うれしそうな顔でそんな風に言われても説得力がないよ、妖夢」

「もう、本当に涼介さんは困った人です」

妖夢は口元の笑みを隠す様にカップを口に運ぶ。溶けたマシユマロの甘みと、まだマシユマロの溶けていない珈琲の苦味が口の中で混ざり、爽やかな甘みとなって広がる。溶けたマシユマロのホイップクリームのような口当たりも飲んでいて楽しめる。カップから口を離せば、先ほどとはまた違う理由で笑みが浮かぶ。涼介が妖夢を見てクスクスと笑いを漏らす。

「今度は何がそんなに面白いんですか？」

微笑ましい物を見て笑うというより面白い物を見て笑っている様な涼介の様子に妖夢が疑問の声を上げる。涼介は綺麗なお手拭を妖夢に差し出しながら口を開く。

「妖夢、お髭が付いているよ？」

妖夢が涼介の言葉で上唇に溶けたマシユマロの感触が僅かに有る事に気が付くと、顔にさっと赤みがさす。差し出されたおしぼりで口元を拭い、そのままそれで口元を隠したまま声を上げる。

「涼介さんは亡霊じゃなくなっても幽々子様みたいに悪戯好きです！亡霊かどうか何て関係ないじゃないですか!!」

涼介の笑い声と妖夢の怒った声が店の中に響く。楽しげな喧騒が店の外に漏れ出るほどの互いに遠慮のない空間が作られる。その後、妖夢は涼介に渡されたスプーンでマシユマロをしつかりと溶かし込みカプチーノ風にして珈琲を飲み進めていく。

「もう、本当にもうです」

「ごめんごめん。そんなに怒らないでよ、妖夢」

「本当に反省しているんですか？」

「しているよ、でも美味しかったでしょう？」

「それは……そうですけど」

「また、頼んでね」

「やっぱり反省していないじゃないですか！」

「今度は最初から混ぜれば大丈夫だと解ったじゃないか」

「もう、お稽古を再開した時に酷いですからね」

「お手柔らかに」

「知りません!!」

また稽古に時間を割いてくれると当たり前のように妖夢に言う妖夢に涼介は嬉しさがこみ上げる。忙しいのに、自分の為に時間を作ってくれる妖夢の気遣いが心地いい。

「心配してくれてありがとうね、妖夢」

「っ! ずるいですよ……急にしおらしくなるなんて……」

「はは、ごめんね。それとさつきも私の為にありがとう」

「そうです、それです。冬妖怪の気配がしましたけどなんだったんですか?」

「これさ」

涼介はそう言って、服の下にあるレティの氷結晶を妖夢に見せる。

「それはあの時の? 私が壊したはずでは……」

「異変の後にレティと話し合いをしてきてね、また貰ったのさ」

妖夢がレティの作った結晶に驚愕し目を見開く。思い出されるのは未熟な自分の蛮行だ。苦々しい思いが妖夢の口を重くする。涼介は妖夢の様子を察し言葉を重ねる。

「気にしないでと言っても妖夢は気にしてしまうのだろうね。でも、こう言うのは悪い

気がするけど私は斬られて良かったと思うんだ」

「涼介さん？」

「私はあの時、周りからみて完全に死んでいた。霊となり記憶が無くなったからこそ、死んで成仏した様に周囲から私の存在が失われていたと思う。だからこそ、自分が死んでしまえばどれだけ周りを傷つけるか、どれだけ大切に思ってくれていたか知ることが出来たんだ。そこまでされないかと解らない私は本当に馬鹿なのだろうね」

妖夢は涼介の話を静かに聞く。

「私はさ、幻想郷に店を構え、根を下ろしたつもりでいたんだ。でも、どこかで地に足がついていなかったんだらうね。けれど、私は妖夢のおかげで学ぶ機会を得られたんだ。だから感謝こそすれ恨んでなどいないよ」

「私も……私も、あの出来事で多くの事を学びました。祖父の言葉を考えるようになりました。あの出来事は私を大きく成長させてくれました」

「じゃあ、あれは良い出会いだったね。忘れられないインパクトもあったしね」

涼介は最後の言葉は軽い調子で言ってみせる。妖夢も心に引つかかっていた物の整理が少しだけつき笑みを浮かべる。忙しさを理由に心の底にしまいこんでいたわだかまりから目を逸らし、来店を避けていたのだ。これからは、もういつでも店にこれそうだと妖夢は思う。

「そうですね。それぐらいのインパクトのある出会い方でもしていないと、涼介さんから忘れられてしまいそうですからね」

「ひどいなあ、そんなことはないよ」

「だって、涼介さんの周りにはたくさんの人がいますから、私なんて埋もれてしまいません」

「妖夢も十分印象的だよ」

「もう、その笑顔だけで理由は聞きたくありません」

「残念」

互いに軽く笑いを漏らす。

「それでは、その氷の結晶についてお聞きしましょう。師匠として見逃させません」

「はてさて、お許しが出るように頑張らないとなあ」

「なるほど、それでしたら害と言うか敵対的なことは無いのですね」

「そうだね、死後に死体を渡すとは約束していないけれど死ねば能力も途切れて死体の場所も分かるから回収に来るのではないのかなあ」

「呑気ですね……」

「ほら、死ねばただの肉だから」

「達観しすぎだと思えますよ、涼介さんは」

「霊の存在を知り、さらには一度なつてしまったからね。肉体がただの器であり、霊に本質の魂があると思えてしまうんだ」

「普通はそういう風に考えないと思うのですが」

妖夢の顔に苦笑いが浮かぶ。別に、困っている訳でも、涼介の考えを苦々しく思っている訳ではない。ただ、涼介らしいと、仕方ない人だという思いが妖夢に苦笑させる。

「外から幻想郷にきて、里から離れた場所に店を開くくらいだから少しくらい周りとは違うさ」

「そういえばそうでしたね……涼介さんが幻想郷に来たきっかけはなんだったんですか？普通には迷い込んでしまったのですか？」

ふと頭に浮かんだ疑問が妖夢の口をつく。

「そうだねえ……」

涼介が考え込む様に言葉をためる。妖夢は涼介の答えを静かに待つ。自然と涼介の口が開く。以前は話そうと思えなかつた話が自然と口をつく。

「私は外の世界で一人の妖怪に出会ったんだよ」

「外の世界ですか？」

「そう。その子が妖怪なのを知ったのは幻想郷に来る前に、紫さんに誘われた時教えてもらったんだよ」

「その妖怪の方はどこにいらっしやるんですか？」

「死んでしまったよ」

「……どうしてですか？」

「私の能力が外の世界でその子の周りにあつた恐怖を奪つてしまつてね、衰弱死させてしまった。今思うと、妖怪から身を守ろうとする能力の自己防衛だったのかもしれないね」

「そう、ですか。どんな関係だったのですか？」

「私とその子、最初は仲が悪くてね。私の能力に本能的に危機感を覚えていたのだろう。だけど、私は敵意を抱かれることが初めてで興味を持つてしまつたんだよ。だから惹かれてしまつた」

「妖怪に惹かれた？」

「そうだよ。私は彼女に恋をした。何度も何度もすげなく振られたけど、最終的には私の粘り勝ちさ。能力で時間をかけて籠絡しただけかもしれないけどね」

寂しげに最後に言葉を涼介が呟く。その言葉に返す言葉を妖夢は見つけることが出来ず、それより前の言葉への返答をする。

「涼介さんが追いかけて続ける姿が想像できないですね。いつも自然体で、熱くなることは無さそうなのに」

「私も意外だったよ。でも実は私は熱いハートをしていたらしい」

涼介と妖夢は、涼介のその言葉にクスリと笑みを同時にこぼす。

「そんなこんなで恋人に成れたのだけれど、彼女は一年くらいすると弱り果てて寝た状態から起き上がる事も出来なくなってしまった。最後は私の腕の中で溶けるように消えてしまった」

「それは……」

「レミリアさんにも言われたんだ。妖怪と人間の恋は悲恋しか生まれないと。存在の違いはそんなにもどうしようもないものなのだろうか……」

「私は、私もそう思います」

「レミリアさんの様にかい？」

「はい」

妖夢が何か確信を持った強い瞳で涼介を見据える。

「それはどうしてかな、妖夢？」

「私の祖父は私と同じ体質でした。しかし、祖母は普通の人間だったそうです」

「寿命が違いすぎるね」

「はい。父が生まれたあとしばらくすると自分だけゆつくりと歳をとる事が祖父には耐え切れず、仕送りだけをし、家族を白玉楼からだしました。それでも時折顔を見に行っていたそうです。しかし、祖母が死ぬと祖父は、私は死んだものと思えと独り立ちした父に告げると連絡を絶つたそうです」

「それはどうしてだろうね」

「自分より絶対先に死ぬであろう息子夫婦や孫に耐えられなかったのだらうと幽々子様が言っていました」

「祖父ではなく、ゆゆさんから聞いたのかい？」

「祖父は口下手だったみたいです。私になまじ祖父の少ない言葉数でも、能力のおかげで剣術が上達してしまっていたので当時はそう思っではいなかったのです。けれど、祖父の残した言葉を考えるために幽々子様に祖父の話を聞いていると、ただ口下手な人だったのだと思う様になりました」

「妖夢も頑張っているんだね」

「はい、人となりが見えれば見えてくることも変わってくる。涼介さんの言うとおりですね」

妖夢の混じりけのない笑顔を眩しく感じる。ここにも、どんどんと前に踏み出している人がいる。涼介は自分も置いて行かれない様に頑張らないといけないと背中を押さ

れる心地を感じる。

「それですね、私は思ったんです。祖父の抱く孤独は、死別したあとは、つらい物であつたのであろうと。だから吸血鬼の言うことも分かるんです」

「そっか」

「私は晩年に生まれた子供で、生まれてすぐに半人半霊だと解り祖父に預けられました。父も、すぐに祖父を頼つたようです。寿命が違いすぎて一緒には生きられないと、泣きながら私を祖父に託したと聞いています。祖父の心境は複雑だつたと思います。家族が、孫が出来た歓喜。しかし、息子からその娘を取り上げてしまった後悔。そういった物が混ざつてしまったのだと思います。だからこそ、私との距離を測りかねてしまつた。そして、私と祖父の互いへの思い込みが生まれました」

「思い込み?」

「祖父は私に、少ない言葉でもなんでも察して、言葉の真意をくみ取つてくれると。私は祖父の言葉がすべて正しいと、含みなどないと思つていました。だから、そのすれ違いが祖父の出奔につながつたのだと思います。自分の死期をさとり、全てを私に伝えられたと祖父に思わせてしまい去らせてしまつたのです」

妖夢が自分の至らなさに視線を落とし、膝の上で手を握りこむ。子供だつたから、知らなかつたからと言つてしまえばそれまでだが、もつと出来ることが有つたのではない

のかと思ってしまう。過去はどうしようもないけれど、それでも考えてしまう事はやめられない。そして、妖夢は似たような気持ちで涼介がその妖怪に抱いているのだろうと思いつく。自分が出会わなければその妖怪は死ななかつたと涼介が考えていることに思いつく。似ている自分たちに少しだけ心が軽くなる。同じように足掻いている人がいることに一人じゃないと少しだけ強くなれた気がした。だから、顔をあげて言葉を紡ぐ、届いてほしいと言葉にする。

「話が少しそれてしまいましたね。それで、何がいいののかと言うとですね。種族や寿命の違いは簡単には超えられないという事だと思えます。だから、私も吸血鬼の様に思いました。ですが、私がまだまだ知らないだけかもしれないですけど、吸血鬼が言う様に悲恋だけだとは限らないかもしれないかもしれません。もちろん難しいと思いますが、それでも、私との出会いの様にいつかその妖怪の方との出会いが良い物だったと思えるようになるというですね、涼介さん」

妖夢が綺麗な笑顔で涼介を見つめて言葉を発する。涼介は妖夢の笑顔を眩しい物でも見るように少しだけ目を細める。

「ありがとう、妖夢」

「私も祖父の話を誰かにしたかったのでお相手ですよ。頑張りましょうね、お互いに」
妖夢の言葉に自分の後悔を見透かされていたことに涼介は気が付く。しかし、それが

嫌ではない。

「そうだね。一緒に悩もうか、妖夢」

「はい」

二人の顔に笑みが刻まれ、向かい合う。

「でも、そうになると妖夢はお婿さん探しが大変そうだね」

涼介が何気なく言葉を漏らす。妖夢の顔が赤く染まる。思い返されるのは幽々子から祖父の話をされた後に言われた言葉。

——妖夢、涼介さんとかお婿さんにどうかしら？ 仲もいいし、寿命も近くなれるから心配もないし

思い出したら途端に意識してきてしまう。幽々子との話も後も真つ赤になり散々からかわれたことが思い出され赤みに拍車がかかる。確かに気心知れていて、遠慮する事もなく本音を話すことができ信頼できる友人だ。涼介の遠慮の無さは、初めのうちに遠慮の一切ない亡霊の涼介と触れ合っていたことに起因したもので、それが今でも引き継がれているのである。それでも、互いに遠慮がないのは本当である。自分に非がある出会いだっていい出会いであったと本心から笑って包み込んでくれるような包容力も、

一緒にいると安心できる所も、からかいながらも自分の事を気にかけてくれる所も妖夢は好ましいと思っている。弱いのに無茶をする所も、危機感無く冬妖怪とまた会いに行く所も、心配だし不安になるけれど、それだって好意があるからこそだ。妖夢の意識が思考に吞まれて停止する。

「妖夢、大丈夫？顔真つ赤だよ」

頬にひんやりと何かが触れる感覚がして、意識が再び今へと戻る。周囲の状況を意識が認識すると、涼介の手が妖夢の頬を挟む様に添えられている。真剣な眼差しで心配そうにのぞきこんでくる涼介の様子に妖夢の混乱が加速する。

「あ、いや、だい、大丈夫です」

「いやそれでも様子が——」

「本当に！本当に何でもありません!!」

「でも体温が低いはずの半人半霊なのにすごく熱いよ?」

霊体が出ている分だけ死に近いいため妖夢や涼介は一般の人間と比べるとひんやりしている。妖夢と涼介であれば、涼介の方が温かいはずなのに今は妖夢の方が温かい。妖夢は涼介に指摘されると心臓がドキリと跳ねる。顔に手を添えられているために顔を逸らすこともできず、ますます顔に熱が集まる。

「わ、私！宴会の買い出し中に寄ったので!!失礼します!!」

ばつと立ち上がり買い物袋を抱える。懐から財布を取り出し確認することなく中の貨幣を掴むと叩きつける様に机に置く。

「あ、ちよつとよう——」

「すみません！長居しすぎました、失礼します!!」

つかつかと歩いてあつという間に扉を開ける。カランカランと鈴が鳴り、妖夢が外へと出ていく。

「ああ、もう！また来てね、妖夢!!」

涼介は止められないと察すると、ひとまず一言だけでも届けたいと扉が閉まるまでの僅かな間に言葉を発する。カランカランと扉が閉まり、妖夢の姿が見えなくなる。

「おつりはまた今度でいいか」

涼介は妖夢の変化の理由が分からず、ぼやきを一つこぼしながら頭を掻く。おつりの分の代価を紙袋に入れ、妖夢と名前を書いておく。

「やはり年頃の娘さんに結婚の話はまずいのもかもしれないな。あの反応を見るにゆゆさんに何かしら、からかわれた後の可能性もあるし……いや、からかわれた後なのだろうな。妖夢には悪い事をしてしまったな」

遠からず近からずな答えが出るも、それを正す者がこの場にはいないことは良い事であったのか、悪い事であったのかそれは神にも悪魔にも分からない。

「ああ、もう！また来てね、妖夢!!」

扉を出た妖夢の背後で涼介の声がした後、扉がカランカランと鈴を鳴らして閉じられる。また来てね、と言われ自然と口元が緩んでしまう自分を妖夢は自覚する。さらに妖夢は幽々子が消えた桜舞う冥界での出来事を思い出す。あの時、涼介は妖夢を見守り、背中を押してくれた。立ち止まってしまった自分に寄り添い、悩みを断ち切って前に進ませてくれた。店に来なかつたのは冷静になった涼介に斬つたことで距離を置かれるのが怖かつたのだと明確に自覚する。妖夢は自分が涼介の事を強く意識している事に気が付く。

——ああ、私……涼介さんに少しだけ惹かれ始めているのかもしれないなあ

暑さで火照る熱を冷まそうと、荷物を持って空へと飛び立つ。顔に手を当てて心配そうにのぞきこんでくる涼介を思い返すと火照りと共に笑顔が浮かぶ。のほほんと呑気にしながら意外と察しが良いのに、何故自分が赤くなっていたのか全く察していない涼介に妖夢はつつい文句を言いたくなる。でも、とある考えが妖夢の中に思い浮かぶ。

——もしかしたらまだ涼介さんは、外の妖怪に心を奪われているのかもしれない

そう考えると手強そうだと感じてしまう。まだまだ、涼介に対する思いは友愛の方が強く、恋までは到っていないと妖夢は思っている。時間はまだあるのだと、ゆっくり自分の歩幅で進もうと静かに思う。空で一度桃源亭を振り返る。

「ああ……忘れていた」

視界の遠くに神社へ向かう人影を見つけて妖夢が言葉を漏らす。

「でも今日は……今更戻れない、よね」

幹事の魔理沙に涼介を誘ってくるように頼まれていたのだが、入店直後から色々在り過ぎてすっかり忘れてしまっていた。今更戻るのはさすがに気が引けてしまい、妖夢は言い訳を口にする。

「涼介さんは欠席する、今日は来ない……うん、魔理沙にはそう伝えればいいか。もう二回欠席しているのだし大丈夫……大丈夫よ、妖夢」

生真面目な妖夢は自分に言い聞かせるように言葉を発する。視線の先の店にいてであろう涼介にちよつとだけ不満が洩れる。

「涼介さんの所為ですからね」

プイツと踵を返すと神社へと向かって今度こそ飛び立つ。次の宴会があれば涼介は来るだろうかと、先に思いをはせながら妖夢は桃源亭を離れていく。次の宴会は三日後となり涼介はまた参加しないが、そのことはまだ今の妖夢には知りようがない。

休肝日に供する三二杯目

妖夢の来店から六日が経ち、今日も今日とて宴会が有るらしいと涼介は常連の里の少女から聞いている。最近のハイペースな宴会の所為か空飛ぶ少女達の来店が減り、少しだけ寂しい心持ちながらも今日も今日とて涼介は店を開ける。

「最近の宴会のペースはどうしたのだろうね、ハル」

今日は外に散歩に行かず店内で微睡むハルに語りかける。しかし、眠気が強いのか、くわあとあくびを一度するだけでそれ以上の動きは見せない。ハルの様子に笑みをこぼすとそれ以上は言葉をかけることなく豆を挽く。自分用の一杯を用意するためコリコリと音をたててミルで豆を挽く。カランカランと鈴が鳴り来客を告げる。

「あら、閑散としているわね」

「君たちの間では人のいない時間に来て酷い事を言うのが流行っているのかい？でも君が来てくれてうれしいよ、アリス」

「一回死んでもその軽口は治らなかつたみたいね。馬鹿は死んでも治らないというのは本当の様ね」

「相変わらず手厳しいね。でも結局死んでいるのは一割だけで、その分は賢くなった自

負はあるよ」

「程度が知れそうな自負ね」

「それはどうだろうね」

涼介が笑つて見せれば、扉の前で腰に手を当てるアリスがやれやれと首を振つた後中へと足を踏み入れる。後ろには今日は上海だけが飛んでいて、蓬萊の姿が見えない。

「今日は蓬萊の姿が見えないね」

「蓬萊は今日、お留守番よ」

「へえ、じゃあ後で遊びに行こうかな」

「何する気よ、うちの子に」

「冗談冗談、眉間にしわが寄っているよ。美人が凄むと怖いから勘弁しておくれ」

「馬鹿な事を言っているからよ、まったく」

「それに君がいけないのに家まで行くわけがないじゃないか」

「……はあ、本当に誰かに刺されそうね」

「ふふ、残念ながらそういう意味ではないんだな」

「それならどういう意味かしら？」

「魔理沙がアリスの家は危険だから気を付けろと言っていたんだ。パチュリーの所にも

人を取り込む魔本があるし、アリスの所も家主がないのに押しかけようとは思わない
さっ」

「それは魔理沙が勝手に……ああ、もう……」

涼介の話を知るとアリスが眉間の皺をもむ様に手を当てる。頭を抱えるという普段の洗練されたアリスからすれば珍しい光景に涼介がクスクスと笑みをこぼす。

「アリスでも頭を抱える事があるんだね」

「憎らしい笑いね」

「初めて君をやり込めた気がするからね。一本開けたいくらいだよ」

「この不良店主。営業中に酒を飲もうだなんて」

「お客がいない店の店主だから仕方ないね」

「あら、今日の前にいるじゃない」

「これはこれは。失礼いたしました、お嬢様」

「まったく、天狗に告げ口してやろうかしら」

今度は涼介が頭を抱える番だ。帰ってきてから読むことになった文々。新聞で、アリスにイヤーマフラーの特注をした際のやり取りの内容を記事にされていたことが思い起こされる。元々は自分が約束を破り、非がある為に強く抗議もできず、うわさが消えるのをじっと待っていたのだ。アリスは涼介の姿を見ると溜飲を下げ、口を開く。

「私をやり込めようなんて百年早いわ」

「本当に幻想郷の飛ぶ少女達は手厳しいね」

「私をその括りで括らないで欲しいわね……」

「おや、どうしてかな？」

「私は巫女や黒白、他の妖怪達みたいに頭の中まで飛んでいないからよ」

「ははは、なるほど。君やパチュリーは確かに至極落ち着いているからね」

「さて、注文をしてもいいかしら」

「そうだね、ここでしつかり働いているところを見せて汚名を返上しないと」

「なんでもいいから落ち着けて、肝臓にやさしい珈琲を頂戴」

「……ん？」

アリスの注文内容に涼介が首をかしげる。彼女にしては珍しいと疑問が涼介の中に生まれる。いつもの彼女であれば涼介任せにせずにはパツと決めるからだ。涼介の態度にアリスが苦笑する。自分でもらしくない事が分かっているのだろう。アリスが補足する様に口を開く。

「……最近宴会が多くてね。そろそろ身体を労わろうかと思ったのよ」

「今日で五回目だったっけ？ そんなに頻繁に有るなら一回くらい休めばいいのに」

「そうね。ふふ、本当にそうよね」

「アリス？」

アリスが珍しく自嘲気味な笑いを漏らしそう口にする。涼介は今日のアリスは珍しい事だらけだなと思いつつも少しだけ心配になり労わる様な声が出る。

「いえ、貴方の言う事が至極もつともですね。まあ、私もそう思ったからここに来たのよ」
「宴会を休むために私の店へ？因果関係が分からない話だね」

「分からないなら分からないでいいのよ。それで店主さん、ご注文にあった商品はあるのかしら？」

「そうだね、思い当たるものはあるよ。ミルクなしか、ミルクたっぷり、どちらがいい？」
「今の気分はミルクたっぷりね」

「畏まりました、しばしお待ちください」

先ほど自分用に挽いておいた豆がある為、それを使いさつそく入れる。濃い目に抽出した珈琲を用意する。同じ割合のミルクを手鍋に入れ、はちみつとすりおろした生姜を投入して火にかけて混ぜる。混ぜたミルクを先に入れた珈琲と混ぜ合わせれば完成だ。

「はい、はちみつジンジャー・ラテになります」

「はちみつに生姜ねえ」

「どちらも二日酔いの時に良い物だよ。能力も使っているから気持ちも安らぐと思うし」

ね」

「まあ、貴方の事だから変なことは無いでしょう」

アリスはそう言うのとカップを傾ける。アリスの信頼の感情が少しだけこそばゆい。

「ん、美味しいわね。生姜の主張も強くなっていいアクセントになっているし、はちみつ
の甘さとミルクのおかげで飲みやすいわ」

「二日酔いによくて体にも優しい。ご注文に添えましたか、森の魔女殿？」

「ええ、素晴らしい出来だわ。ここにきて正解ね」

「それは嬉しい感想だね。どうやら汚名も返上でできそうだ」

「そうね、前言を取り消すわ。はああ……やつと人心地つけたわ」

本当にほっとしたような声をアリスが漏らす。来店してからのアリスの様子に涼介
はやはり心配の感情を抱いてしまう。

「本当にどうしたんだい、アリス。今日は様子が少し変だよ」

「酒に充てられたのかしらね」

「私には言えない話なのかな？」

アリスのはぐらかした様な答えに涼介が聞く。アリスは少しだけ考えるように沈黙
して珈琲を一口飲む。

「そうねえ……私としては言いたくないという答えかしら」

「言いたくない？」

「そう、言いたくないよ。私は貴方の事を友人と思っている。だからこそ話したくないのよ。私は貴方の性格を知っているからね」

「それは私が弱いからかな」

「そうね、否定はしないわ」

そう言われてしまえば涼介に言い返す言葉は無い。実際に店で待つという約束を反故にした過去がある為に涼介はアリスの言葉に反論できない。だから涼介は諦めて肩を竦めてみせる。

「悪いわね、涼介」

「構わないさ、アリス」

しばしの間沈黙が店内に落ちる。少しだけ居心地の悪い沈黙に、涼介が話題を変えようと口を開く。魔法使いであるアリスに聞きたい話もあったので涼介にとつてもちやうどいい。

「そういえばアリスは魔法使いという種族なのだよね」

「ええ、そうよ。もしあなたが魔法使いになりたいというなら諦めなさい、貴方の靈気量では捨虫捨食を修めるまでの魔道の研鑽は積めないわよ」

「そういう話ではないさ」

「あら、それは早とちりをごめんなさい」

「構わないさ、会話の流れでそう判断されても仕方ないからね」

「それでも、よ」

「それなら素直に、ありがとうと言っておこうかな。それで話と言うのは聞きたいことが有るんだよ」

「何かしら？」

アリスが興味深げに涼介を覗き込む。アリスの視線には隠しきれない好奇心が含まれており、魔法使いの知識欲を涼介は垣間見る。隣に浮かぶ上海も無機質な瞳を涼介に向けてくる。

「アリスが人から魔法使いになる時に何を考えていたのか気になってね」

「魔法使いになった時に？」

「ああ、そうさ。人の寿命を捨てて長き生を得る時に何を思ったのかと思つてね」

「ああ、そういう事ね」

アリスの視線が涼介の人魂に向けられる。すでに、半人半霊についても知識を有しているらしい。涼介は魔法使いという種族の勤勉さには舌を巻く。さらには、上海が涼介の人魂に近づきちよんちよんと突き始める始末だ。

「くすぐったいから出来ればやめてもらいたいかな」

「これはごめんなさい。それでね……私はもともと人間ではないのよ」
「……そうだったのかい？」

アリスの予想外の返答に涼介が目を丸くする。アリスは予想通りとでも言う様にクスクスと機嫌よさげに笑い声をあげる。

「世界は外とここ以外にも、たくさんあるのよ。私はその中の一つの出身で言うなれば異世界人とでもいうのかしら。それでも魔法使いになる事で寿命は延びているから、貴方の問いに答えるならば別に何も考えていなかったわ。しいて言うなら達成感かしら」
「達成感？」

「そう、魔道の深淵はとても深い。それこそまだまだ底もまったく見えないくらいにね。だから時間が欲しかった。魔法使いになったのはその手段であり、不老の寿命も目的ではなく手段よ。だから、ひとまず魔法使いになろうとして成れた時は適度な達成感を感じていたわね」

アリスはそう言いきって見せる。声にはまったく感情の揺れは無く、それが真実だと解る。涼介はそんなアリスが少しだけ恐ろしい。人間からすれば永劫に近い生を得ることをただの手段であり、それ以上の意味も価値もないと本心から言いきってしまうアリスの精神のありようが恐ろしいと感じる。知識欲の怪物、探究心の化け物、それが魔法使いの本質なのかもしれない。

「怖いかしら？」

「正直少しだけ怖いね」

「……貴方が怖がるなんて、それも冗談でないのに口にするなんて……初めて見るわね」

「そうかい？ 私はこれでも小心者だよ」

「どの口が言うのかしら」

「信用されていないね」

「小心者の人間は自分から異変に何て首を突っ込まないわよ」

「そうかもしれないね」

アリスが再びカップを傾けたため間が生まれる。

「それで、答えには満足いただけたかしら」

「そうだね。求めていた物ではないけれど勉強にはなったかな」

「それは良かったわ」

「感謝するよ」

「どういたしまして。そうだ、持ち帰りもお願いでできるかしら」

アリスがぱちんと指を鳴らすと上海の腕の中に水筒が一つ現れる。上海はその水筒を源介に渡す。

「同じものでいいかい？」

「ええ、それでお願ひ。豆は深煎りで、能力もたっぷり使つてね」
「珍しい注文だけど承つたよ」

涼介はアリスの水筒に詰める分の珈琲の準備を始める。準備が終われば、アリスもカップの珈琲を飲みほしており、水筒を受け取ると帰り支度を始める。上海がその小さな手で代価を涼介に渡し、扉で待つアリスの元へ戻つていく。

「ああ、最後に一ついいかしら」

「なんだい、アリス」

「寿命を延ばすならしつかり考えてすることね。種族を変えることも同じよ」

「まったくもつて君は怖いね」

「ふふ、当たり前よ。魔法使いも妖怪の一種なのだから」

「忠告、痛み入るよ」

「そう。人間から何かに変わつてしまえば、戻るのは至難よ。だから、よく考えて決めなさい」

アリスの親切な忠告に涼介は頷き肯定をしめす。アリスはそれを見て満足するとカランカランと鈴を鳴らして店から去つていく。外は薄暗くなり始め、幻想郷に夜が来ようとしている。

今日も今日とて誰も来ない夜間営業。宴会が三日おきに起きる為か中二日の宴会が無い日も誰も来ない日々が続いている。そろそろ、宴会に自分も参加して、夜間営業はひとまず休みにするべきかどうかを涼介が本格的に悩み始める。カランカランと来客を知らせる鈴の音に、思考の海に潜っている涼介の意識が浮上する。視線を向ければ紫色の服を着た親切な魔女、パチュリーがいた。

「やあ、パチュリーが店に来てくれるなんて初めてだね」

「そうね。いつもは貴方が来るものね」

「一体どういった風の吹き回しだい？」

「最近宴会が多すぎてね。身体を休めに来たのよ」

「昼にもアリスが同じようなことを言って来店していたね。魔法使いの間で流行っているのかな？それなら次はいよいよ魔理沙かもしれないね」

「ああ、アリスも来たのね……………なるほど、だから今日は来ていなかったのね」

「ん？なんだって、パチュリー？」

パチュリーの呟きの後半が聞こえなくて涼介が聞き直す。パチュリーは何でもないとでも言う様に手を軽く振るとカウンター席に着く。

「黒白はまだまだ魔法使いと言うには程遠いわよ」

「彼女は捨虫捨食の魔法を使うのかな」

「さあ、それは私には解らないわ。レミイに色々言われて悩んでいるみたいね」

「私にも思う所がある話だったからね」

「そう」

パチュリーの返答は素っ気ない。視線は店内を見回しており、始めてくる場所を興味深げに観察している。一通り観察すると視線が涼介に戻る。

「落ち着けていい店ね」

「それは嬉しい評価だね」

「特にその飾りが秀逸だね」

パチュリーが指し示すのは瓶に詰められている煎った珈琲豆だ。煎る深さごとにそれぞれ違う瓶に入れて保存してある。それがカウンターの上に飾ってある。持ち帰りや、お土産用にカウンターの隅にも同じような煎った豆が小さな瓶に詰められて置いてある。

「そうかい？喫茶店らしくていいってことかな」

「ふふ、そうね。雰囲気も出ていていいわよ」

どこか楽しげな雰囲気のパチュリーに涼介も笑みを深める。パチュリーの来店理由も同じであるならば目的となる商品も似たようなものなのかもしれないと涼介は思う。

「お客様、ご注文は酔い醒ましになって体にやさしいものですか？」

「ええ、それをお願い。出来れば飲み物は珈琲系をお願い」

「アリスもパチュリーも珈琲を好きになってくれたみたいで嬉しいよ」

「今回はそれだけではないけれどね」

「何か含みがあるのかな？それでミルクはたっぷりか、無し、どちらがいいですか？」

「そうね、色々含んでいるわ。ミルクは無しでお願いするわね」

「なるほどね。注文、了解いたしました」

涼介は豆を挽き一杯分の珈琲豆をドリップして淹れる。カップに淹れた珈琲におろした生姜とはちみつを加えて溶かす。

「はちみつしょうがコーヒーとなります」

「ジンジャーティーみたいなものかしら」

「そうだね、コンセプトは似ているだろうね」

「ん、美味しいわ」

「採点の程は？」

「今の状況も加味して優はあげられるわ」

「過去最高点だね。これは進級も安心だ」

「あら、他の科目も単位は取れているといいわね」

「それは私の頑張り次第かな」

「精進なさい」

パチュリーの言い方に藍を思い出し、涼介は笑いをこぼす。真面目でよく気の付く所は二人の共通点なのかもしれない。レミリアと紫、トップが自由奔放だと下にはしつかりとした人材が集まるのかもしれないと涼介は思う。しばらくはどちらも話さない静かな時間が流れる。いつもは小悪魔が元気に話すことが多いが二人きりの時は互いに沈黙になつて本を読むこともしばしばある。先ほどまではハルも寝てしまい誰もいなかった店内に、誰かがいて珈琲を飲んでいるそのことがこの上なく嬉しいと涼介は感じる。自分も一杯飲みたいと豆を挽き珈琲を淹れる。一口飲めば自然と口元に笑みが浮かぶ。

「あの時みたいに貴方は何も聞かないのね」

「そうだね」

「あの時から進歩がないと言う事かしら」

「意地が悪いね、その言い方は」

「そうかしら?」

「どうせ君の事だから聞かない理由くらい察しているのだろう」

「アリスに釘を刺されたのでしょうかね」

「ほら、やっぱり意地悪だね」

「ふふふ、ごめんなさい」

「それにあの時とは状況が違うさ」

「どう違うの？」

「あの時は渦中にいた。今は部外者」

涼介はそう言つて肩を竦めてみせる。

「渦中に飛び込むつもりはないのかしら？」

「冥界から戻った時に小言を言った君が進めるのかい」

涼介の顔に苦笑が浮かぶ。人魂をくつつけて紅魔館を訪れた時にこんこんと常識と節度、身の程についてのお小言をパチュリーからいただいている。苦笑する涼介にパチュリーが語りかける。

「あの時とは違うのではないの？」

「どう違うんだい？」

「貴方は抗う力を手にしたのではないの？」

「小さな種火だよ」

「成長するためには試練は避けて通れないと思うわ」

「今回の事がそうだと？」

「さあ、知らないわ」

あまりにも無責任に言い放つパチュリーに再び涼介は苦笑いを浮かべる。パチュリーはそんな様子など知らないと言っても言いたげにカップを傾ける。

「君はもつと過保護だと思っただよ」

「それは対象に寄るわ」

「私はもうその限りではないと」

「そうね。私は貴方の事を認めているのよ」

「そいつは光栄だね」

「だから貴方がどうするのかを見てみたいから勧めているのよ」

「これは毒りんごかも知れないね」

「知恵の実かも知れないわよ」

内容とは裏腹な気安いやり取りに思わず互いに笑みをこぼす。こういった言葉の応酬も幻想の少女達との付き合いの中での楽しさだと涼介は考えている。

「それでどうするのかしら？」

「そうだね……」

涼介は目の前の魔女の誘惑に乗るかどうか考える。終わらない冬の異変では力が足りず、心配をかけた。その出来事から学び、戦う力を手に入れた。しかし、戦えるだけ

だ、抗えるだけだ。けれど、ここまで突かれてしまえば知りたいたいという感情を抑えるのは涼介には難しい。能力で抑えることもできるが、することもなくパチュリーに向けて口を開く。

「今起こっていることは異変なのかい？」

「そうよ」

異変とは幻想郷中を巻き込む事件の事だ。そう断言されてしまえば涼介は欲求を完全に抑えられなくなる。

「今回の宴会が？」

「そうよ。誰かが宴会を起こしているの」

「どうやって」

「感情に作用させて」

「そういう能力？」

「たぶんね」

「想像がつかないなあ」

涼介が頭を悩ませ、どうやれば宴会を起こせるような能力があるのかと考える。パチュリーがクスクスと笑いを漏らす。

「意外とできるものよ」

「そうなのかい？」

「レミイであれば全員が神社で宴会をする運命を引き寄せる。境界の妖怪であれば、行くと行わないの境界を弄る。貴方であれば宴会をしたいという感情以外の他の感情の多寡を落してしまう。そうすれば皆宴会に参加しようと思ってしまう」

「なるほど。すべての道はローマに通じるのか」

「そう言う事よ」

「どうしてそんなことをしているのだろうか」

「それは本人だけが知る事でしょうね」

「うーん……危険はあるのかなあ」

話を聞いて思うのは危険を感じられないことだ。ただ宴会が起こっているだけで害がありそうに感じない。

「そうねえ、参加者の肝臓が危ういとかかしら」

「それは、何とも危険な話だなあ」

パチュリーの冗談に笑みがこぼれる。実際冗談でもなくこのまま宴会が続けばそういった可能性もあるのだろうが、さすがにそこは各々の自制心に頑張ってもらいた所ではある。

「実際、現状では危険はないのでしょうかね。でも、妖霧に含まれる妖力は増してきてい

る」

「妖霧?」

「ああ、この店の周りにはないものね。だから、私やアリスはここに避難してきた様なものだけだよ」

「それは何故だかわかる?」

「人間だから興味がないのか、他に理由があるのかどちらでしょうね」

パチュリーの瞳が愉快に歪む。知っているけれど教えてくれる気はなさそうだと涼介は思う。自分から話をふっっておいて思わなくもないが、紅魔館の住人らしいと思ってしまうあたり毒されてきていると涼介は内心で笑ってしまう。

「だから、もしかしたらこれから何か起こるかもしれないわね」

「なるほど。それなら今度は私も宴会に参加しようかな」

「そう、楽しみにしているわ」

「ご期待に添えるように頑張るさ」

「咲夜にも結果で示すと言ったのでしょ?」

「……咲夜さんは身内にオーブンすぎやしないだろうか?」

「あらあら、妬げちゃうかしら?」

「勘弁してくれ」

パチュリーがクスクスと愉快気に笑いを挙げる。夜間営業には結局パチュリーだけしか訪れず、そのまま閉店時間まで二人はたわいない話を続ける。十三日目、五回目の宴会の裏で二人だけの茶会が続く。

誘いと攫いに供する三三杯目

本日は繰り返される宴会の一回目から十六日たった六回目の宴会の日だ。本日こそは宴会に参加しようと涼介は思っていたが前日に紫が現れ、本日紫の友人が来るから店を開けておいてほしいと頼まれ宴会への参加は見送りとなった。仕方ないと思いがら朝の眩しい日差しの中店を開けて、準備をしているとカランカランと鈴が鳴り来客を伝える。開店したばかりの時間に誰か来るとは珍しいと視線を向ければ、元氣印の黒白魔法使いの魔理沙がいる。

「おはよう、魔理沙。今朝は早いね」

「よつす、涼介！」

「今朝はどうしたのかな？」

「お前があまりにも宴会に来ないから誘いに来たんだぜ」

「ははは、間が悪いね」

「なんだよ、今日も欠席かよ」

魔理沙はそう言いながらカウンター席に座り、上体をだらしなく倒しダランと脱力する。残念そうな魔理沙の様子に涼介は悪い事をしたなと思うも、すでに先約がある為

どうしようもない。苦笑いを浮かべながら魔理沙の机に突っ伏した頭を眺める。

「先約があつてね」

「なんだよ、その先約ってさあ」

涼介の言葉に魔理沙は顔をあげると不満そうに口をとがらせる。相変わらず魔理沙は感情表現が豊かで見ていて気持ちがいいなと涼介は笑みの種類を変えて応える。

「紫さんの友人が今日の夜間営業の時間に来るらしいんだよね」

「ちえ、私たちとの宴会より胡散臭い隙間妖怪を取るのかよ」

「胡散臭くないと思うんだけどなあ」

「そんな事言っているのは幽々子と涼介くらいなもんだ」

「藍さんや橙だつて同じように言うさ」

「従者が主人を悪く言うはずないぜ」

「それは確かに」

「だろ？」

魔理沙がニツと笑みを浮かべる。魔理沙のコロコロと変わる表情は見ていて飽きがない。裏表がない魔理沙の様子は妖怪達とのやり取りとはまた違った趣があると涼介は魔理沙を見つめながら考える。

「と言うわけで今日も欠席なのさ。でも次は参加したいね」

「本当かどうか怪しいもんだな」

「今日も参加するつもりでお酒を用意していたんだよ、ほら」

涼介はそう言うのと、宴会に持つていくように用意していた落酒を見せる。魔理沙がそれを見ると顔に笑みが浮かぶ。連続する宴会で参つていたアリスやパチュリーとの違いについて苦笑いが涼介の顔に浮かぶ。若きとは恐ろしいと舌を巻く。

「お、落酒じゃないか！」

「知っているんだね、魔理沙も」

「話には聞いていたけどまだ飲んだことは無いっ！」

「それは楽しみが増えていいね」

「涼介、一本くれよ。今日の宴会に持つていくからさ」

「ダメだよ。これは私が行くときに持つていく分なのだから」

「ちえ、見せるだけ見せて御預け何ていけずだぞ」

「宴会の時は最初に吞ませてあげるから」

「ふふ、なら仕方ないな。大人な私は我慢してやるか」

魔理沙の背伸びした様子が微笑ましく、涼介はクスクスと笑う。魔理沙が涼介に笑われて不満げな視線を涼介に向ける。涼介も気が付くと、言い訳する様に口を開く。

「そう睨まないでくれよ」

「子ども扱いする涼介がいけないんだからな」

「ならとつておきの一本も持っていくさ」

「とつておき？」

魔理沙の声に期待が混ざる。涼介は魔理沙に向けてニヤリと笑ってみせる。棚の奥に隠す様に入れてある一本の瓶を取り出し涼介は魔理沙に見せる。

「落酒・宵？」

「以前の物より酒精を強くしてあるんだよ。これなら天狗だつて酔いつぶせるさ」

「おいおい、私が飲むにはちと強すぎないか？」

「だから少しだけ飲めばいいさ。これはこれで美味しかったよ」

「相変わらずのザルさ加減だな」

「ちよつとだけさ」

「のらりくらりしているな」

「そうかな？」

「そうさ」

涼介がわざとらしく聞き返して見せれば、魔理沙が即答する。二人が顔を見合わせ、笑い声をあげる。笑いが収まると魔理沙が涼介にまた言葉をかける。

「仕方ない、それなら宴会用の持ち帰れるつまみでもお願いして今日は退散するかな」

「そつか。なら何がいいだろうか？」

「うーん、まだ時間があるから冷めても美味しい物が良いなあ」

「ふむ、チヨコとかでいいかな」

「歓迎だぜ、辛口の酒の時にちょうどいいってもんさ」

「酒飲みめ」

「大酒のみは大物の証拠ってね」

「はははは」

「だから、微笑ましい物を見る目をやめろよお」

魔理沙はむくれた顔を見ながら涼介の視線を遮り、帽子の裏から不満を垂れる。涼介は酒と一緒に持つていくために昨日から用意しておいた生チヨコを取り出しカットする。カットをしながら涼介は魔理沙に話しかける。

「最近宴会がかなり多いみたいだけれど大体は魔理沙が幹事をしているよね」

「ん？まあな。たまにレミリアが咲夜に命じたりしているが、大体私だな」

「魔理沙はどうしてそんなに宴会をやるうと思っただんだい？」

「どうしてって、まあやりたいからだよ」

魔理沙は特に考える事なく、帽子の端から顔をひよっこりとだして普段通りにそう応える。何かに影響を受けている様子は涼介が見る限りでは見られない。本当に魔理沙

は宴会をしたいからしているだけなのか、パチュリーの言う様に何かしらの能力の影響下なのか分からない。

「そんなもんか。肝臓は傷めない様にほどほどにしなよ」

「次回に涼介が良い物を持ってきてくれるし、せいぜい労わるさ」

「あんまりひどいと霖之助に言っておくからね」

「お、おいおい！それは狡いだろ!!」

「自制すればいいのさ」

「ぬぬぬ」

隠れていた帽子から完全に魔理沙が出てきて、席から立ち上がると涼介に抗議する。涼介が立ち上がった魔理沙の鼻先を言葉と共に軽くついて文字通り出鼻をくじいて席へ戻すと、魔理沙が鼻先を抑えて唸り声を出す。

「さて、魔理沙。おつまみだよ」

「まったく今度来たときは酔いつぶしてやる」

「飲ませるのは良くないんだよ」

「それは幻想郷では当てはまらないね」

「だろうね」

「へへ、良い土産が出来たぜ」

魔理沙はチョコの入った容器を見ながら笑いを漏らすと立ち上がる。

「代価はツケておいてくれよ」

「代価は良いよ」

「およ、気前良いな?」

「もともと持つていくために用意していたからね。代わりに持つて行つてもらうだけさ」

「ツケを頼んでおいて言うのもあれだけれど香林といい涼介と言い時たま心配になるな」

「魔理沙程じゃないさ」

魔理沙は魔法を学ぶ上で親と喧嘩し家を出ている。たった一人、魔法の森で魔法を学びながら暮らしている。涼介は魔理沙の境遇を知っており、ツケの清算は基本的に魔理沙への頼みごとをすることが多いので、どちらにしろ魔理沙から代価をもらうつもりはない。魔理沙も涼介のそういった心遣いを察しているのか頻繁に店を利用し甘えることを良しとしない。涼介としては心配なので利用回数を増やしてほしいと思っているが中々に難しい距離感と言える。

「私は問題なくやれているさ」

「それならいいさ。でもいつでも来ていいからね」

「私はいつでも来たい時に来るさ。宴会を開きたい時に開くようにな」

「そつか。それじゃあみんなによろしくね」

「任せとけて。今度はちゃんと来いよ」

魔理沙はそう言つて扉から出ていき去つていく。涼介は嵐の様だったなと思ひながら、他の魔法使い二人と比べて笑みを浮かべる。これから時間が昼に近づくと増える客に備えるために、涼介はランチの下準備を始める。

昼時を過ぎ客足も遠のき涼介は一息つく。ハルは運動不足を解消する様に散歩に出ている。もしかしたらこのまま神社の宴会に一人で参加してくるかもしれないと、過去二回知らぬ間に参加していたハルを思う。

「まったく、一人で参加してくるなんて薄情な」

涼介はいないハルに愚痴をこぼしながら、一息入れるために淹れた熱い珈琲で舌を火傷しない様にすする。口に広がる苦味と鼻を通る芳香に涼介は人心地付いた気分になる。

「はああ……疲れた」

カウンターの椅子に座りながら、朝に見た魔理沙の様に涼介は身体を机の上に投げ出

す。アンニユイな感じがルナサみたいだと涼介は馬鹿な事を考えながら笑みを浮かべる。そういえば最近宴会で演奏するせいで騒霊姉妹にも会えていないかと考えが回る。なんだかんだと色々考えるが要は皆が宴会に行き寂しいのだと自覚すると、涼介は存外子供染みている自分に笑みもられる。カランカランと鈴が鳴り来客を告げる。

「涼介さん、遊びについてあれ？涼介さん？涼介さん、涼介さんいないの!？」

カウンターの中で突つ伏す涼介に聞こえてくる声は霊夢の声だ。少しだけ聞こえてくる声に焦燥が混じっているように感じられる。カウンターで突つ伏している涼介が入り口から見えない為、霊夢が涼介に呼びかけながら店内に入ってくる。そろそろ顔を霊夢に見せねばと涼介が思うのと霊夢がカウンターの中を覗き込むのが重なる。霊夢の視線と突つ伏している涼介の視線が合う。

「いるなら返事位しなさいよ」

「ごめんごめん。ちょっとだけ休憩していたんだ」

「それにしても声を出すくらいしてもいいでしょ」

「ははは、そうだね。心までだらけていたみたいだ」

「もう、本当に呑気ね」

「いつも通りで安心するでしょ？」

「どうして霖之助さんといい、涼介さんといいこうもやる気がないのかしら」

「霖之助と比べられるのは心外だな」

「ならしゃんとしなさい」

「そうだね」

涼介は身体を起こして一度ググツと伸びをする。霊夢は涼介の様子を見ながら苦笑いを浮かべる。意識を切り替えようと少しだけ冷め、適温となった珈琲を涼介は飲み干す。苦味とカフェインの摂取によるプラーシーボ効果で気分が引き締まる感覚を涼介は覚える。

「こんにちは、霊夢。よく来たね」

「もう、何事もなかったみたい……こんにちは、涼介さん。遊びに来たわ」

「最近神社で宴会が多いみたいで大変だね」

「もう本当よ。魔理沙も何を考えているのかしら」

カウンターに座りながら話をする霊夢の声には呆れとわずかな疲れがにじみ出ている。この様子だと霊夢も異変の事に気が付いてはいないのだろうかと涼介は思う。

「今日もするんだよね？」

「そうよ……はあ、今年は春が短かったからつてやり過ぎよ」

「ははは、確かに今年の春は太く短くだったね」

「といかなんでうちでやるのよ」

「ほら、集まりやすいんじゃないかな？」

「とか言つて涼介さんは全然参加しないじゃない」

「私は飛べないからね」

「不便ね、修行しないの？」

「霊夢に言われると不思議な心地だね。紫さんが嘆いていたよ」

「知らないわよ」

「そうかい。まあ、でも私が修行してもたかが知れているよ」

「そうなの？」

「私の伸びしろは能力方面にとられているから、これ以上霊力方面に伸びることは無いと藍さんに言われているからね」

「不便ね」

「不便で済むところが霊夢らしいなあ」

霊夢らしい感想に涼介は笑みを浮かべる。霊夢はカウンター席に座り頬杖をつきながら不満げな視線を向けてくる。涼介は霊夢を見ているとふと湧いてくる疑問があり口にする。

「今日は宴会があるのにここにきて大丈夫なの？」

「準備は半人前とかメイドに任せてきわ。散々人の家を使っているんだから準備位して

もらつても罰は当たらないわよ」

「なるほど。休憩に来たのか」

「そうよ」

「宴会があるなら食事はいらさないかな？」

「んー……そうねえ。せつかくだけど今日は遠慮しておこうかしら」

「なら軽く摘まめるものと飲み物を出すよ」

霊夢の返答を聞く前に涼介は準備を始める。霊夢は涼介の様子に止めようと一度口を開くも、諦め言葉になる前にため息に変わる。霊夢は涼介の後姿を眺めながら静かに待つ。

「はい、サービスのオレンジジュースとクッキーだよ」

「珈琲じゃないのね」

「お酒を飲む前にはオレンジジュースが良いらしいよ。外でそんな話を聞いた気がするし」

「曖昧ね」

「悪い事は無いからいいんじゃないかな？」

「ふふ、そうね」

霊夢が一口ジュースを口に運ぶ。飲み物のお供についできたクッキーを小さな口で

ぱくつく。

「そう言えば涼介さんは全然宴会に来ないわよね。異変の後は私が文句を言っても来るのに」

「私も行こう行こうとは思うのだけれどね、中々間が悪くていけないんだよ」

「そう。今日は何があるの？」

「紫さんのお友達が来るらしくてね。それで店を開けておくのさ」

「紫がねえ……」

「何か引つかかる物言いだね」

「紫も宴会に来ないのよ」

「一回も？」

「そう、一回もよ」

「それは……珍しいね」

「気味が悪いわ。いっつも邪魔な時に出てきて、邪魔な時に居ないんだから」

「それは……仲がよさそうで何よりだよ」

「涼介さんは一回頭をお医者さんに見てもらった方がいいわよ」

「きつと馬鹿につける薬は無いつて言われるよ」

「なるほど、見せるだけ無駄ね」

「そこは否定の言葉が欲しかったね」

「自分で言ったじゃないの」

「医者に見せるっていう時の常套句じゃないか」

「知らないわね」

霊夢がつんと視線を涼介から逸らし手元のジュースに向ける。普段通りの涼介の様子に霊夢が俯いた口元に笑みを浮かべる。涼介から見えない様にこつそりと微笑む。

「それにしても安心したわ」

「何かあったのかい？」

「何となく変な予感がしたのよ」

「変な予感？」

「そうよ。だから様子を見に来たの」

「ふうん、嫌な予感ではないんだね？」

「そうね……変な予感であつて嫌な予感ではないわね」

「そつか、なんなんだろうね」

「別の事だったのかしら？うーん……」

「まあ、そのうち分かるさ」

「樂觀的ね」

「いつも通りさ」

あきれ顔の霊夢と笑顔の涼介が見合う。霊夢は涼介の様子に処置なしとため息をつくとジュースを飲みきると立ち上がる。

「ああ、霊夢。代価はいらないよ」

「またそうやって……」

「最初にサービスと言つて出しただろう」

「むう」

「心配してきてくれた霊夢への心ばかりのお礼さ」

涼介がそう言うのと霊夢は少しだけ口をとがらせるも、諦めて涼介の言い分を聞き入れる。霊夢は扉の前まで行くと一度店内の涼介に向かって振り返る。

「また来るわね」

「いつでもおいで」

霊夢は涼介の返答に嬉しそうな笑みを浮かべると扉の鈴を鳴らして帰っていく。涼介は霊夢が帰っていった扉を見ながら思い出したことを呟く。

「異変について話すのを忘れていたなあ」

また次回、自分が宴会に参加した時に話せばいいかと涼介は結論を出すと食器の片付けに戻る。

宴会の誘いも断り、紫の友人以外今日も誰もこないかもしれないと思いつながら、涼介は夜間営業を開始する。客がこないからと店を閉めていたら、店を開ける習慣がなくなりそうだとそんな馬鹿げた事を考える。

「紫さんも急に今日店を開けて欲しいと言うんだからなあ。宴会ではだめだったんだらうか？ダメだったんだらうなあ」

昨日の営業後の店内にいつの間にか来ており、要件を伝えると涼介の落酒を一本持つて去っていった。こういった我儘を言ってもらえるのが親しくなれた証拠のようだという涼介は言う事を聞いてしまう。案外こういったところを見透かされて頼まれているかもしれないな、と笑みが浮かぶ。

「さて、お客さんが来るのを待つだけか」

一人の店内が少しだけ寂しくてついつい声が出てしまう。レティは寝てしまっているし、ハルも店の片隅で眠りに落ちる直前なのか瞼が閉じたり開いたりを繰り返している。ハルのその様子に眠いなら寝れば良いのにと思いつながらも声はかけない。声をかけてせっかくの眠気が飛んでしまつては可哀想だからそのまま眠りに落ちるのを見守る。涼介もカウンター内の椅子に腰掛けぼつーとしながら来る客を待つ。

しばらくしてハルも眠りに落ちてしまい、一人ただあてどなく涼介が時を過ごしていると不意にカランカランと鈴が鳴る音が響く。ハルの耳がピクリと動くが起きる様子は見られない。涼介が視線を扉へ向けると、小柄な、それこそレミアアやフランと変わらないくらい十歳程度の少女のような見た目の人物が扉から入ってくる。

「客がないみたいだけど営業しているのかい？」

少女に見えるがその頭から生えている二本の角が彼女を妖怪であると主張している。腕などについている鉄の輪から伸びた鎖をジャラジャラと鳴らしながら店内へと入り、涼介に問いかけてくる。

「はい、ご安心ください。営業しております。どうやら神社で宴会があるそうで、開店休業状態なのです」

「へえ、そうなのかい？時に店主よ？」

「何でしょうか、お客様？」

「あなたはその宴会には行こうとは思わないのかい？」

「そうですね。行きたいとは思いますが、最近は特に回数が多いみたいですからまた次の機会にでもと思ひ、本日は欠席させてもらっております」

「ふうん、そうかい。そういやあんた、なんてえだい？私は伊吹萃香って名前だよ」

「私は白木涼介といいます。紫さんのご友人の方でよろしかったでしょうか？」

「ああ、確かに私は紫の友人だよ」

萃香と名乗った少女が涼介の目の前のカウンターに座る。近くに来たことで涼介は彼女から酒気を感じる。離れているのに感じる強い酒気に目の前の萃香がかなり酒を飲んでいると涼介は知る。しかし、それでも普通に話が出てくるので酒に強い天狗の様な妖怪なのだろうと当たりをつける。来店すれば客は客だと割り切り、それも紫の友人とのことなので萃香に注文を取ろうと涼介は声をかける。

「それではお客様、ご注文はどういたしましょうか？」

「そうさねえ……」

注文を問いつけられた萃香が言葉をためるように焦らす。萃香の視線がジッと涼介を見据える。涼介は萃香の視線に少しだけ寒気を感じ、警戒感を掻き立てられる。萃香も涼介が警戒と寒気を感じたことを察したのか笑みを深める。紫に見つめられた時を思い出し涼介は緊張する。萃香が次の言葉を音にする。

「私はちよいとお前さんを攫いに来たのさ」

「ハル！」

涼介が萃香の言葉を聞くとハルを呼び起こす。ハルがびくりと身体を震わし、目を覚ます。萃香はそれに対して動きを見せることは無く、不気味に沈黙している。ハルが涼介の焦燥を含む声に警戒を呼び起こされたのか牙をむき出しにして萃香を見据える。

ハルが動きを見せる前に涼介がさらに声を上げる。

「霊夢を！」

ハルが言葉の内容に困惑したように涼介へ視線を向ける。

「早く!!」

涼介の声に叱咤されるようにハルが裏口の扉の下についている小さな出入り口から外へと出ていく。萃香はその様子に何をするでなくニヤニヤとしている。ハルの姿が見えなくなると萃香は口を開く。

「自分じゃなくて妖獣の方を逃がすとは変わっているねえ」

「私より足が速いですから」

涼介はいまだ妖力を発する事のない萃香の力を落す様に能力を使う。萃香は何かしらの干渉をされたことに気が付いたのか、さらに笑みを深める。

「私相手に時間稼ぎが出来ると思ってたのかい？」

「さあ、それをこれから試してみるのは？」

「言うねえ、言うねえ……好きだぜ、そういうヤツ」

あつはつはと萃香が愉快気に笑い声をあげる。萃香が腕を持ち上げ、人差し指を伸ばし誘う様にくいぐいと振る。とたん涼介は何かにつ張られるように身体が浮かび、カウンターの上の物を身体ではねながらフロアへと投げ出される。ガシャンガシャンと

飾りをかねる瓶やグラス、カップが割れる音が店内に響く。

「さあ試してみろよ、人間」

萃香を飛び越え、彼女の後ろにあるフロアのテーブル席の机に涼介の身体が叩き付けられる。ぶつかる際の衝撃などを能力で落とし涼介は無傷であるが、机の方はそうはいかずに天板が割れ身体が床に落ちる。涼介はすぐさま身体を起こすと座席に座る萃香に向けて跳びかかる。時間を稼ぐつもりではあるが、できうる限りの抵抗をしようと足掻く。

「私相手に自分から近づく……面白いね、あんた」

身体を涼介に向けるだけで萃香は立ち上がる様子を見せない。片足を反対側の膝の上に乗せ、上体を預けるようにカウンターに背を付けて待ち構える萃香。動かない萃香に涼介が掴みかかる。涼介は能力を使用しよう的意识を向ける直前、自分の胸元に何か触れている感触を覚える。

「ほっ」

萃香の軽い声と共に涼介の身体が後ろに向かって吹き飛ぶ。萃香の体勢から身体を押しされたら涼介は気が付くも、直後に身体が背後の壁にぶつかり思考が止まる。

「かはっ」

涼介の肺が押された圧力と激突した壁に圧迫され空気が吐き出される。身体が床へ

と再びずり落ちる。涼介は胸部に痛みを覚える。能力が自動で身体を守ろうと咄嗟に威力を落しているのに痛みを感じることへ驚愕する。痛覚を落とし、身体を起こす。痛みから察するに折れてはいないようだ。涼介は身体を動かす。

「へえ、立ち上がるのかい。どんな能力を持つているんだらうねえ」

萃香が楽しげに涼介に語りかける。腰につけている瓢箪を手に取ると、ふたを開け中身を煽る様に飲む。ぷはあと煽った後に、息を吐くと口元を腕で豪快に拭いニヤツと笑う。

「さつきから妖力もうまく練れないし器用だね」

「本当にちゃんと効いているか不安ですね」

「そうかい？ちゃんと効いているよ」

「効いていてこの馬鹿力ですか」

涼介が苦笑い気味に萃香へ言葉を返す。会話で時間が伸ばせるならばという思惑もある。萃香はそれを察しているのかどうか分からない態度で涼介に言葉を返す。

「当たり前さ。私はなんたって鬼だからね」

「鬼？鬼って言うとおの赤い鬼？」

「赤いのも青いのもいるけどその鬼さ」

「幻想郷で初めて見ましたね」

「仕方ないさ」

「数が少ないのですか？」

「みんな引きこもっちゃまったのさ」

萃香の今まででずつと愉快気にしていた雰囲気になんか少しだけ寂しさが混ざる。しかし、萃香はすぐさまその雰囲気霧散させるとまた笑みを涼介に向ける。

「まあ、そんな事より今はこの時を楽しもうじゃないか」

「楽しいのは貴女だけだと思えますけどね」

「そうかい？ そいつは寂しいね」

「全然寂しそうに聞こえないですよ」

「かっかっか、どうだろうねえ」

萃香は笑い声をあげると椅子から立ち上がり、肩の凝りを解す様にぐるぐると回す。妖力は発せられていないのに涼介は背筋に冷たい物を感じる。目の前の小さな少女に涼介は威圧される。

「さて、そろそろ真面目にやるかい」

「勘弁してほしいですね」

「くつくつく、腑抜けた事を言いながら目が死んじやいねえな」

「ははは、どうでしょうねえ」

「あんだ面白いねえ……そのギラギラした目、好きだよ」

萃香はそういうと散歩するような気軽さで涼介に向けて足を踏み出す。先ほど、身体を引かれたことから萃香が何かしらの能力を持っていると涼介は察している。ゆえに、涼介は逃走を選択肢から排除する。だからといって涼介はどうすればいいのか答えを見いだせない。近づかないと闘えないが、今までのやりとりで萃香に近づくのも危険だと理解させられている。じりじりと萃香が涼介に近づく。

「考えがまとまらないみたいだね」

「待ったは効きますか？」

「いいや、聞けないねえ」

萃香が涼介の腕の圏内に入る。足元の割れた天板を掬う様に足で蹴り上げ萃香の視界を塞ぐ。体勢を下げて、小柄な萃香を掬う様にタツクルを仕掛ける。萃香が埃を払う様に割れた天板に手を当てると、天板が破碎し粉々になる。晴れた萃香の視界の中に肩から突つ込む涼介の姿が見える。ニヤリと笑って涼介の突撃を萃香は待ち構える。

「ふっ！」

「おお？」

涼介は萃香を持ち上げる際に萃香の重量を落す事で軽々と持ち上げる。萃香は予想していたよりもずつと軽々と持ち上げられたことに意外そうな声を出す。そのままラ

グビーでトライする様に涼介は萃香を床に叩き付ける。

「おお、すごいな」

「そいつはどうも」

床に叩き付けられた萃香が褒めるように涼介に声をかける。涼介は世辞だと思いきわ流す。

「これでも密をあげて少しは重くしていたのにコイツはおどろいた」

「ミツ？」

萃香が涼介の返答を気にすることなく本当に楽しそうな声を出す。涼介は萃香の言っていることが分からず僅かに言葉を反芻する。萃香に馬乗りをするような形となる。

「よいしょっと」

萃香が軽い口調と声で何でもない様に身体を起こし、逆に涼介が簡単に床へ押さえつけられる。

「さあ、つかまえた。ここからどうする？」

萃香が床に押さえつけられた涼介へ目を細めながら見下ろし言葉をかける。涼介が逃れようと身体に力を入れて抵抗するもそれ以上の萃香の力でねじ伏せられてしまう。

「これで終わりならちっと期待はず、れ、だ——」

「藍さんに言わせれば油断大敵ですよ」

涼介の上に馬乗りの体勢で涼介を抑える萃香の意識が、涼介の能力によって落とされる。馬乗りで触れていた故に意識を落された萃香の身体が、涼介の身体の上に倒れ込む。涼介は体の上に乗る萃香の身体を脇によけながら、体を起こす。逃げようと抵抗していたのも本気であるが、本命ではなく意識を落す事を初めからずと狙っていた。眠る萃香の脇でしやがみ込みながら覗き見る。

「一体なぜ、私を攫おうとしたのだろうね」

「誰も異変を解決しようとしなからさ」

「え——」

眠る萃香を見ながら語りかけた言葉に涼介の背後から返答がある。それは萃香の声であり、疑問の声と共に振り返る。しかし、涼介の声が言い切られる前にすさまじい力で身体が横に向かつてはね飛ばされる。

「つう!!」

自動で能力が発動するも、それを超えてくる威力に涼介の口から苦痛の声漏れ出る。カウンターの椅子を押しつけ壁に再び身体をぶつける。身体が止まり、視界を先ほどまでいた場所に戻す。視線の先には涼介を背後から張り飛ばしたのであろう平手を振り切った萃香がいるだけで、意識を落したはずの萃香の姿が見当たらない。

「まぼろし?」

「残念、はずれ」

クツクツと意地悪そうに萃香が喉を鳴らす。涼介が張り飛ばされた左腕の状態を確認する。痛みはあるが動かすことに支障がないため、二の腕にひびが入っていると察すると被害の確認が出来たと二の腕の痛覚も落とす。

「期待外れと言ったのは取り消すよ。あんたやっぱり面白いよ」

「それは光栄なのかな?」

「ああ、誇りなよ。私を一人倒したんだ」

萃香が首をコキリと鳴らして見せる。楽しいな雰囲気は変わらないが瞳の中に真剣さが宿る。少しは目の前の妖怪に認められたらしいと考えながら涼介は口元に笑みを浮かべる。

「この状況で笑えるのかい」

「少なくとも私の努力が実を結んでいると実感できたのでつい、ね」

「そいつは良かったね」

「そうですね。さっきので、終わってあげれば最高でしたね」

「残念だったね。まだまだ付き合ってもらおうよ」

そして再び萃香が散歩する様に無造作に近づいてくる。涼介は苦笑いを浮かべなが

ら立ち上がるうと手を地面に着く。地面に着いた手の感触に涼介はふと口元を綻ばせる。

「まだ笑うかい、鬼を前にして」

「そうですね。抗うと決めているので、心配をかけないと約束しているのです」

「ほう、約束を守るのは大事だね」

「ええ、だから諦め顔はしたくないんです」

「だから笑うのかい……良い覚悟だ。嘘をつかない為に頑張つて見せろ!!」

萃香が叫ぶと同時に足を踏みしめる。涼介はすぐさま身体を動かし始める。あの筋力で踏み切られたら目で追えないと、萃香が動きに踏み切る前にと身体を動かす。

「よつと」

涼介の動き出しと同時に萃香が踏みしめた足で床を蹴る。バキツと床板が割れる音と共に軽い声を出した萃香が涼介の目の前に現れる。涼介は萃香が先ほどから余裕を見せて真正面から向かつてくることから、横や背後からくることは無いと正面からくると踏んでいた。だから、涼介は手に持った物を萃香が動き出す前にすでに正面に向けて放り投げようと動き出していた。萃香が現れるのと、涼介が手に持つ物を投げつけるのが重なる。

「あ、テメ——」

「鬼は外」

「いっちちちち!!」

涼介が投げた、飾りをかねた瓶が割れた時に床にまかれた煎り豆に對し萃香が非難の声を上げる。涼介は萃香の言葉を遮り、節分の常套句をおくる。煎り豆のぶつかつた箇所は火傷をしたように赤く染まり、萃香が赤くなつた肌を撫でるように擦る。目の前で隙を見せる萃香に向かい涼介が腕を伸ばして萃香の首を掴み、重量を落して持ち上げ背後のカウンターの上に叩き付ける。意識の隙を突かれた萃香が目を白黒させているのも確認せずに涼介はすぐさま意識を落そうと能力を使う。

「このガキヤ——」

「寝てろ!!」

萃香は原理の分からない意識を奪う涼介の能力を警戒し首を掴む右腕に両手を伸ばす。涼介が萃香の言葉を遮り自らを鼓舞する様に気合を込めて言葉を叫ぶ。意識が落ちる前に萃香の両腕が涼介の右手首を掴む。

——ボキツ

涼介の手首の折れる音が響く。涼介の腕をつかむ萃香の手から力が抜けて落ち、だら

んと机の上に垂れる。手首をへし折られても、萃香の首を掴む指を離していない涼介の能力が萃香の意識を落す。骨を断たせて意識を断つ形となった。先ほどの反省から今意識を奪った萃香を掴みながら周囲を見渡す。

「もう、いないか」

涼介の声に安堵が混ざる。しかし、涼介の安堵は続かない。店の中の空間から笑い声が聞こえてくる。音の発生源があるとかではなく、周囲の空間全てから笑い声が響く。

「ああ、なんでもありかよ」

『それでもないさ』

明確な返事があると涼介の心はさらに重くなる。これは本格的にハルに任せて耐えるしかないかと思うも次の光景でその望みも絶たれる。

『二回も起これば偶然ではなく実力だわな。こりゃあ紫も認めるわけだ』

声が響いたと思ったたらフロアの一点に何かが集まり始めたのか霧の様な物が見える。それは次第に濃くなって次の瞬間には萃香が現れる。涼介は視線を今なお指でつかんでいる萃香に向ける。いまだに手の中で意識のない萃香もおり目の前にも萃香がいる。その事から導き出される結論は一つだ。

「分身、もしくは分裂」

「まあ、分裂のが近いかね」

「だからハルを逃がしたのですね」

「ああ、絶対に間に合わないと言われておくよ。それ以上はあんたに敬意を表して手出ししないさ、約束するよ」

「どうしてだろうね。貴女の事を全然知らないのに嘘をついている気がしない」

「当り前さ。鬼は嘘をつかないんだよ。嘘をつくのは人間だけさ」

「へえ……面白い妖怪だね」

「鬼を面白いと称する人間がいるなんて長生きしてみるもんだね」

萃香が楽しげに笑いを漏らす。涼介が意識の無い萃香から指を離せば周囲の空間に溶ける様に消えていく。萃香の様子に涼介が何か痛ましい物でも見るように顔をしかめる。

「どうしたんだい、変な顔をして？」

「ちよつと嫌な記憶を思い出してね」

「ほおん？」

「こつちの話ですよ」

「そうかい。それなら攫った後に話を聞こうか」

「最悪ですな」

「そう嫌がるなよ、酒ならあるさ」

涼介が腕の感じを確かめる。手首は折れているが痛みをなくせば指は握れる。しかし、使い物にはなりそうにないため息が出そうになる。胸骨と左の二の腕のヒビ、右手首の骨折で相手は無傷。絶望的だと思ふが、諦められないと感情が叫ぶ。せめて心までは屈さぬようと顔に笑みを張り付ける。

「まだ笑うかい。あんたの事が気に入ってしまったよ。当初の目的関係なく攫いたくなっちまったよ」

「ああ、もう本当に最悪です」

「嬉しそうな顔して言いやがって。それじゃあ第三ラウンド始めようか」

萃香が再び涼介に向かい歩き出す。そこにはもう一部の隙も見い出せない。

荒れ果てた店内で壁を背もたれに涼介が座っている。動きを見せない涼介の目の前に堂々たる姿で萃香が立ちふさがっている。

「まさか、あそこからさらに四人も意識を落とされるとは思わなかったよ」

「て、徹底、しすぎ、だろ」

闘いの中で涼介の能力はある程度萃香に把握されてしまっている。さらに、痛覚を無視してむかってくる涼介を屈服させるために萃香は涼介の四肢の関節を砕いている。

両肩、両肘、両ひざ、両股関節を徹底的に砕かれている。

「さあ、これで私の勝ちかね」

涼介が静かに萃香を見つめる。その視線はまだ死んでいない。涼介の周りを浮いていた人魂も萃香を不意打ちで一人気絶させた後に、萃香の腰の瓢箪に囚われてしまった。それでもあきらめを見せない涼介に萃香は愉快な気持ちを抱く。

「まだあきらめないか。約束を守ろうとする心意気は好きだが、今回はここまでだね」

萃香がそう言うのと、彼女の右腕の腕輪から延びる先端に丸い球の付いた鎖が意思を持ったように動き始める。

「それ、は？」

「鬼の宝さ。私の能力を込めて作られたどこまでも伸びる鎖」

「鬼、のたか、ら」

「そうさ。私^鬼らをぐうの音も出ない程負かした相手に渡す宝さ」

萃香がカラカラと笑う間も鎖は伸びて涼介をとらえるように巻き付く。

「さて、抵抗されても大変だから能力を使えなくさせてもらおうか」

涼介は萃香の言葉の後に身体の奥を探られる様な、何かが自分の根源に干渉するような気持ち悪さを覚える。能力を使う気が起きなくなる。痛みが戻ってくる。そして、感情への抑制が減ると目の前の妖怪の強さにあこがれてしまっている自分に涼介は気が

付く。それでも負けたくないと思ってしまった。

「今アンタの能力を、能力を使おうとする意思を疎ませた。これが能力に干渉する感覚さ、覚えておくといい」

「づうう……まだだ、もつと……」

「いつでもかかかってきな。飯食ってる時でも、酒飲んでる時でも、寝てる時きだつていつでもきな」

「ぜった、い負か、す」

「受けて立ってやるよ」

睨みつけてくる涼介に萃香が嬉しそうに口元を釣り上げる。

「あん？」

萃香が怪訝そうな声を上げる。涼介の胸元から寒気が漏れ出る。キラキラと店内に氷が形成される。萃香が涼介の能力を封じたためにレティは気がつけたのだ。氷が鋭利な刃物を形成して萃香に向かって射出される。萃香は興がそがれたような顔をするもレティの氷を防ぐ様子を見せない。

「れ、てい」

「まったく楽しい喧嘩をした後に水、いや氷を差しやがって……大人しく寝てろよ」

萃香が指をくるくると振る様に動かすと氷が端から散っていき、萃香に届く前には消

えてしまう。そして、萃香は涼介の胸元の服を破りレティの結晶を掴む。

「まあ、気分がいいから許してやるよ」

萃香が結晶に向かってそう呟くとレティの結晶も先ほどの氷の様に周囲に溶けるように消えていく。萃香が涼介に再び視線を向けニツと笑いかける。

「それじゃあ行くか、涼介」

涼介の意識が薄まる様に散っていく。

酒飲み話に供する三四杯目

涼介の意識が強い酒精の香りで引き起こされる。身体を起こそうとすると鋭い痛みが全身を走り、さらに身体は痛みを訴えるだけで動かない。

「う、つうー！」

痛みがうめき声となつて、身体から少しでも痛みを逃がそうとする。痛みが寝起きの頭にかかる靄を晴らし、目覚める前の事を思い出す。瞼を開けばそこはどこか見覚えのある屋根の上。視線の先には萃香が一人酒盛りをしている。

「お、目が覚めたみたいだね」

「どう、なつた」

萃香が涼介のうめき声に反応して声をかける。涼介があれからどうなつたかを萃香に聞く。萃香は一度にやりと笑い酒を一口飲むと話を始める。

「あれからすぐにあの妖怪が神社にたどり着いて、巫女をはじめとした人間たちがお前さんの店に向かったよ。それで惨状を見つけてお前さんを探し始めているって所かね。時間で言えば一晩立って今は次の夜って所さね」

萃香は楽しそうに経過の話をする。それはまるで悪戯をして驚いている被害者を見

ているような愉快さがにじみ出ている。萃香は涼介が動かないのを見ると紙を巻いてある見た目の瓶から酒を空の杯に酒を注ぐと近づいてくる。

「ほれ、飲みな涼介」

そう言つて酒を差し出してくる萃香に涼介は目を見開く。涼介の瞳を見ればこいつは何を言つているんだと語りだしそうなほどの雄弁さを感じる。

「これは鬼の薬酒。こいつを飲めばたちまち怪我が治るさ」

萃香はそう言つて涼介の口元に酒を近づける。萃香に譲る様子がなさそうなことを察し、拒否したら無理やり飲まされそうだと涼介は口を開ける。萃香は涼介が口を開けるとグイッと杯を傾け、酒を流し込む。流れ込む酒の思いのほか強い酒精に思わずむせそうになるも、萃香が傾きを緩める気配が無い為に苦しいながらも我慢して無理やり飲み下していく。それでも萃香の杯を傾げる角度がきつく、酒の流れる速度が速く口の端から漏れ出ていく。

「ほれほれ、頑張れ頑張れ。治るもんも治らんくなるぞ」

萃香は苦しそうな涼介の様子を察しながらも楽しそうに角度を緩めない。せめても抵抗にと涼介が萃香の目を睨みつけるも、萃香の瞳には愉快な感情が浮かぶばかりだ。しばらくして思いのほかに中身の入っていた酒が終わると萃香が涼介の口元から杯を離す。

「ちやんと飲めていい子だね、くっくっく」

「くそ」

「だいぶ遠慮が無くなって嬉しいよ」

萃香が涼介の悪態を笑う。その態度に不満が涼介の中で膨らみ言葉になろうとする前に、涼介の中で熱が生まれる。身体が焼けそうなほどの灼熱感が駆け巡る。折れていく箇所の方がどろりと溶解でもしたような気持ちの悪い感覚がする。

「アツ、ぐうううううううううう!!」

身体中を掻き毟りたいと、身体がバラバラになりそうだからギュツと抱きしめたいと、いう衝動が咄嗟に湧き上がるも関節が砕けている為四肢が動かない。もどかしい感覚と、痛みと灼熱感を耐え切れず食いしばった口の隙間から声が漏れ出る。萃香は涼介の様子を静かに眺めている。

「やっぱり霊力が少ないと反応が顕著だねえ」

呑気なその声に何が起こっているのかと説明を求めるように涼介が痛みを耐えながら萃香に視線を向ける。

「お前さんが飲んだ鬼の薬酒は茨木の百薬研つていう宝の力で作った鬼の酒さ。傷を治し、身体を作り直す。健全な者が飲めば一時の間強力な怪力を得る。怪我をしている者が飲めばたちまちに傷が治る。だが、これはただ身体を治すだけじゃない。霊力の弱い

者ほど鬼に惹かれる」

萃香が涼介を見つめながら話をする。涼介は話の内容を痛みで働きの鈍い頭で必死に考える。鬼に惹かれるという言葉に肝が冷える恐怖を感じる。

「じよ、う、だくうううう！」

「今お前さんの身体は直されながら鬼に変わろうとしているのさ」

「ふざ——」

「まあ、そういきり立つな」

叫び出そうとする涼介の声を遮り萃香が諫める。

「まあ、身体が治った時点で私がお前さんの中の鬼を散らしてやるよ。だから、その辺は安心しな。そろそろ、身体も治るだろ」

萃香の言葉に安堵するも、先に説明しておくと文句がなくなるわけではない。涼介は精一杯の気持ちを入れて萃香をもう一度睨みつける。萃香はクツクツと喉を鳴らして笑いをあげる。

「それじゃあ、私が楽しくないじゃないか。でもまあ、この酒はお前さんが私を六人も倒した褒美だから悪いようにはしないさ、かっかっか」

声に出さないのに気持ちにくみ取る萃香の察しの良さが恨めしいと涼介は瞳の力を緩めない。睨む涼介と笑う萃香、しばらくその状態を維持したまま時間がたてば涼介は

身体の熱が引くのを近くする。痛みが和らぐと今度は心の中から何か獯猛な、力強い氣配が広がるのを感じる。

——鬼が……

鬼に意識を飲まれると思う直前にその感覚が引いていく。涼介の心の中にゆとりが生まれ視線を彷徨わせると、萃香が指を空に向けて立てくるくと円を描くように動かしている。身体から鬼の氣配が抜けていくのを涼介は自覚する。少しすれば心身共には完全に落ち着く。むしろ、萃香にポロポロにされる前よりも調子がいいくらいだ。氣がつけば左腕の古傷も治っていることに涼介は氣が付く。

「古傷も治っている……」

「当り前さ、鬼の宝を舐めんじやないよ」

「人が悪すぎるでしょうに」

「でも嘘は言っていないだろう？」

「わざと言わないのも同じようなものでは？」

「聞かれりや答えたさ」

「口を開いた瞬間酒を突っ込んだのは貴女だったと思うのですが」

「でも、あんときや聞く気はなかつたらう？」

萃香の言葉が凶星で涼介は口を噤む。萃香は意地悪そうな笑いを漏らしながら酒を傾ける。涼介は動こうとしてチャリという金属が擦れる音に自分の右足首に鎖が巻き付いていることに気が付く。鎖の先は萃香の右腕の鉄の輪に伸びている。

「これ外してくれないですか？」

「ダメ」

「はああ」

あまりにも話し合う気のない拒否に涼介はため息が漏れる。妖怪の身勝手さを改めて強く感じさせる。自由気ままで人間の事情など考えない妖怪らしい萃香の様子に涼介はいくら言い募っても無駄だろうと思わされる。周囲を見れば今いる場所が博麗神社の屋根の上だと涼介にはわかる。境内の中には人の気配が感じられない。涼介が境内に視線を向けていると萃香が口を開く。

「まあ、どうしても外したきや私から一本取りなよ」

「一本？」

「私を負かせばいいんだよ。眠る前にお前は私に喧嘩を売った。私はお前の喧嘩を買った。単純だろ？」

「勝負の内容は？」

「なんでもありさ。異変が解決するまでに私に負けたと思わせればお前の勝ち。能力だってもう使えるようにしてある。それが出来たら開放して宝もくれてやるさ」

「絶対に勝てないと思っていていそうですね」

「確かにお前さんの闘り方は面白いし私は大好きだったさ。だけど、昨日の晩で底も見えたからね。言うなれば異変が終わるまでの暇つぶしさ」

涼介は萃香の言葉を考える。どうしたつて逃げられないのは確定しているのだから挑むのは、挑戦するのはタダだろうと思ってしまう。戦えるのに勝機が全く見えなかつた圧倒的な相手に挑戦できる、それは僥倖なのではないのだろうかと考える。まだまだ自分は弱いと改めて思わされたのだ。目の前の強烈で鮮烈で苛烈な鬼に挑もうと決意する。

「ほう、やっぱりお前さんは良い顔をするね」

「勝たせてもらうよ、萃香さん」

「これは退屈しなさそうだな、くっくく」

萃香が杯を差し出してくる。涼介も鎖を鳴らして萃香の隣に座ると空の杯に酒を注ぎ、杯を差し出す。

「何に乾杯する？」

萃香が笑みを浮かべて問い掛ける。

「喧嘩の始まりに」

涼介が笑みを浮かべて答えを返す。

「せいぜい足掻け」

「今に見てるといいよ」

「乾杯」

二人は同時にニヤリと笑って酒を煽る。一気に飲み干し杯を屋根へと叩き付ける。

「言い飲みっぷりだ」

「意地があるんだよ、男の子にはさ」

「くつくつく、いいねいいね。その瞳め、その表情かお、その心意気」

「せいぜい胡坐をかいて見下しているといいさ」

「それが強者の楽しみさ」

たった二人の宴会が人気のない神社で行われる。見下ろす鬼と見上げる人間が同じ目線で酒を酌み交わす。この喧嘩がどのような結末をもたらすかをまだ二人は知らない。

それから涼介の挑戦が始まる。霊夢は異変の調査に出ているようで涼介が目覚ましてから博麗神社はずっと無人のままだ。時折遠くの空が弾幕で彩られることから何かしらの調査が行われているのだろうと察せられる。萃香の宣言通りに涼介は萃香が

食事をしている時、酒を飲んでいる時、寝ている時、弾幕を眺めている時隙が有ろうとなかろうと挑みかかる。

「ああ、くそまた骨を……」

「甘い甘い、鬼の膂力を舐めちやいかんよ」

「またこの酒を飲むのか……」

「恵まれてんだ、文句を言わずにスパッと飲みな」

骨を折られれば薬酒を飲み、萃香に鬼を追い出してもらおう。

「この鎖、本当に邪魔だな。奇襲になりやしない」

「そりゃジャラジャラならしてりゃ奇襲にならんさ」

「ほんと性質が悪いな、萃香さんは」

「くつくつく、妖怪何て多かれ少なかれ性質が悪い物さ」

鎖をどうするか頭を悩ませる涼介を、萃香が機嫌よさげに見て笑う。

「なんで意識が落ちない!？」

「私が自分の意識を萃めているからさ。能力の練度が甘いね」

「狡すぎるだろう、その能力!!」

「お前さんのだって十分似たようなものさ」

能力での練度の違いで頼みの綱を断ち切られる。密と疎を操る萃香の能力に涼介が不満を漏らす。

「もう諦めたか、涼介？」

「諦めは悪い方だと自覚しているよ」

「あつはつは、馬鹿な人間は好きだよわたしや」

「こんなうれしいくない好きは人生で初めてですね」

「嬉しそうな顔をしておいて良く言うよ。鬼に嘘を言うんじゃないよ」

「痛い痛い痛い！つねらないでくれよ!!ああ、いたたた、肉が千切れるかと思った……」

「だったら鬼に向かって嘘をつかないことだね」

涼介が萃香につままれたところをさすりながら不満を漏らす。目覚めた日から次の夜、また萃香と二人で杯を交わす。霊夢や他の妖怪の姿をあれからまだ見ていない。気がない境内で二人きりの宴会が今日も続く。二人の距離は出会い方から想像が出来ない程の穏やかさを感じる。互いが互いに好意を持っている様子を隠すことが無い。明け透けなやり取りが行われる。

「だからと言ってどうするんだい？頼みの能力も効かないんじゃないや、厭しいだろう」

「それを考えているのさ。それに意識を萃められる前に落としてしまえばいい話だろう？」

「それが出来ないから困っているのに随分簡単に言うじゃないか」

「それが困難だから頭を悩ませて苦難の声を上げていているじゃないか」

萃香が涼介の答えを聞くと愉快気にからからと笑いながら酒を煽る。

「まったく、飽きない人間だね」

「褒められているんだろかね、それは」

「最高の褒め言葉さ」

萃香の言葉に涼介がため息をつく。退屈をつぶせるとは妖怪からすればかなりの褒め言葉となるだろう。その妖怪が長命であればあるほど褒め言葉としての価値は上がるだろう。そのことを何となく感覚で察している涼介は内心では嬉しさをかみしめる。昨晩から何度負け続けているか分からないのに認める言葉をくれる萃香に認められている心地がして心がこそばゆい。

「そーいや聞くと聞いて聞かなくてよかったね」

「何かありましたっけ？」

「あれさ。お前は私の一人が消えるのを見た時に悲しげな顔していたじゃないか、理由

を聞くとあの時言っていたのを覚えてないかい？」

萃香の言葉にその出来事を思い出す。涼介の胸に苦々しい思いが思い起こされる。

「思い出したみたいだね」

「別の話をしないかな？」

「まあまあ、話をしてみなよ。私の酒を飲んでんだからさ」

萃香がなあいいだろとでも言いだしそうに涼介の身体を揺する。兄に対して駄々をこねる子供の様に見える。揺すられている側がの身体がガツクンガツクンと高速で揺れているなければと注意書きがつく。

「すい、ちよ、やめ——」

「良いだろー、ちよつとくらい話せよー」

「わか、は、だか——」

「聞いたからな、嘘はダメだぞ」

萃香が涼介を揺さぶるのを止めると、涼介が四つん這いになり吐き気を抑えるように深呼吸を繰り返す。きやつきやと楽しげに手を打ち鳴らす萃香に恨みがましい視線を向けながら涼介は気分を落ち着ける。涼介の恨みがましい視線を肴に萃香は酒を飲み、涼介の気分が落ち着くのを待つ。

「はあ、全く勘弁してくださいよ。馬鹿力なんだから」

「私より力の強い鬼だっているさ」

「萃香さんより強い鬼何ているんですね」

「私はこれでも妖怪の山の四天王の一人と言われているんだ。同じ四天王の一人が私より怪力なのさ」

「妖怪の山ってというと天狗のいる？」

「そうさ、天狗たちも私ら鬼が仕切っていたんだよ」

「何となくわかっていましたけど萃香さん大妖怪だったんですね、やっぱり」

「それを知って態度が変わらないお前さんはやっぱり面白いね」

クスクスと笑い萃香が酒を煽る。涼介はその様子に少しだけ疲れたように肩を竦めると、自らの話題に触れるのを少しでも先延ばしにできればと口を開く。

「と言うことはたくさんの鬼が昔は山にいたんですね？他の鬼はどこに行ってしまったんですか？」

萃香の表情が僅かに曇る。新たな酒を杯に注ぎ、口内を潤す様に一口飲む。

「そうさね……それを聞きたいならまずは涼介の話聞いた後だね」

今度は涼介の顔が僅かに曇る。涼介は手元の酒をグイッと煽り、杯を空にすると新たな酒を注ぐ。萃香が涼介に水を向けるように言葉を投げかける。

「それでどうしてお前さんは痛ましそうな顔をしていたんだ？」

「それは……そうですね。昔を少し思い出していたんです」
「消える私を見てかい？」

「ええ、そうですね。私はもともと外で生きていて、そこで一人の妖怪に会いました」
「ああ、確か涼介は紫が外から連れてきたんだろう。私が涼介について元から知っているのはそれくらいと、紫が友人だと言っていたことだけだな」

「ははは、何というか。萃香さんらしい感じがしますね」

「知りたきやこそこそ誰かに聞かずに自分で聞か確かめるさ」

「それでおメガネに叶ったと？」

「ああ、想像以上に面白い奴だったよお前さんは」

「涼介が嬉しさ半分迷惑半分で苦笑する。話を進めようとさらに酒を飲み口の滑りをよくする。酒で潤った口で話題を戻そうと言葉を重ねる。」

「それで消える萃香さんを見て、外でその妖怪が死ぬ時の事を思い出したんですよ。彼女は消えるように死んでいきました」

「へえ、そうかい。それでそれとお前さんの関係は？」

「恋人同士でした」

「それについては……難儀だねえ」

萃香がどこか複雑さを感じさせる声でつぶやくと続く言葉を呑み込む様に酒を流す。

「それじゃ次は萃香さんの番ですよ」

「私かい？ そうだね……私ら鬼は人間が大好きだったんだ」

「それはなんとなくわかりますね。自分で言うのもアレですけど萃香さんって、足掻いて工夫している人間を見るの好きですよね」

「おお？ どうしてそう思うんだい？」

「だって私が考えている時は酒が片手にありますけど楽しそうに見ていきますよね。なんか妖夢を見るゆゆさんを思い出しますね。それに工夫や考えたことを実行した時もあるんだかねどねじ伏せた後に褒めてくれるじゃないですか。それだって成長した橙を褒める藍さんみたいですからね、そうなのかなって思っていたんです」

「お前さん結構目ざといね」

「萃香さん程じゃないですよ」

「くくく、年季が違うさ」

萃香は本当に嬉しそうに笑うと機嫌よさげに酒を飲む。失くした宝物を見つけた子供の様な見かけ相応の笑顔を浮かべる。

涼介は見守る様な、成長を喜ぶある種親の様な萃香の様子にこの短い時間で好意を抱くようになった。だからもつと鬼の事を知りたいと涼介は思う。

「それで人間好きな鬼はどこに行ってしまったんですか？」

「地底に籠つちまつたのさ……一人残らずな」

「それは……なぜ？」

「人間が嘘をつくからさ。だから鬼は愛想つかして消えちまつた」

涼介は話がよく見えず萃香にかけける言葉が見つかからない。萃香は涼介の様子に苦笑すると言葉が続ける。

「私ら鬼が強すぎて努力の方向がお前さんとは違って、嘘が変わつちまつたのさ。酒盛りと呼んで毒を混ぜたり、迷い込んだ人間のふりをして寝首をかこうとしたりな。だから鬼は人間に愛想つかせて消えたんだ。人間みんながお前さんみたいだったらこうはならなかっただろうね」

萃香は杯の水面に映る自分を静かに見つめた後、水面の自分の姿を隠す様に杯の中の酒を飲み干す。

「好いた相手が死んでしまった私と、好いた相手が変わって居なくなってしまった萃香さん達は似ている所があるかもしれないね。一緒にするなど言われてしまいうですけどね、ははは」

涼介は元氣のない萃香を励ましたくて冗談めかし嘯くように言ってみせる。萃香も涼介の気遣いを察したのか杯に新たな酒を注ぐとニヤリと笑う。

「両想いだったお前と、片思いの私らを一緒にするんじゃないよ」

「こいつは失敬」

「まったく本当に飽きない人間だね」

クツクツと萃香が笑う。

「それで地底に籠ってしまつた萃香さんがどうして地上で宴会を起こす異変をしているんで？」

「どうしてだと思ふ？」

「今年は春が短くて宴会が少なかつたからつて理由ではないんでしよう？」

「実はそれもちよつとだけあるのさ」

「それは……何とも呑気な異変ですね」

「私もそう思うよ」

涼介は萃香が話す気が無いのだと思い、これ以上追及することなく酒を飲む。明日は前回の宴会から三日目で最初の異変から十九日目の七回目の宴会が行われるはずだと涼介は考える。その時ならば萃香から一本取れる隙が生まれるだろうと涼介は考える。その隙についてどう萃香を突破するか考えようと思ふに耽ろうとする涼介の耳に萃香の声が聞こえる。

「今の幻想郷は騒がしい……変化が起きている。だから、こつやつて宴会をして騒いでりや、喧騒に惹かれたアイツらも戻つてくるんじゃないかと思つて宴会を起こしているの

さ」

萃香はそう言うのと楽しげに喉を震わす。遠くを眺める萃香の視線は過去の世界か鬼が戻ってきた未来を夢想しているのかどちらだろうか、涼介にはわからない。その様子が今まで見たどんな時でも堂々としている萃香らしくないと思ひ言葉をかけようとするも涼介は口を噤む。

——過去を引きずっている私が言っている事では無い

涼介はそう思うと言葉を呑み込む為には酒を飲む。その後二人は萃香が拡散した自分が見た巫女たちの話をし、涼介は普段の彼女たちの話をするなど夜が明けるまで話は続いた。夜明けとともに涼介は軽く眠りにつき、夜に異変に、萃香に勝つために英気を養う。異変の終結は近い。

日が落ち、夜がやってくる。神社の境内に人妖達が集い始める。人に亡霊、悪魔に魔女、天狗、花妖怪、妖精にとその様は混沌とした百鬼夜行の様にも見える。神社の屋根の上にいる涼介と萃香に気が付く者はいない。萃香が能力で自分たちに向かう注意を

散らして見えても認識できなくしている。

「異変解決に動いている人間たちの姿が見えないね」

「萃香さん、ずっと見ていたんじゃないのですか？」

「最後位驚きが欲しくて今日の朝には見るのをやめちまったよ」

「へえ、真相というか犯人が分かっているといいですね」

「私の隙をつくためにかい？」

萃香が笑みを浮かべ涼介を見る。涼介は笑顔を浮かべるだけで何も答えない。萃香は涼介の様子にこれは楽しめそうだと笑みを深める。しばらく経てば集まった人妖達が宴会を始める。涼介と萃香もつられて酒を飲み始める。霊夢、魔理沙、咲夜、妖夢の姿はいまだ見えない。

「ううん、これはまた三日後になりそうかねえ」

「いや、たぶん今日で終わりだと思えます」

「嫌に確信的じゃないか」

「私あの娘たちを知っている、萃香さんは知らない。その違いですよ」

「なるほど、良い信頼だね」

「私は裏切ってしまったけどね」

「もつと強く成りな」

「そうですね……強く、強くなりたくないなあ……」

涼介の羨望のこもった声に萃香が笑いを漏らす。視界の端に神社の境内に向かって飛んでくる人影が見える。近づけば霊夢達四人であることが分かる。霊夢達は神社の境内の上空に止まると身体を軽くほぐす様に動かすと言葉を発する。

「ほら、紫。さつさとしなさい」

「そうだけ、スキマ。ここで逃げるとまた酷いぜ」

「追い詰めてまた同じことの繰り返しをする時間の浪費は願い下げね」

「さあ、紫さん。観念してください」

四人が空間に向けて話しかけると、スキマが現れボロボロの服を纏った紫が出てくる。服のあちこちが焦げ、解れ、切れている。明らかに四人がかりでボコボコにされたのだろうかと解る跡が見て取れる。

「しくしく、こんな目に合うなんて悲しいわ霊夢」

「あの日にあんたが、涼介さんが店にいるように仕向けたことは割れてんのよ」

「私も霊夢も聞いているんだ。今更言い訳は見苦しいぜ」

「だから前日に言いに行つたのに、その日に二人も店に行くなんてついてないわ」

「どうでもいいからさつさとしなさい。時間がもつたないわ」

「紫さんもまた三日も追われ続けるのは勘弁願いたいのではないですか」

涼介は会話の内容から紫がこの三日間ずっとあの四人から逃げていたのだと知る。萃香も人間四人の容赦のなさについていつい苦笑いを漏らす。鬼みたいな勝手さに人間もやるもんだと感心する。紫は一度わざとらしくため息をつくと手に持つ扇子を涼介達に向けて構える。萃香の纏う気配が変わる。涼介が萃香を二人気絶させた後に見せた真面目な雰囲気となる。涼介も周囲の変わり始める雰囲気にいよいよ始まると、萃香の後方で杯を傾けながらその時を静かに待つ。紫が言葉を発する。

「しようがないわね。ほら、あなた達にも見えるようにしてあげるから良く見なさい」

紫が手に持った扇子を下に向かつて空をなぞる様にゆつたりとおろす。紫の背後に並ぶ様にいる四人の瞳が涼介と萃香をとらえる。

「あれ、どうした紫？というか、そいつら何？」

萃香が惚けるように口を開く。涼介はひとまず自分の出る幕ではないと静かに杯を傾ける。

「紫、あのちっこいのが異変の犯人でいいのよね」

「まあ、そうだろ。後ろにあのバカもいるし」

「と言うか涼介さん……呑気にお酒飲んでるんですけど……」

「あの店の惨状を見た時の私と妖夢の心配を返してほしいわね」

「ほら、言ったじゃないか。賭けは私と霊夢の勝ちだぜ」

「もう私は下に降りて見ていいかしら？」

「ああ、もうあなたに用はないわ」

「霊夢うう」

「ああ、もう引つ付くな」

霊夢達の話から察するに涼介の安否で賭けが行われていたらしいと涼介は察する。信頼されているのか、呆れられているのか分からないと涼介に苦笑が浮かぶ。

「おいおい、まさか完全無視喰らうとは思ってもみなかったよ」

「幻想の空飛ぶ少女達は私とは比べ物にならないくらい遅いですよ」

「根性見せなよ、涼介」

「頑張っている途中ですよ」

「情けない」

「そのこのアンタ。うちの神社で宴会起こすのやめなさい、迷惑よ!!」

「別の場所ならいいのかよ、霊夢……」

「私に迷惑が無いならいいわ」

「何故、霊夢が博麗の巫女をやっているのか、私時々本当に良くわからなくなる」

「何よ、妖夢。文句あるの？」

「ほらほら、霊夢も妖夢も喧嘩しないで」

「いえ、私は別に——」

「ああ、もうじれつたいさつさとやって異変を終わらそうぜ」

魔理沙がそう言つてスペルカードを構える。

「さあ、だれとやりたい。選びな！お勧めは無論私だぜ」

「はあ、私がやるからあんたは引つ込んでなさいよ」

「いえ、ここは私が。お嬢様も見ているので是非」

「私が涼介さんを助けます!!」

「いやいや、無視の次はモテモテだねえ」

魔理沙が快活にそう言つて笑つてみせる。すると、相手を争う様に霊夢が、咲夜が、妖夢が名乗りでる。萃香が楽しそうに笑うと指を持ち上げくるくると回す。

「四人一辺に相手をしてやるよ」

萃香の言葉と共に幻想郷中に薄く広がっていた妖力を帯びる妖霧が境内の上空に集まり始める。霧は四つに分かれ集まると、四人の萃香が現れる。

「「さあ、やろうか」」

「これは面倒くさそうね」

「これ以上増えないよな。そうなったら面倒だぜ」

「六人以上には増やさないと約束してやるよ」

「五人目は誰と闘うのかしら？」

「早い者勝ちと言う事で構わないのではないですか？」

萃香がこれ以上増やさないと言明し、咲夜が配分に疑問を呈する。妖夢が刀を抜いてわかりやすい答えを出すと、他の三人も領きを持って返答とする。

「それじゃあ五人目を倒した人が説教を出来るで良いわね」

「それでいいわ」

「問題ないぜ」

「私もそれで問題ない」

「いや、それ普通に問題あると思うのだけれど私だけだろうか」

「涼介さんの意見は聞いてない」「しおらしくしているといいぜ」

「反省がまだ足りないみたいですね」「幽々子様の冗談よりも性質が悪いです」

涼介が苦言を呈するも四倍になって返ってくるためこれはもう諦めようと口を閉ざす。萃香はクツクツと喉を鳴らすと視線を空の少女達に向ける。それぞれが一人の萃香と対峙して、互いの邪魔にならない様に距離をあげる。全員が空でカードを掲げる。

「そろそろ宴会開始の時間ね。涼介さんを返してもらおうわ」

「真実は眼では見えない、耳では聞こえない、真実は斬って知るもの。貴女の真実見せてもらおうわ」

「学ばない馬鹿への説教の前にお前を倒さないといけないようだな」

「妖怪退治は私の仕事。倒す事は出来て当然なのよ」

「「我が群隊は百鬼夜行、鬼の萃まる所に人間も妖怪も居れる物か試してみるといい

!!」」

宴会場の空に数多の弾幕が花開く。

子供の喧嘩に供する三五杯目

「さあさあ、行くぜ」

「かっかっかっ、威勢の良い嬢ちゃんだ！ かかってきな!!」

魔理沙が風を切って夜空を駆け抜け弾幕をばら撒く。それを真っ向から振伏せる馬鹿げた物量の弾幕を萃香が放ち迎え撃つ。

「おいおい、こりやすげえな！ 五人に分かれてんのに何だっつてんだ!!」

「鬼を！ 山の四天王の伊吹萃香を舐めるんじゃあないよ!!」

「鬼だっつて!?! 幻想郷にいないはずじゃ!?!」

「じゃあ、今日の前にいるのは何なんだろうな!! あっはっはっはっは!!」

魔理沙が持ち前の速度を生かし萃香の弾幕の隙間を針の穴を抜けるような器用さで飛ぶ。霊夢の闘いを何度も歯噛みしながら観て、パチュリーに力の差を見せつけられながらも決して諦めず喰らい付いてきた魔理沙の力は確実に成長している。弾幕ごっこというルールの中だけでの強さかも知れないが確かに魔理沙は成長している。弾幕の中心、萃香目掛けて魔理沙が翔ける。

「知らない者が目の前にいる、ワクワクするぜ!! 魔法使いの好奇心魅せてやる!! 天

儀・オーレリーズソーラーシステム!!」

「なんだいなんだい、地上にも面白い奴がゴロゴロいるじゃねえか!! 萃符・戸隠山投げ!!」

魔理沙の魔法が空を彩る。

「切つて知るたあ、面白いこと言うじゃねえか」

「私は剣士、切るとは即ち闘う事。この闘いをもつて貴女を知ろう」

「くつくつくつ、これだから武芸者つて奴は嫌いになれねえ。テメエの腕で鬼が切れるか試してみな!!」

「魂魄流剣術指南役、魂魄妖夢! 押し通る!!」

「元、妖怪の山四天王の鬼の伊吹萃香! 受けて立とう!!」

刀を抜いた妖夢と萃香が空で激突する。弾幕を放つのと平行に、両者が近づき近接格闘ドッグファイトを行う。弾と打の応酬が空で火花を散らす。

「ハア!!」

「よつと!」

拳と刀がぶつかり火花が散る。妖夢が驚愕に目を見開き、萃香がニヤリと笑いをこぼ

す。

「並の鬼なら切れるだろうが、密度を高めた私の肌にや通らねえな!!」

「くううう!」

罅迫る様にぶつかると妖夢の刀ごと体を萃香が腕をふるってはじきとばす。空を滑る様に後方へ飛ばされた妖夢が姿勢を正し、萃香を見据え刀を一度虚空へ向かい空振りする。生まれるものは飛ぶ斬撃。

「刀本体で切れねえのにそんなもんが通ると思つてんならあめえな!!」

萃香は飛んできた斬撃に向かって腕を打ち払う。妖夢の放った斬撃が萃香の拳で破壊される。萃香はニヤリと笑つて妖夢を見る。

「どうしたもう手詰まりか?」

「私の刃は貴女に届いた様です」

「あん?」

妖夢が萃香の腕を指差す。打ち払った腕に僅かな傷が見て取れる。ほんの僅かな傷ではあるが確かに妖夢の刃は萃香に届いた。

「へえ、こいつは驚いた。けど、これだけじゃあ勝てないぜ」

「そうですね。まだまだ足りない。貴女を切るには鋭さが足りない」

「じゃあ、どうするってんだい?」

「能力を、靈力をもっともつと研ぎ澄ませる。この闘いで貴女に届かせる。以前の異変で私は魔理沙に負けた。悔しかった、負けた事もそうだけれど約束を果たせなかった事が死ぬほど悔しかった。だから私は努力した。涼介さんを守る為に、幽々子様を支える為に、だけどもまだ足りない、まだ足りないんだ。貴女を糧に私はもつと成長する」

「私を糧にするか……くつくつくつく、つつい昔の人間を思い出しちまうな。良いだろう。お前の剣が私の骨まで届けば勝ちをくれてやる、勝負と行こうか！超えてみない!!」

「ならば私は骨を絶とう」

「ああもう全く気の良いやつらだ」

剣戟と拳戟がしのぎを削る。

「霧になつて攻撃を避ける。当てるまでに時間がかかりそうね」

「時間を止めるたあ、馬鹿げた能力だ。楽しめそうだね」

咲夜と萃香が互いに掠る事すらなく空を舞う。妖力弾と靈力を纏うナイフが空を飛び交い空を切る。

「面倒な……」

「そう嫌うなよ、一緒に楽しもうじゃないか」

「嫌ってないわ、面倒がつているだけよ」

「あつはつはつは、面倒なだけとは言うじゃないか」

「当たり前よ、全ての時間は私の物。たとえ貴女がどうやって避けようといつかは時間に捕まるわ」

「そうかいそうかい……それならどっちが先にぶち当てられるか勝負と行こうか？」

「弾幕ごっこでなく？」

「ああ、先に相手に届かせた方が勝ちさ。受けるかい？」

「……なるほど。貴女そういう妖怪なのね？」

咲夜が萃香に問いかけると、萃香は嬉しそうにニヤリと笑い咲夜に応える。

「ああ、そうさ。鬼とは人に勝負を持ちかけ試練を与える妖怪。お前さんが鬼を超えられるか試してやろう」

「貴女に時が捕まえられるかしら？」

「私相手に鬼ごっこことは……くっくっくっく!!」

「勝負開始」

そして二人の姿がその場から消える。姿を消しては別の場所に現れる。咲夜と萃香

は一時たりとも同じ場所に留まることなく、空間を飛ぶ様に競い合う。振るわれ物はナイフと拳。弾幕はもう一つたりとも飛んでいない。

「妖怪退治が仕事ね……私を、鬼をただの妖怪だと思ってるならお前さんじゃあ勝てねえよ」

「それは一体どういう意味かしら？」

「さあ、どうだろうねえ」

「はあ、もうまったく」

霊夢が一度面倒臭そうに肩を回す。霊夢の自然体な様子に萃香が笑みを深める。

「さてさて、アンタは戦わなくて良いのかい？他の三人はもう始めちゃまっているよ？」

萃香が霊夢にそう言葉をかけて他の三人を見る。魔理沙は弾幕ごっこを、妖夢と咲夜はそれとは違う勝負をそれぞれがしている。

「そうねえ、私もそろそろ始めようかしら？」

「何でやるかい？私は何でも構わんよ」

「涼介さんとはどうやって戦ったの？」

「ルールなんて特に決めてなかったね。強いて言うなら私が涼介をさらおうとして、涼

介はお前さんらが来るまで耐えようとしたってところかな？」

「ふうん……そう」

「そうさ。いやあ、涼介もやるもんだよ。全然諦めないから結局四肢の骨砕いて止めてやったんだよ。それでもあいつは諦めなかつたね、私を六人も気絶させやがったしな」
萃香が涼介との店での勝負を思い出し笑みを深める。小さな声で良い喧嘩だったと呟けば、萃香の背筋にふと僅かな寒気が走る。視線を目の前の霊夢に向ければ、霊夢が感情の乗らない視線を萃香に向けている。長い間、散々人を見てきた萃香にも霊夢の内心を窺い知ることが出来ない。

「そうなんだ……ふうん……」

「おや、怒ったかい？」

霊夢は手に持った御幣をお手玉でもする様に投げては掴むを繰り返しながらつぶやく。御幣を投げる霊夢に萃香が問いかける。霊夢は萃香の問いかけに答えることなく口を開く。

「それじゃあ勝負しましょうか？」

「おつ、決めたかい。何でやる？」

「真剣勝負」

「そいつあ……また大きく出たじゃないか？」

萃香の声に少しだけ怒りが混ざる。妖力が漏れ出る。大妖怪と呼ぶのに全く持つて不足のない、むしろ余りあるほどの力が発される。分割されているとはとても思えないほどの濃密な妖力が溢れ出る。しかし、霊夢の様子に変化はない。

「涼介さんとはアンタが殺さない様にする以外は似たような物だったんでしょ？」

「あ？……いや、まあ、そう言われりや確かにそうだが……あの時と今じゃ前提が違うぞ」

霊夢のあまりに自然体な様子に萃香は虚を突かれ威勢が削がれる。

「これは私が感情を引きずっている証拠」

「ん？」

「勝負の方式は私の感情で決めたわ。でも安心なさい、勝負中は全部を浮かせて博麗の巫女として全力で叩き潰してあげる」

霊夢が萃香に言葉をかける。涼介に対して目の前の妖怪が四肢の骨を砕くほどの蛮行を働いた。霊夢はその事で以前の冥界での事を思い出した。先ほど見た感じの涼介からは萃香に対する負の念も、怪我の跡も見当たらなかった。だけどそうではないのだ。

——私の予感当たっていた、けど足りなかった

——だからこれは八つ当たりだ

変な予感だったのは涼介にとっては良い結果になるからなのかもしれない。だけど、四肢の骨を砕かれるほどの出会いが涼介にとっては必要だったとしても、そんな物霊夢には関係ない。不甲斐ない自分への怒りと、目の前の妖怪への怒りが霊夢を駆り立てる。

「全力で真剣勝負ねえ。後悔するよ？」

「いいえ、しないわ。弾幕ごっこじゃないのなら私はいつまでだって浮き続けられる」

霊夢から漏れ出ていた霊気が安定し始め弱まっていく。しかし、弱まる気配とは裏腹に萃香は霊夢の様子に僅かな不気味さと警戒を覚える。

「魔理沙にはズルいと言われたからスペルにして時間制限を付けた。でも真剣勝負だったら関係ない。魂を浮かせば格が上がる。存在を浮かせば誰も私に触れられない。心を浮かせば私に隙は生まれない」

「おいおい紫……こんなやつどこで見つけてくるんだい……」

萃香の口元が無意識に引きつる。霊夢の言葉に合わせて、萃香の目の前で霊夢の格が、位置が、心が変化する。文字通り格が上がり、輪郭が臃げになり触れることが叶わなくなり、僅かに高ぶっていた霊夢の戦意さえ感じられなくなった。霊夢が唱える言葉

に魂が宿る。

「夢想天生——」

「こりや、勝負をミスったな……」

幻想郷博 圃 霊 夢の守護者伊と萃まる夢、幻吹、そして百鬼夜行香のルール無用の真剣勝負が始まる。

「ああ、どいつもこいつも良い人間じゃねえか、くつくつくつく」

萃香が涼介の前方で立ちながら空の闘いを眺める。機嫌よさそうに萃香が笑う。涼介も空の四人を見上げながら笑みを浮かべる。みんなも戦っている、ならば自分も最後の勝負に挑もうと涼介は杯に酒を注ぐ。このまま待っていても誰かが異変を解決して自分の挑戦権が無くなってしまおうと考える自らの思考に意外と好戦的だなど涼介は苦笑しながら、酒の満ちる杯を見つめる。戸惑う自分の背中を押す様にもう一度空の四人を眺める。一度大きく深呼吸を行い、視線を杯へと戻す。

——さあ、挑もう！

——さあ、超えよう憧れを!!

決意を固め、酒を煽る。涼介の瞳に剣呑な光が宿る。足に巻きつく重りの鎖を意識する。行けると涼介は確信し、前方で背を向け空の霊夢達を眺めている萃香めがけて飛びかかる。

——ジャラジャラジャラ

萃香は背後で鎖が音を鳴らした事で涼介が動き出した事を知る。思ったよりも遅かったと内心でほくそ笑みながらも余裕をもって振り返る。

「随分とのんびり——」

「遅い!!」

振り返り切る前の萃香の首に涼介の腕が伸び小柄な萃香を持ち上げる。神社の屋根から神社の裏手の地面めがけて萃香の体を叩きつける。

——ドッ!!

「かはっ!!」

地面に硬いものを打ち付けたような音と共に、地面に打ち付けられて萃香の肺から空気が漏れ出る。さらに地面には打ち付けられた萃香を中心とした放射状のひび割れが走る。萃香の思考が困惑に染まる。涼介の動きが喫茶店の時とはまるで違う。明らかに早くなっている涼介の動きに、タイミングを読み間違えた萃香は地面へと叩きつけられる結果となった。

「ハ、んの——」

とつさに悪態を吐こうと口を開きかけるも、涼介に触れられている事に気がつき焦りが浮かぶ。意識を落とされると思い、自身の能力で意識を萃めようとする。涼介の口元に笑みが浮かび、萃香の瞳が驚愕に見開かれる。

「てめえ」

「ハズレだよ、萃香さん」

——こいつ、意識じゃなくて能力とそれを使おうとする感情を落とすやがった!!

「能力への干渉する感覚を教えてくださいましたのは萃香さんですよ。意識か能力、二分の一の賭けは私の勝ちですね」

涼介の口が言葉を吐き出す。口調に変化はないが強い高揚を涼介の声から萃香は感

じる。一本取られた事への驚嘆と、一杯食わされた事への怒りが萃香の中で湧く。咄嗟に掴まれている腕を喫茶店の時の様にへし折って引きはがそうと、自らの手に掴まれた事で落とされたなけなしの妖力をこめて掴みかかる。接触し続けているために今なお様々な力を落とされ続けている。早くしないと拘束を外せなくなると萃香の中に焦りが浮かぶ。

「へし折ってや——」

腕を掴み、力を込める。しかし、涼介の腕が折れない。そして萃香はやつと気がつく。涼介の腕が赤みを差している事に。いや、腕だけでなく涼介の肌が赤く染まっている。それは萃香にとっては見慣れた仲間の、一般的な鬼の肌。今度こそ萃香から明確な叫びが吐き出される。

「テメエ！ 華扇の薬酒煽りやがったな!!」

「ご名答！ 伊吹萃香ア!!」

「人間辞めるタア！ 焼きが回ったな!!!」

「鬼を追い出す方法だってあんたから学んでいるんだよ!!!」

「な!?! まさか……憑いた鬼を落とすのか!?!」

「私は人間を辞める気はまだない」

ググツと首に込められる力が強まるのを萃香は感じる。

「私の勝ちだ、萃香さん」

「舐めんな、まだま——」

まだまだだと、鬼をなめるなど啖呵を切ろうと口を開くも後が続かずしぼんでしまう。萃香は自分の感情に気がつくど盛大に笑い声をあげて笑い出す。

「あ？ くく、ははは……あつはつはつは！ テメエマジか？ はつはつはつ、こんな、こんな勝ち方、くそ、あつはつはつはつ!! 完敗じゃねえーか、いつひつひ、あつはつはつはつはつはつ!!」

「こんな不意をついた不本意な方法でしか勝てないんですよ。萃香さんは強いから、真正面からでは勝てないからこんな手段しかなかったんです。萃香さんが鬼だからこそ勝てたんです。嘘が嫌い感情に従うそんな鬼の萃香さんだから勝てたんです」

「はつはつは、そんな情けない事言うなよ。こりや立派だ、完敗だよ。まさか一本取られた、こりや負けだわ、それ以外の感情の多寡を軒並み落としまいやがって。私は負けを認めさせられたんだ、立派な勝ちだ」

「誇れませんよ、こんなだまし討ちみたいな方法」

「いいや違いね、こんなものだまし討ちでもありやしねーよ。油断した私が馬鹿なのさ。完璧に反撃の手を潰したと、テメエには逆転の手が無いと高をくくって胡座かいてつから負けたんだ。飼犬に手を噛まれるとはこの事だ。誇れよ人間、お前の勝ちだ」

この戦法を取られたのが紫や天狗の文であればここで終わりにはならなかった。彼女らは思考を優先する事ができてしまう。しかし、感情のままに生き、自身の思いを偽らない鬼に対してはある種、致命的と言えるほどに効果が出る。萃香の言葉に涼介がわずかに複雑そうな顔をするも、萃香はまっすぐな瞳を涼介に向ける。

——ああ、もうまったく

「大昔を思い出すじゃねえか……」

満足げであり、同時にひどく寂しげな表情で萃香は言葉を漏らす。涼介はその表情に心を強く揺さぶられる。割合としては三割ほどが鬼となつている今は鬼の正直な、感情のままに行動する性質が涼介にも宿つている。それを能力で抑える事もできるが、みずからの心をだますようで気が乗らない、どうにもその気が起きないのだ。それがもう鬼に惹かれていてという事を自覚しながらも、止められない言葉を発する。

「それは……どんな昔なんですか？」

「興味があるのかい？」

「今みたいな遠くを見る目をあの子もしていた時があつた。同じ過去ではないかもしれない。でも、それでも聞きたい」

「昔も昔、大昔さ。まだ私だって今と比べ物にならないくらいに若くて人間たちの術も今とは比べ物にならないくらい研鑽されていなかった時代。私らも人間たちも空を飛ぶなんて発想もなくてただ身に余る妖力やらの力で体を強くして殴り合う、そんな時代があったのさ」

「それは、なんとも人間たちには大変そうな時代ですね」

「だろ、鬼と足止めて打ち合うなんざ昔だろうが今だろうが狂気の沙汰さ。だから昔の人間は工夫したのさ、知恵を絞ったのさ。能力を持つ人間が、私ら鬼の命に届くほどそれを特化させた。丁度今のお前みたいにな。楽しかった……本当に楽しかった……吹けば飛ぶような靈力しか持たない弱い人間が私らの命を取ろうとギラギラしていた。だから私ら鬼は自分たちを倒した人間の勇気と知恵を讃え宝を渡した、昔話にもよくあるだろう」

「打ち出の小槌とかですか?」

涼介の問いかけに萃香が頷く。

「ああ、そうさ。他にも金銀財宝を得た鬼が島の桃太郎なんてのもあるね。話じゃ犬、猿、雉だけど実際はそんなもんじゃなかった。動物を役する能力で見渡す限りの平原が、空が、一面黒く染まるくらいの獣を率いて襲ってきてさ……くく、あれも楽しい喧嘩だった。本当に楽しい喧嘩ができた時代だったんだ。未だに地底にいる鬼の中にや、

あの時死んでりや、打ち取られていりや良かったなんてボヤクやつも多くいる」

昔を思い出していた萃香の中で、ある感情が高まる。今討ち取られるなら本望だと。気持ちよく死ぬそうだと芽生えた感情が顔を出す。仲間が戻って来るようにと希望のない異変をガキみたいにこのまま起こし続けるよりずっとスッキリする。萃香はそう思ってしまった。だから、その言葉がそのまますんなりと萃香の口を突いて出る。

「涼介、私の首を獲っちゃくれないかい？」

満足そうな、本当に満足そうに綺麗な笑顔を浮かべて萃香は言う。例えそれが涼介の能力で感情の多寡を操作された結果の産物だとしても、今この時は嘘ではない。確かに今萃香は偽りなく本心から打ち取られても本望だと思ってしまった。いや、もしかしたら能力による誘導が無くとも同じ結論に至ったかもしれないとも萃香は思う。対する涼介は、萃香のその声に、死を懇願する願いに、満足した表情に沸騰するほどの感情の高まりが起こる。湧き上がる感情は悲しみであり、怒りである。湧き上がる感情に身を任せ、萃香の首から手を離しその襟首を両手で掴みあげ泣きそうな顔で怒鳴り散らす。

「……けん……」

「ん？ なんだって？」

「ふざけんな……ふざけんなよ！ どうしてあんたら妖怪はそうやって笑うんだ!! 死にゆくときに笑うんだ!! 死を与えろと言いながら、どうしてそんなに安らかで満足し

た表情で笑うんだ!!! ふざけるな!!!」

「……おいおい、いきなりどうしたってんだよ」

突然の涼介の剣幕に萃香が困惑の声を上げる。襟首を掴まれ引かれたことでぶつかりそうなほど二人の顔は近くにある。萃香は涙がこぼれそうになっている涼介の瞳に深い悲しみの感情を見つける。

「あの時だつてそうだった! あの花は私の腕の中で満足そうに笑いながら消えていった!! 私に生きてと笑いかけながら死んだんだ!! 恐れを奪つて殺した私に向かつて笑いながら生きると言つたんだ!! 勝手すぎるだろ!! 自分の中だけで一人で満足して何も言わずに死にやがつて!! 私の気持ちはどうなるんだ!!」

涼介の叫びは止まらない。頭の中が沸騰したような感情に支配される。能力で萃香を抑えていたことさえ止めてしまう。まるで酒に酔つた時のように気持ちの抑制が効かない。現に酔っているのだろう。酒にはなく鬼に酔っている。涼介は感情のままに生きる鬼の部分に惹かれ振り回されている。しかし、だからこそ混じり気のない本音が吐露される。

「わかんねえよ! 何考えてんだか分からねえんだよ!! 紫さんに幻想郷へ誘われたのに断つた理由だつて!! 最後に自分の能力で私の中から自分の記憶を隠したことだつてわかんねえよ!! 紫さんが戻してくれなきやずつと忘れたままだつたんだぞ!!」

決壊したダムのように、普段は能力で落としていた感情が高まり、次々と言葉となつて溢れ出す。萃香は突然な涼介の変貌に驚いていた思考が正常に動き出すのを知覚する。そして同時に萃香の中でも怒りが湧き出る。

——ふぎけんじゃねえぞ、この野郎!!

目の前にいるのに自分を見ていない涼介に、自分に負けを認めさせたのに情けない姿を見せる涼介に萃香の中で怒りがわく。だから萃香も怒鳴り返す。

「私に言われてもそんな話知るかボケ!!」

「分かっただよそんなこと!!」

「分かっただよええだろ!!」

「ぐうっ!」

萃香の拳が涼介を殴りつける。掴みあげられた襟首が離され、二人の距離がわずかに開く。殴られてたたらを踏む涼介に向けて萃香が怒鳴り声を上げる。

「いいかよく聞けこの馬鹿野郎! 妖怪が笑って死ぬるのがどれだけ大変だ!! 死に場所を見つけられることがどれほど嬉しいことだか分かっただよのか!!!」

「んなこと人間の私が知るか! 死に場所なんて探してんじゃねえ!!」

涼介が叫びながら萃香に向かって殴り返す。打算も何もない、只々感情のままに殴り返す。

「っ！ 殴りやがったなテメエ！」

「いっ！ 先に殴つたのはアンタだろうが!!」

涼介と萃香の二人は互いに殴りあいを始めながら叫び合う。叫んでは相手を殴り、叫び返しては殴り返す。まるで癩癩を起こした子供同士の喧嘩のように両者は真正面からぶつかり合う。

「私がテメエに教えてやらあ！」

「勝手なこと抜かしているんじゃないやねえ!!」

「妖怪つてのはな！ 精神が死ななきや腐るほど長く生きんだよ!!」

「馬鹿にすんな！ それぐらい知ってんだよ！」

「いいや知らねえな！ 精神が死んだからってすぐに死ぬわけじゃねえんだよ！」

「アア!? なにがいたいんだよ！」

「弱つてジジイババアみてえになって百何十年も死んだみてえに生きんだよ!!」

「だからそれがなんなんだよ！」

「だから、テメエの好いた相手は幻想郷こつちに来てお前が死んだ後にそうなつちまうのが耐

えらんねえから死んだんだろうが!!」

「そんなこと！ そんなこと分かんねえだろ!!」

殴り合いで押し負け萃香から離された涼介が何処か縋るような、泣き出しそうな響き
が混ざる声で怒鳴りあげる。殴り合う二人の拳が止まる。萃香の叫びが涼介をうちつ
ける。萃香の感情も目の前の人間に、目の前に鬼に惹かれ高ぶっていく。

「笑ってお前の腕の中で死んだらどうが！ 他のどこでもないお前の腕の中で!! ク
ソみてえに長え生の中でそこで死んでもいいって思えたんだらうがソイツは!! 殺さ
れてもいいってほどに愛されていたんだらうが!!」

涼介が萃香の言葉に瞳を見開く。

「だったら……だったら幻想郷に来てもつと一緒に生きてくれりゃいいじゃねえか!!」

「それはお前らの時間人間の物差しだ！ 私らからすりやお前らの一生なんてほんの一瞬
だ！ だからこつち幻想郷きてズルズルみじけえ時間に縋って生きて、テメエがあつさり死ぬ
のを見るよりスパツと死を選んだらだろ!!」

「なんだよそれ！ 勝手すぎんだらうが!!」

「確かにそうだ！ こつち幻想郷来てテメエが死んだ後に自殺しても良かったんだ！ それを
選ばなかったのはソイツの弱さかもしれねえ!! でもな、勝手なのが妖怪なんだ！ 勝
手も勝手さ、あたりまえだろうが!! それが嫌なら妖怪なんざに情を抱くな!!」

あまりにもな萃香の言葉ではあるが、涼介はそれに対してぐうの音も出ない。

「胸を張れよ！ 愛されていたんだって誇れよ！ テメエ男だろうが！ 意地があるんだろ!?」 だつたら意地張り通して生きろや!!」

萃香の叫びに圧倒される。体の芯が熱くなる。萃香の声に心が震える。

「過去を引きずってんじゃねえ！ 過去を振り返つたつてどうにもなんねえだろうが！ 過去は所詮過去だ、無い物ねだりしてもしかたねえんだよ！ 私から勝ちを一度でももぎ取つた人間なら引きずらねえで背負うぐらいの気概を見せろや!!」

涼介は思わず顔がにやけそうになる。愛されていたのだと肯定されて嬉しくなる。ずっと心の何処かで殺したことを、死なせてしまったことを恨まれていると思つていた。出会つたことを後悔されていると思つていた。でも違うのだと目の前の萃香妖怪に否定された。眞実は、本当の所は、目の前の萃香と彼女の考えは違うのかもしれない。でも、もう本当のところを知ることができない。なら愛されていたと思つてもいいではないか。だつて、なぜなら、彼女の最後の笑顔はそれまでの中で最高に綺麗な笑顔だったのだから。

「くそが……好き勝手、言いやがつて……くそ……かつこよすぎだろ……憧れるだろ、その強さ……」

涼介は目頭が熱くなり、涙を隠すように俯いて顔を覆う。恥ずかしさと情けなさから、ついつい口から悪態が漏れる。真つ向からぶつかつてくる鬼の気質に惹かれてい

く。偽らないその強さに憧れる。鬼が好きになつてしまふ。

「馬鹿が、泣いてんじゃねえよ」

からかうような、子供を励ますような少しだけ優しい声で萃香が言葉を投げかける。涼介の中に悔しさと我儘な気持ちが生まれる。言われっぱなしが悔しくて言い返したくなる。萃香には鬼らしくもつとつとカツコ良くいて欲しいと自分勝手な押し付けがましい我儘さが涼介の口を開かせる。

「だったら……だったら！ 萃香さんだつて過去を引きずつてないで前を向けよ」

涼介が涙を拭い、顔を上げて叫びをあげる。今度は萃香が涼介の勢いに飲まれる。

「こんだけ宴会をしてもこねえならもう帰つてこねえんだよ!! どうしようもねえんだよ!! 萃香さんだつて無い物ねだりして過去に縋つてんじゃねえよ!!!」

萃香が涼介の言葉に自分も同じ穴のムジナだと自覚させられる。

「今は自分も少しだけ鬼になつて鬼がどんな妖怪かよくわかる! 萃香さんがカツコいいのだつてわかる!! だから、だから、勝手なことを言うけれど終始かつこいいままでいてくれよ! 憧れを、羨望を抱いたかつこいいアンタでいてくれよ、萃香さん!!」

涼介のあまりにも身勝手に我儘な物言いが気持ちいいと萃香は感じる。遠慮なく本音でぶつかつてくる目の前の人間についていつい口の端が釣り上がる。涼介の言っていることは正しい。自分だつて知らない間に過去を引きずつていたのだ、毫碌したものだ

内心で萃香は苦笑する。しかし、それは表に出さずに不敵に笑ってみせる。鬼が言葉で言われただけで、はいそうですか、と頷けるわけがない。カツコいいアンタでいてくれと言われたのだから、情けない自分で出来る最大限の見栄を張る。

「言うじゃねえか、涼介！ テメエも今、少しだけ鬼ならわかるだろう!!」

萃香は腰を落として左右の拳を身体の前でぶつけて見せる。涼介も不敵な萃香の笑いにつられ、獯猛に笑って構えてみせる。

「能力も妖力もなしのただの殴り合いでどうだ！ 本当の、純度百パーの鬼の、山の四天王の力を見せてやる!!」

「一勝一敗、これで白黒つけようや」

「くつくつくつ、いいねいいね。滾ってきたよ」

「余裕こいてるとまた負けるぞ」

「言うじゃねえか、泣き虫坊主」

「泣かす!!」

「上等オ!!」

二人が近づき殴り合いを始める。完全な鬼と、六割人間三割鬼一割幽霊の涼介では部が悪い。もともと負けるつもりで、気持ち良く負けたくて挑みかかっている。だから涼介はそんな不利など知ったものかと身の内で荒振る鬼に従うままに拳を振るう。萃香

も明らかに自分が有利であるが殴る拳は本気で繰り出す。交換するように一発殴られたら一発殴り返す。萃香の拳が涼介をとらえるたびに身体がのけぞり、倒れそうになる身体を踏みとどまらせる。のけぞった身体を戻す反動を込めて萃香に向けて涼介は拳を突き出すも、萃香は微動だにせず涼介の拳を身体で受け止め殴り返す。拳を用いた語り合いを、互いに互いで情けない相手を叱咤するように殴り合う。骨を打つ鈍い音が辺りに響く。宴会場となつている神社の裏手で行われる観客の誰もいない子供の喧嘩。互いに歯をむき出した獍猛な笑顔を浮かべ、血を流しながらの殴り合いが続く。

「おおおおお!!」

「これで終いだあ!!」

互いの拳が互いの顔を捉える。涼介が後ろに崩れ落ちる。ボコボコにされ指一本動かす気力が湧かない。しかし、涼介の心は晴れやかで清々しい。散々心の内を叫び、馬鹿みたいに殴り合った。これだけ散々暴れたのだ、満足したと笑みを浮かべる。

「二勝一敗で私の勝ち越しだな」

倒れている涼介の上から萃香の声がかかる。肌が少しだけ赤らんでいるだけで、痣や腫れだらけの自分とは明らかに違う萃香の様子に苦笑いが浮かぶ。

——遠いなあ

近づきたいと、並びたいと思ってしまう。おこがましいと、傲慢だと分かっているのにその思いを涼介は止められない。不敵な笑みを浮かべる萃香の格好良さに思わずクラリとする。

「いつか、いつか萃香さんに、山の四天王に勝つて死んだあの娘に言つてやる。お前の惚れた相手はすげーんだぞつて」

「かかかつ、いいねいいね。その意気だ。いい面するようになったじゃねえか」

「あーもう、気風がいいね。姐御つて感じだよな、萃香さん」

「なんだい、惚れたかい？」

「はは、ああ惚れた惚れた。私はアンタ鬼に心底惚れ込んでしまったよ」

言つて涼介はそろそろ、身の内に巢食う鬼の勢いを落す事が難しくなっていることに気がつく。このまま鬼の面が強くなる前に憑いた鬼を落とす。すると身体がどつと疲れを覚え、脛が重くなる。鬼と一緒に体力がごそつと抜け落ちる。

「くくく、私もお前さんが気に入ったよ。だから、弟分にしてやらあ」

萃香が涼介の様子に気がつくことなく機嫌よさげに口を開く。もう眠りに落ちそうな意識を能力で留めると、開くのも億劫な口を懸命に開く。

消え入りそうな小さな声で返答をすると、涼介は満足し眠りに落ちる。すうすうと規則正しい寝息が萃香に届く。

「好き勝手言って満足してんのはお前じゃないかい、涼介」

言葉とは裏腹に萃香の口元が満足げに弧を描く。空を見ればもう誰も戦ってはいない。

「五戦五敗で私の負けか。あっはっはっはっは」

楽しげな萃香の笑い声が周囲に溶けて消えていく。

わいわいがやがやとした周囲の喧騒の音に涼介の意識が覚醒する。

「あ、れ？ いま、なに？」

眠る前の事が少しだけ曖昧で動かない体に疑問が出る。寝ぼけた頭が目覚めていくと萃香との喧嘩を思い出す。開いた視界の情報が頭に入ってくる。博麗神社で宴会が行われている。

「おー！ 起きたかい、涼介」

頭上から声がして視線を上に向ければ萃香の顔が覗く。頭が覚醒してきて状況を察する。胡座をかいている萃香の足の間に頭を置いて寝ていたらしいと自覚する。咄嗟

に、これはまずいと思い身体を起こそうとする。

「あつ！ づうう！」

動かそうとした身体に電撃が走るような痛みを覚える。筋肉が引きつり、骨が軋む。痛みが身体が硬直して動くことができない。

「かつかつかつ、無理に動くんじゃないよ。あんな無茶したんだ、身体がボロボロなんだからしばらくじつとしてな。鬼の力は安いもんじやないのさ」

楽しげな笑いを漏らし、萃香は涼介の頭をぽんぽんと優しく叩く。恥ずかしいが動けないものは仕方ないと諦める。能力で痛みを抑えてもひどく動かしづらい。無理をして動かなくなっても困るので涼介は大人しくする。萃香は涼介が動くのをやめた様子に笑みを深め、手元の酒を煽る。涼介が視線を周囲に巡らせれば皆思い思いに酒を飲んでる。

「異変が終われば宴会で禍根を流す。いい風習じやねえか涼介」

「はは、そうでしょう？ 我ながらいい風習を思いついたなと思つていますよ」

「まったく、トコトン鬼が好く性格をしているなお前は」

「攫いたくなりましたか？」

「どこの世界で弟分を攫う鬼がいるのさ」

涼介の問いに萃香はクツクツと喉を鳴らして機嫌よさげに答える。涼介は萃香の返

答に思わず笑みを浮かべる。

「異変はどっちの勝ちで終わったんですか？」

「五戦五敗で私の負けさ」

「私との勝負は二勝で勝ち越しているじゃないですか？」

「先に負けた方を計算しているのさ。そのあとの喧嘩は異変とは関係ない個人的な喧嘩だからな」

「じゃあ、宴会の異変も終わりですね」

「そうだねえ……まっ、あのまま続けていても仲間は誰も帰ってこねえんだから、どちらにしたって異変は失敗したさ。今回の勝負には私の負けしか用意されていなかったんだよ、最初からな」

「そんなことは——」

「過去に囚われて始めてんだ。出発が間違つてりや目的地にはどうやってもたどり着けないんだよ」

涼介の咄嗟に出かけた慰めの言葉を萃香自身がバツサリと切り捨てる。寂しげな萃香の様子に涼介は心が痛む。だからこそ言葉を紡ぐ。

「確かに仲間は誰も帰ってきませんでした」

「涼介？」

「でも、仲間はできませんでした。地上に來た時は何時だつて誘つてください。一緒に杯を交わしましょう。もう独りぼっちじゃありませんよ——」

心の底から湧き出る気持ちを言葉に込める。羨望を、慕う気持ちをその言葉に涼介は込める。

「——萃香姐さん」

萃香が涼介の言葉に僅かに瞳を見開く。そして、堪えきれない愉快さが漏れ出る。

「く、くくくく。なるほどなるほど確かにそうだ、私の仲間はここにいたな」

「それじゃあ異変は成功で萃香姐さんの勝ちですね」

「試合に負けて勝負に勝つたつてところか？ かつかつか！ しかし涼介、いいのかい？」

「何がですか？」

「人間なのに異変の片棒を担いじまつてさ」

「私は一割幽霊で、鬼の萃香姐さんの弟分です。なら、たまには人間側でなくて妖怪側の立場にたつても良いのではと思いませんか？」

「かかかつ！ 確かにそうだ、お前さんは私の弟分。なら私の異変に協力したつておかしくねえな」

「それで、ふわあ……」

「まだちと眠いか。気にすることなく寝ちまいな、身体が休息を求めているんだよ」
「そうですね、ちよつとだけ甘えさせてもらいますね」

「弟分が、んな事気にすんな」

萃香のその言葉を聞き、涼介は再び眠りに落ちる。

「あらあら、鬼の足元でこんなにあらかそうに眠る人間がいるなんてね」

紫がいつの間にか萃香の隣に現れ、杯を傾ける。

「なんだい、紫？ 妬いているのか、くくく」

「そんな事はないわよ。嬉しそうね、萃香」

「嬉しいね、嬉しいさ。こんな愉快的な気分はもういつ以来だろうね」

「ふふ、そう」

「こんな面白い人間達、よく見つけてきたな」

「当り前よ、私の幻想郷なのよ？」

萃香が自らと戦った人間達を、膝元で眠る涼介を見つめる。

「全く、これからが楽しみで仕方ねえ」

「もつともつと騒がしくなるわよ」

「くつくつくつく」

「うふふふふふふ」

愉快な気持ちを隠しもしない笑い声が宴会の喧騒に溶けていく。もう独りぼっちの鬼はいない。未来はもつともつと騒がしく明るい。

それぞれに供する三六杯目

結局、異変後の区切りとなる宴会は涼介が起きることなく終了した。後日、目が覚めると自室の布団で眠っており枕元にメモが置いてあつた。

—— 疲れていたみたいだからお家に帰しておいたわよ

—— 萃香の事ありがとね、仲良くできたみたいで安心したわ

—— 何だかんだと綺麗な落としどころが見つつけられたようね

—— やっぱり貴方に任せて正解だったわ

—— また何かあつたら利用させてもらおうかしら？

—— 追伸

—— みんな怒っていたみたいだからお見舞いがてら訪ねるみたいよ

—— ご愁傷様、でも楽しそうだから鍵は閉まらない様にしておいたから頑張つてね

—— 貴方の友人の紫より親愛を込めて

メモを見た後涼介が布団の中で崩れ落ちたのは言うまでもない。まだまだ体も不調

で起き上がって扉の確認に行く気力も紫のメモで根こそぎ刈り取られ、涼介は只々自室で安静にするばかりだ。

涼介が部屋で身体を起こして本を読んでいると裏口が開く音がし、誰かが階段を上がつてくる。少し経てば部屋の襖の外から声がかかる。

「涼介さん、起きていますか？ ハルが通してくれたのですが？」

「ああ、ハルが……相変わらず賢いなあ。妖夢、起きているから入ってきて大丈夫だよ」
涼介が声をかければ襖が静かに開く。風呂敷袋を提げた妖夢の姿が涼介から確認できさる。

「いらつしやい」

「お邪魔します。お身体大丈夫ですか？」

「特に問題は無いよ。酷い筋肉痛みたいな感じかな？ 後は身体がひたすら重いね」

「本当に大丈夫なのですか？」

「そう心配そうな顔をしないでよ。栄養を取ってゆっくりしていれば問題は無いから。怪我自体は治っているみたいだし」

「藍さんが手当てされたそうですよ」

「なるほど、それなら心配事は何も無いね」

「はあ、もう全く。相変わらずですね、涼介さんは」

萃香との殴り合いで出来た腫れなどの怪我が無くなっている謎が解け涼介はすつきりとする。そして、涼介が心配ないと笑って見せれば妖夢はため息をつく。妖夢はそれでも一先ず元気そうな涼介の姿に安堵すると、布団の上で上体を起こして座っている涼介の隣に座る。座った二人の視線が交わる。妖夢の瞳が涼介をとらえる。

「それで……涼介さんは一体全体どうやったらあんな風に騒動の中心へと巻き込まれるのですか？」

「いやあ、あはは」

「何で頭を掻きながら照れるのですか……褒めてないですよ……」

「場を和ませようかと思って」

「本当に反省しているんですか？」

「反省する点は確かに見えたね」

「どうせ危ない事をしたという事への反省ではないのでしょうか？」

妖夢の言葉に涼介が凶星を言い当てられて苦笑する。妖夢も涼介の様子から察してついつい苦笑してしまう。しかし、流されてはいけないと妖夢は表情を引き締める。

「私や咲夜さんがあの夜、このお店に来た時にどれだけ心配をしたか分かりますか？」

妖夢が真剣な表情をして涼介を見つめる。妖夢は涼介が消えた夜の事を思い出す。店内は荒れており机やカウンターに椅子は砕け、瓶やカップも割れ所々に僅かな血が飛んでいた。荒れ果てた店内に落ちる無音に、気配を感じられない室内に血の気が引く思いであった事を妖夢は鮮明に思い出す。思い返せばリリカも同じような心持であったのだろうと妖夢は察する。謝りにいかないといけなないと頭の隅で考えながらも、本日訪れた目的を果たす為に涼介を見つめる。

「以前冥界で会った時のリリカや咲夜さんと同じような心持にさせてしまったんだろね」

「たぶんあの時のお二人も……いや、霊夢や魔理沙も同じ似たような心境だったのでしようね」

「学んでも実践するのは難しいってことかな」

「一度目の原因となった私が言うのもアレかと思うのですがもつとご自愛ください」

「それは……難しいんじゃないかな？」

「どうしてでしょうか？」

普段の涼介であれば心配をかけてごめんと、気を付けるよと言いつつそんな場面であるのに否定の言葉が返ってきて妖夢には疑問が浮かぶ。

「私は^{幻想郷}で胸を張って生きることにしたんだ。幻想の住人になる決意をしたんだよ、

妖夢

「幻想の住人になる決意ですか？」

「そうだよ、私も幻想の仲間なんだ。だから異変なんて言うお祭り騒ぎが有れば指をくわえて見てもらえないよ」

涼介の返答に妖夢がポカンとした顔をする。涼介は妖夢の反応に予想通りだと楽しみに笑い声をあげる。

「だから参加しても大丈夫なように身体を鍛えないとね。幻想郷のお祭りはハードだからさ」

「はあ……もう、私が何を言っても決めてしまったんですね？」

「そうだね、また何か大きな出来事があって衝撃でも受けない限りはね」

「私の言葉では届きませんか？」

妖夢の言葉に考えるように涼介が瞳を閉じしばし沈黙する。二人の周りを浮く人魂がゆらゆらと揺らめく以外動きのない静寂が室内に訪れる。涼介がしばらくして臉を上げる。

「妖夢の言葉は届いているよ。だけど、萃香姐さん変わる程には揺さぶられない」

妖夢は涼介の答えを半ば予想していた。しかし、実際に口にされてしまえば想像以上に堪える。結果、妖夢は言葉を返せず口を噤む。涼介は妖夢の表情から心境を察すると

口を開く。

「妖夢はアリスに似ているね」

「アリスさんですか？」

「そう、アリスも妖夢と一緒に優しいからさ」

「そうですか？」

「私がふらふらしていると心配で気が気でないんだろうね。私は弱いからさ」

「いえ、そんな事は——」

「強くなるから」

涼介の言葉に妖夢は咄嗟に否定の言葉を口にするも、実際には凶星であり視線を伏せてしまう。しかし、妖夢の言葉が最後まで言い切られる前に涼介が言葉を重ねる。そして、妖夢の伏せた視線の先にある握りこまれた妖夢の手に涼介の手が重ねられる。自身より僅かに温かい涼介の体温に妖夢の胸が微かに高鳴る。

「心配かけない位に強くなる。鬼にだって勝てるくらいに強くなる。だからさ、妖夢」

「涼介さん？」

涼介が妖夢の名前を呼び言葉を止める。妖夢は不思議に思い、伏せていた視線を戻す。視線をあげた妖夢と涼介の瞳が再び向き合う。真剣な涼介の眼差しと表情に妖夢の呼吸が微かな緊張と高揚で止まる。妖夢の硬直に合わせるかのように涼介の妖夢の

手を握る力が強くなる。涼介が少しだけ緊張している事が手の触れた箇所から妖夢にも伝わる。

「見ていてくれないかな？私は幻想郷で生きていく。平々凡々と日々を生きるのではなく、みんなと、妖夢たちと一緒に生きていきたいんだ」

「涼介さん？」

「だからさ、妖夢……仲間外れにはしないでくれ、寂しいじゃないか」

涼介の穏やかでそれでいて強い意志の宿った言葉が妖夢の中にするりと入る。妖夢は自然に色々と言おうと考えてきた事を吞込んでしまう。何だかんだと流されてしまふ私は意志が弱いのもかもしれないなどと考えながら妖夢は笑みを浮かべる。握っている拳から力を抜いて開いた手を裏返し、涼介の手を握り返す。最後に一区切りつけようと妖夢は短くすうと息を吸い込み、想いを言葉にする。

「分かりました、涼介さん……もう私は心配しません。霊夢や魔理沙の様に信じます。だから、どんな時でもちゃんと帰ってきてくださいね」

「私の家はここだからね。いつだって帰ってくるさ」

「でも、あんまり遅いと今回みたいに迎えに行きますからね」

「あはは、前みたいに迷子になつて居るかもしれないからね。それに私は飛べないからもしかしたら木の上で泣いているかもしれないな」

「ふふ、強くなるのではないのですか？」

「なるさ。理不尽に、不運な事故に、妖怪の気まぐれに負けなくらい強くなるさ」

「だから迷子や飛べないのは見逃してほしいと？」

「さすがに万能になれると思うほど思い上がってはいないよ」

クスクスと二人の間に笑い声が響く。いつの間にか真面目な雰囲気はなくなり朗らかな空間が生まれる。重なる手から伝わる相手の体温が心地良い。そして二人の談笑が始まる。宴会に全然来なかつた涼介に対する不満やいつ店を再開したいか、幽々子のお気に入りの里の和菓子屋の話にハルがこっそり宴会へ参加していた時の話と話題は尽きない。気がつけば日は真上まで上がっている。

「そろそろ御暇しますね」

「そう？もしよかつたらお昼ご飯でも作るよ」

「どうせ痛覚を落して無理するのはお見通しですよ」

「藍さんに怪我を治して貰っているみたいだから動くくらいなら問題ないよ」

「これは教えない方が正解でしたね」

「一つ勉強になったね」

「次からは藍さんに涼介さんが分からない様に身体が動かなくなる式を憑けてもらう必要がありますね」

「それは怖い」

「反省の色が見えませんか？それに私は涼介さんが無理をするのは見越していたのでお昼は作って来ているんです」

「これは大分行動が読まれてきているね」

「単純なんですよ、涼介さんは」

「妖夢に言われるとは……」

「なんでそこで悔しげなんですか……」

二人して顔を見合わせ苦笑する。妖夢は正座を崩し立ち上がると脇に置いていた風呂敷袋を涼介に差し出す。

「はい、お昼のお弁当です。しっかりと食べて栄養を取り早く元気になってください。私はそろそろ冥界に戻りますから、容器はまた後日取りに来ますね」

「久しぶりの妖夢の手料理か……冥界以来かな？楽しみだ」

「ふふ、それは嬉しいですね」

「妖夢のご飯は美味しいからね。良いお……」

「お、なんですか？」

「おかげも何か楽しみだなと」

「それはそれは……ふふふ、お楽しみに。丹精込めて作りました」

「妖夢は安心するなあ」

「……何故でしょうか？ 褒められているのにどうしてか腑に落ちないです」

「はは、不思議だね」

涼介の惚けた顔に含みを感じるが聞いても応えてくれないだろうと妖夢は判断し、これ見よがしにため息をついて見せる。涼介は妖夢の手馴れてきた返しについて苦笑する。

「それでは失礼しますね。お昼過ぎにまた誰か来ると思いますよ」

「ああ、順番制なんだ……」

「涼介さんが宴会で寝てしまうからですよ」

「さてさて、次は誰だろうね」

「頑張ってくださいね」

「ほどほどにするさ」

「では涼介さん、またお会いしましょう」

「またね、妖夢」

妖夢は涼介の言葉を聞くと部屋から出ていく。軽やかな足音が離れていき最後には聞こえなくなる。

「次は誰だろうか。ひとまず腹ごしらえをして待ちますか」

涼介は自分に言い聞かせるように言葉を発すると風呂敷の結び目を解き、妖夢の弁当に舌鼓を打ちながらのんびりと過ごす。冥界で食べた懐かしい味についっい口元がほころんでしまう。

「妖夢の作るご飯はやっぱり美味しいなあ。良いお嫁さんになりそうだ」

先ほど本人に対しては呑み込んだ言葉が自然と零れる。口から出た後に涼介は本人が聞いたらまた真つ赤になるのだろうかと思味のない事を考える。思わず以前赤くなっていた妖夢を思い出し、赤くなるのだろうかなど半ば確信に近い思いを懐きながらも弁当を食べ進める。冥界の空で誰かがくしゃみをするもそれを知る者は本人以外ないだろう。

妖夢の作った昼食に舌鼓をうった涼介は自室の窓を開けのんびりと空を眺めている。特に何かをするわけでもなく空を眺めるという時間の使い方は久しぶりだなと考えながら体を休める。時折視界の中を鳥以外にも妖精が飛んでいる光景は幻想郷ならではの空を見つめる。

「本当に……は……良い所だなあ」

溢れる幻想に涼介はついつい口の端が緩み本音が漏れ出る。しばしの間初夏の陽気

に包まれながら空を眺めていると見覚えのある青を視界にとらえる。僅かに引きつりを感じる腕を、こちらに向かつて徐々に大きさを増す青に向けて振る。それに気が付いたのか空を飛ぶ青が涼介へ近づいてくる。

「やあ、こんには紅茶の御嬢さん」

「こんには珈琲の君」

「次は咲夜さんの番なのかな？」

「ええ、そうですよ」

「五人目には私が勝ったので私の勝ちでは？」

「涼介さんは賭けに参加していなかったので無効試合となりました」

「なるほど。確かに参加を表明していなかったね」

「ふふ、だから諦めてくださいね」

「そうだね。もう妖夢も来た後だし他の人はダメとは言えないね」

涼介が妖夢の事を思い出しながら笑って言えば、咲夜が僅かに不満そうな表情をして
いる事に気が付く。

「咲夜さん？どうかしましたか？」

「いえ別になんでもありません」

涼介が問いかければ咲夜はすまし顔を作り応える。涼介は咲夜の返答に対し疑問が

浮かび首を傾げるも、ひとまずここで話をするのもどうかと思い咲夜に中へ入る様に提案する。咲夜も中へ案内されることへの拒否は無い為に、そのまま裏口からハルに挨拶をしてから涼介の安静にしている部屋へと入り畳の上に腰を落ち着ける。

「だいぶお加減の方はよさそうですね」

「そうかい？それは嬉しいね」

「顔色も良いみたいですね。ちゃんと食事もとれていますか？」

「食べているよ。お昼は妖夢がお弁当を持ってきてくれたしね」

「そうですか……」

部屋の脇に置いてある空になった弁当へ視線を向けて応えればやはり咲夜は少しだけ不満げな反応を見せる。

「どうされましたか、咲夜さん？」

「涼介さんは……」

「何か言いにくい事なのかな？」

咲夜が珍しく口ごもる為涼介は首を傾げながらも言葉をかける。少しだけでもじりするような仕草をしながら咲夜は口を開く。

「その、涼介さんは、あの、妖夢とは随分と親しげですよね」

「ん？そうだね。冥界での異変から親しくさせてもらっているよ」

「えっと、涼介さんからすると妖夢の様な人物はやはり好感を持てるのでしょうか？」
「妖夢はまっすぐで反応も面白いからついつかつかってしまふね。友人として得難い人物だと思うよ。咲夜さんともきつと従者同士通じる所もあると思うから仲良くできると思うよ」

「あ、いえ。別に仲が悪いとかではなくてです、むしろ関係自体は良好です」

咲夜が妖夢について聞いてくるために距離を測りかねているのかと思えば、咲夜からは否定の声がかかる。言われてみればと涼介が思い返せば萃香の異変の際も一緒に行動していたので関係は良好であろうことは明白である。であるならば何故咲夜が妖夢に対して含むような雰囲気を持っているのが涼介には分からない。

「えっと、咲夜さん？妖夢と何かありましたか？」

「そうではなくてですね……涼介さんと妖夢は友人同士ですよ？」

「そうだね」

「霊夢や魔理沙も同じですよ」

「ええ、私はそう思ってるし、二人も同じように思ってくれていれよと思うよ」

「私も友人ですよ？」

「私はそう思っているよ。咲夜さんはどうかな？」

「私もそう思っています。涼介さんは私の初めての友人でかけがえのない人です」

「あはは……やはり面と向かつて肯定してもらえると嬉しいけれど少しこそばゆいね」
咲夜の全く逡巡しない返答に涼介は僅かに気恥ずかしさと温かさを覚える。

「それなら……」

「それなら？」

「……私にだけさん付けなのは少しだけ寂しいです。……それにあの日の廊下で呼んでくれた時は付いていませんでした」

幼い子供の様に口をとがらせながら咲夜が不満を漏らす。普段の瀟洒で凛々しい咲夜とはまるで違う様子と言葉に涼介は虚を突かれて言葉を失う。しかし、言葉の身を理解すると涼介は笑みを深める。もしかしたら紅魔館の面々以外に咲夜のこう言った面を知っているのは自分だけかもしれないと思えば胸の奥にこそばゆさが生まれる。

「ああ、なるほど」

「その笑顔は嫌いです」

「そう？」

「美鈴を思い出します」

「ははは、そうだね。確かに美鈴さんがしそうな顔だったかもしれないね。じゃあ、そうだね」

「ん？」

「咲夜」

「――！急に变えられると驚きます」

「でもこういうのはきつかけとかがないと中々変えられないから強引にいかないかね。不満はございますか、フロイラインン？」

「ふふ、あははは、ありませんよ」

咲夜はおどけるような涼介の問いかけに笑い声をもらし、花開くような笑顔で浮かべ頷いて見せる。

「さて、咲夜。愁いも無くなった所で本日はどのような用向きかな？」

「そうですね。それでは本題前に、涼介さんは私に何か言う事はありますか？」

「楽しい宴会だったね」

涼介がすつきりとした顔で言い放せば咲夜は頭痛を堪えるように項垂れた頭へ手を当てる。咲夜が分かりやすいリアクションで答えてくれると、涼介はクスクスと笑い声を漏らす。咲夜は笑う涼介にジトツとした視線を向けるも堪える様子をまるで見せない姿に深くため息をつく。

「どうやら私は騒動と無縁で生きていける運命にはないらしいね」

「それは自らの行いもあるのでは？」

「否定はしないよ。でもね、咲夜」

「なんででしょうか？」

「私だけみんなの輪の外から一人ポツンと見ているのは、ね」

「それは危険に身をさらしてまで欲するものですか？」

「私は欲してしまう。だってそのおかげで今が有るから。だから私は咲夜の友人に成れた」

「それは……その言い方は狡いです」

「そうだね、私もそう思うよ。けれど本当の事だから。ただ人間と生きるだけなら私は外に帰るべきなんだ。でも私はそうは思わなかった。私は幻想と共に生きていきたい。だからこれからも私は首を突っ込むことは辞めないよ」

「はあ、もう私の負けです」

「私の武勇伝を楽しみにしておくれ」

「今回も手酷くやられたそうですね」

「おや、もうすでに知られているみたいだ」

「あの鬼が楽しげに話していましたよ」

咲夜がそう言えば涼介は容易にその光景を思い浮かべられる。杯を片手に持ち機嫌よさげな姿で声高に語る萃香を幻視する。萃香が自分とのやり取りをどのように語ったのか聞けなかったことに酷く残念な気持ちを涼介は懐く。

「それは……勿体ない事をしてしまったなあ」

「本当にあの鬼と仲良くなられたみたいですね」

「うん、そうだね。私は萃香姐さんに惚れ込んでしまったよ」

「ほ、惚れ込んだって……その、あの、まだ見た目は小さな子供ですよ」

「違う違う、なんというんだろうね……生き様に、その存在に惹かれるんだ。忠誠心ではないけれど咲夜がレミリアさんに懐くような感情に近いのかもしれないね」

「分かる様な、分からない様な話ですね」

「ははは、確かにうまく言語化できないね。うーん、なんだろうね。犬に近いのかもしれないね」

「犬ですか？」

「犬だね。もっと認めてもらいたい、もっと褒めて欲しい、もっともつとかまって欲しいそんな感情だろうか？ううん、これも微妙に違うけれど一番近い気がするな」

「何となく理解できません。思考で、言語で言いにくいですよ。心から湧き出る気持ちですからね」

咲夜が胸に手を当てながら言えば涼介も頷いて見せる。互いの心に思い浮かべる人物は違うが懐く思いに大きな違いは無い。妖怪に惹かれた者同士、普通の人間には理解できないある種の異端な思考ではある。妖怪とは本来人に畏れられる存在であり、本

能的に恐怖を与える存在でもある。妖怪に惹かれる人間は恐怖を覚える感情が壊れているかどこか狂っていると里では言われる事だろう。涼介も咲夜も妖怪に好意を懐く異端の思考を持つている事で疎外感や孤独を感じたことは無いが、仲間がいるという事に心が温まる。自然と朗らかな笑みが二人に浮かぶ。

「あはは、そうだよ。理屈じゃなくて感情だから仕方ないね」

「涼介さんは鬼に、私は吸血鬼に。お互い強大な妖怪に惹かれたものですね」

「強大だからこそ惹きつけられたのかもしれないね。でも——」

「たとえ力が弱くとも懐く思いは変わらない、ですよ」

「心を読む能力をいつの間に入れられたのだろうね」

「涼介さんは意外と単純ですからね」

「妖夢にも今朝同じ事を言われたなあ」

「ふふ、みんな同じことを思っているみたいですね」

咲夜が綺麗に笑ってみせれば、涼介は苦笑してしまう。そして同時に思う。

——やはり私はみんなと関わって生きていきたい

幻想の世界にますます色がついてゆく。世界が広がり、心が躍る。

「でも、涼介さんは犬と言うより猫ですよね」

「そうかな？」

「ふらふらと気が向くままに散歩へ出かけられる所とかです」

「そう言われれば確かにそうかもしれないね」

「好奇心が強い所もそうですね。気を付けてくださいよ、好奇心は猫をも殺すそうですから」

「イギリスの諺だったかな？」

「さあ、パチュリー様から教えていただいたので諺の出自までは」

咲夜が肩を竦めて見せれば微笑かな笑いが互いからもれる。

「魔女に猫と言えば使い魔の定番イメージがあるね。黒猫とかさ」

「実際、猫を使い魔にすることも多いらしいですよ」

「へえ、実際に人気なんだね」

「ええ。使い魔の好奇心が刺激されているかどうかで、自身の研究が他者から見ても好奇心をかき立てられる物かどうかを測るバロメーターにするそうです」

「使い魔を殺す様な実験であれば最上の研究だと……なかなかブラツクなジョークになりそうだね」

「小悪魔がその話を隣で聞きながら顔を青くしていました」

「ああ……なるほど。パチュリーは活き活きとしていたのだろうね」
「それはもう」

咲夜は当時のパチュリーと小悪魔を思い出し、涼介は二人の姿を想像し笑みを漏らす。悪魔の館の住人らしい冗談と言える。聞かされた小悪魔は気が気でなかった事だろう。

「さて、私はこれで長居をすることなく帰ります。涼介さんの元氣そうな顔を見ることもできませんでしたし」

「そう。じゃあ余計なお世話かもしれないけれど気を付けてね」

「ありがとうございます。でも、これから夜が始まります。我が主の時間である夜が……であるならばその従者たる私とその時間に不覚を取る様な失態は犯せませんよ」

「完全に瀟洒ですね」

「それくらい出来ずしてどうしてレミリアお嬢様の従者を名乗れましょうか」

「かつこいいね、咲夜は」

「惚れてしまいそうですか？」

「ああもう……私などと比べるまでもなくみんなかつこいいなあ」

「ふふふ、それではまた元氣になりましたら紅魔館までお越しください。皆、心待ちにしていますから」

「そうだね。元気になったら遊びに行くよ」

「それでは、涼介さん。またお会いするのを楽しみにしています」

「またね、咲夜」

咲夜は帰宅の挨拶を告げると一瞬で姿を消す。時を止めて涼介の部屋を後にする。涼介は苦笑するとぽつりとつぶやく。

「ならば私も萃香姐さんの弟分として恥じない生き方をしないといけないな」

咲夜は涼介の部屋を後にし、紅魔館への帰路を飛ぶ。意外と元気そうであった涼介の様子に安堵する。そして交わした会話を思い出し、ふと本人に言えなかつた言葉が口をつく。

「本当に猫みたいです。特に目を離してしまえばそのまま消えてしまいそうな所なんて死に際を見せない猫みたい……本当に」

だからこそ咲夜は思う。見失わない様にしっかりと見ていようと、共に幻想が息づくこの世界を歩いて行こうと思う。涼介が輪に入りたいというのであれば輪の中で待つていようと咲夜は思う。心配で心配でたまらないが、同時に止められないとも分かつてしまからこそ自分に出来ることをしようと咲夜は決意する。

「ああ、もう本当に涼介さんは困った人です」

口から出る言葉とは裏腹に咲夜が浮かべる表情は楽しげだ。メイドをするからこそ

咲夜は世話好きなのねとパチュリーが見ればそう漏らしたかもしれない。山の裏から顔を出し始める月は美しく輝いている。

次の日、体の引きつりもだいぶ緩和した涼介は、ひとまず仕事場の確認だと荒れた店内へ行く。

「はあ、机やカウンターも直さないとなあ」

荒れた店内についついたため息が出る。店内に視線をさつと巡らせばカウンターの中にメモを見つける。近づき手に取ってみれば見覚えのある文字が目につく。霖之助の店で時折見つけるメモの文字に酷似している。

「さてさて、魔理沙は何を書いているのやら」

涼介が一息ついて内容に目を通す。

——涼介へ

——どうせ色々言うのは咲夜や妖夢がすると思うからそちに任せようと思う

——まあ、だから私は涼介が宴会に持っていきこうとしていた酒を貰ったぜ

——宴会ではみんなで楽しく飲んだから涼介も本望だろう

—— 飲めなかったのは寝ていた涼介が悪い、宴会にも寝ていたが参加していたしな
—— 以上、普通の魔法使い霧雨魔理沙より

読み終わった後に涼介は小さな、しかし楽しげな笑い声をあげる。

「なるほど、確かに私は宴会に行くときに持つていくと言つていたね」

酒を入れていた戸棚を開ければ中身が空になっている。そのことに清々しささえ覚えてしまう。

「まったく、魔理沙らしいな。さて、今日は調子もいいしリハビリがてらに神社まで散歩に行こうかな」

メモを引き出しにしまい、伸びを一度する。パキパキと関節が音を鳴らし、筋が伸びる。僅かな気怠さを覚えていたが、メモを見てからは出かけようという気持ちが出た。

「魔理沙に元気を分けて貰えたのかな？ はは、さて霊夢の顔でも見に行こうか」

桃源亭の入り口に不在を告げる、張り紙一つ。

『博麗神社に行つてきます』

涼介の足取りは軽い。視界に入る光景は今まで以上に美しく色づいている。幻想の世界はどこまでも広がっている。

鬼の話に供する三七杯目

博麗神社へ通じる石段の両脇に青々と木々が生い茂る。木で出来たアーチの様に、背丈の高い木から茂る葉が階段を歩く涼介を初夏の日差しから守る。葉が風に揺られ、生まれた隙間から日の光がチラチラと石段に降り注ぐ。石段を吹き抜ける風が気持ち良いと目を細めながら涼介は歩を進める。耳を澄ませば気の早い蟬の声も聞こえてくる。

「もうここにきて三度目の夏か……最初は危険に構わず幽香に会いに行つたな。去年は紅魔館で初めての異変に参加して、今年の夏は何があるのだろうか」

楽しい声色で呟き、未来へと思いをはせる。考え事をしながらも、コツコツと足音を立て石段を進んでいけばいつの間にか最後の段に足がかかる。踏み出し石段を登り切れば視界が一気に開かれる。古めかしく歴史を感じる鳥居と石畳の先にある博麗神社が視界に入り込む。宴会は一昨日に終わっている為か、境内の中で宴会の名残を見つめることはできない。目の前の光景に異変終わりの宴会へ参加できなかった事に対する残念さが、改めてこみ上げてくる。

「ああ、本当に寝てしまふなんて惜しい事をしてしまったものだね」

少しだけ切なげな吐息が漏れるも終わった事は仕方ないと涼介は意識を切り替える。

一先ず神社に来たのだからと足を拝殿へ向ける。

「二拝二拍手一拝だったかな？ でも、この神様を知らないからなあ」

秋の神様などが実際に存在する幻想郷において、いない、もしくは分からない神様に祈るのもおかしな話だと涼介は苦笑する。

「代わりと言ってはなんだけど、そうだね」

涼介が懐から賽銭を取り出して目の前の箱に投げ入れる。その後、鈴を鳴らし二拝し神社その物への敬意を示し二拍手を打ち、感謝を奉ずる。

——幻想を維持する要、感謝いたします

最後にもう一礼をし、神社への祈りを終える。目を開けばとつとつと、と軽快な足音が涼介の耳に届く。どうやら入れ違いに成らなかつた様だと涼介に笑みが浮かぶ。少しだけ待てば拝殿の障子戸が開き、霊夢が顔を見せる。

「やあ、霊夢。リハビリがてら遊びに来たよ」

お参りをしていた人物が想定外だったのか霊夢が一瞬きよんとした顔をするも、直後に顔がむつとした物に変わる。

「どうして自宅でじつとしていられないのかしら、涼介さんは」

「何となく、霊夢の顔が見たくてなってね」

「わざわざ身体に無理をさせなくてもこっちから出向くわよ」

「本当かな？」

「どういう意味よ」

「何となくだけれど店を再開するまで霊夢が来ない気がしてね」

涼介がさらつと言えば霊夢の眉に皺が寄る。霊夢は実際そのつもりであったために言い当てられて内心でドキリとする。布団の上で療養している涼介を見るのが嫌で元気になるまで時間を空けようと霊夢は考えていた。弱っている涼介を見ればまた感情に引きずられそうな気がして足が進まなかったのだ。

「なんでそう思ったのよ？」

「何となくだね。しいて言うなら勘だよ」

「勘ねえ……」

「まあ、霊夢の勘とは違うだろうけどね」

「ん？ どういうことよ」

「勘とは本来積み重ねた経験をもとに無意識的に判断する事なんだよ。でも霊夢の勘はもつと超常染みているじゃないか」

「褒められているのかしら」

「羨んでいるのさ」

「そんな風に見えないわよ」

「そうかな？ 憧れてはいるけれど欲してはいないからかも知れないね」

「ふうん。それで、ハルがいらないみたいだけれどもまだ不調そうなのに無理をしてまで来た理由は何かしら？」

「最初に言った通り霊夢の顔見に来たのさ」

「呆れたわね。全く妖夢や咲夜は何を言いに行ったのかしら」

霊夢が大きいため息を吐いて首をやれやれと振って見せる。僅かに非難がましい気持ちのこもった視線を涼介に向けてと口を開く。

「ここまで来ちゃったならしょうがないわね。上がって行って、涼介さん。お茶位なら出すわ」

「はは、それならお招きに預かろうかな」

「何を言っているのよ、人の家まで来て」

霊夢はそう言うのと縁側を歩いて母屋に向かう。涼介も縁側の外周に沿うように霊夢の隣を歩いてついていく。霊夢は先に母屋に入ってお茶の用意をしようと思っただけ早めに歩いていったが、涼介が歩調を合わせるように歩いていることに気が付き速度を緩める。

「ありがと、霊夢」

「何がよ」

「ははは、なんでもないよ」

「ふん、それでいいのよ」

霊夢が不満そうに鼻を鳴らすも、涼介から見える横顔の口元は笑みを浮かべている。素直じゃない霊夢の様子があまりにも可愛らしくてクスクスと笑い声を零す。すると、霊夢が一度半目で涼介を睨むも笑顔返せば顔を再び前へと戻してしまふ。

母屋に着くと、縁側へ上がる為に一段高くなっている石段で靴を脱いでいる涼介を横目で見ながら霊夢は奥の台所に入っていく。涼介も靴を石段の上にそろえて置くと勝手知ったるとばかりに居間へ入りちやぶ台のそばに腰を下ろす。

「少し疲れたなあ」

倦怠感を訴える身体へ意識を向けながら言葉に出す。けれども感じる疲労が心地良い。鳥居の先に小さくなった人里が見える。博麗神社は幻想郷の端にある為、郷内を一望できる。空から眺めれば、霧の湖に紅魔館、迷いの竹林、人里、香霖堂、無縁塚、魔法の森、妖怪の山など様々な場所を一望できるだろうと涼介は想いを馳せる。うらやむような視線を空へと向ける。

「近いのに遠いなあ」

「何の話をしているの？」

「お茶の用意ありがとね、霊夢」

「別にお礼なんていいわよ」

「感謝を示したいんだよ」

「はあ、勝手にすれば」

「勝手にするさ」

霊夢がお盆に湯呑を二つとお茶の入った急須を持って居間に現れる。空を眺める涼介に問いかけるも帰ってくる返答は質問とは別の物。いつも通りの安心する笑顔でお礼を言われると少しだけ胸の奥がこそばゆくなりつついつい反射的に憎まれ口をたたいてしまう。しかし、涼介は自らの態度に眉をひそめることなくさらに言葉を重ねてくる。涼介の包み込んでくれるような態度に霊夢は安心感を懐く。

「それで本当に何の事を言っていたの？」

「空の話だよ」

「空？」

「そうだよ。近くに飛べる人が多くいて、飛べる方法も教えてもらおうと思えば教えてもらえるのに私にはその為の資格（資格）が無いからね。だから、近くて遠いしさ」

「ふうん、そんなに飛びたいの？」

「飛べたら気持ちがよさそうだと思うけれど、今はここから幻想郷を一望してみたくてね。飛べないと木々があつて見えないからさ」

「呑気ねえ。でも、涼介さんが飛べないのは良いわね」

「ふらふらする範囲が狭まるからかな？」

「自覚があるなら直しなさいよ」

「ううん、でもここは誘惑が多すぎる」

「霖之助さんを少しは見習つたら？」

「身体に苔が生えてしまうよ」

「涼介さんが言っていたわよって本人に伝えちゃうわよ」

「本人に直接言っているから今更さ」

涼介が霊夢に返答し肩を竦めれば、二人の間に小さな笑いが生まれる。二人でお茶をのんびりと飲みながらただただ無為に過ごす。少し前のあわただしい宴会が嘘のようだと霊夢は思う。ほつておいても神社へとやってくる面々はたいがい騒がしい為に、誰かというのに静かな空間は貴重だなと考えながらお茶を飲む。しばしの間何気ない話題に花が咲く。そして不意に話題が直近の異変へと変わる。

「それで涼介さんはあの鬼とどんなやり取りをしていたの？」

「萃香姐さんとかい？」

「そうよ、と言うか本当に姐さんって呼んでいるのね」

霊夢が涼介の言葉に苦笑する。相変わらず、人妖関係なく誰とでも仲良くなる人だな
としみじみと思う。

「色々だよ。でも……そうだね、萃香姐さんのおかげで心に刺さっていた棘が抜けたん
だ」

「棘？」

「外で死なせてしまった妖怪の話さ」

「紫の言っていた……どういう関係だったの？」

「恋人だよ」

霊夢が涼介の返答に目をぱちくりとさせ、キョトンとした表情をする。霊夢の表情を
見た涼介は微かに口元を緩めると言葉を続ける。

「色々後悔はあるけれど、私の中で一区切りを付けられたんだ。姐さんのおかげでね」

「そう。どんな人だったの？」

「そうだねえ……遠慮の無い性格だったね」

「遠慮が無い？」

「もうこっちの事なんてお構いなしに何でも言ってくるそんな人だったよ」

「涼介さんの事だからタジタジだったんじゃないの？」

「私も随分言い返したよ。口喧嘩だって数えられないほどしていたね」

「涼介さんが口喧嘩……想像できないわね」

「もう本当に酷かったよ。くだらない事でも良く喧嘩したものだよ」

「なんだか楽しい喧嘩だったみたいね」

「そう?」

「顔が嬉しそうなもの」

喧嘩を思い出しているであろう涼介の表情が幸せそうな為、霊夢はそう判断する。涼介は少しだけ呆けた顔をするも、霊夢に指摘され自覚する。本当に気が付くのが遅かったと、幸せな記憶が沢山あったと改めて自覚する。

「ははは、確かにそうだね。楽しい思い出が、楽しそうにしていた彼女をたくさん見ているのに私は何を取り違えていたのだらうね」

「今だったら里の中に店を建てようと思える?」

「思わない」

「……どうして?」

「別にもう忌避感は全くないよ。でも里の中だと不便じゃないか」

「何が?」

「里の人たちがいつでも寄りやすくなるからふらふらと散歩に行きにくい」

「働きなさいよ」

「これは失敬」

霊夢はまるで真面目さの無い涼介の言葉に、あきれ顔をする。霊夢はあきれ顔をして
いるけれども、口角が僅かに上がっている。仕方のない人だと思いつつも涼介らしさだ
と感ずる為には安心する。

「涼介さんは人間なのに妖怪が大好きよね」

「否定できないね」

「だからそんなにも鬼に惹かれたのかしらね」

「鬼、ね……」

何処か含みのある雰囲気です涼介が呟く。霊夢が不思議に思い問い掛ける。

「鬼に何かあるの?」

「霊夢はさ、鬼についてどう思う?普通の妖怪だと感じるかな?」

「ん?普通に妖怪じゃないの」

「私はそう感じなかったんだ」

「妖怪じゃないってこと? そう言えばあの時にもそんなことを言っていたような

……」

「なんて言っていたの?」

「確か、ええつと……鬼をただの妖怪だと思ふなよ、みたいな事を言っていたわ」
「へえ」

霊夢の返答に涼介が興味深げな声を上げる。

「どういう意味か分かるの？」

「勝手な推測くらいかな」

「どんなもの？」

「私の中では鬼ってあまり妖怪っぽくない気がするんだよね。一度鬼になったからそう思うのかもしれないけれどね」

「ん？」

「鬼というも——」

「ちよつと待って」

「どうしたの？」

「鬼になったってどういうことよ」

「そういう鬼の宝があつてね、それで一時的に少しだけ鬼に片足を突っ込んだのさ」

涼介があっけらかんと何でももない様に言えば霊夢は頭痛を覚える。見た所妖力も感じないから本当に問題はなかつたのだと理解できるが、内容が内容だけに霊夢は頭を抱える。目の前で何か問題でもあるかなと言いたげに不思議そうな顔をしている涼介

を見れば、霊夢はドツと疲労感が押し寄せてくる気さえする。

「もういいわ、今が問題無いなら気にしない。いちいち気にしていたら心労で倒れちゃう」

「苦勞をかけるね」

「もう諦めたからいいわよ」

「ははは、これじゃあどちらが年長者か分からないね」

「本当にダメダメなお兄さんって感じよね、涼介さんは。それで？ どう続くのかしら」

霊夢が頬杖をつきながら涼介に問いかけてくる。本当に呆れられ始めているなど涼介は察すると、気を付けようと気を引き締める。怒られている内が花と言うくらいだからとこれからは注意しようと思っただけ思う。

「私が思うに鬼はもともと妖怪ではない存在だと思うんだよ」

「妖怪ではない？」

「たとえば天狗の中には神として崇められている者もいるだろう。妖怪は恐れを集まり、神は信仰の集まりともいえるよね。多くの人間たちの認識が変われば存在が変質することもある」

「そうね。人外はそれらの想念の集合体ともいえる。そして精神に比重を多く置くからこそ大多数の認識が変われば変質しやすい」

「そうだね。けれど変質しても変質前の性質も変質後に残る。山の雛さんなんていい例だよ。厄神様と言われているけれど、元々が妖怪だったから神になっても信仰を必要としないよ」

「それなら鬼はもともと神様だったってこと？」

「私はそれも違うと思う」

「涼介さんはなんだと思うの？」

「理想の象徴」

「理想の象徴？」

霊夢がよくわからないと首を傾げながら言葉を反芻する。涼介も確信を持っている話ではなく、何となくそう思うという話であるためにどう説明した物かと頭をひねる。

「そう、憧れだよ。妖怪は恐れ of 集合体、神は信仰、妖精は自然への想い。そして鬼は理想の集合体。私はそう考えているよ」

「どうしてそう思うの？」

「鬼であった時に人間に超えて欲しいという衝動が湧いてきたんだ」

「超えて欲しい？」

「そう。勝負をして負かせてほしいそう思うんだ。だから妖怪だと思えなかった」

「……確かに、負けたら恐れは得られない。それだと妖怪の在り方として矛盾する」

「だから鬼はもともと妖怪ではないと思うんだ」

「それじゃあなんなのよ」

「さあ、呼称は分からないよ。目標、超越者、試練、憧憬、到達点、そう言った存在だったんだろうね。だから真つ向から向かってくる。只々強い。肉体が、精神が、すべてが強い」

「うん。特筆して何がって訳ではないけれど全てが高水準だったわね」

「萃香姐さんが言っていたのだけれど、大昔は本当に殴り合うか能力の凌ぎ合いの真剣勝負が主流だったらしい。鬼以外の他の妖怪ともあまり大きな違いの無い闘いだっただろうね。そして大昔の人間が妖怪に負けないように理想とする強さを夢想して」

「形になった者が鬼と」

「その通り。だから鬼は人間に勝負を仕掛けるのではないかな、超えてみると。時には人間側から仕掛けることもあったのかもかもしれない。もちろん超えるためにね。でもそれで命を落とす人間も出たんだと思う。結局そこで起きるのは真剣勝負なのだから」

霊夢は涼介の推測の話を聞きながらあながち大きく外れていないのだろうとなんとなく思う。涼介がさらに言葉を続ける。

「鬼に挑むほどの人間であれば名の知れた人物なのだろうと考えられる。そして、その人物が鬼との勝負で命を落とす。そんなことが繰り返されれば、人間は鬼が人間を攫う

化生だと思ひ始める。後は坂を転がる様に鬼は妖怪としての性質を帯びる。鬼は興味を持った人間を攫いたくなるんだ。それは、興味を持つ相手が自らを負かせる可能性のある人物だから勝負の対象として見ているんだ。そこに人を攫う妖怪であるという認識が鬼の元々の性質に沿うように変化して鬼は人間を攫い試練を与えるように勝負を仕掛ける」

「そう聞けば何となくそんな気がしてくるわね」

「鬼は豪快で、嘘を言わず、圧倒的な強さを持つ。勝った相手を称える為に宝を渡す気前の良さだっている。そして人間の前に超えるべき壁として立ちほだかり、超えられれば役目を全うしたと言いたげに笑って死ぬ。まるで妖怪らしくない」

「でも鬼ってほとんどいないのね。討ち取られたのかしら？」

「地底に去ってしまったらしいよ。どうも人間の嘘に愛想を尽かせたらしい」

「嘘に？」

「鬼は剛毅で真つ向からぶつかり、嘘を嫌う。そういう存在として生まれたんだ。それなのに、生みの親とも言える人間が強すぎたからと言って嘘を用いて鬼を討つことに耐えられなかったのではないかな？」

「難儀な妖怪ね」

「そうだね。でも、そんな鬼だから私は惹かれたんだと思う」

「でも、想像なのでしょ？」

「いやまあ——」

「大体あつているよ」

涼介が霊夢の言葉に苦笑して応えようとするも言いきられる前に別の声に割り込まれる。霊夢と涼介が視線を声の場所に向けると、縁側で背を向けるように萃香が座つている。

「萃香姐さん」

涼介が思わず名前を呼べば萃香は振り向きニカツと齒をみせ明るく笑う。そして一度身体が霧散して消えると、霊夢と涼介の囲うちやぶ台のそばへ唐突に現れる。

「なんで紫といい、萃香といい、まともに入つてこないのよ」

「神出鬼没つてな」

「字面通り鬼なら没しなさいよ」

「揚げ足取るなよ、霊夢。可愛げのない」

「なんでアンタに可愛げみせないといけないのよ」

「かつかつか、まあいいさ」

「萃香姐さん、聞いていたんですね？」

「んあ？ そうだな、聞いていたよ。私はどこにでもいられるからね」

「全く面倒ね」

「邪険にするなよ。まあそれでさっきの話だが涼介の推測で殆ど問題は無いよ。私ら鬼はもともとそういつた存在だ。神が信者を庇護し守るなら、私らは羨望者を鍛え目標として立ちほだかるつてとこかね」

「それで私にあの時あんなこと言つたの？」

「そうさ。まあ、ぼこぼこに敗けて恥かいたがね。まさか自分の格をあげるとはぶつ飛んでいるね、今代の巫女は」

「どうも」

霊夢の気のない返事にも萃香は気分を害する事無く楽しげに喉を鳴らす。霊夢が萃香の様子に処置なしとため息を吐く。霊夢のため息さえ萃香にとつては楽しい出来事なのであろう、萃香の顔に浮かぶ笑みがさらに深まる。自然体で接してくる人間が心地良いのだ。霊夢は笑う萃香を一瞥し、手元の湯呑を空にすると立ち上がる。

「境内の掃除をしてくるわ」

「それなら私も——」

「涼介さんはこの鬼が神社に悪さをしないように見ていて、お願いするわね」

霊夢は涼介の返答を聞く前にパタパタと足早に境内へと向かう。少しだけ忙しない霊夢の様子に涼介は首をかしげると、隣の萃香がクスクスと笑う。

「なんだいなんだい、あの巫女も可愛い所があるじゃないか」

「どういうことですか？」

「まあ、涼介に気を使ったのだろうね。良い勘をしているじゃないか」

涼介は萃香の言うことが分からず涼介は首をかしげる。

「普段超然としているのにお前さんの前だと少しだけ地が出るみたいだね。異変の時よりわかりやすいね」

「普段とあまり変わらない気がしましたけど？」

「私くらいの鬼になると分かるのさ」

「長い間人間を見てきた年季ですネ」

「当り前さ。それで？ 話があるんだろう？」

萃香が涼介に視線を向ける。涼介は、萃香の表情から何を言うのかを悟られていると察する。少しの間逡巡するも涼介は口を開く。霊夢が気を聞かせてくれた事に内心で感謝を示す。

「萃香姐さん」

「どうした、涼介？」

「まだ薬酒は残っていますか？」

「あるよ……それで？」

「いただくことはできますか？」

「鬼になりたいのか？」

「少なくとも今はその願望はありません」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、萃香は内心を見透かすような瞳を涼介に向ける。涼介も萃香の視線から視線を逸らす事無く応える。

「私は弱いです。皆の輪に入るにはどうしようもないくらい弱い」

「だから欲しいと？」

「安易に頼るつもりはありません。ですが選択肢として、手札の一枚として所持しておきたいというのが偽りのない本音です。また失くしてしまいました。レティの結晶や人魂、能力と言った物がありますが、まだまだ足りないと感じました」

「なるほどね……とりあえず冬妖怪の結晶は問題ないよ、今返す」

萃香が指を振ると涼介の胸元にレティの結晶が現れる。

「霧散したのでは？」

「私は密と疎を操る。それでその結晶を拡散させて周囲に漂わせていたのさ。それを元に戻しただけさ」

「なんでも運び放題ですね」

「便利だろ？」

「とつても」

涼介が胸元に戻った結晶を軽く触れば、手放したことを非難するかのように一瞬だけ冷気が強まる。涼介はレティの反応に苦笑する。全く、妖怪とは勝手気ままなものと改めて感じる。小さな声で結晶に向けてごめんねと言えば冷気は弱まる。

「くくく、相変わらずだね」

「前より酷くなつたかもしれませんね」

「良かったね」

「それはもう。それでどうですか?」

涼介が萃香の答えを聞こうと再び水を向ける。萃香はすぐに応えず、しばらく手元の鎖を指でいじりながら涼介を見つめる。チャリチャリと鎖の擦れる音だけが居間に響く。涼介も萃香の答えをじつと待つ。

「そうだねえ……」

萃香が言葉をつめる。涼介が僅かに緊張を示す。涼介の緊張を読み取ると萃香は笑みを浮かべる。

「構わないよ。というか初めからやるつもりだったよ」

「そうなのですか?」

「神社の屋根で言つたじゃないか、あれは私を六人倒した褒美だと」

「それはあの時だけの話ではなかったのですね」

「特に決めていなかっただけ。まあ、その後色々あつて涼介に必要なだろうと思つたからさ」
「ありがとうございます」

「気にするな、私の弟分なら鬼の力を使いこなして見せな。負けるんじゃないよ、くつくつく」

萃香が期待を向けてくれることが嬉しいと涼介は感じる。歓喜が心の内に生まれる。

「決して情けない姿を見せないと約束します」

「鬼との約束は高くつくよ？」

「承知の上です」

「だろうね、かかかつ。それと私に勝つた褒美もやらないとね」

「褒美ですか？」

「私は鬼だからね」

萃香がそう言ううちやぶ台の上に霧が集まる様に酒瓶が一つ現れる。さらに自身の腕にある三角錐の分銅が伸びた鎖の先に付く鉄の腕輪を外すとそれも机の上に置く。

「ほれ、受け取れ」

萃香が何でも無い様に言つてのける。

「この鎖はあの時の物ですよね？」

「そうさ。持ち主の意に従って動き伸縮する私の鎖だよ。霊力の弱いお前では操り伸縮は出来ても鉄以上の強度は得られないがな」

「さすがにこれ——」

「遠慮するな。貰える物は受け取っておけ。それに私の弟分なら使いこなしてみせると不敵に笑ってみせな」

萃香の期待に涼介は胸が詰まる。心に満ちる感情をしつかりと咀嚼し言葉にする。

「あの時の言葉嘘にはしません。山の四天王からも勝ちをもぎ取れるくらい強くなります。萃香姐さんが他の鬼に対して誇れるくらい立派になって見せます」

「……おう、頑張れ涼介」

互いの顔に浮かぶのは力強い笑み。涼介が酒と鎖の先端に三角錐の付いた腕輪を手にとると、萃香がぼんと自身の膝を打つ。

「さて、涼介。話も纏まったから行こうか」

「どこにですか?」

「桃源亭へさ」

涼介の頭に疑問が浮かぶ。今は荒れ放題で店として機能できないために行っても意味は無いのだから萃香の発言が理解できない。萃香は涼介の反応を予想していたのか少しだけあきれ顔をする。

「店を直すんだよ。私らは力仕事も得意だからね、かつかつか」

「良いんですか？ 自分でどうにかしますよ」

「お前さんはもう少し他人に頼る事を覚えた方がいいよ。何でもかんでも自分ですることとは無いよ」

「よく助けてもらっていますよ？ 豆なんて幽香に頼りっぱなしですし」

「冬の異変の時に自分一人で動いていたって聞いたよ。それに詳細は知らんが赤い霧の時も何かしていたそうじゃないか？ 今回だつて妖獣を逃がしたしね。お前さんとあの妖獣に冬妖怪の力を合わせれば神社までは行けたかもしれないと私は思うね。お前さんは肝心な所では、自分一人でどうにかしようとしていると私は思うよ」

「それは……」

「まあ、頑張るのもいいが見極めも肝心と言う話だ。無謀と勇猛を履き違えるんじゃないよ」

萃香はそう言うのと振り返ることなく、居間から出ていく。涼介は萃香の背中を目で追ひ、視えなくなると追いかけるように立ち上がる。

「そうですね……みんなの輪に入るなら協調性を持たないとね」

自分で気が付いていなかったことを指摘されて自らを改める。輪に入りたいと言いながら、入り方が間違っていたことに気が付く。苦笑が涼介の顔に浮かぶ。歩を進め日

の光の元に出る。箒を片手に境内を掃除する霊夢に、涼介を待つ萃香がまとわりついて
いる。腰に抱きつかれた霊夢が、胸元にある萃香の頭をぱしぱし叩いているも効果はあ
まり見られない。霊夢が、涼介を見つけると萃香を指さし、口をパクパクとさせ何かを
言っている。涼介は笑みを深めると、二人の元へと近づいていく。

「萃香姐さん、霊夢——」

幻想の園に新たな仲間が加わり、今まで以上に騒がしい日常が始まる。次はどんな
祭りが起きて、どんな仲間が加わるのだろうかと未来へ思いを馳せる。幻想の時間は進
む。騒がしさを増し、仲間を増やし進んでいく。

幻想の昨日

劇に供する三八杯目

人形達が飾り立てられ、舞台の上で躍動的な動きを見せる。舞台の前で真剣な表情をした子供たちが見逃すまいと、舞台の邪魔をすまいと、声をひそめて観劇している。子供たちの瞳は、目の前で紡がれる物語に惹きつけられている。語られ、演じられ、人形達が作り出す一つの世界に子供たちの心が囚われる。

——ああ、相変わらず素晴らしいね。アリスの劇は本当にすごいな

涼介が横目で舞台と子供たちを見ながら感心していると、腰をトントンと突かれる。ハツとして涼介が視線を巡らすと、アリスが目配せをしている。腰元には上海でも蓬萊でもないアリスの人形の内の一体が、涼介の不注意を責めるようにガラスの瞳で涼介を見上げている。人形の瞳に映る自身の顔に苦笑が浮かんでいると気が付く。

ほら、用意してとでも言う様に人形が涼介の服をクイクイと軽く引く。涼介も人形の催促に促され、役者を舞台へと上げる。どこかひ弱な王子様然とした服装をした、デ

フォルメされた上海サイズの涼介が舞台へと上がる。顔などの見えている肌は、透けており霊体であることを示している。練習通りに人型をした霊体を動かせば、背後に魔法で作られた台詞が文字となって浮かぶ。

『ああ、ありがとう上海。君が来てくれると信じていたよ』

『もう心配ありません。私が貴方を守ります』

浮かぶ台詞に涼介が遠い目をする。何故、自分は今アリスと人形劇をしているのだろうと過去に思いを馳せる。そして、何故私が攫われるヒロイン役なのかと心の内に悲しみがこみ上げる。涼介の内心を読み取ったのか、アリスが人形を操る手を止めることなくクスクスと劇の邪魔をしない程度に抑えた笑いを漏らす。涼介は綺麗なアリスの笑顔に心の中で悪態をつく。

——魔女め

人形達の舞台は操り手の想いとは関係なく進んでいく。人型をとる霊体を複雑な心境で眺めながら涼介は数日前を思い返す。始まりはアリスの家へ頼みごとをしにいった事がきつかけだった。

コンコンコンと、絵本の中の魔女の家をそのまま取り出したかのような家の扉を涼介はノックする。少し待てば扉が静かに開かれる。

「やあ、今日は蓬莱なんだね」

そうだよと、肯定する様に蓬莱人形の首が縦に振られる。涼介が蓬莱の愛らしい仕草にクスリと笑いを漏らせば、蓬莱がどうしたのと首をかしげる。本当に生きているみただと感じられる蓬莱の動きに思わず涼介は感心する。

「君は、本当は生きていないのかな蓬莱？」

涼介の言葉を受け、さらに蓬莱が首をかしげる。うーん、うーんと悩む様に小さな顎に手を当てながら頭が左右へと振られる。可愛い振り子もあるものだと言及が馬鹿な事を考えていると、聞き覚えのある声が涼介の耳へと届く。

「今日はどんな厄介ごとを持ってきたのかしら？」

「酷いなあ。厄介ごと前提かい、アリス？」

「はあ」

身もふたもない辛辣な物言いが、家の奥より聞こえてくる。涼介が視線を声の方へと向ければいつの間にか現れたのか、アリスが通路の壁に軽く持たれながら涼介を見ている。心外だと涼介がアリスへ反論の声を上げるも、返される反応は呆れを含んだため息

である。

「貴方との付き合いももう三年目になるから色々と学んだわよ」

「厄介ごとを運んでくることかな？」

「貴方が厄介ごとに好かれている事よ。せつかく注意しても意味がないのだからため息も出るわよ」

「あはは、ありがとアリス」

「お礼なんていいわよ。もう心配なんてしないから」

「それは寂しいね」

「全然そうは聞こえないわよ、まったく。パチュリーみたいな心持の方が正しいわね、貴方と付き合うのなら」

「それは嬉しいね」

「褒められてないわよ」

「私との付き合いを続けてくれるのだろう」

涼介が嬉しそうな笑みを浮かべて言い切れば、アリスは頭痛を堪えるように瞼を閉じ額へ手を当てる。アリスの背後に浮かぶ上海が心配する様にアリスの頭を小さな腕を目一杯動かして優しく撫でる。

「良い娘さんだね」

「聞き分けがよくてすごく助かるわ、どこかの誰かと違ってね」

「それは全く困った人がいたものだね」

「本当よ。貴方に会わせてあげたいくらいだよ」

「機会があれば是非お願いするよ」

「ちなみに鏡なら家にいくつもあるわよ」

涼介がアリスの言葉に應えないでにこりと笑ってみせれば、アリスはこれ見よがしに盛大なため息を返す。アリスにしては珍しい、どこか少しだけコミカルな仕草に涼介は苦笑する。そんな姿をわざわざしてみせるほどに相当呆れられていると理解できてしまふ。涼介が自らの仕草から、伝えたいことを読み取ったとアリスは察すると少しだけ溜飲を下げる。指を軽く動かし、蓬萊を上海同様自らの背後へと呼び戻すとアリスが口を開く。

「もういいわ。お茶でもしながら聞くから上がりなさい」

「私がお茶を用意しようか？」

「今日は私が用意するわ。はちみつジンジャー・ラテのお返しよ」

「あれは商売の話だから違うんじゃないかなあ」

「良いから受け取っておきなさい。助かったのは事実なのだから」

「それじゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

アリスの案内に従い、涼介が魔女の家へと消えていく。扉がひとりでに静かに閉じる。

コポコポとお湯が沸く音が聞こえてくる。室内を人形達がふわふわと飛び交い、それぞれの仕事をこなす。これらすべてをアリスが動かしていることが何度見ても信じられない。アリスいわく、ある程度前もって設定しているから半自動的らしいがそれにしてでも精彩に満ちている。

「いつ来ても思いうけれど見事だね」

「そう?」

「ああ。まるで童話の中に迷い込んだみたいだよ」

「それなら私は悪い魔女かしら」

「こんな美人の魔女に捕えられるのならやぶさかではないね」

テーブルを囲うアリスが、対面に座る涼介へ馬鹿を見る目を向ける。呆れを多分に含んでいるアリスの視線に涼介は頬を掻く。これは軽口が過ぎたかと、内心で自省する。

「本当に貴方は変わらないわね」

「安心するかな?」

「むしろあれだけ色々あったのに全然変わらないうことに不安を感じるわよ。貴方はまるで静かな水面ね」

「波風は経つけれど、時間がたてば凪いでしまうからかい？」

「そう。それでいてその水底に怪物を飼っている、不気味ね」

「不気味、ね。初めて言われたよ」

「そう？ 新しい一面の発見ね、喜ばしいわ」

「そうだね。確かに私もアリスたちの様な強い感情を飼っているね」

「魔に魅入られた私と、^{アヤカシ}妖に魅入られた貴方、ね」

「楽しいね」

「狂っているわね、私も貴方も」

「はは、でもアリスは常識的だよ。私に忠告してくれるし」

「私は命を大切にすることを知っているだけよ。貴方が身の程を知らないから注意していただけ。……でも、もうやめるわ」

「何故？」

アリスが酷く真剣な表情をして涼介を見つめる。

「私が貴方を一人の存在として認めるからよ」

「今までとは違うのかな？」

「ええ、今までは友人だけけどどこか下に見ていた。守つてあげないといけない存在だと私の中では位置されていた。でも、貴方は鬼と闘い勝ちを奪い取った。それは私にはきつと出来ないこと……だから、私は貴方を対等な存在だと思ふ事にしたわ。だからもう忠告はしない。求められれば助言はするわ、むろんタダではないけれど」

アリスがクスリと笑い、最後の言葉をつなげる。歡喜が涼介の中に生まれる。面と向かつて認められる言葉を貰う事は何度経験しても色あせることない感動を与えてくれる。一度瞼を閉じ、溢れ出そうな歡喜を表に出さぬよう静かに感じ入る。胸がいつぱいになりそうな思いが落ち着けばゆっくりと目をあける。

「魔女との取引か、心躍るね」

「馬鹿ね」

「当り前さ。でなければ幻想郷で暮らさないよ」

「なるほど、その通りね」

話していると上海と蓬萊が紅茶を運んできてくれる。生地焼けるいい匂いがする事から後でクッキーが来るかもしれないと考えながら涼介は紅茶を口に運ぶ。

「うん、美味しいね」

「良かったわね、貴方達」

アリスが上海と蓬萊に言葉をかければ、二体の人形はハイタッチをして喜びを表現す

るとキッチンへと戻っていく。涼介が二体を微笑ましげに見つめているのにアリスは気が付く。ふとした疑問がアリスの中で生まれる。自身と似たように幻想に取りつかれた人間へアリスは質問する。

「貴方もいつか人間をやめる時が来るのかしら」

「……さあ、分からないね。でもきつと妖怪になるのなら鬼が良いね」

涼介の視線が虚空を見つめる。何かの姿を見つめながら応える涼介にアリスは希薄さを感じる。このまま幻想へと転じてしまう様な感覚を覚える。

「遠い未来ではなさそうな感じね」

「そうかな？」

「そう見えたわ」

「はは、そうなんだ。でもきつとまだ先だよ」

「そう？」

「私には霊夢や魔理沙、咲夜に妖夢を殺せる覚悟は無いからね」

涼介の言葉にアリスが一瞬きよとんと虚を突かれる。しかし、すぐに言葉の真意を悟る。

「別に貴方が殺すわけではないのに」

「それぐらいの覚悟と言う事さ」

「……そうね、それくらい覚悟が無いのならやめた方がいいものね」

「妖怪の生は長いからね」

「人間の死を耐えられるくらいの気概がないと」

「その通り」

「まあ、好きにしなさい」

「好きにするさ」

アリスは涼介の答えに呆れ気味の吐息を漏らす。涼介はアリスの答えに楽しげな笑いを零す。アリスは目の前の友人の能天気な様に毒気を抜かれる。

——なる様にしかならないわね。人として死ぬなら見送ってあげる

——妖怪として生きるなら長い付き合いになりそうね

紅茶を味わう涼介を見ながらアリスはなんとなく思う。自分でもどちらの未来が来るのか予想できない不軌道な人生を歩む友人の先に好奇心を懐かされる。どちらにしても楽しくなりそうねと、緩む口元を紅茶の入ったカップで隠す。そして、そろそろ本題に入ろうと口角の上があった口元が元に戻るのを知覚するとアリスはカップを離し、口を開く。

「それで、今日はどうしたのかしら？」

「ん？ああ、そうだね。今日はアリスにあることを教授してもらおうと思つてさ」

「魔法なら教えないわよ？　意味ないもの」

何でもない様に言つてのけるアリスに涼介は苦笑する。自覚はしているけれど、スバツと斬り捨てられるのは心にクるものがある。

「違うよ。人形の仕草とかを勉強しようと思つてね」

「うん？　お店で人形劇でもするのかしら？」

「違うよ。こういう事さ」

涼介はそう言うとう自身の人魂を机の上に移動させる。人魂はぐにやりと歪むと形を変える。拳二つ分より僅かに大きいだろうかと言う程度の大きさの人型をとる。デフォルメされた涼介と言つた具合で服装はいつもの仕事着をしている小さな涼介が現れる。色合いは人魂の透けた白色一色の味気ないものである。アリスが感心したように小さな涼介を見て目を細める。

「へえ、面白いわね」

「人魂と言うけれど、霊体にくるまれているからね。死んだときは人型をとるのだから、これが取れない道理はないよ」

「それにしてもこうなつてから随分時間がたつてからのお披露目ね」

「最近妖夢にやり方を教わってね。妖夢はこれを自分と同じ大きさに出来るのだけれど私にはできないね」

「あら、どうしてかしら？」

「中に入れる空気が無いからさ」

「なるほど、それは残念ね」

「まあ、薄く広げればもう少し大きくなるのだけれどこれが一番安定しているサイズだからね」

「へえ」

アリスは感嘆の吐息を漏らしながら卓上の幽霊をツンツンと指で突く。突かれている幽霊はさされるがままで反応に乏しい。アリスの中に理解が生まれる。

「なるほど、人形の動かし方とはそう言う事ね」

「そう言う事さ。何というか視界が増えて混乱するし、うまく動かせないのだよね」
「妖夢には聞かなかったの？」

「先天性と後天性の違いと言えば分かるかな」

「ああ、感覚が分からなかったのね」

「互いにね。だから人形を手足の様に操る君が思い浮かんだのさ」

「ふうん」

アリスは涼介の説明に満足すると観察するために前のめりにしていた上体を起こす。視線をキツチンへと一度向けると、上海がアリスの横へ着くように飛んでくる。隣に来た上海をアリスが突けば撥つたそうに身をよじる。涼介がそれを見て領きを一つする。「そこまでとは言わないけれど、ウェイターとして活用しようと思うからある程度はね」

「あら、可愛い店員さんね」

「はは、それも私なのだから可愛いと言われると少しだけ複雑だね」

「嫌かしら?」

「可愛いと言われて喜ぶ男性は稀だと思うよ」

「道理ね」

アリスがクスクスと楽しげに笑う。アリスの様子に涼介がやれやれと肩を竦める。

「そうねえ、面白そうだし構わないわ」

「いいのかい?」

「ええ、教えてあげる」

「助かるよ」

「でも、タダではないわ。だって貴方は対等なもの」

「はは、そうだね。代価はいか程でしょうか、魔女殿?」

「公演一回」

「公演一回？」

「人形劇に出演なさい」

涼介はアリスの言葉を理解すると顔を引きつらせる。

「アリスさん？」

「ダメよ、譲歩も変更もなし」

「私が出たら劇のクオリティが——」

「下げさせないわ、私が」

強い意志を感じさせるアリスの言葉に涼介はつばを飲む。拒否できないと理解でき
てしまう。

「アリス……お手柔らかにお願いしますよ」

「善処するわ」

浮かべられるのはいつもの様な綺麗な笑顔。しかし、同じような笑顔であるのに涼介
は内心で冷や汗をかく。魔女との取引は安易にするものではないなと少しだけ思う。
涼介は諦めて後は流されるままに受け入れようと覚悟を決めると口を開く。

「それでは先生お願いします」

「まかせなさい」

人形師による劇にも出せる動かし方のレッスンが始まる。それはそれは熱心な指導

であつたとのちに涼介は語る。

人形劇が終わる。パチパチと力強い拍手が観客から惜しみなく送られる。アリスと人形達が観客たちへ終わりの挨拶をしているのを横目で見ながら存外悪い物では無かつたなど思える。むしろ終わってみれば楽しかつたとさえいえると涼介は思う。脚本に不満は残るとの注意書きが付く所ではあるがと、涼介は称賛に笑みを浮かべながらそう考える。視界の先では霊体の涼介が上海達の隣で一緒に手を振っている。いや、涼介が振らしている。アリスの教育の成果が出ていると言える光景であろう。しばらくすれば観客たちも捌けてゆく。

「大好評だつたね」

「新しい新人のおかげかしら」

「はは、それだと頑張つた甲斐があつたね」

「貴方もお疲れ様」

アリスが隣を浮かぶ霊体を突けば、上海の様に精彩を感じさせる動きをする。上海の様にくすぐつたがると言うより、逃げようとする様な弱い抵抗を示す動きをする。

「随分上手になつたわね」

「先生のおかげかな。と言うよりあれだけ練習すれば散々慣れたよ。自転車みたいなものなのかな」

「一度乗ればと言うやつね」

「そうだね」

「ねえ、この子と言うかこつちの霊体に何か呼び方でもつけない？」

「ん？」

「半霊ではないし、人魂って感じでもないでしょう？　ねえ、貴方もそうでしょ？」

「はは、いやまあそれも私自身だから何とも困った提案だけれど、あつても困るものではないかな？」

「そうよ」

「ううん、何と呼ぼうか……普通に涼とかでいいのではないかな」

「安直で面白味が無いわね。まあ良いわ」

「いや、人形ではないのだから面白味を求められてもね」

アリスの言葉に涼介は苦笑いをしながら応える。しかし、アリスの視線は涼に向かって聞きいれられている気がしない。アリスは涼と遊んでいる上海達を見ながら笑みを浮かべている。

「友達が出来たみたいで和むわね」

「まあ、動かしているのは私とアリスなのだけねどね」

「それは言わない約束よ」

アリスにメツと子供でも叱る様な仕草で注意されてしまう。涼介はその仕草に苦笑する。レッスン時にそう言った分かりやすい仕草を両者共に自身でしたり、させたりをしていたためにアリスは咄嗟についつい出してしまったのだ。アリスは涼介の苦笑いで自身の行いに気が付き、少しだけ感じる恥ずかしさを隠す様にそっぽを向いて自身の髪を手で梳いて見せる。

「可愛いね」

「……怒るわよ」

「これは失敬」

「まあ、いいわ」

「ありがとう、アリス。それにしてもいつかこの人形劇も見られなくなってしまうのだろうか」

「私は辞めるつもりはないわよ」

涼介がふとこぼした言葉にアリスが心外だと反論をする。涼介は予想通りの返しを聞いて、クスクスと笑いを漏らす。アリスは涼介の反応に少しだけムツとすると、非難する様に目を細めて涼介へ向ける。

「自分で先ほど劇に出ている自分を見ていて思ったんだよ。私の霊体は人形ではないから演劇に近いのではないかと。それであるならば、アリスが目標とする自分の意志を持ち自分の意志で動く完全な自立人形が出来たら、それはもうその娘達の演劇ではないのかなとね？」

アリスが大きく開いた目をパチパチとさせて涼介を見る。そして、アリスがクスリと口元に手を当て小さく嘖き出す。肩を少しだけ震わせ、声を出さない様に顔を俯ける。少しして肩の震えが収まると、アリスが顔をあげ晴れやかな笑みを浮かべる。

「そうね、そうよね。いつかはあの娘たちも独り立ちしてしまうのよね。自分でそれを目指しているのに全然考えていなかったわ、そんな事。ふふふ、子離れできない親みたいね。私も母の事を笑えないわね」

「お母さんも子離れできなかつたの？」

「とても心配症だったわ。いいえ、いまだに子離れできていないわね。でも、私もそういうりそうな気がしてならないわ。やっぱり親子なのかしら、ふふ」

アリスが明るい声でそう言う。けれども多少だけ声に寂しさが混じっているように涼介には感じられた。だから、涼介は言葉が続ける。

「もしそうなたら一緒に劇団でも立ち上げたら？」

「役者の大きさが違いすぎるわ」

「ガリバー旅行記の様な話でもしたらいいよ」

「いやよ」

「冗談だよ。そうだね、なら座長兼演出家をアリスがしたらいい。看板女優は上海かな？ ははは、楽しそうだね」

「まったく、言うだけならただなのよ。……でも、それも楽しそうね」

「だろう？ 劇団名は何にしようか。七色の劇団……ふむ、微妙だね」

「気が早いわよ？」

「考えるだけならたださ。そうだね、上海アリス演劇団なんてどうだろう？ 語呂もい

いしね」

「はいはい、候補に入れておくわ」

「ははは、夢が膨らむね」

「その時は是非あなたも客演として招待するわ」

アリスに何でもない様な提案をして励ましてみれば、アリスもそれを察して軽快に言葉を返す。涼介が少しだけ調子に乗れば手痛いしつぺ返しが返ってくる。また舞台上に呼ぶと言われ涼介が苦笑すればアリスは微笑む。

「だからそれまで腕が鈍らない様に定期的に貴方も参加なさい」

有無を言わせないその響きに涼介は笑ってしまう。アリスにしては珍しいその強引

さが心地いい。またさらに仲良くなれたようで、ついつい流されてしまう。

「仕方ないね。でも、ただでは出られないね」

「当り前よ、対価は払うわ。まずは涼が持つ用の盾でもあげる。有つて困らないでしょう?」

アリスがそう言つて普段人形達に持たせている武器を示唆してみせる。

「次の公演は近そうだね」

「次は何の役をやつてもらおうかしら」

「攫われるのは勘弁願いたいね」

「本人にそつた正しい配役でしょう?」

小首を傾げてそう問いかけるアリスへ涼介は返す言葉を見つけられない。アリスがクスクスと楽しげな笑いを漏らす。涼介はため息をつくと内心で不満を漏らす。

——全く、悪い魔女め

それからのアリスの人形劇には不定期で参加する役者が一人増えた。その際の劇のコンセプトは闘う女性。魔女は楽しげに脚本を紡ぐ。

隣の芝に供する三九杯目

里の中にある一軒の店、鈴奈庵。外から流れ着いた外来本を貸し出す貸本屋。ある日の午後、涼介は貸本屋を訪れている。

「今回はどのような本を借りられるのですか？」

「今回もいつもの様に特に決めてはいないんだ」

「相変わらず、一期一会ですね」

「それがまた楽しいじゃないか」

「ふふふ、涼介さんみたいなお客さんがもつと増えるといいんですけどね」

「読書は時間を取られる趣味だからね」

「涼介さんも忙しそうなのに読まれる時間はあるのですか？」

「忙しそうかな？」

「天狗さんの新聞でいつも賑やかじゃないですか。それに最近是人形劇にも参加しているみたいですし」

「あはは……文の新聞は話半分に見てもらえると嬉しいのだけれどね」

「大丈夫ですよ、読まれている方の大半は話半分に読んでいますよ」

涼介が店の店員、本居小鈴もとおりこすずと雑談をしながらあてどなく本を探している。小鈴に、文々。新聞の話題を出されれば涼介に苦笑が浮かぶ。小鈴の言葉でいくらか胸をなで下ろすがいつか決着を着けないといけないのかもしれないなどと内心で考える。

「でもまあ実際問題、意外と時間はあるんだよね」

「そうなのですか？」

「そうだよ。お店に人が来るお昼頃を除けば意外と暇なんだよね。だから、時折ぼつぼつと来店される方を待っている間に丁度いいんだ」

「なるほど、言われてみればそんな感じがしますね。どうして涼介さんは里の中にお店を開かなかったのですか？」

「妖怪のお客さんが里の中より気軽に来店しやすいからだよ」

「怖くないのですか？」

「全然」

「はあ、肝が据わっているんですね」

「ははは、そうなのかな」

涼介がクスクスと笑いながら、少しの驚きと呆然を滲ませる小鈴に返答する。

「涼介さんは阿求と話が合いそうですね」

「阿求か」

「あれ？ 涼介さん阿求と何かあったんですか？」

「ううん、どうだろうねえ。私は仲良くしたいのだけれどね」

「うん？ 阿求が涼介さんの事を嫌っているのですか？」

「それも少し違うのかな？ いや、まあその通りではあるのだけれどね」

「なんだか要領を得ない話ですね」

「ははは、確かにそうだね。うん、言うなれば同族嫌悪みたいなものかな」

「同族嫌悪ですか？」

「または隣の芝は青く見える、だね」

「ますます良く分からないです」

「考えてみると良いよ」

「あまり小鈴に変なことを吹き込まないでください、涼介」

「おや、阿求かい。奇遇だね」

「阿求かいではないですよ」

何処か不満げな声が、鈴奈庵の入口より聞こえてくる。涼介と小鈴の二人が視線を向けければ不機嫌な表情をした阿求の姿がある。

「相変わらず人を取って食ったような態度ですね」

「そうかな？」

「全く……丁度いいです。涼介、今暇ですか？」

「本を探すので忙しい事を暇と言うのであれば暇だね」

「では暇ですね。付き合いなさい」

「構わないよ。小鈴ちゃん、またね」

「小鈴、借りていた本を返すわね。また借りにくるわ」

「あ、えつと、阿求？ 良く分からないけれど喧嘩はダメだよ？」

「あはは、大丈夫よ小鈴。別に喧嘩をしている訳ではないから」

「そう？ ならいいけど」

「安心してよ、小鈴ちゃん。ちよつと二人で趣味の共有をするだけだよ」

小鈴の心配する声に阿求が苦笑しながら返答する。小鈴は二人の言葉にとりあえずの安心を示し、それ以上の言葉を続けない。二人が熱くなるタイプでない事を知っている為、小鈴は二人の問題だと思ひ深入りすることを控える。

しかし、一言だけ伝えたいと暖簾を潜ろうとしている二人へ声をかける。

「私は二人の友達で、いつだって話を聞きますから遠慮しないでくださいね」

「ありがと、小鈴ちゃん」

「あはは、じゃあその時はお願ひするわね、小鈴」

二人は一度足を止め、親切な友人へと感謝を示す。二人の気負いない自然体な様子に

小鈴は安心する。小鈴が手を振れば二人も軽く振りかえし、店を後にする。

「うーん、何があつたのかなあ、あの二人？」

小鈴が一人、首をかき上げる。その疑問に答える声は無い。

店を出た涼介と阿求の二人が並んで里の中を歩く。先ほど鈴奈庵で少しだけ不仲な雰囲気を見せていたのに、仲良く隣り合つて歩いている。

「それで今日はどのような話をしようか」

「そうですね……でしたら鬼の話などをお願いできないでしょうか？」

「私に鬼の話をさせたなら長くなるよ」

「構いませんよ。夕飯を用意いたしましょう」

「それは楽しみだ。稗田の家の夕飯とはさぞかし美味しいのだろうね」

「貴方にそんなもてなしはしませんよ」

「ははは、嫌われてしまったね」

「別に嫌つてはいません。ただ——」

「互いにならないもの強請りだよね」

「……はあ、確かにそうですね」

阿求が、涼介の言葉を受けて悩ましげなため息を吐くと視線を少しだけ空へと向ける。涼介も阿求の視線の先を追う様に空へと向ける。視線の先では空を往く幻想達の

姿が見える。互いに幻想にあこがれ取りつかれた両者が、並んでこがれる様な視線を向ける。

やはり、阿求と自分は似ているなど涼介は考えながら阿求との出会いを思い出す。どこまでも似ていて、どこまでも似ていない阿求との出会いを思い出す。

ある日の定休日、涼介は里でその休暇を過ごしていた。特にあてどなくタイムスリッブしたような街並みを歩く。外来人である涼介にとってはただそれだけでも楽しめる。

——ウインドショッピングみたいなものなのかもしれないね

誰に言うでなく、内心で独りごちる。時折思い出した様に甘味処へ足を運び、団子や饅頭をつまみでは里をのんびりと歩く。すれ違う知人とたわいのない会話をしながら休日を謳歌する。

少し疲れたと、足を休めるために茶屋で飲み物片手に身体を休める。

「まさにお茶をする、字面通りだね」

涼介が抹茶片手に往来を眺めながらくだらない事を呟いてみる。平和だと、内心で目

の前の光景を見つめながら考える。手に持つ抹茶を口へと運べば、チャリと腕に付いた萃香からもらった腕輪の鎖が音を立てる。鎖が擦れる音にクスリと笑みがこぼれる。心地が良いと晴れやかな気持ちになる。

涼介がのんびりしながらさて次はどうしようかと頭を悩ませていると、不意に視界に影が落ちる。視線をそちらへ向ければ着物を着た少女、阿求が立っている。

「すみません、白木涼介さんでしょうか？」

「はい。里の外で喫茶店を営んでいる白木涼介をお探でしたらそれは私の事です」

「ああ、良かったです」

「そういう貴女は確か稗田家の——」

「はい、稗田家の九代目、稗田阿求と申します」

「ああ、これはこれのご丁寧にもありがとうございます。以前、稗田家の所有する過去の縁起を閲覧させて頂きました。その際は不在の様で挨拶ができず、その後も伺わず仕舞いで申し訳ありません。妖怪に関する資料、大変助かりました」

「いえいえ、そこまでされる必要はありませんよ。それに、そういった資料の使われ方をしてもらうためにまとめているのでそう言っていただけだと大変うれしく思います。私が不在の際も閲覧を希望する方には公開する様に家の者にも言い含めております。ですから改めてのお礼などは大丈夫ですよ」

「そうですか？ けれども、やはり感謝は示したいので言わせてください。本当にありがとうございます。とても素晴らしい資料でした」

涼介が心からの笑みを浮かべ感謝を示す。阿求が一瞬きよんとするも、次の瞬間には花の咲く様な笑みを浮かべる。

「ふふ、話に聞いていた通りの人の様ですね。それでしたらお願いがあるのですかよろしいでしょうか？」

「お願いでしょうか？」

阿求が可愛らしく小首を傾げ聞いてくる。涼介は阿求の表情に既視感を覚える。何処で見たのだろうかと思いつき出すより先に、阿求の声が追憶の思考を妨げる。

「白木さんのお話を聞かせてください？」

「私のお話ですか？」

「はい。幻想に一番近い一般人の視点から見た妖怪たちの話などを聞かせていただけたいと思います。異変にもかなり中心に近い所で参加されていたと風のうわさで聞きましたので、そちらの話もしていただけたらと思います……ダメでしょうか？」

「構いませんよ。それがまた編纂されて誰かの助けになるのであれば、こちらからお願いしたいくらいです」

「ありがとうございます。それでは当家までお越しいただけますか？」

「ええ、かまい……」

「白木さん？」

涼介は阿求との会話で、彼女の表情に感じる既視感が何であったか思い出す。初めてであった時の咲夜が、今と同じような作つた笑顔をしていたことを思い出す。少しだけ涼介は懐かしいと思う。

今思えばあれから自らの生活はずつとずつと騒がしく、そしてそれ以前より比べるまでもなく楽しい生活が始まったのだ。そう思えば、好意を懐かれていないであろう阿求の笑顔にも楽しさを見いだせる。言葉を止めた涼介に不思議そうな顔をする阿求へ涼介は笑顔で伝える。

「いえ、なんでもありません。構いませんよ。これからでも大丈夫でしょうか？」

「はい、構いません。急なお願いであるのに早速の対応をしていただきありがとうございます」

「いえいえ。それに私も妖怪の話をする機会などあまりないので楽しみなくらいです」
「そうですね。妖怪の話を積極的に誰かと、それも好奇の感情で話す相手など普通はいませんかからね」

「同好の士というやつですね」

「はい、そうですね。同好の士ですね」

同好の士であると涼介が言葉をかければ、阿求の笑顔が少しだけ固くなるのを涼介は目ざとく見つける。なるほど、こちら辺に問題の根幹が有りそうだと涼介はなんとなく思う。

阿求の案内に従い涼介は稗田家への進路をとる。さてさて今度はどのような出会いとなるのであろうかと、心を躍らせながら涼介は歩を進める。

稗田家の屋敷は相変わらず大家といった趣きを持つている。庭には池が有り、植えられている植物も事細かな手入れが行き届いている。奥へと案内されながら歩いていけば、お手伝いさん達とすれ違う。綺麗で洗練されている所作ですれ違うたびに礼をされれば、行き届いている教育に感心する。

「相変わらず凄いですね」

「古いだけですよ」

「古い物にも味が有っていいものです。知り合いもそう言っていました」

「それは人間の知り合いですか？」

「いいえ。永遠を生きる不死人です」

「そうですか……幻想の知り合いが沢山いそうですね」

「ええ、おかげさまで。色々な方と仲良くさせていただいております」

「素敵ですね」

前を歩く阿求から帰ってくる返答に、涼介は羨望と嫉妬の色合いを僅かながらその声色から見つけ出す。

——同好の士……なるほど

——同じ幻想に心囚われ、混ざるほどの力が無いのに諦められない

——私は縋り、君は身の丈にあつた自身の形を見つけた

——私は私で君のその形が羨ましい、転生を許された阿礼の子よ

稗田の当主に赦された転生、それについて以前より慧音から聞き及んでいた涼介はふとそう考える。昔は中々めぐりあわせが悪く出会う事が無かつた。そして自身が幻想で生きる決意をした後は、無意識的に避けていたと今涼介は気が付いた。会つてしまえば羨望を、嫉妬を感じてしまうと理解していたのだ。例え、転生の際に記憶の大半が消えてしまう様な性質の物であってもそれだけの魅力を感じてしまう。けれども、互いに同じようであつたのだろう。

そして、客間へと通される。阿求が紙の束の置かれた座卓に付き、涼介がその対面の座布団へと腰を下ろす。

「さて、お話を聞きたいと言つておいてはなんですが、どのような引き出しが有るのか私

の方で把握し切れていませんので白木さんをお願いしてもよろしいでしょうか？」

「構いませんよ。さて、そうですね……」

涼介が何を話した物かと頭を悩ませる。視界の端にふよふよと浮く自身の霊体に目が付くと話す内容を決める。まだ、そう時間も経っていない異変であるし適任だろうと、口を開く。

「それでは冬の終わらない、いえ。春の来ない異変に付いて私の知る話をしましょう」

「春雪異変ですね」

「ええ、そうです。私も全てを知っていると豪語出来るほど自身は無いのですけれど、あの程度は知っていると思うのでどうかそのつもりでお聞きいただければ幸いです」

「大丈夫です。聞きとった内容は後で吟味し、こちらで編纂しますのでご安心ください」
「それは良かった。そうそう、あと込み入った話も少しだけすると思います。そちらは残しても構いませんが、一般公開には混ぜないでいただけると助かります」

「それはどういった内容でしょうか？」

「死の桜にまつわるお話です。もしかしたら、遠い未来で必要な時が来るのかもしれない内容です。けれども、それは個人の事情に踏み入った話でもあります。ですので、転生を繰り返す阿礼の子である貴女が必要であると感じた時に開示するための資料という形で管理保管を願えないでしょうか？」

「……承諾しましょう。記憶を継承する阿礼の子である我らがきちんと管理保管し、必要に迫られた時には有効に活用しましょう」

見た目にそぐわぬ威厳を放ちながら阿求が承諾を示す。幼い人間の少女では決して纏えない雰囲気醸し出す阿求の姿に涼介は目を細める。眼前の姿に、彼女が幻想の存在へと片足を踏み入れていることを明確に理解する。自身の中に生まれた羨む感情に少しだけ蓋をして涼介は語り始める。

「まず大前提として、春雪異変は冬が長いのではなく春が——」

涼介の知る異変が語られる。春を奪われた世界。無意識に記憶を求める亡霊の姫。何も知らずに嘆いた少女。語り手は記憶から逃げ出した元亡霊。様々な想いの行き交った一つの物語が語られる。

「——とまあ、最後には霊夢が封印をして西行妖は再び眠りにつきました」

「……なるほど、そのような事が」

さらさらと語られた内容を書き記しながら阿求が相槌をうつ。

「封印とは時間が経てば緩むもの。それは霊夢のかけた物であっても変わらないでしょう。それに妖夢としていつかは死んでしまう身です。だからお願いします」

「そうですね。確かに富士見の娘について広く知らしめるのは良くは無いです。けれども、誰も知らないのもまた危険……白木さんの要望通りにいたします」

「ありがとうございます」

阿求が筆をおき了承を示すと涼介は安堵する。阿求に頼んだ役目は自らでは果たすことが出来ない。腰の後ろに吊つてあるポーチの中のスキットルに入っている薬酒を飲んで変容してしまえばまた話は変わるのだろうが、涼介にはまだその意思も決意もない。

「白木さん、本当に本日はありがとうございます。また、お時間のある時でよろしいの
でお願いできませんでしょうか？」

阿求が笑みを浮かべて涼介へと問いかける。その表情に涼介はまた作られた物だと分かる。その事に居心地の悪さをどうしても感じてしまう。確かに、懐かしさを覚えていたがそれも続けば気疲れする。

だからこそ、涼介は口を開く。どちらに転ぼうともどうせなら本音で話せるようになりたいと想いを言葉にする。

「構いませんよ。けれど一つだけ条件が有ります」

「条件ですか？」

「ええ、条件です。お互いに外面を取り繕うのは辞めませんか？」

「ええと、白木さん？」

「私は今でこそ制御して、むやみやたらに自身への負の感情を懐かせない様にするのをやめています。けれども、外で生きていた間はずっとその環境で生きていました。だから私に向かう感情は正の感情か、無関心だけでした。無関心は高まりが無いので落としようが有りませんからね」

阿求は涼介の言葉に真意が見いだせず困惑を見せる。

「だからでしょうか。敵愾心やそれら負の想いが籠っている感情が目立つのです。どういった物かを判断はできませんが、快く思われていないという事だけは良くわかります。今までの自分の周りになかったものなので酷く目につきます。稗田さん、いや阿求が私の事を良く思っていないことがよくわかる」

阿求がその言葉に小さく息を飲む。和やかに話せていたし、涼介もそういった態度であつたので知られているとは思ってもみなかったのだ。けれど、少しすれば驚きの感情は収まり、冷静さが阿求の中に戻る。そして、察せられているならば仕方ないと言いたげに阿求はため息一つと共に雰囲気を変える。

「そうですね。なるほど、そう言った見分け方でしたか。確かにいつもの光景に見知らぬものが混じると目立ちますよね」

「ええ」

阿求の視線が涼介を強く射抜く。その視線に涼介は、阿求に自らも異物だと言われているような気持ちになる。

「貴方にとって私がそうであるならば、私にとっての貴方もそうです。貴方の在り方は酷く目につく」

「どのようによ？」

「貴方が私と同様に力の無い人間であるのに、貴方は彼女たちに、幻想達の輪に入っている。その姿が酷く目につく。私は貴方が羨ましくもあり妬ましくもある」

「なるほど」

阿求が笑みを失くし、少しだけ険のこもった表情で言葉を発する。

「私は、私達は貴方の様になりました。幻想達と心を通わせてみたかった。彼女らと友になりました。けれどそれは出来なかつた。だからこそ、能力を生かした役割を見つけ、閻魔と交渉し今が有る。それなのに貴方はするりと私の憧れた場所に入り込んだ。貴方が悪いわけではない……でも、私はどうしても貴方を好きになれない」

阿求の言葉に籠る声が強くなる。その声に少しだけ責める様な、どうして貴方がと嘆く様な感情を感じる。けして荒げることは無い、しかし強い気持ちの籠る言葉が阿求より紡がれる。

そこに込められる感情は決して彼女一人の物ではない。転生の際に記憶と共に意識

の消えてしまった過去の阿礼の子たちの残滓が宿る。転生の負荷にさえ耐え、僅かに残った先代たちの残滓が阿求の想いを強くする。

「何となくそんな気はしていたよ」

「へえ、分かっていたんですか？」

「どうだろうね」

「本音で話すのではないのですか。貴方が言い出したことですよ」

「自分でもよくわからないんだ。でも、君が私に嫉妬する様に私は君を羨んでいる。人としてずっと幻想のそばで暮らせる。何度でも出会うことが出来る。私はそれがうらやましい」

阿求が涼介の言葉に、目を大きく見開く。自身も同じように思われているとは考えていなかったのだ。涼介はさらに言葉が続ける。

「でも、私は君みたいにならなかつた。私はたぶん何度でも縋ろうと足掻くと思う。何度でも今のようになろうと思う。だからこそ私は君に好感が持てる。私は君にはならないから」

涼介が本心を語る。淡々とけれどどこまでも本音で阿求へと語る。阿求もそれを静かに聞く。涼介の言葉が終わると少しだけ沈黙が二人を包む。小さく深呼吸を一つ阿求がし、言葉を返す。

「私は貴方みたいにはなれなかった。きつとそういつた選択肢もあつたけれど私達には選べなかつた。だから何度だつて私はきつとここに立つ。だからこそ私は貴方に羨望を覚える。私は貴方にはなれないから」

二人の視線が交差する。互いの瞳を見つめ合う。向き合う瞳の中に自らの姿を見つめる。両者から小さな笑いが同時に漏れる。

「私達は鏡合わせの様な物だろうね」

「似ているのに違う。限りなく近いのに決して交わらない」

「私はそちらに決していけない」

「私はそちらに決していけない」

互いに相手の言葉に合わせる様な返答をすれば、また笑いがこみあげてくる。クスクスと本当に楽しそうに両者が笑う。

「私は君が好ましいよ、阿求」

「私は貴方が嫌いです、涼介」

混じりけのない笑みを浮かべて互いが互いに言い切る。それはどこか歪んでいる。けれど、偽りのない正しい姿でもある。互いに幻想に心奪われた異端児同士、歪んでいてこそ正しいのかもしれない。

「あはは、それは残念」

「ふふ、でも貴方のお話は好きですよ」

「私も君との話は楽しいね」

「ならばまた聞かせてください。そちら側の話を」

「ああ、語ろうとも。だからまた聞いておくれ阿求」

「何一つ決して忘れませんよ」

また一つ好ましい縁を得られたと涼介は笑う。いけ好かない、けれど得難い縁が出来たと阿求も笑う。ひねくれ者達の会話はそれからも続く。

「涼介、何をぼうつとしているのですか？ 着きましたよ」

過去にぼうつと思いを馳せていた涼介の意識が阿求の言葉で呼び起こされる。気がつけばそこは稗田邸の門の前である。どこか上の空な涼介の様子に、出迎えに出てきている稗田家の使用人も困惑している。

その様子に申し訳なさを感じて、ついつい苦笑が顔に出る。ペこりと謝罪の意味を含めて使用人へ軽く頭を下げ、阿求へと返答もする。

「いや、すまない。ちよつと思考が過去へもぐつていたよ」

「何を思い出していたのですか？」

「初めて君と話した時の事を少しね」

涼介がそう言えば、阿求は余計な事を思い出すなどでも言いたげに顔をしかめる。ため息とともに首が左右にやれやれと振られる。

「呑気ですね」

「友人と話をするだけだからね」

「はあ、のらりくらりと……ああ、今日は遅くなるので夕飯を彼の分もお願いします」

「畏まりました、阿求様」

阿求が出迎えの使用人へとそう声をかける。彼女は了承の声とともに、頭を一度ぺこりと下げる。

「こつた物は出さなくていいわよ」

「いえ、しかしお客様に——」

「いいのよ、別に特別な客ではないのだから」

「ただの友人が遊びに來ただけですので普段通りで構いませんよ。それにこれからはきつと頻度も増えますので、そのたびに豪勢にされてしまえば肩身が狭くなつてしまいます」

食い下がろうとする使用人の声を遮り、阿求が言葉を重ねる。それでもどこか不承不承気味な使用人の様子に、涼介が阿求の後押しをするように言葉を重ねれば澁々ながら

も領いてくれる。

その使用人の様子に阿求が不満そうな顔で涼介を見る。まるで、余計な事をとでも言いたげなその表情に向かつて笑みを浮かべれば、ベツと舌を出されてしまう。そのまま阿求は涼介の反応を見ることなくスタスタと奥へと入っていつてしまう。

使用人がその様子に苦笑をすると、涼介へと向き直る。

「申し訳ありません、白木様」

「気にしていませんよ。むしろ気兼ねなくて好ましいくらいです」

「そう言っていたけると幸いです。阿求様をよろしくお願いいたします」

「ん？ ええ、構いませんよ」

「阿求様を取り繕わずに接する方は少ないのです。何とか貴方といる時の阿求様は年相応な感じでした、これからも遊びに来てくださいませ」

「はい。それに私も阿求と話するのは楽しいのでこれからも押しかけさせてもらいます」

「ふふ、是非押しかけてください」

「涼介、いつまで話しているのですか。早く来なさい」

「家屋の中より阿求の催促の声が飛んでくる。涼介と使用人、二人は顔を見合わせてクスクスと笑うと門をくぐる。」

「さて、怒られてしまう前に早くいきますね」

「廊下を走らない程度にお願いたします」

気安いやり取りを交わし、涼介も奥へとその姿を消す。使用人もその姿を見送ると、仕事に戻ろうと中へと戻る。

「下ごしらえにしつかりと手間をかけて、見た目を地味にすれば怒られはしないでしよう」

そう呟きを漏らし使用人は台所へと向かう。その晩、いつも通りの見た目でいつも通りでない夕飯に阿求は眉をひそめる。気が付かずに涼介が美味しいねと笑い、給仕の使用人がありがとうございますと頭を下げればもうどうにでもなれと阿求は匙を投げる。

これより先、涼介が訪れるたびに作られる食事を少しだけ期待している自分に気が付いた阿求が悔しさにへそを曲げるのはまた別のお話。訳も分からず機嫌を取る涼介とそれを楽しげに見ている使用人の姿がそこにはきつとあることだろう。

平和な喧騒に供する四十杯目

綺麗に修理された店内で涼介は今日も店を開く。萃香達と仲良くテーブルやカウンターの修理を行った。それだからだろうか、前よりも一層店内が、この店が心地よく感じられる。修理の間もずっと賑やかな作業であった。それさえも楽しかったと思ひ出す。

——欲を言えば萃香姐さんにここへ居ついてももらえたら……仕方ないか

萃香は今博麗神社で寝泊まりしている。萃香いわく、煎り豆だらけの場所は嫌だとのことだ。そればかりはどうしようもないと涼介も苦笑してしまった。かといつて店をやめるわけにもいかない為、萃香は気にいつている霊夢の所へと押しかける運びと相成った。

その後、ご立腹の霊夢が店へと文句を言いやつてくる事もあったがそれはまた別の話。

涼介がつつらと取り留めのない事を考えていると不意に耳へ鳥の鳴き声が聞こえてくる。

「おや、お前さんかい。今日も大変だね」

木をつつく軽い音と鳴き声のする場所、窓を開ければそこには一羽の鴉が留まっている。涼介がねぎらう様に声をかければ、鴉は全くだと言いたげに相槌をする様に一度鳴く。鴉の賢い対応に涼介はクスリと笑う。

「少し待っていてね」

鴉に涼介が声をかけ、カウンターの中から小さくカットした果物を数欠片、手に持ち再び窓際へと戻る。手の上に置き鴉に差し出せば、鴉は感謝を示す様に一度頭を下げた後に果実を啄む。その光景に涼介は和やかな心持となる。鴉は少量の果物——食べ過ぎると飛行に支障が出る為——を食べ終わると再び感謝する様に一度鳴く。

「はい、お粗末さまでした」

涼介も鴉の鳴き声に返事を返す。そして鴉が何かを求めるように自らの顔を見つめてくる。その様子に苦笑し、求めているのであろう言葉を返す為に口を開く。

「萃香姐さんならいいよ。そう主人に伝えておくれ」

鴉は了承する様に一度鳴き、羽を広げて山へと飛んでいく。涼介は僅かな間だけその後ろ姿を見送るとカウンターへと戻り手を洗ったのち、豆を挽き始める。店内には豆を

挽く音だけが静かに満ちる。コリコリと小気味いい音が涼介の耳を撫でる。

不意に窓がガタガタと音を立てて揺れる。その音に涼介は客が来た事を理解する。直後、扉の鈴を鳴らして予想した人物が来店する。

「こんにちわー、涼介さん！」

「やあ、文。こんにちは」

現れた人物は天狗の新聞屋、射命丸文。顔にニコニコと笑みを浮かべ元気よく挨拶をする。その肩には先ほど店を訪れた鴉が一羽乗っている。鴉も騒がしい主人の態度を詫びるように、一度涼介に向けて頭を下げる。

鴉の態度に涼介は内心で小さく笑う。主人の文とはまるで似ない、使い魔鴉に親近感を覚える。同じように君も振り回されているねと仲間意識さえ芽生え、口元がほころぶ。

「おやおや、何か良い事でもありましたか？　口元が緩んでいますよ。あ、私が来たからですね！」

「はは、そうだね。文が来たからだね」

実際には使い魔の鴉に親近感を覚えたからだだが、文が来たからそれを感じたのである。が嘘でもない。涼介は内心でそう結論付ける。鬼の弟分を名乗るのであれば明確な嘘はつくまいと考えている。けれど、相手が勘違いするのは仕方ないと萃香にも習って

みせる。萃香も嘘は言わないが、わざと言葉にしない事や、誤解される様な言い回しをする事もある為にこれも許容範囲だと涼介は考える。

文は涼介の答えを受けるとあからさまに嬉しそうに笑みを深める。羽もパタパタと忙しく動き、喜んでいることがよくわかる。相変わらず他に客がいない時の文は分かりやすいなど涼介は考える。他に誰かが居たりする時の文は、初めてであった時の様に内心を隠してしまう。これも仲良くなれた証しだろうと、今度は本当に文に対して混じりけのない笑みを向ける。

「ふふ、全く涼介さんは寂しがり屋さんですね」

「それは……確かにそうだね。私は存外寂しがり屋なようだ」

「あやや、今日の涼介さんは随分と素直ですね？」

「いや何、妖夢や咲夜と話したことを思い出してね」

見舞いに来た二人と話したことを思い出す。仲間外れにしないでくれと、輪の中に入れて欲しいと願った自分は確かに寂しがり屋なのだろうと涼介は考える。

「どのようなお話をされたんで？」

「言わないよ」

「そんなああ、いけずですよ」

「まだイヤーマフラーの記事の事は忘れていないからね」

「あはは、いやーそれはですね……部数が良く捌けました」

「全く……素直でよろしい」

「ん？ 許してくれんですか？」

「もともと怒ってはいないよ、忘れていないと言っただけだよ。それにあれはアリスが決めた事だからね。約束を守らなかつた私にとやかく言う権利は無いさ」

「なるほど、涼介さんらしい結論ですね」

文がクスクスと笑い声を漏らせば、涼介は勘弁してくれと肩を竦める。文の肩に留まる鴉が羽を広げ、身体を丸めるハルの近くへと降り立つ。ハルは一度瞳をあげ鴉を確認すると再び閉じる。鴉もそれに対し反応を示す事無く、そのままそこで身体を休める。

「仲良しだね」

「うーん、どうなんでしょうね。でも悪くは無いは確かなのでしょうか」

「悪くないのならそれでいいよ。それでお客様、本日のご注文は？」

「そうですね……店長さん、カフェロワイヤルを一杯くださいな」

「ええ、すぐに」

手元の挽き終っていた豆を使い一杯の珈琲を供する。文も抽出され、火をともし砂糖を見ながら楽しげに時を過ごす。一杯の珈琲が供されるまでの間、僅かな無言が店内に訪れる。

美味しい一杯を飲んでもらいたいと真剣になる涼介と、それを楽しみに待つ文。ゆつたりとした平和な時間が過ぎてゆく。

文が嬉しそうに珈琲を口に運ぶ姿を見ながら涼介は笑みを浮かべる。やはり、自分は皆の輪に入りついていくのも良いけれど、こうやって店に来た友人達と過ごすのも同じくらい幸せな事だと考える。

涼介の視線に気が付き、文が口元からカップを離す。

「そんなに見つめられてしまうと飲みにくいですよ……」

少しだけ口をとがらせながら文が文句を漏らす。声色に少しだけ羞恥の色が混ざっているように感じられ、申し訳なくなる。

「ああ、ごめんね文。でもやっぱり商売柄の所為か、嬉しそうに飲んでもらえるのはやはり嬉しいんだよ」

「まあ、分からなくはないですけど。私だって新聞を読んでもらえるのは嬉しいですからね」

「じゃあ許してもらえるのかな?」

「ちよつとだけですよ。でも、今日はもうダメです」

「これは手厳しいね」

「当り前です、乙女の顔を凝視するなんて……記事にしちやいますよ?」

「はは、これは後が怖そうだ」

涼介が降参という様に両手をあげる。文も涼介の反応にクスリと小さく笑う。

「それなら記事が書かれてしまわない様に仕事をしようかな」

涼介はそう漏らすと文に背を向け仕事に戻る。文が何をしているのか少しだけ覗きこめば、料理の下準備をしている。そしてちらりと文の視界の端へ入る本日の日替わりのメニューの内容。なるほど、巫女用の料理の準備かと理解する。涼介のその姿に、文は相も変わらずマメな友人だと思う。

珈琲片手に友人の後ろ姿を静かに見ていけば、初めてであった時とは変わっている点も視界へと入ってくる。例えば身体の周りに浮く、霊体。材料を運んだり、カットしたりと、それはもう勤勉に働くその姿に舌を巻く。随分と幻想に馴染んできているなと思う。霊力何てまるでないのいつの間にか騒動の中心にいる友人を少しだけ愉快地思う。

そして涼介が動くたびに音を鳴らす鬼の腕輪。染みついている見知った気配に少しだけ心が怯む。伊吹萃香、元天狗たちの上役の鬼の中でも更に頂点に位置していた妖怪の気配。それに認められた目の前の友人には心底から驚かされたのは記憶に新しい。

宴会の時に膝元で寝ていた理由を聞こうと後日店を訪れた時を文は思い出す。自分の間の悪さと涼介の呑気さには頭を抱えたなあと内心で苦笑する。

——全く、飽きない人だ^友

文の口元に笑みが浮かぶ。

幻想郷の空をふらふらと飛びながら今日も今日とて新聞のネタを文は探す。涼介の所に話を聞きに行くのも良いけれど、しばらくは安静にしているみたいだから騒がせるのもまずかろうと自重する。同時に、元気になった時には祝いと共に押しかけようとも計画している。

「さてさて、どうしましょうかねえ。霊夢さんが異変の全容をちゃんと把握していないのはいつもの事でしたし、かといって他の人らも詳しくは知らないですよねえ」

相変わらずあの巫女は鬼のように強く、異変を解決させる。原因の究明など碌にせず、異変を終わりへと導くその手腕にはいつも記者として泣かされている。それと神社

の空で萃香と真剣勝負をしているのを見た時はそれはそれは恐ろしかった。格をあげろ。それは言葉にしてしまえば単純だ。けれど実行するのは至難の、いや至難どころではない業だ。

もともと能力を持っている者は持つていない者と比べ格が高いと言える。それは世界に直接作用させる能力の特性上、世界に近い位置にいる為と考えられる。だから名のある妖怪は皆程度の差はあれ能力を持つているし、力の弱い小妖でも人型を作れてしまう。能力を持つていないという事は能力に対しての抵抗力が皆無に近いと言える。極端に言ってしまうえば能力持ちが三次元の絵描きで能力を持たぬものは二次元の絵とも言える。だからこそ、竹林に住まう小妖である蛍の妖怪は、妖力に見合わないのに妖蟲の女王となれている。

「全く、本当に紫さんはどこでああいう人材を見つけてるのでしょうかねえ」

思い出した霊夢の姿に僅かな身震いを覚えながら文はぼやく。霊夢がおこなった事は自らを高次へと浮かせること。能力持ち同士の闘いを、能力持ちと能力無しの関係性へと変えてしまう様な荒業。あれでは確かに勝負にならないと文は考える。絵では絵描きに干渉できない。萃香も奮戦していたがアレは相手が悪いと言える。涼介が同じ土俵へ引き込むのであれば、霊夢は土俵にさえ立たせてくれない。

スペルカードルール様様だと文は小さくつぶやく。少なくともそれで戦えば、例のス

perlさえ耐えきれれば勝負になるのだからとため息をつく。

「まあ弾幕ごっこもあの巫女は鬼の様に強いんですねえ〜」

いやだいやだと、気だるげにつぶやきながら文は空を往く。さて、何か面白い事はと周囲を見渡していると、こちらへ向かっている者の存在を風の動きから察する。誰だろうかと考えるのもつかの間、大ききから自らの使い魔としてゐる鴉だと気が付く。ふらふらと飛ぶのをやめてその場で待つ様に滞空すれば、使い魔が現れる。差し出した腕へと軽やかに留まり、報告をしてくる。

「ふむふむ、涼介さんは元氣になられたんですね。ほう？ それで今は神社から帰って店にいます。それなら善は急げですね、良くやりました！ 後で褒めてあげま——」

文が能力と妖力を併用して、幻想郷最速の名に恥じない速度で空の彼方へと消える。言葉を最後まで言い切ることなく、主人がその場を去る。後に残された鴉は何か大事な事を伝えていないという様に大きな声で何度も鳴き声を上げるが、その声は主人に届くことは無い。やがて諦めたように鳴くのをやめ、鴉は桃源亭を指す様に羽ばたく。見る者がいれば、哀愁が漂っていたと答えた事だろう。

音と使い魔さえ置き去りにするほどの勢いで文は目的地へと近づく。店が視界に入ると、そういえば久しぶりに店に来たなとふと思う。宴会の異変中は飲みすぎや、宴会で時間を取られた分他への取材が忙しく足を運べなかつたと思ひ出す。久方ぶりの桃

源亭に気分が上向きになる。自身のお気に入りの一杯を思い出し、喉が渇く気さえしてくると文は表情を綻ばせる。

「全く、涼介さんにも困ったものです。私の胃袋を掴む気でしょうか、ふふふ」

軽い冗談さえ口をついて出れば、自分が浮かれていると文は理解する。けれど、別段そんな自分も嫌いではない。むしろ、こういつた気持ちになれる友人が出来たことが嬉しくさえある。視界の先の店の外に涼介の姿が見える。店から何かを抱えながら姿を現す。

涼介も文に気が付いたのか顔が上向く。にこりと笑う涼介に笑みを返し、店の前へと文は降り立つ。能力で風を操り速度によって生じた勢いを相殺して、周囲への被害を失くす。僅かに残った風が、桃源亭の窓を僅かに揺らす。ノックのつもりでいつも残している弱い風の具合に今日も絶好調だとうんうんと頷いて見せる。

「やあ、文。今日も元気だね」

「涼介さん、やつほーです!! もうお加減はいいんですか?」

「もうだいぶいいよ。それに動かないと身体が固まりそうだよ」

「なるほどなるほど。それでその板切れはどうしたんですか?」

「ああ、これかい? これは壊れたテーブルやら椅子だよ」

「壊れた、ですか?」

「うん、そうだよ。ほら、攫われた時は店の中で暴れたから」

「ふえ？ お店で暴れたんですか!? でもお店の形が残っていますよ。もしかして外側だけで中身は全部壊れているとかですか?」

「荒れているのはお店の部分だけだよ」

「ええつ。でも鬼が暴れたんですよ!」

文の言葉で涼介は何かに気が付いたように僅かに苦笑する。そして再び涼介は口を開く。

「ほら、私の力で被害を抑えたからね。まあ、それでも店は荒れ放題だし、私はぼこぼこだったけれどね」

「なるほど、確かにそれなら納得ができませんね」

霊夢の浮く能力は反則だと思いが、涼介の落とす能力も厄介だなあと文は内心で独りごちる。けれど、得心がいったと涼介へは頷いて見せる。

「なるほど、それでしたら私もお手伝いしましょう。涼介さんだけでは大変ですからね」
文はそう言つて気合を入れるように腕まくりをするそぶりをしてみせる。半袖であるために捲れる袖は無いのだが、分かりやすいポーズといえるだろう。そのまま軽快に歩きながら店内を目指す。

「文——」

「遠慮は無用ですよー。私と涼介さんの仲じゃないですよー。あ、お礼は取材と珈琲でいいですよー」

それはもうニコニコとした嬉しそうな笑みを浮かべ文は涼介の言葉を遮り、店内への扉をあける。扉は壊れていないようで、いつもの様に聞きなれた鈴の音を耳へと届けてくる。視界に入る店内は、荒れている。けれど、鬼が暴れた後であれば可愛い物だと笑みを浮かべる。昔、鬼の方々が居た時なんてと大昔に思いを馳せてさえ見せる。思い出される壊された数々の物に思わず瞼の裏が熱くなるがかぶりをふって過去への哀愁を断ち切る。

「涼介ー、次はこれを運んで……ん？ 天狗じゃないか、どうしたんだこんなどころで」
扉の前でかぶりを振っていた文へと声がかかる。かけられた相手は涼介であるが、生憎今は外に居てこの場にはいない。カウンターの裏から小さな影がひよっこりと顔を出す。頭から生える二本の立派な角に、僅かに漂う酒気。そして動いたびに音を鳴らす金属の鎖。背丈は自らよりも何周りか小さい相手ではあるが文は血の気がサツと引く。鬼、それもとびきりの鬼の中の鬼。その出現に身体が反射的に息を吸う。

「文、私は一人じゃなくて萃香姐さんが手伝ってくれているんだよ」

背後から扉が開き、涼介がそう補足する。聞こえた内容に聞きたいことが山積みとなる。どうして鬼が手伝っているのか、どうして姐さんと呼んでいるのかと、疑問は尽き

ないが今はそれどころではない。ぎぎぎと油の切れた絡繰からくりの様に文が顔だけを涼介へと向ける。その顔にはどうしてもつと早く言つてくれなかつたのかと書いてある。けれど、涼介は天狗と鬼の關係を知らない為に首をかしげるばかりだ。

「文？ ああ、あんた能力持ちのあの天狗かい。丁度いいや、あんたも手伝つていきなよ」

萃香が何でもない様に言いながら軽く文の腰を叩く。本当に軽い衝撃を受け、しかしそれが最後の引き金となり文の中で感情が爆発する。混乱と驚愕、それに過去に積み重ねられた畏怖と様々な想いが一気に高まる。衝撃が来た直後、まだ萃香の手が離れてもいない刹那に文が口を開く。

「みぎやあああああああああああ!!」

天狗の悲しき悲鳴が店内に木霊する。それは今なお空を駆ける使い魔鴉にも届かぬばかりの勢いであつたという。

思い出された幾日か前の出来事に文は気疲れを覚える。空になつたカップに意識を今へと戻される。その事に少しだけ安堵を覚える。あの後からは酷かつたと文の視線が虚空をみつめる。文の過剰な反応を面白がつた萃香に散々からかわれ、構われ、涼介

にも情けない姿を大いに微笑まじげな顔で見られてしまった。ああ、もう失敗したなあ
と後悔が自らの中で顔を出す。

「涼介さーん」

「なんだい、文？」

「おかわりくださーい」

もう失態は見られるだけ見られたのだから、取り繕う見栄もないのだと文はテーブルの上にとらんと突つ伏しながらお代わりを要求する。確かに失態であったが、それでここまでダラダラと素をさらけ出せるならあの出来事にも良い事はあったのだらうと前向きに思い直す。正直そうでもないことやっていられないとの自棄も混じっている。

涼介は文のダレ具合に苦笑しながらもまた豆を挽き始める。

「やはり飲んでもらえるのは嬉しいね」

「ふふ、私は飲んで嬉しいのでWin—Winですね」

「はは、そうだね。萃香姐さんは珈琲を飲めないからなあ」

「ああ、煎り豆の汁ですもんね」

それを聞いた文はなるほど、それならこれからも日中の間に来るのであれば鉢合わせは無いだろうと考える。これは良い事を聞いたとさらにニコニコと笑みを浮かべる。

「同じ煎り豆には触れないフラン達が飲めたから萃香姐さんも飲めると思ったんだだけ

どダメみたいだね」

「ああ、そう言えばあの吸血鬼の姉妹は良く飲んでいますね」

確かにそれは不思議な事だと文は思う。少なくとも吸血鬼たちは煎り豆で火傷をするはずだと過去に調べて確定している。吸血鬼異変で痛い目を見た天狗たちが色々調べたのだからその情報に間違いはないと文は確信を持っている。

「なんでも元々の性質の違いだろうって萃香姐さんは言っていたよ」

「元々の性質ですか？」

「うん。吸血鬼はもともと西洋の妖怪でヴァンパイアとかと呼ぶよね。吸血鬼というのはこちらにその存在が知られてから付けられたいわば後付の物だろう」

「ああ、なるほど。鬼の性質は後から付いたものだから煎り豆はダメでも加工して意味が失われてしまえば関係ないと」

「それが原因だろうと言っていたね。後、私らはあんな中途半端な鬼じゃないから汁だって駄目さとも言っていたね」

「確かに萃香さんなら言いそうですね」

「そうだね。はい、文。おかわりだよ」

「ふふ、ありがとうございます。でもそれだと萃香さんには飲んでもらえないから涼介さんは残念なのではないですか？」

「ああ、その事かい。確かに最初は残念だったけれど私も色々勉強していてね、だ——」
カランカランと鈴が鳴り、涼介の声を遮り来客を告げる。文は言葉を区切り、お客を出迎えようとそちらを向く涼介から手元のカップへと視線を向ける。続きはまたひと段落したら聞こうと、今はこの一杯を心行くまで堪能しようと思いを嗅ぐ。珈琲の香りと洋酒の香りが心地良いと感じながら、カップを口元へと運び今の幸せを噛みしめると来客の声が聞こえる。

「よお、涼介。代用なんたらだっけ？ 味見をしに来たが今大丈夫かい」
聞こえてくる声に文は身体が固まる。

「はい、萃香姐さん。ぼつちり用意してありますよ。後、代用珈琲ですよ。タンポポ珈琲でも構いませんが」

「まあなんでいいから——およ？ 天狗も来ていたのかい」

涼介が萃香と呼びかけ答えが確定する。声が似ているだけの別人であるという儂い希望が打ち砕かれる。床板を踏む音に萃香の接近を悟る。とっさの出来事に混乱からカップを口に運んだまま固まる文には逃げようがない。

「いやー、奇遇だね。私も一緒に邪魔するよ」

萃香が気軽に、あの日の様に何度も繰り返したからかのごとく座っている文の肩に触れる。刷り込まれた反射か、やはり自らの限界を超えたのかは不明だが文が再び爆発

する。傾けたままであつたために口に含まれていた珈琲を吹き出し、悲鳴を上げる。

「あつっ！ あつっ！ こら天狗!!」

「ひにやあああああああああああああ!!」

吹き出された煎り豆の汁で火傷をしながら萃香が凄めば文が絶叫する。涼介は眼前の光景に頭痛を覚えながらも笑みを浮かべる。静かなのも良いけれど、やはり賑やかなのも同じくらい楽しいとクスクスと笑う。

その後、夜間営業までもつれ込み小さな酒宴となる。途中で日替わりランチを食べに来た霊夢も混ざり四人の夜は更けこんでいく。

「まあまあ、うまかったよ。珈琲つてのも」

「もう、本当に涼介さんの所で引き取ってくれないかしら」

「涼介さん、今度から来るなら来るとちゃんと教えておいてくださいよお……」

三者三様の言葉を残し、全員が店を後にする。萃香に褒められ嬉しさを噛みしめながら、霊夢には難しきかなと苦笑を返す。そして文には悪い事をしたなど謝り通しであったと片づけをしながら涼介は店内で笑う。

「そういえば、あの使い魔は要領がいいんだなあ」

文の使い魔の鴉はいつの間にかハルの丸まってる腹のあたりで蹲って存在感を消していたなと思ひ出す。けれども、帰った後は大変そうだと使い魔の受難を思う。

「ハルの友達も大変そうだね」

涼介がハルへと言葉をかければ、どのような気持ちを含んでいるのかは分からないがハルがわうと短く応える。とげとげしきは感じられないから肯定的なのだろうと勝手に一人納得しながら涼介はハルを一瞥する。

——いつか君や、あの鴉と話せる時は来るのかな？

浮かんだ思考に少しだけ可笑しさを感じクスリと笑う。頭を軽く振り、思考を切り替える。また明日の為にと片付けと準備をする。

「明日はどんな事があるのかな」

楽しげな声が幻想郷へと溶けていく。

揺蕩う友に供する四一杯目

ある日の午後、店で足りなくなつたものを里へと買い出しに出た涼介が買い物を終えて帰路についている。傍にはハルもおり二人仲良くお出かけといった所だ。

「さてさて、今日はこのあとのんびりしようか、ハル？」

涼介が買い物袋を抱えながらハルへと声をかける。ハルも返事をするように短く鳴く。涼介が鈴奈庵で借りた本でも読もうかなと思いつながら足を進めていると不意に視界が闇へと染まる。前触れなく突如訪れた闇に涼介は足を止める。軽く声を出してみれば音も聞こえない。なるほどと、理解が涼介の中に宿る。

「サニー、ルナ、スター。あまり悪さをするのは感心しないな」

そう声に出して叫んでみせる。無論未だ音は消えているために涼介にはどれ程の音量であったのか自分でもわからない。けれども、少なくとも音を消している張本人である月の光の妖精、ルナチャイルドへは伝わっている。けれど反応に変化はない為のために息をつく。

「まったく……仕方ないか」

涼介は何も見えない闇の中で一度ぼやくと、荷物を足元へとおく。腕に巻きつけ普段は邪魔にならないようにしている鎖をダラリと垂らす。

「さて、試してみようか」

言葉と共に能力の範囲を広げる。飛べないようにする為に影響下へと置く範囲を拡大する。疎める事に長けた萃香の能力を借り訓練を行った結果、以前よりもずっと広く能力を広げられるように涼介はなっている。

「これくらいが限界か。さて」

広げると同時に涼介が鎖をつけた右腕を大きく後ろへ逸らす。音と光のない世界の中で、自身の触覚が鋭さを増し、鎖の揺れを知覚する。

「せー、の!!」

掛け声と共に腕を薙ぐ様に振るう。鬼の鎖が腕の勢いにつられ空間を走る。

——伸びろ

鎖を意識し念を送る。涼介の意思に鎖が応じ、その長さを増す。鬼の宝の伸縮自在の鎖が里と涼介の店の間にある平原の中で横薙ぎに地を駆ける。鎖に何か触れると、巻き取る様に鎖が蠢く。手に伝わる感覚だけを頼りに強く腕を引く。能力で重量を落とさ

れた何かが涼介の引く手に合わせて釣り上げられる。

「うきゅー！」

押しつぶされる様な声と共に涼介の耳に音が戻る。涼介はその事でもらえた者がルナチャイルドだと理解する。すかさずハルへと声をかける。

「ハル、サニーを——」

言い切る前にハルの駆ける音が耳へと届く。暗闇の中、見ることはできないがその頼もしい姿を想像する。嗅覚を頼りにハルが日光の妖精、サニーミルクを捉えたのか視界に光が戻る。涼介は戻った光に一瞬目がくらむも、すぐさま視界は正常に働きます。

「離せ、離せよー」

「うう、鎖が重い」

「あーまた駄目か」

ハルに啞えられて抵抗するサニーミルク、鎖に引き倒され脱力気味なルナチャイルド、残念そうに肩を竦めるスターサファイアの姿が涼介の眼前に広がる。いつも通りの光の三妖精の姿に涼介は思わず苦笑する。

「全く、飽きないなあ」

「ほんとにそうだね、いつも涼介は楽しそう」

不意に背後から涼介の漏らした独り言に應える声が発される。驚きに、反射的に身体

が振り向く。視界に入るのは緑色の帽子をかぶり、閉じた瞳に細い管の伸びた飾りをしている小さな少女。どこか虚ろで、何故かおぼろげに見える少女がそこにはいる。

「君は——」

誰だと問い掛けようとした涼介の脳内で目の前の少女が誰であったか思い出される。

いつもの様にお昼の繁盛期が過ぎ去り片づけを終える。一息入れるように自分へのご褒美と一杯の珈琲を涼介は入れる。一口飲めば疲れが吐息と共に抜ける。鼻腔を通る珈琲特有の香りに精神が安らぐ。

今日はこれから誰が来るのだろうかと涼介が想いを馳せる。夏に入り、風通しのために空けている窓から見える空を眺める。視界の遠くを横切る様に過ぎ去る点に、あれは誰だろうかと考える。

「さて、一息入れたし何をして待とうかな」

誰もいない店内に寂しさを覚えポツリと独り言が口をつく。ハルはふらりと散歩に出かけてしまったために珍しく本当に独りきりの店内。誰かしらがいつもいた様な気がする閑散としたフロアを見れば、涼介の顔に苦笑が浮かぶ。

——やれやれ、本格的に寂しがり屋をこじらせたかもしれないな

ふとそんなことまで考えてしまう始末である。思考を切り替えようとカップの中身を飲みきり洗い始める。小鈴の所で借りた本は読んでしまったし、はてどうするかと考えている涼介の耳に扉についた鈴の音が届く。カランカランと音を鳴らし来客を告げる。

「いらつしやいませ」

水滴を吹く手を止めて、扉に身体ごと向き直る。扉の前には小さな少女が立っている。帽子をかぶり、目を瞑った様な飾りをつけた小さな少女。記憶にない彼女の姿に見様だと涼介は判断する。

「はじ——」

初めて来店されたお客様へとかける文言を涼介は口にしかけて止める。涼介の瞳がわずかに見開かれる。少女がその様子にニコリと笑みを浮かべ口を開く。

「またきたよー」

気軽な調子で手をフリフリと顔の横で振りながら少女が笑う。つられる様に涼介も驚愕の表情が笑みへ変わる。

「やあ、いいし。よく来たね」

涼介が少女をこいしと呼びかける。先ほどまではまるで見覚えのなかった少女に、涼介は親しい友人の様に声をかける。

けれど、何もおかしいことはない。現に二人は友人なのである。この邂逅もすでに片手の指では足りなくなっている。たとえば涼介が忘れていようと、たとえばこいしと呼ばれた少女も意識をしていなかろうと二人は友人なのであろう。傍目からみた二人の間の空気がそれを分かりやすく示している。

「あ、思い出した？」

「思い出したよ」

「ふふー」

こいしが涼介の返答に満足そうに声を漏らし、涼介の目の前のカウンター席へと座る。何か意味があるのか、それとも無意識なのか椅子に座ったこいしの身体がふらふらと揺れる。柳の様に、先を垂らす穂の様に不規則に揺らめく。変わらぬこいしの様子を涼介が口元を緩める。

「相変わらず幻想郷中をふらふらしているのかい、こいし？」

「んー？ んー、そうだよー。さっきまでおつきな水溜りにいたの」

「へえ。やはり涼しいからかな？」

「うん。でも途中で青いのがどこかに行っちゃったからここに来たんだー。ここも居心

地いいからついついぼうつとしていると流れてきちゃうの」

「それは嬉しい感想だね」

「あと涼しい」

こいしの続けられた言葉にクスリと涼介が笑いを漏らす。確かに温度を落としていたために店内は適温で過ごしやすい。けれど、居心地が良いとは別に付け足したことから、それ抜きでもこの店を気に入っていると言われた様で嬉しいのだ。

「そつか。ゆつくりしていくと良いよ。喉は乾かないかな？」

「うん。あ、いいの？」

「構わないよ」

「私お金持っていないよ」

「今までも貰っていないかったよ」

「でもお姉ちゃんが払いなさいって言うの。置いておくだけでも良いからつて。ん、そういうえば渡されていたお金家に置いてあるんだ」

こいしが思いつくままに言葉を口にする。深く考える様子もなく、その場その場の出来事へ対応する様に言葉を続ける。このまま何も返さないとお金を取りに行くと言いついて出て行ってしまうと涼介は過去の経験から学んでいる。

その時はそのまま帰ってこないまま三日が経ち、ふらりと姿を現したこいしが頼んで

いた私の珈琲はと首をかしげていた。なお、帰ってきたこいしはやはりお金を持っていなかった。いわく、赤い屋敷と鴉の村があつたとの事より、紅魔館と天狗の集落の辺りをふらついていたと涼介には推察できた。

がたりと席を立つ音に涼介は思考をやめる。視線を向ければこいしが扉に向かおうとしている。まずいと思いつぐに涼介は口を開く。

「お金は本当に構わないよ」

「でも、お金は払う物なんですよ？」

「確かにそうだね。でも、仮にこいしが飲んでも私は忘れてしまうのだからお金は取れないよ。だって商品を売った覚えがないんだからね」

涼介の言葉にこいしの足が止まる。一拍置いた後にこいしが振り返る。いつもと変わらないニコニコと、けれど少し虚ろな表情の中に寂しげな様子を一瞬見つけた気がする。

「ん、そうだねー。なら貰っちゃおうかなー。私アレがいい。人魂の浮いているやつ」

「ああ、マシユマロコーヒーだね」

「それぞれ。この前マシユマロつけている子が飲んでいたやつ」

「こいしの感想に涼介が笑い声を漏らす。その反応にこいしが首をかしげて見せる。

「どうしたの？」

「こいしの感想を聞いたら妖夢がへそを曲げそうだなと思つてね」

「ぶーん」

あまり興味がなさそうな返答をし、足をプラプラさせながらこいしは涼介の手元へ視線を向ける。ミルで挽かれる豆をその双眸でぼうつと眺める。相変わらず移り気が激しいと思う。営業中は能力を広げているために、こいしも落ち着いているはずであるがそれでもこれである。能力が無ければ店の中を歩き待っていた可能性さえ考えられる。

——悟る事をやめた悟り妖怪か

何度か会ううちに断片的に聞いてきた事を繋げ合わせ、こいしの事を何となくではあるが理解してきた。人の心を読むことをやめた結果、無意識下でしか行動が出来なくなったと言っていた。能力の影響で離れてしまえば皆が自分を忘れてしまうと、自らも皆を忘れてしまおうとしこいしは言っていたと思ひ出す。

「はい、こいし」

「わあー、ぶかぶかしてるー」

「熱いから気を付けてね」

差し出された一杯にこいしが歡喜の声をあげる。無邪気な様子に思わず笑みがこぼれる。

「お姉さんは元気にしているのかい？」

「お姉ちゃん？」

「そうだよ。最近はいつ帰ったんだい？」

皆が忘れて、皆を忘れるとこいしは言つたが一人だけ例外がいるとも言つていた。それがこいしの姉の悟り妖怪。時折こいしが話す内容から姿を想像するに、氣苦勞の絶えない優しそうな人物像が涼介の中で描かれる。

「いつだったかなー。んー」

「覚えていない位か」

「忘れてるだけかもしれない」

「はは、一緒じゃないか」

「そっかなー？」

「今日はこの後覚えていたらで良いから帰つてあげなよ。きつと心配しているよ」

「んー、んー」

珈琲を飲みながらこいしが珍しく考え込む。涼介はせかす事無く静かに待つ。白い髭をこさえたままこいしが口を開く。

「そーだねー、覚えていたら帰るよ。久しぶりにお姉ちゃんに会いたいし」

「久しぶりつてもうずいぶん帰っていないじゃないか」

「あれ？ 確かにそうだね。涼介頭いいね」

こいしの言葉に思わず涼介から苦笑が漏れる。全く何も考えていないだけなのか、調子がいいのか変わった友人だと改めて思わされる。相変わらず髭を付けたままにするこいしに向けて綺麗な布を持って手を伸ばす。

こいしも涼介の仕草に意図を察したのか顔をグイッと突き出す。顔を拭くようにと差し出そうとしたのに、拭いてくれと差し出されたこいしの行動にやれやれと口元を緩ませる。仕方ないと、涼介はこいしの口元を優しく拭う。気持ちよさそうに瞳を閉じるこいしの姿に猫みたいだなと思わされる。

「はい、取れたよ」

「くるしゆうない」

「それは何か違うかい？」

「あれ？ よきにはからえ？」

「ううん……さつきより近い、かな？」

「まあなんでもいっか」

こいしはあつけらかんと言いきると今度はちゃんと珈琲を混ぜ始める。ただ、混ぜつ

て色が変わるのを楽しんでいるだけの気もするが、涼介はもう大丈夫だろうと布を置く。

「ねえねえ」

「どうした、こいし?」

「また前よりもここは過ごしやすくなったね」

こいしが色の変わるカップから視線を外す事無くそう告げる。その言葉に以前も同じように言われたなと涼介は思い出す。以前は春雪異変の後に訪れたこいしにそう言われたのだったかと思いつく。

「そうかい?」

「うん。落ち着くのはずっと前から変わらないんだけど涼介の中のもやもやが減っているから私は楽だな」

「もやもや?」

「そう。もやもや。こうね、歯の間に引っかかったような感じかな。涼介って表面に出ないけど無意識に結構荒れていたからさ。お店は居心地良くても涼介が居心地悪かったんだよね」

「それは……初めて言われる意見だなあ」

こいしに言われて何となく何のことを言われているのか涼介は理解した。春雪異変

前は生きたくないと、宴会の異変の前ははまだ外の妖怪の事を引きずっていた。無意識を操るこいしにはさぞ煩い無意識であったのであろうとなんとなく涼介はそう思う。

意識下では能力で抑圧できてしまう為、その反動が無意識に出ていたのもあるのかも
しれないと思考が飛躍する。涼介の意識を引き戻す様にこいしの声がする。

「やっぱりあの鬼と喧嘩したのが良かったのかなあ。殴り合っていたの楽しそうだったし」

「あれ、見ていたのかい？」

「見てたよー。見た事ある鬼がいるなーと思っていたら涼介が喧嘩していたの。骨ボキボキだったね」

「店での喧嘩から見ていたのか」

思わず苦笑してしまう。まさかあの喧嘩に観戦者が居たことに涼介は驚きを隠せない。萃香も気が付いていた様子はなかった。目の前の少女はのんびりしただけの見た目通りの子供ではないと、その実力の片鱗を見せられた気がした。

「また何かあったら見に行こうかなー」

「是非おいで。楽しいよ」

大きな騒異変ぎがあれば見学しようかと思案するこいしへと涼介が誘いをかける。こいしが涼介の提案にきよんとする。目をしばしばと何度も瞬かせる。そしてゆっくり

と口元が弧を描く。

「うん!!」

「また見かけたら声位かけていつてよ、こいし」

「そうだねえ。涼介が暇そうだったらいいよー」

「そうかい。じゃあ楽しみにしようかな」

「ふっふー」

こいしが楽しげに鼻を鳴らしながら身体を揺する。その様に本当に楽しそうだと伝わってくる。自分まで楽しくなってきたそうだと涼介も元気を貰える気さえしてくる。

こいしが珈琲を飲みほして立ち上がる。ふらふらとまた目を離れたすきに消えてしまいそんな希薄さを纏いこいしが扉へと近づく。こいしがふと足を止めて振り返る。

「そうだ」

「ん、なんだい？」

「涼介が死んだら家に飾ってあげるね」

「……はは、先約がいるからそちらと相談してとしか私には言えないなあ」

無邪気で純粹なこいしの提案。それは何も含みの無い、どちらかといえれば好意さえ感じさせる声色の提案。嬉しいでしよとでも聞こえてきそうな程綺麗な笑みをこいしが浮かべている。一瞬あつげにとられ言葉に詰まるも何とか涼介は返答をする。以前も

どこかの冬の妖怪に似たような事を提案されていた為にするりと言葉が口をつく。

「ええー、私の家の方があつたかいよ？ みんなもいるし」

「そう言われてもねえ……」

何故自分の提案を受け入れて貰えないのか不思議そうに言うこいしの姿に苦笑がついつい顔に出る。死んだ後なのだから自分には関係ないとか、レティと話し合つて決めておくれとかと色々な事が浮かぶもため息と一緒に飲み込み、口を開く。

「まあ、それはまたおいおいね」

「仕方ないなあー」

頬を膨らましながらかいしが再び扉へと向かう。鈴が鳴り、扉が開く。開いた扉を手で押さえながらかいしがまた涼介へと振り返る。

「じゃあまたこれでお別れだね」

「……そうだね。また次に会うまで忘れてしまうのだろうかね」

「寂しそうな顔をしないでよー」

「そうだね。どうせなら笑顔で別れたいよね」

「そうそう」

こいしがうんうんと頷いて見せる。

「こいし、いつでもおいで」

「うん。またくるね、涼介」

こいしが手を振りその場を立ち去る。

ふつとこいしの姿を涼介が見失う。

涼介がハツとする。

——あれ、私は今まで何をしていたのだろうか

意識が酷く曖昧だと涼介は感じる。まるで毎日繰り返す動作を無意識で終えたかのような、気がついたら終わっていた、時間が経っていたといった様な感覚が自らを襲う。

そのまま思考の底へと降りていきそうな意識が扉の鈴の音に引き戻される。

「いらっしや——」

反射的に言葉が出るとともに視線が扉を向く。けれどそこには誰もいない。

「あれ、開いた音じゃなくてしまった音？」

涼介が首を傾げながら扉に近づく。扉をあけて外を見ても誰の姿も見当たらない。

狐にでも化かされたのだろうかと首をひねりながら店内へと戻ろうと振り向く。

振り向いた涼介の視線にカウンターの上の空のカップが映り込む。

「誰も来客は無かったはずだけど」

おかしいなと涼介は頭を捻る。前にも何度か同じような事があつたなとも同時に考へる。誰もいないのに鈴が鳴り、空のカップが机の上に置いてある。はて、何度目だつただろうかと口元に手を当てながら考へる。

口元に当てた手に涼介は違和感を覚える。自身の口角が上がっていることを手の感触から自覚する。無意識に笑つていたと理解する。視線をあげてカップを見る。カップが机に置いてある深さから何となく座つていた人物の背丈が予想できる。フラン ドールやレミリア辺りとそう違いはなさそうだと検討を付けられる。

「君は誰なのだろうね」

ふと眩きが涼介の口をついて出る。再び扉を開ければ、逢魔が時が訪れ暗くなり始めた幻想の世界が視界に広がる。風に草木が煽られ、ふらふらとその身を揺らす。何故かその草木の様子に涼介は楽しさを感じる。抱いた気持ちのまま涼介が口を開く。

「待つているからまたおいで」

涼介の言葉が風に流され幻想世界へと溶けて消えていく。

風音の中に涼介は少女の笑い声を聞いた気がした。

ああ、またあつたねと涼介の口元に笑みが浮かぶ。

「——こいし、また会ったね」

「うん。また会ったね、涼介」

無意識に揺蕩う少女がにこりと笑う。

誰でも一度は考える話に供する四二杯目

「毎回毎回わざわざすまないな、涼介」

「構いませんよ。それに買い出しのついでですから」

「それでもさ。感謝はきちんと表すものだろう？」

「どこで生徒さんが見ているか、分かりませんかからね。せんせ？」

「悪い笑顔をしているな、全く」

慧音と涼介、二人が慧音の自宅の玄関先で話をしていた。

涼介の軽口に慧音が笑みを浮かべて言葉を返す。涼介の手元には水筒が一本。

恒例の満月の夜の為の差し入れの容器だ。つい先日、満月であったために渡した物を、買い物ついでに回収に来ていたのだ。

慧音も、満月の夜の仕事の後片付けと、いつも通りの寺子屋の授業で余裕が出来るまでに時間がかかる。涼介もそれを見越して、他の用事と合わせて取りに来ていた。

もう何度も繰り返されている、恒例のやり取りであるとも言える。毎度律儀に礼を述べる慧音の相手は、気分が晴れやかになるなど、涼介は感じていた。

「どうした？　また何か悪さでも考えてないかな」

「酷いなあ。悪さ何てしたことないですよ」

気分の良さで緩んだ顔を慧音がからかう様に指摘した。冗談めかした声の調子が、慧音にしては珍しい。何か良い事でもあったのだろうか、涼介は感じた。

「春雪異変では随分と咲夜に心配をかけていたし、この前の異変でも主犯格とお酒を飲んでいたと聞いたよ。次は何をするのか、私は今からひやひやしているよ」

「もう、勘弁してくださいよ。文の新聞ですね？　春雪は確かに自業自得ですが、この前のは不可抗力ですよ」

「不可抗力でもなんでも君はもう少し気を付けるべきだよ。お店も里内に移さないか？」

「それはお断りさせてもらいます。今の場所が気に入ってしまいました」

「はあ、そう言うだろうと思つたよ。うん、でもそうだね……今の君なら問題なさそうだ」

「上白沢さん？」

慧音が顔を破顔させた。穏やかで子を見守る母の様な優しい笑み。

「君の雰囲気はずっと良くなった。前よりも活き活きと活力に満ちている。だから、私も安心だ」

「……分かるのですか?」

涼介が驚きの声を慧音に返した。慧音の言う通り、萃香との一件以後、涼介はずっと前を向いて生きている。

胸を張れる生き方をするため、懸命に生きていた。漫然と死を待つような、生きる意思を落す事はやめていた。

まさか、気が付かれているとは思ってもみなかったのだ。意識の問題で、生活に変化はないのだから。

「私は先生以外に何と呼ばれているかな?」

涼介の疑問の声を受けた慧音が、クスクスと笑みをこぼしながら質問を返した。

教師然とした慧音の立ち振る舞いに、涼介もクスリとついつい声を漏らしてしまう。

慧音のふりに、涼介も応える様に口を開いた。

「はい、先生」

「それでは、涼介君」

「人里の守護者、でしょうか?」

「うむ、正解だ」

生徒と教師のやり取りの様に軽口を二人は交わした。涼介の回答に慧音はよろしいと大仰に頷いて見せる。

わかりやすい仕草に涼介がつい笑みを浮かべてしまう。きつと、実際の授業でもこうやっているのだろうかと思えばこそ、微笑ましさが増したのだ。

慧音は続けてまた口を開いた。

「私は長い間、人の近くでずつと見守ってきた。多くの人を見守ってきた。だからだろうね、なんとなく分かるんだよ。今君は、懸命に生きている。私はそれだけで嬉しいんだ」

そういう慧音の顔は清々しさに満ちていた。憂い一つない、美しい笑顔が涼介の視界に映り込んだ。

慧音の笑みに対し、ああと無意識に涼介が感嘆を漏らす。

「しっかりと生きるだけでその笑顔が見られるのなら、もっと早く前を向くべきでしたね」

いつもの軽口がつつい涼介の口をついて出た。出した後に涼介は僅かに反省をす

る。慧音がため息をつき、呆れ顔をしたからだ。これはまたお小言かなと涼介が覚悟をした。

慧音が小さく息を吸う。仕方ないと諦め気味の涼介に向け、慧音が口を、

「よっ、慧音に涼介」

開くも声が出る前にそれは遮られた。別の声が割り込んできたのだ。

二人が声の方向へ顔を向ければ、そこには予想した通りの人物、妹紅がいた。

片手を上げた格好の、妹紅が二人に向かつて歩いてきた。涼介はひとまずお説教からは逃げられそうかなと、慧音から少し離れて妹紅に近づく。

「やあ、妹紅。丁度いい所に来たね」

妹紅を出迎える様に自らから逃げてゆく涼介の後ろ姿に、慧音がやれやれと言いたげにため息をついた。

妹紅は慧音の様子に首をかしげるが、近づいてくる涼介へとすぐに意識を切り替える。

「丁度いいって？」

「妹紅の所にも回収に行こうと思ってるね」

「ああ、あの水筒か。あれなら洗って家に置いてあるよ」

「だろうね。妹紅は取りにいかないか返ってこないからなあ」

「お前さんの店が遠いのが悪い。せめて里の中に作れよ」

「里の中を歩き回らないのに関係ないじゃないか」

「里の中にあれば気が向くかもしれないだろ？」

「それって何年単位の話なのだろうね」

「お前さん、痛い所を突くじやないか」

言葉でじやれ合い始める涼介と妹紅。慧音も二人の様子を微笑ましげに見つめた。

「やんややんやと、手馴れた掛け合いが続けられる。そんな折、不意に妹紅が話題を変えた。

「そういや涼介、お前さんに聞きたいことが有ったんだ」

「珍しいね、妹紅が私に聞きたいことが有るなんて」

妹紅の言葉に涼介が首をかしげた。慧音という知恵者が友人にいる妹紅が自分に聞きたいことが有るのが涼介には不思議に思えたのだ。

妹紅も涼介の言葉を受けて、自覚はあるのか少しだけばつが悪そうに頭を掻いていた。

「お前さ、この前の満月の時、彼奴に会ったよな」

問い掛けられた内容に涼介は納得がいった。

なるほど、確かにその内容であれば自らに質問をするのだろうと。

合点のいった涼介も妹紅に応える。けれど、それは妹紅が欲した答えではなかったのだらう。

「残念ながら実は会っていないんだよ」

「え？　そうなのか。結局しばらく竹林の中にいたみたいだから話し込んでいるものだ

と……」

妹紅の意外そうな声に涼介の笑みが深まった。

「あはは、ちゃんと帰るまで心配してくれていたんだね。ありがとう、妹紅」

「なっ、馬鹿、お前！ 違うって、ただそのまま死なれちや寝覚めが悪いだけだよ。勘違いするな、というか感謝するなっ」

感謝の言葉をかけられた妹紅が、焦ったように早口で捲し立てた。後ろでクスクスと笑い声を慧音が漏らしている事から、照れ隠しであることが涼介にも容易に察せられた。

涼介の笑みが消えるどころか、さらに愉快気になった事を睨みつける妹紅も理解した。

その白い頬へと僅かに紅がさした。その直後、涼介の身体が膝から崩れ落ちる。

「ちよ、けほっ……妹紅、手が、早い」

「るっさい、にやにやしたお前が悪い」

鳩尾を抑える涼介と、手を軽く振る妹紅。背後にいた慧音は、涼介が殴られたのだと理解した。

本当に子供の様な二人だなど、また慧音が笑い声をあげた。笑う慧音へと妹紅がキツと鋭い視線を投げかけるも、どこ吹く風と気にした様子は欠片も見られなかった。

楽しげな慧音の様子に妹紅は諦めの吐息を漏らした。そして、いまだ腹を押さえて蹲る涼介へと視線を落した。

「んで。それでお前さんは、彼奴もいなかったのに一人で月見をしていたのかい？」

声を落してくる妹紅へと応えるため、涼介は能力を使つて痛みを和らげる。

数回浅く息をして、呼吸を整える。平静な状態へと戻ると、涼介は応えるために口を開いた。

「それもハズレ」

「ん？ 誰かいたのか」

「いたよ。ウサギさんが一人いた」

涼介はウサギがいたと妹紅へ答えた。

そう、あの日の満月の夜に月下の姫君と涼介が呼ぶ少女、輝夜は姿を現さなかった。

その代わりと言う様に、涼介の前には一匹のウサギが。赤い瞳の迷いウサギが現れた。

毎月の恒例行事と化している、月下の夜会へと涼介は足を向けていた。慧音と妹紅の所へはすでに赴いた後だ。

ここに顔を出すのも久方ぶりだと涼介は感じた。春雪異変の際は、雪の為に来なかった。前回の満月は、萃香に捕まっていた為に来ることが出来なかった。

だからこそ、久方ぶりだと涼介は感じた。前回は待ちぼうけさせてしまったら、謝らないといけないなど。

涼介はそう思い、いつもより多めに荷物を持ってきていた。

黄昏時が近い為、空は良い塩梅にその暗さを増している。今宵も綺麗な満月が見えそうだと気分が上向いていた。

「さて、今日も先に来ているのだろうかね」

ふと思い浮かんだことを口にしながら涼介が進む。いまだに涼介は輝夜より先に着いて待つていたことがない。

いつも先に来たと思つていても、すでに輝夜が死角に居るのだ。少したどり着く行程を変えても、死角から輝夜は姿を見せる。

もはや何らかの能力なのであろうと涼介は気が付いていた。けれど、それはなんであるのかは分からない。

「なんだかんだと彼女も負けず嫌いなのもかもしれないね」

涼介は輝夜について、多くは知らない。否、多くを聞かないのだ。

名前さえ妹紅がふと漏らしたことが有る為に知っているだけだ。現在でも、涼介は輝

夜の事を月下の姫君または、満月の君と呼称していた。

名前さえ聞かないのだ。それ以外の事を深く聞く機会は少ない。けれども、妹紅の愚痴や、彼女が漏らす、妹紅への愚痴である程度は察せられた。

野蠻な知り合いがいると輝夜は漏らしていた。燃え盛る炎のように暑苦しいと言っていたので、それはきつと妹紅の事なのであろう。

慧音も妹紅が不死を理由に、自らの身を顧みない喧嘩をしていて困っていると云っていた。

妹紅と輝夜、良く二人は競い合う仲なのだろうかと、涼介は漠然と考えていた。

「……ああ、良い風だ。涼しい夜になりそうだね」

蟬のうるさい夏真つ盛りにしては珍しく涼しげな夜。へばつているレティにとつてもいい夜かもしれないと。涼介は首飾りの氷の結晶に軽く触れた。

ひんやりとした感触につい頬が緩む。溶けない氷の結晶。幻想の欠片がすぐ近くに。その事がたまらなく愉快なのだ。

しばらく、涼介が目的地の岩を目指して歩いていけば、そこへとたどり着いた。

ほかりと竹が無くなり、空を見上げる事の出来る場所。人工的に整えられたかのような、お月見用にあつらえたかのような空間。

「……あれ？ いないのかな」

涼介から訝しむ声が出た。

いつも通りであれば、涼介がたどり着くと同時に輝夜が岩陰から顔を出すのだ。それがいつまでたっても現れない。

「今日は初めて私の方が早くこられたのかな？」

涼介が続けて言葉を漏らすも、やはり輝夜は現れない。

今の言葉はどちらかといえば輝夜の負けず嫌いを煽るつもりという言葉であった。

けれども、反応は皆無であった。涼介はひとまず岩に近づき、腰掛けた。

岩の上へ乗り、周囲を見渡しても人影一つ見られない。これは本格的に欠席なのかもしれない。涼介はなんとなくそう感じた。

「独り占めするには……いささかもつたいないなあ」

見上げる夜空には星々が煌めいていた。まだ月は昇っている最中であり、ベストの位置とは言いがたい。

けれども、竹で縁取られたキャンパスの中に満月はあった。手を伸ばせば捕まえられそうな満月。竹で作られた虫かごで捉えたかの様な錯覚を覚える視界。

これは一人で見るにはもつたいない。見上げた夜空に涼介はそう思わざるを得なかった。

「仕方ない、か」

小さな声で涼介が呟く。胸に湧いた僅かばかりの寂しさを隠すためだ。

前回すつぽかした返礼だろうかとも一瞬思うが、そんなことをする相手ではないとすぐに浮かんだ想像を否定する。

この少女達はそんな迂遠な方法は取らないだろう。相手の反応が楽しめない様な方法は取らない。

それはきつと長く生きる故なのだろうと涼介は考えていた。折角の暇をつぶせる反応を自らが見えないなどありえないと。

だからこそ、きつと事情があつて彼女は来ないのだろうと涼介には思えた。

背負っていたリユックをおろし、中身を並べた。折角もつてきた飲み物も食べ物も無駄になつてしまったなど。

「帰りに妹紅の所でも寄ろうか……うん、それも良いかもしれないな」

月がキャンバスから消えた時にでも行こうかと、涼介は友人の顔を思い浮かべた。

不機嫌そうな顔をしながらも、酒でも見せれば快く迎えてくれるだろう。幻想郷の長命種……だけではないが、空飛ぶ者はたいいてい酒に目がない。

それは幻想郷の法則と言っても過言ではない。それほどまでに酒好きが多い。

「それまではこの場所を独り占めしてしまおうか」

一人で飲む月見酒も味気ないと、水筒から珈琲を注ぐ。広がる香りが心地いいが、風

情に欠けるか、と少しだけ苦笑いが顔に浮かんでいた。

月を眺めて杯を傾ける。贅沢な時間の使い方だ。涼介は月を眺めながら時を楽しむ。ただただ月を見つめる涼介の耳へ、地面を踏みしめる音が聞こえた。輝夜が来たのだろうか？と視線を向ければそこには知らない少女の姿があった。

「えっと、あの……」

戸惑いがちな言葉が少女より発せられた。綺麗な赤い瞳は地面を向き、長いウサギ耳もその先端が地面を差す様に垂れていた。

外の世界の学生服の様な装いの少女が、そこには立っていた。言いづらい内容なのか、彼女の性格故なのか。言葉を探す彼女の耳がゆらゆらと揺れて不安を分かりやすく表していた。

「君も月を見に来たのかな？」

月にはウサギが住んでいる。昔からよく聞く与太話。だからだろうか、ウサギを示す耳を持つ彼女を見て、涼介はそう口にした。ここで輝夜と月を見ていたのも理由の一端であろう。

けれど、彼女の顔が涼介の言葉を受けて歪んだ。どこかで見たとのことのある顔。かつて冥界で幽々子が消えた時に見せた妖夢の表情が重なる。

過去の自分の行いを悔いている、そんな表情であった。しかし、それだけではなかつ

た。何かに対する恐怖が入り混じっているとも感じられた。

血の気の引いた唇に、動揺で揺れる瞳がそれを感じさせる。

知らないとはいえ、悪い事を聞いてしまったと。自らの言動を涼介は反省する。

意識を変えて、能力の範囲を広げた。ウサギの少女を落ちつけようと自らの能力を涼介は使う。

その効果はすぐに表れた。自身の感情の動きに不思議を感じたのかぱちぱちと何度も瞬きをみせた。

そして、彼女の視線が上がり、

「貴方、ですか？」

少女と涼介の視線がまっすぐと向き合う。宝石の如き、月明かりで煌めく紅い瞳が涼介を捉えて離さない。

「あつ、ごめんなさいッ」

しかし、少女が突然謝罪の声と共に再び顔を俯けてしまった。前髪で隠されてしまった瞳。髪の隙間から僅かに覗く紅が、ちらちらと涼介の様子をうかがっていた。

落ち着かない彼女に、涼介は疑問を覚えた。何故、彼女は謝ったのだろうか。何故、あんなにも焦っているのだろうか。

「えっと……一先ず落ち着いて話でもしませんか？」

「あ、えっと、その……はい……」

頬を指で搔きながら涼介が提案をした。少女も僅かに逡巡するも、他に何も思い浮かばなかったのか涼介の提案を受け入れた。

涼介が場所を空ける為、岩の上で身体を動かす。少女はそれで涼介の意思を察し、警戒を表しながらも岩の上へと腰を下ろした。

空いた距離はどこか涼介に懐かしさを感じさせる距離だ。輝夜に難題候補者認定される前と同じ距離。

それが少しだけ可笑しくて涼介はクスクスと笑い声を上げてしまった。

少女は突然あげられた声にびくりと肩を震わせた。そして、自らが笑われていると思ったのか、自身の顔を触れたり、服を確認していた。

「ははっ、ごめんね、お嬢さん。君を笑っていたわけじゃないんだよ」

「そう、なのですか？」

「実はいつもはもう一人いるのだけれどね。その子と初めてここであった時の距離と君の取った距離が同じくらいで。何となく懐かしくて、つつい笑ってしまったんだ。ごめんね、不安にさせてしまった」

「あ、いえ、全然問題ないです。そのてゐに——じゃなくて、知り合いに悪戯をされたのでてつきり汚れが残っていたのかと」

「大丈夫、どこも汚れていないよ。顔も服もとても綺麗だから、心配はいらないさ」
「あ、ありがとうございます」

自身が笑われているのではないと解り、安心したのか肩の力が抜けていた。

投げかけられた謝罪の言葉に、身振り手振りで応える様が微笑ましく涼介には感じられた。根が真面目な良い子なのだろうと。

流れる様に続けられた涼介の軽口に、その頬を僅かに染めていた。褒められ慣れていないのか、人なれしていないのかどちらなのだろうかと少しだけ疑問が浮かんだ。

けれど、少女が口を開くことで、その考えがまとまる前に意識が逸らされた。

「実は伝言を届けに来たのです」

「伝言?」

伝言という少女の言葉に思い浮かぶ顔が一つ。輝夜だ。

ここで合う人物は彼女だけであるためにすぐに分かった。

さしずめ姫に着き従うウサギの従者、といった所だろうかと涼介の思考が飛躍した。

「はい、伝言です。あの、大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫。少し考え事がね。それで何と?」

「今日は何から帰っていいわよ、だそうです」

「あははっ、何ともお姫様らしい物言いだね」

「あの、本当に申し訳ありません」

「構わないよ。それに前回は私がすっぱかしてしまっているしね。満月の彼女は怒っていないかったかい？」

「いえ、怒ってはいませんでしたよ。ただ、帰って来てから一言だけ」

「なんと言つていったのか聞いても？」

「今度はどんな難題に巻き込まれているのかしら、と。そう漏らしておられました」

「それはまた……何とも的を射た言葉だなあ」

輝夜の慧眼に思わず感嘆させられてしまう。からからと快活な笑いをあげる涼介に少女もホッと吐息をもらした。

どうやらかなり気を使われているみたいだと涼介には察せられた。おぼろげながら輝夜と目の前の少女の関係が見えてきた。

目の前の少女にとって輝夜は上位の存在なのであろう。だからこそ、輝夜の知り合いである涼介へと気を使っているのだろうと。

「伝言、助かったよ。ありがとね、お嬢さん」

「お礼など必要ありません。私はただ自分の任務を全うしただけです」

「それでも助かったのは事実だからね。お礼は言える時に言わないとね。だつてさ」

涼介が少女から視線を空へと上げた。自然と少女が、言葉を区切った涼介の表情を伺

おうと視線をあげた。

少女の視界には消え入りそうな人の顔が映った。儂く弱弱しく見える人間が映り込んだ。

「ヒトなんていつ死んでしまうか分からない。感じたことはちゃんと伝えていかないと。じゃないと次の機会は永遠に訪れないかもしれない」

穏やかな笑顔を浮かべ、涼介が視線を少女へと戻した。再び少女と涼介の視線がぶつかる。

少女が僅かな逡巡をみせ、口を開く。

「貴方は、貴方は死ぬのが怖くないのですか？ 人間としての短い生は怖くないのですか？」

少女の口から疑問が漏れ出た。強い思いが込められていると解る声。少女にとっては大事な質問だと容易に伝わった。

少しだけ涼介は考え、自らの答えを返す。

「死ぬ事は怖くない、と言ってしまふのは嘘だね。死ぬのは怖いよ」

「でもそんな風には感じられない……そんな波長は……」

「死後の世界、という物を知れたのが大きいかもね」

「死後の、世界」

思い浮かべる場所は霊たちの住まう土地、白玉楼。死は終わりではなく次への変化。来世があると分かったことが、恐怖を大きく薄れさせるのかもしれない。

「でも死ぬのは怖いよ」

「貴方は死の何が怖いのか？」

「君は死の何が怖いのか？」

「えっ？」

唐突に質問を返され少女が驚きの声をあげた。質問が返ってくるとは思ってもみなかったのだろう。

けれど、真面目な性分なのか、少しだけためらった後に言葉を返す。

「だって、死は穢れだから……穢れは忌避されるべきものだから……そうみんな言っていたし、それが常識で……それに、死んだら、死んだら何も無くなっちゃうから……だから私は死ぬのが怖い」

ぼつりぼつりと少女が言葉を紡いだ。涼介はそれを静かに聞いていた。少女は応え終えると、涼介の答えを急かす様に、強い視線を向けた。

「私は死ぬことで身近な誰かが失われるのが何よりも恐ろしいんだよ」

「身近な誰かが失われる？」

「そう。例えば血の繋がった親類。例えば友人。身近な誰かが自分の周りから失われる

ことが何よりも怖いんだ。私はそれが何よりも苦痛に感じられたんだ」

「それは……ちよつと私には分からない感覚かもしれない……」

「そうなんだ。君の周りの人は皆、長生きなのかもしれないね」

「いえ、それは……はい、そうですね。私より皆長生きで長く生きると思います」

「そつか。それは良い事だね」

「私も、そう思います」

「ならちよつとわかりにくい話かもしれないね。その人の事が大切であればあるほど、思い出が沢山あればあるほど、失われた時が辛いんだ。それはまさに身を割かれるほどだ。君の身近の誰かが永遠に失われてしまうとしたら君はどう思う？」

「……それは……怖いです」

「だから私は死ぬのが怖いよ。そんな思いを誰かにさせてしまうのが怖いんだ。私はその痛みを知っているから。私は一度その痛みを与えてしまったことが有るから」

涼介はいつもと何一つ変わらない声色でそう言いきった。冥界より戻つてからずっと考えていたこと。

自らの死で、自分が受けたような痛みを誰かに味わわせることが怖い。涼介はその事に対して怖さを覚えていた。

だから涼介は少女の答えにこう答える。

「だから私は死が怖い」

「貴方の考え方は、少し変わっていますね」

「そうだね。ちよつとずれているかも知れないね」

「ちよつとなんでしょうか？」

「さあ、統計を取って比べてみたことは無いから正確なことは言えないさ」

「ふふ、それはそうかもしれないですね」

少女が小さく笑った。最初の緊張した様子は見られない。涼介の能力の効果が色濃く出ていたのだろう。

ふと見上げれば、月もキャンパスから逃げようとしていた。まだまだ夜は明けないがあまり長居して、少女を引きとめるのもまずいだろうと涼介は腰を上げた。

リュックから持ってきた酒を一本取りだす。不純物を落した酒だ。それを少女へと差し出す。

「あの、これは？」

差し出された酒に対し、少女が首をかしげた。

「話し相手をしてもらったお礼だよ」

「これは与えられた任務ですので、そこまでしてただかなくて大丈夫ですよ」

「それはそつちの話。これは私の気持ち。だから、はい。結構おいしいよ」

「えっと、ですネ……」

意外と瞳が酒に囚われている所から、嫌いではないのだろうと涼介には察せられた。もう一押し位すればと。だから、涼介は酒瓶を岩の上に置いた。

「じゃあここに置いて私は帰るよ。君が持ち帰らなければ、見つけた他の誰かが飲むのではないかな？」

「……意外に性格が悪いですね」

「幻想郷に染まっているだけだよ」

「恐ろしいですね」

「楽しいよ」

恨めしげに睨んでくる少女の視線に笑みを返して、涼介はリュックを背負った。

少女もため息を一つ吐き、酒瓶を抱えた。

「ありがたくいただきますね」

「それは良かった」

「仕方がないので美味しく飲んであげます」

「そのお酒も本望だろうね。それじゃあ私がここに居ては君も帰りにくいだろうからね。もう行くよ」

「最後まで気を使っていたいてすみません」

「一人で寂しく杯を乾かす事にならなくて助かったくらいさ」

「姫様の言う通りですね」

「彼女は何と言っていたのかな？」

「内緒です」

「それは怖い」

涼介と少女が向き合って、笑い声を漏らした。笑いが収まると、両者が別れの挨拶を交わして、涼介は竹林へと消えて行つた。

消えていく涼介の後姿を少女が見送る。

そしてふと、疑問が口から漏れた。

「あの人……私の瞳を見ていたのに、波長が乱れていなかった」

涼介の答えが気になって、表情を見た時から視線が合っていた。

知りたい気持ちが先行していて、すっかり視線を外すことを忘れていたなど、少女は自覚した。

けれど、平気そうにしていた相手の態度もその事を失念させていた原因の一端ではあるのだろう。

「名前、聞いておけば良かったなあ。姫様、知らないかしら」

ぽつりと小さなつぶやきが漏れた。満月が消え、星々が彩るキャンパスの下でウサギ

の少女は消えた背中を闇に捜した。

話をする友人程度にはなれたかもしれない。惜しい事をしたなど。そして少女もまた、その場を後にして闇の中に姿を消した。

軽い運動に供する四三杯目

客足が遠のくお昼過ぎ。幻想郷の外であればおやつ時とでも呼べる時間。客が捌け、閑散とした店内で涼介は洗い物をしていた。

ハルも差し込む日差しが気持ち良いのか、くわあと小さくあくびをした後に寝入ってしまった。

そろそろ夏も終わり、秋が近づいて来ていた。移ろいゆく四季はそれだけで楽しい。幻想郷は外とは違い、妖精の恩恵で季節の特徴がしっかりとしている。

春も秋も風情を感じられる。情緒ある世界。今年は紅葉狩りにでも行こうかなと考えながら涼介は先の予定に思いを馳せた。

のんびりと思考に埋没しながら、片づけを進めている涼介の耳に鈴の音が届いた。来客を告げる音色に誘われ、視線が扉へと向く。

「やあ、いらつしやい幽香」

まだまだ秋にはなるまいと粘る夏の日差しを、日傘で遮る幽香がいた。

日傘を閉じた幽香は店内へと入り、涼介の目の前の席に腰を落ち着けた。

落ち着いた、いつも通りの視線を涼介へと幽香は向ける。注文もせず、お品書きも見ない幽香に涼介が苦笑した。

「もう大丈夫だよ、幽香」

「あら、約束はたがえてはだめよ」

涼介が言葉を口にするも、幽香がすぐに切つて捨てる。楽しげな口調でも視線は平静そのものだ。

見透かす瞳の幽香に涼介がため息を吐く。

「幽香、特に君に出すのならもつとちゃんとした——」

「ちゃんとしているわよ」

「……君も相変わらず頑なだね」

「貴方ほどではないとは思うわ」

ああいえばこういうという言葉の如く、言葉が返ってくる。これはまた駄目そうだと涼介は感じた。

幽香も肩を落とした涼介から、内心を読み取ったのか口の端が小さく上がる。嗜虐的な口がそれを形にする。

「それで、店主さん。あと何杯程残っているのかしら？」

「ちようど二杯分。君と私、一杯ずつで終わりだね」

「そう。なら淹れてもらおうかしらね」

「はあ……分かったよ、仕方ない」

ため息交じりの涼介の返答に、幽香は愉快気な笑い声をあげた。鈴を転がすような笑い声。

涼介は幽香の笑い声を聞きながら豆を挽く。風味の落ちてしまった豆を。

「君には美味しい一杯を淹れたいのだけれどね」

「なら現状で出来る最高の一杯を淹れなさい」

「君らしい意見だなあ……」

豆が挽き終る。フィルターを通し、二杯分の珈琲が用意された。

涼介は一杯を幽香の前へ、もう一杯を自分の前へと。

「不満だよ、全く」

「敗けたあなたが悪いのよ」

すまし顔で告げる幽香に涼介から苦笑いが漏れた。

敗けた。そう、弱いからいけないのだ。幻想郷で意見を貫き通すには、涼介はまだまだ弱かった。今回の一杯はただそれだけの話。

これはいつもより苦い一杯になりそうだと涼介は目の前の黒い液体を眺めた。

思い出されるのは花畑での一件。鮮烈で、必然で、高揚した幽香との戯れ。

「精進なさい」

短く告げられた言葉。その言葉が嬉しくて笑ってしまう。

それだけなのに苦味が薄れそうだと、単純な自分に涼介は可笑しさを感じてさらに笑ってしまう。

次はもつと頑張ろうと、カップへと手を伸ばす。

「次はもう少し頑張るよ」

「いつでも遊んであげる」

強者の余裕。絶対の自信。そして少しだけ垣間見えた、楽しげな笑み。

二人が軽くカップを掲げ、乾杯をした。

萃香と文に手伝って貰ったおかげで、店の修理は予定していたよりもずっと早く終わった。

その時の文の様子に少しでも悪い事をした気がするも、早期の復旧の為に犠牲も致し方ないと涼介は助けの手は出さなかった。

決して常日頃の新聞に対する意趣返しなどありはしない。その時の涼介は楽しげに笑っていたと文は言うが、きっとそれは二人との作業が楽しかったのであろう。

そんな涼介は現在、太陽の畑へと向かつていた。店は直った。身体も治った。ならば次はと、目標になるものは商品だ。

店で暴れたために瓶は割れ、豆が散ってしまった。焙煎前の豆であれば問題ない。しかし、煎ってしまった豆はそうはいかない。

汚れを取るために洗えば、折角の豆が湿気てしまう。かといって全て廃棄してしまうのは涼介には憚られた。

だからこそ、洗い煎り直した豆は自分用として、商売用の豆を仕入れに来たのだ。

「さてと。夏場は見つけやすくして楽ちんだね」

目的の人物。商品の仕入れ先の幽香は、季節と共に花を探して幻想郷中をふらふらとしてしまう。

飛べない涼介にとっては、見つけ出すだけで一苦労だ。夏場以外は霧雨魔法店へと依頼することもままあることだ。

けれども夏場は、幽香自身の家もある太陽の畑にたいはいは居た。

夏の初めであつた事は不幸中の幸いだなど涼介は考えながら先へと進む。

しばらく歩けば、向日葵のカーテンの向こう側に赤いひらひらとしたものが現れた。赤に惹かれる様にそちらへ進めば、日傘を差している幽香がいた。

「やあ、幽香。こんにはは」

「いらつしやい、涼介」

くるくると日傘を回し、手遊びをする幽香が、振り向き笑みを浮かべた。

汗一つかかない涼しげな様子に、相変わらず現実離れしていると思わされる。

「それで今日はどうしたの、店主さんは？　鬼との喧嘩はもういいのかしら」

「えっと、幽香？」

どうしてだろうかと涼介は困惑した。幽香の声色が攻めているように聞こえたのだ。

それに何故、鬼と喧嘩をしたことを知られているのだろうか。境内の裏手には誰もいなかったはずだと思いがめぐった。

驚きを浮かべる涼介へと幽香がまた口を開いた。

「自然が多いわよね、幻想郷は」

「ああ……なるほど。怖いね」

涼介が名も知らぬ草を撫でながら幽香は告げた。そしてそれは答えであった。

自然がどこにでもある幻想郷では、幽香は多くの事を知れるのだろう。

それこそ、紅魔の魔女の住処や、フランドールの部屋の様な一切の植物の無い場所でない限り。幽香にとってはどこにでも目撃者は居るのだ。

だが、喧嘩を視られたのは分かった。だけれども何故責められる声色なのかはいまだに謎のままだ。

「で、用事は何かしら?」

草を撫でるためにしゃがんだ姿勢のまま、幽香がまた問い掛けた。

上目気味なのに威圧的に感じるのは幽香の持つ雰囲気か、声色に込められた非難の所為なのか。涼介には判断しかねたが、先に要件を済ませようと言葉を返す。

「豆の仕入れをお願いしたくてね」

「今回は随分と早いよね」

「意地悪を言わないでくれよ。その様子なら理由は察しているだろうに」

幽香の返答に肩を竦めて応対する。幽香はそれに構わずに、髪をくるくると弄ぶ。

何かを考えているのだろうか、視線が涼介を見つめる。僅かに細められた幽香の視線に、そこはかとない嫌な予感を涼介は覚えた。

幽香が口元を歪めた。強く見覚えのある表情。手伝う際、幽香がからかう時に見せる嗜虐的な表情。

「幽香?」

「そうねえ……」

視線が動く。涼介の顔から腰元へと視線が下がった。僅かに高揚したのか、幽香の妖力が蠢くのが解った。

漏れ出た妖力に僅かばかり気圧され、涼介は無意識に半歩後退さった。

幽香が笑みを深める。

「ダメにしてしまった豆はどうしたのかしら？」

辺りを包む雰囲気とはまるでそぐわない質問。不気味さを少しだけ覚えるが、涼介は律儀に返答した。

「自分用にしたよ。商品にするのは憚られるけれど、自分で飲む分ならね」

「そう、大事にしてくれているのね」

「せっかく幽香が大事に育ててくれた物だからね」

「貴方らしい物言いね」

「そうかい？」

「そうよ」

「そっか」

二人の間で交わされる言葉はまるでいつもと変わらない。違うのは幽香の醸す雰囲気だけだ。

「まだたくさんあるのかしら？」

「そうだね。しばらくは困らないかな」

「なら、それを私にも出さない」

「それは、断るよ。私にも譲れないことだね」

「ふうん」

幽香がつまらなそうにつぶやき立ち上がる。けれど、言葉とは裏腹に浮かぶ表情は満面の笑顔だ。

押さえつけられているが、感情が高揚している事が分かった。それがどんな感情であるかまでは涼介には正確には把握できないが、たぶん闘争心。それに近い感情なのだとは分かった。

「意見が分かれたわね」

「……弾幕ごっこは出来ないよ?」

無駄だろうなと分かっているが、涼介は言わずにはいられなかった。

幽香もそれは見越していたのだろう、まるで変化は見られない。

「飛べない貴方にそんなこと頼まないわよ」

「じゃあ何を頼むというのかな? いつものお手伝いでは——」

「ダメ、ダメよ。だって……」

「だって、なんだい幽香?」

「それより面白そうなことが有るのに——我慢なんてできないわ」

涼介が身構えるより早く、幽香が踏み込んだ。空気を押しのける轟音と共に、日傘が振り抜かれた。

腹部に直撃を受けて、涼介は水切りされる小石の様に、地面を跳ね転がった。

打ち抜くというより、押し出す、といった側面の強かった一撃。それと反射の域になるまで藍や萃香に叩き込まれた、能力による防御で涼介は見た目の派手さとは裏腹に傷は無い。

吹き飛ばされた事で向日葵畑から何も無い草原まで飛ばされた。幽香が操作したのか、向日葵が飛ばされた涼介を避ける様に茎のアーチを作っていた。

茎で出来た向日葵のアーチの先から幽香も姿を現した。

「立ちなさい、涼介。少し見てあげる」

「ああ、なるほど……遠慮は、できないみたいだね」

「ええ、許さないわ。しても良いけど——知らないわよう。」

「怖いなあ……」

立ち上がり、幽香へと視線を戻す涼介が服についた土を払う。

強者の余裕か、ただ楽しむために準備が整うのを待っているのか、幽香は傘を片手に動かない。

どうしたものかと涼介は思うも、すぐに考えることをやめた。気まぐれに理由などない。

永きを生きるからこそ、そこに刺激があるのなら試さずにはられないのだろう。

「飲みなさい」

有無を言わせない意思の籠った強い声。

「何を知っていてももう驚けないな」

この分なら他の人外たちも、何かしらの手段で知っていそうだと涼介は感じた。

確かに見逃すのには少々異色の対戦だったのかもしれない。少なくとも暇をつぶす程度の価値はあつたのだろう。

腰の後ろについたポーチへと手を伸ばす。中にはスキットルが一本。

鬼の薬酒を湛える容器の栓が開けられた。幽香の笑みがまた少しだけ深まる。

全く、娯楽に飢えた妖怪はと、小さく涼介が言葉を漏らした。僅かだけ弾んだ声色が彼の心情を表している。

「加減はしておくれよ」

「加減は上手な方よ」

「それは安心」

それを最後に涼介は酒を煽った。一口、二口。僅かな量の服用。

幽香にとっては遊び程度の闘気につられて、憑いた鬼が高揚するのが涼介には分かった。

妖力が身体に満ちる。陶醉感と全能感。それらが身体を駆け巡る。

暴れ出そうとする鬼を能力で抑え、身体の支配権を握る。

全能感を消す。結局それは力無いものが妖力を得て感じる勘違いだからだ。

鬼を憑けようと弱い者は弱い。それは変わらぬ事実だ。

十全の鬼となればまた話は違うのだろうか二割程度ではたかが知れている。

だからこそ慢心を消すのだ。いつだって自分は挑む立場だと涼介は自覚していた。

「いくよ、幽香」

「いつでも」

けれど、闘う事への高揚は消しきれない。いくら落せどとめどなく高ぶってゆく鬼の性。

弾んだ声の涼介へ、幽香がいつも通り落ち着いた声で応える。

涼介が地を駆け、幽香へと近づく。鬼の膂力と妖力に任せた原始的な突進。

地面の抉れが、踏み込まれた時の力強さを物語る。幽香から見てもそれは中々の具合であった。

半妖以下の割合とはいえ、鬼の力だ。有象無象と比べる事さえおこがましい。

「でも——まだまだね」

振りかぶられた涼介の拳に、幽香が傘を重ねた。僅かな拮抗の後、涼介が押し負ける。身体がのけ反り、無防備な涼介に幽香が掌を向けた。けれど、そこから何も起こらな

い。

妖力が上手く集まらない。集まっても散っていつてしまう。さらに、妖力自体の多寡が落ちていた。

幽香はそれにすぐ気が付くと、掌を下ろすと同時に足を上げた。振られた足が涼介の足を払い、さらに隙を作り出す。

更に生まれた隙を利用し、振った日傘を振り戻して再び涼介を弾き飛ばした。

「うん、そうね。守りに関してはかなりよさそうね。でも攻め手が素直すぎるわ。力勝負だと厳しいわよ?」

「冷静に評価されてもね……美鈴さんや妖夢には稽古の相手を時々して貰っているだけだから」

「そうね、自衛として見れば最低限は出来ているわ。でも、それでいいの?」

「それはどういう意味かな?」

「さあ、そういう意味かしらね?」

再び最初の位置と同じ場所まで飛ばされた涼介が、幽香に聞くもはぐらかされた。

自らの中に何を視たのか気になるが、まだまだやる気を見せる幽香を前に、悠長な会話は難しいかなと口を閉ざす。

腕に巻いている鎖を解く。金属が擦れる音と共に、だらりと鎖が垂れた。

腕を振り上げ、地面へと叩き付けた。鎖の先端が地面へと刺さり、伸びてゆく。鎖をさらに伸ばし、自分もその場を離れ、再び駆ける。走り出す涼介の背を追う様に人魂も後をついてゆく。

「自信の程は？」

「あん、まりッー！」

幽香に近づき、涼介が手に持つ小さな道具を地面へと叩き付けた。

叩き付けられると同時に白煙が立ち上る。霖之助謹製の煙玉だ。萃香との一戦以来自衛手段を涼介は少しでも増やしていた。

二人の姿が煙で隠れる。妖気を含む煙が互いの感覚を惑わす。

幽香は涼介を見失う。けれど、涼介は幽香のいる場所を知っている。

幽香は動かない。それは強者の余裕であり、この程度で揺らぐ自信では大妖怪などには到底成れないからだ。

「ふふ」

さらに自らの存在を主張するように幽香は笑う。

涼介が鎖を操る。直後、幽香の立っていた地面から鎖が飛び出す。

日傘の振られる音と共に金属が砕け散る音。傘を振った体勢の幽香へと、涼介が肉薄する。

涼介が拳を振った。幽香は笑い、それを片手で軽くいなす。先ほどの焼回しの如く、返ってきた日傘が涼介の腹部を打ち付けた。

「ぐっ」

呻き声が僅かに上がる。しかし、今度は飛ばされない。日傘を掴み、その場に踏み止まる。

僅かな進歩に幽香が口角をあげた。そして、

「一撃くらいは——」

「入ると良い——」

言葉を重ねる二人以外に、人影が増えた。煙の先から半透明の人型が現れる。

妖力を込められた人魂だ。妖夢の作り出す半身の様に、しっかりと存在感を持つそれが、幽香の背後から蹴りを放つ。

幽香の顔に僅かな驚きと、関心が生まれた。日傘を振って腕の上がついている横腹めがけた蹴りが迫る。

幽香は咄嗟に日傘を手放し、折り曲げた腕で身を守った。

「——！ あはっ」

蹴りを受けた直後、僅かに瞳を見開き、小さくも確かな驚愕をみせた。

けれど、それも一瞬の事で身を守る腕とは反対の、空いている腕で傘の柄を掴む。

そのまま涼介ごと傘を振り切り、背後にいる霊体をも巻き込んで殴り飛ばした。

「中々どうして面白いわね、涼介。褒めてあげる」

先ほどの一撃がそうとうお気に召したのか幽香が弾んだ声で涼介へと告げた。

煙も風と、幽香の振り切った風圧で散ってしまった。さて、どうしたものかと涼介は次の一手を模索した。

蹴られた腕を興味深げに幽香は眺め、手を握ったり開いたりとしきりに動きを確認していた。

まだまだ研鑽が足りないかと涼介は目の前の光景にため息をついた。

「さて、じゃあ終わらせましょうか」

初めて幽香が足を踏み出した。初めて一步を踏み出す幽香に涼介は警戒を示す。

「まだまだね。注意力が散漫よ」

出来の悪い生徒をわかりつける様な声色で幽香が告げる。

ちくりと涼介は足に刺す痛みを覚えた。視線が反射的に下がり、見た物は蠢く植物。

「まず——」

その場を離れようとするも、膝から力が抜け落ち、崩れ落ちた。

植物が身体を拘束する様にその蔓を伸ばす。倦怠感を感じる身体は意思に反して動

かない。

そして自らの中から鬼が消えてゆく事が分かった。それは追加で肌に刺さって何かを流す植物か、はたまた嗅覚を擽る香りを匂わせる花の花粉か。

鬼が消え、能力が上手く使えない。思考がまとまらずただぼんやりと近づくと幽香を眺めた。

「そうね、及第点……には届かないわね。精進してもっと楽しませなさい、良いわね？」
跪く涼介の目の前に幽香が立つ。傘の先端を向けていた。

涼介の能力の影響がなくなり、妖力が戻った幽香がその先端に妖力を溜めた。

その切先を向けられ、命の危機を感じるも涼介は指一本動かさない。

「じゃないと——怖いわよ？」

幽香が込められた妖力を解き放った。力の奔流が行く手を阻むもの全てを押し流さんと、すさまじい勢いで伸びてゆく。

発射口を僅かにずらされ、頭の横を過ぎ去ってゆく妖力の奔流。それを最後に涼介は意識を落した。

涼介が目を覚ましたのは次の日。
すでに商品たる豆は用意してあった。
そして起きた涼介に幽香は告げた。

——敗者は勝者の言う事に服従なさい

短くそして何よりも明瞭な内容。

そのまま店まで連行され、一杯目の提供と豆の量まで把握されたのだ。

そして、今回淹れたこの二杯が最後であった。植物に聞いたのか、その把握力には相変わらず脱帽してしまう。

結局、今回の一連の出来事は全て幽香の思い通りであった。

けれど、それも悪い事ばかりではないと涼介は思う事にした。

確かに不備のあると分かっている物を出すのは忸怩たる思いではあるが、幽香が店に来る習慣がついたと思えばきつとプラスだろうと。

この一杯が終わってもまた店に足を運んでくれると嬉しいなど、そう思いながら涼介は杯を傾けた。

「うん、こっちは及第点ね」

「それは良かった」

二人が向き合い笑みを浮かべた。

月下に輝く永夜世界

それぞれの友人に供する四四杯目

いつもの様に張り紙一つ

『満月の為、休業』

前回のウサギの少女と邂逅した満月から、月齢が一巡り。

季節はもうすっかりと夏を終え、秋となっていた。

蝉の声が無くなり、秋の虫たちの鳴き声が耳に着き始めた。

今日の月見はいつにも増して風情がありそうだと、涼介は一人先の出来事に思いを馳せる。

けれど、まずはその前にと。月一の恒例となっている慧音と妹紅宅への訪問の為その足を進める。

里に入り、すれ違う人々と軽い世間話をしながら寺子屋を目指してゆく。

少しすれば目的地が見えてくる。

「上白沢先生、お届け物ですよ」

寺子屋にくつつくように併設されている、慧音の自宅の戸を叩いて声をかける。

涼介の呼びかけの声に反応したのか、中から物音が聞こえてきた。

廊下を速足で歩く足音が近づいて来る。

「やあ、涼介。いつもすまないね」

「いえいえ。これも商売ですから」

戸を開けて慧音の姿を見せた。授業の無い日であるのに、きつちりとしたいつも通りの服装。

その姿に、やはり真面目な人だと改めて涼介は感じた。

「商売つきのなさそうな君が、その言葉を口にするると少しだけ可笑しいな」

「ひどいですね、先生。私は霖之助と違ってまっとうな商人ですよ」

「香霖堂の店主と比べている時点で底が知れそうな話だとは思わないかい？」

慧音がクスリと笑いそう言えば、涼介は返す言葉に詰まってしまう。

「籠りがちで売る気の乏しい店主と、気まぐれに店を開ける君。似たもの同士なのだろうね」

「ここが誘惑が多すぎるのですよ」

「君がふらふらと惹かれ過ぎなのかもしれないね」

「それは否定はしませんね」

「素直なことで結構」

旗色が悪いと涼介は判断をして、本題へと入る。僅かな仕返し of 気持ちを込めて、手に持つ水筒を慧音へと涼介は差し出す。

「それでは、先生。いつもの物です」

「ん、確かに。今日はいつもみたいになんかは上がっていかないのかい」

慧音は玄関先で水筒を手渡してきた涼介にそう問いかけた。

いつもは慧音が中へと招き、多少の世間話の後に渡されているのが通例であった。けれど、ここで渡すという事は次——妹紅の所——へとすぐに行くのだろうか。

「ええ、さすがに散らかっている部屋に上がるのは忍びないので」

「はあ、なるほど。そう言う意趣返しはあまり感心しないな」

「以前妹紅に不利な話題で闘うから劣勢になるんだよと薫陶を賜っているので」

涼介が悪びれた様子をみせずに肩を竦めると慧音は苦笑を一つ。

いい意味でも悪い意味でも、幻想郷に染まってきていると目の前の友人の姿から理解した。

それが嬉しくもあり、少しだけ心配でもあった。

「まったく妹紅も厄介な者に厄介な忠告をしてくれるものだ」

「年長者の忠告は貴重ですから」

「君の周りの大半は年長者だから聞き放題だろうに」

「先生は私の周りにいる友人たちが素直に忠告をくれると思いますか？」

「……前言を訂正しよう。確かに身になる忠告は貴重だな」

涼介が友人と呼ぶ者達を思い浮かべ、慧音は苦虫をかみつぶしたような顔をする。

その反応に予想通りだと今度は涼介がクスリと声を漏らした。

「さて、一本取った所で退散しましょうか」

「やれやれ、君はその取り方で満足なのかい？」

「一本は一本ですから。まあ、その一本すらいまだ取れない相手が小なり大なり存在しませんがね」

涼介はそう言って、いまだ勝ちえない相手の筆頭である門番の顔を思い浮かべた。

いまだに彼女の前では良い玩具にされてしまう。

苦々しい物が顔に出ていたのか、慧音が慈愛に満ちた視線を自らに送っている事に気が付いた。

「君も色々と楽しんでくろうしているな」

「それはもう」

「ふふ、困った子だ」

目元の笑った呆れ顔で慧音がそう零した。

孫を見る祖母のような優しい瞳に、涼介は少しだけくすぐったさを覚えた。

「先生、それではまた」

「ああ、またな涼介」

こそばゆさを隠そうと、涼介は足早に慧音の前を後にした。

しかし、きつと目ざとい慧音の事だから気が付いているのだろうと涼介も分かっていた。

前回、自分の変化に気が付いた慧音は自分の機微を見透かしていると。

恥ずかしさと、見守ってくれる存在が居る事の嬉しさを胸に涼介は妹紅の家へと足を向けた。

「妹紅、起きてるかい？」

慧音の家の戸を叩くときより、幾分か強い音が鳴る。

叩かれる衝撃に、戸が軋む音をあげる。

「起きてるよ、だからガンガン叩かないでくれ」

「今日は起きていたね、妹紅」

「その言い方だと私が寝坊助みたいに聞こえるじゃないか、涼介」

「起きているか寝ているか、半々なら立派な寝坊助だと私は思うよ」

「全く、小姑みたいなやつだね、お前さんは」

「小姑一人は鬼千匹に向かうつてところかな」

「鬼の弟分を名乗るだけはあるつて事かね、やれやれ」

建て付けの悪い戸を開けながら、妹紅が顔を出す。

僅かに眠そうな表情から、起きていたと言うが寝起きに近いのかもしれないと涼介は感じた。

今日も今日とて気安い言葉の応酬の後、妹紅に招かれ家へと上げてもらう。

「ふわあ……」

「大きなあくびだね。相変わらず不摂生な生活をしていそうだ」

「何を言うんだ、涼介。私程の健康マニアはそうはいないよ」

「あー、うん確かにそうだね」

妹紅が不満そうに言葉を返す。けれども、涼介は妹紅の返事にそつぽを向いて頬を掻く。

確かに妹紅レベルの健康マニアはいないだろう。低い水準という意味合いにおいて。

妹紅も涼介の態度にそれを感じ取る。

「おい、その反応はあまりにもアレだろう」

「いや、だってさ、妹紅。毒草とか気にせず食べる人を健康マニアって……ねえ？」

「それは……慧音が野菜とかもちやんと食べるというから……」

「確認とかしなよ」

「どうせ食べても死なないし。そ、それに有毒の方がおいしい事もあるんだぞっ」

どうだと言わんばかりに胸を張った妹紅が言えば、涼介の瞳が遠くを見つめる。

「おい、その目をやめろ。何故か物悲しくなる。というかなんだその目は」

「前まで上白沢さんに、妹紅と同列に見られていたと思うと、私はどれだけちやんと生きていかなかったのかと……そう考えたら何だか悲しくなつて」

「お前、めちやくちや失礼だぞ」

「ははっ、半分冗談だよ」

「半分本気じゃないか」

「さて、妹紅の分の水筒はっつと」

「もつとまじめに誤魔化せ。誤魔化すなら」

いそいそとリュックをあさる涼介の姿に、妹紅はふてくされて頬を僅かに膨らませた。

けれど、口の端が僅かに上がっている事から、涼介とのやり取りは楽しい物であると察せられる。

何だかんだと一切の気負いなく話をしてくる涼介の事を妹紅は嫌いではなかった。

慧音とはまた違う気安さが少しだけ心地よかったのだ。

「なんだい、妹紅こそ」

「何がだ、涼介？」

「何がって……人を見てクスクスと笑っておいでそれは無いだろうに」

涼介の不満そうな言葉を聞いて妹紅はぱちくりと目を瞬かせた。

そして、無意識に自分が笑っていたことに気が付いたのだ。

それが意外であり、しかし同時に当然の様に感じた。

「お前さんみたいな飽きない友人を持つと楽しくなるのさ」

「それは……褒められているのかな」

「褒めてるさ。慧音は次は何をするか気が気じゃないって言うけれど、私は楽しみに見てるよ。良い酒の肴さ」

「まあ、精々楽しんでもらえるように精一杯生きろよ」

「それが良い。短い時間なのだから大事に生きな」

何でもない風に妹紅が言う。けれどその言葉には不思議な重さが感じられた。

「そうだね。まあ、短いかはこれから次第かな」

「ん？ それはどういう——」

「ほい、妹紅」

「わ、っと」

涼介の漏らした言葉に、妹紅が聞き返す。けれど、遮るように涼介が水筒を放った。

妹紅が放られたソレを器用にキャッチする。その際、非難交じりの声色が漏れた。

「どういう意味、それは私にも分からないよ」

落さぬように受け取った水筒を、手元に置いて涼介へと視線を戻す。

そこにはリュックを背負い、家を出ていく準備のできている涼介の姿があった。

「何だか妖怪じみてきてるね、お前さん」

「幻想郷らしいでしょ？」

「それで、さっきの言葉の真意は？」

「さて、どうだろうね」

涼介はクスリと笑い、応えない。ただ、腰の裏のポーチを一度叩いた。

その反応に妹紅はため息を一つ漏らした。妹紅は酒の事を知らない。しかし、何となくの予想は着いた。

「お前さんね……」

「もしその時はきつと良く考えた結果さ」

「そうかい。もしそうなら……私はそう願うよ」

「ありがとう、妹紅」

「全くもって厄介な友人を持つてしまったね」

「やれやれと頭を妹紅がふつて見せる。」

「涼介はそれに笑い声で応えた。」

「そしてまた、妹紅が大きなため息を一つ増やした。」

「さて、それじゃあ本当にお暇しようかな」

「涼介が戸に近づいて振り返る。」

「あいよ……ああ、そうだ。気をつけなよ」

「戸を開けた涼介の背に妹紅が言葉を投げかけた。」

「踏み出そうとした涼介の足が止まる。顔だけを妹紅へと振り向ける。」

「妹紅？」

「最近アイツらの様子が変なんだ」

「変って？」

「なんか竹林内でこそそこそしているんだよ。それにかぐ、じゃなくてアイツも普段より姿を見せないんだ」

「へえ、そうなんだ」

普段とまるで変わらない涼介の返答。

また妹紅がため息を増やす。

「危機感がないねえ。進歩してるんだかしてないんだか」

「してるさ……まあただ方向性がアレな事は否定しないけどね」

「それを自覚しているだけ良しとするか？ いや、自覚しているからこそ性質が悪いのかね」

妹紅の呆れ声に涼介が苦笑を漏らす。

今度こそ涼介が玄関を一步跨ぐ。

「何か起きるなら精一杯それを楽しむよ」

「長生きしそうにないね、お前さん」

「さて、それは結果を見てからのお楽しみに」

「ま、墓に酒位はお供えしてやるさ」

「その時は冥界から飲みにくるよ」

「全く、死神が門前払いしそうな問題児だね」

妹紅の言葉を背に受け、涼介は竹林へと歩を進める。

開いた戸の場所まで来た妹紅がその背を見送った。

その瞳には呆れの色が湛えられていた。

妹紅と別れた涼介は竹林を進む。いつもと違い物音の少ない竹林。

様子がおかしいと妹紅に言われたから、そう感じているのか。

それとも実際にそうなのか、少しだけ判断に迷う。

大人しく感じる竹林を涼介は進む。

「ん……やあ、久しぶり」

「ううん？ ああ、涼介か。久しいね」

涼介の視界の先に少女が現れた。燕尾状のマントに白のシャツとキュロットパンツ。

それらを身にまとう少女が、竹林内をふわふわと飛んでいた。

涼介に言葉をかけられ、少女もその存在に気が付き、涼介の目の前まで降りてきた。

「涼介が竹林をうろうろしているって事は今日、満月だったか」

「風情がないね、リグルは」

「風情って……まあ、そうだねえ。確かに無いかもだけれど、私は満月の影響を受ける妖

怪ではないし、いちいち気にするほどではないね」

涼介にリグルと呼ばれた触覚を着けた緑髪少女が、気のない声で返答をする。

蜚の妖怪らしく日中は元気が出ないのだろうか、ふと涼介はそんな事を考えた。どこことなくアンニュイさを漂わせたまま、再び口を開く。

「涼介はいつも通りお月見かい？」

「そうだね、私はそのつもりだよ」

「ふうん」

含みを感じさせる相槌。

「何かあるのかな、リグル？」

ひよこひよここと小刻みな動きを見せる、自らの触覚をつまみながらリグルが小さく口元を歪めた。

「別に、何かある訳じゃないよ」

前髪で少しだけ隠れた深緑の瞳が、涼介を静かに見つめる。

酷く落ち着いた様子のリグルであるのに、その瞳は愉快気な光を宿していた。

「でも、騒がしくなりそうな気がするね」

気だるげでありながら、どこか弾んだ様な気がする声。

僅かに上がった口角が、気の所為ではなく、リグルが楽しそうであることを涼介に伝えた。

「それは、忠告かな？」

「どうだろうね？ ふふつ、私風に言うのであれば虫の知らせ、とても言うべきかな」

口元に手をあて、リグルが肩を震わせ愉快さを隠す事無く笑う。

深緑の瞳が弧を描き、涼介を捉えて離さない。

自身は力の弱い妖怪でありながら、その弱さをまるで感じさせない独特の雰囲気
をリグルは纏う。

能力ゆえに妖蟲の女王として君臨する為、培われた物であろうリグルの纏う空気は、
涼介の友人たちと比べても特徴的であった。

圧倒される様な強さや自負は微塵も感じ取れない。しかし、一筋縄ではいかないとい
う厄介な印象を受ける。それがまた妖怪らしくもあった。

「なるほど」

「それで、君はどうするのか？ 引き返すかい？」

「リグルの直観、虫の知らせの答えは？」

「君は進むと」

「正解。これは当たり前そう知らせだね」

「ま、これくらい君の人となりを少しでも知っていれば簡単に出る答えさ。だから私の
知らせを、今の答え程度で補強しないでおくれよ。ある意味、心外だよ？」

「これは失敬」

「構わないよ」

さて、とりグルが切り替える様に声を一つこぼす。

それに合わせ、彼女が再び出会った時の様にふわりと浮かぶ。

「そういうえば、奥から飛んできていたね。どこかへお出かけの途中だったのかな？」

「いんや。ただまあ、騒がしいのは見る分には好きだけれど、騒動の中心に近いのは嫌だからね。竹林の外にでも出てながめてようかなって所さ」

「賢い選択だね」

「君は愚かだね」

涼介を見下ろすリグルが言葉を一つ落とす。

「最後に一つ、いいかな？」

「いいよ」

「危険はあるかな？」

「答えを決めているのに、その問いに意味はある？」

「あつて進むのと、なしで進むのでは大違いさ。主にお説教に関して、だけどね」

「一理あるね。でも所詮私の根拠のない勘だよ」

出会った時と同じように、気だるげな視線でリグルが問う。

涼介はそれに応えることなく、穏やかな笑みを浮かべた。

その反応にリグルはやや呆れ気味なため息を一つこぼした。

「たぶん……無いんじゃないかな？」

「そう。それなら安心だ」

「妖怪の言う事なのに随分と素直に信じるね」

「君の言った通り、別段戻るつもりはないからね。占いみたいなものさ。当るも八卦、当たらずも八卦つてね」

「ふふつ、それぐらいが丁度良い心構えかも知れないね。一つ勉強になったよ」

「それは良かった。またね、リグル」

「ああ、生きていたのならまたその内にね、涼介」

リグルはその場で、竹林の奥へと分け入っていく涼介を見送る。

涼介の姿が見えなくなると、地中から、竹藪の奥からと、その周囲から無数の妖蟲達が顔を出す。

女王からの命令を待つ様に身じろぎ一つ見せない。

「追わなくていいよ」

リグルの言葉に妖蟲達が身じろぎを一つする。

「君達はいかない方が良い気がする。だから」

リグルが妖蟲達を止めて、指を軽く振る。

数種類の妖怪ではない小さな虫達が、それを合図に涼介を追う様に竹林の奥へと飛んでゆく。

「あの子達に任せるよ。別段何もする気はないから。ただ……面白そうなものが見れば私はそれでいいからさ。暇をつぶせる面白い事でもあればね」

消えてゆく虫達を見送りながら、リグルは手元まで来た巨大なムカデの妖蟲の頭を撫でる。

「それにちよつかいをかけそうな子は他にいそうだしね」

瞳を細め、竹林を見回す。何もリグルの瞳には認識されない。けれど、確かに何か涼介を追っている事はなんとなく分かった。ただの勘、虫の知^{無意識下の直観}らせだ。

「さて、私達も行くか」

リグルがふわりと飛びながら進み始めると、妖蟲達は姿を隠して、自らの主を追う。

「うん、面白くなりそうだ。これでもし異変でも起これば、巫女と弾幕ごっこをするのもいいかもしれない」

クスクスと笑いながら蟲の女王も姿を消す。

虫達を連れ、竹林を後にした。竹林からまた一つ、ざわめきが消えた。

日はまだ落ちない。けれど、刻々と時は進む。待つことなく、夜へと流れてゆく。

屋台の雀と迷い兔に供する四五杯目

リグルと別れた後も涼介は竹林を進む。

竹林が静かに感じるの、やはり気の所為ではなさそうだと思い直す。

聞こえる音は風のざわめきと、竹が揺れる音くらいものだ。

時折、動物か妖獣の物かと思われる鳴き声が聞こえるがそれもほとんどない様なもの。

時期外れの蝉の声も、鈴虫やコオロギと言った虫達の声も聞こえない。

——嵐の前の静けさ、だったりしてね

次いで、もし今の考えを知り合いの子らに読まれてもしたら怒られそうだと苦笑が一つ。

それでも涼介は進むことをやめない。また何か楽しい事でもありそうだと、自らの経験からくる勘が囁くからだ。

また誰ぞに狂っていると言われそうだが、涼介自身はその事はまるで気にならない。

外来から人外魔境たる幻想郷に住いを移す次点で、既にその人物はどこかしら狂っているのだろうかと思っっている。

そしてそれは自身さえ例外ではない。むしろ幻想に取りつかれた自分はそれらの筆頭であるかもしれないとさえ、そう感じている。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか……いや、鬼はもう出たから次は蛇なのかな？」
つらつらと意味をなさない戯言を呟きながら歩を進める。

すると竹林を進む涼介の耳に、チツチツチツという音が届く。

とたん涼介は足を止めた。

いや、止められた。

「これは……」

声で行先を遮られる不思議な感覚。

そして、視界が狭く暗く閉ざされてゆく。

「はあ………ミステリア」

涼介が誰かの名を小さくつぶやくと音がやむ。

代わりに風を切る羽音が返ってきた。閉ざされた視界を、音の方向へと向ける。

そこには文とはまた違う、鳥の様な翼をもつ少女が一人。落ち着いた茶色の色合いのジャンパースカートに、薄い桃色の髪。

それらの特徴を持つ妖怪の少女が、空から降りて来ていた。夜雀の妖怪、ミスティアだ。

けれど、涼介の視界に映るのはほんやりとした輪郭だけだ。

「全く、驚きの一つもないんだから。涼介は驚かし甲斐がないなあ」

「それは良いからヤツメウナギを一つおくれよ。視界が狭くてかなわない」

「あー、はいはい。分かりましたよー」

「そうふて腐れないですよ。数えるのすら億劫になるくらいされてるんだから。驚けと言っても今更じゃないか」

「それは……様式美ってやつよ」

「それでいいのかい、妖怪さんや」

「うーん、その時の気分しだい……かな?」

「悩ましい上に勝手な話だね」

不満さを隠す事無くミスティアが涼介へと告げるも、涼介の反応は薄い。

コロコロとミスティアは表情を変えるが、彼女の声で感覚を惑わされている涼介にはあまり良く見えない。

これが日の落ちた後であれば、輪郭さえも見えなかった事だろう。

「当り前よ。妖怪なのよ、私」

「それもそうだね。所で店主さんや、ウナギは売ってくれるのかい？」
「もー、全然わかってないっ！」

妖怪らしく不敵に笑ってみせるミスティア。

しかし、妖怪としてではなく、店主として扱う涼介に不満が口をついて出た。

「もう、置いて行行ってやろうかしら」

「それは困っちゃうなあ」

「……困っているように見えないんだけどなあ。仕方ないから売ってあげよう、感謝なさいな」

「ありがと、ミスティア」

「何だかなあ……」

暖簾に腕押しし、柳に風。それらを体現する涼介の態度に、ミスティアがため息を零した。

やれやれと一度かぶりを振った後、ミスティアが涼介の手を取ると歩き出す。

「ほら、屋台は近くにあるから行くわよ」

「助かるよ」

「会うたびに凶太くなっていくわよね、貴方って」

「そうかな？」

「……初めからこんなだったかも」

大人しく引かれるままについてくる涼介に、ミスティアはまたため息を一つ。

互いの店を訪れて、料理談義をする程度には、二人の仲は良好であった。

人妖問わず、というより人妖双方の為に店を開いている者同士、気が合ったのだ。

里の店にも妖怪が訪れる事もあるが、あくまで里の店は人間の為に営業している。

双方の為に店を開く酔狂な者など自分くらいだと思っていたミスティアにとって、外人人が自身と同様のスタンスの店を開いた事は中々に好奇心を刺激された。

桃源亭が営業開始した間もないころから通って知己を得たが、まるで変わらない警戒心の低さには不安を覚えた物だ。

せつかくの同好の士がふらつとのたれ死ぬのではないかと。

「その辺りで死んでそうなのに……不思議よね、貴方って」

「良いヒトが多いからね」

「相変わらずね。話し合えれば分かり合える、だったかしら？」

「話し合う手段は一つじゃないって最近学んだけれどね」

「あー、何か聞いたことあるわ。花妖怪に時々苛められてたんだっけ？」

「稽古をつけてもらっているだけさ」

「蹴鞠みたいにほんほん匆ね飛ばされてるって聞いたわよ」

「いや、うん、まあ……否定はしないかなあ」

「物好きね。ま、元気そうなら私は何でも構わないけれどね。さ、着いたわよ」

「うん、タレのいい匂いがするね」

屋台にたどり着くとミステイアが涼介の手を離し、調理台のある内側へと入ってゆく。

ぼんやりとする視界を頼りに、涼介が置いてある椅子に腰かける。スンスンと鼻を鳴らし、香りを嗅げば、食欲をそそるウナギのタレの匂いがしてくる。

「犬みたいよ」

「誰かさんの所為で視界が悪いんだ。その所為か他の感覚が敏感でね」

「あら、それは大変ね」

「本当だよ。会うたび会うたび飽きないのか聞いてみたい所だよ」

「あー、手を滑らせそうだよ」

「食材に罪は無いよ」

「くっ、痛い所を……私が食べちゃおうかしら」

気安い会話をしながらもミステイアの手は止まらない。

綺麗にヤツメウナギを処理して、串を通して焼き始める。

炭火にウナギの油が落ちて、じゅうじゅうと音を立てる。

タレに漬け、また焼けば香りも広がる。

「良い音だね」

「当り前よ」

「それにタレも本当においしそうな匂いだ」

「ふふっ、ウナギのうまみを伊達に吸い続けてないわよ」

「年季が違うね、文字通り。タレの半分を売ってくれないかい」

「だーめ。いつも言うけれど、食べに来なさいな」

「残念」

クスクスと二人が笑いあう。

楽しい時間を過ごしながらミスティアはウナギを焼く。

涼介は身体を椅子に預け、それを待つ。

「ご馳走様でした。毎度のことながら感服するお手前で、大将」

「お粗末様でした。ふふ、貴方にそう言われると何度目であっても嬉しい物ね」

ミスティアの焼き上げたヤツメウナギをペロリと平らげて涼介が感想を口にした。

それに応える様にミスティアも言葉を返す。言葉にした通りなのだろう。顔に浮かんでいる表情は喜色に染まっていた。

機嫌良く鼻歌を歌いながらミスティアは手元を片付けてゆく。

涼介はミスティアの奏でるメロディにしばし耳を傾ける。

タレの入った壺をしまい、包丁などの調理器具を綺麗に洗う。

そして、最後に炭についた火を落す。

それを見た涼介はおやと、首をかしげる。

「今日は店じまいなのかな？ 随分と早いみたいだけど」

感じたままに疑問を口にする。

暖簾の隙間から空を見上げれば、茜色に染まり始めてはいるがまだまだ青空も見えて暗くなるには時間がある。

であるならば、ミスティアが店を閉めることに疑問を覚えた。むしろこれから客足の伸びる時間であろうと。

現にミスティアの店は酒も出す。ウナギの串焼きをメインに他にもいくつもの酒の肴を提供していた。

だからこそ夜へと向かうこれからが、月が顔を出す夜こそがミスティアにとつてはメインとなる営業時間といえた。

そんな彼女が目の前で火を落したのが涼介には不思議に映つたのだ。

まるでもう店じまいと言いたげなミステリアの行動が。

「うん？ ああ、確かに大分早いわよね」

「大分つていうか、むしろこれからが開店準備つて気がするけれど。いや、開店準備にしても少し遅い気がするんだけどさ」

「本当は開店準備をしてあつただけだね、今日はお客さん来ないみたいだから閉店することにしたのよ」

「お客が来ない？ 確かに今日の場所は少し竹林に分け入っているから人間のお客さんは来なさそうだけど、妖怪のお客さんならくるんじゃないかな？」

ミステリアの店は手押し屋台だ。だからこそ決まった場所で店を開くことは無い。その日のミステリアの気分で幻想郷のあちこちで店を開いている。

里では、妖怪の縄張りの外で開かれているミステリアの店を見つけることはちよつとした幸運であるときえ言われているとかいらないとか。

そんな噂が立つような程度にはあちこちふらふらとして店を開いている。

だからこそ今日は妖怪相手に店を開くためにここで腰を据えているのかと思えばミステリアは客が来ないと言葉にした。

「リグルが今日は騒がしくなりそうだからお店なんて開いてられないよ、つて言つて

さ。まあ友人からのありがたいお言葉だから、従おうかなって事の運びでございます」
てきばきと片づけを進めているミスティアが、冗談めかしてそう口にした。

「なるほど。リグルの虫の知らせはここにも来たわけだ」

「ああ、涼介も来たんだ。何て言われたの？」

「楽しい事があるかもねってさ」

「……懲りないわねえ、貴方も」

「私らしいだろ？」

「鳥目にヤツメウナギはあっても貴方につける薬は無さそうね」

「健康だからね」

「馬鹿につける薬は無いって言うてるのよ」

「そこはささやかな誤魔化しを気づかないふりして流して欲しかったなあ」

「ばーか」

片付けの手を止め、頬杖をつきながら呆れ眼のミスティア。

発される言葉は飾り気のない、されどそれ故に本心であると理解させられるもので

あった。

あまりにもストレートな物言いに思わず苦笑が涼介の顔に浮かんだ。

「返す言葉もないね」

「ま、いいんじゃない？ それで死んでも困るのは貴方だけでしょように」

「さて、それはどうだろうね」

「ん？」

「ま、死ぬ気はさらさらないさ。ミスティアも話し相手が一人減る程度には悲しんでくれるだろうしね」

「……ばーか」

痛い目に合えばいいと言いたげなミスティアがぶつきらぼうに言えば、涼介が言葉を返す。

落ち着いた静かな瞳で見据えられ、言葉を投げかけられたミスティアは凶星であったのか、少しだけふて腐れたように口をとがらせた。

そんな様子を見た涼介がクスクスと笑い声を漏らせば、ミスティアの瞳に非難めいた色が宿る。

涼介にそんな気がないのは知ってはいるが、手玉に取られて翻弄されているみたいで不満なのだ。

そうこうするうちにミスティアの片付けも終わり、二人は別れる。

ミスティアは外へ、涼介は奥へ。

それぞれは進んでゆく。

ミステリアと別れてしばらく進めばいつもの岩場が見えてきた。

空を隠す様に乱立している竹が、その近辺だけ空白を作っている。

お月見用にあつらえたかのような小さな空間。

空も茜色に染まり、間もなく夜がやってくる。

そんな頃合いに涼介はたどり着いた。

「いない、か」

岩場に腰かけ一息つけばそんな言葉が漏れた。

悪天候でもないのに姿の見えない輝夜。

前回到引き続き二度目だ。

元より約束している事では無いが、やはり少しだけ物悲しくはあった。

「ふふ、相も変わらず寂しがり屋か」

自身の心の動きに笑いが漏れた。

それは大人になりきれない自分への自嘲か、そう感じられる程の知己を得られた事への喜びか。

フツと小さく息を吐き、身体から力を抜く。

何かを探す様に空を見上げるが、まだ月が出るには早いのだろう、涼介の視界には茜色に染まる空と雲が映る。

「リグルの言う騒がしい事に彼女たちは関係あるのだろうか」
思い浮かべるは輝夜にウサギの従者の二人。

——関係あるのだろうか

そう、言葉にすることなく結論付ける。

根拠などない。けれど涼介にはそう感じられた。

妹紅が彼女らの様子が普段と違うと評した。

それも涼介の考えを後押ししているのだろう。

「さて、今宵の騒ぎはどれほどのにぎやかさになるのかな。異変程お祭り騒ぎまでいくのかどうか

……」

どうなる事やらと涼介はその口元を綻ばす。

願うならば、騒がしい事を望みたい。

願うならば、またそれを近くで見たい。

涼介は声に出す事無くそう願った。

「届かぬならばせめて、せめて……」

空へと手を伸ばす。

決して届かぬ雲を、星を捕まえようとするように手を先へ先へと伸ばそうと。

涼介の視界の中に自らの手と、流れゆく雲が映る。

逃がさぬようにと握ってみても、何もその手には残らなかった。

握りこぶしの向こうに見える雲は、何も無かったという様に何も変わらない。

「輪の中に入る、か」

以前、阿求に言われた言葉を思い出した。

「私は本当に輪の中にいるのだろうか」

阿求はそう評したが、本当は自らも阿求より輪に近いだけで、輪の外から眺めている

だけなのかもしれない。

届かぬ空を見上げているとそんな気が涼介にはしてきてしまった。

空を飛べるので在ればきつと考えなかったのだろうな、そう小さな声で独りごちた。

そう飛べない。飛べないのだ。

それは涼介の霊力が乏しい為という話だけではない。

鬼の酒を飲めば一時的ではあるが妖力を持てる。

借り物のそれではあるが力を得るのだ。

けれど涼介は飛べなかった。

過去、萃香に稽古をつけてもらっている時に判明した。

萃香いわく、落とす能力ゆえに飛ぶ適性がないのだろう。

そう涼介の姉貴分は評していた。

プリズムリバー三姉妹のソレの様に、咲夜のソレの様に。

涼介は修行しようとも、仮に大妖怪といわれる程の力を得ようと飛ぶことは無い。

「もとより飛べぬこの身で合ったけれど、いざ飛べるかもと希望を見出し出した後に飛べぬと言うのはいささかクルる物があるなあ」

飛べぬことが判明してから、あまり気にしない様にしていたし、実際あまり気にはしていなかった。

否、気にしていないと思っていた。

けれどもいざ、異変が起こるかもしれない。それでなくとも何か騒がしい事があるかもしれないと考えた時に、飛べぬこの身が恨めしかった。

それこそ幻想の少女達のように自由に空を駆けられたのならば、それはこの上なく幸せであると思えてならなかった。

「ふ、ははっ……一人で気を滅入らせていても仕方なし」

負の方向へと転がり落ちかけていた思考を戻そうと小さく笑い飛ばす。

やはり一人でぼうつとするのは良くない、そのため息交じりに零すと涼介は下ろしていたりユックに手を伸ばす。

寂しがり屋なりに寂しさを紛らわせようと瓢箪を取り出す。

ただ酒の入っている特別なことなど何も無い瓢箪。

伊吹瓢で酒を飲む萃香を真似る様を買った入れ物。

野球少年が憧れの選手と同じ道具を使うのと同じ、子供染みた行為。

けれど、萃香に見せた時には、萃香も嬉しそうに涼介の頭をぐりぐりと乱暴に撫でつけていた。

手にした瓢箪を見た時にその事も思い出し、ふっと口元が揺るんだ。

「つはああ……きつついなあ」

一口、二口と中身あおる。

瓢の中より漏れ出る酒精はかなり強い。

中身は鬼の酒。伊吹瓢の中身を分けて貰った酒は、かなり強い。

ザル、というより酒精を自身の中から落とすとしてしまえるが、飲んだ時に感じる酒の強さは変わらない。

けれども今はそのきつきさが心地よかった。

しゃんとしりと萃香に叱責されているようで愉快でさえあった。

「何処にでも行ける足が有つて、弾幕を眺める事の出来る目があるのだ。今はそれで十分だ」

今はね、と心の中で付け加え、再び酒を口へと運ぶ。

喉を通る灼熱感がまた気持ちが良い。

一人で小さな酒宴を楽しむ涼介の耳に地面を踏む音が聞こえた。

カサリという小さな物音。

瓢箪を傾ける手を止めて涼介は音のした方向へと視線を向ける。

「おや君は——」

涼介の視線の先には小さな子供がいた。

けれどそれは人間の子ではない。それを示すかのようにふわふわとしたウサギの耳がついていた。

前回の満月の時に出会った少女と比べると短い耳ではあるが確かにそれもウサギの耳であることに変わりは無かった。

桃色のワンピースがさらにあどけなさを強調しているように感じられた。

そして、瞳の色。紅い瞳の彼女と比べれば明度は低いがこの少女の瞳もまた赤みがかっていた。

これらの事から涼介は

「——以前ここに来たウサギの御嬢さんの妹さんかな？」

そう、口にした。

いつもの様に物腰柔らかく、にこりと笑ってそう問いかけた。

「……」

しかし、帰ってきたのは沈黙であつた。

涼介は少しだけ困つたように頬を掻いた。

涼介を見つめる少女に変化はない。

変化はない、けれども何故だか涼介は非難めいた視線の圧を感じた。

別段少女の瞳が言葉を発してから宿す感情の色を、形を変えたということは無い。

しかし、不思議と涼介にはそう感じられた。

言うなれば気配や雰囲気という物であるのかもしれない。

「ねえねえ」

見た目に反する事無く可愛らしい声を少女が口にした。

幼い子供のようにひよこひよここと涼介へと近づいて行つた。

あまりにも無邪気な子供らしい仕草に、涼介は一瞬思考に空白が生じた。

妖怪と認識した相手。見た目相応ではない年齢なのだろうとそう思っていた相手。

その人物の取った行動、雰囲気、表情、そのどれもが見た目相応の子供に見えた。故に自身の認識と目の前の現状との齟齬に、虚を突かれる様な形となった。

「えへへ」

涼介のすぐそばまで来た少女が愛らしく笑みをこぼした。

少女は目ざとくも涼介の状態に気が付いたのだろう、少女の笑みの種類がガラリと変わった。

「鈴仙の妹つてのは無いわ」

「え——」

低い声を出し、少女はそう言った。

浮かべられた笑みもどこか嘲笑うかの様な物。

涼介がその変わり様に声を漏らすも、それは途中で途切れてしまった。

「——っう」

パシンと乾いた音が物静かな竹林に響いた。

少女の指が涼介の額を弾いたのだ。

完全に意識の外から来たそれに涼介は対応できなかつた。

美鈴の様に隙を縫う様なそれ。意識の隙間を通つた一撃は涼介に綺麗に入った。

威力はそれほどでもないのか、座っている身体が仰向けになる程度であつた。

「いきなり」

身体を起こして言葉を投げかけようとするも、少女の姿にそれも止まった。

涼介の持つていたリュックを背負い、先ほどこちらを覗いていた時に立っていた場所まで戻っていたのだ。

「悪い事は言わないからさ、今日はもう帰りなさいな。あ、これは失礼な言葉の謝罪分と幸運の駄賃に貰っていくよ、にしし」

悪戯が成功した子供の笑顔に似た表情を浮かべて少女がそう言った。

そしてその笑顔は、彼女にとっても良く似合っていた。

「じゃあまた機会があれば会おうじゃないか、涼介」

「あ、こら——」

涼介が何かを続ける前に少女が走り出した。

反射的に涼介もそれを追って駆け出した。

「おやおや、まあまあ。危ないよ、お兄さんや」

涼介が追いかけてきている事に気が付いた少女が後ろを振り向きながらからかう様に言葉を口にした。

愉快さを浮かべた表情には老獺さが滲んでいた。

前方を見ていないのに乱立する竹にぶつかる事無く走る少女に妖怪じみているなど

思うも、妖怪だったかとすぐさま思い直す。

光の三妖精の時のように鎖を伸ばしたいが、周りを埋め尽くす竹がその選択肢を除外させる。

仕方なく走って追いかけるも、地力が違う為か距離が徐々に開いていく。

「せめて持つていくのならもう少しまともな説明を頼みたいんだけど!」

「持つていくのは許容するつてのがまた何とも達観してますなあ」

「君らに人間側の道理を説いても仕方ないだろう」

「うんうん、全くもつてその通り」

追いかけながら言葉を投げかければ、ちゃんと返答が返ってきた。

その事あまり悪い子じやなさそうだと涼介は感じた。

進行形で荷物を盗まれている状況であるのだが。

涼介とのやり取りがお気に召したのか、少女はクスクスと笑った。

「お兄さん、良い人そうだから忠告を一つ」

「なんだい!?!」

走っている所為か声についつい力が籠ってしまふ涼介に対して、少女が急に立ち止ま

る。

「危ないよ?」

最初に出会った時と同様に、あどけない子供らしい仕草と雰囲気を醸し出しながら、少女が小首を傾げてそう言った。

「何を――」

問い返す前に涼介の視界から少女が消え去った。

「――う、おっ」

違う。涼介が地面に吸い込まれる様に姿を消した。

直後、地面に重たい物がぶつかる音が竹林に響いた。

「落とし穴があるからね、にしし」

少女はその様子を見届けた後、見た目にそぐわない、けれど何となくらしい笑いを一つこぼすと竹林の奥へと姿を消した。

穴に落ちた涼介には少女の声も、姿も捉える事は叶わなかったのだが。

もう間もなく夜が来る。満月が、昇る。

認識の差に供する四六杯目

「さてどうしたものか……」

穴の底で呟いてみるが名案は思い浮かばない。登る事も出来ないよう、上が窄まっていく意地の悪さの見え隠れする穴の底。涼介は一人途方に暮れていた。

どうにかして登ろうにも窄まっていく壁面のため足はかからない。土壁をどうにかしようにもぼろぼろと崩れる始末。

手元の鎖もそこまで自在に操れるわけではないため、現状の助けにはならない。

最悪の場合は鬼の酒もあるが簡単に頼りたくは無かった。安易に便利な力を頼るのは弱さの表れに感じられるからだ。

ではだからといって別の解決策が有るのかといえ、答えはノーであった。だからこそ涼介はいまだに穴の底で空を見上げているのだ。

「助けを呼ぼうにも風と草木のざわめきくらいしか聞こえないし……本当に小妖の気配さえないのか」

本当に困ったと涼介は頭を搔く。しかし、いまだ命の危機がないためか、表情は普段通り……どころか少しこの状況を楽しんでいる節さえ感じられる。

これからリグルが言っていた騒ぎが起こるのか。だとすれば誰が起こすのだろうか。思考がめぐる。妙案が思い浮かぶまでと別の事へ意識が向く。

漠然と涼介の頭に思い浮かんだのは月下の姫君と従者だろう二匹の兎。この竹林に住い、騒ぎと呼べるレベルの出来事を引き起こせる心当たりが涼介にはそれくらいしかなかった。

他には狼女の影狼や先ほど出会ってきたミスティアやリグルがいるが、個人として組織を持たない彼女らに出来るとは涼介には思えなかったのだ。萃香のように強大な存在であれば話は別なのだろうが。

では仮に彼女たちが起こすのであれば理由は何なのであろうか。思考がさらに深く沈もうとした時、その声は聞こえた。

「――、――」

少女の声が聞こえる。誰かを探しているのか、同じ言葉を何度も叫んでいた。

「てー」

声の主が近づいてくるのか徐々に音がはつきりしていく。

「てゐー、どこ行ったの、てゐ!!」

聞き覚えのある声だった。こんなに険のある感じではなかったが、確かに知っている声。以前に月の姫君の代わりにやってきた兎の少女。

自分を穴に落とした少女との関係者であろうが、ダメでもともとである。涼介は兎の少女に助けを求めることにした。

「あの一」

「誰ツ!？」

強い敵意。姿を見てもいないのに背筋がピリツとする殺気だった。警戒した彼女の力が高まっていく。

「兎の御嬢さんですよね? 前回の満月に伝言をいただいた者です、覚えていませんか?」

「へ? え、あ、あの一」

まるで見えないのに、手に取るように焦っている姿が思い浮かぶ。可愛らしい反応から幻想郷に住まう超級の人外たちにとても好かれそうだと何となしに思った。本人が知ればきつと憤るが、幸いなことに兎の少女に読心の術は無かった。

「ど、どこにいるんですか? ……姿が見えないし、波も一え——いし」

場所を尋ねた後の言葉は独りごとと類するものであったため、涼介の耳には全ては届かなかつた。

「ここです、ここ。どうやら穴が空いていたみたいで落ちてしまいました。わかりますか?」

「はい、わかります。えっと、こっちから声がしたから」

涼介の声に導かれて少女が近づく。かなり近くまで来たのか土を踏む音が僅かに聞こえてきた。

「どこですか？」

そんな少女の問いかけと共に、涼介の頭上の穴から可愛らしい顔が覗き込む。

「えっと、その……お困り、ですか？」

「兎さんの手を借りたいほどには」

少女が背負う黄昏時の空の赤よりも鮮やかで深い紅玉の瞳が涼介を見下ろしていた。

「いやあ、助かった助かった。ありがとうございます、お嬢さん」
「いえ、その、どういたしまして」

身体に付いた土を払いながら笑みを浮かべる涼介と、いまだ困惑から抜け出せない兎の少女。

それもそのはず。涼介は何一つ説明する事無く、穴の中を見下ろしてる少女に対して

引つ張り上げて欲しいと腕を差し出したのだ。そして少女もつい反射的に腕をとって引き上げてしまった。

人の好きが災いしたのか、幻想郷に染まった図々しさが功を奏したのか。どちらにせよ涼介は穴から出ることが出来たのに変わりない。

だからといってこれで問題解決ですねと終わるわけではない。当然の疑問が少女の口をついてでる。何故穴になど落ちていたのか、である。

「兎の女の子に荷物を盗られました」

困った困ったと言いながらまるで困っている様子の無い涼介。

そして心当たりのある人物を示され、笑顔が引きつる少女。それと同時に思い出される自身の状況。少なくともここでのんびり談話していて良い状況にはいないのだ。

とりあえず会話を終わらせて、目の前の人物には竹林を出て貰わねばと少女は予定を決める。

「あの、それでしたら荷物は後ほどこちらで見つけて返却しますので、今日の所はひとまずおかえりになられてはどうでしょうか？」

「いえ、お気になさらずに。変えの利かない大事なものは入れていなかったのだから」

「そうですか……ではもう夜になりますし、竹林の出口はそちらの方面ですので暗くなる前にお早くお帰り下さい」

「丁寧にすみません。ですがもう少し辺りを探してみようかと。それにもともと今日は月に一度の満月ですので、いつもの場所にも顔を出しますからお気になさらずに」

「あ、それは」

困る。すごく困る。言葉にしなくともありありと少女の仕草から伝わってきた。どうにかできないかと考えながら、綺麗な紅の瞳がぐるぐるとめまぐるしく動いている。

見えて飽きないが僅かばかり良心が痛む少女だと涼介は認識を改めた。だからといって「はい、では帰ります」という素直さが僅かでもあつたら涼介は幻想郷にいないし、異変にも一度たりとも関わる事は無かつただろう。

幻想郷に染まったことが原因か、元々の素養が色々な出来事で開花したのか分からないうが、涼介も存外人が悪いのだ。少なくとも阿求はそう評するし、涼介も阿求と同じだよと嘯くだろう。

だから涼介は畳み掛ける。

「どうかされましたか？」

それはいかにも物腰柔らかく、安心する声色の問いかけであつた。営業スマイルと言つてはいけない。

「あ、そうですそうです！ 今日も姫様は行けないそうです！ ですのでお顔をお出しにならなくても大丈夫ですよ」

「そうなのですか、それはわざわざありがとうございます。ですが折角ここまで来たのですから一人でもお月見を楽しんでいこうかと思えます」

「え、っ!？」

思いのほか良い反応が返ってきた。良い事を思いついたとばかりに捲し立てる少女は、涼介の回答に再度停止した。心なしか頭上の耳も萎れて見える。どことなく妖夢を思い出して、ついからかいたくなってしまう己の悪戯心を涼介はそつと落ち着ける。

それに涼介としてもリグルの虫の知らせを信じているし、先月からのお姫様の様子と目の前の少女の態度から本日の内に何かが起こるであろうと確信に近い予感を懐いている。

であれば幻想郷のカナリア——阿求命名——と仇名される涼介としては是が非でも近くで見たい。帰る道理など微塵もない。

「あ、ほら妖怪が出ますからこの竹林！ 虫の妖怪とかもたくさんいて危ないですよ」

「今日はいないみたいですよ。竹林に入る前にすれ違いましたから確かですね。ほら、ただの虫の声さえししないでですよ」

「うー！」

そんな事は少女として百も承知だ。竹林を探し回っている間に、虫達の声も生命も波長も感じなかったのだから。だが、把握されているとは思ってもみなかった。

「夜雀の妖怪も——」

「——少し前に分かれた所だね」

「……………あ、満月は狼の妖怪が」

「彼女は満月の夜は他人の目を気にして隠れてしまうよ」

「交友範囲広すぎませんか？」

「それ程でもあるかな？ 数少ない自慢の一つだからね」

少女の恨めしげな視線が刺さるが、朗らかに笑いながら答える涼介には無意味であった。

暖簾に腕押し。あまりの手ごたえの無さに少女が小さなため息をつく。

今まで動揺に僅かに揺れていた瞳が定まる。視線がキツと涼介を見据えた。

「警告です。貴方は姫様の話し相手なので無下に扱う真似はしません。だから言う事を聞いてください」

がらりと雰囲気が変わる。声をかけた当初の殺気を放っていた時のように、ピンと気配が張りつめる。まるで別人のように目の前の少女は一変した。突きつけられた指先に銃身を連想させられた。

「今日は大人しく帰ってください。ここでのやり取りも忘れて静かにしててください。そうすればまた何事もなく明日が来ます。今日と変わらない明日がまた始まりま

す。だから今日は帰りなさい」

「帰らない」

「貴方はッ！」

「変わらない明日なんてない。いつだって世界は違う。変わっていく。今日という日は今しかないんだ。だから私は私の思いに従うよ」

少女の言葉に涼介が応える。否を突きつける回答に少女の感情が波立つ。紅の瞳が爛々と輝く。激しかけていた少女が一つ息を吐く。また気配が変わる。

「どうしてもというのですか？」

酷く落ち着いた声。けれどももぞくりとする寒気を感じさせた。光を受けた水面のように煌めく瞳が涼介を捉えて離さない。

「どうしても、と応えたら殺すかい？」

「……貴方は死を恐れていたのではないのですか？」

「怖いよ、今でもね」

「ではなぜ恐れえない。私が害することなどないと盲信でもしているんですか？」

平坦で感情の無い声。けれども噴火寸前のような抑圧を感じる声であった。

「していいよ」

「では」

光を湛えた静かな瞳が見開かれる。

「では何故ツ!? そのように命をベツトする!？」

抑圧していたものが暴発した。少女は自分の感情がぐちゃぐちゃになっている事を自覚していた。

目の前の男は死を恐れている。以前に自分でそう言っていた。そしてそれに自分は嘘を感じなかった。だから少しおどせば言う事を聞くと思つた。殺す気などなかった。

それでも男は引いていない。それどころか恐れることなくこちらを見据えてくる。向き合つた男の瞳に映る自分。自らの死への恐怖を、男の中にも視ているみたいだつた。

死を恐れるのは自分だけじゃない。誰だつて怖い。だから自分が逃げたのは普通のことだ。そう言い訳する為に彼の中へ自身の恐怖を投影しているようだった。

それなのに彼は恐れない。怯えない。逃げようとしなない。やつと見つけた同類だと思つたのに。裏切られた気分だった。妬ましかつた。知りたかつた。死を恐ろしいと言いながら恐れない彼が怖かつた。

波長を操つてどうにかしようにもどうしてだか上手くいかない。別の力が加わっているみたいでいつものように操れなかつた。波打つ感情が抑えられなかつた。怯えを威嚇で覆い隠す。

「何故だ!!」

掴みかかりそうな自分をぎりぎりの所で自制して問い掛ける。揺るがない瞳が自分の弱さを見通しているみたいでまた心が波打つ。

「そんなに深い事は考えていないよ」

そんななんでもない返答がすつと耳に入ってきた。

「ただ……そうだね。君が私を殺すとしよう。であるならばそれは、殺してでも追い返さなければならぬことをするという可能性。それはきつと幻想郷にとつても良い事ではないと思う」

淡々と語る声が身体に染みわたる。

「だから……が好きな私としては殺されたのなら幽霊にでもなつて白玉楼で妖夢辺りに解決を頼むだろう」

波打っていた心が少しずつ落ち着いていくのがわかった。

「でもそうしないとは思うんだけどね。君は優しいみたいだし。だったら何かが起こると分かっているのに出ていくような私ではないよ」

最後に心の底から楽しそうに言葉を締めくくる。完全に心が落ち着き、少女の心は腑に落ちる答えを得た。

「なんだ」

気の抜けた声。

「貴方、もうすでに狂ってたのね」

「ひどいなあ」

少女の言葉に困った笑いを浮かべながらも涼介は否定の言葉を口にはしなかった。自分の正気など、幻想郷へ来た時点で既に投げ捨てている事など明白だったのだから。

「ああ、そうだ。殺して魂をどうにかするという可能性もあったけどその場合の説明はいらないよね」

魂を害せば死神が来る。さらに最悪閻魔が出てくる可能性もある。それは自分も、主人達も望まない。

溜息を一つ。平常心が戻って来る。自分の命を平然とベットして来る狂人に少女は頭を抱えたい思いだった。

そして同じ価値観を共有できるかもしれないという淡い期待が消えた事を知った。「なんだかなあ」

切なさの詰まった呟きは誰に届くことなく風に吹かれて消えて行った。

案内と対面に供する四七杯目

「なんだかなあ」

「無駄口叩かない。捕虜の自覚を持ちなさい」

「はいはい」

「めんどくさげにあしらうなっ！」

少し前にうさぎの少女が漏らしていた呟きと一言一句違わない言葉を今度は涼介がぼやいていた。違いがあるとすれば込められている感情だろう。少女は諦観、涼介は不本意。

涼介のぼやきを耳ざとく聞き届けた少女が、強めの口調で注意をするが適当にあしらわれて真剣な空気が霧散してしまう。

「まったくどうしてこんなことに……」

「ほら、やっぱり縄なんてかけないで普通に招いてくれればその辺も解決すると思うんだ」

「うるさい、捕虜の意見は聞いてないの」

「意見は聞いてくれなくても話は聞いてくれてるじゃないか」

「ああいえばこういうつ」

「幻想郷に住んでいればいざれそうなるよ、多かれ少なかれ。君も人里へ顔を出すようになればそうなるよ」

「出さないから大丈夫です」

「じゃあ私が出かける頻度を増やそうかな」

「あーはいはい、ご勝手にー」

「竹林に」

「やめてくださいよ！ 私、相手するの嫌ですからね!？」

「満月の彼女のお相手をさせていただけこうかと思っていたけど、君も相手をしてくれる気があるんだ。これは嬉しいね」

「ああああああ!!」

両手で頭を掻きむしりながらかぶりを振る少女の姿についつい笑ってしまふ。流石に不本意極まりない扱いの仕返しとしてはいささかやり過ぎただろうか。涼介は一瞬そう考えたが、腕の自由を奪う縄の存在を思い出してそうでもないかと思ひ直す。

腕を後ろ手に縛られて市場へ連れて行かれる子牛よろしく、縄で引かれて連行されているのだ。多少の戯言くらいは仕方ない。そう考えながら涼介は胸の内よりこみ上げてくるものから目を逸らす。

紅霧異変、春雪異変、三日置きの百鬼夜行、アリスの人形劇しかり、囚われる役が板についてきた自覚を本人は直視したくなかったのだ。騒動の後に言われることが手に取るように分かると涼介の瞳が遠くを見始める。

「ほんとに……ほんとうにあのまま穴に捨て置けばよかった」

「そんな絞り出すように言わないでくれよ。私は穴から出られて、君は不穏分子を見つけてウインウインというやつではないかな？」

「私にとつてのウインは貴方が聞き分けよく帰る事でしたよ」

「それは無理な相談だ」

「でしようね。ええええ、知っていますとも。……これも全部てゐの所為だ、てゐの所為だもん」

後半は自分に言い聞かせながら少女は気持ちを持ち直した。自己暗示に近いが何とか持ち直すと、再び涼介に繋がる縄を引いて進むことを促した。

「再度申しますが貴方は姫様の話し相手。無下にはできませんが野放しにもできません。ですので事態が終わるまで軟禁させていただけですよ」

「今までで一番穏便なのだから進歩はしているのかな？」

「何の事でしょうか？」

「拘禁される時の待遇の話」

「……そんな定期的にある事じゃないと思うんですけど」

「それが意外とあるから困ってしまうよね」

「うわあ……」

少女の理解できないモノを見る目が実に痛い。少女の視線の圧に気が付かないふりをして涼介は素知らぬ顔をした。この話題はこれ以上掘り下げられても自分が不利なだけだ。妹紅の薫陶通りに不利な話題は早めに切り上げる。

けれども悪いことばかりではないと考えを改める。このまま連れていかれば少なくとも騒ぎを間近で見ることが出来そうだと。今度は何が起きるのだろうか、涼介は期待を懐く。

「さてとうさぎの従者さん。あまり話しこんでも悪いので、そろそろ歩みを再開しましょうか」

「なんで連行されてる側に促されるんだろう……釈然としないなあ」

「でも抵抗されるよりは良いと思いませんか？」

「なんだかなあ」

溜息と共に吐き出された言葉。人の悪い涼介はそれに笑って返すのであった。

竹林を少女の案内に従い進む。案内と言っても縄を引かれるだけの丁寧さの欠片もない案内ではあったが。

それに丁寧に案内されたとしても涼介からすればどこも同じ景色に見えてしまうので意味はなかっただろう。名づけられた迷いという言葉に恥じない天然の迷路。

されどうさぎの少女に迷いはない。勝手知ったる庭のように迷いのない足どりで先へと進む。涼介が適当な世間話をふれば当たり障りのない返事がちゃんと返ってくる。会話に思考を割く余裕があるという事だ。

彼女の緋色の瞳に竹林がどのように映っているのか興味を惹かれたが視覚を共有できずるわけもないので浮かんだ疑問を忘却する。根が善人らしく、なんだかんだと文句を言いながらも会話に付き合ってくれる少女と話しながら進むことしばし。ようやく目的地と思われる建屋が見えてきた。

平安貴族が住まうような木造建築。竹林の中で隠れるように建っている屋敷はノスタルジックな風情を感じさせた。

広さに対して住民は少ないのか、人気を感じない。静謐さに沈む家屋は時間に取り残されているようでもあった。

「それではいったんここで止まってください」

少女の指示に立ち止まることで肯定を返す。少女もそれだけで理解したので二の句

を継ぐことはしなかった。屋敷を囲う立派な門の前で少女はしゃがみ込む。

足元に兎がいたらしい。もちろん人型ではなく、見た目は普通のウサギだ。少女は何かをいうでなく、じつと足元の兎を見つめている。何らかの方法で意思疎通しているのか時折ぐうぐうと兎が鳴き声を返していた。

制服に似た少女の服装も相まって登下校の途中で猫を見つけ睨めっこをしている女子高生に見える。実際は兎と意思疎通をしているという幻想郷的な光景であるというのだ。幻想と現実の境界があいまいだと少しだけ可笑しかった。

(紫さん辺りなら他にもあると酒の肴に話してくれそうだ)

友人との話の種ができた。ぼんやりと思考を遊ばせていると少女が立ち上がる。振り返った少女の顔は不満げだった。視線へ込められた圧が言葉にすることなく雄弁に語っている。

涼介は何もしていないはずだがと首をかしげるばかりだ。いくら考えども答えが見つからない。

自分の中で折り合いがついたのか少女がため息をわざとらしく吐き出す。涼介がどうしたと問い掛ける前に少女が涼介に近づき、腕を拘束している縄の戒めを解く。

「大変、大変に不本意なのですが、御客人として案内するよう仰せつかりましたので縄を解かせていただきました。一体どんな手を使ったんですか？」

「何も。というか一緒にいた貴女が一番よく分かっていると思うんだけど。私には何もできないし、やってはいないよ」

「ですよねえ……やだなあ、縄に掛けたこと怒られないといいな……」

弱々しい呟きを漏らす少女の姿にさすがの涼介も居たたまれなくなる。確かに縄で縛つての連行に含むところがないわけでもないが、少女の対応は最善ではないにしても間違つてはいないと涼介も思っている。

あまりにも哀愁を漂わせている少女をほっておけず気が付けば口を開いていた。

「私は何も言わないから大丈夫だよ。落とし穴で困っていたところを助けてもらったと話すから」

涼介の言葉を受けて少女がぱちくりと瞳を瞬かせる。一瞬、瞳が喜色に染まるが直後にまたどんよりと曇った。

「お心遣いは大変嬉しいんですけど、たぶん手遅れなんですよね。貴方が来ていることが前提の指示を、さっきの子が持つてきていたので」

あまりに覇気のない声。屋敷の住人を知る彼女が無理と言うのであれば、深い事情を知らない涼介が掛ける言葉はもう無かった。

萃香が居る時の文の姿が目の前の少女と重なる。あまりに気落ちしているためにせめてもとほんぽんと励ますように肩を叩く。

「ありがとうございます。性格は悪いけどいい所もあるんですね」

儂い笑顔と共に混じりけのない少女の本音が吐露された。少女に悪意や悪気がないのは分かる。本心からの感謝だと解るから混ぜっ返すこともできない。だが心にぐさつとくる一言だ。涼介に唯一出来たのは引きつった笑みを返すことだけだった。

反応が良いからとからかいすぎた自分の行動を少しだけ反省する。だけでも反省したからと行動が改められるかは今までの結果を見ればお察しである。

「さてそれでは」

微妙な空気を少女が仕切り直す。

「ようこそ永遠亭へ、初めての人間のお客人。奥で師匠が待つておりますのでどうぞこちらへ」

自らが時折、満月の君へしているような畏まった仕草で少女が一礼をする。

「お招きにあずかり光栄です、従者殿。道中の案内、大変感謝しております」

鏡合わせのように涼介も礼を返す。互いに顔を上げて見合わせると共に小さく噴き出した。

門を開けて中へと招く少女に従い、涼介は屋敷へと姿を消した。

屋敷内を進み、客間へと通された。少女は師匠と呼ぶ人物を呼びに行くのか、少し待つように涼介に伝えると部屋から出て行った。

しばし手持無沙汰な涼介は室内を見渡す。掃除が行き届いたきれいな部屋。畳の香りも心を落ち着ける。

畳の香りで博麗神社や稗田家を思い出すが、それらとはまた違うと感じられる。

張り替えられたばかりのような新品の香りに似ていた。部屋も掃除が徹底していると思つたが違つた。新築然としているのだ。まるで生活感を感じない。

それがどこことなく居心地を悪くする。誰かが住んでいるはずなのに痕跡が何も無い。汚れも、傷も、日に焼けた跡さえどこにも無かつた。指をそつと畳へ走らせてもほつれの一つも、埃のひとつかけも存在しない。

出来上がった瞬間から時が止まっていると言われても信じてしまいそうな程に歴史を感じられない。

「お待たせしました。何分忙しくしております」

部屋ごと時間から切り離されたような心地を味わっていた涼介に声がかけられた。視線を向ければ開いた障子の先に美しい女性がいる。銀の御髪になんとなしに咲夜を思ひだした。

女性は軽く一度会釈をすると座卓を挟んだ涼介の向かいに腰を落ち着けた。

「鈴仙」

女性が誰かを呼ぶ。呼ばれた人物、兎の従者が茶を乗せたお盆を手に部屋へと入ってきた。従者の少女は鈴仙という名前らしいと初めて知る。会話が弾んでいたから気にしていなかったが、改めて考えるとお互いに名乗ってもいない状況が少しだけ可笑しいものに思えてくる。

鈴仙は師匠と言っていた人物がいるためか、先ほどまでの接しやすさがなりをひそめていた。肅々と二人の前へ湯呑を置いて茶を注いだ後、部屋の隅に控えて存在感を薄くした。

女性は鈴仙が茶を準備している間、静かに待つていた。姿勢が驚くほどいい。微動だにしない姿は、この部屋と同じく時が止まっているようにもみえた。

「粗茶ですがどうぞ」

「ありがとうございます」

女性がお茶を勧める。確かに喉は乾いている。竹林を走って穴に落ちて連行されると大忙しであった。断る理由もなく、好意を無下にする気もないと涼介は湯呑を手に取り。湯呑から伝わる熱は飲みやすい適温。行き届いている配慮に思わず感嘆する。

紅魔館の紅茶といい、ここのお茶といい人外の方々は嗜好品の趣味が良いらしい。届いた香りでもう味が素晴らしいと分かる。

「頂きます」

一言断りを入れてから湯呑を口へ近づける。

「駄目よ」

静止の言葉と共にひんやりと冷たい手が腕を掴む。思わず湯呑を持つ手が揺れて中身が僅かにこぼれた。

「姫様」

「あら。何かしら永琳？」

気が付くと輝夜が涼介の隣にいた。永琳と呼ばれた女性の咎めるような険の籠った声にどこ吹く風と輝夜は素知らぬ顔を通す。

「そんなに見つめられてしまうと穴が空いてしまうわ、涼介」

いつものように前兆もなく現れた輝夜に涼介は面食らっていた。さらに見目の整った者が多い幻想郷においてなお抜きん出た美を宿す輝夜が目と鼻の先にいる。

これまでの全ての邂逅を含めても、今この瞬間が最も近い距離だと言えた。だからこそ息を呑むような美しさの字面通りに、呼吸さえ忘れるほどに魅入られていた。

「いや……不躰で申し訳なかつたよ、満月の君」

輝夜の指摘で涼介が我に返った。腕を軽く動かそうとすれば輝夜も抵抗すること無く手を離した。離れゆく手に僅かばかりの心残りを覚えたが平静に務める。腕が自由

になつたので湯呑を座卓へ戻す。

「ふふ。私の名前、知っているのでしょうか？　名を呼ぶことを特別に許してあげる」

「下の名前しか知らないよ」

「構わないわよ」

おかしいことでもあつたのか、輝夜はずっとクスクスと笑っていた。向かいに座る永琳は処置なしと諦めたのか溜息を一つ吐いたきり何も言いはしなかつた。

「それで輝夜」

「なにかしら涼介？」

問いたい内容を把握しているだろうに輝夜はわざととぼけてみせる。その冗長さに幽々子を連想させられた。

「何がダメなのか教えてくれるかい？」

「あら単刀直入ね。遊びが無いのはいけないわ」

「余裕のない私は嫌いかい？」

「そんな事無いわ。私も貴方を困らせてみたいと思う程度には気に入っているわ」

輝夜の視線が涼介から僅かに逸れた。涼介もつられて輝夜の視線の先を追う。湯呑の隣にこれまたいつの間にか新聞が置いてあつた。いつぞやに妹紅から回収した不本意極まりない記事の載つた新聞。失くしたと思つていたがどうやら輝夜が持つて行つ

ていたらしいと理解が及ぶ。

「その新聞だけで私はお腹がいっぱいだよ」

「小食なのね、残念だわ」

「むしろ食傷気味といった所かな」

「それならちようどいいわ。あそこにいる永琳は薬師なのよ。きつといいお薬が見つかるわよ」

「それは重畳。天狗がゴシツプを書かなくなるような薬は無いかな」

「ネズミ団子くらいしかないんじゃないかしら？」

「それは薬じゃなくて毒団子だよ、輝夜」

「知らないの、涼介。毒も薬も紙一重なのよ」

月が二巡りする程度には久しぶりだというのに、二人の気安いやり取りはまるでそれを感じさせない。鈴仙が信じられないものをみているみたいに何度も瞬きをしていた。永琳は少しだけ興味深そうに観察していた。

「それでお答えはいただけるのかな、姫様？」

「そうね、いいわよ。あのお茶、それこそさっきの話ではないけれど毒入りなの」

「それは……穏やかじゃない話だ」

「あら怒らないの？」

「死ぬような毒ではないだろうし、怒るほどでもないかな」

「どんな毒かわかるの？」

「分からないよ。でも私を殺すならそんな回りくどい真似をしないはずだよ。だって私は」

「弱いから？」

「ご名答」

毒を盛った盛られたと話題の内容に穏やかさは欠片もない。けれどそれを話す二人はまるで明日の天気でも話しているのではないかと言う程に落ち着いていた。

「ふふ、せっかく正解したのだからご褒美をねだろうかしら」

「それは勘弁願いたいな。実は荷物を小さなうさぎさんに盗られてしまつてね。手持ちがないんだ」

「あらあら、それは大変ね。それなら少し趣向を変えてお願いでもしましょうか」

「お願い？」

「そうお願い。いえ、やっぱり違うわ」

「輝夜？」「姫様」

疑問を浮かべる涼介と、再び硬い声で諫めようとする永琳の声が重なる。輝夜は永琳にそつと掌を向ける。口出し無用と示すその仕草に永琳は無理を悟つたのか瞳を閉じ

てしまおう。

「貴方へ難題を与えるわ。涼介、見事応えてみせなさい」

輝夜が笑う。永遠を生きる姫が楽しげに笑う。されどその瞳は涼介を見ているように、遥かな過去を見つめているように焦点が定まっていなかった。

保護者会に供する四八杯目

さてどうするか。これからの予定に頭を悩ませる。

場所は既に永遠亭ではない。輝夜の登場の後、起こす異変の内容と目的を聞かされた。

「それにしても満月を隠す、ね。話が大きすぎて実感が湧かないね」

満月を隠す。本物を隠し、偽りの欠けた月を空へと浮かべる。現実味の湧かない話。夢幻のような話。

されど輝夜は起こすと言った。出来ると言った。

ならばその夢物語は実現するのだろう。幻想が現実になるのだろう。疑いはなく、異議もない。

残る余念は一つだけ。

後顧の憂い

それに尽きると彼女達は言った。たった一日だけの異変。影響は出るが一夜限りの

小さな波紋だと断言した。

「解釈を誤解させる予知さえない断定した物言い。月からの覗き見を本日限り妨害したい。」

隠れたい理由の多くを輝夜は語らなかつた。自らを罪人であるからとしか、輝夜は語らなかつた。けれども後ろに控えていた鈴仙の瞳は怯えていた。

語られる以上の禍根がある。語れない事情の過去がある。

涼介はそれらを察し、輝夜の要求を呑んだ。一夜限りの満月の異常を許容することを是とした。

影響がないという永琳の主張を、全面的に信頼したわけではない。

だがそれでもヒトの良いウサギの少女を放っておけなかつた。困っているというお月見相手を放っておけなかつた。

それにもう一つ、迷わない要因が重なり涼介は組することにした。

「貴方はいつも楽しそうね」

いつも満月を見ている空き地。その岩の上で空を見上げていた涼介に声がかかる。

聞き覚えのない、聞き覚えのある不思議な声。

「君は……」

声のする方へと視線を向ける。案の定そこには見覚えのない、見覚えのある少女がい

た。

「こいし……お祭りの匂いを嗅ぎつけて遊びに来たのかい？」

無意識を揺蕩う少女がそこにはいた。いつもと変わらぬ虚ろな瞳はやはり何かを映しているようには見えない。

ぼんやりと、けれど確かにそこに居ながら希薄な少女が笑みを浮かべる。

「ねえ、涼介。貴方は今回何をするの？」

「何を？ そうだね……きつといつもと変わらないよ。落としどころを探すんだ」

「落としどころ？」

「そうだよ。彼女たちは言った。異変を解決する人間がきて終わりではない。きつと保護者が出てくると」

「ふうん。涼介がその保護者の相手をするの？」

「ああ、その通りだね」

「消し炭も残らないんじゃない？」

あまりのこいしの実直な物言いについっ涼介は笑ってしまう。第一そんな事涼介も百も承知だ。

「するのは話し相手だよ。私なんかじゃ勝負にならないからね」

「つままないの」

「ご期待には添えなかったみたいだね」

「せっかく終わった後に持ち帰ろうと思ったのに」

不満げに頬をふくらませるこいしの言葉にみなまで言いかえすことはしなかった。何を持ち帰るつもりかなんて愚問もいいところだからだ。前回の来店でも死体を飾りたいと言われたのだから。

「それで涼介はお手伝いをしているの？ここで待機なの？理由があるの？」

「そうだよ」

「どうして？」

「危ないから、かな？」

「疑問形？」

「実感が湧かなくてね。どうにも不確定要素は少ない方が良く、事態が収束するまで昏睡させようとしてくるお方がいたからね」

「遊びの無いやつもいたものね」

こいしの物言いに少し前の輝夜の言葉が思い出されて愉快さが浮かぶ。長命の存在にとつてはある種の共通認識なのかもしれない。

「じゃあ涼介は、ここでぼんやり待って、来た奴らと話すだけなのか。つまんない」
「そればかりは私にはどうしようもないね」

ふらふらと空き地を適当に歩き回りながらこいしが不満を告げる。何かを探すようにその瞳が竹林のあちこちへと向けられていた。

「始まったね」

こいしが不意に告げた。上空を見上げるこいしの視線が昇り始めた月へと固定されていた。

涼介もこいしにつられて月を見やる。けれどもどこが欠けているのか判別はつかなかった。

「こいし」

「ん？」

「体調は悪くないかい？」

大丈夫と言われても心配なものには心配であった。だから目の前にいる幻想の存在へと問いかける。本当に異常はないのかと。

そして相手がこいしなら自分に偽りを言う事もないだろうとも信じている。

「優しいね、涼介は」

「そんなことないよ」

そんなことない。こいしの言葉を心から否定する。優しい何て評価は分不相応だと

自覚している。

だがこいしには涼介の自己判断なんてどうでもいいのだろう。否定の言葉を全く気にする様子をみせない。

「まあ、私は平気かな。弱い子たちも一晩くらいだったらどうともなるんじゃない？」
「……そっか」

「んー、でもそうかあー、そうだよねー」

一人でうんうんと頷きながら納得を示す。良いことを思いついたと言わんばかりに、口元が蠱惑的に歪む。

深緑の瞳が妖しく輝く。竹林をみやり、涼介を見つめる。瞳が歪む。喜悦と嗜虐に煌めきを染める。

「だったら私が罰してあげる」

「こいしっ？」

「涼介は悪いことをしたら怒りたい性質の人みたいだから私が用意してあげる。本物の月を隠すお手伝いをした涼介へふさわしい罰を」

くるりくるりとこいしが廻る。両の手を広げ、風に舞う花卉のように軽やかに踊る。

「ほうら、来たよ」

こいしが告げる。

「偽りの月と、私が狂わせた異変の唯一の犠牲者が」

廻る事をやめたこいしが少しずつ竹林へと後ずさる。

「鎮めてあげなさい、涼介」

こいしの姿が竹林へと消える。

「狂乱の獣を」

声だけが聞こえた。聞き覚えのある、聞き覚えのない誰かの声が、聞こえた気がした。直後、咆哮と共に真紅の瞳を狂気へ濁らせる一匹の狼がその身を現した。

八雲紫は思案していた。どうしたものかと頭を悩ませる。深刻な話ではない。だが思案する程度には気にかかる話。

遊びを楽しむか、ゆとりを省くか。どうしたものかと首をかしげる。

「まったく……霊夢はどこにいるのかしら」

霊夢。そう、問題の焦点は博麗霊夢その人だ。異変に気が付いていない霊夢をせつついて、行動を起こさせたのは問題ない。

異変の発生を認め、そのうえカナリアの不在を道中に出会った半獣から聞きもした。であるならば解決するのは時間の問題だろうと紫は思っている。

そしてその時間の問題も既に無い。紫自身もそうであるが、他にも月を天上に縫いとめている者達がいる。ならばもうこれは出来レースと言つて良い話だ。

だからこそ問題は一つ。元凶の居そうな竹林まで来たのは良いが、霊夢とはぐれてしまった事、それにつきる。

迷いの竹林とは良く言つたものだ。酷く手の込んだ方法で知覚を惑わせてくる。おそらく己でも解呪するには数日は要するであろう程の狂氣的な念入りさで周到に組み上げられていた。

手腕を見れば、竹林の奥に住まうモノの当たりもなんとなくだが輪郭くらいは見えてくる。だからこそ消化試合と化したこの異変をどう楽しく過ごすかで思案する。

「ゆとりがないのは優雅さに欠けるわね。でも霊夢とのせつかくのお出かけが楽しいものも頂けないわあ」

隙間に腰かけ、ふわふわと竹林を彷徨いながら愚痴をこぼす。たぶんこのまま何もなければうろうろと彷徨い、異変が終わりそうなタイミングで隙間を開いて最終決戦の観戦だろうか。

なんだかなあと自分の考えに不満を懐きながらも、ついついだらけてしまう自分を責めきれないでいた。冬眠したり、式に任せたりと元来物臭な自分らしさは何だかんだと嫌いになれない。

適当に思考で暇をつぶしながら漂っていると、不意に視界が開ける。偽りの月明かりが差し込む空き地。目につく光に不愉快さを感じながらも瞳を細める。面白い光景が目の前で広がっていたからだ。

「随分と遅いな。待ちくたびれたぞ、隙間妖怪」

「あら出会っていきなり無粋な吸血鬼ですこと。これだから年少者は」

「年寄りは何時間の感覚がゆるいから大変だな」

「うふふ」「あはは」

顔を合わせるなりいきなり突っかかってくる紅魔館の吸血鬼、レミリアの言葉に棘を返す。だがすぐさま負けじと言い返してくる相手に両者の雰囲気が悪化に染まっていた。

魔力と妖力が解き放たれるのを待つように、その身の内で蠕動していた。

「御二方」

だが二人の間に声が割って入る。

「お静かに」

落ち着いた声色。聞き覚えのある声。

「眠っている娘こが起きてしまいます」

レミリアと紫は手鼻を挫かれ、気の抜けた不満をため息に変えて吐き出した。視線を

声の方へ向ければ案の定見知った顔。

涼介が眠った狼、影狼を自身の膝で寝かしつけながら、口元で指を一本立てていた。お静かにとでもいいたいであろうその仕草に頭痛を覚える。

穏やかな顔で人狼を優しく撫でながら静かにと要求する。自分たちのような超級の怪物へ向けてするような行動ではない。そのうえ理由が木っ端妖怪の安眠のため。控えめに評価しても正気の者の行いではない。

だがそれをするのが彼だと知っているし、それをしてこそその彼だとも思っている。だからこそその何とも言えない気疲れなのだ。

それと、眠る人狼と涼介の間で一悶着あったのか、この広場は少し荒れているうえ、涼介の片腕も力なく揺れていた。袖の破れ方と他の具合から見ると、腕の骨を噛み砕かれでもしたのだろう。簡易の手当は人形師あたりがやったのであろう。アリスの魔力残滓を感じ取れる。

「分かっていただけたようで」

「毒気が抜かれたのよ」

「業腹だが同意見だな」

似た反応に分かっていますよと涼介が笑みを深め、二人が目元を僅かに引くつかせる。だんだんとふてふてしくなってきたなど、少々面食らったのだ。

だがそこで何かを言う前にまた別の声が割って入る。

「さてこれで全員かしら、涼介さん」

「いくら月が止まっていると言っても待ちくたびれるわ」

レミリア同様、すでに空き地で待っていたらしい幽々子とアリスが不満の声を漏らした。

涼介の近くで影狼の毛並みを楽しむ幽々子と、砕けた岩の一つに腰かけ縫物をしているアリスの姿は、不満そうな声の割に満喫しているように見えなくもなかったが。

周囲の様子を正確に認識し、何となく置いてけぼり感を紫は覚えていた。胸に湧いた感情に釈然としない不満が顔をちらつかせる。

「さてそれで？ 状況から考えると貴方が私達を集めたのかしら、涼介」

「たしかにそう見えるけど実際は違うよ、紫さん」

「どう違うのかしら」

「私も含めてここへ集められたんですよ」

能動的ではなく、自身も集められた受動側であると涼介は話す。紫はその言に嘘はないと確信している。けれども真実を話している訳でもないと察していた。

「それで？」

「こわいなあ」

「嘘をおっしやい」「嘘だな」「嘘ね」「嘘はだめよお」

自分の発した一言に四者同様の反応にさすがの涼介もたじたじであった。不利な話題どうこう以前に戦力の頭数が違いすぎる。

「さてそれじゃあ話を進めましょうか……みんなして逃げた、みたいな目で見るのやめてくださいよ」

話を变えようと口火を切ったのに、己へ注がれる視線の圧力に涼介がついつい弱音を漏らしてしまう。

その姿にある程度溜飲が下がったのか圧が弱まる。その事にほっと一息つく。

「いつもの如く、と言うのは個人的に不本意なのですが、こちら側で折衝をしたいと思いません。こちら側の願いは一つ。今宵の騒ぎを事件にしないで異変で収束させること。敵対ではなく乱痴気騒ぎで終わらせることです」

涼介が語るにつれて、レミリアの機嫌が僅かに下降した。友人として居る涼介以外が同じことを言ったのなら、そこで一戦始まってもおかしくは無いだろう。吸血鬼から月を奪うとはそういうことだ。

幽々子とアリスに表面上の変化はない。ただ淡々と観察しているというのが、正しい表現なのかもしれない。紫は誰も気が付かない程度だが瞳に冷たさを宿していた。

「だからこそ永遠の夜を一夜の出来事にしたいのです」

「こんなことをしでかしたうえでか？　自分達は顔を出さず、お前だけをぼんと出して
そう嘯くか」

天上に浮かぶ月を示し、新顔の無い周辺を示してレミリアが嗤う。馬鹿にするなど酷
薄な笑みを浮かべる。

「話し合いが悪い結果へ傾いてもお前が勝手にやったと、何一つ責任を負う気などない
連中の肩をなぜ持つ。それとも違うと言い切れるのか、涼介」

憤っている。腹を立てている。だがそれは涼介にでない。妹思いの愛情深い吸血鬼
は、友人を案じているのだ。ただ無意味に利用されることを、是としている態度を叱っ
ているのだ。

涼介もレミリアの思いを察している。嬉しく、そして喜ばしいことだった。だが素直
に聞きたいれることのできない自分に、少しだけ申し訳なく思ってしまった。

「言い切れないですよ、レミリアさん。むしろ一人は普通に言うだろうと思
います」

「では何故だ？　何故肩を持つ。私はお前が分からんよ」

「助けたいと思ってしまったから。手を伸ばしたいと思ってしまったから。フランの時
と同じです」

曇りなき笑顔で答えた涼介の姿に、レミリアは言葉に詰まる。フランドールの話をし

されてしまえば、過去の出来事があるために強く出にくいのだ。

自分の発言に狡いなど感じつつも、レミリアの分かりづらいようできて分かりやすい優しさが心地いい。

「レミリアさんのそういう所、私は好きですよ」

「私はお前のそういう所が好かん」

「ありがとうございます」

「っ！ 勝手にしろ、馬鹿者」

二人のやり取りに思う所があったのか、アリスが溜息を吐いていた。心配することの不毛さを理解しているが故の反応だろう。

溜息の音に涼介は気が付き、視線をレミリアからアリスへと移す。

「アリスの意見は？」

「勝手になさい、よ。私はその三人と違って夜を止めていない。それに私は魔法使いだし、今回の一件をそこまで重大視はしていないわ」

「ふうん。それなのに出てきたのかい？」

「引つかかるもの言いね」

「だってアリスは社交的な出不精じゃないか。態々変事の最中に外出するとは思わないよ」

涼介のアリス評に、隣にいる幽々子が小さく吹き出した。それを受け、ジトツとしたアリスの視線が涼介を見やる。

指を二度、小さく動かした。涼介の顔の真横に頭ほどの大きさの魔方陣が現れ、陣から人形が上体だけをせりだして拳を振るう。

「っー」

見た目だけならこつんとでも音が聞こえそうな光景。だが小突いたのはアリス製の人形だ。中々に鈍い音が辺りに響いた。

人形は一発殴ると役目を果たしたと、魔方陣の中へ沈んでいった。

「手が早いよ、アリス」

「口で言っても貴方は分からないじゃない」

「獣の躰じゃないんだから」

「獣の方が百倍賢いわよ、謝りなさい」

「手厳しいなあ」

ぴしやりと跳ね付けるアリスの物言いに、涼介が降参だと碎けていない右手を挙げた。アリスもそれで一区切りとしたのか、貴方の好きになさいとだけ言っただけ閉ざす。

関知しないことだからと関与をやめたのか、変わり者の友人であれば、悪くない落と

しどころを見つかるだろうとの信頼か。答えはアリスの胸の中。

アリスの態度をどう取ったのか不明だが、涼介もアリスの態度からこれ以上は無駄だろうと悟る。ではと視線を次へと移す。影狼をいまだ撫でて遊ぶ幽々子へ。

「ゆゆさんや」

「あらなにかしら、涼介さん？」

わしやわしやと撫でる手を、止めることなく幽々子が問い返す。心なしか影狼が気持ちよさそうに喉を鳴らしていた。良い夢でも見ているのかもしれない。癒される光景に心温まる。

「ゆゆさんはどうですか？」

「うーん、そうねえー」

真剣に考えているのか、考えていないのか。幽々子は気のない返事をする。わずかな時間、答えを待つ。撫でることに満足したのか、幽々子が手を止めた。

「紫に任せるわ」

「そんな気はしていません」

「うふふ、私のことをよく分かってくれているのね。嬉しいわ」

「同じことを言う方は多い気がしますけどね」

幽々子の返しに苦笑しながら返せば、「お友達がいっぱいね」と、ふわふわとした答え

が返ってくる。話は終わったわよねと再び影狼で幽々子は暇をつぶし始める。

それではと涼介は大本命へと視線を向ける。他の答えが何であろうと一番重要なのは何だかんだと紫の意思なのだ。幽々子はそれを実によく分かっているとも言える。

「紫さん」

「心しなさい。ここから先はもう呑み込めないわよ」

一言忠告をくれる心遣い。少しでも自分を、一個人として見てくれているようで心が震えた。無駄にすまいと思う。無下にはすまいと己を鼓舞する。

「ええ、元よりそのつもりです」

「そう。ならば貴方へ問うわ、涼介」

紫が問う。

「貴方にとつての幻想郷とはなにかしら？ 答えなさい、白木涼介」

世界から音が消えた。そう錯覚するほどに涼介の意識は紫以外のものを排除していた。だが以前ののようにそこには萎縮も硬直も無い。

思っていた内容とは違う紫の問いに、周囲にいた者達は興味を刺激される。無意識を揺蕩う少女が、時間に遍在する姫が耳を傾ける。

「自身の全てに勝るもの」

一瞬の逡巡もなく言い切る。

「幻想郷のために死ぬのなら何も惜しくない」

穏やかな瞳で言い切られる言葉。

きつと魔理沙がいたらおかしいと言っただろう。咲夜がいたら悲しんだだろう。

妖夢がいたら憂いだだろう。鈴仙であれば狂っていると評しただろう。

阿求であれば理解を示したであろう。霊夢であれば悟るであろう。

一片の狂気も宿すことない完全な正気だと気付いただろう。

「ならば何故、貴方はそちらに立つのかしら。少なくとも幻想郷を思うのなら貴方はこちらに在るべきよ」

「彼女たちも幻想だから」

「そう」

短い一言。紫が口元を扇子で隠す。

「だからもし分水嶺を超えた時は貴女が有害な私を殺してください」

底を見たと思つたからこそ虚を突かれる。何処までも落ちていく涼介の底は、紫が思っているよりもずっとずっと深く落ちていた。

「誰よりも幻想を愛する貴女に殺されるなら未練は残りませんから」

「……あら、素敵なお誘いね」

「及第点はもらえそうですか、紫さん？」

「ふふ、おまけして合格点をあげる。花丸は次回に期待かしら」
「それは重畳」

楽しげに笑いあう二人の様子に、レミリアは不満げに鼻を鳴らした。

「隙間が良いとは随分な言いようだな、涼介。私では不満か？」

「嫉妬かしら。可愛いわね」

「黙れ、年増」

「としつ——」

紫の手中で扇子が閉じられ悲鳴をあげた。紫が現れた時同様、また空気が重くなりかける。更に悪化する前にと涼介が水を差す。

「レミリアさんはきつと戸惑ってくれるから。咲夜やフランのことを思っで迷っでくれるから。だから不満とは違っんですが……すみません」

「チツ……謝るな」

「優しい悪魔さんね」

「A h a ?」

レミリアの顔がひずむ。攻撃的な笑顔だ。

「はいはい、喧嘩しないの。するのなら別の日にしなさいな」

話がまとまりきる前に一触即発かと空気が危うくなるが、今度は幽々子が間へ入る。

にらみ合う二人の間へ物理的に身体を割り込ませる。

本人の雰囲気かなせる技か、実力者の一言ゆえ配慮したのか分からないが、再び空気が落ち着いた。

「それで涼介さん。吸血鬼さんが駄目な理由は分かったけれど、私も駄目なの？」

「ゆゆさんはそんな選択の場面に立たないじゃないですか」

「決めつけは良くないわ、仮定は大事よ」

「強いて言うならそうですね………冗長的で刹那的なゆゆさんなら、それもまた一興かなと受け入れそうで怖いんですよ」

「ん〜、そうかしら？ なら仕方ないわね」

否定も肯定もしない所が、またらしいと思いつながら幽々子の反応を見る。幽々子自身はどこ吹く風と、ほわほわ笑っているのが怖いなど本心から思わせる。

視線を幽々子から外し、アリスへ向ける。流れるにアリスにも言った方がいいのだろうかという問いかけの視線だ。

アリスはアリスで、視線の意図に気が付くが興味はないと首を振る。だろぅねと涼介が目元を緩ませれば、分かったような顔をしてアリスは瞳を細める。

「はいはい、二人で良い雰囲気を作らないの。ゆかりん妬げちゃうわ」

「やめてくださいよ。紫さんの冗談でたまった不満の矛先は私なんですよ」

「日ごろの行いって怖いわよね」

再び扇子で口元を隠す紫が、冗談めかせば処置なしと涼介は肩をすくませた。

「さて、それでは涼介。歩み寄りの為に教えてちょうだい。貴方のご友人は何に困っているのかしら？」

「月の覗き見に困っているようです」

交渉人は動くこと無き天上の月を指し示した。

「なるほど。そう言うことですか、理解いたしましたわ。ならば確かに次は無いのでしょうか」

幻想郷の管理者の一人としての顔がのぞく。凜と張りつめた珍しい雰囲気、思わず皆が魅入ってしまう。

「ならば此度の一件。貴方のお願いを聞き入れましょう。幻想郷への害意は無いと判断し、異変であると認めましょう」

強調されるお願いという言葉に、後の対価に少しだけ思いをはせる。だが、仕事は果たせたと肩の荷が下りた。

「それは良かった。さて、それではどうやって知らせ——」

「——必要ないわ、涼介。難航もしないで、話し合いだけで治めるなんて流石ね。でもちよつと……いえ、だいたい不満だけど褒めてあげる」

座り込む涼介の首元へ、後ろからしなだれかかのように輝夜が唐突に現れた。それに対してアリスは僅かに驚きを表し、幽々子は楽しげに笑う。

レミリアは視えていたのか鼻を鳴らして、紫は値踏みするように瞳を細めた。四者の反応に輝夜は気にしたそぶりを見せない。いまだ涼介の首元へ埋まり、困っている涼介の反応を楽しんでいた。

何も言わない輝夜に痺れを切らしたのかため息とともに、紫が口火を切った。

「それで貴女は異変の首謀者さんかしら？」

「そうねえ……」

じつくりと周囲を見渡し、言葉を溜める。未だ涼介は解放してはいない。涼介も涼介で膝には眠る影狼が居るために大きくは動けないでいた。

「永琳が立案実行、私が決裁、涼介が外交交渉かしら？　だから今回の騒動の首謀者は誰かと問われれば私よ。でも今回の一件を、騒ぎから異変へ変えたのは涼介ね。なら異変としてみるのなら、涼介も首謀者といえるのかもしれないわね」

「かぐうつ——」

輝夜を呼ぼうとした涼介の喉を軽く絞めて止めさせる。輝夜の発言に他の四名がしばし考える。腕へ軽くタップを続ける涼介と、楽しそうな輝夜を何度か往復する。

お灸がいるんじゃないかしら、と誰かが視線を送れば、誰ともなく同意が戻ってくる。

屁理屈だろうと大義名分もあるのだ。ならば結論は定まり、後は沙汰を下すだけ。

「今回の事件については語り合うべきこともあるので、後々時間を取っていただきます」
「ええ、構いませんわ」

「そして此度の異変としましては貴女の意見を採用することにいたします。涼介、宴会で破産しないといいわね」

「——!!」

「はつきり言葉にしてくれないと分からないわ？」

口を開閉するだけの涼介を前に、紫が上品に笑ってみせる。それだけで決定は覆らないと察した涼介の四肢から、ぐったりと力が抜けた。異変後の宴会費用を計算しているのかもしれない。

力無く項垂れる様に、過去の難題の挑戦者を思い出して輝夜は楽しげに笑った。飄々としている姿ではなく、こういうのが見たかったのだと言わんばかりのご機嫌だった。

「ああでも、この楽しい時間ももう終わりね」

名残惜し気な眩きが漏れた。耳元にいる涼介だけがそれを聞き届けた。声の出ない涼介は視線だけで輝夜に問う。その気遣いが嬉しいのか、輝夜の腕の力が僅かだけ強まった。

「今回も随分と良い御身分ね、涼介さん？」

頭上から声がかかった。聞き知った声。ほとんど毎日一回は聞く少女の声。

異変の調停者、博麗霊夢が空き地の上空に浮かんでいた。

「それで？ 今回は何をやらかしたのかしら」

霊夢から見た光景は影狼を膝で寝かせ、輝夜に背後から抱きしめられている涼介。さらに対峙するように向かい合う四名の保護者組。

完膚なきまでに弁明の余地は存在しなかった。声も出せない涼介には、せめて笑うことくらいしかできなかったが、器用に片眉を釣り上げた霊夢を見るに結果は語るまでもあるまい。

「さてお呼びみたいだし行つてくるわね」

輝夜がふわりと飛翔する。一夜限りの乱痴気騒ぎの終焉の時間だ。事件ではなくなった異変が終わる。

終わりを告げる弾幕はまさ光景に満月さえ背景へと落とし込む幻想的な世界であった。

「ん」

「少しペースが速いんじゃないかな、霊夢」

いつものように博麗神社での宴会が始まる。杯を乾かした霊夢は、涼介へ酌をなさいと空の盃でもって庄をかけていた。

異変が終われば宴会を。過去に涼介が語ったように、もはやすっかりおなじみの光景がそこにはあつた。そしてもちろん異変の決着が付いたということは、勝敗がそこには存在している。

何も知らない里の者達から見れば明けぬ夜が明けて朝がやってきた。異変の解決として見るには十分すぎるだけの変化が起きていた。

だが当事者たちからは少しだけ違った。宴会に参加している少女達を見れば、何となく結果が見えてくる。

魔理沙は誰かに引つ張つてこられたのか、珍しく参加している霖之助へ絡み酒をしている。

妖夢は何か思う所があつたのか、お酒を飲みながらではあるが少し真面目な顔つきで鈴仙と言葉を交わしていた。半霊を小さな人型に、幻で小さな現身を、それぞれが作り互いの近くで動かしながら話しているに、戦術的な話をしているのかもしれない。

前者二人とは打つて変わり、咲夜は普段とあまり変化はなかつた。普段通りレミリアの世話に、全体の給仕にと忙しなく働いていた。

そして霊夢は眉間にしわを寄せていた。

「異変が成功した涼介さんへ、私からのお祝いよ。不満なの？」

「いやだからね霊夢。それは便宜上の話であって、私が画策したわけではないんだよ」
「そう。でも涼介さんはあっちの味方をしたのよね？ 紫の誘いも断って」

誘われたらどうかと思夢の言葉に一瞬考えるが、多分立ち位置の話のことを誤解させているのだろうと察した。そしてそれはその通りであった。

紫は霊夢に吹き込んでいたのだ。竹林であった時に、こちらに来て手助けしてほしいと言ったのに断られたと。霊夢とて十全に真実とは思っていないが、八つ当たりのとっかかりとして有用なものも確かであった。

それに実際、輝夜側へ付いたのは明確な事実なのだ。それが霊夢としても面白くなかった。

異変も結局、輝夜の永夜返しというスペルで停止した夜を朝へと押し進められた。関係者から見れば輝夜たちの勝ちだと言えた。

弾幕ごっこに勝って懲らしめたが異変は成功させられた。試合に勝って、勝負に負けた形だ。巫女としての役割で見れば問題ないが、霊夢としての矜持には不満が残った。

「分かったのなら注ぎなさい」

「はいはい、もう気が済むまで付き合おうよ」

「当り前よ。素寒貧にしてあげるんだから」

だからこそその自棄酒である。だがこれにも一応理由がある。

今回の異変、涼介は首謀者として担ぎ上げられたというか、最後に責任だけ押し付けられた。ゆえに今回の宴会費用は涼介持ちなのだ。

穴の開いた容器のように飲みまくる少女達が大勢いる宴会の費用。額のほどは、ちよつと想像したくない。

「いい機会だからしばらくはずつとお店を開いて出歩くのはやめるのね」

「手厳しいなあ」

幻想と触れ合うことが趣味のような涼介にとって、今回の罰はなんだかんだと一番効くのもかもしれない。隣で肩をがっくりと落とした涼介の姿に、霊夢はクスクスと楽しげに笑った。

「やつと引きこもりはやめたのか、輝夜」

「ん？ 妹紅じゃない。どうしたの？ 今日は宴会の席。無粋な殺し合いはまたにすることね」

「私だつてそこまで空気詠み人知らずじゃないさ」

「意外ね」

「何がさ」

「貴女が風情を解するなんて」

妹紅が輝夜の手の中にあつた空の杯を蹴り飛ばす。一方で飛ばされた輝夜は、楽しげに笑うだけで意に返さないが。

「野蛮ね」

「私から始めようとは思わないけど売るなら買うよ」

「そうよね、貴女はそういう性質だものね。せっかくだけどやめておくわ。面白いものを見ているから」

いつの間にか手の中へ戻っている杯を片手に、輝夜は口を慎んだ。

妹紅も殊勝な様子の輝夜に、わずかな興味をそそられたのか、彼女の瞳の先を追って視線を動かした。

そこにいるのは見知った顔。霊夢と涼介が酒を楽しむように飲んでいた。片方が項垂れているように見えるが、それはそれで楽しいの範疇だと妹紅は思っているので間違いない。

「珍しいな」

「何がかしら」

聞いているのに疑問の感情の欠片も無い声。わかったような態度に、僅かながら妹紅

の中で不愉快さが生まれるが、こんなこと今に始まったことでないと斬り捨てる。

「お前がただの人間に興味を持ったことがき。霊夢ならまあ分かんなくてもないがな」

「仲がいいみたいだから、気が付いたうえでだと思つていたけれど無意識だったみたいね」

予想と違う歯に物が挟まったような物言いに妹紅は眉をしかめた。

視線が涼介から妹紅へと移ろう。

「貴女、半獣の教師とは打ち解けるまでにちよつとかかつたみたいだけど、涼介とはずいぶん早く打ち解けたのではなくて？」

「何でそんなこと知つてるのき、気持ちの悪い」

半眼の妹紅に対し、呆れたというように輝夜がわざとらしく溜息をついて見せた。

「霊夢と涼介。どちらも人間なのに随分と人外に好かれやすいとは思わない？」

「そりやな。霊夢は分かりやすいんじゃないか。腕っ節がたつて、誰が相手でもまるで変わらない対応。人外からすりや新鮮で面白いんじゃないか？ 場合に寄つちや、あの吸血鬼みたいに手元に置きたいとか屈服させたいのもあるかもね」

「そうね。浮いているからこそその俯瞰視点。全てを睥睨して同じように彼女は世界を見る。あの巫女にとつて、究極的には誰もがみんな平等なのよ」

だろうねと妹紅が相槌を打つ。

「じゃあ涼介は？」

「似たようなものよ。彼は全てを落として地に足をつけさせる。彼の前では誰もが同じ場所に立って物を見る。彼と彼の前にいる者の世界は平等なのよ」

「何となく分かるような話ね」

「彼にとつては人間も妖怪も、神、妖精、幽霊にそれ以外の何かも、すべてが意思のある個なのよ。だから彼は話そうとするし、相手も話してもいいかと思ひ、そして興味を惹かれる」

「スケールの大きな話だね」

輝夜は気のない相槌にくすりと笑いを漏らした。

「ええ、だって大きさに言っているもの。実際はそんなに大それたものじゃないわ。でも彼と話すのはそこそこ楽しい。それだけは間違いではないんじゃないかしら、妹紅？」

自分の内面を分かった風に語る輝夜が気に障り、そっぽを向いて手近な酒を瓶ごと煽る。

だがそんな姿も楽しいと笑う輝夜の対応に、妹紅の忍耐が耐え切れなくなるのも時間の問題だろう。

いずれ新たな弾幕が、酒の肴に加わることはここに記すまでもないことかもしれない

